よし　たけ

吉武遺跡群

Ⅸ

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 3

— 弥生時代生活遺構の調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集

1997

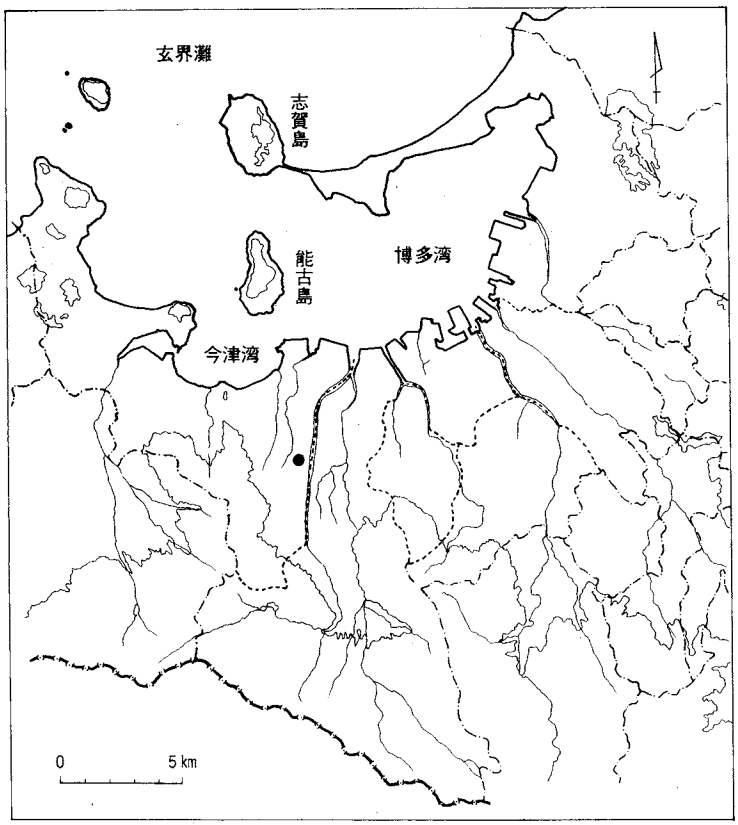
福　岡　市　教　育　委　員　会

よし　たけ

吉武遺跡群

Ⅸ

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書3



遺跡略号：ＹＳＴ
1・2・4・6・8・9次
調査番号：8102, 8234, 8335
8416, 8518, 8535

1997

福岡市教育委員会

巻頭図版-1　第一次調査Ⅱ区全景（東より）

巻頭図版-2　第一次調査Ⅳ区全景（北西より）

巻頭図版-3　第二次調査Ⅸ区全景（北東より）

序

古来より大陸文化の門戸であった福岡市域には、アジアとの交流を示す多くの文化財が市内各所に残されています。

この中でも特に、市西郊の室見川左岸にひろがる吉武遺跡群は、弥生～奈良時代にわたる長期の遺跡が数多く分布する地域として知られています。

さて、この地域では昭和56年度より飯盛・吉武地区農業基盤整備事業の施工にともない、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査による記録保存が必要となり、当年度より事業が完結する昭和60年度まで調査を継続しました。

発掘調査の結果、紀元前二世紀に遡る弥生時代の豊富な青銅器を多く副葬した特定集団の墓地や大型の建物群、紀元前後の弥生時代の墳丘墓、古墳時代中期の前方後円墳・円墳群および集落跡、奈良時代末～平安時代にかけての官衙あるいは寺院跡など各時代の遺構が検出されました。

本書は、弥生時代の生活遺構を一部を収録したものでありますが、本書が、市民の方々の埋蔵文化財に対する認識と理解につながり、さらには学術研究上も役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査にかかる飯盛・吉武土地改良組合、地元作業員および市農林水産局の方々、報告書作成にかかわった方々をはじめ、本遺跡の史跡指定についての強力なご理解とご協力をいただきました地権者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第であります。

平成９年２月12日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　言

1．本書は、飯盛吉武地区土地改良事業（圃場整備）に伴い発掘調査を実施した福岡市西区大字飯盛・吉武地内に所在する吉武遺跡群（樋渡地区・高木地区・大石地区）の弥生時代の生活遺構についての発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、福岡市教育委員会が昭和56年度から昭和60年度まで６次にわたって実施した。

3．発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、土壙をＳＫ、溝状遺構をＳＤ、竪穴住居址をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、ピットをＳＰと表記した。

4．本書は調査された各時代遺構のうち、弥生時代生活遺構を中心に報告するものである。

5．本書に使用した遺構実測図の作成は、調査担当者の他に別記の調査補助員が行い、また、遺物の実測は担当者のほかに米倉秀紀、田上勇一郎、井上繭子、星野恵美、菅波正人、茨木浩一、坂本憲昭、佐田裕一、林田憲三、大庭友子、濱石正子、撫養久美子が行った。

6．本書に使用した図面類の整図および製図は、安野良、副田則子、牛尾美保子、海内美也子、大庭友子、濱石正子、撫養久美子、鳥飼悦子、酒井香代子、茨木式子、末次由紀恵が行った。

7．本書に使用した写真は、空中写真を㈲空中写真企画に委託し、他は二宮忠司（第一～二次）、下村智（第三～四次）、横山邦継（第五次）、力武卓治（第六次）が行った。

8．本書で使用した方位は、すべて磁北である。

9．本書の執筆は、第四章を下村智、第五章を横山邦継、第六章を力武卓治で行った。第二章第二節の石器で銅矛鋳型の実測･玉稿を後藤直氏にお願いし、他は二宮忠司、大庭友子が担当した。また本書の編集は関係者の協力をえて、二宮、大庭が行った。

10．本書に関する調査記録、出土遺物類は、平成９年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

11．表紙題字は杉山悦子氏におねがいした。記して感謝いたします。

本 文 目 次

第一章　はじめに …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
第二章　第一次調査－弥生時代生活遺構の調査－ …… 10
　第一節　第一次調査の概要 …… 10
　第二節　第一次調査　Ⅱ区弥生時代の生活遺構 …… 15
　　1．弥生時代の住居址 …… 15
　　2．溝状遺構 …… 33
　　3．土　壙 …… 33
　　4．出土遺物　①土器 …… 35
　　②石器 …… 44
　第三節　Ⅲ区の弥生時代の生活遺構 …… 53
　第四節　Ⅳ区の弥生時代の生活遺構 …… 57
　　1．Ⅳ区の弥生時代の生活遺構 …… 57
　　2．住居址と掘立柱建物 …… 57
　　3．弥生時代の住居址 …… 57
　　4．土　壙 …… 71
　　5．井　戸 …… 73
　　6．溝状遺構 …… 73
　　7．出土遺物　①土器 …… 76
　　②石器 …… 89
第三章　第二次調査－弥生時代生活遺構の調査－ …… 93
　第一節　調査概要 …… 93
　第二節　Ⅴ・Ⅵ区の弥生時代の生活遺構 …… 97
　第三節　Ⅶ区の弥生時代の生活遺構 …… 103
　　1．溝状遺構 …… 103
　第四節　Ⅸ区の弥生時代の生活遺構 …… 109
　　1．弥生時代の遺構 …… 109
　　2．住居址 …… 109
　　3．溝状遺構 …… 115
　　4．堰状遺構 …… 120
　　5．土　壙 …… 123
　　6．Ⅴ～Ⅶ区・Ⅸ区出土遺物　①土器 …… 123
　　②石器 …… 140
　　③木製品 …… 145
　第五節　第一・二次調査－弥生時代生活遺構小結－ …… 148
第四章　第三次調査－弥生時代生活遺構の調査－ …… 149
　第一節　調査概要 …… 149
　第二節　L－8・9地区の調査 …… 149
　　1．SD－01 …… 149
　　2．SD－02 …… 152
　　3．5号水路SD－01・02 …… 152
　第三節　F－10・11区SD－10・12 …… 157
　　土壙、住居址 …… 159
　第四節　その他の遺構 …… 164
　第五節　第三次調査小結 …… 164
第五章　第四次調査－弥生時代生活遺構の調査－ …… 165
　第一節　第Ⅰ区調査報告 …… 165
　　1．土　壙 …… 165
　　2．竪穴住居址 …… 172
　　3．溝状遺構 …… 177
　第二節　第Ⅱ区調査報告 …… 177
　　1．土　壙 …… 177
　　2．竪穴住居址 …… 193
　　3．溝状遺構 …… 194
　第三節　第Ⅲ区調査報告 …… 201
　　1．土　壙 …… 201
　　2．溝状遺構 …… 210
　第四節　第四次調査小結 …… 210
第六章　第六次調査－弥生時代生活遺構の調査－ …… 211

挿図目次

Fig. 1　吉武遺跡群位置図（縮尺１/50,000）…… 6
Fig. 2　吉武遺跡群位置図（古地図）（縮尺１/20,000）…… 7
Fig. 3　吉武遺跡群と周辺遺跡（縮尺１/4,000）…… 8
Fig. 4　調査区配置図（第一～第六調査）…… 9
Fig. 5　第一次調査遺構全体図（縮尺１/660）…… 12・13
Fig. 6　第一次調査弥生時代遺構配置図（Ⅱ区）…… 14
Fig. 7　Ⅱ区弥生時代遺構詳細図（縮尺１/250）…… 17
Fig. 8　Ⅱ区ＳＣ－02・05、ＳＣ－16～24配置図（縮尺１/200）…… 18
Fig. 9　Ⅱ区ＳＣ－17平面・断面図・土層図（縮尺１/80）…… 19
Fig.10　Ⅱ区ＳＣ－16平面・断面図（縮尺１/80）…… 20
Fig.11　Ⅱ区ＳＣ－18・19・47平面・断面図（縮尺１/80）…… 21
Fig.12　Ⅱ区ＳＣ－18・18拡張区平面・断面図（縮尺１/80）…… 22
Fig.13　Ⅱ区ＳＣ－04・19・47平面・断面図（縮尺１/80）…… 23
Fig.14　Ⅱ区ＳＣ－05・20平面・断面図（縮尺１/80）…… 24
Fig.15　Ⅱ区ＳＣ－21～23平面・断面図（縮尺１/80）…… 25
Fig.16　Ⅱ区ＳＣ－24・25・30・32・38平面・断面図（縮尺１/80）…… 26
Fig.17　Ⅱ区遺構配置図（縮尺１/200）…… 27
Fig.18　Ⅱ区ＳＣ－27平面・断面図（縮尺１/80）…… 28
Fig.19　Ⅱ区ＳＣ－26・39・40・42・49平面・断面図（縮尺１/80）…… 29
Fig.20　Ⅱ区ＳＣ－29・37・43・1010平面・断面図（縮尺１/80）…… 30
Fig.21　Ⅱ区ＳＣ－34～36・46平面・断面図（縮尺１/80）…… 31
Fig.22　Ⅱ区ＳＫ－02・07・17・26、ＳＤ－01、ＳＸ－21、ＳＺ－01平面・断面図（縮尺１/40）…… 32
Fig.23　Ⅱ区ＳＣ－18・32・36出土土器（縮尺１/４）…… 34
Fig.24　Ⅱ区ＳＣ－16・17・19・24出土土器（縮尺１/４）…… 36
Fig.25　Ⅱ区ＳＣ－04・19・20出土土器（縮尺１/４）…… 37
Fig.26　Ⅱ区ＳＣ－05・20・23・1017出土土器（縮尺１/４）…… 38
Fig.27　Ⅱ区ＳＣ－21・23・25・41・46出土土器（縮尺１/４）…… 40
Fig.28　Ⅱ区ＳＣ－18拡張区・ＳＣ－26・31・34・35・46出土土器（縮尺１/４）…… 41
Fig.29　Ⅱ区ＳＫ－02、ＳＤ－01出土土器（縮尺１/４）…… 42
Fig.30　銅予鋳型実測図（縮尺１/２）…… 44
Fig.31　Ⅱ区出土石器－１（縮尺１/２）…… 47
Fig.32　Ⅱ区出土石器－２（縮尺１/２）…… 48
Fig.33　Ⅱ区出土石器－３（縮尺１/３）…… 50
Fig.34　Ⅱ区出土石器－４（縮尺１/３）…… 51
Fig.35　Ⅱ区出土石器－５（縮尺１/２）…… 52
Fig.36　第一次調査弥生時代遺構平面図・出土土器（Ⅲ区）（縮尺１/４・１/500）…… 54
Fig.37　Ⅲ区ＳＤ－01土層断面図（縮尺１/40）…… 55
Fig.38　第一次調査弥生時代遺構分布図（Ⅳ区）（縮尺１/300）…… 56
Fig.39　Ⅳ区住居址詳細図－１（縮尺１/150）…… 58
Fig.40　Ⅳ区住居址詳細図－２（縮尺１/150）…… 59
Fig.41　Ⅳ区ＳＣ－65平面・断面図（縮尺１/８・１/12・１/40）…… 60
Fig.42　Ⅳ区ＳＣ－53土器分布状態（縮尺１/８・１/12・１/40）…… 61
Fig.43　Ⅳ区ＳＣ－53・69平面・断面図（縮尺１/80）…… 62
Fig.44　Ⅳ区ＳＣ－68・71平面・断面図（縮尺１/80）…… 63
Fig.45　Ⅳ区ＳＣ－59～61・67・73平面・断面図（縮尺１/80）…… 64
Fig.46　Ⅳ区ＳＣ－61・69・70・72平面・断面図（縮尺１/80）…… 65
Fig.47　Ⅳ区ＳＣ－50・62・63・66平面・断面図（縮尺１/80）…… 66
Fig.48　Ⅳ区ＳＣ－51・52・54～57平面・断面図（縮尺１/80）…… 67
Fig.49　Ⅳ区ＳＸ－55平面・断面図（縮尺１/６・１/８・１/16・１/20）…… 69
Fig.50　Ⅳ区ＳＥ－01・02、ＳＫ－01平面・断面図（縮尺１/40）…… 70
Fig.51　Ⅳ区ＳＸ－56・57・200平面・断面図（縮尺１/20・１/40）…… 71
Fig.52　第一次調査弥生時代遺構分布図（Ⅳ区）（縮尺１/300）…… 72
Fig.53　Ⅳ区ＳＤ－02～04平面・断面図（縮尺１/200）…… 74・75
Fig.54　Ⅳ区ＳＣ－53出土土器（縮尺１/４・１/６）…… 77

Fig.55　Ⅳ区ＳＣ－53・67出土土器（縮尺１/４・１/６）…… 78
Fig.56　Ⅳ区ＳＣ－65出土土器－１（縮尺１/４・１/６）…… 80
Fig.57　Ⅳ区ＳＣ－65出土土器－２（縮尺１/４・１/６）…… 81
Fig.58　Ⅳ区ＳＣ－61・62・68・70～73出土土器（縮尺１/４・１/６）…… 82
Fig.59　Ⅳ区ＳＣ－50、ＳＸ－54・55出土土器（縮尺１/４・１/６・１/８）…… 83
Fig.60　Ⅳ区ＳＸ－55～61・100・101・200出土土器（縮尺１/４・１/６）…… 84
Fig.61　Ⅳ区ＳＤ－02・03、ＳＫ－01～03・07出土土器（縮尺１/４）…… 85
Fig.62　Ⅳ区ＳＣ－50・53出土土器（縮尺１/８）…… 86
Fig.63　Ⅳ区出土石器－１（縮尺１/２）…… 90
Fig.64　Ⅳ区出土石器－２（縮尺１/３）…… 91
Fig.65　第二次調査遺構全体図 …… 94・95
Fig.66　第二次調査弥生時代遺構分布図（Ⅴ・Ⅵ区）…… 98
Fig.67　Ⅴ区ＳＤ－10～14遺構配置図（縮尺１/200）…… 99
Fig.68　Ⅴ区ＳＤ－10～14平面・断面図（縮尺１/200）…… 100
Fig.69　Ⅴ区ＳＤ－10～13土層断面図（縮尺１/20・１/40）…… 101
Fig.70　Ⅶ区検出遺構全体図 …… 102
Fig.71　第二次調査弥生時代遺構分布図（Ⅶ区）（縮尺１/300）…… 104
Fig.72　Ⅶ区ＳＤ－14・16平面・断面図（縮尺１/200）…… 105
Fig.73　Ⅶ区ＳＤ－16杭列・木器出土状態（縮尺１/100）…… 106
Fig.74　Ⅶ区ＳＤ－14・15平面・断面図（縮尺１/200）…… 107
Fig.75　Ⅶ区ＳＤ－15杭列・木器出土状態（縮尺１/100）…… 108
Fig.76　Ⅸ区弥生時代遺構分布図（縮尺１/500）…… 110・111
Fig.77　Ⅸ区ＳＣ－74遺構配置図（縮尺１/200）…… 112
Fig.78　Ⅸ区ＳＣ－73他遺構配置図（縮尺１/200）…… 113
Fig.79　Ⅸ区ＳＣ－73～75平面・断面図（縮尺１/80・１/100）…… 114
Fig.80　Ⅸ区検出遺構分布図（縮尺１/500）…… 116・117
Fig.81　Ⅸ区弥生時代検出遺構図－１（縮尺１/200）…… 118
Fig.82　Ⅸ区弥生時代検出遺構図－２（縮尺１/200）…… 119
Fig.83　Ⅸ区ＳＤ－03遺物出土状態（縮尺１/40）…… 120
Fig.84　Ⅸ区ＳＤ－05堰状遺構、ＳＤ－05～07土層断面図（縮尺１/40・１/80）…… 121
Fig.85　Ⅸ区ＳＸ－05・29・31・37・41平面・断面図（縮尺１/40・１/100・１/200）…… 122
Fig.86　Ⅴ区ＳＤ－14出土土器（縮尺１/４）…… 124
Fig.87　Ⅴ区ＳＤ－11出土土器－１（縮尺１/４）…… 125
Fig.88　Ⅴ区ＳＤ－11出土土器－２（縮尺１/４）…… 126
Fig.89　Ⅴ区ＳＤ－11出土土器－３（縮尺１/４）…… 127
Fig.90　Ⅴ区ＳＤ－11出土土器－４（縮尺１/４）…… 128
Fig.91　Ⅴ区ＳＤ－11出土土器－５（縮尺１/４）…… 129
Fig.92　Ⅴ区ＳＤ－10出土土器－１（縮尺１/４）…… 130
Fig.93　Ⅴ区ＳＤ－10出土土器－２（縮尺１/４）…… 131
Fig.94　Ⅴ区ＳＤ－12出土土器（縮尺１/４）…… 132
Fig.95　Ⅶ区ＳＤ－14～16出土土器（縮尺１/４）…… 133
Fig.96　Ⅶ区ＳＤ－15出土土器（縮尺１/４）…… 134
Fig.97　Ⅸ区ＳＣ－73、ＳＤ－05出土土器（縮尺１/４）…… 137
Fig.98　Ⅸ区ＳＤ－03・06・24・30・34・41出土土器（縮尺１/４・１/６）…… 138
Fig.99　Ⅸ区ＳＸ－05・31・37・41出土土器（縮尺１/４）…… 139
Fig.100　Ⅴ～Ⅶ・Ⅸ区出土石器（縮尺１/３）…… 142
Fig.101　Ⅸ区出土石器（縮尺１/３）…… 143
Fig.102　Ⅴ・Ⅸ区出土石器（縮尺１/２）…… 144
Fig.103　Ⅴ・Ⅶ区出土木器（縮尺１/４）…… 146
Fig.104　Ⅶ区出土木器（縮尺１/２・１/４）…… 147
Fig.105　第三次調査区遺構全体図 …… 150・151
Fig.106　Ｌ－８・９地区ＳＤ02遺構実測図（縮尺１/80）…… 153
Fig.107　Ｌ－８・９地区ＳＤ01出土遺物実測図－１（縮尺１/６・１/９）…… 154
Fig.108　Ｌ－８・９地区ＳＤ02出土遺物実測図－２（縮尺１/６）…… 155
Fig.109　Ｌ－８・９地区ＳＤ02出土遺物実測図－３（縮尺１/６）…… 156
Fig.110　５号水路調査区遺構実測図（縮尺１/160）…… 157

Fig.111　5号水路調査区ＳＤ01・02出土遺物実測図（縮尺１/６）…… 158
Fig.112　Ｆ－10・11区ＳＤ10・12遺構実測図（縮尺１/200）…… 159
Fig.113　Ｆ－10・11区ＳＤ10・12出土遺物実測図（縮尺１/６）…… 160
Fig.114　Ｆ－10・11区ＳＤ12出土遺物実測図（縮尺１/６・１/９）…… 161
Fig.115　ＳＫ50・68・72・77・79・80・81・85遺構実測図（縮尺１/80）…… 162
Fig.116　遺構実測図（縮尺１/80）…… 162
Fig.117　土壙（ＳＫ）・溝（ＳＤ）出土遺物実測図（縮尺１/６）…… 163
Fig.118　土壙（ＳＫ）・溝（ＳＤ）出土遺物実測図（縮尺１/４）…… 164
Fig.119　第四次調査区概念図（縮尺１/4167）…… 165
Fig.120　第Ⅰ区遺構全体図　（縮尺１/1163）…… 166
Fig.121　第Ⅰ区土壙出土状況実測図　①（縮尺１/60）…… 168
Fig.122　第Ⅰ区土壙出土状況実測図　②（縮尺１/60）…… 169
Fig.123　第Ⅰ区土壙出土状況実測図　③（縮尺１/60）…… 170
Fig.124　第Ⅰ区竪穴住居址出土状況実測図（縮尺１/120）…… 172
Fig.125　第Ⅰ区溝遺構出土状況実測図（縮尺１/60・１/140）…… 173
Fig.126　第Ⅰ区遺構出土遺物実測図　①（縮尺１/２・１/４）…… 174
Fig.127　第Ⅰ区遺構出土遺物実測図　②（縮尺１/４）…… 175
Fig.128　第Ⅰ区遺構出土遺物実測図　③（縮尺１/２・１/３・１/４）…… 176
Fig.129　第Ⅱ区遺構全体図　①（縮尺１/500）…… 178
Fig.130　第Ⅱ区土壙出土状況実測図　①（縮尺１/60）…… 179
Fig.131　第Ⅱ区土壙出土状況実測図　②（縮尺１/60）…… 181
Fig.132　第Ⅱ区遺構全体図　②（縮尺１/556）…… 184
Fig.133　第Ⅱ区土壙出土状況実測図　③（縮尺１/60）…… 185
Fig.134　第Ⅱ区土壙出土状況実測図　④（縮尺１/60）…… 188
Fig.135　第Ⅱ区竪穴住居址出土状況実測図（縮尺１/60・１/120）…… 192
Fig.136　第Ⅱ区溝遺構出土状況実測図（縮尺１/60・１/140）…… 194
Fig.137　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図　①（縮尺１/４）…… 195
Fig.138　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図　②（縮尺１/２・１/４）…… 196
Fig.139　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図　③（縮尺１/２・１/４）…… 197
Fig.140　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図　④（縮尺１/４）…… 198
Fig.141　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図　⑤（縮尺１/４）…… 199
Fig.142　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図　⑥（縮尺１/２・１/３・１/４）…… 200
Fig.143　第Ⅲ区遺構全体図（縮尺１/1064）…… 202
Fig.144　第Ⅲ区土壙出土状況実測図（縮尺１/60）…… 203
Fig.145　第Ⅲ区溝遺構出土状況実測図（縮尺１/140）…… 203
Fig.146　第Ⅲ区遺構出土遺物実測図（縮尺１/３・１/５・１/６）…… 204
Fig.147　第Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図 …… 211
Fig.148　竪穴住居址実測図（SC－71）（縮尺１/80）…… 211
Fig.149　太田地区全体図 …… 212
Fig.150　遺構配置図（縮尺１/500）…… 213
Fig.151　土器実測図（縮尺１/４）…… 214

図版目次

PL.1　第一次Ⅱ区ＳＣ－02・16～18全景（北東から）
PL.2　1　第一次Ⅱ区ＳＣ－18・19・1015、ＳＸ－05切合関係(西から)　2　第一次Ⅱ区甕棺、住居址等切合関係（南東から）
PL.3　1　第一次Ⅱ区甕棺と遺構検出状況（南東から）　2　第一次Ⅱ区ＳＣ－18～20の切合関係(東から)
PL.4　1　第一次Ⅱ区ＳＣ－16・19～23（北西から）　2　第一次Ⅱ区調査区近景（南東隅から）
PL.5　1　第一次Ⅱ区ＳＣ－37・40・41（南東から）　2　第一次Ⅱ区ＳＣ－26・27・46全景（南西から）
PL.6　1　第一次Ⅱ区ＳＣ－37・40・42・1010全景（北東から）　2　第一次Ⅱ区ＳＣ－25・34・35・41・46・ＳＤ－01全景（西から）
PL.7　1　第一次Ⅱ区ＳＣ－16・17全景（北から）　2　第一次Ⅱ区ＳＣ－18～20全景（北東から）
PL.8　1　第一次Ⅱ区ＳＣ－23全景（西から）　2　第一次Ⅱ区ＳＣ－24、1000全景（東から）
PL.9　1　第一次Ⅱ区ＳＣ－21～23全景（南から）　2　第一次Ⅱ区ＳＣ－26、ＳＸ－21全景（南から）
PL.10　1　第一次Ⅱ区ＳＣ－24・32、1000全景（西から）　2　第一次Ⅱ区ＳＣ－39～42全景（南西から）
PL.11　1　第一次Ⅱ区ＳＫ－02検出状況（南西から）　2　第一次Ⅱ区ＳＫ－07遺物出土状況（南西から）
PL.12　1　第一次Ⅱ区ＳＤ－01全景（西から）　2　第一次Ⅱ区ＳＤ－01遺物出土状況（西から）
PL.13　1　第一次Ⅲ区ＳＤ－01北側全景（南から）　2　第一次Ⅲ区ＳＤ－01土層断面（南西から）
PL.14　1　第一次Ⅳ区南西部全景（北から）　2　第一次Ⅳ区中央部全景（東から）
PL.15　1　第一次Ⅳ区中央部全景（北西から）　2　第一次Ⅳ区南側全景（北西から）
PL.16　1　第一次Ⅳ区中央部近景（東から）　2　第一次Ⅳ区南西部近景（北から）
PL.17　1　第一次Ⅳ区ＳＣ－69（北から）　2　第一次Ⅳ区ＳＣ－71（南から）
PL.18　1　第一次Ⅳ区ＳＣ－62・63（北から）　2　第一次Ⅳ区中央部近景（北東から）
PL.19　1　第一次Ⅳ区ＳＣ－53全景（北西から）　2　第一次Ⅳ区中央部ＳＣ－67近景（北東から）
PL.20　1　第一次Ⅳ区ＳＣ－67、ＳＸ－55全景（南から）　2　第一次Ⅳ区ＳＣ－67完堀状態（西から）
PL.21　1　第一次Ⅳ区ＳＣ－51・52・55・66（南から）　2　第一次Ⅳ区ＳＣ－50・66全景（南から）
PL.22　1　第一次Ⅳ区ＳＣ－52・54～56近景（南西から）　2　第一次Ⅳ区ＳＣ－51・52・54～66切合関係（南西から）
PL.23　1　第一次Ⅳ区ＳＣ－51近景（南西から）　2　第一次Ⅳ区ＳＸ－55近景（北から）
PL.24　1　第一次Ⅳ区ＳＣ－65、ＳＥ－01、ＳＤ－03（北から）　2　第一次Ⅳ区ＳＥ－01近景（北から）
PL.25　1　第二次Ⅴ区ＳＤ－11全景（北から）　2　第二次Ⅴ区ＳＤ－11全景（北西から）
PL.26　1　第二次Ⅴ区ＳＤ－10と古代溝の切合関係（北東から）　2　第二次Ⅴ区ＳＤ－10・11の合流地点（南西から）
PL.27　1　第二次Ⅴ区ＳＤ－11近景（北東から）　2　第二次Ⅴ区ＳＤ－11近景（北から）
PL.28　1　第二次Ⅴ区ＳＤ－10土層断面（北西から）　2　第二次Ⅴ区ＳＤ－11土器出土状態
PL.29　1　第二次Ⅴ区ＳＤ－10土器出土状態　2　第二次Ⅴ区ＳＤ－10木器出土状態
PL.30　1　第二次Ⅶ区東側地区全景（東から）　2　第二次Ⅶ区東側地区全景（南東から）
PL.31　1　第二次Ⅶ区北側地区全景（北から）　2　第二次Ⅶ区北側地区全景
PL.32　1　第二次Ⅶ区ＳＤ－16（南から）　2　第二次Ⅶ区ＳＤ－16遺物出土状態（南から）
PL.33　1　第二次Ⅶ区ＳＤ－６木器出土状態　2　第二次Ⅶ区ＳＤ－15木器出土状態
PL.34　1　第二次Ⅶ区ＳＤ－02検出状況（西から）　2　第二次Ⅶ区ＳＤ－02検出状況（西から）
PL.35　1　第二次Ⅸ区東側地区全景（南から）　2　第二次Ⅸ区北側地区全景（南東から）
PL.36　1　第二次Ⅸ区北側地区近景（南から）　2　第二次Ⅸ区北側地区近景（南西から）
PL.37　1　第二次Ⅸ区東側地区全景（北から）　2　第二次Ⅸ区西側地区近景（北西から）
PL.38　1　第二次Ⅸ区南側地区近景（南から）　2　第二次Ⅸ区ＳＤ－03遺物出土状態（北から）
PL.39　1　第二次Ⅸ区ＳＤ－05堰状遺構全景（南から）　2　第２次Ⅸ区ＳＤ－05堰状遺構近景（南から）
PL.40　1　第二次Ⅸ区ＳＤ－05土層断面（北から）　2　第２次Ⅸ区ＳＫ－05
PL.41　出土遺物－１（縮尺不統一）一次調査遺物
PL.42　出土遺物－２（縮尺不統一）一次調査遺物
PL.43　出土遺物－３（縮尺不統一）一次調査遺物
PL.44　出土遺物－４（縮尺不統一）一次調査遺物
PL.45　出土遺物－５（縮尺不統一）一・二次調査遺物
PL.46　出土遺物－６（縮尺不統一）二次調査遺物
PL.47　出土遺物－７（縮尺不統一）一・二次調査遺物
PL.48　出土遺物－８（縮尺不統一）二次調査遺物
PL.49　出土遺物－９（縮尺不統一）一・二次調査遺物
PL.50　出土遺物－10（縮尺不統一）一・二次調査遺物
PL.51　出土遺物－11（縮尺不統一）一・二次調査遺物
PL.52　出土遺物－12（縮尺不統一）一・二次調査遺物

PL.53　1　L－8・9地区SD01出土状況（南から）　2　L－8・9地区SD02出土状況（北から）
3　L－8・9地区SD02遺物出土状況（東から）　4　5号水路調査区全景（東から）
5　5号水路調査区SD01出土状況（西から）　6　5号水路調査区SD01遺物出土状況（南から）
PL.54　1　F－11区SD10出土状況（西から）　2　F－10・11区SD12出土状況（北から）
3　F－10・11区SD12遺物出土状況（東から）　4　8号支線道路調査区SC01出土状況（東から）
5　F－10区SK72出土状況（北から）　6　F－10区SK82出土状況（北から）
PL.55　出土遺物－13（縮尺不統一）三次調査遺物
PL.56　出土遺物－14（縮尺不統一）三次調査遺物
PL.57　第四次調査遺構検出状況（東から）
PL.58　第四次調査第Ⅰ区遺構検出状況
1　第Ⅰ区南半部検出状況（北から）
2　第Ⅰ区西側遺構検出状況（東から）
PL.59　第四次調査第Ⅱ区遺構検出状況
1　第Ⅱ区遺構全景（西から）
2　第Ⅱ区SK133土壙内土器出土状況
PL.60　出土遺物－15（縮尺不統一）第四次調査遺物
PL.61　1　大石地区と住居址　2　円形竪穴住居址（SC－71）
PL.62　1　太田地区　2　弥生土器出土状況

表　目　次

Tab. 1　吉武遺跡群調査一覧 …… 2
Tab. 2　第四次調査検出遺構一覧表　① …… 205
Tab. 3　第四次調査検出遺構一覧表　② …… 206
Tab. 4　第四次調査検出遺構一覧表　③ …… 207
Tab. 5　第四次調査検出遺構一覧表　④ …… 208
Tab. 6　第四次調査検出遺構一覧表　⑤ …… 209

第一章　は　じ　め　に

1．調査に至る経過

吉武遺跡群発掘調査のきっかけとなったのは、昭和55年（1980年）６月11日に農林水産局農業構造改善部農業土木課より教育委員会文化部文化課に提出された福岡市西区の『飯盛・吉武団体営圃場整備事業』計画である。

当初の整備計画では、対象面積46.4haのうち、昭和55年度－3.6ha・昭和56年度－9.0ha・昭和57年度以降－33.8haを整備するものであった。このうち昭和55年度対象地区は、地形的に明らかに東側を流れる室見川の比較的新しい氾濫原であることと工事施工のうえでほとんど影響を受けないために、本調査からは除外した。

昭和56年度以降の対象地は、昭和44年に行われた九州大学による分布調査やその後の市教育委員会の遺跡分布調査によって、全域に弥生～古墳時代遺物が散布することが知られていた。

教育委員会文化課では、昭和56年度事業地（対象7.5ha）について試掘調査（56年６月16～19日・７月８日～10日）を実施して遺構内容の把握を行ったところ、弥生時代前期末～中期末の甕棺群や竪穴住居跡・溝・柱穴群など古墳時代にわたる遺構が、全体的にまんべんなく分布することが明らかとなった。この後、この成果をもとに対象地のうち、造成工事にともなって遺構の失われる切土・構造物（道路・水路）部分などの範囲を確定するために事業者と協議を重ね、昭和56年11月１日より本格的な調査を開始した。（第一次調査）

第一次調査以降、工事施工と発掘調査が時期的に重複するため、各事業年度での発掘調査規模を設計変更などで最低におさえるための協議が土地改良組合、文化課、事業指導課（農業土木課）とで定期的にもたれ、事業の円滑な推進がはかられた。

また、圃場整備で６次にわたって調査された吉武遺跡群のうち、豊富な青銅製武器・鏡・玉などの副葬品をともなう吉武高木弥生墓地（第四・五次）や吉武大石弥生墓地（第六次）の一部は、弥生時代の墓制を考える上で学術的に非常に価値が高く、地権者の理解をえて国史跡『吉武高木遺跡』として永久に保全されることとなった。

2．調査の組織

昭和56年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】　農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合
【調 査 主 体】　福岡市教育委員会　教育長　西津茂美
【調 査 総 括】　埋蔵文化財課長　甲能貞行
埋蔵文化財係長　柳田純孝
【調 査 庶 務】　埋蔵文化財課　岡島洋一
【調 査 担 当】　発掘調査　二宮忠司、田中寿夫、小林義彦　試掘調査　横山邦継
【調 査 補 助】　渡辺和子
【整理調査員】　大庭友子
【整理作業員】　牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、斎藤美紀枝、西田優樹、真名子順子
【調査作業員】　青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾準一、牛尾二三子、牛尾奈美江、大内文恵、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子、倉光三保、倉光ユキエ、菰田洋子、

Tab.1　吉武遺跡群調査一覧（平成９年２月12日現在）

	遺跡調査番号	遺跡略号	調査地地籍	分布地図番号	調査対象面積	調査面積	調査期間	調査担当者	既刊報告書
1次	８１０２	ＹＳＴ	西区大字飯盛字本名地内（圃場整備第一次）	092-Ａ-12 (0405)	83,000	12,000	1981.11.1～1982.3.5	二宮忠司 田中寿夫 小林義彦	福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 第514集
2次	８２３４	ＹＳＴ	西区大字飯盛地内（圃場整備第二次）	092-Ａ-2 (0405)	79,000	21,000	1982.9.1～1983.2.15	二宮忠司	福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 第514集
3次	８２３５	ＹＳＴ	西区大字飯盛字トイ他地内（田・飯盛線第一次）	092-Ａ-12 (0405)	—	5,200	1982.9.22～1983.2.12	山崎龍雄	福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集
4次	８３３５	ＹＳＴ	西区大字吉武110他地内（圃場整備第三次）	092-Ａ-10・12 (0405)	101,000	25,000	1983.9.12～1984.3.24	下村　智 横山邦継	福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 第437集 第461集 第514集
5次	８４１５	ＹＳＴ	西区大字飯盛地内（田・飯盛線第二次）	093-Ａ-10 (0405)	—	1,600	1984.4.13～1984.5.31	浜石哲也	福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集
6次	８４１６	ＹＳＴ	西区大字吉武字高木194他（圃場整備第四次）	093-Ａ-10 (0405)	70,000	36,000	1984.7.1～1985.3.20	下村　智 常松幹雄 横山邦継	福岡市埋蔵文化財調査報告書第136集 第437集 第461集 第514集
7次	８４２６	ＹＳＴ	西区大字吉武字三十六146他（野方・金武線第一次）	093-Ａ-7 (0405)	—	1,050	1985.3.26～1985.5.5	下村　智 横山邦継	福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集
8次	８５１８	ＹＳＴ	西区大字吉武字高木地内（圃場整備第五次）	093-Ａ-10・12 (0405)	70,000	470	1985.7.2～1985.7.24	横山邦継	福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 第461集 第514集
9次	８５３５	ＹＳＴ	西区大字吉武地内（圃場整備第六次）	093-Ａ-10 (0405)	106,000	23,000	1985.8.1～1986.3.31	力武卓治 下村　智 常松幹雄 加藤良彦	福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 第461集 第514集
10次	８６５０	ＹＳＴ	西区大字吉武字三十六地内（圃場整備）	092-Ａ-12 (0405)	—	5,000	1986.11.17～1987.2.27	力武卓治 常松幹雄	福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集
11次	８６６２	ＹＳＴ	西区大字飯盛地内（野方・金武線第十一次）	093-Ａ-2 (0405)	4,320	3,780	1987.3.1～1987.5.10	二宮忠司 佐藤一郎	福岡市埋蔵文化財調査報告書第303集

榊スミ子、榊太郎、榊光雄、柴田大正、白坂フサヲ、新町ナツ子、惣慶トミ子、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、中牟田サカエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、能美八重子、浜田澄美枝、林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、又野栄子、真名子千恵子、真名子時雄、八尋君代、山下サノエ、結城君江、結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝ユキエ、吉岡あつ子、吉岡アヤ子、吉岡員代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、吉岡文子、米島ハツネ、脇坂ミサヲ

昭和57年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会　教育長　西津茂美

【調 査 総 括】 埋蔵文化財課長　生田征生
埋蔵文化財第１係長　柳田純孝

【調 査 庶 務】 埋蔵文化財課　岡島洋一、岸田隆

【調 査 担 当】 発掘調査　二宮忠司、山崎龍雄

【調査補助員】 渡辺和子

【整理調査員】 大庭友子

【整理作業員】 牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、斎藤美紀枝、西田優樹、真名子順子

【調査作業員】 青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾和子、牛尾シキヲ、牛尾準一、牛尾二三子、牛尾奈美江、大内文恵、牛尾睦子、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、尾崎八重、金子ヨシ子、釜堀耐美、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子、倉光三保、倉光ユキエ、小林ツチエ、菰田洋子、榊スミ子、榊太郎、榊光雄、坂田セイ子、柴田大正、柴田常人、清水フミ代、白坂フサヲ、新町ナツ子、杉村文子、惣慶トミ子、高田マサエ、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、舎川春江、中牟田サカエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、西納トシエ、西納テル子、能美八重子、浜田澄美枝、林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、又野栄子、松尾鈴子、松尾キミ子、松尾久代、真名子千恵子、真名子時雄、真鍋チエ子、八尋君代、山下サノエ、山西人美、山本キクノ、結城君江、結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝ユキエ、吉岡あつ子、吉岡アヤ子、吉岡員代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、吉岡文子、米島ハツネ、脇坂ミサヲ

昭和58年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会　教育長　西津茂美

【調 査 総 括】 文化財部長　中田宏
文化課長　生田征生
埋蔵文化財第２係長　折尾学

【調 査 庶 務】 埋蔵文化財第１係　岡島洋一、古藤国生

【調 査 担 当】 発掘調査　下村智、横山邦継　試掘調査　田中寿夫

【調査・整理補助員】 田中克子、緒方俊輔（奈良大学文化財学科）

【調査作業員】 村本健二、溝口武司、中山章、牧重幸、川田初、橋哲也、大賀敏明、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上キヨ子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上麿智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、岸田浩、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光イワ子、倉光スマ子、倉光ナツ子、倉光信子、倉光初江、小柳和子、斎藤国子、柴田憲子、柴田タツ子、柴田春代、滝良子、高松美智子、筒井ひとみ、堤直代、土斐崎つや子、富崎栄子、富崎フミ子、富永ミツ子、鳥飼タキ子、永井鈴子、中島栄子、中西ヒデ子、中西美由紀、中牟田チエ子、中山サダ子、西島美千代、

西原春子、野下久美子、花畑照子、原幸子、原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、溝口博子、宮原富代、宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、脇坂マキノ

【整理作業員】 花畑照子、溝口博子、安野良、副田則子、伊藤美紀、鳥飼悦子、室以佐子、酒井香代子、持原良子

昭和59年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会　教育長　西津茂美

【調 査 総 括】 文化財部長　中田宏
文化課長　生田征生
埋蔵文化財第２係長　折尾学

【調 査 庶 務】 埋蔵文化財第１係　岡島洋一、松延好文

【調 査 担 当】 発掘調査　下村智、横山邦継　常松幹雄　試掘調査　田中寿夫

【調査・整理補助員】 田中克子、岩本陽児、矢野健一（京都大学）、緒方俊輔（奈良大学文化財学科）、火口秀信（早稲田大学）、進藤敏雄（早稲田大学）、滝口孝司（九州大学）

【調査作業員】 村本健二、松田定美、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橋哲也、亀川照義、北園諭、小路永智明、藤嶋博明、甲斐美佐江、末松一馬、青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、川口シゲノ、岸田浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、斎藤国子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土斐崎つや子、富崎栄子、富田マチ子、富永ミツ子、舎川春江、永井鈴子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サダ子、西山秀子、能美須賀子、花畑照子、原ハナエ、原口マサ子、平田千鶴子、平田美絵子、堀尾久美子、松尾キミ子、松尾鈴子、松本育子、溝口博子、溝口洋子、宮原富代、宮崎泰子、森山早苗、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山本キクノ、山田トキエ、結城千代子、吉積ミエ子、吉田勝代、横田松ノ、横溝恵美子、横溝カヨ子、横溝チエ子、吉武早苗、脇坂マキノ、脇山喜代子

【整理作業員】 花畑照子、溝口博子、別府加代子、矢野隆子、安野良、副田則子、伊藤美紀

昭和60年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会　教育長　佐藤善郎

【調 査 総 括】 文化部長　河野清一
埋蔵文化財課長　柳田純孝
埋蔵文化財第２係長　飛高憲雄

【調 査 庶 務】 埋蔵文化財第１係　岡島洋一、松延好文

【調 査 担 当】 発掘調査　力武卓治、下村智、常松幹雄、加藤良彦

【調査・整理補助員】 田中克子、岩本陽児、矢野健一(京都大学)、緒方俊輔(奈良大学文化財学科)、樋口秀信（早稲田大学)、進藤敏雄（早稲田大学)、溝口孝司（九州大学)

【調査作業員】 村本健二、松田定美、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橘哲也、亀川照義、北園諭、小路永智明、藤嶋博明、甲斐美佐江、末松一馬
青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上麿智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、川口シゲノ、岸田浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、斎藤国子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土斐崎つや子、富崎栄子、富田マチ子、富永ミツ子、舎川春江、永井鈴子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サダ子、西山秀子、能美須賀子、花畑照子、原ハナエ、原口マサ子、平田千鶴子、平田美絵子、堀尾久美子、松尾キミ子、松尾鈴子、松本育子、溝口博子、溝口洋子、宮原富代、宮崎泰子、森山早苗、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山本キクノ、山田トキエ、結城千代子、吉積ミエ子、吉田勝代、横田松ノ、横溝恵美子、横溝カヨ子、横溝チエ子、吉武早苗、脇坂マキノ、脇山喜代子

【整理作業員】 花畑照子、溝口博子、安野良、副田則子、伊藤美紀

凡　例

第一次・二次調査での遺物登録番号を下記のように定めた。

福岡市では、遺物に対して五桁の番号を与える。そこで今回第一次・二次の遺構と遺物に対して明確な区別を与えるため

区	遺構	0	0	1

とした。

遺構は、0－掘立柱建物
1－住居址内遺物
2－溝出土遺物
3－甕棺墓
4－土壙墓
5－井戸
6－縄文貯蔵穴
7－石器
8－木器
9－不明土壙

Ⅱ区の住居址から出土した土器には、21001～の番号を与え、Ⅳ区の溝から出土した土器には、42001～の番号を与えた。

Fig. 1 吉武遺跡群位置図（縮尺1/50,000）

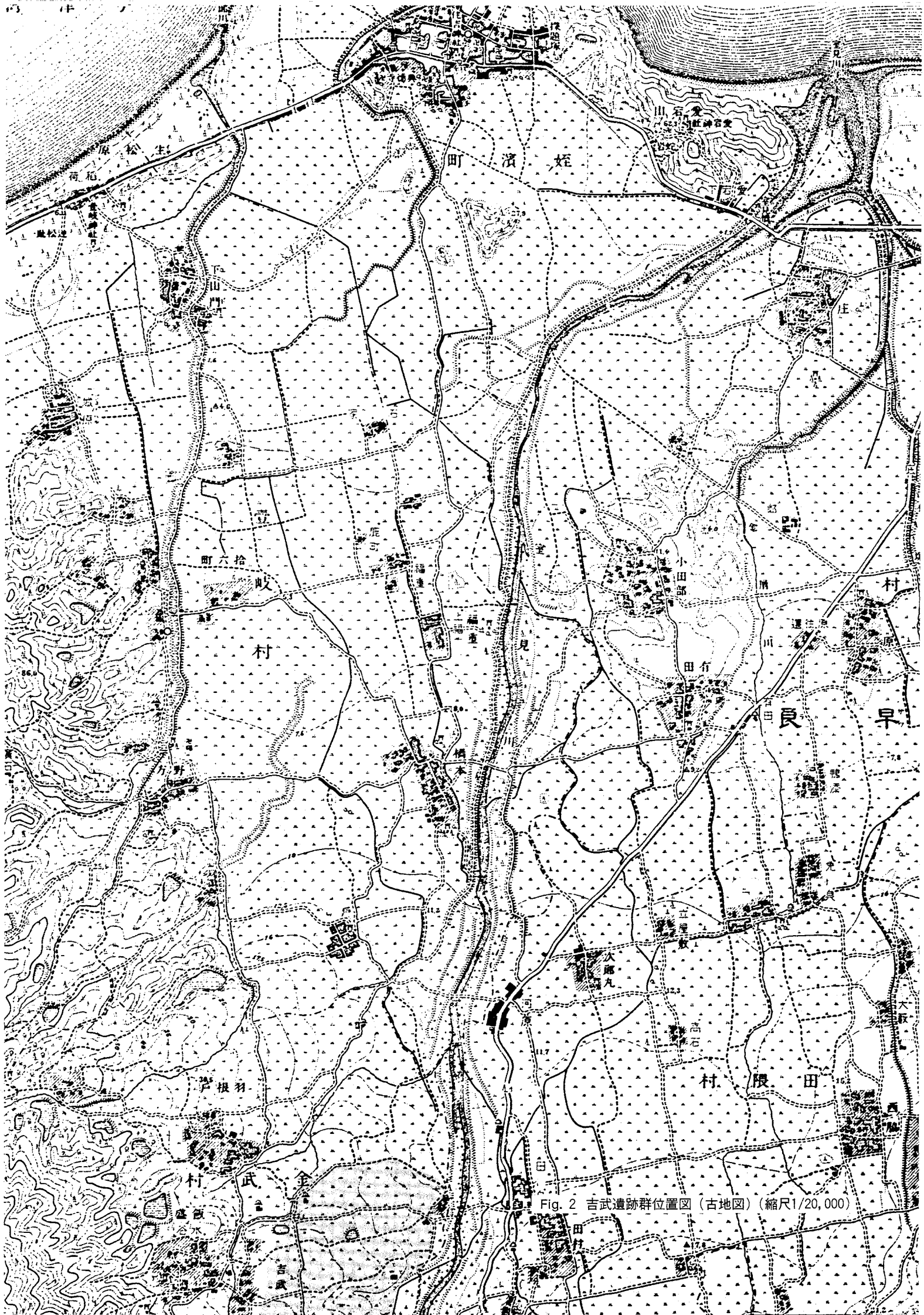


Fig. 2 吉武遺跡群位置図（古地図）（縮尺1/20,000）

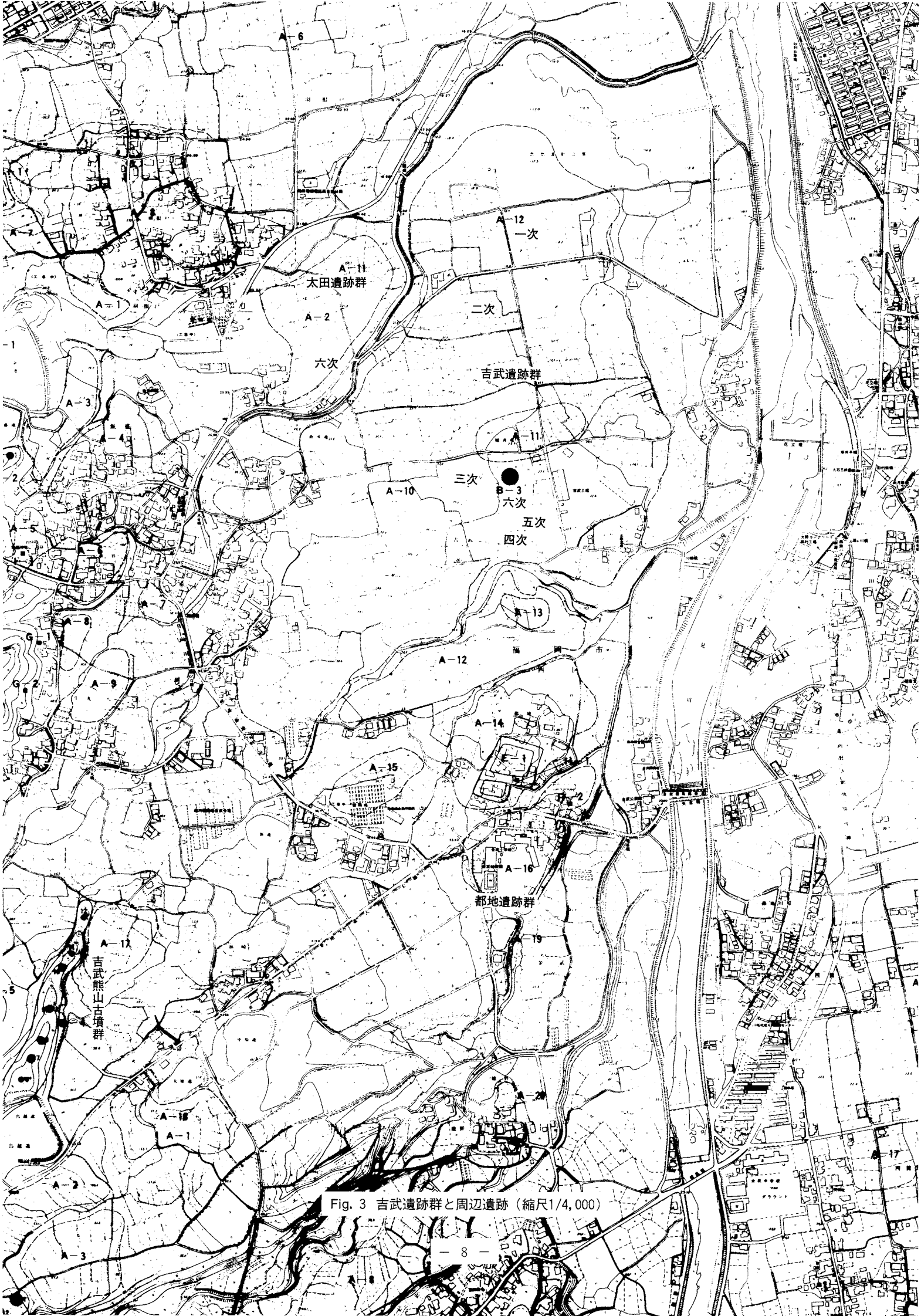


Fig. 3 吉武遺跡群と周辺遺跡（縮尺1/4,000）

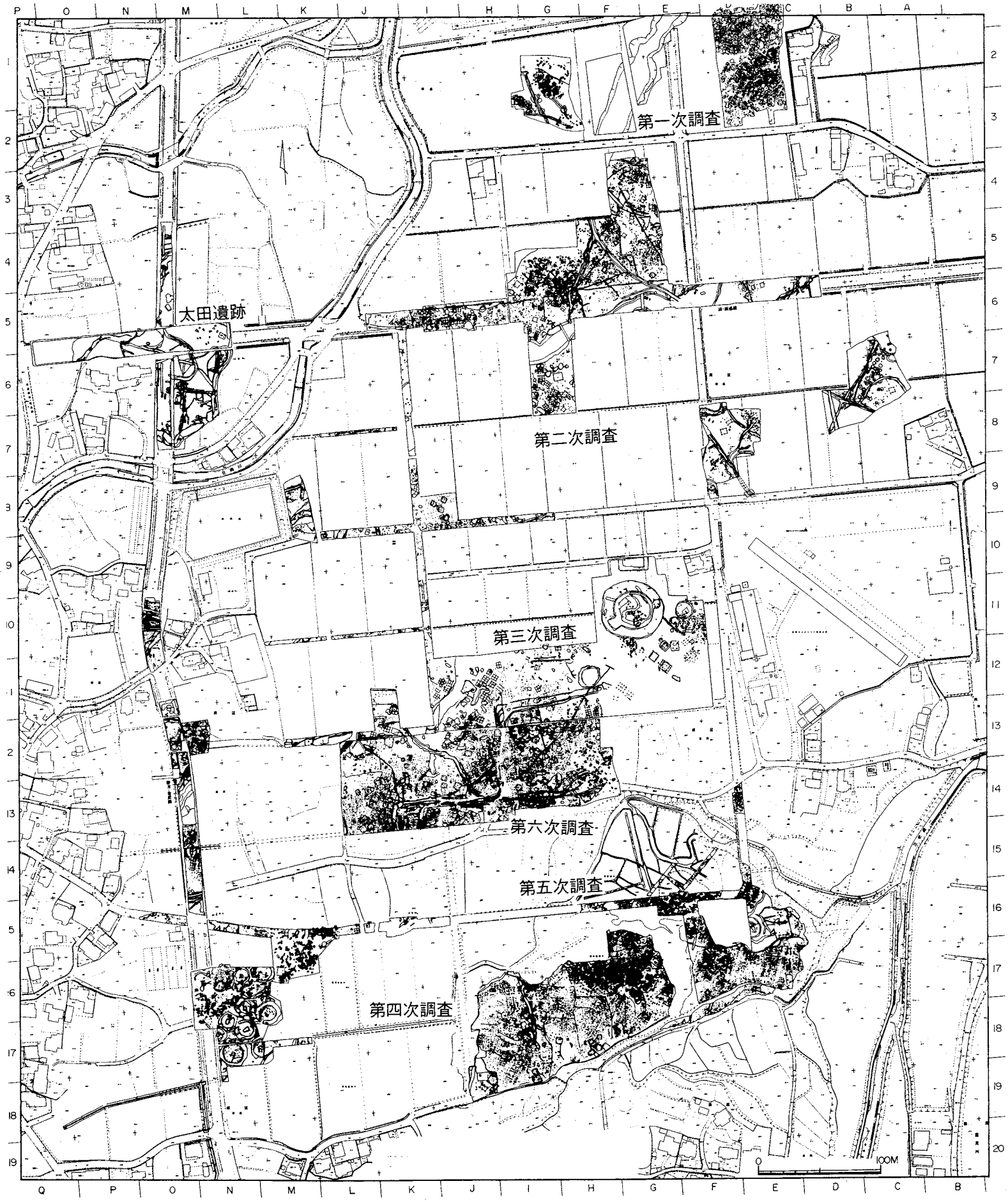


Fig. 4 調査区配置図（第一～第六次調査）

第二章　第一次調査－弥生時代生活遺構の調査－

第一節　第一次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地　：　福岡市西区飯盛字本名地区

圃場整備面積　：　61ha

発掘調査対象面積：　2.5ha

発掘調査面積　：　1.2ha

発掘調査年月日　：　昭和56年11月９日～57年３月10日

昭和56年７月に試掘調査を行い、発掘対象面積を埋土する部分を除いて2.5haとし、この中で著しく削平を受ける1.2haを実際の調査面積とした。ただ耕作土排除後にすぐ検出される甕棺墓は破壊を免れないため調査の対象とした。全体の2.5haの内、区割りによりⅠ区からⅣ区とした。これとは別に磁北を区割りの中心線とし東西・南北に100ｍ単位でグリットを設定し、将来の基準線とした。

Ⅰ区の調査（Fig.４・５）

掘立柱建物１棟と柵列を検出した。東側は段落ちとなり、室見川の氾濫源と考えられる。この部分は水田址の可能性が考えられたが削平されない所から調査から除外した。

Ⅱ区の調査（Fig.４・５）

今回の対象区の中で４区とともに最も削平される部分で8,000㎡ある。この内完掘の必要な面積は4,000㎡であった。４区とともに２区も遺構の遺存状態がよく、上層に古墳時代初期の住居址・祭祀遺構等を検出し、下層からは弥生時代後期・中期の住居址等が検出された。また、弥生時代前期末の甕棺墓（金海式）が44基と土壙墓４基を検出した。

古墳時代初期の住居址を９軒(方形)祭祀遺構・土器溜が27基検出でき、弥生時代後期の住居址９軒、その内の１軒（SC－６）から石戈・石剣を出土した。弥生時代中期の円形住居址は16軒検出した。遺構の遺存状態は非常によく壁高が40～50㎝程度残っているものも少なくない。弥生時代中期の甕棺墓は小児棺が２基検出した。弥生時代前期の甕棺墓は44基検出され、その内の１基は倒置棺であった。成人棺の内、２基から棺外副葬品（板付Ⅱ式の壺、内１点は彩文土器）が出土した。

弥生時代中期に属する掘立柱建物は27棟検出され、弥生時代後期に属する掘立柱建物は６棟、古墳時代に属する掘立柱建物20棟が検出された。

Ⅲ区の調査（Fig.４・５）

Ⅲ区全体で表土排除作業をおこなった面積は、4,000㎡であるが、検出した遺構は甕棺墓14基と台地を切断する幅12～20ｍの河川である。この河川は断面調査の結果、両岸に杭列を検出し、底面付近から弥生時代中期初頭の土器が出土しているところから河川を人工的に使用した可能性を持つ。また、人工的に手を加え使用した時期は底面から出土した弥生時代中期の土器を基準と考えてこの前後の可能性がある。ただ最上層から須恵器片が出土していることから、この河川は急激に埋まったものと考えられ、時期も弥生時代～古墳時代の範疇に納まる。

甕棺墓は河川を挟んで弥生時代中期中葉の５基（西側）と東側に弥生時代中期後半の９基が検出された。

Ⅳ区の調査（Fig.４・５）

調査対象面積は、6,000㎡で表土排除作業4,500㎡である。検出した遺構は、弥生時代前期末の甕棺

墓・住居址・溝、弥生時代中期初頭～後半にかけての住居址・甕棺墓・井戸・掘立柱建物・中世の溝二条・井戸を検出した。甕棺墓は149基検出し、その内23基が弥生時代前期末の金海式甕棺墓であり、126基が弥生時代中期の時期に属する。

以上のことから一次調査の問題点は

1　弥生時代前期末の墓域について

一次調査の成果として弥生時代前期末から中期・後期・古墳時代初期・中世の遺構を検出し、連続した複合遺跡であることが判明した。特にⅡ区に44基、Ⅳ区に23基と二ケ所で弥生時代前期末の墓域が検出された。この中でⅣ区の甕棺墓Ｋ－88の１基だけに棺内副葬品(細形銅剣の切先)が出土した点、棺外副葬も３例しか認められないことに一次の甕棺墓検出の問題点を集約できる。

2　住居址と甕棺墓について

Ⅱ区の弥生時代中期の住居址群は中央部と東側・南側に位置する。これに対して甕棺墓は北側に東西に長く配列され、あたかも二列埋葬を思わせる配置を呈する。

住居址は切り合い関係がみられるが、これは建替及び増築の要素を持つもので弥生時代中期の範疇に入るもので、その時間的経過も50年前後と考えられる。

Ⅳ区の中心部に甕棺墓が約100基ほど集中して検出された。その下層から弥生時代前期末～中期初頭にかけての方形・円形住居址が検出された。甕棺墓は弥生時代中期中葉～後半の時期に限定されることから、住居址が破棄された直後に多量の土砂により完全に埋没し、その後墓域として甕棺墓が埋葬されたものと思われる。

3　Ⅱ区における遺構の広がりについて

遺構の遺存状態が非常に良かったⅡ区は上層に古墳時代の住居址・祭祀遺構等を検出し、下層に弥生時代中期・後期の住居址群を検出した。この他に弥生時代前期末の甕棺墓を検出し、Ⅱ区が他の地域よりも集中的に遺構が多いことが認められた。遺構の広がりは西は河川部分まで達し、東はⅠ区の台地段落部分にまで達している。今回遺構上面で終了したⅡ区北側（盛土部分で遺構面まで掘削が達しない範囲）でも数十軒の竪穴式住居址を確認している。

4　Ⅰ区の水田址の可能性について

Ⅰ区の中央部に台地が急激に落ちる部分を検出した。これは北から南にほぼ放物線を描くように台地の端が認められた。これは室見川の氾濫による蛇行時に作られた部分であり、水田址の可能性が高い地点と考えて良い。今回は調査対象外であったため、その実態は不明であるが、Ⅱ・Ⅳ区の集落を考えるとき水田の利用地としては、最適な場所であったと思われる。

Fig. 5　第一次調査遺構全体図（縮尺1/660）

D
C
B
1
I区
II区
2
3
C
D
C
B
0
50m
3

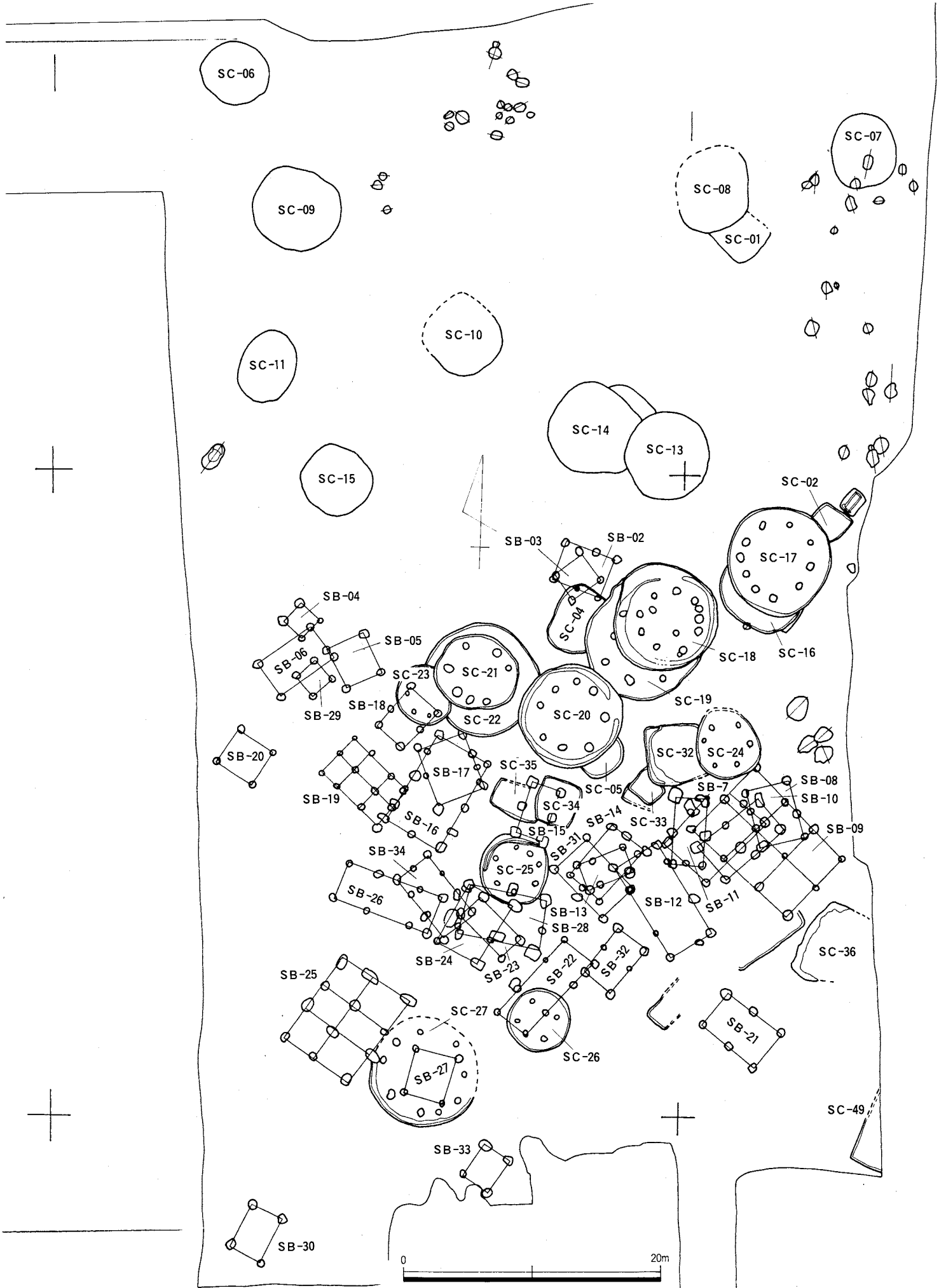


Fig. 6　第一次調査弥生時代遺構配置図（Ⅱ区）

第二節　第一次調査Ⅱ区　弥生時代の生活遺構

第一次調査では、Ⅱ・Ⅳ区において住居址群を検出した。Ⅱ区は、8,000㎡の調査を行なった、その内南側4,000㎡は削平されるため完掘した。北側4,000㎡は削平されないため遺構検出面でプランを確認することと、甕棺墓に関しては破壊される可能性が高いため、記録を保存する方針で調査を行なった。

遺構の遺存状態は非常によく、上層に古墳時代初期の住居址・祭祀遺構等を検出、下層に弥生時代後期・中期・前期の住居址、土壙墓、溝、甕棺墓を検出した。

検出された弥生時代の住居址は、50軒以上（北側のＳＣ－01、06～15・151・153は遺構検出面での観察であるため確定できない）。弥生時代前期の住居址は、ＳＣ－02～05・30・39・40・42・48の９軒、弥生時代中期は17軒、弥生時代後期の住居址を13軒検出した。

遺構の遺存状態は非常によく壁高が40～50㎝程度残っているものも少なくない。

１．弥生時代の住居址（Fig.６～８・24　PL.１～10）

弥生時代前期住居址

ＳＣ－02～05・30・39・40・42・48の９軒である。ＳＣ－02はＳＣ－17により切られ、ＳＣ－03はＳＣ－16によって切られている。出土遺物は少なく時期を決定づけるものはないが、中期前半から中葉のＳＣ－16、17によって切られているところから前期の可能性が高い。ＳＣ－02は北側に壁溝が見られ、一辺2.6ｍ程度のものと考えられる。ＳＣ－03はわずかに遺存するだけで時期は決定できないが、ＳＣ－16から切られているところから前期と考えられる。ＳＣ－04もＳＣ－19によって切られる正方形を呈する住居址である。出土遺物は中期から前期末の遺物が出土している。切り合い関係から前期に属する可能性が高い。ＳＣ－30はＳＣ－38によって切られる。長方形を呈し、推定3.4ｍ、３ｍを測るもので、出土遺物は図示できなかったが、前期末の遺物が少量出土している。

弥生時代中期住居址（Fig.６～20　PL.１～10）

弥生中期の住居址は26軒（遺構検出面で確認したものが11軒で、調査を行なったものが15軒）である。切り合い関係が激しく、出土遺物も少量で時期の差を明確にできる資料に乏しく判断することが非常に困難であった。ここでは切り合い関係でその前後関係を先に述べる。

ＳＣ－07は壁面及び中央部に前期末の甕棺墓が埋納されていることから弥生時代前期末より古い。

ＳＣ－01とＳＣ－08はＳＣ－08が円形住居址であることから弥生時代中期におさまるもので、ＳＣ－01は08に切られていることから、それより古いことが窺える。

ＳＣ－13と14は、ＳＣ－13が14を切る形から13が新しく、14が古い。しかし中期の範疇におさまる。

ＳＣ－02・03・16・17の切り合い関係は、ＳＣ－17がＳＣ－16と02を切る。ＳＣ－16がＳＣ－03を切り、ＳＣ－16・17が弥生時代中期、02、03が弥生時代中期初頭から前期におさまる。

ＳＣ－04・18・19は、ＳＣ－04がＳＣ－19によって切られ、ＳＣ－19がＳＣ－18によって切られている。またＳＣ－19はＳＣ－20からも切られている。その前後関係からＳＣ－04が一番古く弥生時代前期、19、18が中期に位置付けられ、18は19より新しい。ＳＣ－05・20は、ＳＣ－05が20によって切られる。ＳＣ－21～23の切り合い関係は、ＳＣ－22が最も古く、ＳＣ－21・23によって切られ、ＳＣ－23はＳＣ－21によって切られている。またＳＣ－22はＳＣ－20によっても切られている。ＳＣ－24・30・32・38は、ＳＣ－32が正方形を呈し、円形住居址ＳＣ－24を切る。ＳＣ－30は長方形で、ＳＣ－24・32・38から切られる。

次に円形住居址の大きさを比較してみると最も大きいものは、ＳＣ－19で直径9.0ｍ、次にＳＣ－22、

27の直径8.5m前後が上げられる。ＳＣ－17・18・20が直径８ｍ前後、次にＳＣ－05・16・21・23～25の直径６ｍ前後の住居址である。最も小さい住居址はＳＣ－26の4.93ｍである。

長方形・正方形の住居址は、ＳＣ－02・03・28～46・48の22軒である。大きさは長軸５ｍ短軸３ｍ程度が平均的なサイズであり、最大のものでＳＣ－36の長軸6.64ｍ、短軸3.94ｍで、小さな住居址はＳＣ－02の2.4×3.0＋αｍである。

出土した土器（床面出土の土器か、切り合い関係から最も新しい土器を基準とした）から最も新しい弥生時代の住居址（弥生時代後期の住居址でこれをａとする）は、ＳＣ－31～34・36・37・41・43～46である。弥生時代中期では、最も新しい時期（弥生時代中期後半をｂとする）の住居址は、ＳＣ－20・21である。次にＳＣ－18・24（弥生時代中期後半～中葉）、ＳＣ－17・19・23・25・27・38（中期中葉を主体とする時期をｃとする）の順となる。次にＳＣ－16・22・26・28・29・35・47（弥生時代中期初頭をｄとする）で、次にＳＣ－02～05・30・39・40・48（弥生時代前期をｅとする）となる。

切り合い関係（個別の切り合いについては各住居址の中で述べる）と出土土器とで各住居址の時期を考察する。まずＳＣ－16・17・02・03の住居址群ではＳＣ－16が、ＳＣ－17によって切られる。両者とも円形住居址である。ＳＣ－17はｃの時期でＳＣ－16はｄの時期と考えられる。ＳＣ－02はＳＣ－17に、ＳＣ－03はＳＣ－16に切られ、両方とも長方形の住居址と考えられる。出土遺物は少なく図示できるものはないが、おそらくｅに属するものと思われる。次にＳＣ－18・19・04・47・48の切り合いは、ＳＣ－18がＳＣ－19・47を切る。ＳＣ－19はＳＣ－04を切りＳＣ－47はＳＣ－48を切る。この切り合いからＳＣ－04・48→47→19→18の順が考えられ、土器からＳＣ－04・48はｅ、47はｄ、19がｃ、18がｂの時期を当てることができる。ＳＣ－18の南に位置するＳＣ－05・20は、05→20の関係であるが、ＳＣ－20がＳＣ－19・22を切る。ＳＣ－21～23の切り合いは、ＳＣ－21がＳＣ－22・23を切る。ＳＣ－21はｂに相当する。23がＣ、ＳＣ－22はｄに相当。ただ20・21は切り合い関係はないが、近接しすぎるため、多少の時間差を考慮する必要がある。ＳＣ－24・30・32・38の切り合い関係は、ＳＣ－30→38→24→32の順に建て替えられている。出土遺物からＳＣ－24がｃの時期からｂの時期、ＳＣ－38がｃの時期に比定できる。ＳＣ－30は図示していないが、ＳＣ－38とほぼ同時期を示すが、切り合い関係からｅの時期と考えられる。

長方形・正方形住居址では、ＳＣ－01～05・07・38～46・48がある。ＳＣ－29・34・46の関係は、34が29・46を切る。ＳＣ－39・40・42は、ＳＣ－40が39・42を切り、42が39を切る。ＳＣ－29、37、43は、上部に古墳時代の住居址があることから切り合い関係は定かではないが、ＳＣ－43が29を切る。

調査区北側に位置する住居址群（ＳＣ－01・06～15・151・153の14軒）は、遺構面検出のみで試掘トレンチさえ入れていないため定かでないが、甕棺墓の調査を行なった際、その切り合い関係から若干の考察はできる。ＳＣ－01は円形住居址08によって切られている。ＳＣ－07・12は住居址中央部に弥生時代前期末の甕棺墓より切られることから前期末より古い。Ⅱ区で円形住居址は25軒検出されその内15軒を調査した。

次に吉武遺跡群Ⅶの報告（1995福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集－弥生時代掘立柱建物の報告－）で掘立柱建物群について記載したが、住居址との関連をあげなければ、生活遺構全体を把握したことにはならない。住居址と掘立柱建物の位置関係をFig. 6に図示した。

Ⅱ区の弥生時代前期の住居址は、9軒検出されたが、その殆どが後世の遺構により破壊されておりその実態は把握できない。しかし、おそらくＳＣ－02～05・30・39・40・42・48・151・153である。

弥生時代中期に属する住居址は、17軒検出された。切り合い関係が多く、かなりの建替を行なっていることが判明した。これは掘立柱建物でも同じで、26棟検出されたが、20棟近くが建替を行なって

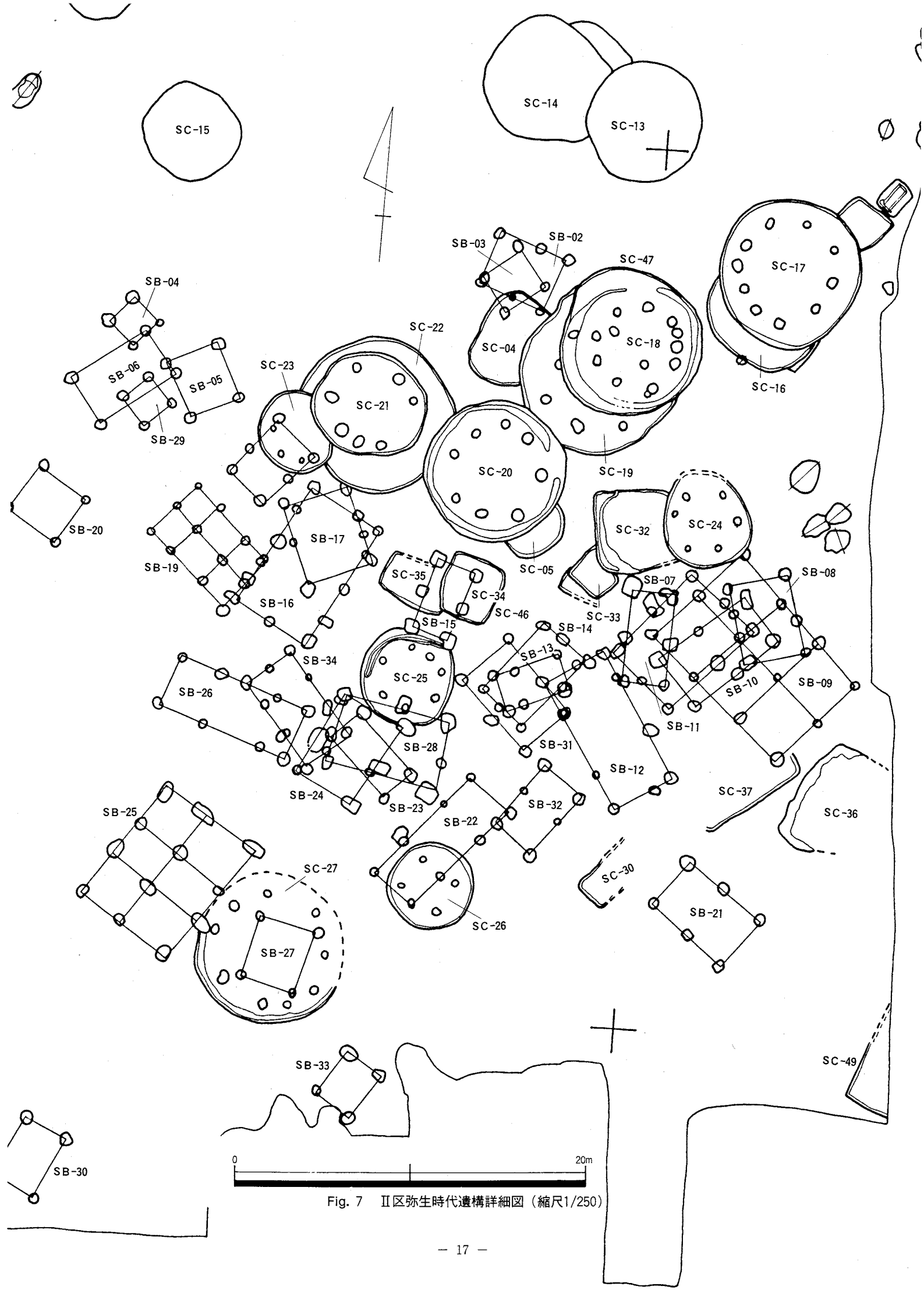


Fig. 7　Ⅱ区弥生時代遺構詳細図（縮尺1/250）

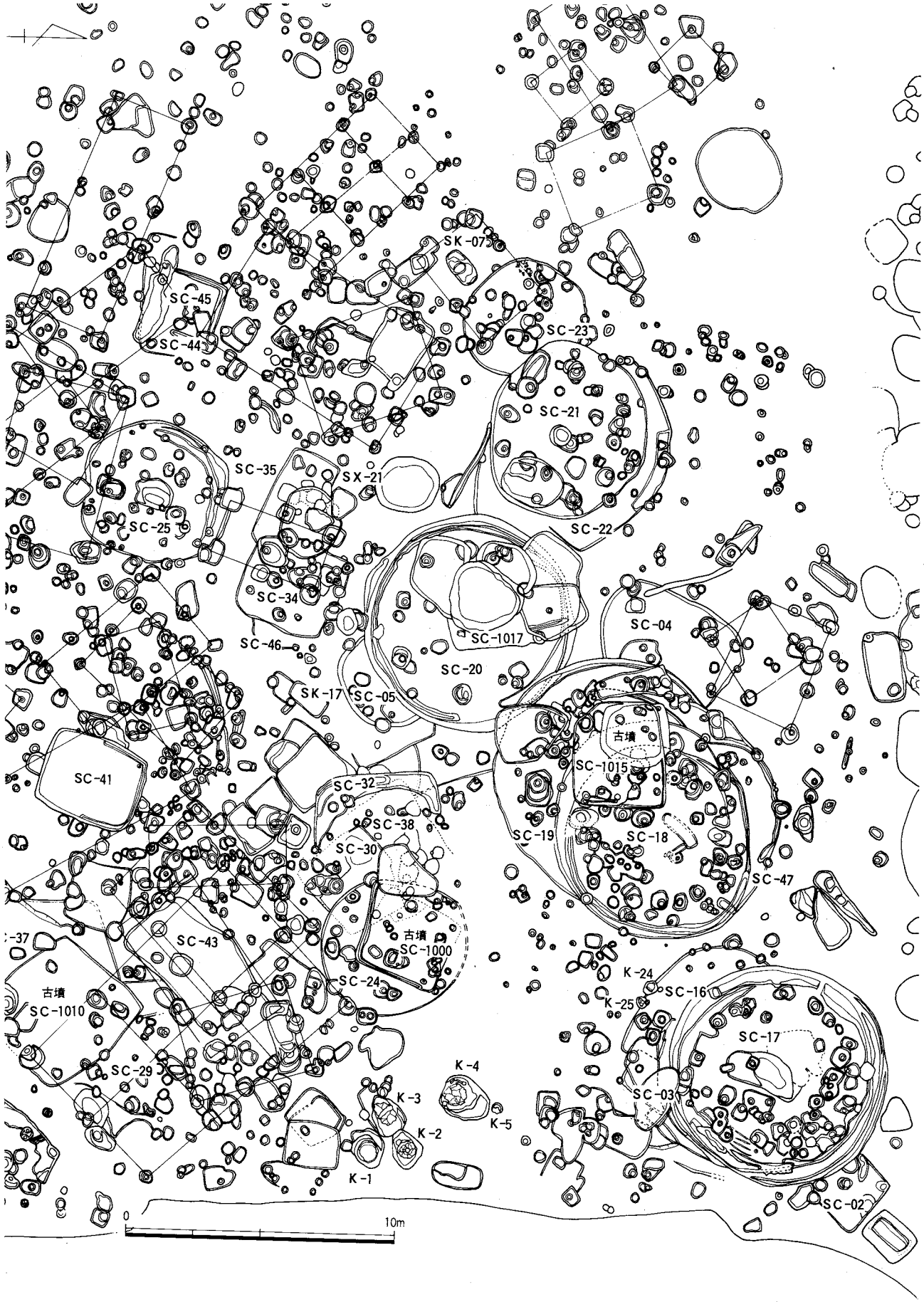


Fig. 8　Ⅱ区SC-02･05、SC-16～24配置図（縮尺1/200）

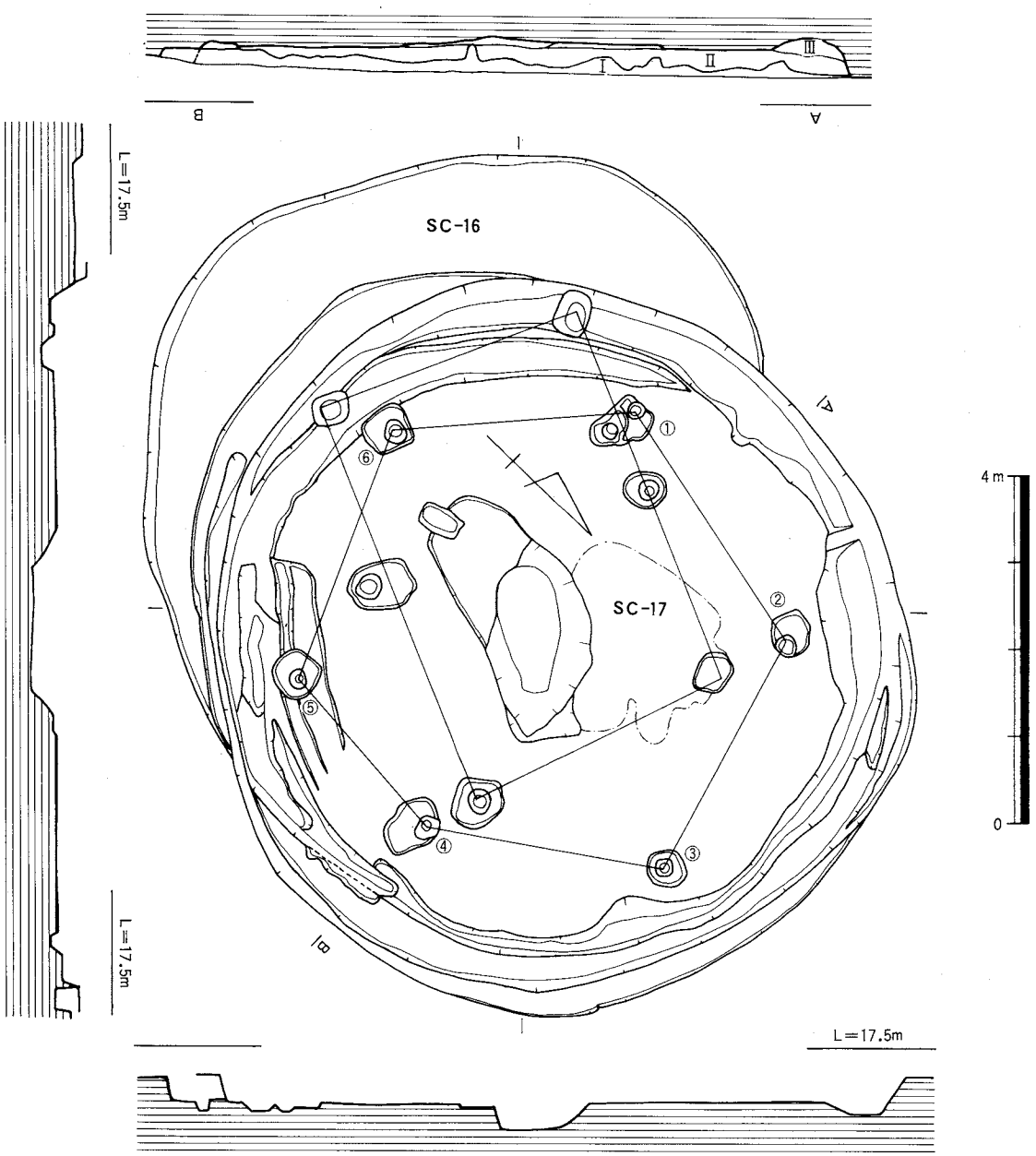


Fig. 9　Ⅱ区SC-17平面・断面図・土層図（縮尺1/80）

いる。建替られた可能性のある掘立柱建物は、ＳＢ－02と03、ＳＢ－04と05・06、ＳＢ－07と09・12、ＳＢ－18と10・11、ＳＢ－13と14・15、ＳＢ－16と19、ＳＢ－17と18、ＳＢ－22と24、ＳＢ－23と26が考えられる。建物の規模は、1間×1間が02～06・18・20・27の8棟、2間×1間が08・10・11・13～15・17・21・23・24の10棟、3間×1間が22・26の2棟、2間×2間はなく、3間×2間が07・09・12・19・25の5棟である。弥生時代中期の住居址は、切り合い関係、土器から3時期に区分できると思われる。円形住居址の内、一番新しい住居址はＳＢ－18・20・21・24の4軒で、これに付随する掘立柱建物は、ＳＢ－05・08・09・11・15・18・22・23・27の9棟である。この時期は弥生時代中期後半に位置付けられる。次にＳＣ－17・19・23・25・27・28の住居址が中期中葉に位置付けられ、これに付随する掘立柱建物は02・03・06・10・12・13・17・25・26の9棟である。最も古い中期の住居址はＳＣ－16・22・26・28・29・35・47の7軒で、掘立柱建物は04・07・14、19～21、24の7軒である。これの平均を出すと、1軒あたり2棟前後の掘立柱建物を有することになる。特に3間×2間は、各

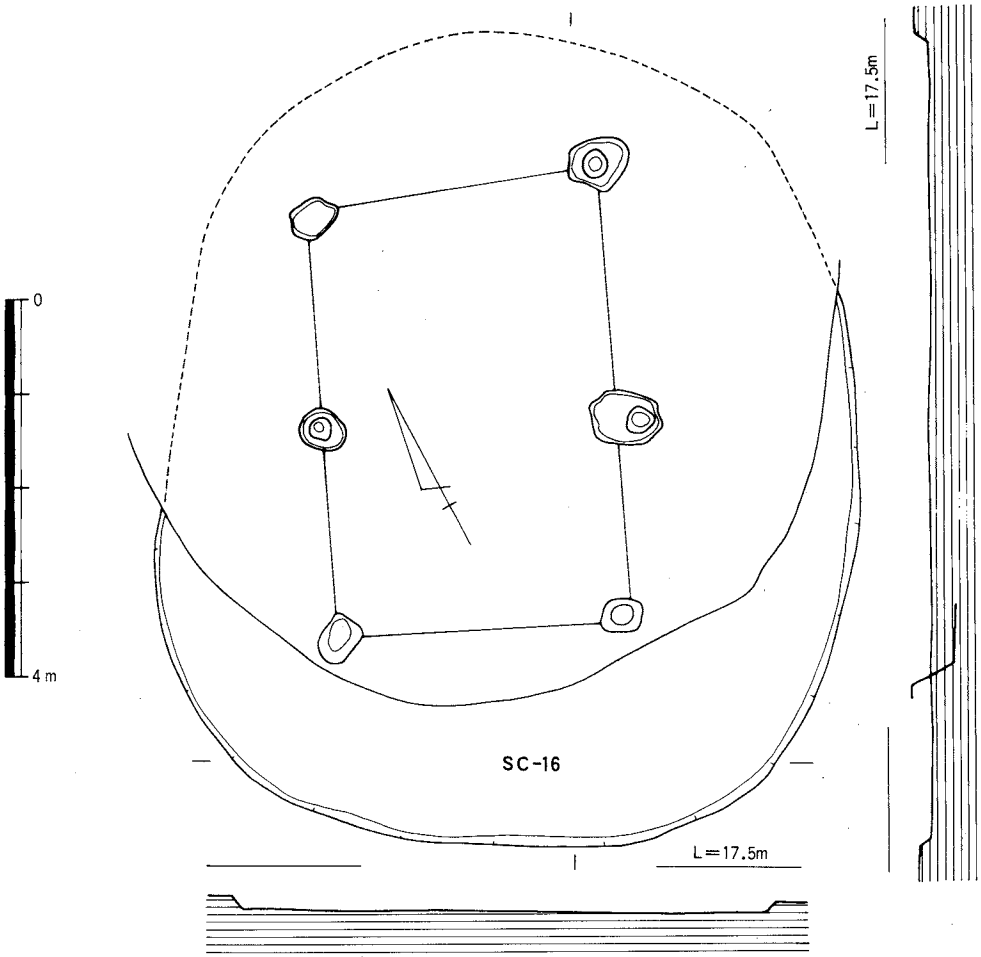


Fig. 10　Ⅱ区SC-16平面・断面図（縮尺1/80）

時期に１～２棟を有する。

中期住居址の形態から第１段階（古い時期）には、大型の円形住居址であり、第２段階には小型の円形住居址が考えられる。第３段階ではやや中間の大きさとなる。これはＳＣ－21・22・23の切り合い及びＳＣ－18・19の切り合い関係で明らかである。

弥生時代後期では、竪穴住居址で13軒、掘立柱建物７棟が検出された。時期的には後期後半のＳＣ－33・37とＳＢ－16・29・31・34の掘立柱建物と後期中～後半のＳＣ－32・34・36の住居址とＳＢ－30・32・33の３棟の掘立柱建物がある。

住居址群の大きさ、規模、出土遺物について記載する。

ＳＣ－17（Fig.８・９　PL.１・３・７）

ＳＣ－17は8.2ｍ×7.9ｍの円形住居址である。柱は６本と考えられるが、同じ間隔で２重の配列が考えられる。また壁溝が２重に巡ることから建替えが考えられる。柱間間隔は、2.7ｍ×3.2ｍであるが、１～２は3.20ｍ、２～３は３ｍ、３～４は３ｍ、４～５は2.20ｍ、５～６は３ｍ、６～１は2.70ｍである。中心部には浅い窪みと炭化した炭及び土が焼けており、中心部が炉跡である。遺構面は約30cm程度の遺存状態であった。柱穴の深さは床面から26cm～35cm前後の深さで、大きさも0.5ｍ～0.8ｍ前後である。壁溝は二重に巡り、幅0.7ｍ、深さ0.14ｍである。床面は0.05ｍ程張床され、中央部が高く壁に向って傾斜する。土層断面から観察すると北から南に急激に埋設したことが窺える。第Ⅰ層は黒灰褐色砂質土であり、第Ⅱ層は暗褐色粘質土、第Ⅲ層は暗褐色粘質土と黄褐色粘質土である。

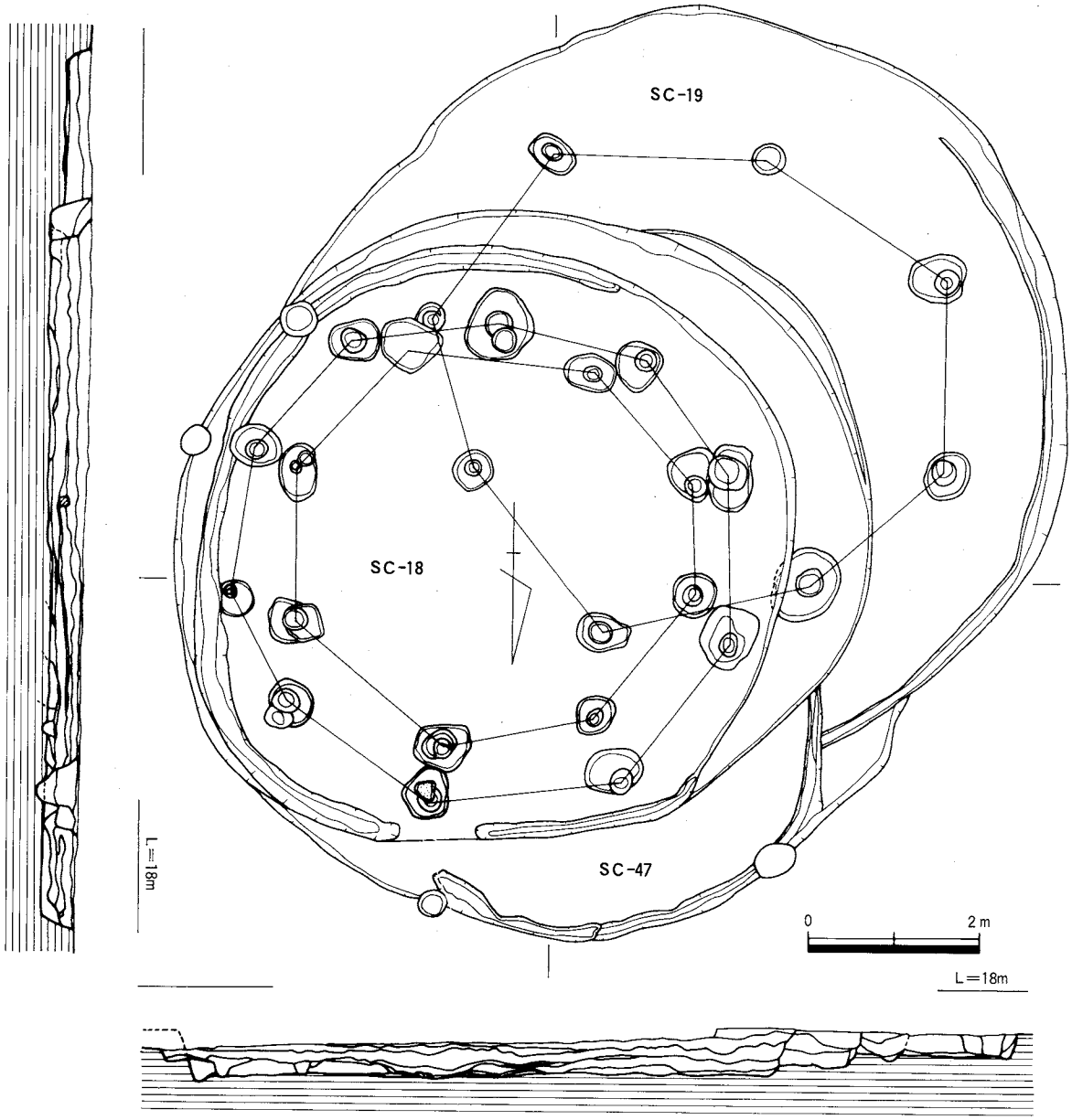


Fig. 11　Ⅱ区SC-18・19・47平面・断面図（縮尺1/80）

出土遺物は、Fig.24に図示したが、ほぼ弥生時代中期中葉から後半にかけての遺物が主である。ＳＣ－17はＳＣ－16を切るが、東側ではＳＣ－02も切る。

ＳＣ－02・16（Fig. 8～10　PL. 1・3・7）

ＳＣ－16　全体の4/5ほどをＳＣ－17によって切られ、さらに古墳時代の土壙によっても切られている。全体の大きさは、推定8.62×7.4ｍを測る隅丸長方形を呈すると思われる。遺存状態は悪く、深さ18cm程度しか残っていない。柱穴は、１×２間で1.5ｍ×1.2ｍの間隔である。柱穴の大きさは、30cm程度である。

ＳＣ－02　ＳＣ－17の東側に位置し、ＳＣ－17から約1/2程度切られる。長軸3.0＋αｍ×2.4ｍで深さ0.18ｍである。出土遺物は図化にたえるものはないが、口縁形態から弥生時代前期と思われる。

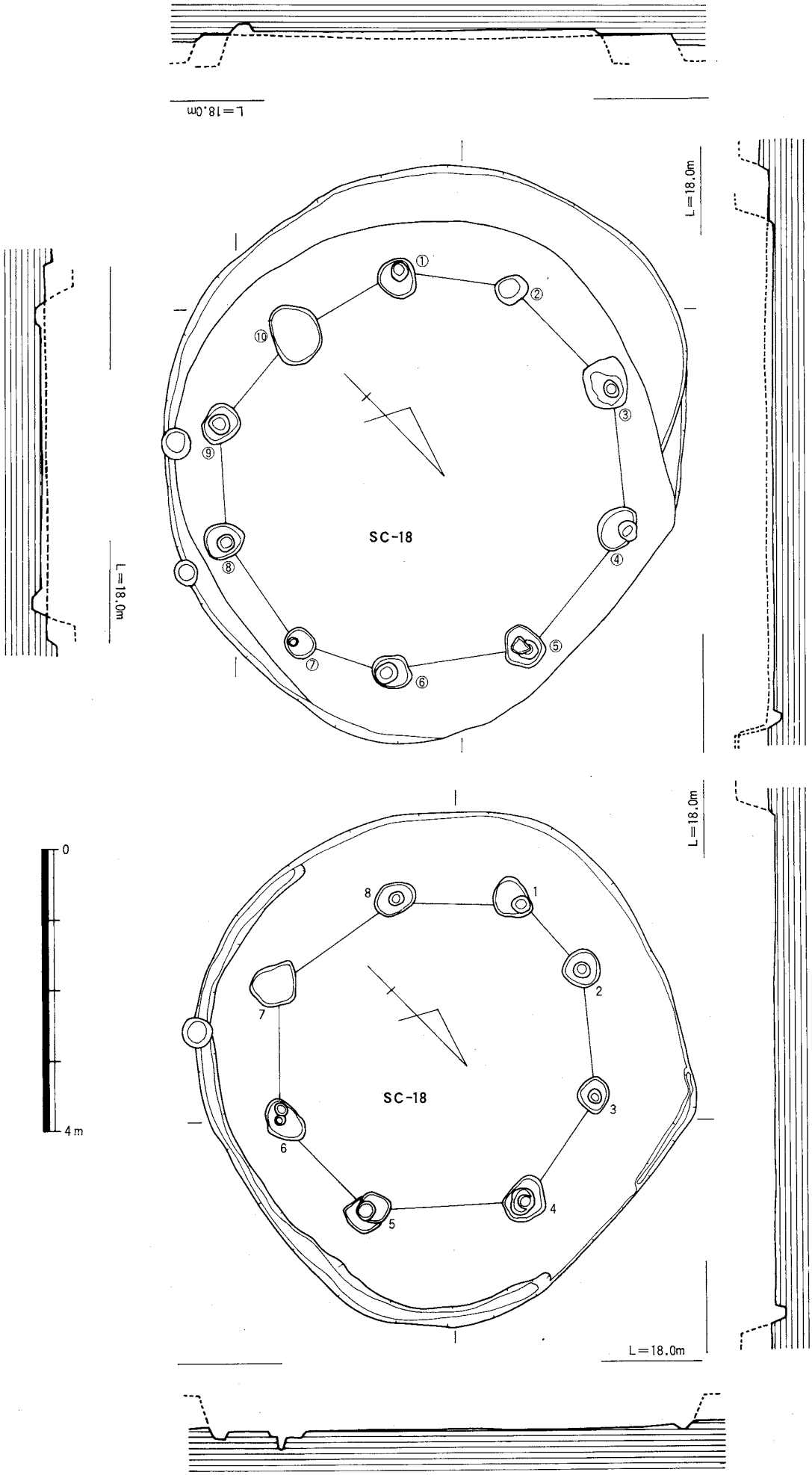


Fig. 12　Ⅱ区SC-18・18拡張区平面・断面図（縮尺1/80）

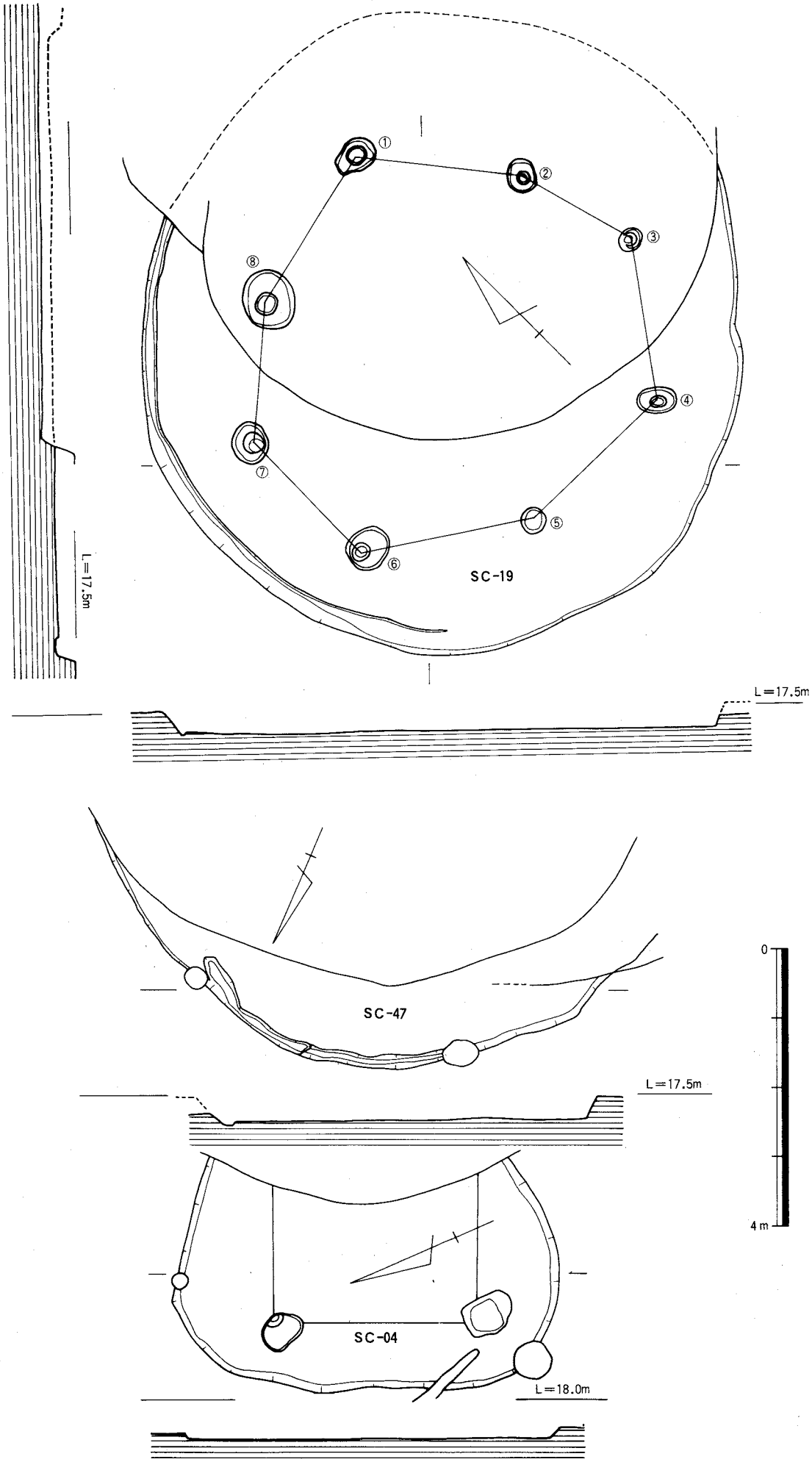


Fig. 13　Ⅱ区SC-04・19・47平面・断面図（縮尺1/80）

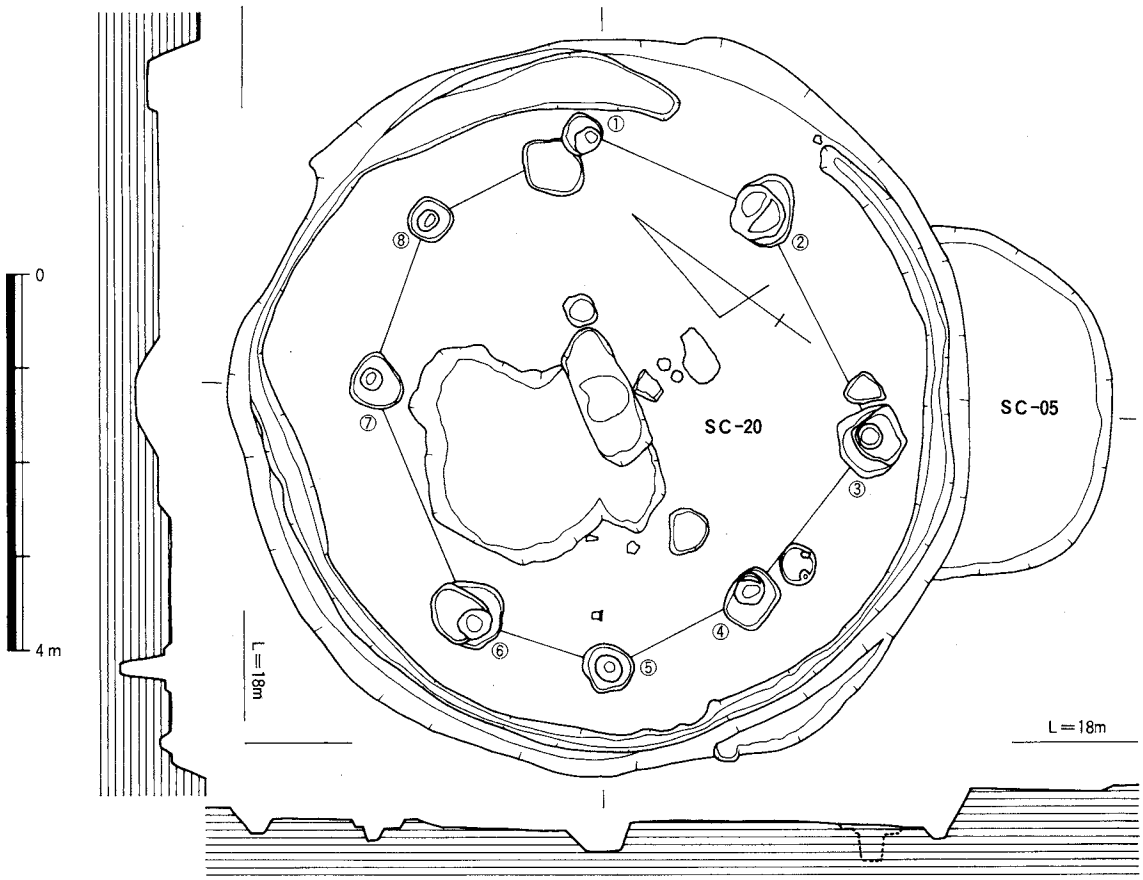


Fig. 14　Ⅱ区SC-05・20平面・断面図（縮尺1/80）

ＳＣ－18・19・47・48（Fig.11～13、PL.２・３・７）

切り合い関係の著しい部分で４軒（５軒の可能性もある）の住居址がある。Fig.11は土層断面図であるが、断面を見ると新しい住居址ほど深く造り出している。

ＳＣ－18　最も新しい住居址で、長さ6.9×6.85ｍの円形住居址である。住居址の残りは最もよく深さ50cm～60cmある。東側に壁溝を有する。主柱穴は、８本で柱穴の大きさは、50～70cm、深さ30～40cmである。柱間隔は広い所で2.2ｍ、狭い所で1.3ｍ、平均1.8ｍである。ＳＣ－18は拡張された可能性が高く、南西部に拡張した痕跡がある（ＳＣ－18拡張区Fig.12)。大きさは、7.76×7.26ｍで10本の柱で形成されている。柱間隔は、最大で2.2ｍ、最小で1.4ｍ、平均1.7ｍである。

ＳＣ－19　ＳＣ－19はＳＣ－18・47に切られるが、規模は大型の円形住居址である。住居址復元は柱穴によるもので、9.0×8.2ｍと推定できる。深さは24cmである。柱は８本で構成され、西側に壁溝を持つ。柱間隔は、最大で2.4ｍ、最小で1.8ｍである。

ＳＣ－47　ＳＣ－18によって切られ、ＳＣ－19を切る。そのほとんどがＳＣ－18によって切られているため復元は不可能である。

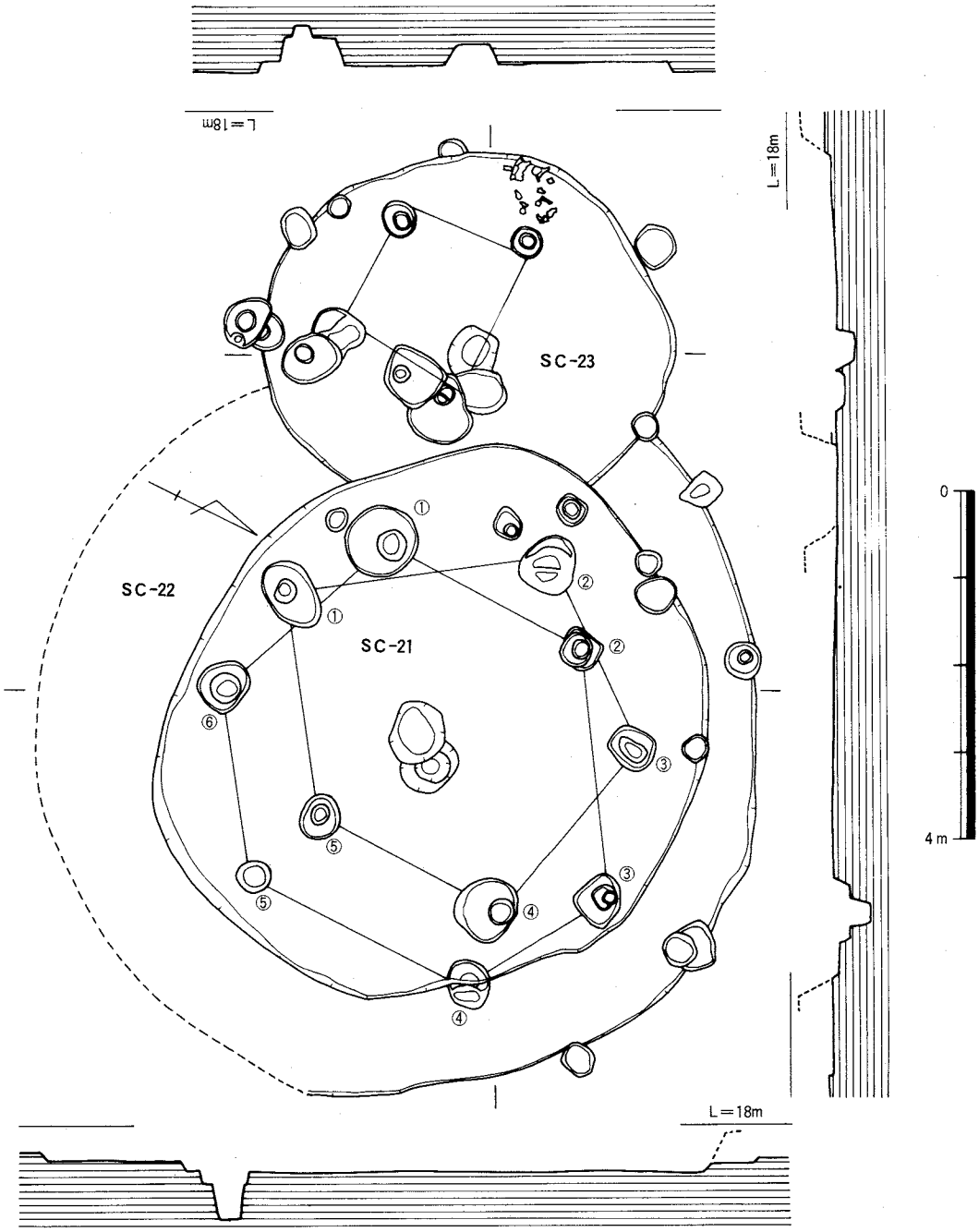


Fig. 15　Ⅱ区SC-21～23平面・断面図（縮尺1/80）

ＳＣ－48　ＳＣ－19によって切られる隅丸方形の住居址である。小型で5.5×3.2ｍを測る。深さは0.18ｍと浅い。出土遺物は少量しか出土していないが、弥生時代前期中頃の遺物が出土した。

ＳＣ－05・20（Fig.14　PL.３・４）

ＳＣ－20　直径7.8ｍで、８本の柱によって構成される。柱間は１～２が２ｍ、２～３が2.7ｍ、３～４が2.1ｍ、４～５が1.76ｍ、５～６が1.5ｍ、６～７が2.8ｍ、７～８が1.8ｍ、８～１が1.9ｍ。柱穴は0.6～0.8ｍで、深さは0.4～0.5ｍである。中央部に焼土があり、中央部に石皿が配置されている。壁溝は東側1.7ｍの間だけ消滅し、他は壁に沿って幅30㎝、深さ10㎝で巡る。

ＳＣ－05　ＳＣ－20によって大部分を切られる。遺構自体削平されているため深さ10㎝程度しか遺存していない。現存する大きさは3.7×1.5ｍである。ただ遺物は、30点ほど出土し、その内の11点を

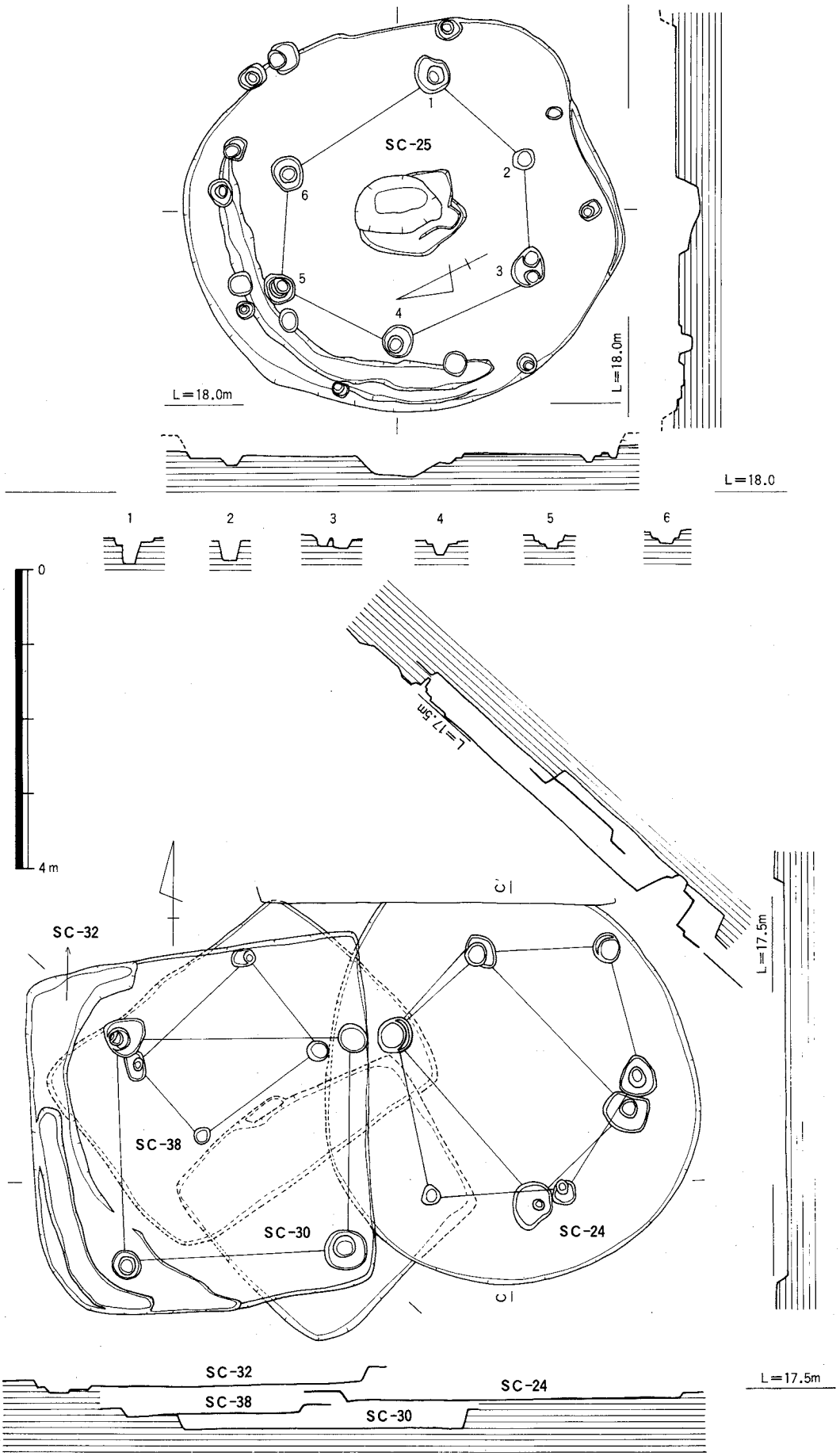


Fig. 16　Ⅱ区SC-24・25・30・32・38平面・断面図（縮尺1/80）

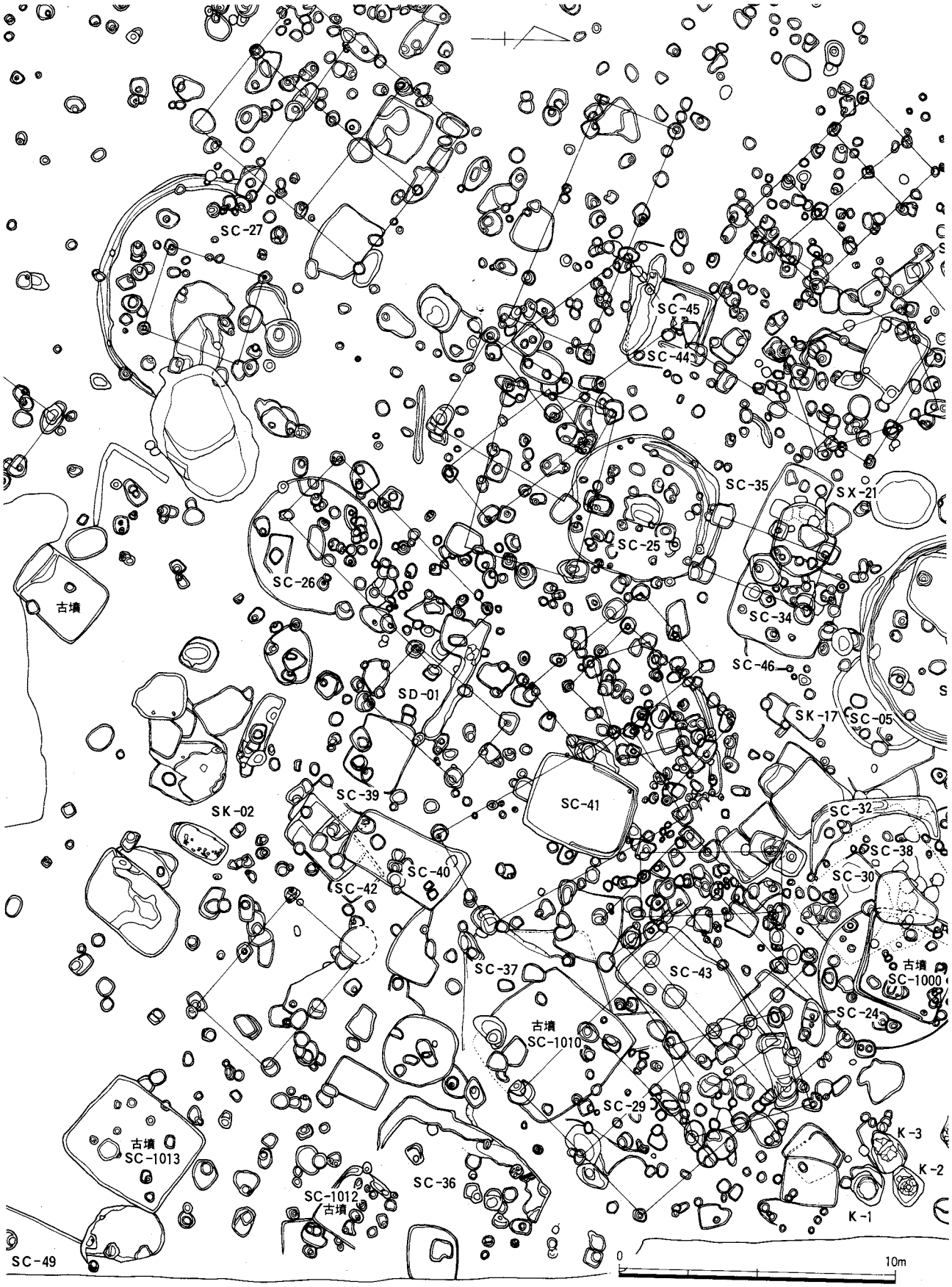


Fig. 17　Ⅱ区遺構配置図（縮尺1/200）

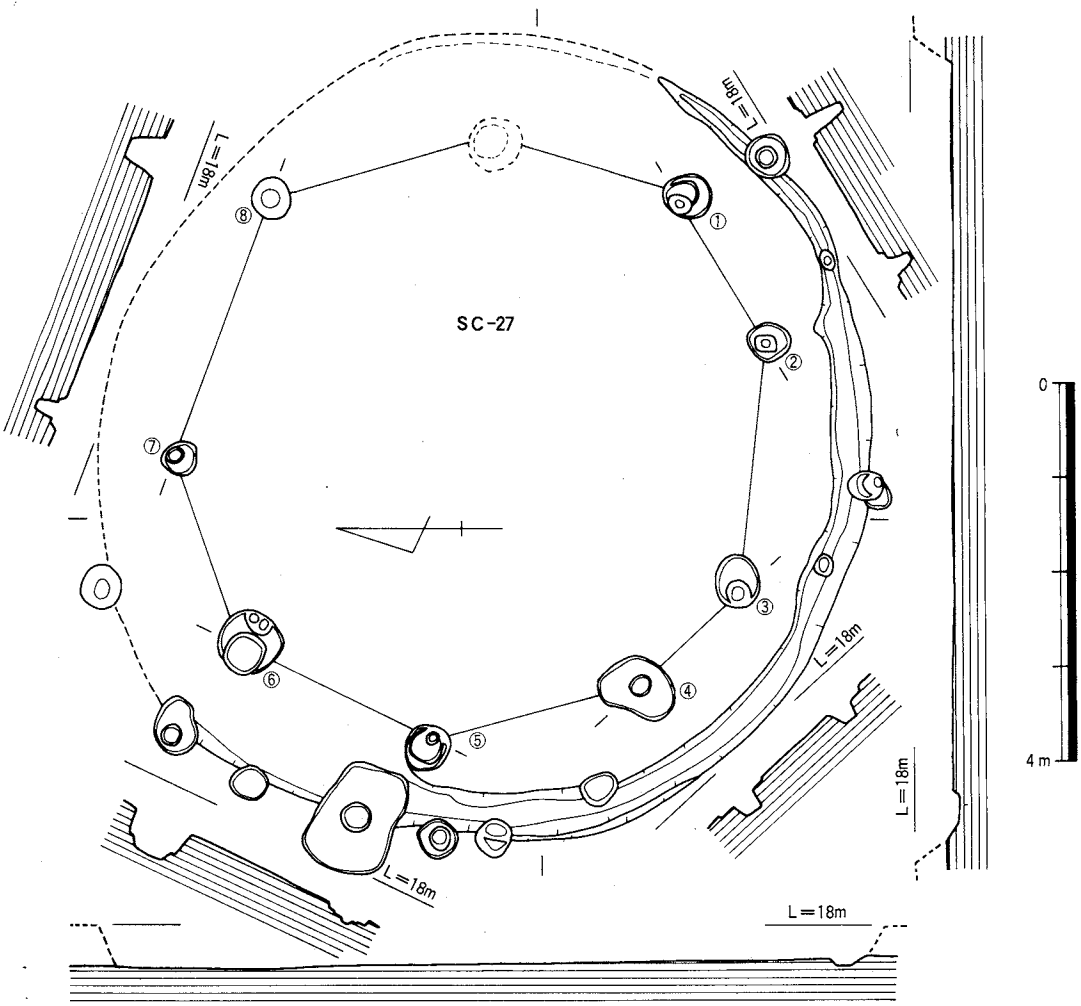


Fig. 18　Ⅱ区SC-27平面・断面図（縮尺1/80）

図示した（Fig.26）。種々な時期が混入しているが、前期中から末の土器が主流を占めている。土器とＳＣ－20から切られていることから弥生時代前期の住居址と考えられる。

ＳＣ－21～23（Fig.15　PL.4・9）

まず切り合い関係は、ＳＣ－22がＳＣ－21・23によって切られ、ＳＣ－23がＳＣ－21によって切られている。この関係からＳＣ－22→23→21の順で新しいことが窺える。**ＳＣ－21**　この３軒の住居址内で一番新しい住居址である。直径6.5ｍで、柱は５本。柱間の間隔は、１～２が３ｍ、２～３が2.3ｍ、３～４が2.4ｍ、４～５が2.4ｍ、５～１が2.6ｍある。柱穴の大きさは0.5～0.8ｍである。

ＳＣ－23　ＳＣ－21から切られる小型の円形住居址である。直径4.7ｍで、４本柱である。ただ周辺部に柱穴８本が認められる。周壁溝はなく、西側隅に一括でFig.27-21001が出土した。

ＳＣ－22　ＳＣ－21の周辺部に見られるため一時ＳＣ－21のベット状遺構と考えたが、出土遺物を見る限り時間差が認められ、別の住居址としてとらえた。直径8.2ｍで、６本の柱で構成されている。柱間隔は、１～２が2.4ｍ、２～３が２ｍ、３～４が２ｍ、４～５が2.7ｍ、５～６が2.2ｍ、６～１が2.4ｍで柱穴の深さは0.4～0.6ｍ、大きさは0.3～0.8ｍを測る。

ＳＣ－25（Fig.16　PL.6）

ＳＣ－20の南側に位置し、同時期のＳＣ－23・26と同間隔の中央部に位置する。径は、5.8×5.14ｍ

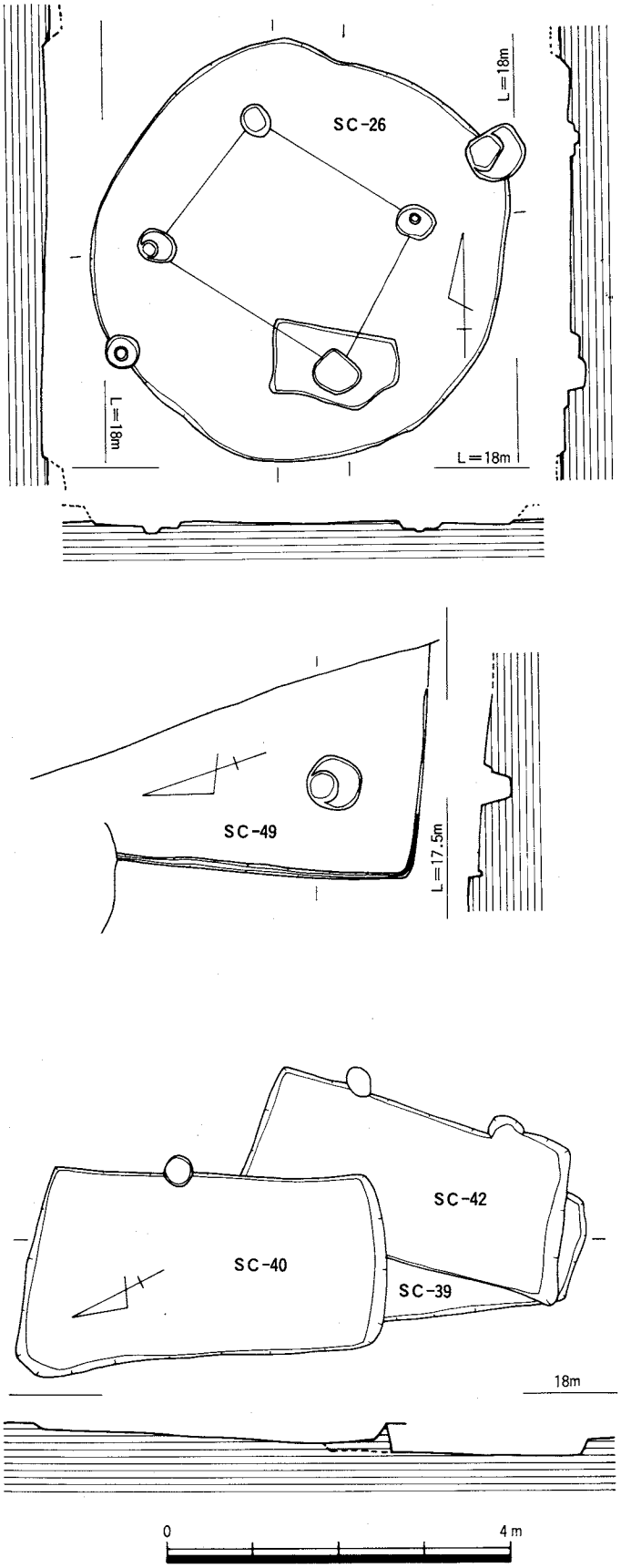


Fig.19　Ⅱ区SC-26・39・40・42・49平面・断面図（縮尺1/80）

とやや歪である。深さ0.1～0.3mと浅い。北側に壁溝を巡らすが、約1/4で終了している。柱穴は6本で、中央部に浅い凹みがある。柱間隔は1～2が2m、2～3が1.7m、3～4が1.5m、4～5が2.3m、5～6が1.7m、6～1が1.5mである。東と西の間隔が広く北、南は狭い。出土遺物は少ない。Fig.27に図示した。床面張付きの土器から弥生時代中期中葉の時期である。

ＳＣ－24・30・32・38

(Fig.16　PL.8・10)

ＳＣ－18の南側に位置し、複雑な切合関係を持つ。ＳＣ－24の上に古墳時代の住居址（ＳＣ－1000）が造られている。切合関係は、ＳＣ－32→24→38→30の順である。ＳＣ－24は直径5.1m、深さ0.1mのやや歪な円形住居址で、柱は4本および5本と考えられる。5本では柱間隔が1m前後で巡る。

ＳＣ－32　4.5×4.5mの正方形プランを呈し、4本柱である。**ＳＣ－38**　ＳＣ－32の下面から検出され、3.2×4.2mの長方形プランを呈し、柱は4本柱である。**ＳＣ－30**　3.4×2.9mの長方形プランを呈し、ＳＣ－38下面から検出した。深さは0.3mであるが、主柱穴の検出はできなかった。出土遺物からＳＣ－32が弥生時代後期、ＳＣ－24が中期後半、ＳＣ－38が中期中葉、ＳＣ－30が前期に属する。

ＳＣ－27（Fig.18　PL.5）

調査区の南側に位置し、ＳＣ－26の南西側にある。一部を古墳時代の土壙によって切られるが、弥生時代の遺構との切合は、ＳＢ－25の総柱掘立柱建物と接する。直径8.52m（8.52×8.16mでやや歪）の円形住居址で、9本柱で構成される。ただ、第9柱穴が古墳時代の遺構によって切られているため推定である。柱間隔は1～2が1.8m、2～3が2.4m、3～

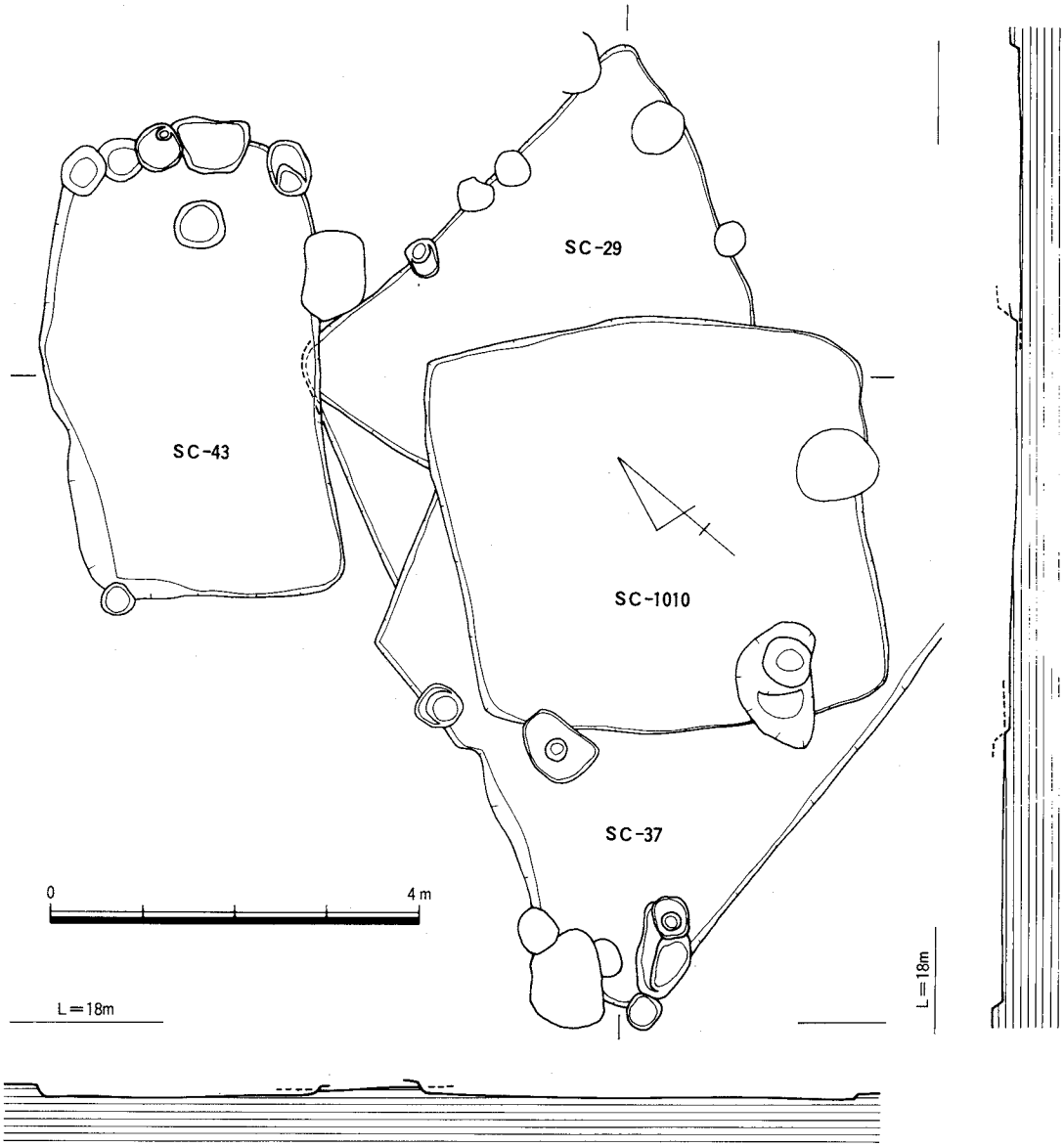


Fig. 20　Ⅱ区SC-29・37・43・1010平面・断面図（縮尺1/80）

4が1.5m、4～5が2.4m、5～6が2m、6～7が2.2m、7～8が2.8m、8～9が2.4m、9～1が2.2mである。柱の深さは0.2～0.5mで、大きさは、0.4～0.8mである。

ＳＣ－26（Fig.19　PL.5・9）

ＳＣ－27の北東側に位置する住居址で、ＳＢ－22との切り合い関係を持つ、小型の円形住居址であり、直径4.9m前後（4.93×4.8m）遺存状態は悪く、深さ0.12mしかない。柱は6本柱とも考えられるが、4本柱の可能性が高い。柱間隔は2.4×2mで1間×1間である。出土遺物は少量で、図示したものは1点だけである（Fig.28－21097）。床面張付き土器であることからこの時期が住居址の時期と考えられる。

ＳＣ－40・42・49（Fig.19）

ＳＣ－49　調査区の南東隅から検出されたが、東側と南側は段落ちしていることからその規模は不明である。ただ壁溝が西側部分にみられ、柱穴も0.6m、深さ0.35mであることからこの柱穴が4本柱の一つと考えられる。出土遺物は図示できるものはないが、弥生時代後期の範疇に入る土器である。

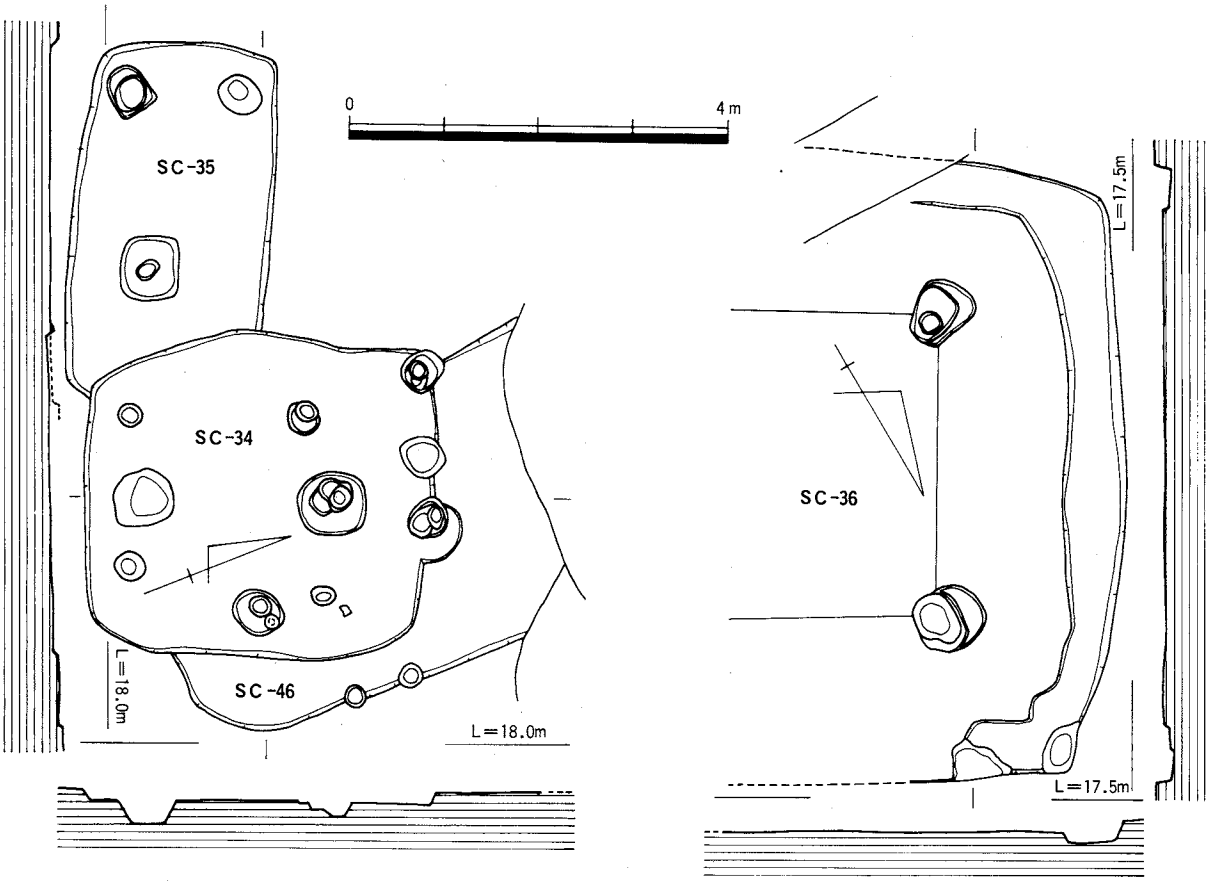


Fig. 21　Ⅱ区SC-34～36・46平面・断面図（縮尺1/80）

ＳＣ－40・42は切り合い関係にある。しかしながらＳＣ－40の下にＳＣ－42があり、切り合いではなく上下関係である。**ＳＣ－40**　4.2×1.8mの長方形プランを呈し、深さ0.2mを測る。ただ柱穴がなく住居址としての可能性は少ない。**ＳＣ－42**　ＳＣ－40と同様に3.9×1.72m、深さ0.2mの長方形プランを呈するが、これも柱穴がない。

ＳＣ－29・37・43（Fig.20）

ＳＣ－29・37の上に古墳時代の住居址（ＳＣ－1010）がある。調査区の南西部隅に位置し、ＳＢ－09との切り合い関係もある。**ＳＣ－29**　ＳＣ－37・43に切られ遺存状態はきわめて悪い。**ＳＣ－37**　古墳時代の住居址によって切られ、東側は削平されて不明である。5.0×5.1＋αの、深さ0.14m程度と考えられる。

ＳＣ－43　4.95×3.0m、深さ0.14mを測る長方形プランを呈するが、主柱穴がない。

ＳＣ－34～36・46（Fig.21　PL.4）

ＳＣ－34・35・46は、南東隅、ＳＢ－09との切り合い関係がある。ＳＣ－34が一番新しく、ＳＣ－46・35がＳＣ－34から切られている。**ＳＣ－34**　3.73×3.42m、深さ0.12mの正方形プランを有する弥生時代後期の住居址である。主柱穴は４本柱と考えられる。**ＳＣ－46**　大部分をＳＣ－34によって切られ詳細は不明。ＳＣ－35は4.0×3.0m、深さ0.1mの長方形プランを呈する。柱穴は４本柱と考えられる。出土遺物から弥生時代中期初頭に位置付けられる。

ＳＣ－36　ＳＣ－34の南側に位置する。著しく削平を受けていることから壁溝しか遺存しない。6.64×４＋αm、深さ0.1mで４本柱と思われる。出土土器から弥生時代後期中葉の時期である。

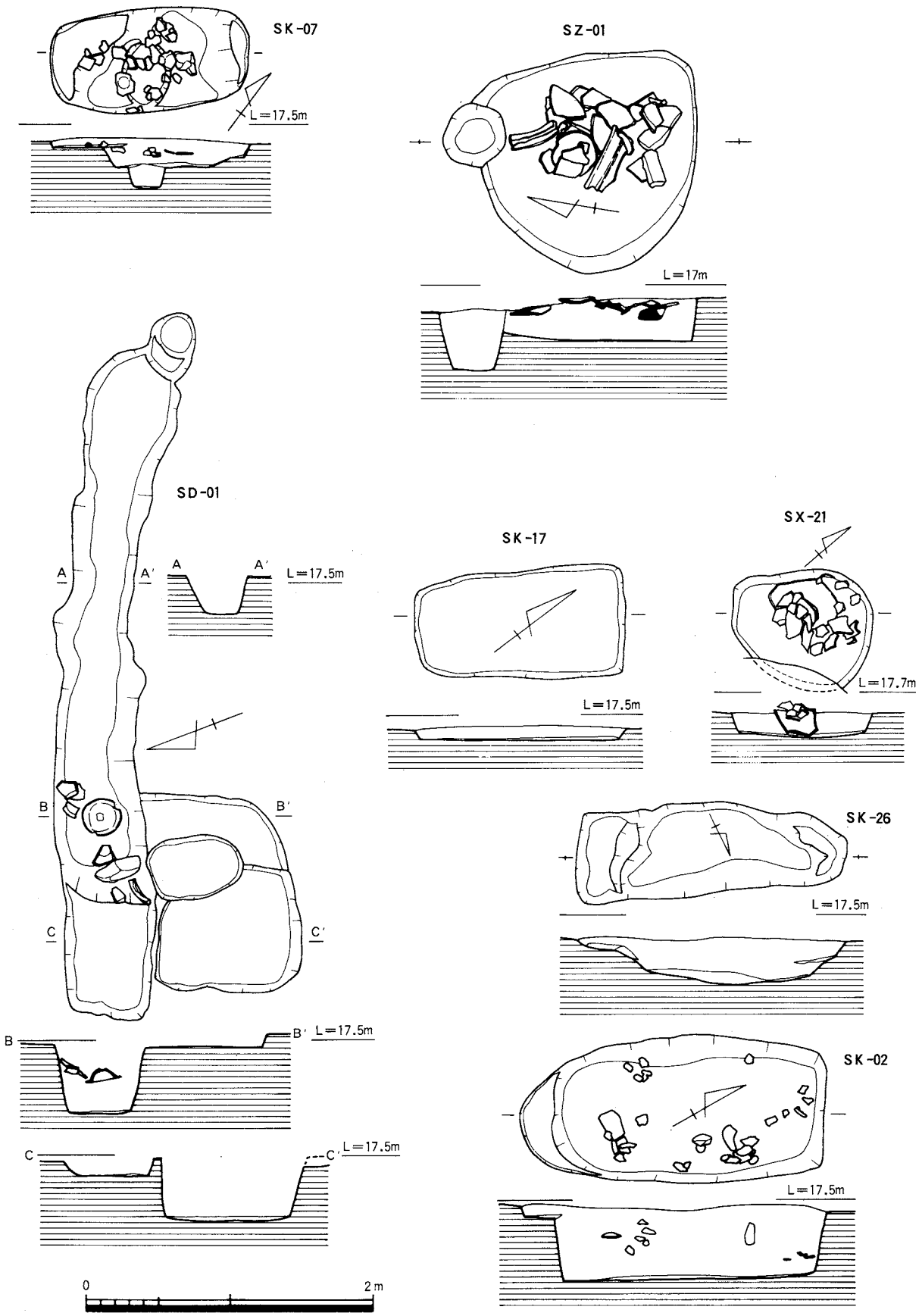


Fig. 22　Ⅱ区SK-02・07・17・26、SD-01、SX-21、SZ-01平面・断面図（縮尺1/40）

2．溝状遺構（ＳＤ－01・02　PL.12）

Ⅱ区の弥生時代生活遺構の内、溝の検出は壁溝を除いて二条である。**ＳＤ－01**　調査区南側ＳＣ－25～27・39・40・41に囲まれた区域にある。南南東から北北西に向っていたと思われるが、削平されたのか、これで完結するのかは不明である。一時は壁溝とも考えたが、その内部に建物の柱穴が検出できなかったことから溝とした。**ＳＤ－02**　調査区の北側（この地区は削平されず遺構面がそのまま残るとの協議であったため調査は行なわない方針であったが、試掘調査の結果、甕棺墓が数基検出されたため、甕棺墓に関しては調査を行なうこととなった。このため遺構の広がりを確認することと、甕棺墓の検出のため、全区域の表土排除作業を行なった。その結果、甕棺墓35基、住居址と確認できる遺構60軒以上、土壙、柱穴多数、溝一条を検出した。）に東西に延びる溝を検出した。西側はＳＣ－06に切られ、中央部附近で弥生時代前期末の甕棺に切られる。全長（確認できた段階）25ｍである。

ＳＤ－01（Fig.22　PL.12）

ＳＤ－01は長さ4.75ｍ、幅1.65ｍ、深さ0.56ｍであるが、西側に土器群が出土した。Fig.29－22001～22006までの土器である。時期的に弥生時代中期前葉に位置付けられる遺物であり、ＳＤ－01もこの時期と考えてよい。

3．土　壙（Fig.22　PL.11）

土壙は、Ⅱ区全体で50基検出したが、その内弥生時代の遺物を出土した４基を図示した。

ＳＫ－07　ＳＣ－23の南西側に位置し、主軸をＮ－54°－Ｅにとる。長軸1.37ｍ、幅0.73ｍ、深さ0.4ｍの隅丸長方形を呈する。三段の堀り方で中心部に土壙状遺構(0.3×0.5×0.15ｍ）がある。多量の土器を出土したが、土壙状遺構より上に位置することと、また、中位の状態で出土していることから埋土の段階で混入したと思われる。この土壙状遺構が何を意味するか不明である。

出土遺物は図示しなかったが、３個体分の土器で、甕２、壺１である。時期は弥生時代中期中葉の土器群である。ＳＫ－07もこの時期と考えてよい。

ＳＫ－17　調査区の中央部、ＳＣ－20・34・46・32・38の中心部に位置し、ＳＫ－18を切る。長軸1.47ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.2ｍの長方形を呈する。主軸をＮ－37°－Ｗにとる。出土遺物は少量であったが、弥生時代後期前半の甕形土器口縁部が出土した。

ＳＫ－26　ＳＣ－27の南側から検出された遺構で、長さ1.38ｍ、幅0.66ｍ、深さ0.32ｍである。

主軸をＮ－66°－Ｗにとる不整な土壙である。両側に段を有し、中央部はやや凹む形状を呈する。出土遺物は少量であるが、時期は弥生時代後期に属する土器である。

ＳＫ－02　調査区南側、ＳＣ－39の南に位置する。主軸をＮ－30°－Ｅにとる長さ2.13ｍ、幅1.05ｍ、深さ0.5ｍの土壙である。南側に浅い堀り方を持つが、遺構的には別かもしれない。土壙はほぼ垂直に切られている。木棺墓の可能性も考え調査を行なったが、その痕跡はなかった。土器も出土したが、床面からの出土ではなく中位上からの出土であった。土器から弥生時代中期中葉に位置付けられる。

ＳＸ－21

ＳＣ－35の北側に位置し、主軸をＮ－40°－Ｅにとり、長軸0.97ｍ、短軸0.84ｍ、深さ0.15ｍの円形柱穴状遺構である。南側は他の柱穴によって切られている。北側に甕形土器の口縁部が出土していた。この土器から時期は、弥生時代中期前半に位置付けられる。

ＳＺ－01　北側調査区から検出した遺構で、当初は小型甕棺墓として調査した遺構である。主軸をＮ－９°－Ｗにとり、長さ0.88ｍ、幅0.74ｍ、深さ0.28ｍの大型土壙状遺構である。甕形土器の口縁部が出土した。この土器から弥生時代前期末に位置付けられる。

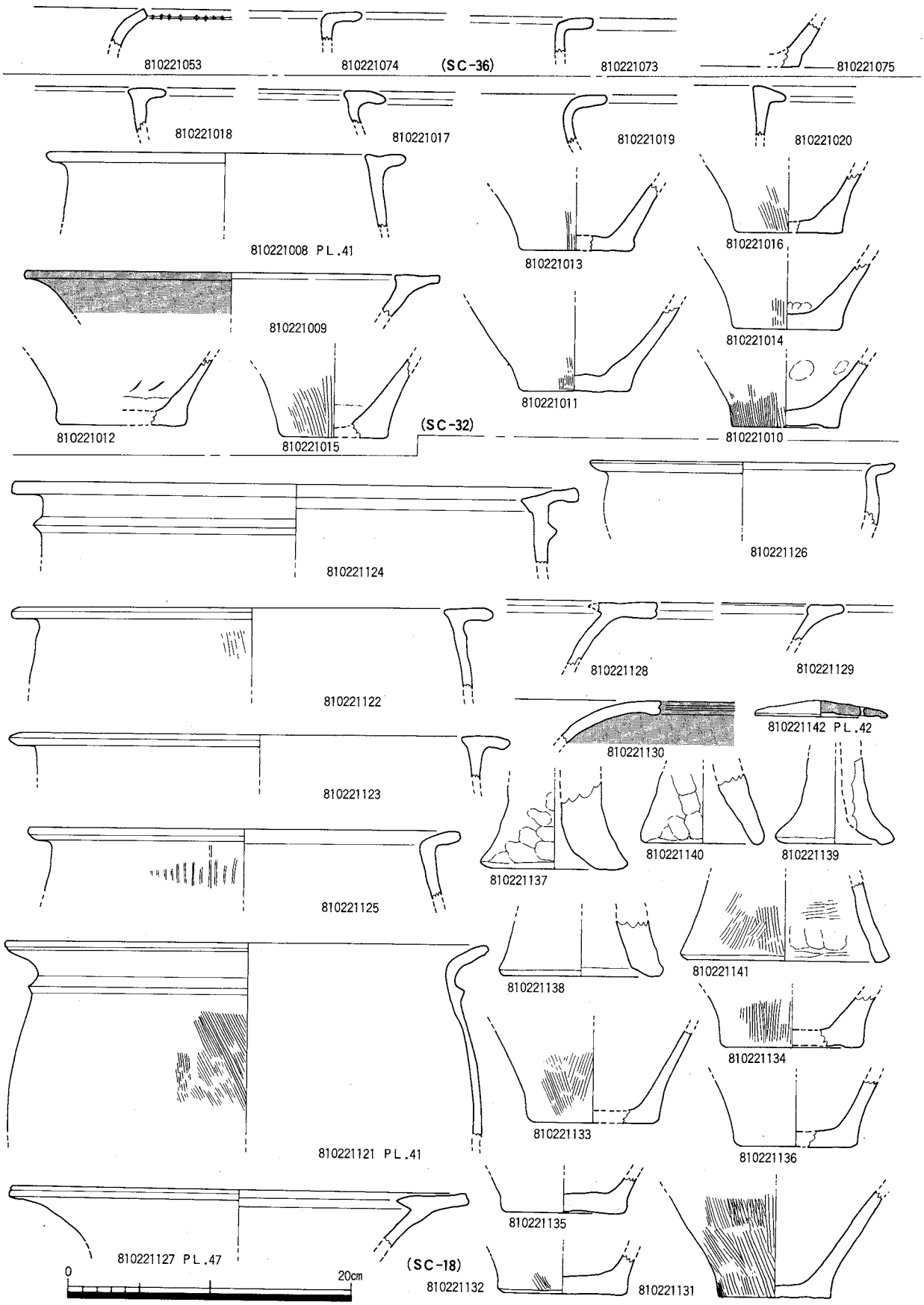


Fig. 23　Ⅱ区SC-18・32・36出土土器（縮尺1/4）

4．出土遺物

Ⅱ区から出土した遺物は、土器、石器である。住居址は56軒（内17軒は北側調査区からでプラン確認にとどまった）検出したが、内35軒から遺物が出土した。この内、19軒の出土遺物を図示した。石器は35軒の内12軒から出土した。この内、70点を図示した。また、石器の中で弥生時代の産物と考えられるもの、住居址精査中に出土したもの等を図示した。生活遺構の内、溝、土壙、意味不明遺構等から弥生時代の遺物が出土している。この内ＳＫ－02とＳＤ－01の遺物を図示した。

①　土器

住居址出土土器（Fig.23～28　PL.41～49）

ＳＣ－36出土土器（Fig.23－21053、21073～21075）

４点を図示した。21053は如意形口縁を呈する甕形土器である。外面口辺部の稜に刻目を施す。21073、74は逆「Ｌ」字形を呈する口辺部である。21075は壺形土器の底部である。

ＳＣ－32出土土器（Fig.23－21008～21020）

ＳＣ－32からは６点の口辺部と７点の底部を図示した。21008は鋤形口縁を呈する甕形土器である。口縁部平坦面がやや凹む。口径25.4cmを測る。21017・18も鋤形口縁を呈する甕形土器口辺部である。21019は如意形に近い口縁形態を持ち、頸部から急激に外反して上部で平坦部を造り、口縁端部は丸くおさめている。21009は鋤形口縁部を持つ壺形土器である。端部の張り出しは少ないが、丸みを持たず角ばった造りである。口径29.4cmを測る。底部の７点の内、21010がやや上底となるタイプである。外面はすべて刷毛目を丁寧に施している。

ＳＣ－18出土土器（Fig.23－21121～21142）

ＳＣ－18出土の土器は22点を図示した。切り合い関係から最後に造られた住居址である。住居址の遺存状態が良いため出土遺物は豊富である。甕、壺、器台、小形壺形土器の蓋等が出土した。

甕形土器　器形の異なる６点を図示した。21122は鋤形口縁を呈するが、シャープさに欠け、端部も丸く仕上げている。外面は刷毛目調整を施すが、器面が荒れている。口径34cmを測る。21123は22と同じ鋤形口縁を呈する甕形土器の口辺部である。22とくらべ造りがシャープである。口径35.8cm。21124は嘴状に尖がる口縁端部が内に入り、口唇部は外反する形態をとる鋤形口縁を呈する。

口縁下に一条の三角突帯を巡らす。端部の造りはシャープで、口径40cmを測る。21121・21125・21126は「く」字状口縁を呈する甕形土器である。21121は口縁下に一条の三角突帯を巡らし、外面には、丁寧な斜目刷毛目を施す。口径34.2cm。21125は外面に荒しい刷毛目調整を施す。口径30.6cm。21126は口縁部を直角にまげ、端部を丸くおさめるもので、口径21.8cmを測る。

壺形土器　４点を図示した。鋤形口縁を有する３点と如意形口縁を持つものに分けられる。21127は嘴部が鋭利で、造りも丁寧である。口径32.6cmを測る。21128はややシャープさに欠け丸みを持つ。21130は如意形に開く口辺部で丹塗土器である。

蓋　21142は小形壺土器の蓋である。４個の小孔を有する。

器台　５点図示した。肉厚の21137・38・40と薄手で内湾しながら立上る21141、一度内に入り立上る21139に分けられる。

底部　６点を図示した。甕形土器の底部であるが、底部が上底の21134以外は平底である。底部端部の追りがシャープな21131は造りも丁寧である。他はやや丸みを持つ端部を呈し、刷毛目も雑で施すものと施さないものがある。時期差が考えられる。

ＳＣ－17出土土器（Fig.24－21143～21162）

ＳＣ－17からは甕形土器、壺形土器、高坏、器台が出土した。

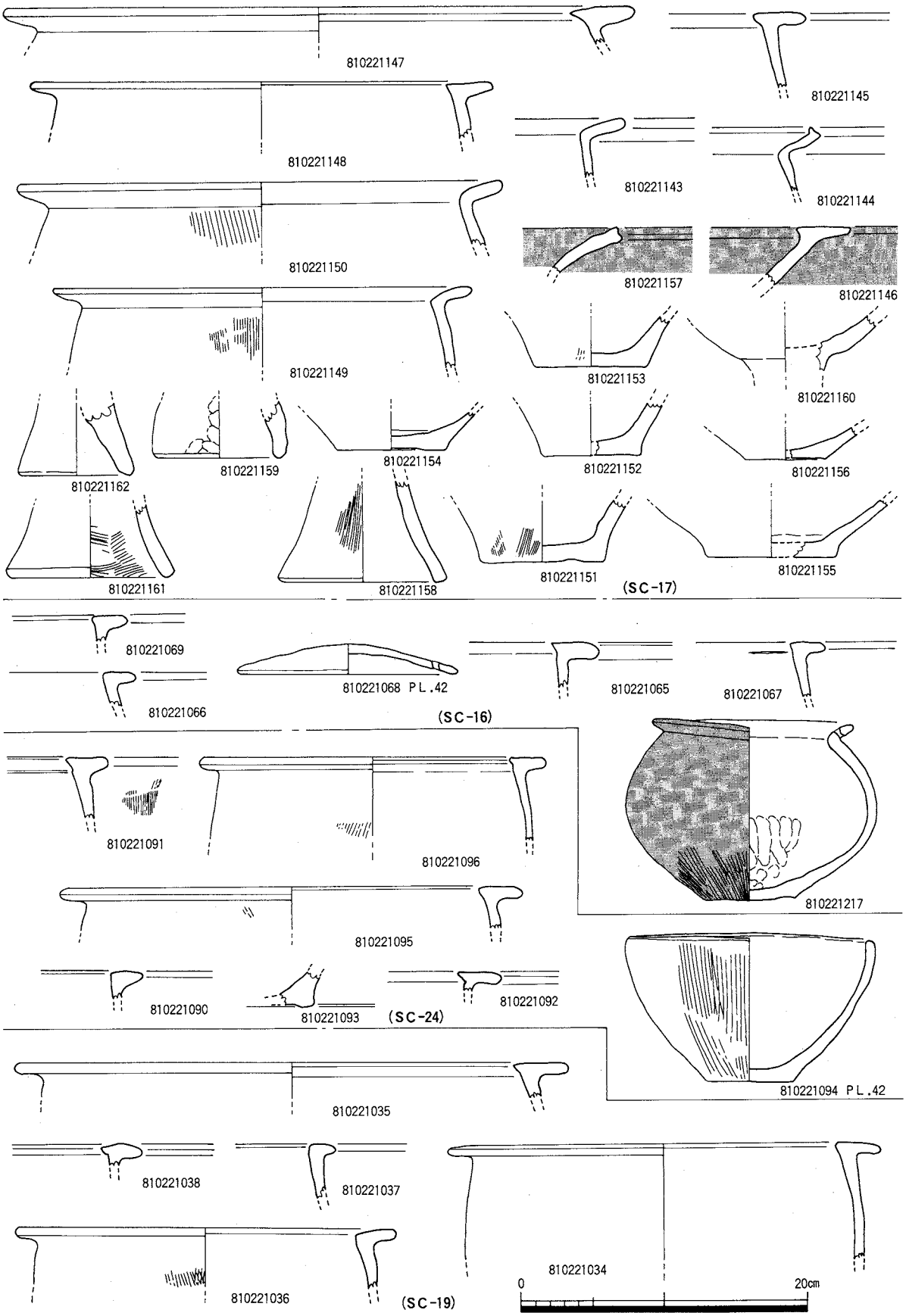


Fig. 24　Ⅱ区SC-16・17・19・24出土土器（縮尺1/4）

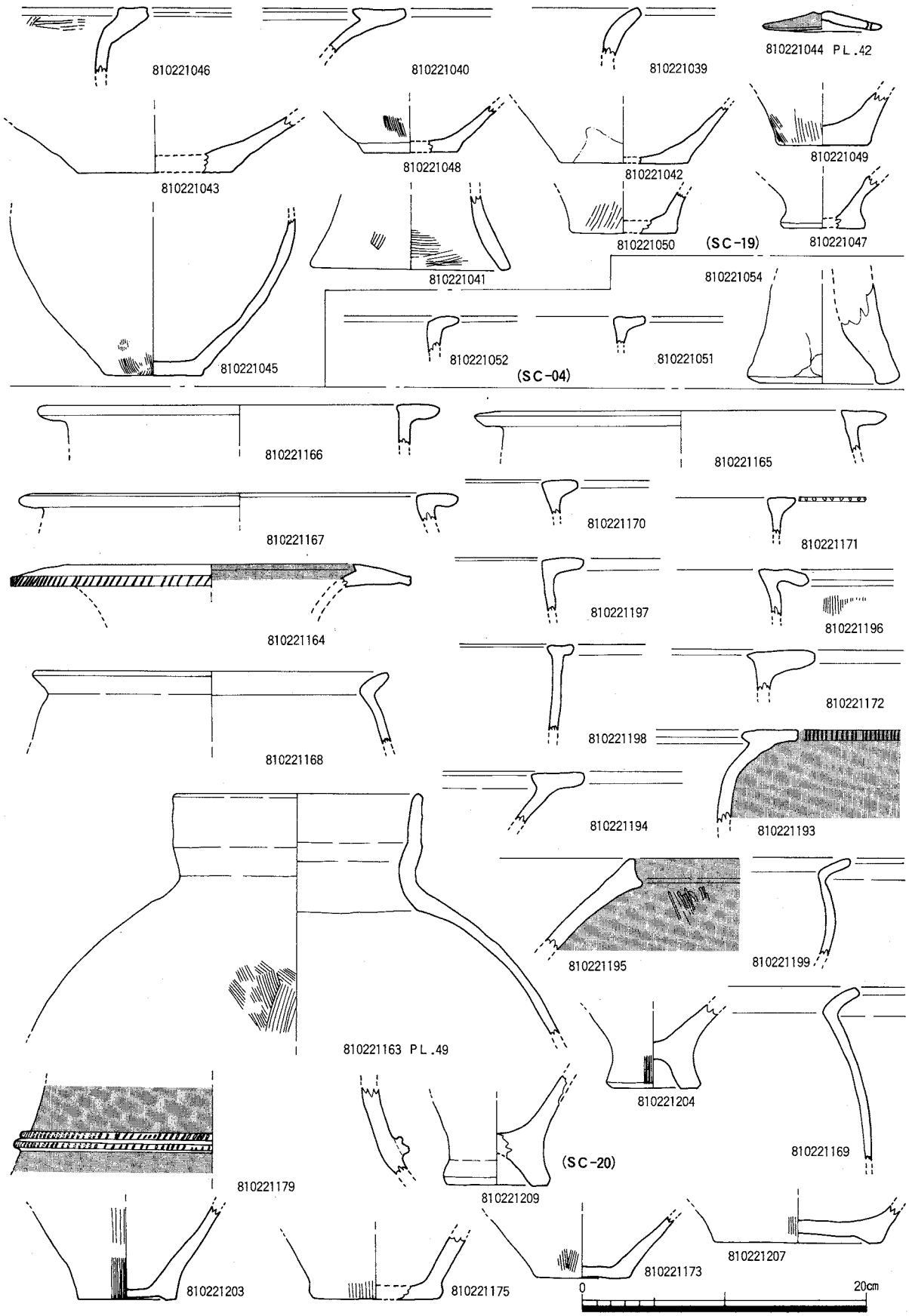


Fig. 25　Ⅱ区SC-04・19・20出土土器（縮尺1/4）

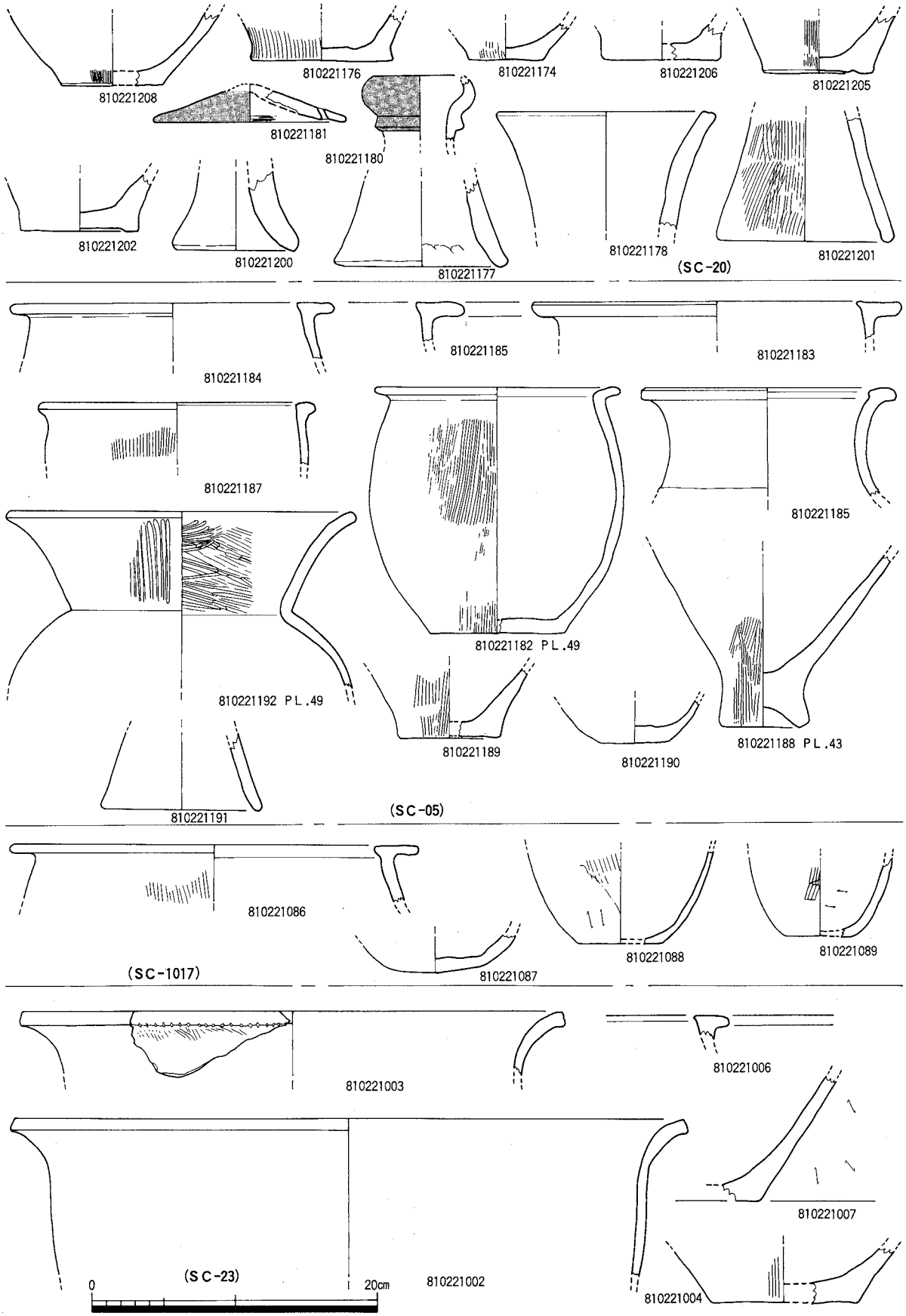


Fig. 26　Ⅱ区SC-05・20・23・1017出土土器（縮尺1/4）

甕形土器　形態的に三つのタイプに分けられる。鋤形口縁を呈する21147・21148・21145と「く」字状口縁を呈する21149・21150がある。21147は端部が内に入るタイプで、他の二点はシャープな造りの口縁形態を呈する。21147は口径44cm、21148は32.4cmを測る。「く」字状口縁の21149は口径29.4cm、21150は33.8cmを呈する。21144は基本的には「く」字状口縁タイプに属するが、口唇部で上につまみあげ嘴状を呈する。

壺形土器　如意形を呈する21157と鋤形口縁を呈する21146がある。

高坏　高坏の胴部から脚部にかけての破片が出土している。

器台　器台は４点を図示した。厚手の21162、21159と薄手で丁寧な造りの21158、21161がある。

底部　底部は、甕形土器底部21151～21153の３点、壺形土器底部21154～21156の３点図示した。底面端部の造りは丁寧でシャープである。

ＳＣ－16出土土器（Fig.24－21065～21068・21217）

ＳＣ－16からは出土した土器のうち５点を図示した。

21065～21067は鋤形口縁を呈する21065と、逆「Ｌ」字状口縁と鋤形口縁の中間タイプ21067、逆「Ｌ」字状口縁を呈する21066の３タイプに分けられる。21217は有蓋壺形土器で、21068とセットになるものである。口径13.8cm、器高12.8cmを測り、21168の裾径15.4cmと合う。

ＳＣ－24出土の土器（Fig.24－21090～21096）

ＳＣ－24から出土した土器のうち計測可能な７点を図示した。

甕形土器　甕形土器の口縁部５点と底部１点である。口縁形態で３つに分けられる。21090は口唇部を横につまみ出したもの、21091・21095は逆「Ｌ」字状口縁と鋤形口縁の中間タイプ（わずかに引き出す）と鋤形口縁タイプ21092・21096がある。底部はやや上底になるタイプであろう。21095の口径32.6cm、21096は24.2cmである。

鉢形土器　床面から完形で出土した。口径16.8cm、器高10.6cmで外面は荒い刷毛目を施こしている。

ＳＣ－19出土土器（Fig.24－21034～21037、Fig.25－21039～21048・21050）

ＳＣ－19から出土した土器の内17点を図示した。甕形土器、壺形土器、器台、蓋等が出土した。甕形土器は平坦口縁（21034・21036・21037）と鋤形口縁（21035・21038）がある。壺形土器には鋤形口縁（21040）と如意形口縁（21039）がある。小形壺形土器の蓋（21044）も出土した。底部も７点図示した。甕形土器の底部（21045・21047・21049・21050）と壺形土器（21042・21043・21048）の３点がある。底部の端部はシャープである。

ＳＣ－04出土の土器（Fig.25－21051・21052・21054）

甕形土器（平坦口縁）と器台を図示した。

ＳＣ－20出土土器（Fig.25・26－21163～21181・21193～21209）

ＳＣ－20は切り合い関係から一番新しい住居址であるが、上部に古墳時代の遺構あり、それによって切られているが、それにもかかわらず遺存状態も良く多くの土器を出土した。その内36点を図示したが二時期に分けられる。163・179・181～189が上面出土（ＳＣ－1017）の土器と思われる。

甕形土器　平坦口縁（21166・167・170・171・197・198）と鋤形口縁（21165、196、172、186）、「く」字状口縁（21168・169・199）がある。この内口径が復元できるものは、165が28.6cm、166が28cm、167が30.6cm、186が28.9cm、168が25cmである。

壺形土器　壺形土器には中期を代表する袋状口縁を呈する180や164の鋤形口縁、195の如意形口縁がある。このほかに163の様に口縁部が直立するものも含まれる。住居址が中期の時期であることからこの163は上層遺物の混入と思われる。このほか出土遺物には甕形土器の底部、壺形土器の底部、

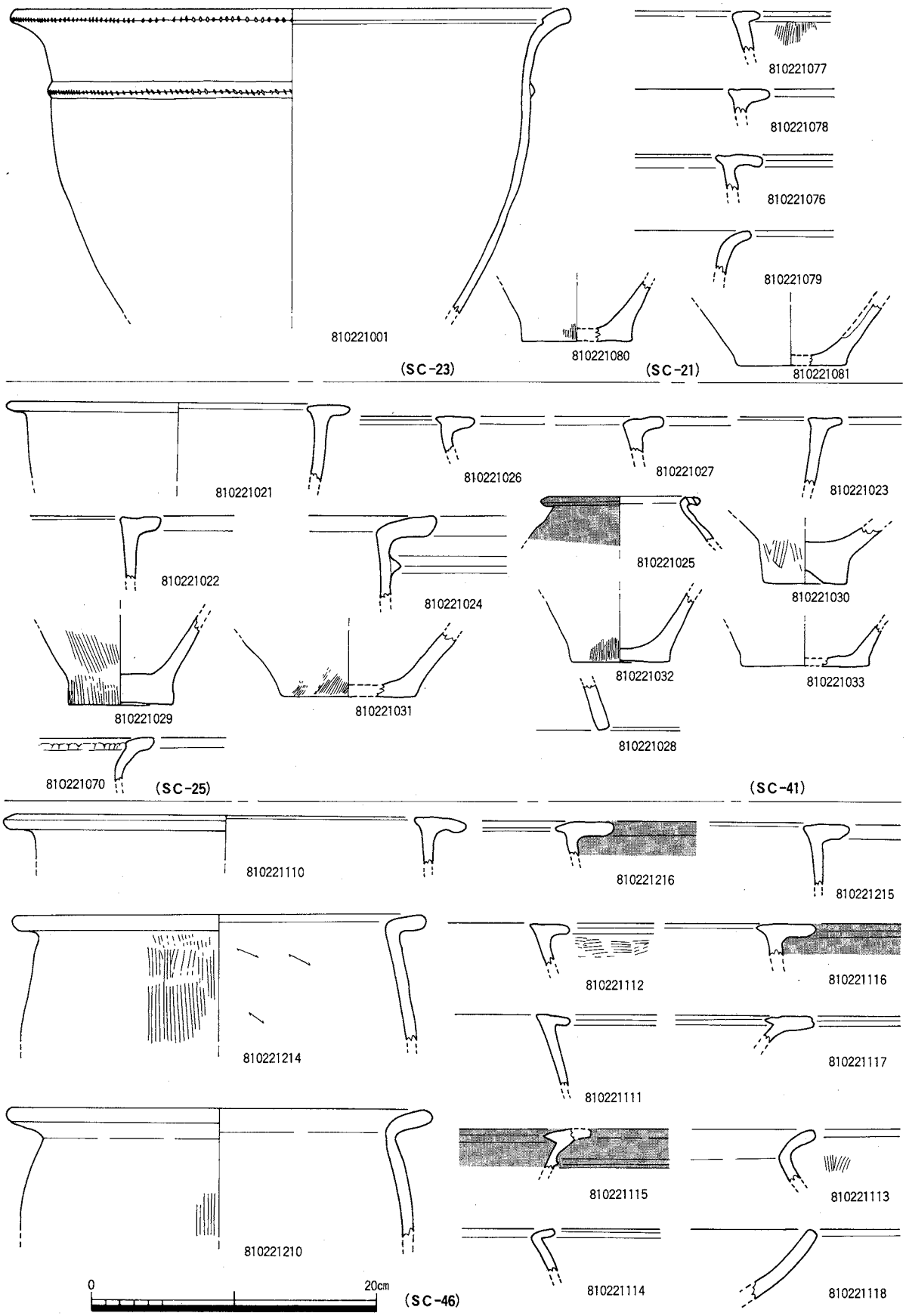


Fig. 27　Ⅱ区SC-21・23・25・41・46出土土器（縮尺1/4）

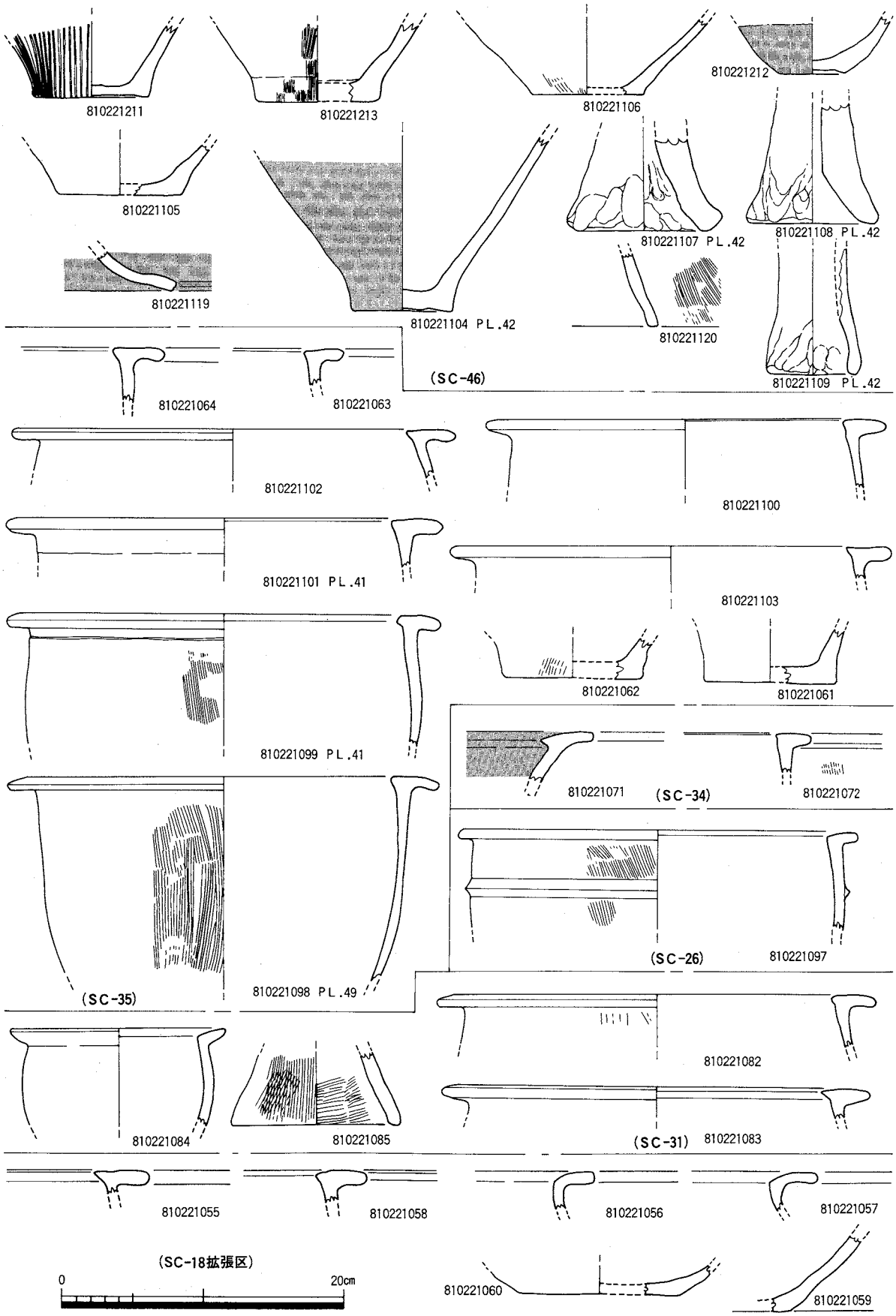


Fig. 28　Ⅱ区SC-18拡張区・26・31・34・35・46出土土器（縮尺1/4）

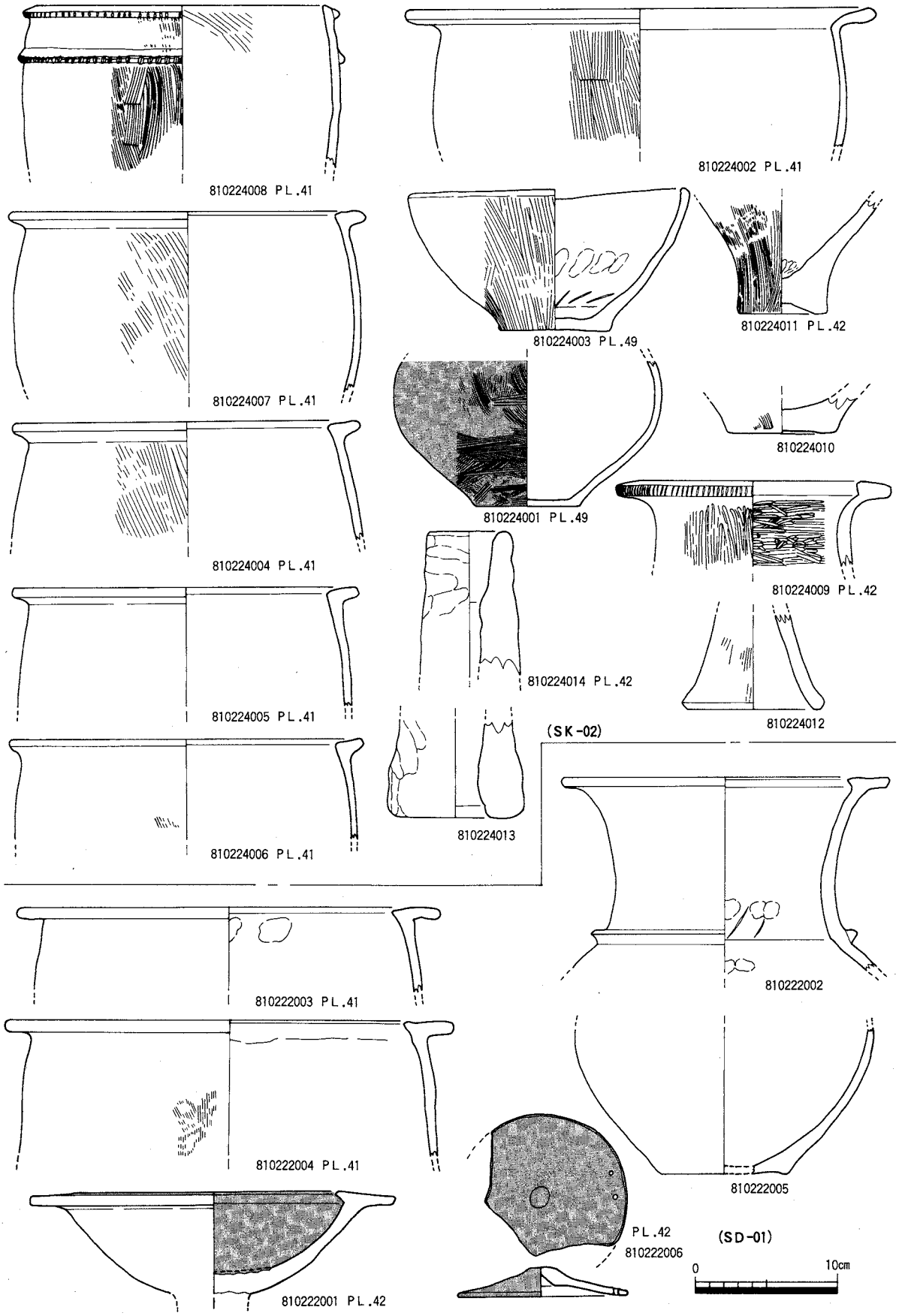


Fig. 29　Ⅱ区SK-02・SD-01出土土器（縮尺1/4）

小型壺形土器の蓋、器台等が出土した。

ＳＣ－05出土土器（Fig.26、21183～21192）

ＳＣ－05からは甕形土器、壺形土器、器台等が出土した。甕形土器は平坦口縁（187）と鋤形口縁（83～85）、「く」字状口縁182がある。壺形土器は頸部のしまる如意形口縁（192）とつまみ出しの小さな鋤形口縁の186がある。このほかに器台（191）や甕、壺形土器の底部がある。

ＳＣ－23出土土器（Fig.26－21002～21004・21006・21007・Fig.27－21001）

ＳＣ－23からは床面一括土器だけである。甕形土器は、如意形口縁（２・３）と平坦口縁（６）がある。３は口唇部に刻目を入れる。４・７は甕形土器の底部である。２の口径47.4cm、３が38.2cm。１は如意形に開き口唇部と胴部に三角突帯を巡らせ刻目を施す。口径39.4cmを測る。

ＳＣ－21出土土器（Fig.27－221076・221081）

ＳＣ－21からは甕形土器片が出土した。古墳時代の遺構によって切られているため遺存度は悪い。甕形土器は鋤形口縁と平坦口縁、如意形口縁がある。

ＳＣ－41出土土器（Fig.27－221021～221033）

ＳＣ－41はＳＣ－21・23に切られているにもかかわらず出土土器は多い。口縁形態は鋤形口縁がほとんどで、24が平坦口縁である。小形壺形土器、器台等が出土した。

ＳＣ－46出土土器（Fig.27・28－22104～22120・22210・22214～22216）

甕形土器は鋤形口縁（110・116・216）と逆「Ｌ」字状口縁（111・112・214・215）、「く」字状口縁（113・114・210）がある。壺形土器は鋤形口縁を呈し、他はない。このほかに器台、高坏脚部が出土した。

ＳＣ－26出土土器（Fig.28－21097）

ＳＣ－26からは甕形土器が１点出土した。床面張付き土器である。口縁形態は逆「Ｌ」字状口縁を呈し、胴部に三角突帯を一条巡らす。口径29cmを測る。

ＳＣ－35出土土器（Fig.28－21061～21064・21098～21103）

ＳＣ－35は約半分程古墳時代の土壙によって撹乱されているが、出土遺物は多い。甕形土器は平坦口縁（63・98・100・101）と鋤形口縁（102・103・64・99）とに分けられる。復元口径は98が30.2cm、99が30.6cm、100が28cm、101が30.6cm、102が31cmを測る。

ＳＣ－18拡張区出土土器（Fig.28－21055～21060）

ＳＣ－18拡張区の遺物量は少なく６点であった。甕形土器の口縁部４点と壺形土器底部２点である。甕形土器は鋤形口縁（55・58）と平坦口縁（56・57）に分けられる。

ＳＣ－31出土土器（Fig.28－221082～221085）

ＳＣ－31から出土した土器の内、甕形土器３、器台１を図示した。甕形土器は鋤形口縁（82、83）と「く」字状口縁（84）に分けられる。土器の時期とは異なり、弥生時代後期の範疇に入る。

ＳＫ－02出土土器（Fig.29－24001～24124）

ＳＫ－02は多量の土器が出土した。甕形土器は平坦口縁（４～７）と「く」字状口縁（２）、口縁貼付（８）に分けられる。８は口縁部と胴部に一条の突帯を巡らし、その部分に刻目を施す。壺形土器は鋤形口縁を呈する９がある。このほかに鉢形土器（３）、器台（12～14）が出土した。

ＳＤ－01出土土器（Fig.29－22001～22006）

ＳＤ－01からは鋤形口縁を有する2003、2004が出土した。壺形土器、高坏も鋤形口縁である。また小型壺形土器の蓋も出土した。

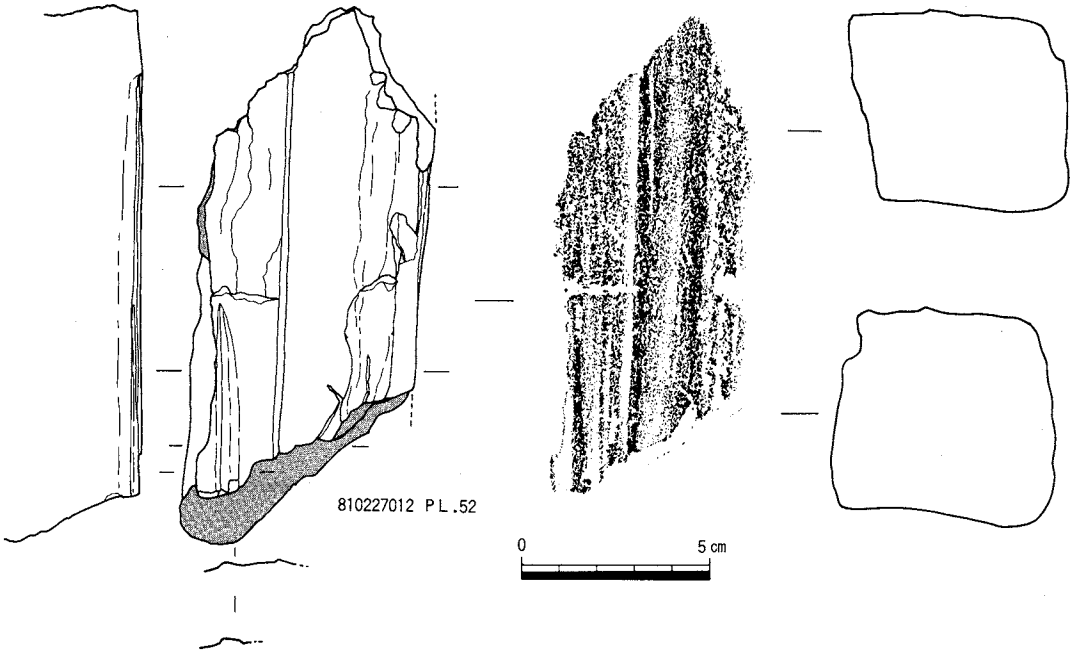


Fig. 30　銅予鋳型実測図（縮尺1/2）

2．石　器 (Fig.30～35、PL.50～52)

Ⅱ区の遺構から出土した石器は、2,000点である。この内、弥生時代の住居址、土壙、表採、遺構検出面を精査した段階で出土した石器の内、弥生時代の所産と考えられるものを図示した。

石鏃・剥片 (Fig.31　PL.51)

4点図示した。いずれも縄文時代に見られる石鏃である。**27001**　黒耀石製の剥片鏃で、側辺部に二次加工を加えている。素材の剥片は、剥離方向が一方向である。**27002**　1と同じく剥片鏃である。身幅の狭い形状を呈するが、厚みのある剥片鏃である。表面中央部に研磨の痕跡が認められる。**27003**　サヌカイトの小型石鏃である。左脚部を欠損するが、全体の剥離は両側辺から丁寧におこなわれ全体に風化が進んでいる。**27004**　小型鏃で全長3.5cmを測り、通常の石鏃の1/2程度しかない。

27005　両側辺を使用した剥片である。1はPit.1427、2はＳＣ－41床面、3はＳＣ－18床面、4がＳＣ－19、5がＳＣ－18床面から出土した。

磨製石剣 (Fig.31－27006～27010　PL.50)

27006から27010の5点が磨製石剣である。**27006**　石剣の刃先部分で、断面菱形を呈する。丁寧に研磨されているが、表面剥落のため研磨痕は不明である。現存長5.9cm、身幅3.1cm、厚さ0.9cmを測る。ＳＣ－24床面より出土した。石材は頁岩と思われる。**27007**　石剣の刃先部分を欠損する。石材は6と同じ頁岩であるため表面剥落し、研磨痕跡は不明である。両面から刃部を研磨し、断面菱形を形成する。基部の抉入は二段形成され、刃部との境としている。ＳＸ－26床面近くから出土している。**27008**　凝灰岩製の石剣刃先である。裏面は剥落したと思われ、再度刃部のみに研磨を施し仕上げている。表面は、剥落が著しく研磨の痕跡は認められない。Pit.－161から出土した。**27009**　厚手の断面を有する刃部中位のみで、刃先、基部は欠損している。研磨は丁寧に施され、特に刃部は丁寧である。現存長7cm、厚さ1.5cmを測る。ＳＣ－17の精査中に出土した。石材は頁岩である。**27010**　石剣の剥片である。裏面に剥離痕が残っている。表面は研磨痕が残り、断面形が三角形を呈するところから石剣とした。ＳＣ－16より出土した。頁岩製。

石戈（Fig.31－27011、PL.50）

ＳＣ－24の床面近くから出土した蛇紋岩製の石戈である。先端部は欠損しているためその全貌は知りえないが、全体に火を受け、かなり脆くなっている。研磨は丁寧で横方向を主に行なっている。

銅矛鋳型（Fig.30－27012、PL.52）

遺構精査中（ＳＣ－36・37附近）に発見されたものである。武器鋳型で、樋先端部の上下部分の右側が残り、ほぼ中軸線に沿って左側が折損した破片。鋳型の上下両側面と左側面は折れたままだが、鋳型面と右側面と裏面は砥石に転用されて擦り減っている。鋳型面の右側面側の表面は砥石転用後に風化したらしい。型の部分は樋先端より上部に鋳造により生じたとみられる細かいヒビが入り、残存下端部にはなんらかの付着物がある。鋳型の現存の長さは14.5cm、幅6.8cm、厚さ5.9cm。鋳型横断面は長方形である。型は樋先端部分が長さ5.2cm、鋒部側が長さ6.2cm残り、残存全長11.4cmである。

型の側縁は、鋳造に使用したため鋳型面に対し丸味を帯びるが、砥石転用にもかかわらず比較的明瞭に残り、側縁（刃部）の彫り込み下端の線は下側の３cmほど除きはっきりしている。

樋の彫り込み下端の線は、縁側は先端を除き明瞭だが、縁側の先端と脊側は不明瞭である。樋の上部の稜線は脊側下部は明瞭だが、それ以外は丸味を帯び不明瞭である。脊部分は断面に見えるように平坦で中軸線側へ深くなる。残存部分に見えないが、中軸線上に鎬を彫り込んでいるようだ。

型部分は鋳造の際に熱をうけて黒く変色している。左側折損面を見ると、変色は深さ３～４mmに及んでいる。

彫り込まれた型は一見して細形型式でないことがわかる。型の特徴は、左右の樋が先端で合わさらず、樋が中軸線にほぼ平行していることである。日本出土の銅戈は、細形の一部を除いて左右の樋先端が合わさるから、この型は銅戈ではない。また型の側縁が鋒方向へ広がっているので銅剣ではない。これらの特徴からこの鋳型が銅矛鋳型で、中広形以降であることが明らかである。

この矛型の推定身幅は、樋先端部分で4.6cm前後、残存部下端で4.2cm前後（身の最小幅部分か）、残存部上端で５cm前後である。左右の樋の先端部幅は1.2cm前後、残存下端での幅は２cm前後と推定される。こうした数値から中広形と判断できる。岩永分類の中広形ｂ$_1$類に相当しようか。(注)その中でも細い方であろう。ちなみに、銅矛鋳型の厚みは、中細形が５cm以下、中広形が８cm以下、広形が７cm以上10.6cm以下だから、この点も矛型の型式と矛盾しない。（後藤直）

（注）岩永省三　1986　矛形祭器　弥生文化の研究６

磨製石器（Fig.31－27013、Fig.32－27024・27026・27031）

27013　磨製石鏃とも考えたが、基部の部位ではない点と、石材が凝灰岩である点、断面が菱形を呈していないことから磨製石器としておく。表面剝落のため研磨方向はさだかではないが、一応施されている。両側辺に剝離痕が認められることから、製作途中の可能性がある。ＳＣ－18より出土。

27024　一見石包丁とも考えたが、穿孔が大きく石包丁の形状とは異なりを示し、半割されていることもあって磨製石器としておく。装飾具の可能性が高い。

27026・27031　頁岩製の磨製石器である。恐らく柱状石斧の剝片と思われる。27026は、裏面が剝離されている。表面は研磨を施こしている。ＳＣ－17から出土。27031も裏面が剝離され、本来の形態は不明である。表面は部分的に研磨されている。ＳＣ－18から出土。

石包丁（Fig.31－27014～27018、Fig.32－27019～27022・27025　PL.50）

27014～27016は石包丁の一部である。**27017**　両端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形の輝緑凝灰岩製石包丁である。刃部は丁寧な研磨によって造り出されており、断面形から右利用と考えられる。

27018・27025　凝灰岩製の板材であるが周辺部に剝離痕が認められ、石包丁の刃部形成の準備段階

の剝離を施している。恐らく石包丁の未製品であろう。**27019**　凝灰岩製の石包丁の未製品で半割している。裏面に穿孔途中の孔があるが、途中で破棄している。研磨は全く施されておらず、半割したために破棄したものであろう。**27020～27022**　凝灰岩製の石包丁破片である。

27014・27016はＳＣ－18から出土。27015はPit.－335、27017はＳＣ－19、27019・27020はＳＣ－18から、27021はＳＣ－19、27022はＳＣ－20から出土した。27018はPit.－453、27025はＳＣ－26から出土。

石　鎌（Fig.32－27023、PL.50）

27023　凝灰岩製の石鎌である。ＳＣ－18から出土した。基部が欠損する小型の部類で、先端部のみが現存する。研磨は全く施こされておらず、刃部も加工のみである。

柱状石斧（Fig.32－27027～27030・27032～27035）

27027　基部が欠損しているが、小型柱状片刃石斧である。頁岩製で全面に研磨を施す。刃部には、使用時による剝離痕が認められる。ＳＣ－24遺構精査中に出土した。**27028**　刃部・基部とも研磨され尖がる形状を呈する。刃部は表面からの剝離が大きく、裏面は砥き出し程度である。先端部はＶ字形に造り出されている柱状片刃石斧である。ＳＣ－23から出土した。

27029　小型抉入柱状石斧（刃部が欠損しているため片刃石斧か否かは不明）である。わずかに抉入部が認められることから小型抉入柱状石斧とした。頁岩製でＳＸ－36から出土。**27030**　頁岩製の柱状片刃石斧である。基部が欠損しているが、全面に丁寧な研磨を施し、刃部に刃こぼれが認められることから使用時に欠損したと思われる。身幅が３㎝と広い方である。ＳＫ－21から出土した。

27032　これも柱状片刃石斧片と思われるが、刃部と裏面が欠損しているため定かでない。表面は平坦面を有し研磨を施しているが、右側辺部は加工痕が認められる。頁岩製。

27033　頁岩製のＳＣ－18から出土した柱状石斧の未製品である。形状から小型抉入石斧の可能性がある。**27034**　裏面、刃部が欠損しているため本来の形状は定かでない。研磨、石材から柱状石斧の可能性が高い。頁岩製でＳＣ－17から出土した。**27035**　これも柱状石斧の素材剝片と考えられるもので、頁岩製でＳＣ－17から出土した。

磨製石斧（Fig.33・34－27037～27047・27072　PL.51）

遺構から出土した磨製石斧が23点、遺構精査中に出土した磨製石斧が13点ある。この内遺構から出土した８点、精査中のもの３点を図示した。この内、ＳＣ－20から５点出土した。ただすべて破損したものばかりで、一点が刃部のみ、他は刃部が欠損したものばかりである。他の出土した磨製石斧もすべて刃部が欠損している。

27037　刃部と先端部を欠損するもので、玄武岩を石材とした太型蛤刃石斧である。全面に敲打と研磨を施している。現在長13.4㎝、幅７㎝、重量720ｇでＳＣ－19床面から出土した。**27038**　ＳＣ－24から出土した太型蛤刃石斧であるが、基部側半分が残存する。再度端部を加工している。全面に研磨がいき届き、敲打部分もわずかに残る程度である。現存長10㎝、幅7.2㎝、厚さ3.8㎝、重量467ｇを測る。本来の大きさ18㎝、重量1,000ｇ以上と推定できる。**27039**　ＳＣ－10から出土した玄武岩製太型蛤刃石斧の素材と考えられる。また荒割工程を終了したばかりで、断面形状も終了段階ではない。現存長12.8㎝、幅5.5㎝、厚さ3.8㎝、重量439ｇである。

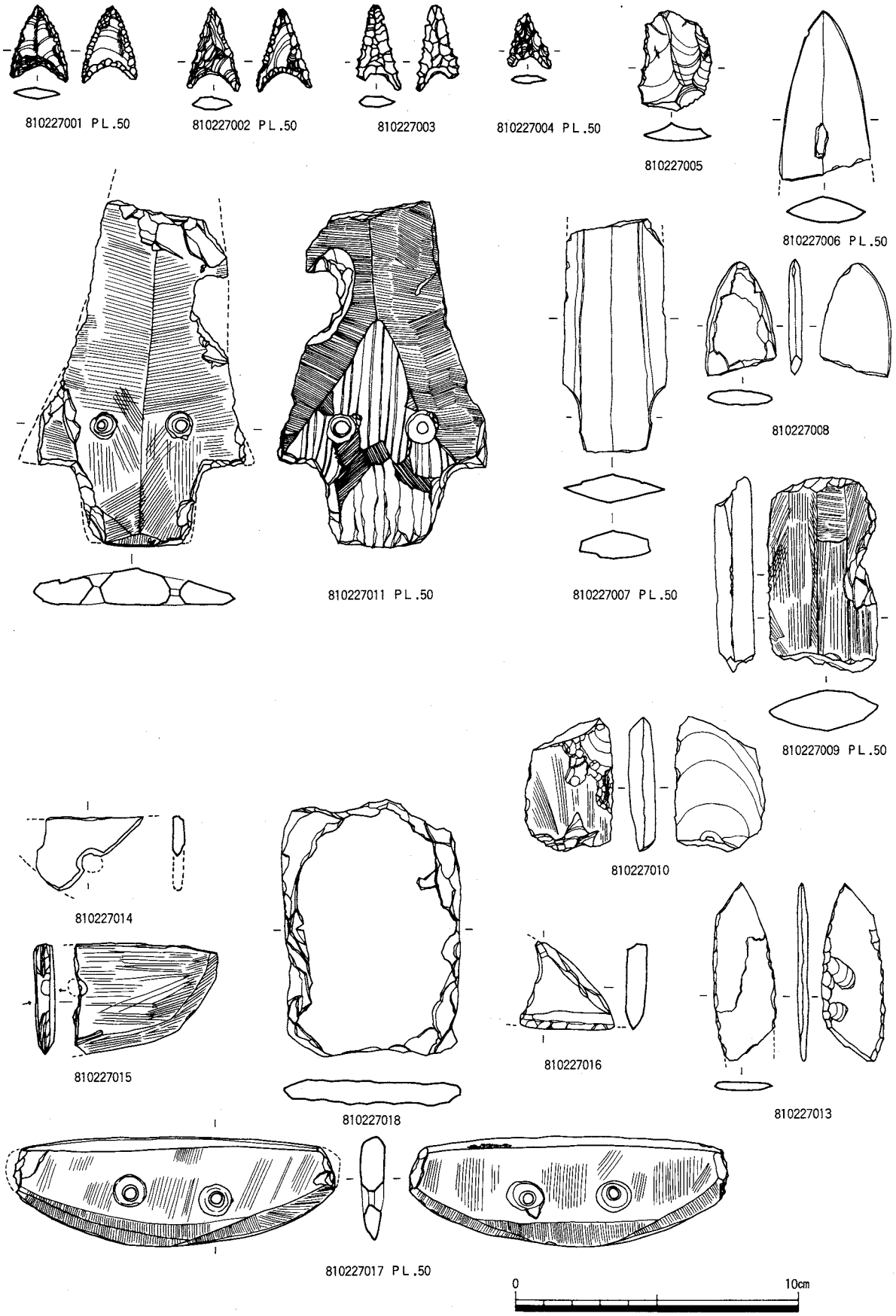


Fig. 31　Ⅱ区出土石器－1（縮尺1/2）

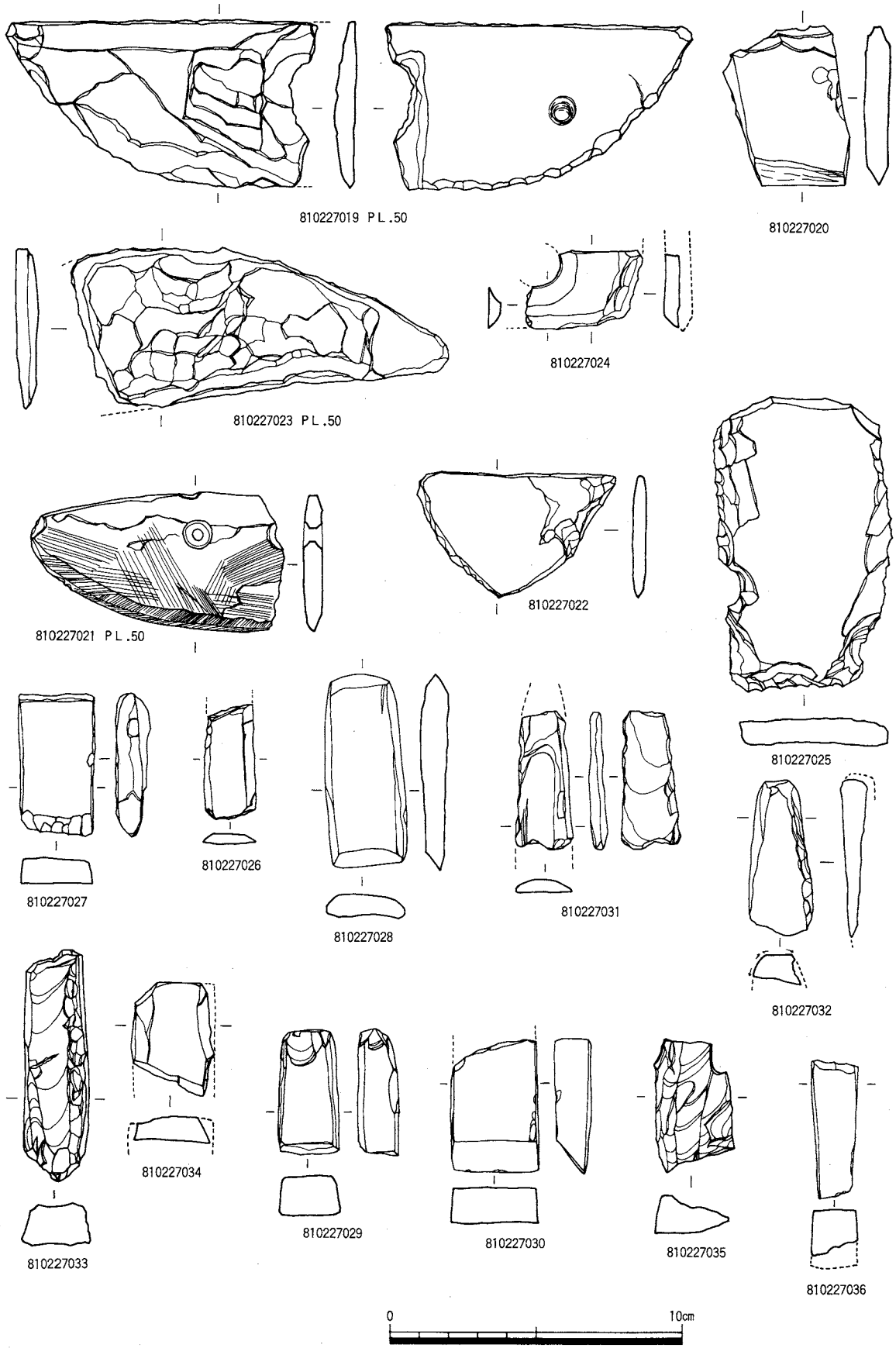


Fig. 32　Ⅱ区出土石器－２（縮尺1/2）

27040　太型蛤刃石斧の刃部である。基部は欠損している。刃部はV字形を呈し、鋭利である。完成品で使用時に破損したものと思われるが、刃部のみが住居址内（ＳＣ－40）から出土したことが不可解である。研磨は全面に施しており、丁寧な造りである。Ⅱ区出土の太型蛤刃石斧で刃部を有するものはこの一点のみである。**27041**　太型蛤刃石斧片で、裏面と中位以下刃部までが欠損する。研磨は施されている所から欠損した後、再利用するため剝離を行なっていたと思われる。玄武岩製でＳＣ－20から出土した。現長11cm、現重量484ｇを測る。**27072**　これもＳＣ－20から出土した玄武岩製の太型蛤刃石斧片である。中位以下刃部を欠損する。現長10cm、現重量492ｇを測る。**27042**　石斧の未製品で、剝離段階で終了している。ＳＸ－27から出土した玄武岩製である。現長14.8cm、現重量758ｇを測る。**27043**　ＳＣ－20から出土した玄武岩製の石斧未製品である。両面に大きな剝離を加えられているが、周辺部は敲打と研磨が施されている。また下位周辺部は細かな剝離面が認められる。**27044**　これもＳＣ－20から出土した太型蛤刃石斧で玄武岩製である。現長18.4cm、現重量1007ｇを測る。**27045～27047**　この３点は遺構精査中に出土したものである。３点とも玄武岩製の太型蛤刃石斧片で、全て刃部を欠く。

石核（Fig.33－27048）

安山岩製の石核である。両面とも周辺部から剝離を加え剝片を剝ぎ取っている。両面からであるため断面がジグザグの形を呈する。この技法は旧石器時代にみられるルヴァロア（亀の甲）技法に類似するもので、断面形から石核石器及びRand－Seraperとしての機能も考えられる。ＳＣ－20出土。

磨石（Fig.35－27059　PL.51）

半割されているが、全面を使用している。特に左側辺面は、使用頻度が高いことを窺わせる研磨がみられる。ＳＣ－19出土で石材は硅岩である。

槌形石器（Fig.35－27060　PL51）

硬質砂岩製で、ＳＣ－25遺構面精査中に出土した。全体の下1/3部分から大きな剝離を施し、段を持つ形状とし、上2/3は、大まかな剝離の後、敲打により表面を整える段階である。上端部は敲打痕か使用によるものかは不明であるが、敲打状の痕跡が認められる。

紡錘車（Fig.35－27061）

粘板岩製の紡錘車である。3/4は欠損してないが、かろうじて穿孔部分が残り、全長３cmと推定できる。器厚は0.3cmで薄い。全面に研磨が施こされ、丁寧な造りである。ＳＣ－25遺構面精査中に出土した。

石錘（Fig.35－27062）

花崗岩製の石錘で、ＳＣ－20壁面から出土した。花崗岩の両端に、交互に大きな剝離面と小さな剝離面によって石錘として仕上げている。他には加工の痕跡はなく、研磨も施していない。全長8.4cm、重量254ｇである。

扁平打製石斧（Fig.35－27063）

ＳＣ－19床面から出土した安山岩製の扁平打製石斧である。両面とも大まかな剝離によって整形している。刃部はV字形を呈し、その角度は50度を測る。

砥石（Fig.32－27026～27036、34－27049～27058、35－27059～27070、PL.51）

遺構内から出土した砥石は65点と他の石器より数多く、その内19点を図示した。砂岩・硬質砂岩を石材とした荒砥ぎ用砥石（27050・27053・27055（ＳＣ－20）、27054・27056（ＳＣ－18）、27058・27065（ＳＣ－23）、27071（ＳＣ－24）、27057・27069（ＳＸ－９））と凝灰岩等を石材とした仕上げ用に分けられる。（粘板岩27036（Pit.－1687）、27049・27051（ＳＣ－17）、27052・27070（ＳＣ－18）、27066（ＳＣ－32）、27067（ＳＣ－22））等がある。

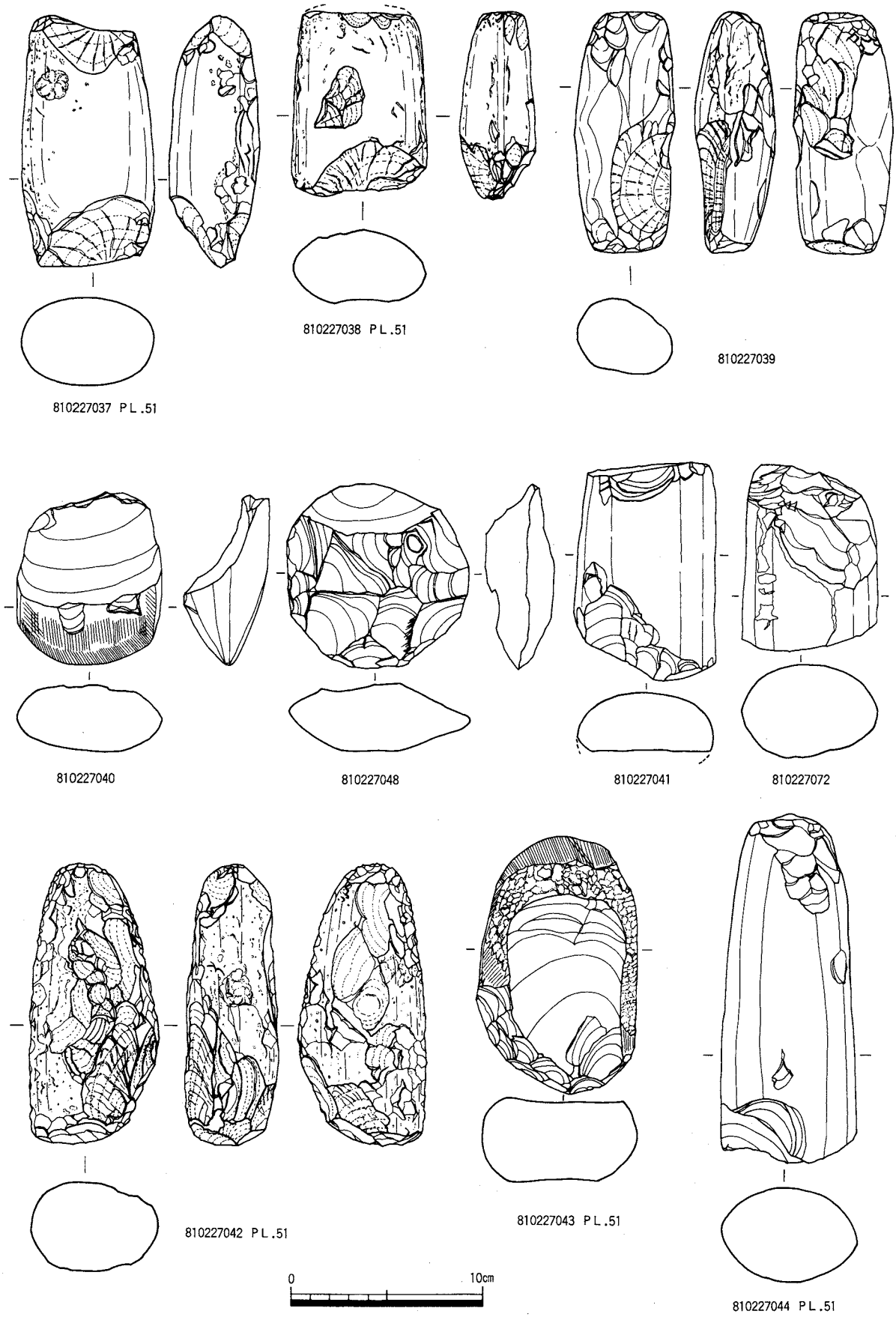


Fig. 33　Ⅱ区出土石器－3（縮尺1/3）

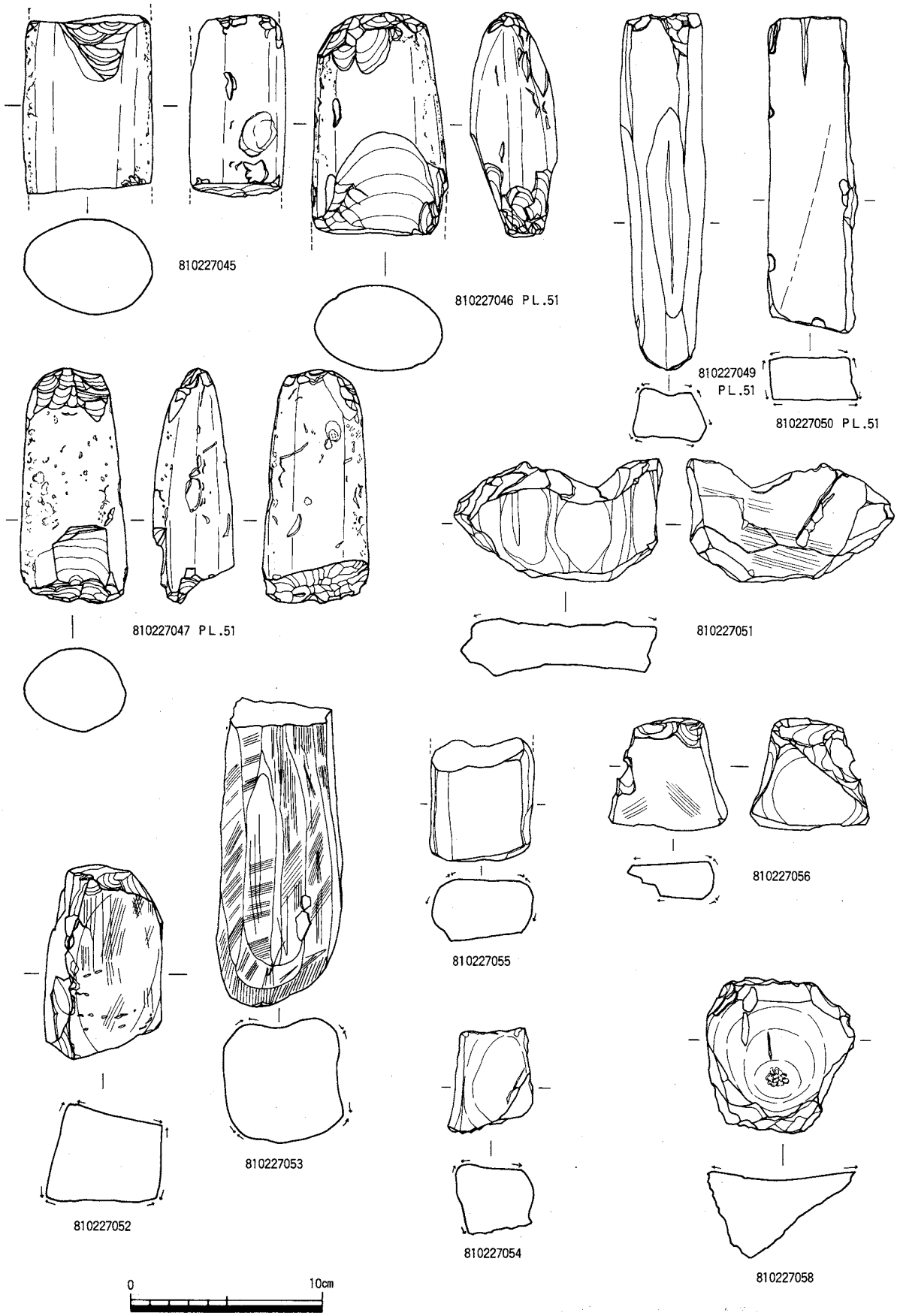


Fig. 34　Ⅱ区出土石器－4（縮尺1/3）

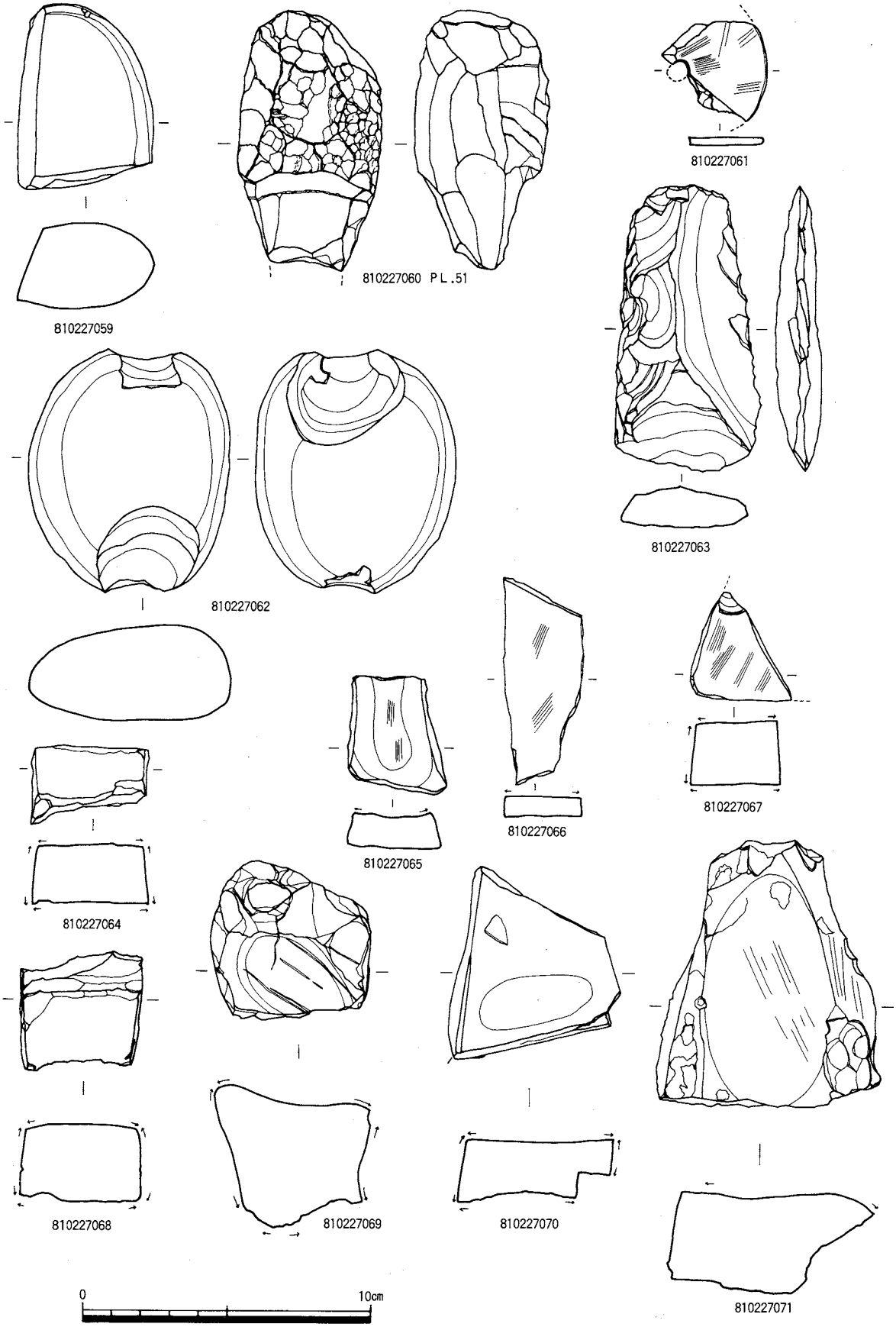


Fig. 35　Ⅱ区出土石器－5（縮尺1/2）

第三節　Ⅲ区弥生時代の生活遺構

Ⅲ区は削平する部分がわずかであったことと、試掘調査により甕棺墓が検出されていることから、甕棺墓の範囲確認と河川の確認を行う目的で、表土排除作業を行ないその面積は4,000㎡であった。

検出した遺構は甕棺墓14と台地を切断する幅12～20ｍの河川である。この河川ＳＤ－01は、Ⅱ区とⅣ区を切断し、第２次調査のⅨ区北西側に検出した河川と同一のものであった。

Ⅲ区の調査において生活遺構と考えられるものは、幅12～20ｍの河川である。この河川は断面調査の結果、両岸に杭列が検出された。また底面付近から弥生時代中期初頭の土器が出土した。これから人工的に使用した河川（大溝）であり、時期は底面出土の土器から弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ－01は、第五次調査（市道田、飯盛線新設道路関係調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集）の北側から急激に方向を変え、二次Ⅸ区の北西側を通り、１次Ⅲ区へと続くもので、方位Ｎ－36°－Ｅをとり、さらに北へ続く。南側は、第五次調査で一部かかるが、調査区を横切ってはいない。このことから急激に蛇行し、西に方向を変え旧日向川へと続くものと考えられる。

ＳＤ－01土層

第Ⅰ層　暗灰色微砂土で西側部分に認められる。第Ⅱ層　黒灰色粘質土で５㎝程度の堆積である。第Ⅲ層　細砂を含み鉄分を多く含む暗茶褐色粘質土であり、西側を除いてほとんど堆積し厚さも　㎝と厚い。第Ⅳ層　黒褐色粘質土であり第Ⅲ層下部に位置する。第Ⅴ層　暗青灰色細砂土であり、同一の色調、土質を持つものに第Ⅴ・Ⅸ・Ⅸ’・XI層がある。ただ第XI層はやや茶褐色を呈し、酸化鉄を多量に含む。第Ⅶ層　明褐色砂質土。第Ⅷ層　青灰色細砂土。第Ⅹ層　明褐色粘質土で、酸化鉄を多く含む。第XII層　青灰色砂質土。第XIII層　灰色粗砂。第XIV層　灰白色粗砂。第XV層　灰褐色粘質土であるが、砂を含む。第ⅩⅥ層　灰褐色粗砂。第ⅩⅦ層　灰褐色粘質土。第ⅩⅧ層　細砂を含む暗褐色粘質土。第ⅩⅨ層　黒灰褐色粘質土。第ⅩⅩ層　暗褐色粗砂。第ⅩⅩⅠ層　褐色粗砂。第ⅩⅩⅡ層　暗褐色粘質土。第ⅩⅩⅢ層　灰褐色粗砂。第ⅩⅩⅣ層　灰褐色砂質土。第ⅩⅩⅤ層　細砂を含む黒褐色粘質土であり、第ⅩⅩⅣ層との間に杭、流木が検出されている。第ⅩⅩⅥ層　細砂を含む黒灰色粘質土で、この層から弥生中期初頭の甕形土器の口縁部等が出土している。第ⅩⅩⅦ層　暗灰褐色砂質土で、弥生中期初頭の甕形土器底部、胴部が出土しているが、上層出土遺物と、この層の遺物は磨滅を受けていない。第ⅩⅩⅧ層　青灰色砂礫層である。第ⅩⅩⅨ層　青灰色粘土で、この層がＳＤ－01の基盤層と考えられる。

西側部分の土層堆積と東側の土層堆積とでは異なる。西から６ｍ部分を境として、浅い溝状を呈しこの部分は暗青灰色細砂土と砂質との互層状態となる。最終的にはＳＤ－01が、幅６～10ｍ程度の溝状を呈していたことを窺わせる土層である。

中央部から東側の土層堆積状態は、下から砂礫層、砂層、粘質土、砂層、粘質土、部分的に砂層、粘質土の順となる。最初の段階では、流れが速いため砂礫が堆積し、次にややゆるやかな流れとなり、　第ⅩⅩⅥ層では、澱み状態が見られる。次にやや速い流れによって砂が運ばれ、次に澱みとなる。以下これと同じ状況が繰り返され、第Ⅲ層が切れる地点（西側から９～10ｍ附近）で小さな溝状となる。ＳＤ－01の時期は、第ⅩⅩⅥ層、ⅩⅩⅦ層から甕形土器の口縁部、底部が出土していることからほぼこの時期か、それ以前が考えられる。第１次調査の段階では、Ⅳ区に弥生時代前期の生活遺構があり、Ⅱ区にも同時期の遺構が認められる。このことからＳＤ－01は弥生時代前期～中期の段階で、人工的にこの流路を利用した痕跡が認められる。

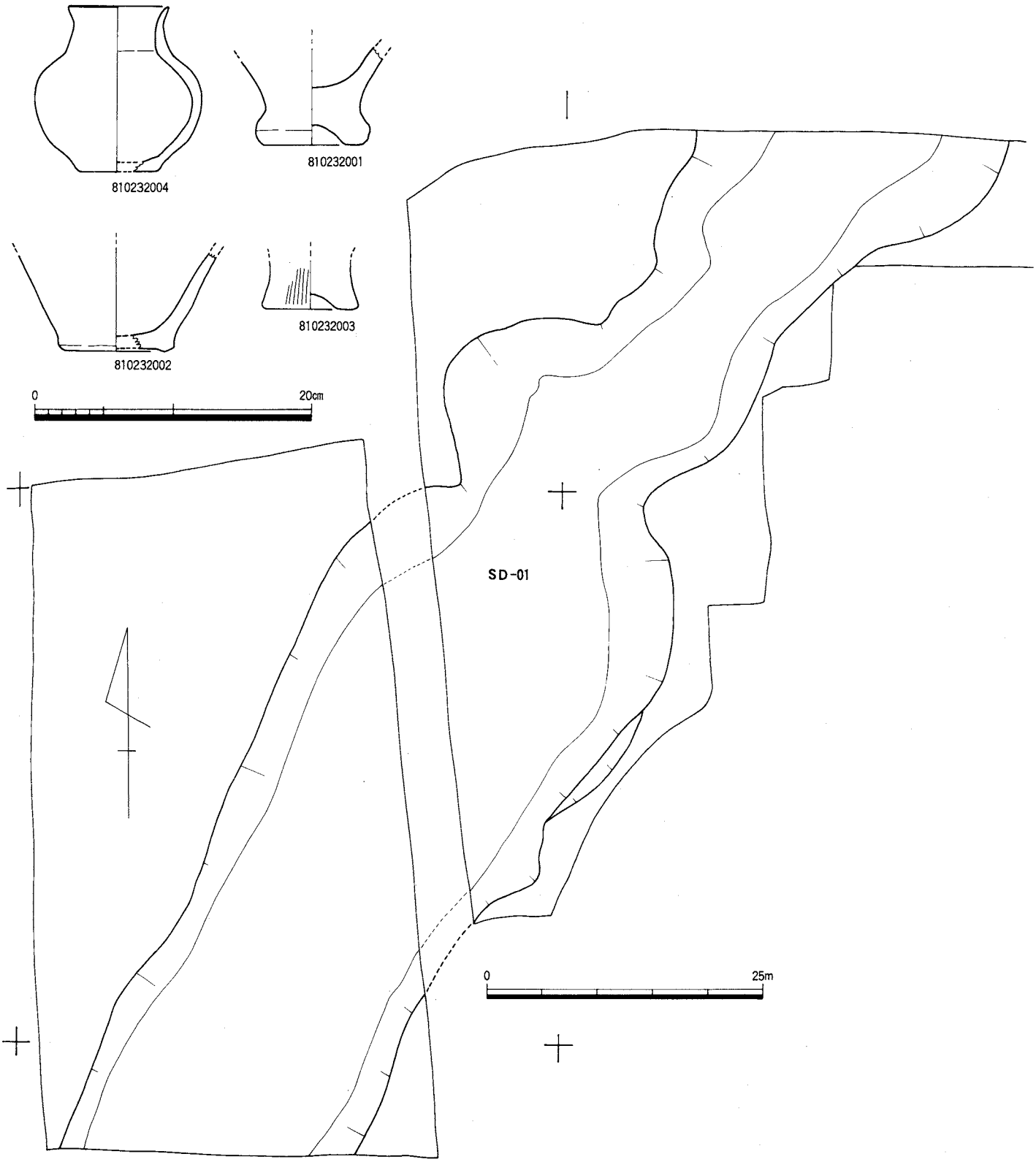


Fig. 36　第一次調査弥生時代遺構平面図・出土土器(Ⅲ区)(縮尺1/4・1/500)

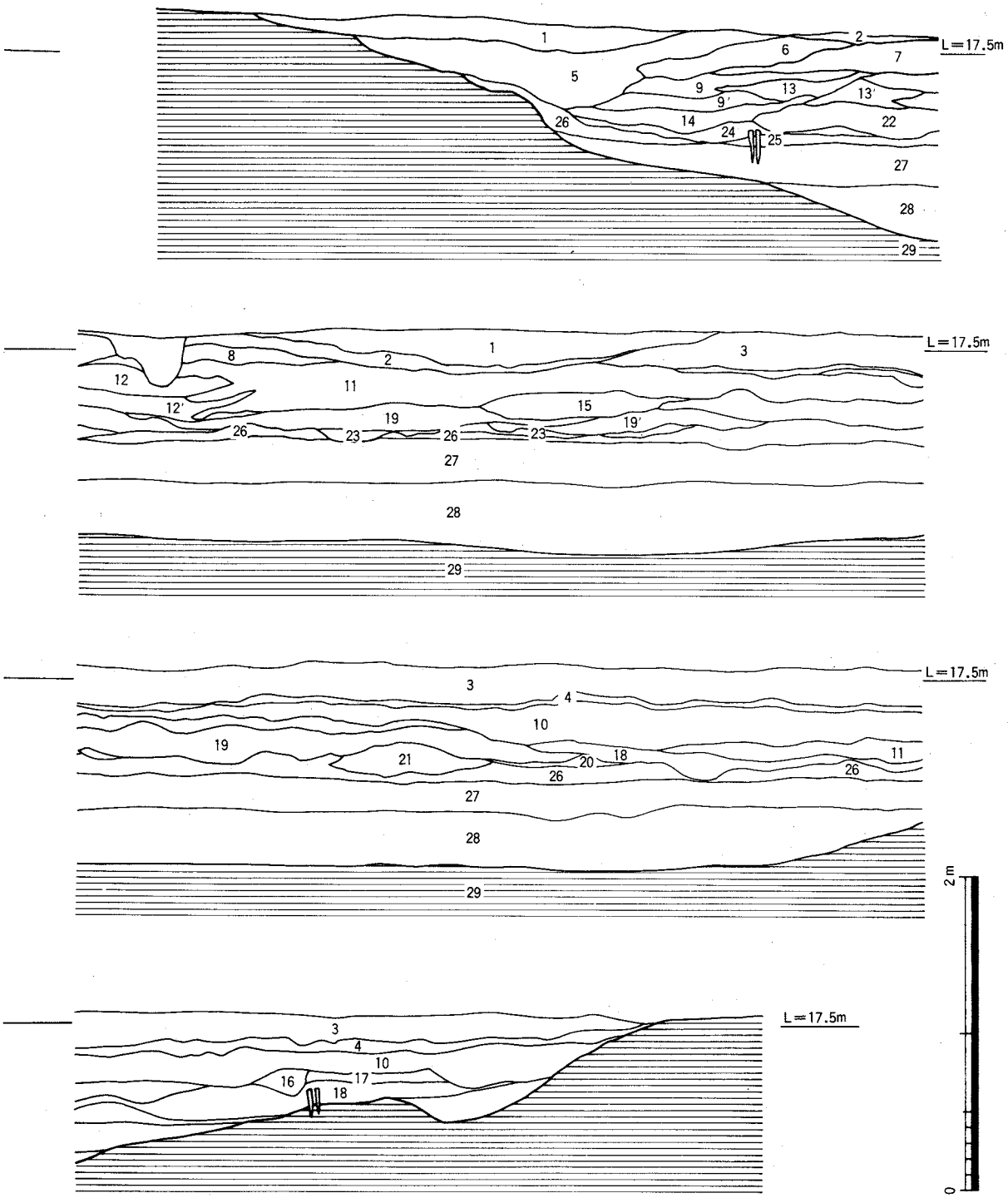


Fig. 37　Ⅲ区SD-01土層断面図(縮尺1/40)

Ⅲ区出土の土器（Fig.36－32001～32004）

ＳＤ－01の底面から出土した４点を図示した。**32004**　小型壺形土器で、頸部がしまり口縁端部で外反しておさめている。復元口径7.2cm、器高11.9cm、底径5.8cmを測る。**32001**　甕形土器の底部で底部端部を丸くおさめ上底のタイプで、底径8.3cmを測る。**32003**　甕形土器の底部であるが、底部端部が角ばるタイプで上底を呈し底径７cmを測る。**32002**　壺形土器の底部である。やや上底で、底部端部に稜を持つが造りはシャープである。底径8.4cmを測る。

Fig. 38　第一次調査弥生時代遺構分布図(Ⅳ区)(縮尺1/300)

第四節　Ⅳ区弥生時代の生活遺構

1．Ⅳ区の弥生時代の生活遺構（Fig.38）

Ⅳ区は調査対象面積6,000㎡、表土排除作業4,500㎡であった。検出した遺構は、弥生時代前期の竪穴式住居址15軒、溝状遺構一条、弥生時代前期末の甕棺墓23基（金海式甕棺墓）、弥生時代中期初頭～後半にかけての竪穴式住居址８軒、溝状遺構２条、甕棺墓126基、井戸２基、土壙３基、土壙墓２基、掘立柱建物６棟を検出した。

2．住居址と掘立柱建物（Fig.38～40）

Ⅳ区では掘立柱建物が７棟検出した。ＳＢ－35だけが、中央北側に位置し、他の６棟は北西側に集中している。掘立柱建物の内４棟（ＳＢ－36～39）が弥生時代前期に比定でき、中期の掘立柱建物はＳＢ－35、40、41の３棟である。竪穴式住居址は、弥生時代前期の方形住居址17軒、弥生時代中期の円形住居址が８軒である。弥生時代前期の竪穴式住居（ＳＣ－50～58）は北東に位置するものと、南西側に位置（ＳＣ－50～64）するもの、南側に位置（ＳＣ－65）とに別れる。前期、中期の掘立柱建物は西側、南側に位置していると考えられ、第二次調査のⅨ区から検出された掘立柱建物がそれに当ると思われる。ただⅣ区とⅨ区の間には旧河川を改造したＳＤ－01が確認されている。ＳＤ－01は弥生時代中期初頭には幅14～21ｍ、深さ1.5ｍで存在している。この大溝を境とし、生活空間、墓地空間、倉庫空間の区別を持っていたことが窺える。

3．弥生時代の住居址（Fig.38～43・47・48　PL.19・21・22）

弥生時代前期の住居址は基本的には方形（長方形、方形）住居址である。ＳＣ－50～65までが弥生時代前期の住居址と考えられるが、出土遺物のないもの、削平が著しいもの、切合関係が複雑なものがあり、確定できるものはＳＣ－50・53・61・62・65の５軒である。挿図に沿って説明していく。

ＳＣ－65（Fig.41　PL.24）

調査区の南に位置し、金海式甕棺墓の一群の北側にあり、ＳＥ－02によって北東側を切られ、ＳＤ－02によって中央部を切られている。北東部は丸みを持ち、南西部は方形である。主軸をＮ－72°－Ｅにとり、長軸4.85ｍ、幅3.23ｍ、深さ0.4ｍを測り、面積15.7㎡である。柱穴は４本柱。１～２が1.9ｍ、２～３が3.3ｍ、３～４が1.9ｍ、４～１が2.6ｍである。柱穴が南側位置し、なおかつ不揃いである。出土遺物は多量に出土した（Fig.55～57）。上面からではあるが、支脚が完形品で多量に出土している。床面直上にも数多くの土器、石器（Fig.57・62・63）がある。

ＳＣ－53（Fig.42・43　PL.18・19）

ＳＣ－53は調査区中央部に位置する。他の住居址等は切合関係（特に甕棺墓との切合関係が著しく）があるのにＳＣ－53だけは甕棺墓等の切合はない。主軸をＮ－46°－Ｗに持ち、長軸6.33ｍ、短軸5.40ｍ、深さ0.35ｍを測り、面積34,182㎡である。柱穴は長軸方向に２本柱で、柱穴自体４個ある。柱間の距離は4.0ｍ、大きさは0.5～0.8ｍ、深さ0.3ｍである。一部に炭化した材が認められ、火災にあったことを窺わせ、そのため破棄したものと思われる。出土遺物は多いが（Fig.53、54、61）そのほとんどが土器で、石器の数は少ない。出土した土器を見ると二個体以上の土器が潰れた状態で出土している。

ＳＣ－69（Fig.43　PL.16・17）

調査区西側に検出された円形住居址で、ＳＣ－59・61・70・72を切る最も新しい時期の住居址である。直径5.9ｍ、深さ0.08ｍで、東側に壁溝が巡る。中央部に浅い柱穴が認められる。柱穴は６本で１～２が1.7ｍ、２～３が1.7ｍ、３～４が1.5ｍ、４～５が1.8ｍ、５～６が2.0ｍ、６～１が２ｍである。柱穴の大きさは0.4～0.5ｍ、深さ0.3ｍである。

Fig. 39　Ⅳ区住居址詳細図ー1（縮尺1/150）

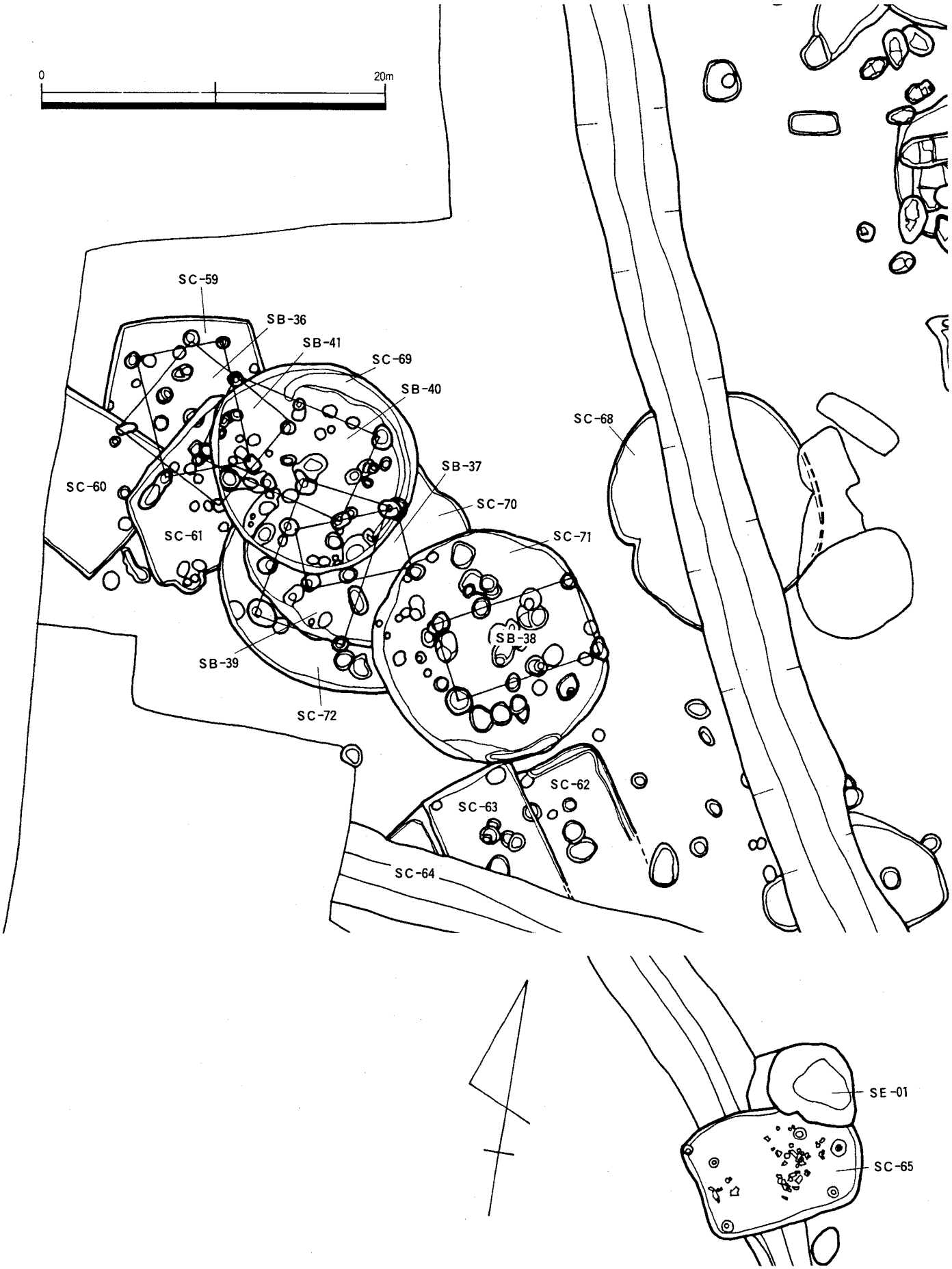


Fig. 40　Ⅳ区住居址詳細図－２（縮尺1/150）

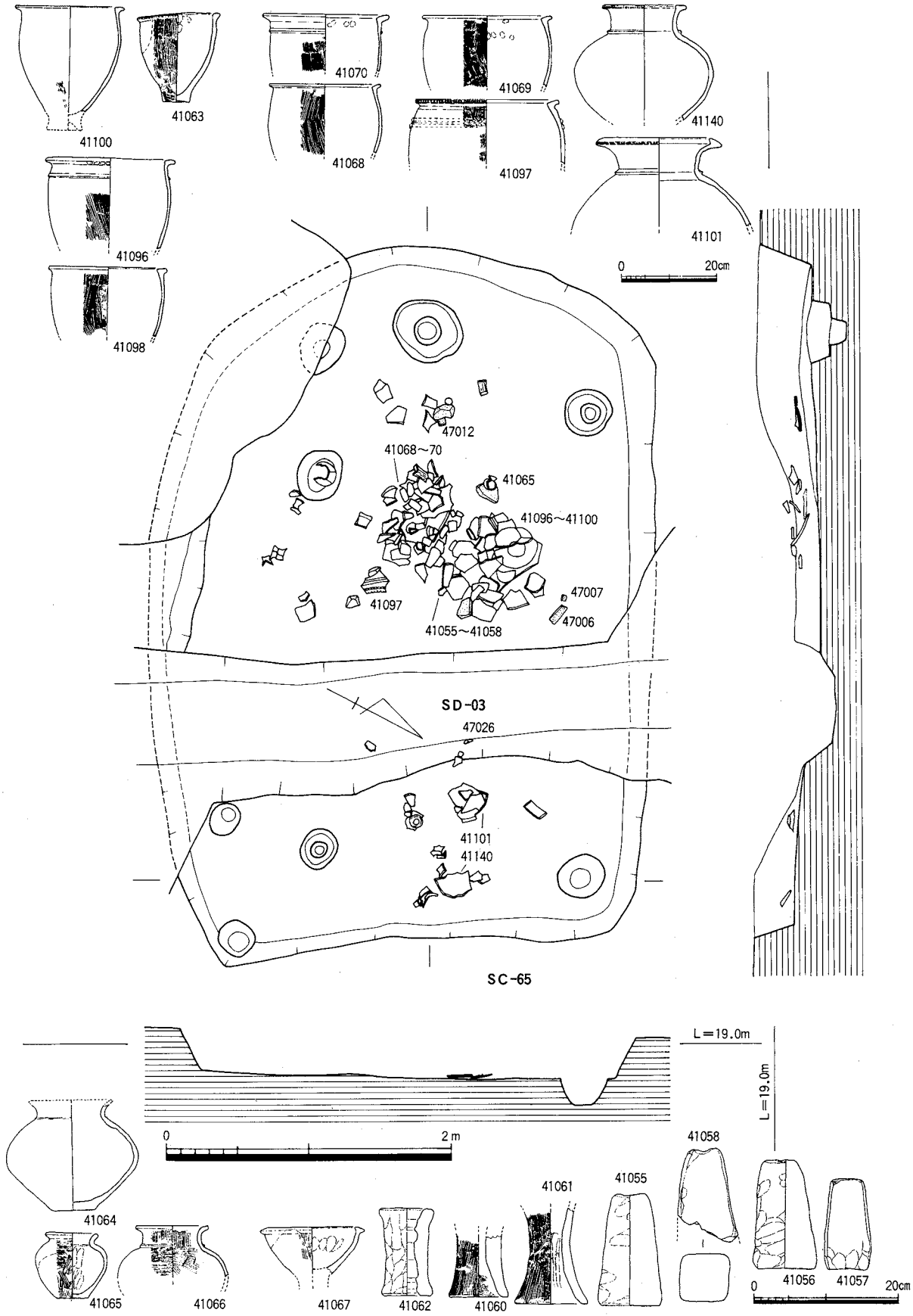


Fig. 41　Ⅳ区SC－65平面・断面図（縮尺1/8・1/12・1/40）

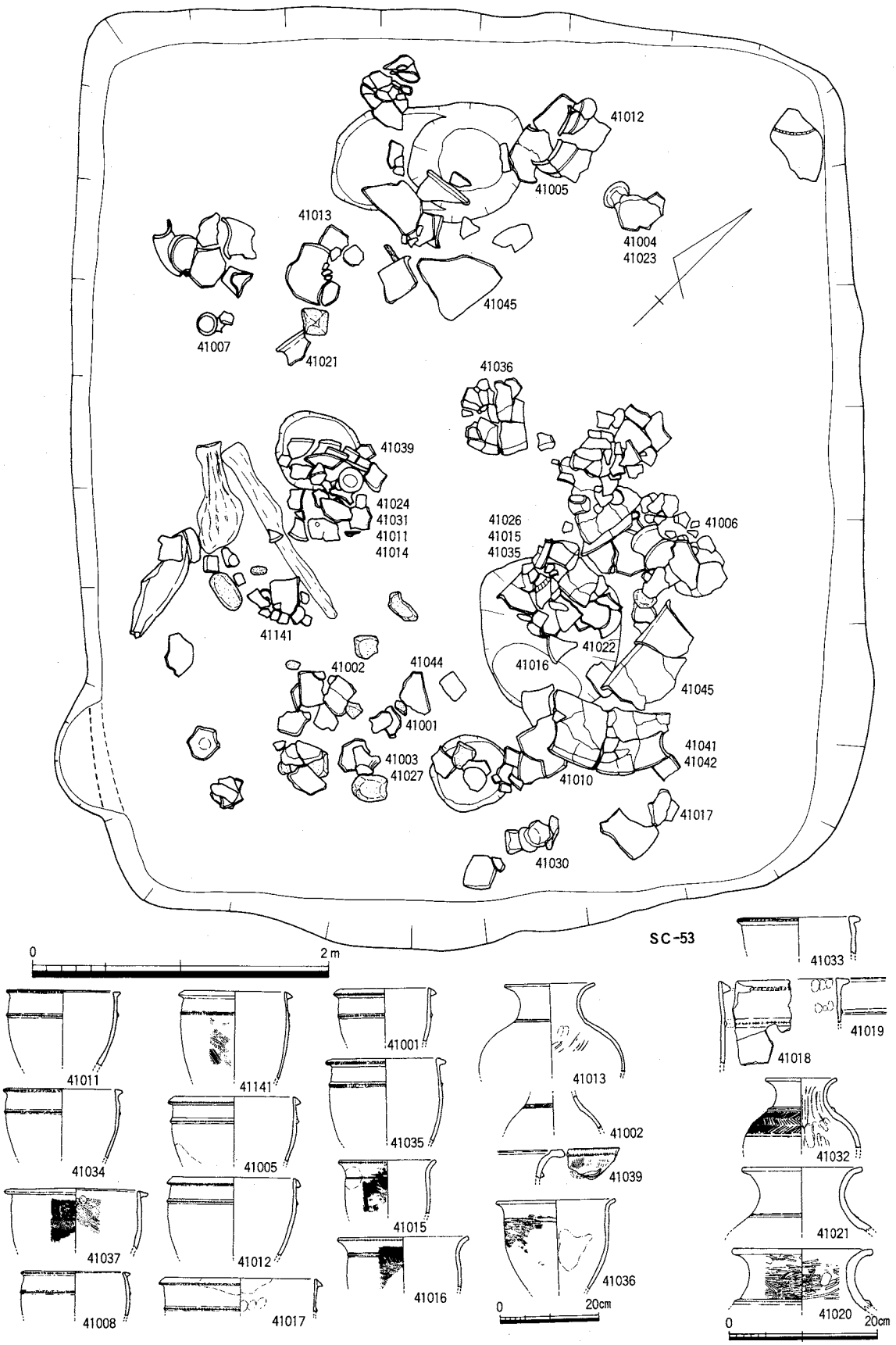


Fig. 42　Ⅳ区SC—53土器分布状態（縮尺1/8・1/12・1/40）

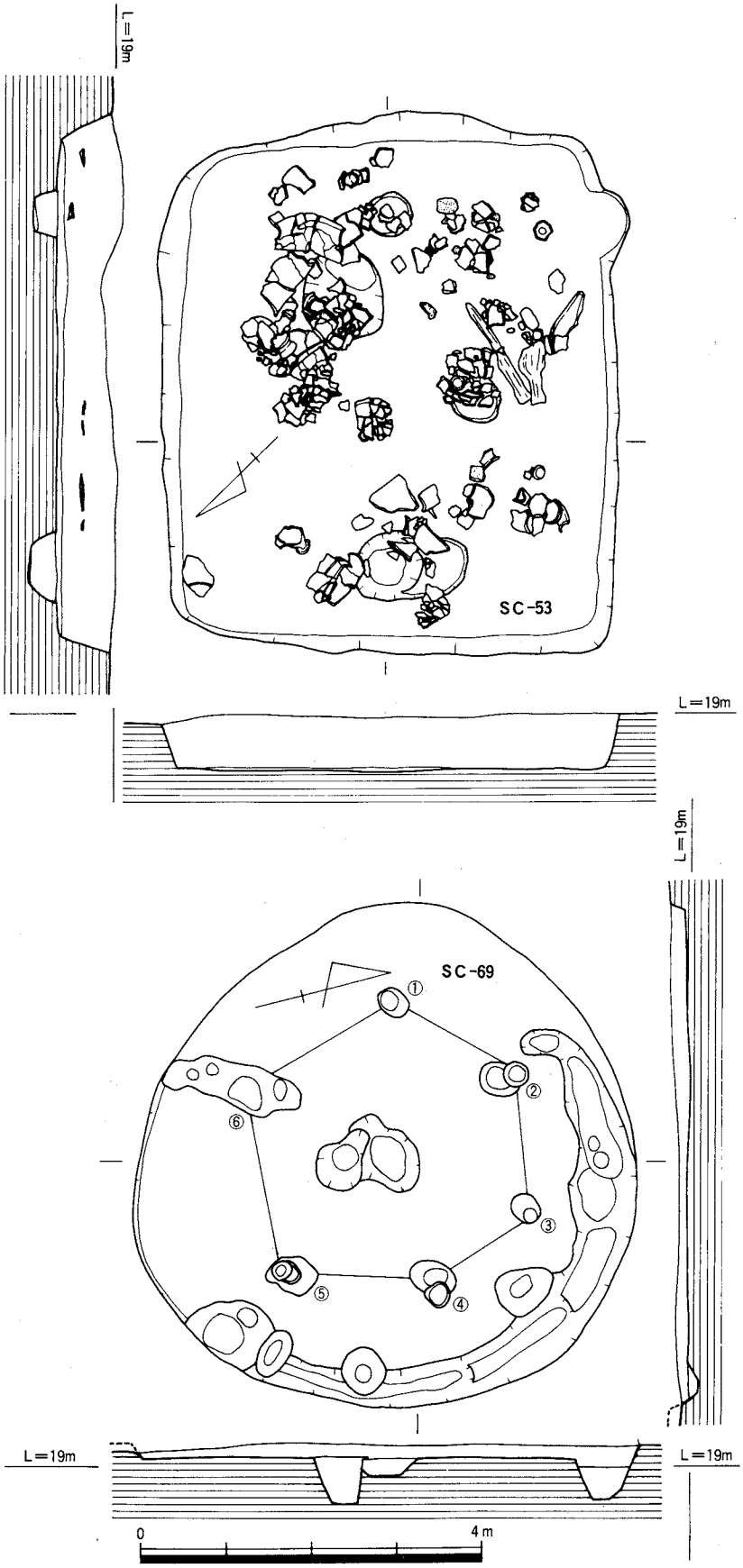


Fig. 43　Ⅳ区SC－53・69平面・断面図（縮尺1/80）

ＳＣ－71（Fig.44　PL.17）

西側の調査区から検出されＳＣ－70・72・63を切る。最も上部から検出され、ＳＣ－69と同時期と考えられる。直径8.35m、深さ0.28mと残りは悪い。壁溝らしき溝が一部にあるが長さが短かい。柱穴は６本で中心部にも柱穴がある。1～2が1.8m、2～3が1.8m、3～4が1.8m、4～5が1.8m、5～6が1.5mである。柱穴の大きさは、0.5～0.8mで、深さ0.4～0.6mである。図示できる遺物は出土していないが中期後半の時期と考えられる。

ＳＣ－68（Fig.44）

ＳＤ－02から切られ、東側は削平が著しいため検出できなかったが、調査中にかろうじて住居址の範囲を確認した。しかしながら柱穴等がまったく検出されていないのと西側の壁面に凸凹がある。住居址の可能性は少ない。直径7.04m、深さ0.1mである。床面から甕形土器の口縁部が２点出土している。

ＳＣ－67（Fig.45　PL.19・20）

調査区の中央部に検出された円形住居址で、ＳＣ－58を切るが、ＳＸ－55、中期後半の甕棺墓14基（ＳＫ－129、205、179、132、178、203、105、109、177、181、176、104、175、174）によって北側は破壊されつくしている。推定復元では直径6.2mで深さ0.32mである。柱穴は６本で中心部に浅い柱穴がある。１～２が

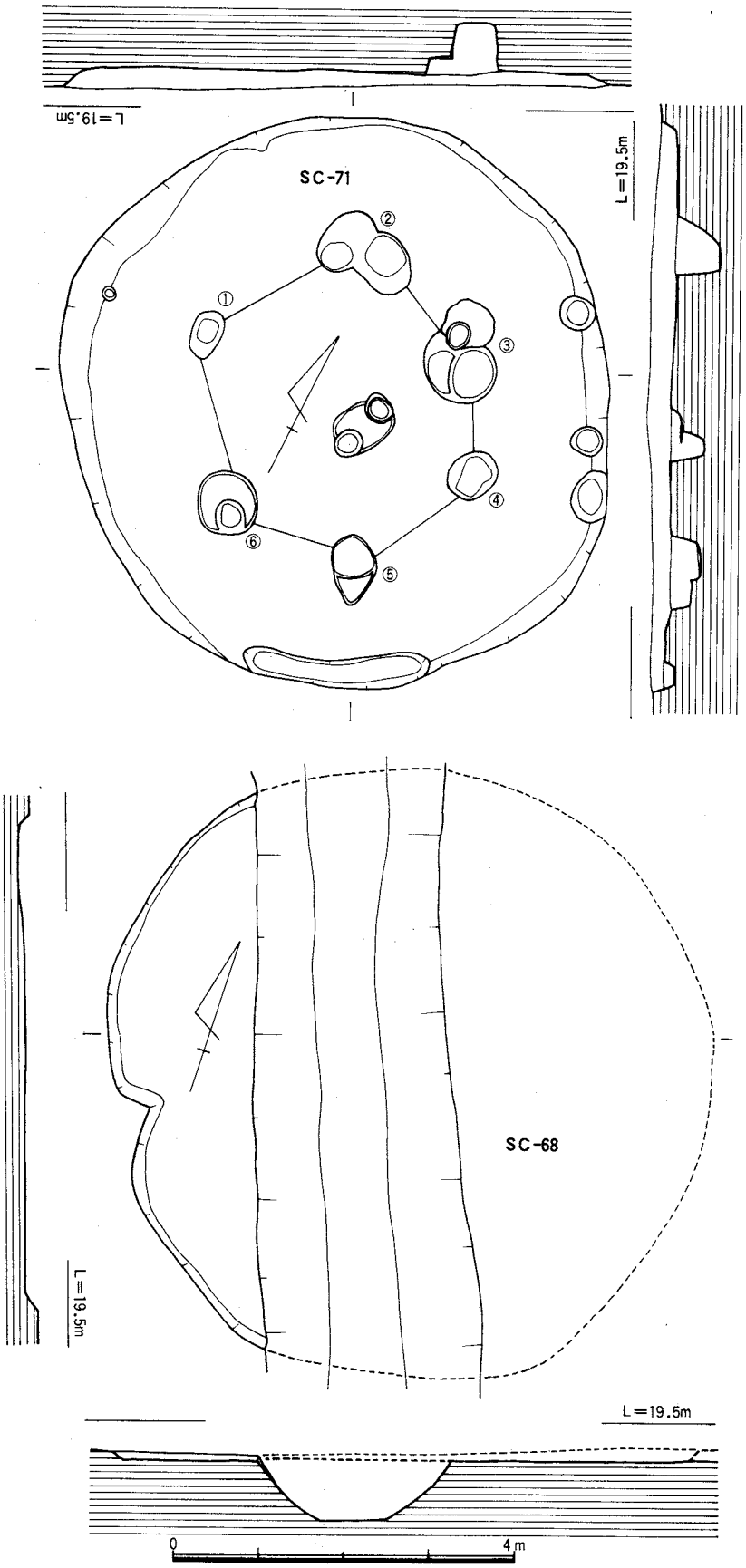


Fig. 44　Ⅳ区SC－68・71平面・断面図（縮尺1/80）

1.5m、2～3が1.0m、3～4が1.5m、4～5が1.8m、5～6が2.0m、6～1が2.2mの間隔である。柱穴の大きさは0.24～0.60mで深さ0.44～0.46mである。出土遺物は少なく、Fig.54に図示した。

ＳＣ－70（Fig.46　PL.16）

ＳＣ－69・71に切られ、ＳＣ－61を切る。ＳＣ－70と72は同一遺構で周辺部にベッド状遺構を有するものと考えていたが、別の住居址である可能性が出てきたため、別々の住居址として説明する。

ＳＣ－70はＳＣ－72を切る形で検出され不整形を呈する。直径6m深さ0.2m程度と考えられ、6本の柱穴と中央部に浅い柱穴を持つ。1～2が2.2m、2～3が2.8m、3～4が2m、4～5が2m、5～6が2.1m、6～1が2mである。柱穴の大きさは0.2～0.6mで深さ0.3～0.4mである。出土遺物はFig.57に3点図示した。

ＳＣ－72（Fig.46　PL.16）

ＳＣ－70によって切られＳＣ－61を切る円形住居址である。ＳＣ－69・70・71によって切られているため南西部の一部しか遺存しない。柱穴は7本柱と考えられ、1～2が2m、2～3が1.8m、3～4が2.1m、4～5が2m、5～6が3.1m、6～7が1.8m、7～1が2.3mで、柱穴の大きさは、0.28～0.6m、深さ0.2～0.4mを測る。直径6.6m程度と推定され、深さ0.1mである。出土遺物はFig.57に図示したが、ＳＣ－70より古い形態を持ち、弥生時代前期末から中期初頭の土器群である。全て床面からの出土であることからこの時期を想定することができる。

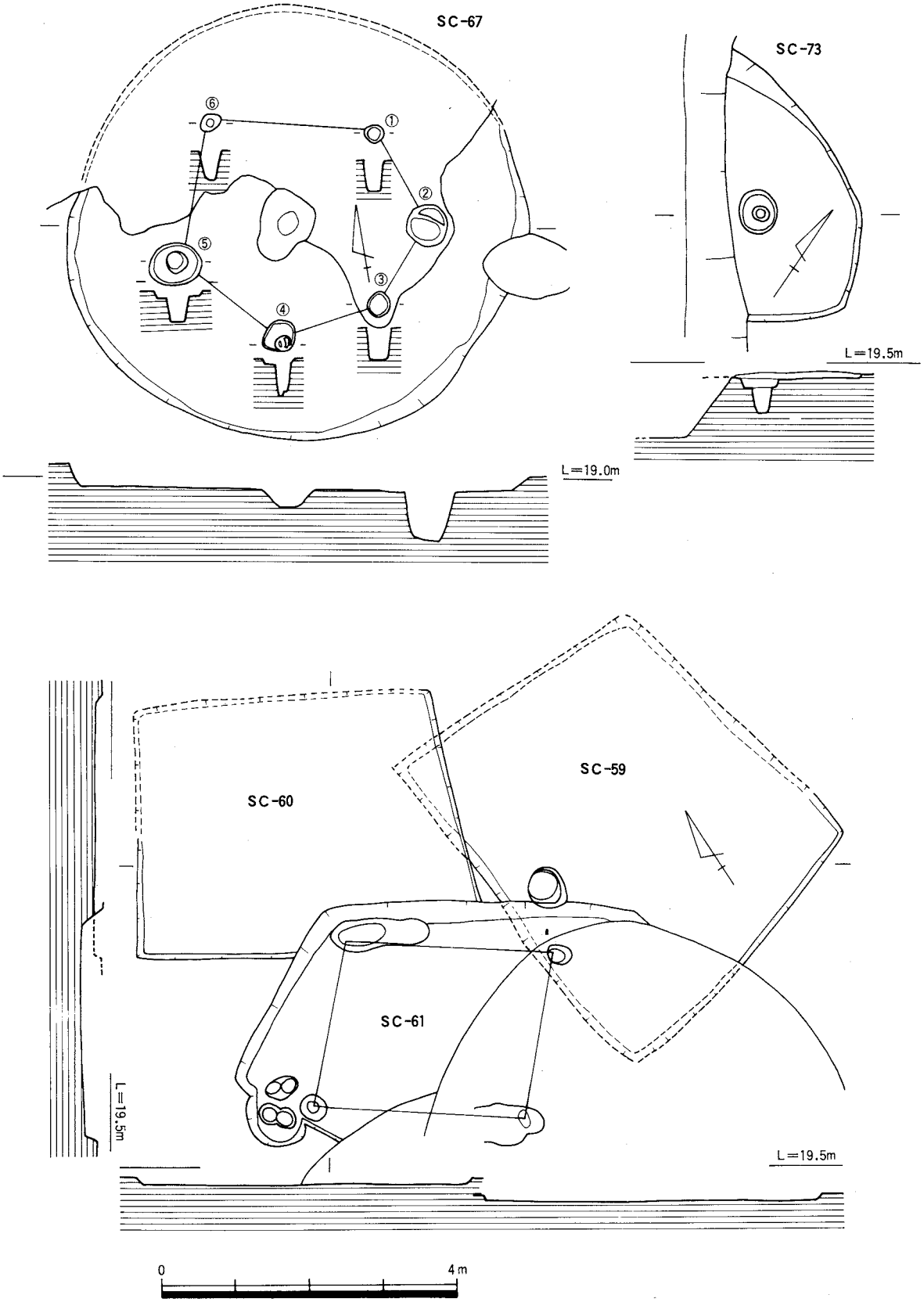


Fig. 45　Ⅳ区SC－59～61・67・73平面・断面図（縮尺1/80）

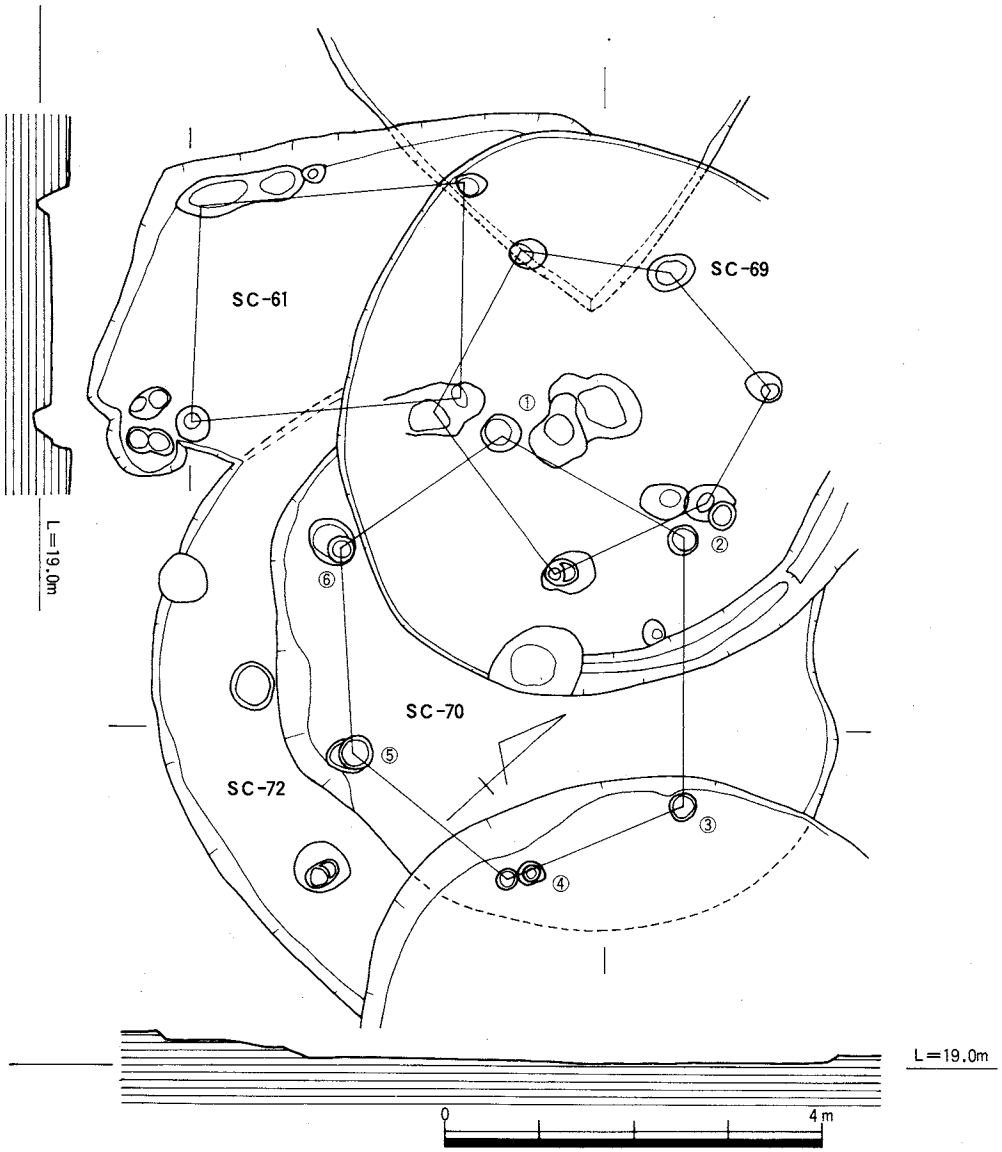


Fig. 46　Ⅳ区SC－61・69・70・72平面・断面図（縮尺1/80）

ＳＣ－59（Fig.45　PL.16）

調査区の西側に検出された。ＳＣ－60・61・69に切られる。やや台形状を呈するが、４本柱の長方形の住居址である。3.6×5.5m、深さ0.2mである。出土遺物は図示にたるものはないが、弥生時代前期の遺物が主である。

ＳＣ－60（Fig.45　PL.16）

ＳＣ－60はＳＣ－59を切り、ＳＣ－61から切られる。西側調査区の端であったため、約半分が未調査部分に入るが推定で４×４＋αｍの長方形住居址である。柱は４本柱と考えられる。出土遺物はない。

ＳＣ－61（Fig.46）

ＳＣ－61はＳＣ－59・60を切り、ＳＣ－69・72から切られる。不整形な方形を呈するが、これは柱穴等の攪乱が著しく住居址の壁を一部不鮮明にしている。柱穴は４本柱で大きさは0.4m～0.6m深さは0.3m前後である。住居址は長方形を呈し、３×５＋αｍ前後の大きさと考えられる。非常に残り

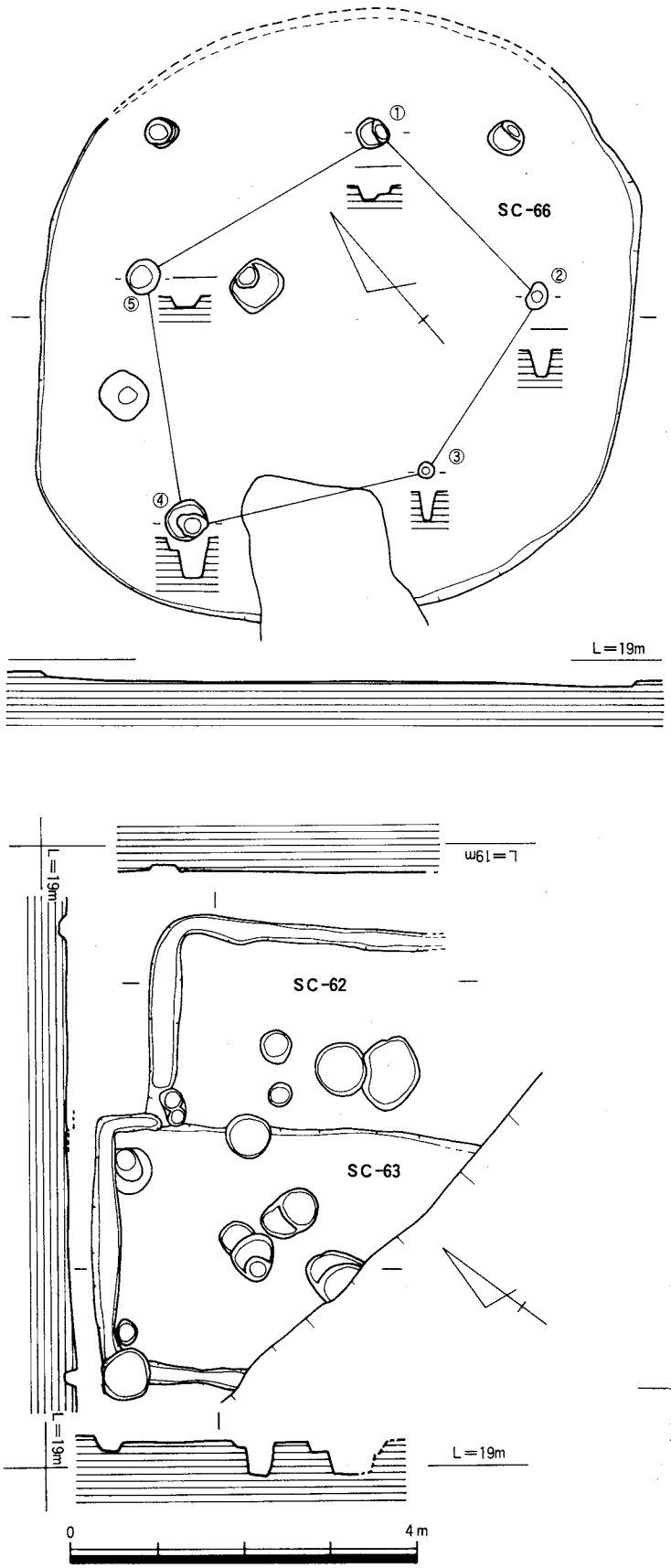
が悪く0.1mの深さしか残っていない。

ＳＣ－66 (Fig.47　PL.21)

調査区の北側で、ＳＣ－50の南、ＳＣ－52・55の北側に位置する。ＳＢ－35との切合があり、ＳＫ－207・208・219の甕棺墓が住居址の中央部に位置する。北側部分は削平が著しく未確認部分があるが、ほぼ楕円形を呈する住居址である。6.84×5.35mで深さが0.14m程度と非常に残りが悪い。柱は５本柱で、１～２が2.8m、２～３が2.4m、３～４が2.8m、４～５が2.9m、５～１が3.1mを測る。柱の大きさは0.2m～0.8m、深さ0.3m～0.6mである。出土遺物は図示にたえるものはないが、ほぼ弥生時代中期中頃におさまる土器が出土している。

ＳＣ－62 (Fig.47　PL.18)

調査区西側ＳＣ－71の南東側に位置する。壁溝と柱穴だけの検出であるため明確には住居址と断言できないが、一応住居址としてとらえておく。長軸3.13＋αm、短軸2.5＋α（ＳＣ－63によって切られている）m、壁溝の深さ0.1mである。住居址南側は削平を受け柱穴自体も確認できなかった。



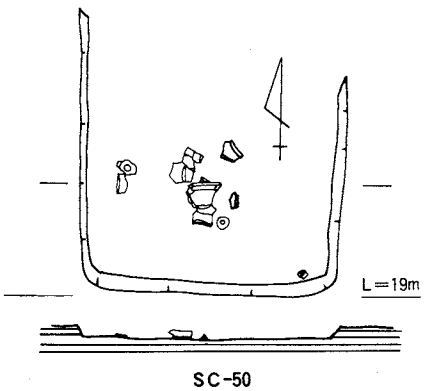


Fig. 47　Ⅳ区SC－50・62・63・66平面・断面図（縮尺1/80）

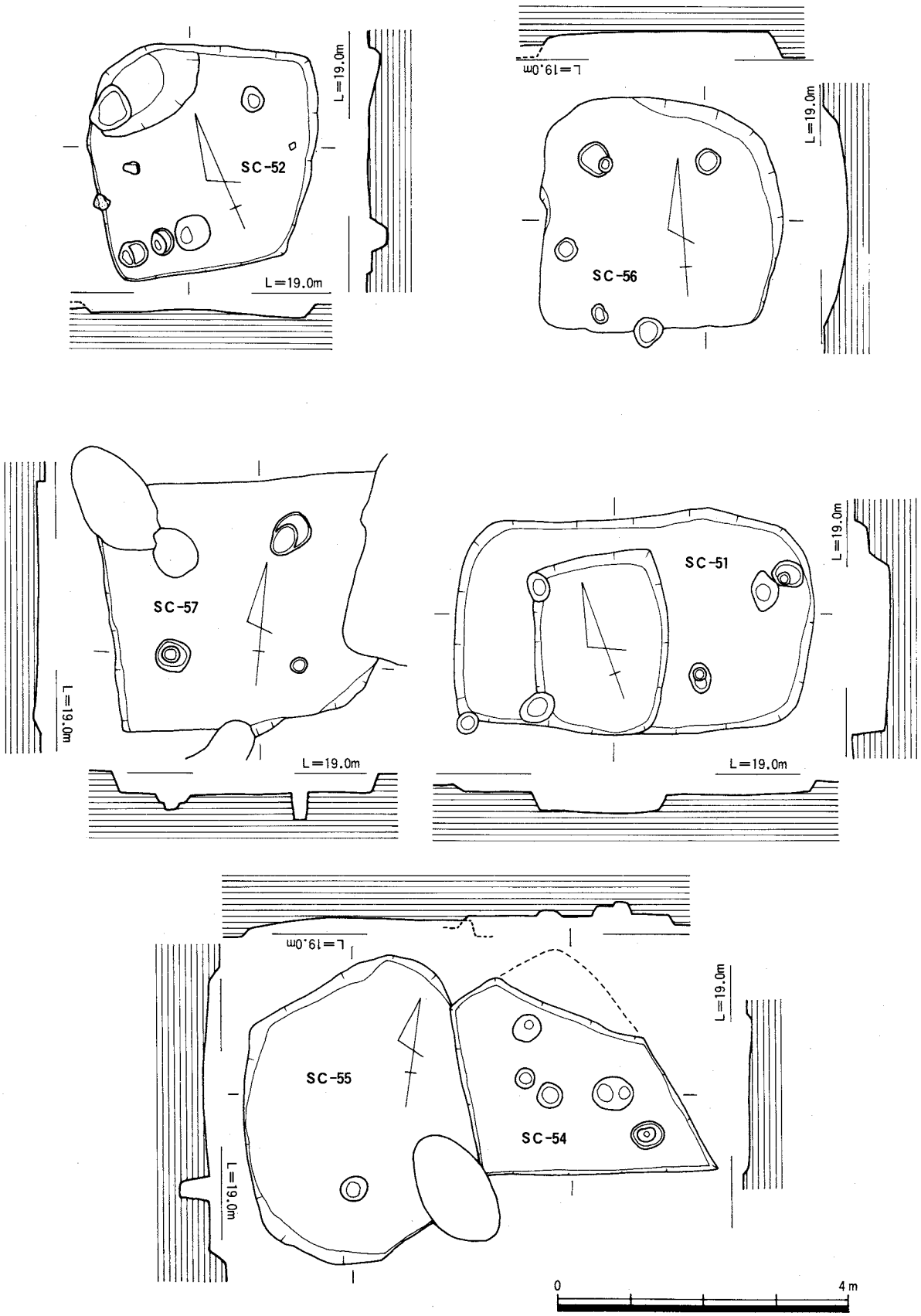


Fig. 48　Ⅳ区SC—51・52・54～57平面・断面図（縮尺1/80）

ＳＣ－63（Fig.47　PL.18）

ＳＣ－63はＳＣ－62の西側に位置し、ＳＣ－62を切り、ＳＣ－64・71から切られる長方形を呈する住居址である。また奈良時代の溝ＳＤ－100からほぼ1/3程度切られている。ＳＣ－63もＳＣ－62と同様に平面が削平を受け壁溝しか遺存していない。長軸4.0＋αｍ、短軸3.0ｍ、壁溝の深さ0.16ｍ、柱穴の深さ0.48ｍである。

ＳＣ－64（Fig.40　PL.18）

ＳＣ－64はＳＣ－63の南側に位置するが、そのほとんどを奈良時代の溝ＳＤ－100から切られ、残っているのは壁溝の一部だけである。

ＳＣ－50（Fig.47・58　PL.21）

ＳＣ－50は調査区の北側に位置し、ＳＤ－04から切られる。北側は削平が著しく壁面等が検出できなかった。また柱穴の検出も出来なかった。長軸3.0＋αｍ、短軸2.8ｍで、深さ0.05ｍと遺存状態は悪い。出土遺物はFig.58に図示した。

ＳＣ－51（Fig.48　PL.23）

調査区の北東部・ＳＣ－52の東側、ＳＣ－53の北側に位置する。住居址の中にＳＫ－172、壁面にＳＫ－127、194、193の甕棺墓によって切られている。長軸4.93ｍ、短軸3.1ｍ、深さ0.2ｍで、主軸をＮ－68°－Ｗにとる。住居址内に５個の柱穴があるが、住居址に伴う柱穴は見当たらない。時期を示す土器は出土していないが、切合い関係から弥生時代中期初頭と考えられる。

ＳＣ－52（Fig.48　PL.21・22）

ＳＣ－51の南側に位置し、ＳＣ－54を切る。しかしＳＸ－56によって切られている。全体に削平を受けており、遺存状態は非常に悪い。長軸3.12ｍ、短軸3.10ｍ、深さ0.18ｍの正方形に近い住居址でＮ－22°－Ｅに主軸をとる。住居址内に５個の柱穴があるが、住居址に伴う柱穴か否かは定かでない。

ＳＣ－54（Fig.48）

調査区中央部の甕棺墓密集地の北西側に位置し、ＳＣ－55を切るが、ＳＣ－52・57から切られるまたＳＸ－57からも切られている。遺存状態は悪く住居址の形をなしていない。現存する長さは、3.0×2.72ｍで深さ0.18ｍを測る。

ＳＣ－55（Fig.48　PL.21・22）

ＳＣ－55はＳＣ－54から切られる。またＳＫ－114～118、120、133、183の甕棺墓から切られ、住居址の痕跡がなくなるほどの破壊である。長軸4.1ｍ、短軸3.08ｍで、主軸をＮ－17°－Ｗにとる。かろうじて柱穴が１個残っているが、おそらく二本柱の住居址と考えられる。柱穴の大きさは0.3ｍ、深さ0.62ｍである。

ＳＣ－56（Fig.48　PL.22）

中央部の甕棺墓の中心に位置する住居址で、壁や中心部は甕棺墓の掘り方で不明瞭である。住居址の掘り方自体も不明瞭で浅い皿状を呈する。長軸3.25ｍ、短軸3.2ｍ、深さ0.38ｍを測る。

ＳＣ－57（Fig.48）

調査区の中央部にあり、甕棺墓ＳＫ－183～187、ＳＸ－56によって切られる。遺存状態は悪いが、長軸3.6＋αｍ、短軸3.4ｍ＋αｍの正方形の住居址と考えられ、深さ0.3ｍ程度の残り方である。柱は４本柱で、大きさは0.2～0.8ｍ、深さ0.4～0.7ｍである。

ＳＣ－58　ＳＣ－58はＳＣ－67・ＳＤ－02、甕棺墓によってそのほとんどが破壊され、平面プランで確認するのがやっとで削平も著しく全容は不明である。

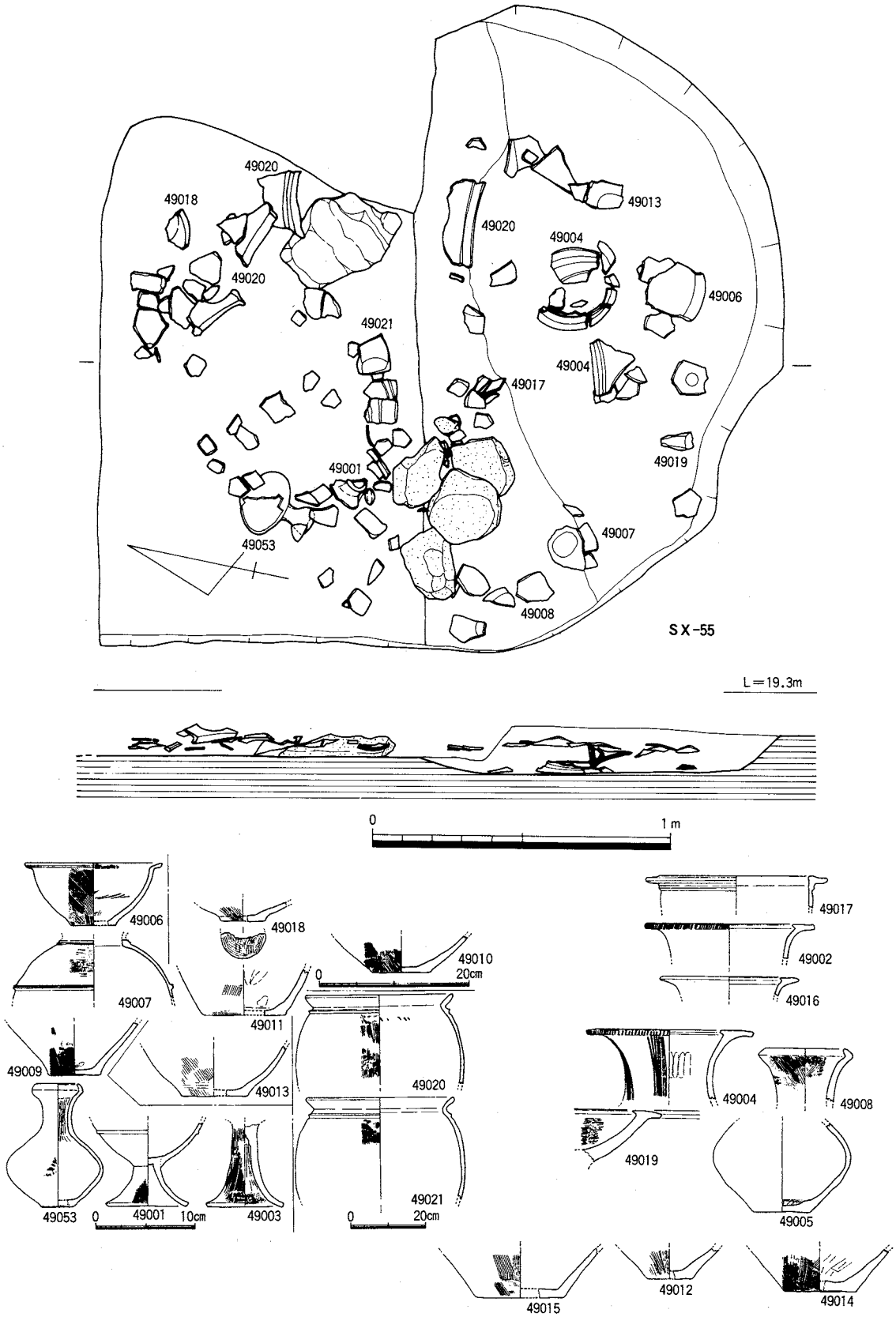


Fig. 49　Ⅳ区SX－55平面・断面図（縮尺1/6・1/8・1/16・1/20）

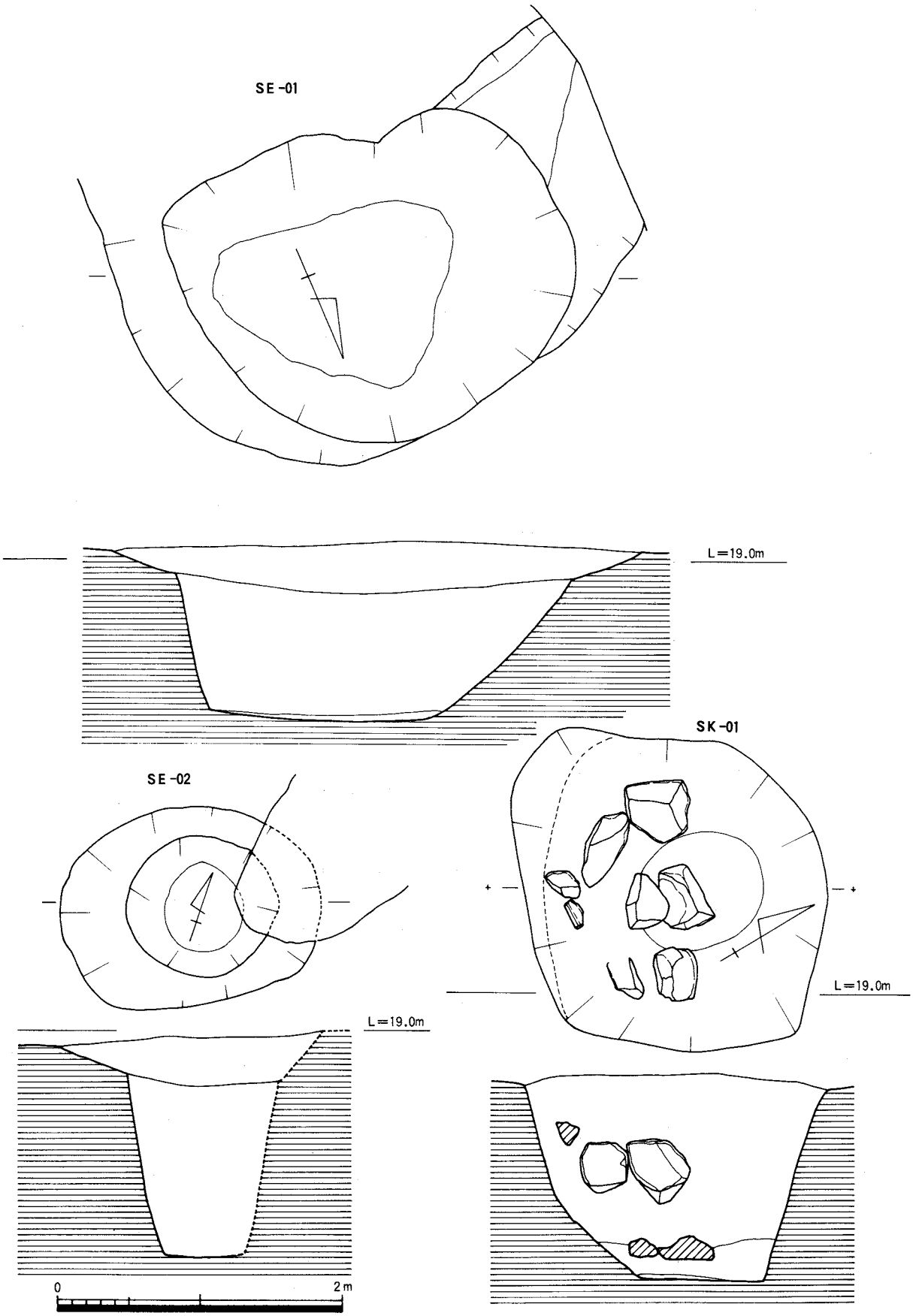


Fig.50　Ⅳ区ＳＥ－01･02、ＳＫ－01平面・断面図（縮尺1/40）

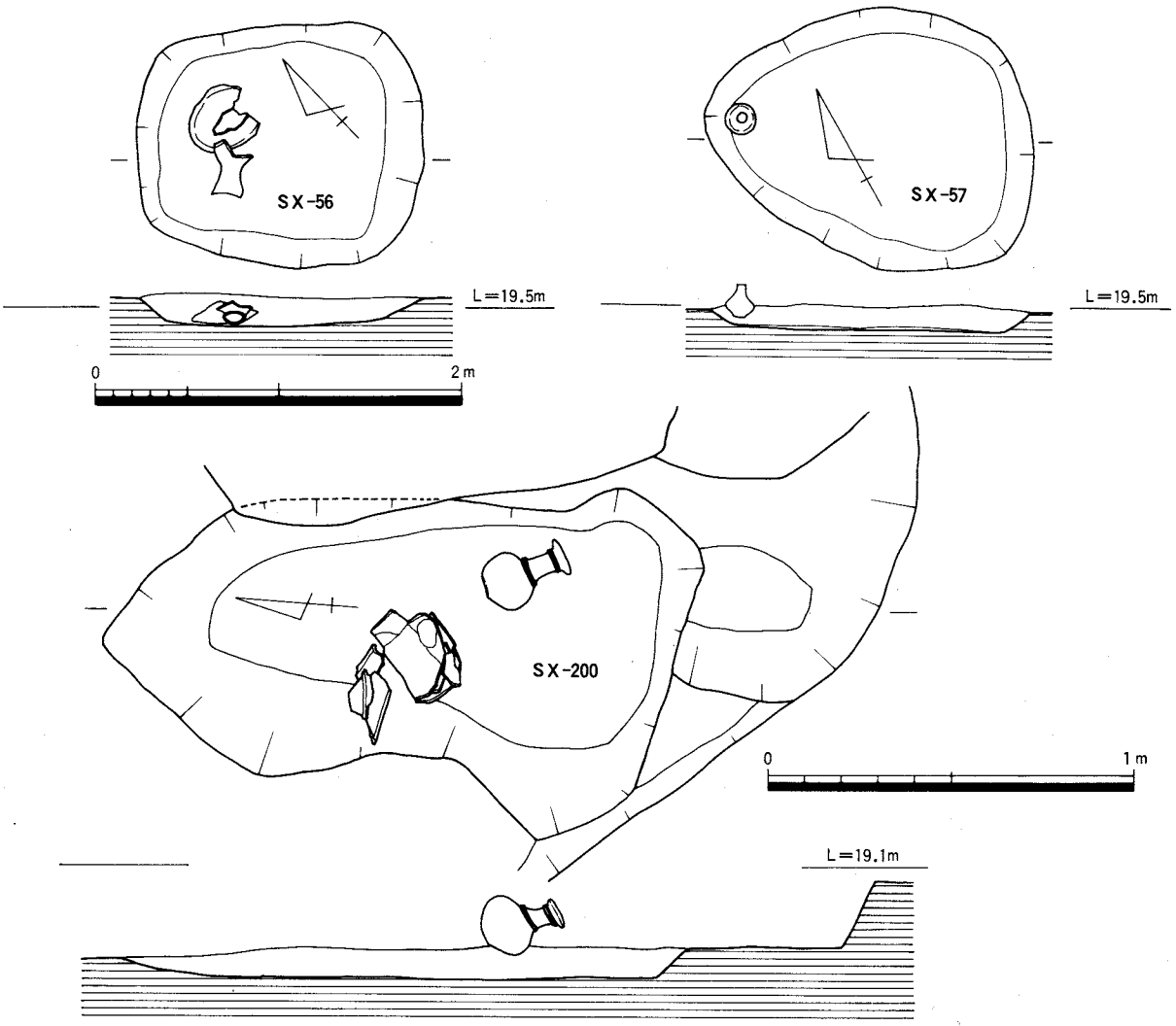


Fig.51　Ⅳ区SX－56･57･200平面・断面図（縮尺1/20、1/40）

4．土壙（Fig.49～51）

意味不明の竪穴を土壙とした。図示した土壙は、出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。

ＳＸ－55（Fig.49・59・60　PL.20・23）

ＳＣ－67を切り、ＳＫ－110、182から切られる不整形土壙である。石が集中し、丹塗土器が多いことから祭祀遺構と考えられる。長軸2.28m、短軸2.16m、深さ0.2mである。甕棺墓が切ることから不整形となるが、本来は円形の祭祀遺構で、削平を受けていることから深さも0.3m～0.5m程度と思われる。断面を見ると二段となる様相を示す。出土遺物はFig.59・60に図示した。時期は弥生時代中期中葉から後半である。

ＳＸ－56（Fig.51・60）

調査区の中央部、ＳＣ－54・57を切る土壙である。正方形を呈し、浅い皿状の断面を持つ。長軸が1.55m、短軸が1.32m、深さが0.16mである。出土遺物はFig.60に図示したが、ほぼ復元完形の高坏49025が出土した。

ＳＸ－57（Fig.51・60）

ＳＸ－57は調査区中央のＳＣ－52を切る形で検出土された。長軸1.78m、短軸1.45m、深さ0.15mの卵形土壙である。北西隅に壺形土器が出土したが、これは立った状態で出土しており、これからすると土壙の深さが0.50m程度であったことが窺える。この壺形土器は（Fig.60－49026）時期的には

Fig. 52　第一次調査弥生時代遺構分布図(Ⅳ区)(縮尺1/300)

弥生時代中期中葉と考えられる。

ＳＸ－200 (Fig.51・60)

ＳＣ－58・ＳＤ－02の東側にあるＳＫ－４の横から検出された。ＳＫ－４に伴う遺構と考えられる。土壙は不整形で二段の堀込みが行われている。長軸1.57ｍ、短軸0.95ｍ、一段目の深さは0.18ｍ、二段目は0.26ｍある。二段目から完形の壺形土器と甕形土器の口縁部が出土した。Fig.60－49047から中期中葉の時期と考えられる。

ＳＫ－01 (Fig.50)

ＳＫ－01は調査区の南東隅から検出した。周辺部には前期末～中期初頭の甕棺墓ばかりで、それに伴う土壙と考えられる。長軸2.18ｍ、短軸2.14ｍ、深さ1.45ｍの隅丸方形に近い土壙で主軸をＮ－36°－Ｅにとる。中からは0.4×0.5ｍ程度の角礫が８個検出された。また下層には灰黄褐色粘土層が0.3ｍ程堆積している。上部は黒色砂質土が厚さ1.2ｍ堆積していた。石はこの上層と下層との境にある。石材は本来、遺構の上部にあったものが、下に落下したものと考えられ石蓋土壙の可能性もある。出土遺物はFig.61－44012である。

５．井戸 (ＳＥ－01・02) (Fig.50　PL.24)

ＳＥ－01　調査区の南東側にあるＳＣ－65を切る形で検出した。上層確認では方形を呈したが、二段堀りとなっており、下面は楕円形を呈する。方形の大きさは、長軸3.8ｍ、短軸2.35ｍ、深さ0.34ｍ、楕円形の大きさは長軸2.94ｍ、短軸2.3ｍ、深さ1.27ｍである。井戸にしては浅い感もあるが、湧水点は約0.8ｍ～１ｍ附近にあり、常に水が湧き出していることから十分に井戸としての機能をはたしていたものと思われる。出土遺物は少量で図示にたえるものはないが、ＳＣ－65を切ることと、出土遺物から弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＥ－02

ＳＥ－02は調査区の中央部にあるＳＣ－51・52・53・56の中心部に位置し、ＳＫ－144から切られる。このＳＫ－144は弥生時代中期後半の時期で、それ以前に造られた井戸である。形状は卵形呈する円形で二段堀りを行っている。一段目は浅い皿状を呈するが、これはＳＥ－01と同様である。長軸1.84ｍ、短軸1.42ｍ、深さ0.35ｍ。二段目はほぼ円形を呈し、長軸1.08ｍ、短軸1.0ｍ、深さ1.20ｍである。地表下1.55ｍである。ＳＥ－01でも湧水点にふれたが、この地点でも１ｍ前後で湧水する。水量としては十分であり、ＳＥ－01よりも深い分だけ水量も豊富であったと考えられる。時期的にはＳＫ－144に切られていることや周辺に住居址が配置されていることからＳＣ－53の時期と同時期と考えられる。

６．溝状遺構 (ＳＤ－01～03) (Fig.38・53)

Ⅳ区では溝状遺構が五条検出した。その内ＳＤ－01～04の四条が弥生時代の溝状遺構であり、ＳＤ－100が奈良時代の溝である。Ⅳ区では奈良時代の遺構はこの溝１条だけであった。

ＳＤ－01　第Ⅲ区のＳＤ－01が調査区の南東隅10ｍを流れている。これは第一次調査Ⅱ区とⅣ区、第二次調査Ⅸ区とを切りはなす大溝である。

ＳＤ－02　Ⅳ区調査区を北から南へ流れる溝である。北西部から東西に流れる溝はＬ字状に方向を南にかえ、そのままＳＤ－01に達するものと思われる。長さ47ｍ、Ｌ部分４ｍ、幅2.5ｍ、深さ１ｍである。断面形状はＵ字形を呈する。ＳＣ－68を切ることから弥生時代後期である。

ＳＤ－03　ＳＣ－58の住居址部分からＳＣ－65の住居址中央部を破壊し、ＳＫ－79附近で消滅する溝である。長さ20ｍ、幅2.6ｍ、深さ0.8ｍのＬ字形に近いＵ字形を呈する。時期は、ＳＣ－65を切ることから、また、出土遺物から、弥生時代中期中～後半に位置付けられる。

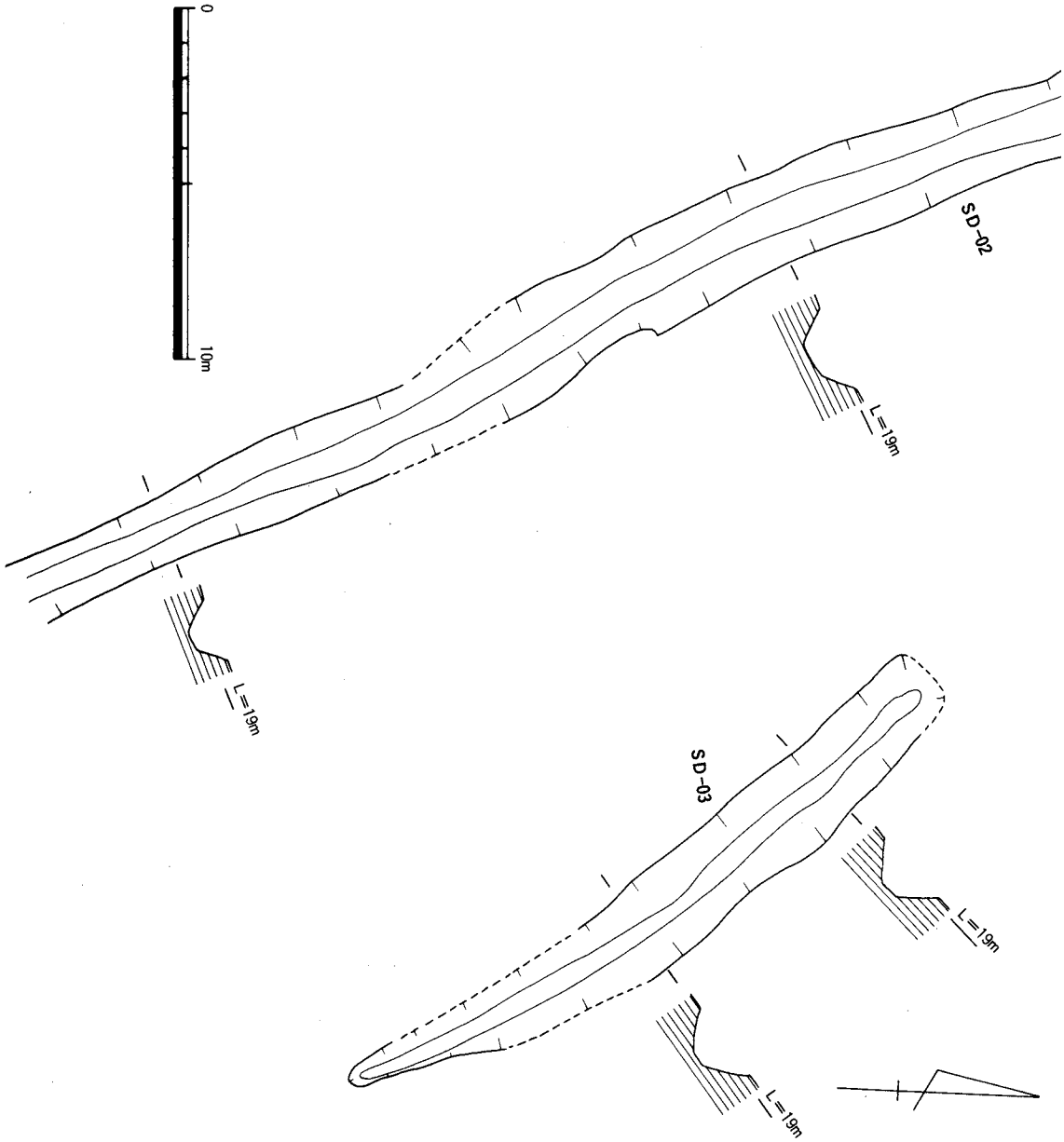
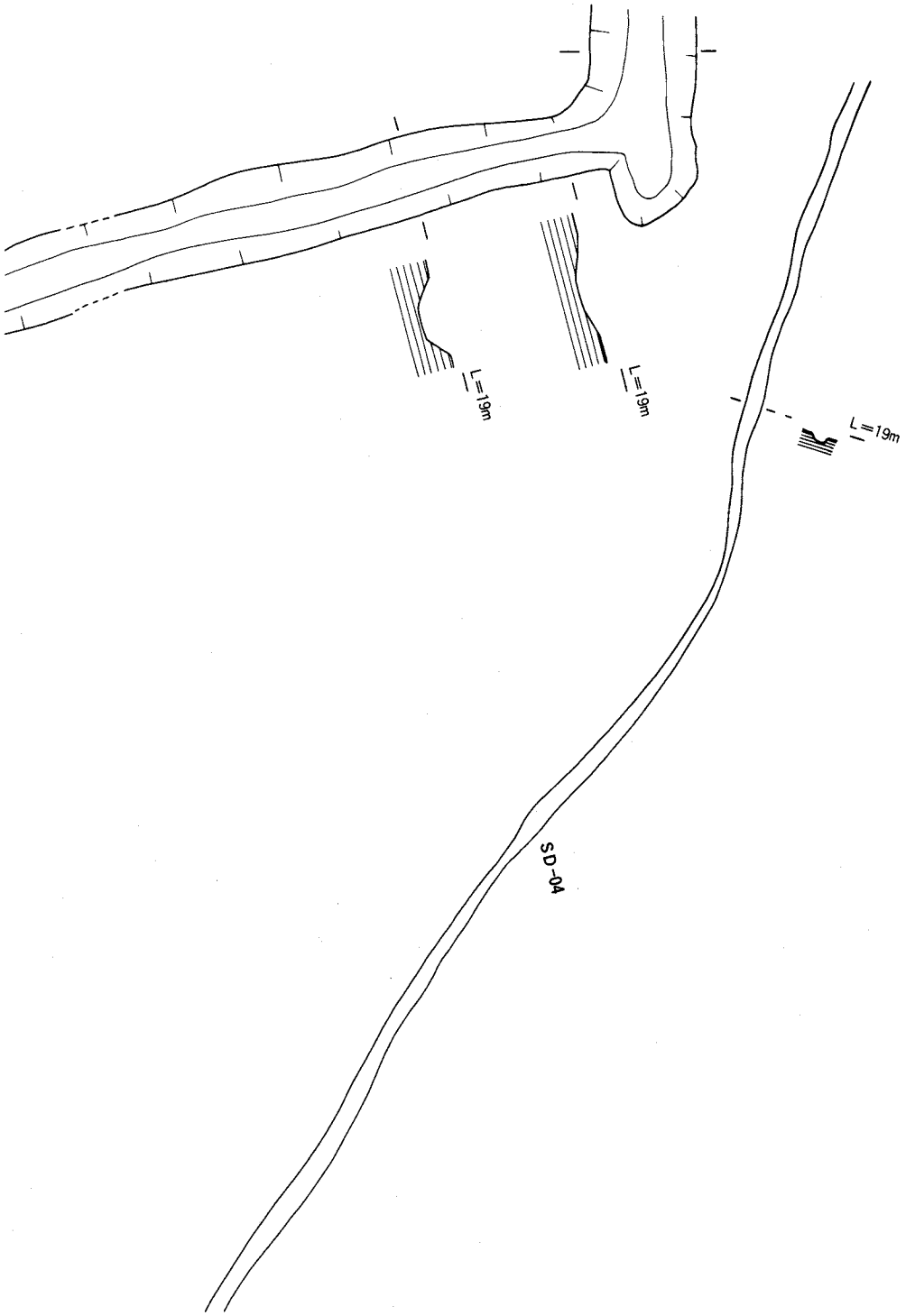


Fig. 53　Ⅳ区SD－02～04平面・断面図（縮尺1/200）


L=19m
L=19m
L=19m
SD-04

7．出土遺物

Ⅳ区から検出した遺構の内、弥生時代の生活遺構から出土した土器・石器は多量にある。その内の代表的な遺物を図示した。

① 土　器

Ⅳ区から出土した土器は住居址・溝・土壙からである。

住居址内出土土器（Fig.54～59・62）

ＳＣ－53出土土器（Fig.54・55－41001～41044・41141、62－41045　　PL.41～44・49）

ＳＣ－53は切合い関係のない住居址で、炭化した柱材等も検出した。遺物も多量に床面に張付いていた。甕形土器・壺形土器の出土が多い。

甕形土器　如意形口縁と平坦口縁に分けられ、如意形口縁は、口唇部に刻目を施すものと施こさないものとに細分される。如意形口縁を有する甕形土器は、胴部上位に一条及び二条の沈線を巡らす（41014～41016・41036）。平坦口縁も二種類に分けられる。口縁端部が平坦面を有するもの（41011・41008・41033・41034・41037・41019）と三角突帯状（嘴状）を呈する（41001・41005・41012・41017・41018・41141）ものがある。口縁部に刻目を施すものや胴部に三角突帯を巡らし刻目を入れるものがある。41045・41039は上記の分類にはいらない口縁で、如意形に開く口縁を呈するが、口縁部上端に粘土帯を貼り肥厚させている。口唇部上下に刻目を施すいわゆる金海式土器である。口径40cm。

41011（11とする）の口径は22cm、34が23cm、37が28cm、８が22cm、33が16.4cm、41が23cm、５が27cm、12が27cm、17が32cm、１が21cm、35が24cm、15が20cm、16が26cm、14が23cm、36が24cmでほぼ22～27cmにおさまる。

壺形土器　７点出土した。頸部がしまり、口縁は大きく外反する形態を呈する。三角突帯を持つもの（９・20・32）と二～三条の沈線を巡らすもの（２・13・21）に分けられる。32は口径8.6cmで頸部と胴部の境に三角突帯を巡らす。その下から綾杉文を配し、二条の沈線で区割している。21は口径16cmで、頸部と胴部との境に二条の沈線を巡らす。20は口径19cm、内外面ともヘラミガキを施し、三角突帯を一条巡らす。13は口径18.5cmで、頸部と胴部の境に二条の沈線を巡らす。

底　部　甕形土器の底部と壺形土器の底部を図示した。甕形土器底部は、底部端部が丸みを持ち上底を呈するタイプ（04・06・07・22・23・25・31）と端部がシャープで上底タイプ（24・29・30）、わずかに上底で端部がシャープなタイプ（26～28・41）、平底タイプ（03・40）の４つに分けられる。壺形土器の底部は、平底タイプ（44）と底部端部に段を有し上底を呈するタイプ（10・38）、底部端部が丸みを持つタイプ（42）の三つに分けられる。

ＳＣ－67出土土器（Fig.55－41046～41054）

ＳＣ－67からは少量の遺物しか出土しなかった。甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏・支脚と種類は豊富である。

甕形土器　口辺部の形態から二種類に分けられる。41051は口縁端部が下りぎみの形状を呈する平坦口縁に近い形態を持つ。41052は平坦口縁で口唇部に刻目を施す。

壺形土器　口辺部の出土はないが、底部から胴部にかけての破片41047が出土した。底径８cm。

鉢形土器・高坏・支脚　41053は鉢形土器の口辺部である。外面に刷毛目を施す。41054は高坏の口辺部である。平坦部が長くやや下りぎみである。41050は支脚で脚部を欠損する。中央部がわずかに凹む。

底　部　41046は平底で端部がシャープ、48は上底で端部が丸い、49は平底でやや丸みを持つ。

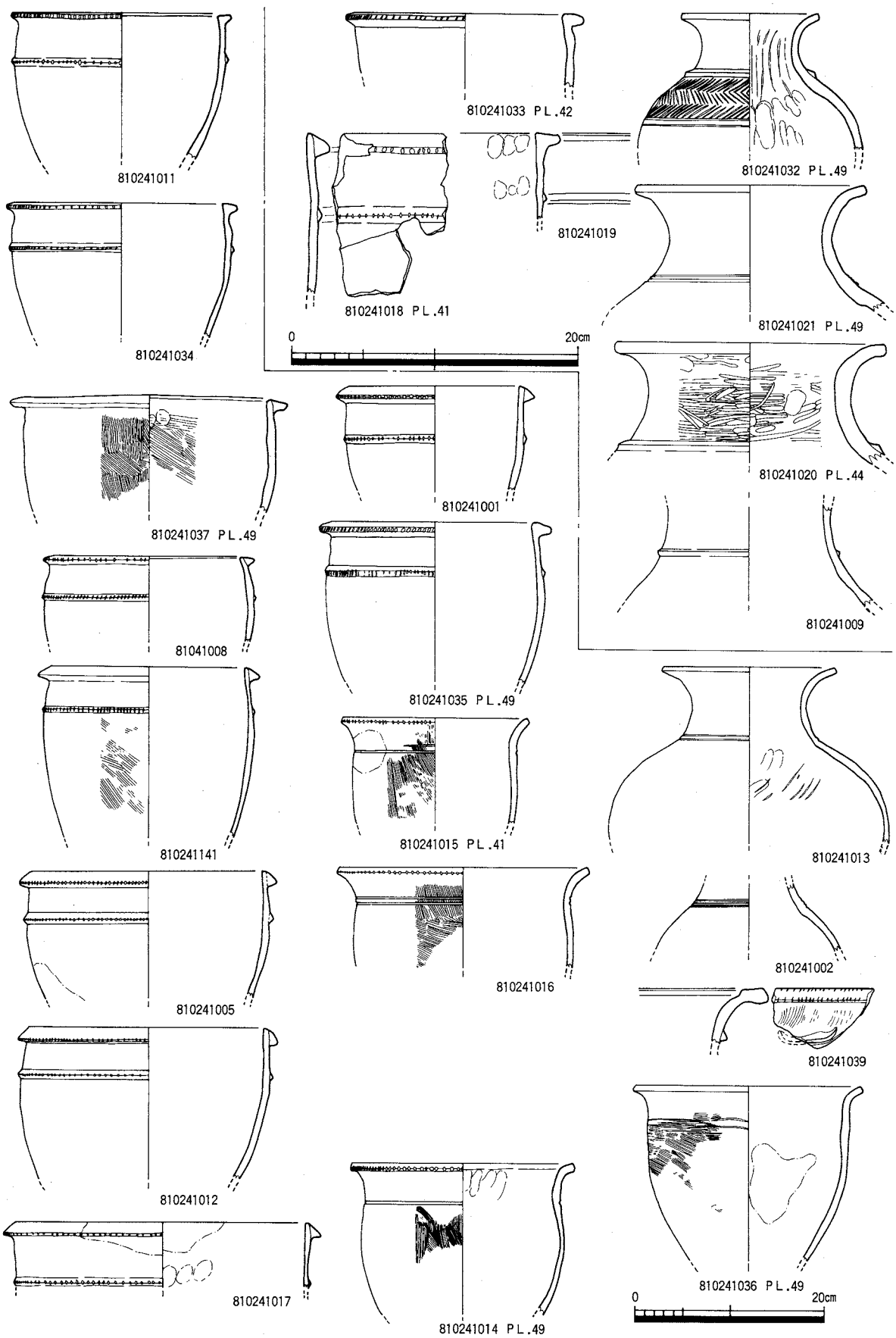


Fig. 54　Ⅳ区SC－53出土土器（縮尺1/4、1/6）

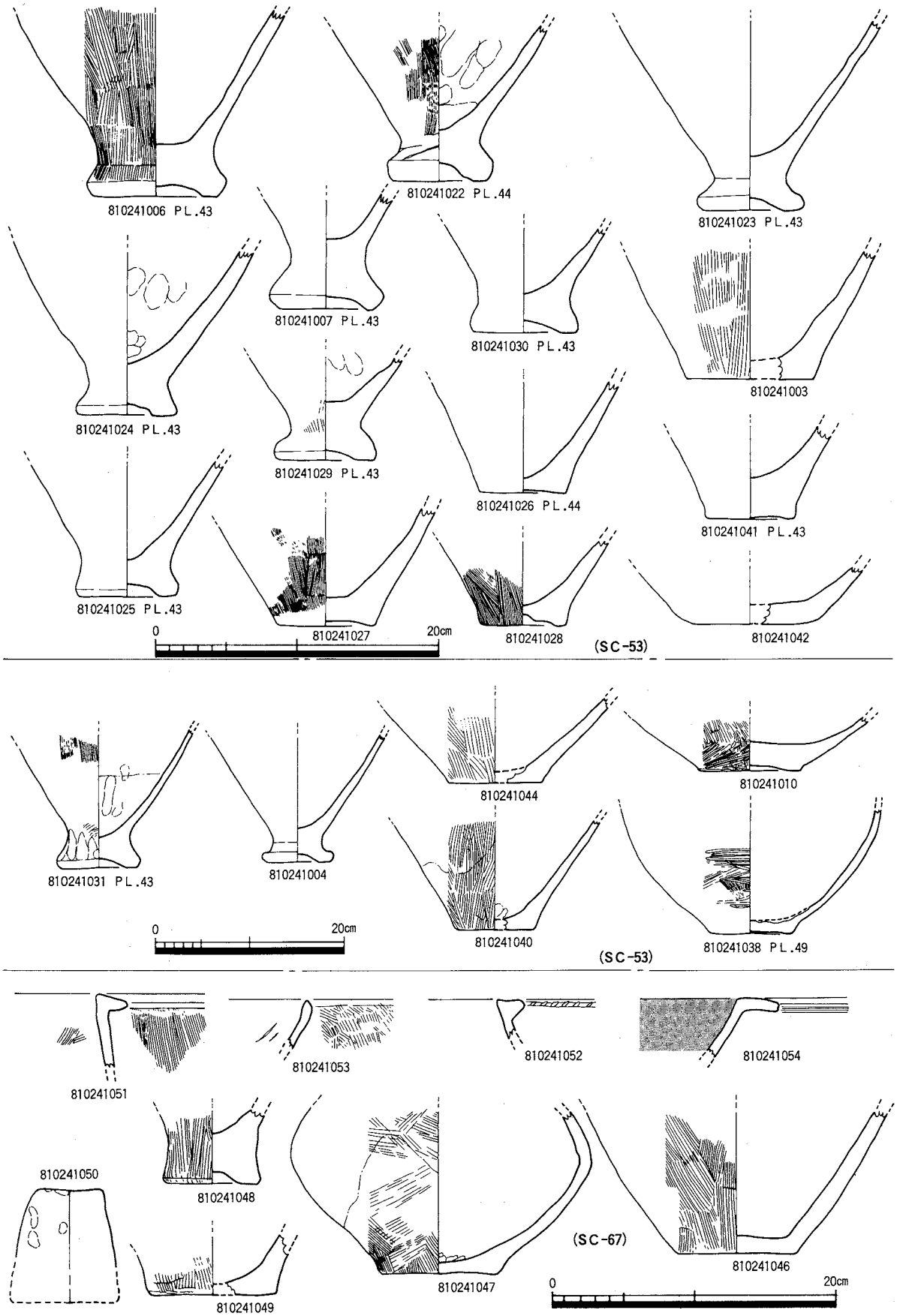


Fig. 55　Ⅳ区SC－53･67出土土器（縮尺1/4、1/6）

ＳＣ－65出土土器（Fig.56・57－41055～41101・41140）

Ⅳ区でもっとも土器が出土した住居址である。

甕形土器　口辺部形態により三つに分けられる。口縁部が平坦でわずかにつまみ出す形態を有するタイプ(41063・41098)、平坦口縁でつまみ出し部分がさらに引き伸ばされているタイプ(41100・41096)、口縁が「く」字状を呈するが、口唇部は短く外反するタイプ（41068～41070・41097）がある。

63（41063を指す）は完形で口径22.5cm、器高18.5cm、底径5.5cmである。外面全面に細かな刷毛目を施す。98は口径24.5cmで外面に刷毛目を施す。68は口径23.5cm、69は27cmで外面には細かな刷毛目調整を施す。70は口縁下に三角突帯を一条巡らし、外面の調整は刷毛目を施す。口径26.5cmである。96も70と同じく三角突帯を一条巡らす。口径27cm、97は口径30cmで口縁下に三角突帯を二条巡らす。100は口径22.5cmを測る。

壺形土器　口辺部形態により三つに区分できる。Ａタイプ　頸部から立上り口辺部で大きく外反する（41064～41066）、Ｂタイプ　口縁部が平坦面を有し、口唇部に刻目を施す（41140）。Ｃタイプ口辺部が鋤形を呈する（41101）。64は口縁部が欠損しているが、推定11.4cmの口径と考えられ、器高15.4cm、底径5.6cmを測る。頸部に一条の三角突帯を巡らす。65は小型壺形土器で口径7.2cm、器高９cm、底径3.2cmを測る。66は口径10cmで頸部に三角突帯を一条巡らせる。140は口径17.5cmを測り、頸部と胴部の境に一条の三角突帯を巡らせる。101は口径16cmで一条の三角突帯が巡る。

高坏　住居址床面から出土した（41067）。口縁形態は両端をつまみ出した鋤形口縁を呈する。口径は14cm。

器台　４点図示した。外面に刷毛目を施した41059～41061と筒形でヘラ削り、指オサエで終了している41062がある。

支脚　これも４点図示した（41055～41058）。上部中央部がわずかに凹む形状を呈する。

甕形土器底部　時間の制約上胴部との接合ができず底部のみの図化となった。底部形態から三つに分けられる。Ａタイプ　底部端部が角ばった丸みを持ち上底を呈する（73・76・78～80・82～85・88・90・95）12点で大半を占める。外面には丁寧な縦刷毛目を施す。Ｂタイプ　上底であるが端部がシャープである(71・75・77・81・86・87・89・93)。Ｃタイプ　タイプ的にはＢタイプであるが、底部がわずかに上がる程度のもの(99)。Ｄタイプ　端部がシャープな造りで平底を呈する（74）がある。

壺形土器底部　３点図示した。底部端部がシャープな造りの91・94とやや丸みのある92に分けられ91の底径７cm、94が５cm、92が7.2cmを測る。

ＳＣ－73出土土器（Fig.58－41102～41108）

甕形土器の口辺部と底部、器台を図示した。

甕形土器　甕形土器口辺部は如意形に開くタイプ41106～41108と平坦口縁41104、41105とに分けられる。如意形口縁部には口唇部下位に刻目を入れる。41108は頸部下に一条の沈線を巡らし、外面は細かな刷毛目を施している。口径30cmを測る。底部はＡタイプのもので底部端部が角ばった丸みを持ち上底を呈する。

ＳＣ－68出土土器（Fig.58－41109、41110）

ＳＣ－68は切合い関係が複雑で攪乱が多く出土遺物も少ない。甕形土器２点を図示した。

甕形土器　109は口縁つまみ出し部分が嘴状を呈する。110も同様で、口唇部に刻目を入れる。

ＳＣ－70出土土器（Fig.58－41115～41118）

ＳＣ－70もＳＣ－68と同様に切合い関係が著しく攪乱が多い。図示できたのは４点である。

甕形土器　平坦口縁を呈する115と如意形に開き口唇部に刻目を施す116がある。117は甕形土器の

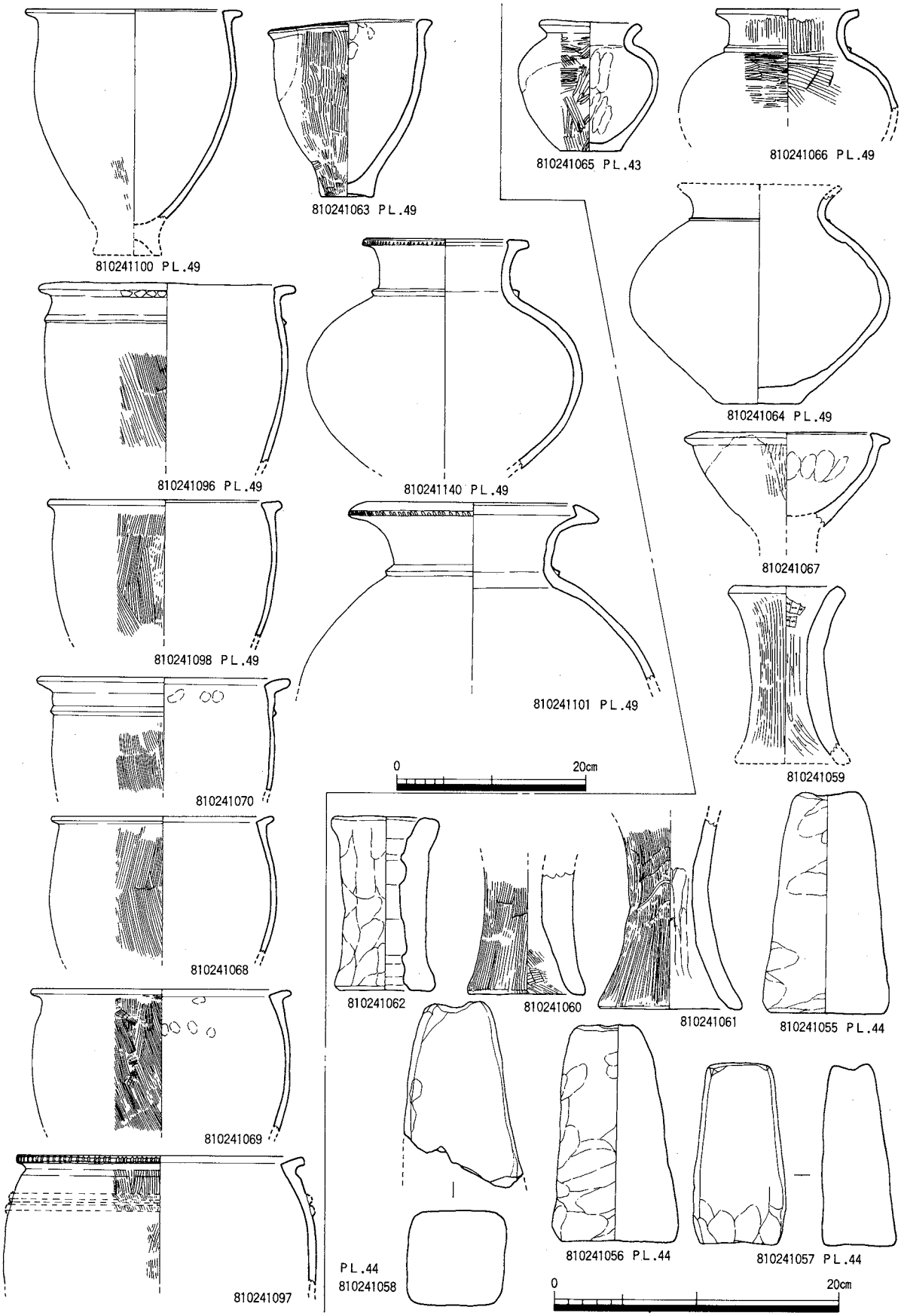


Fig. 56　Ⅳ区SC－65出土土器－1（縮尺1/4、1/6）

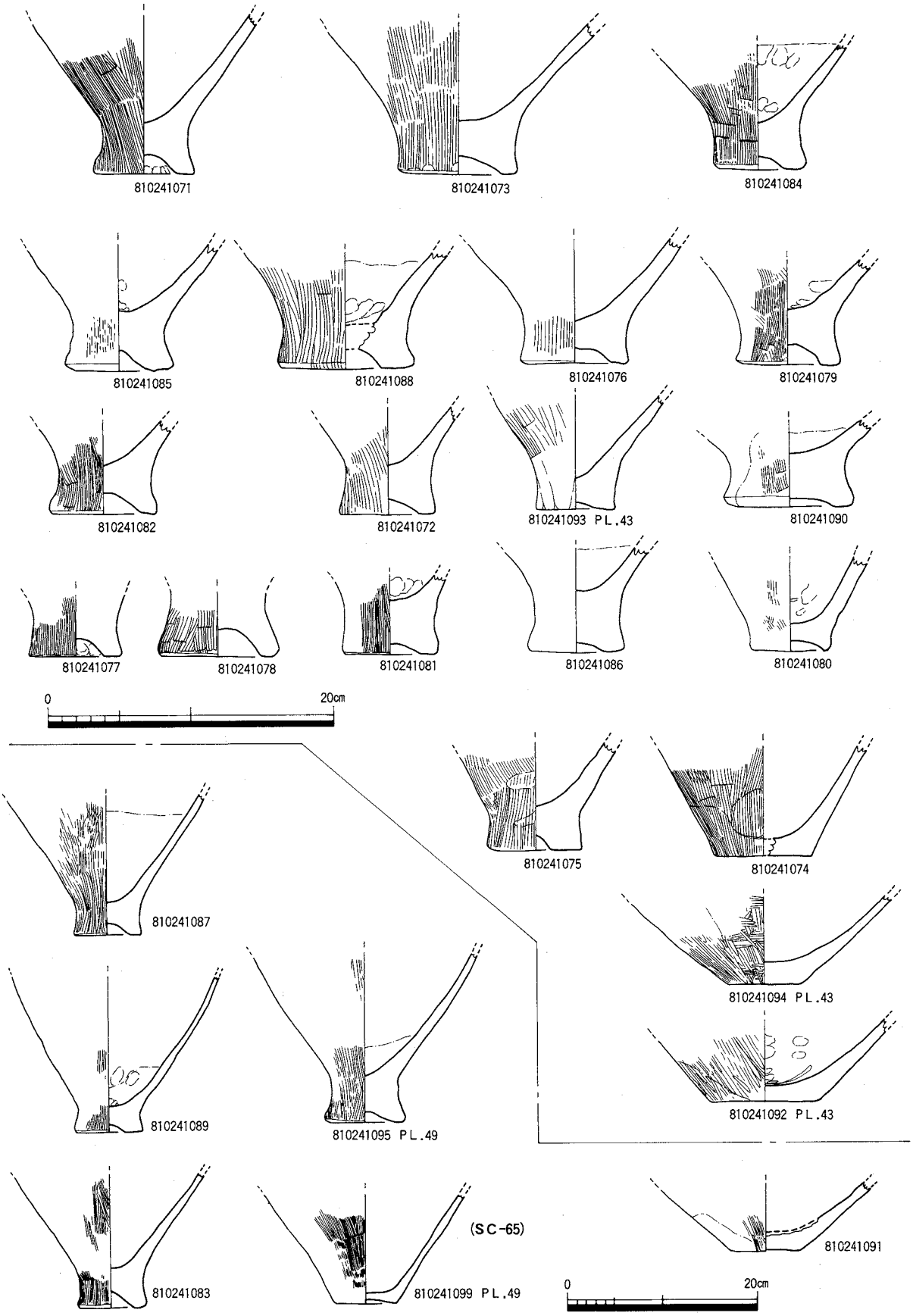


Fig. 57　Ⅳ区SC－65出土土器－2（縮尺1/4、1/6）

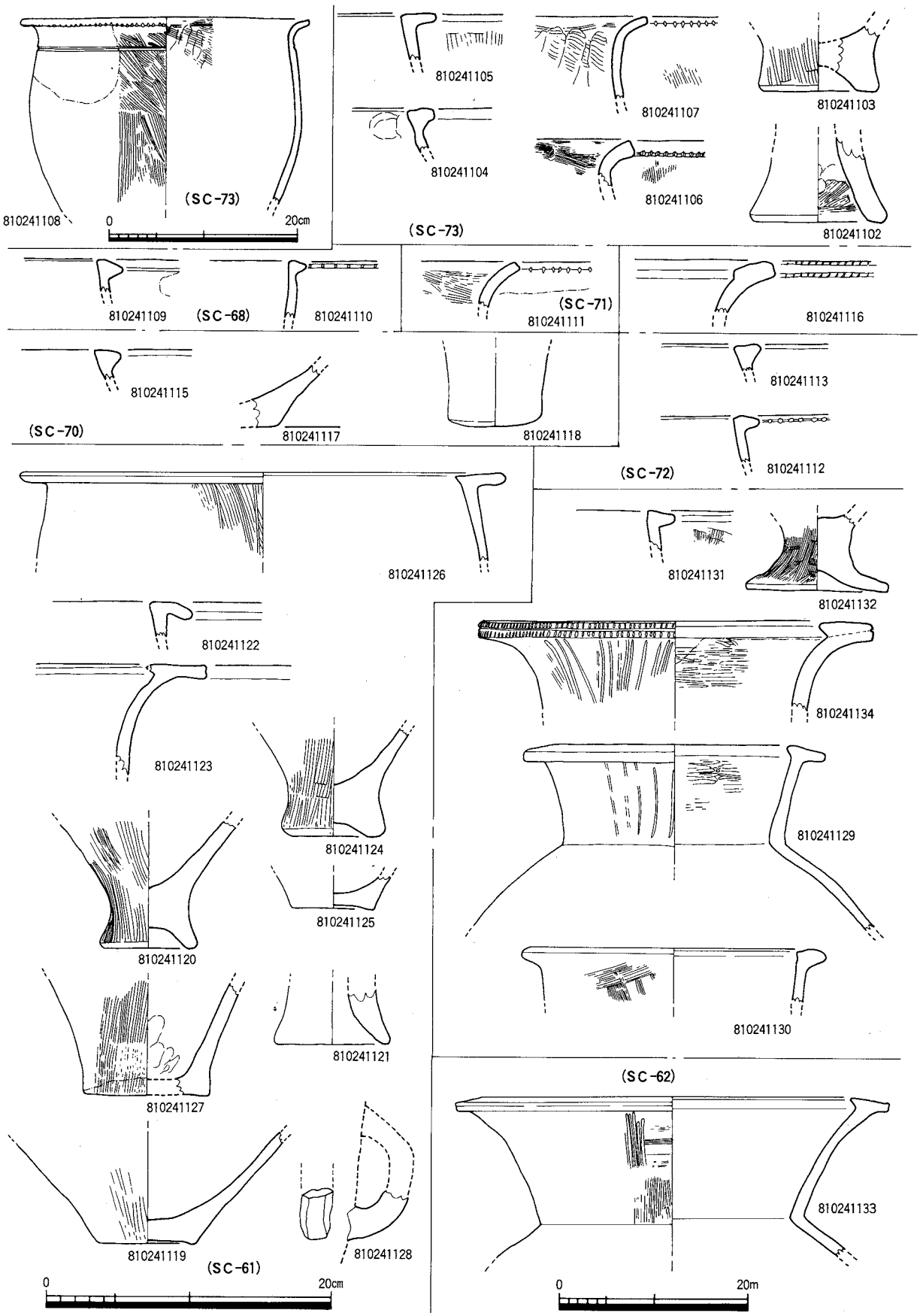


Fig. 58　Ⅳ区SC－61・62・68・70～73出土土器（縮尺1/4・1/6）

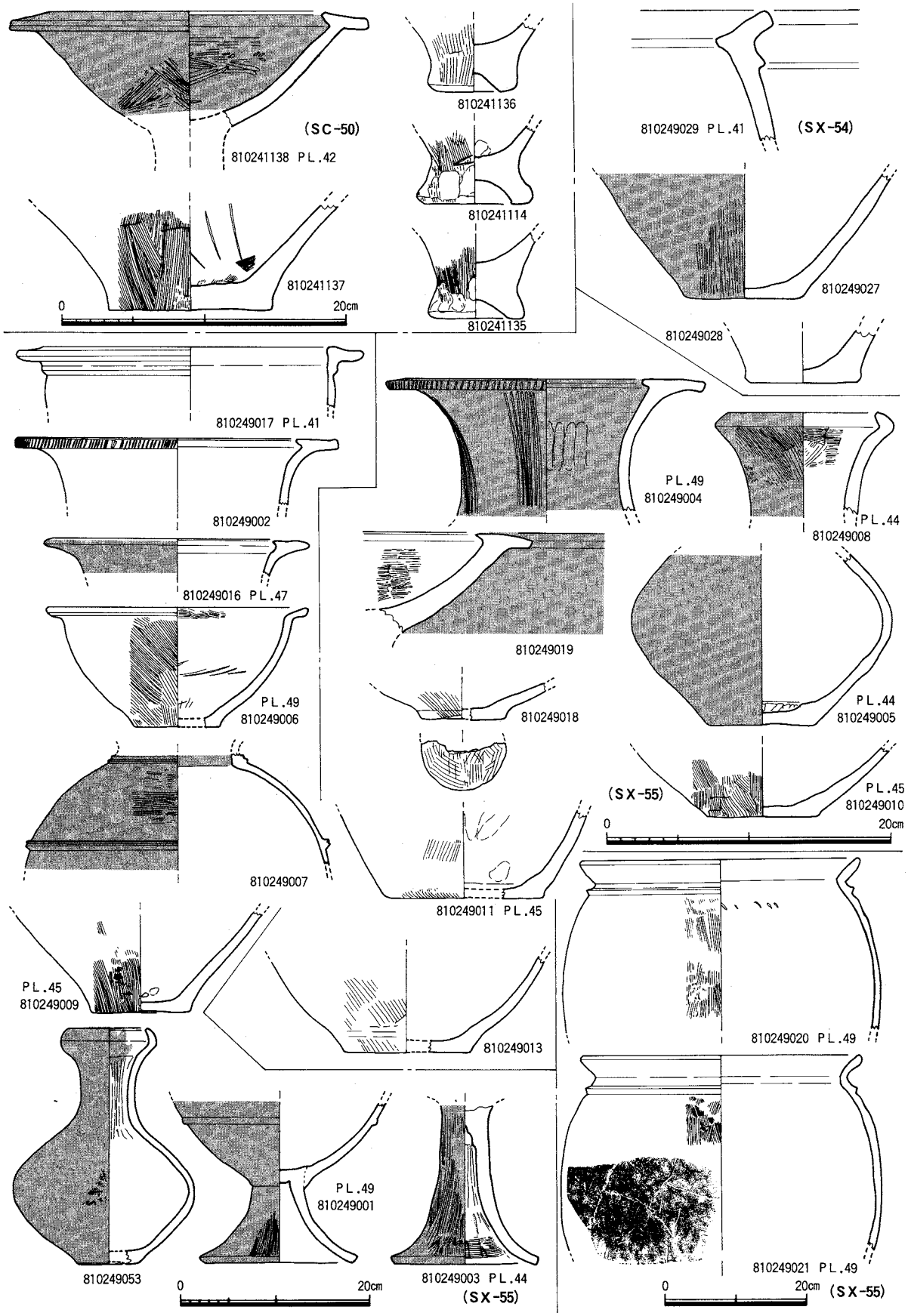


Fig. 59　Ⅳ区SC－50、SX－54・55出土土器（縮尺1/4・1/6・1/8）

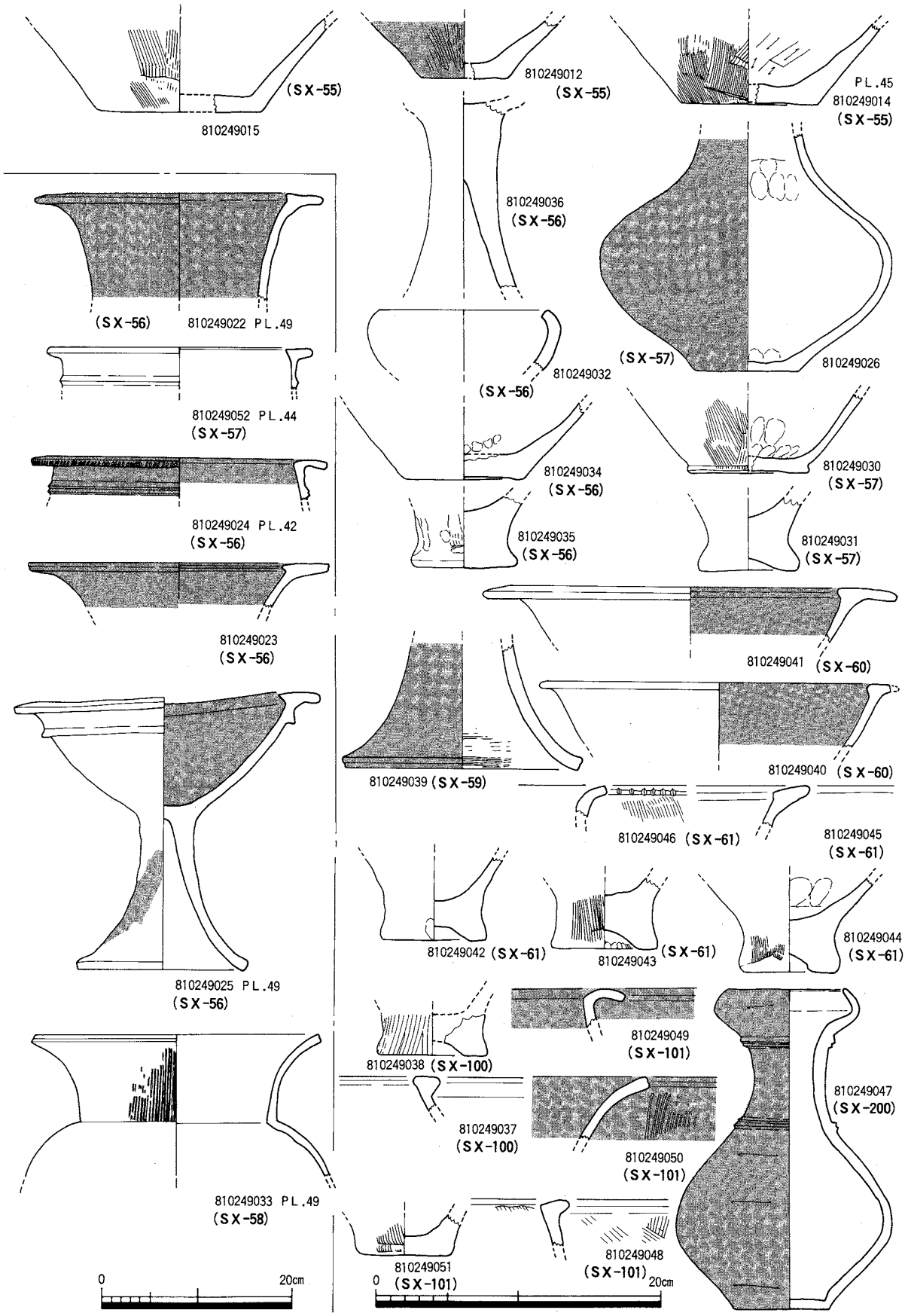


Fig. 60　Ⅳ区SX－55～61・100・101・200出土土器（縮尺1/4・1/6）

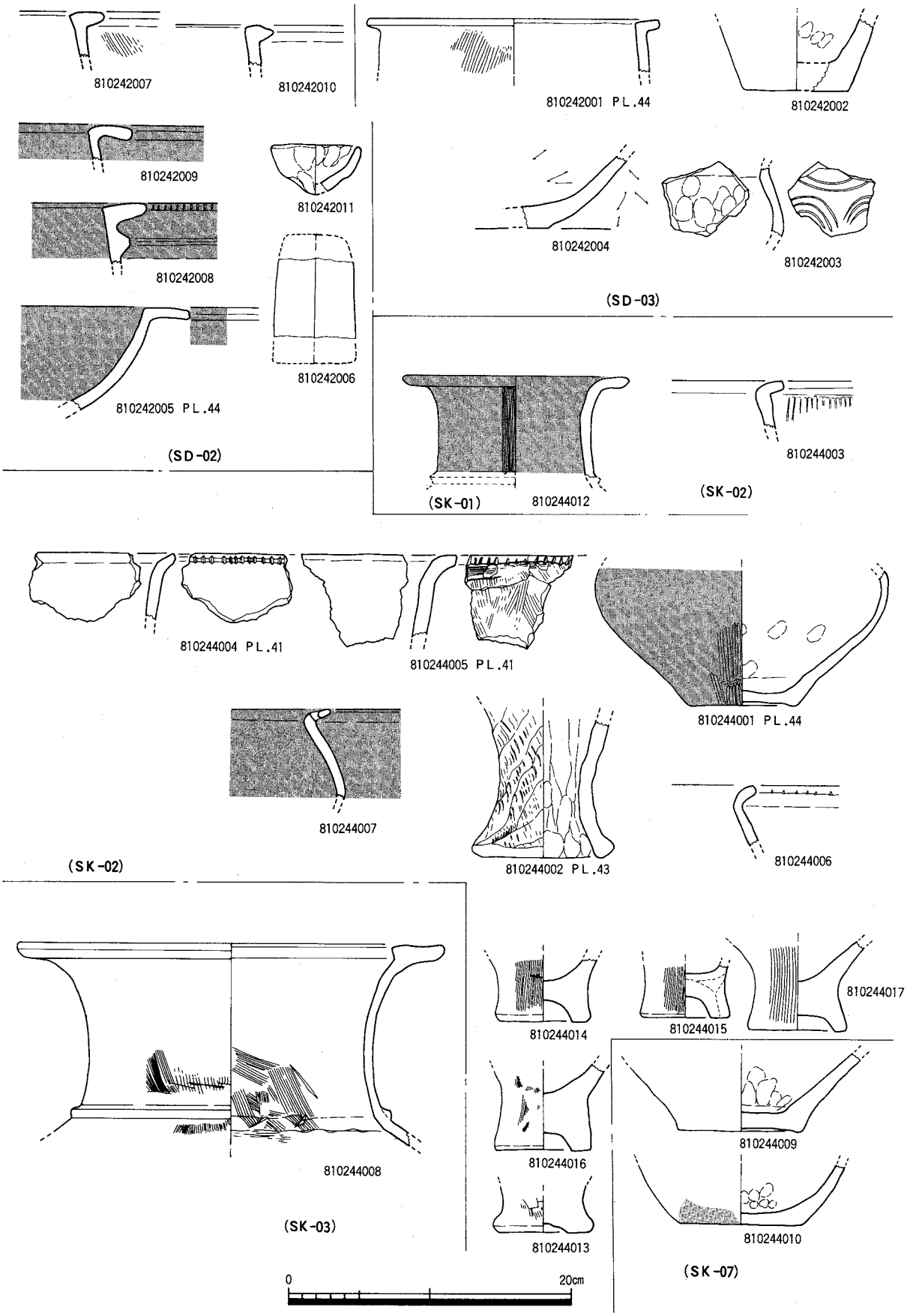


Fig. 61　Ⅳ区SD－02･03、ＳＫ－01～03･07出土土器（縮尺1/4）

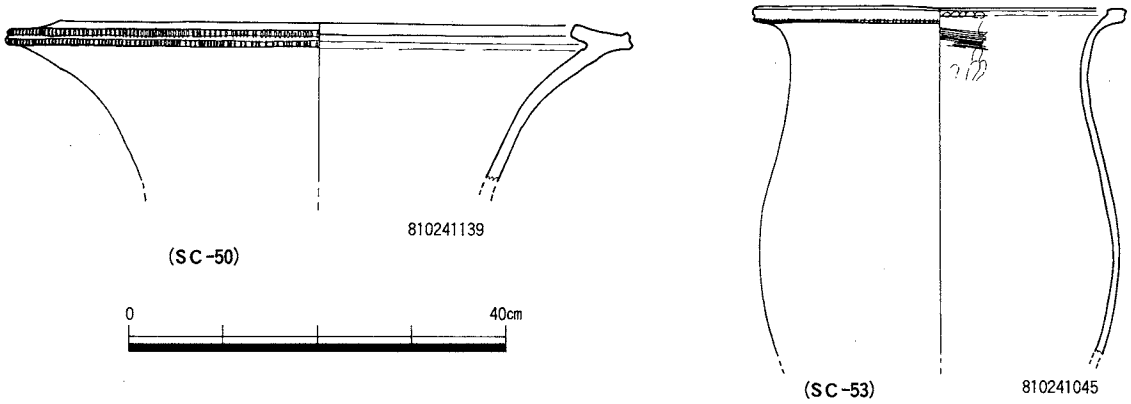


Fig. 62　Ⅳ区ＳＣ－50･53出土土器（縮尺1/8）

底部であり、118は支脚の一部である。

ＳＣ－71出土土器（Fig.58－41111）

ＳＣ－71は、切合い関係から攪乱が多く出土遺物も少ない。図示した１点は甕形土器口辺部で如意形を呈する。

ＳＣ－72出土土器（Fig.58－41112・41113）

切合い関係が著しい所であるため出土遺物も少なく時期を示す土器も図示した二点である。41112はわずかに口唇部をつまみ出し嘴状を呈し、端部に刻目を施す。41113は平坦口縁で中央部がわずかに凹む形状を呈する。

ＳＣ－61出土土器（Fig.58－41119～41128）

ＳＣ－61から出土した遺物は少量で図示できたのは10点である。

甕形土器　41122は甕形土器の口辺部である。平坦口縁の部類に属するが、口唇部が下がる形状を呈する。41126は平坦口縁で内部に引き伸す形状を呈する。口唇部は長く引き伸ばされ端部を丸く納めている。外面は刷毛目調整を施し、口径34cmを測る。

壺形土器　41123は壺形土器の口縁部である。口縁端は平坦であるが、内側に嘴状を呈するつまみ出しがあり、口唇部は長く引き伸している。

底部　41120・41124・41125・41127の４点が甕形土器の底部、41119が壺形土器の底部である。41121は器台、41128は細片であるが把手と思われる。

ＳＣ－62出土土器（Fig.58－41129～41134）

ＳＣ－62からは６点図示した。切合い関係が著しいため少量の遺物しか出土しなかった。

甕形土器　甕形土器の口辺部は41130・41131の２点である。130は平坦口縁で口唇部を少し引き伸ばす形状を呈する。外面は刷毛目を施している。口径21.2cmを測る。131は口唇部がやや下りぎみの甕形土器の口縁部である。132は脚付甕（壺）形土器の脚部である。外面には細かな刷毛目調整が行われている。裾径は10cmを測り、現高５cmである。

壺形土器　134は口縁が平坦で口唇部中央に一条の沈線を巡らし縦に刻目を施す壺形土器である。口辺形態は鋤形口縁を呈する。内面は横方向の刷毛目、外面はミガキの後暗文を配する。口径27.4cmを測る丹塗り土器である。129は口唇部がやや下がりぎみの「Ｔ」字状口縁に近い形状を呈する壺形土器である。内側はミガキを施し、外面は暗文を配する丹塗り土器である。口径21.1cmを測る。133は鋤形口縁を呈する壺形土器である。やや口唇部が下がる。外面は刷毛目を施し、口径30.2cmを測る。

ＳＣ－50出土土器（Fig.59－41114・41135～41138、62－41139　PL.42）

ＳＣ－50は調整区の北側に位置し、削平が著しく住居址の南半分しか遺存していなかった。この部分に土器が一括して出土した。

大型壺形土器　139は大型壺形土器である。鋤形口縁の形状を呈する。口唇部には一条の沈線を巡らせ縦の刻目を施している。口径66.4cmを測る。137は大型壺形土器の底部である。底部端はシャープで、外面は細かな刷毛目調整を施している。底径11.2cmを測る。

甕形土器底部　135・136は甕形土器の底部である。底部端が角ばりながら丸みを持ち上底タイプで、外面に刷毛目調整を施している。

高坏　138は高坏の坏部である。口辺形態は「Ｔ」字状口縁を呈する。内外面ともヘラミガキを施し丹を塗っている。口径25cmを測る。

土壙・溝出土の土器（Fig.59～61）

土壙（ＳＸ・ＳＫ）出土土器

土壙は14基検出した。それぞれ土器を伴い時期が明らかなものばかりである。

ＳＸ－54出土土器（Fig.59－49027～49029）

29は鋤形口縁の形状はするが、内側につまみ出した部分が下に下がり一見「く」字状口縁を呈する。口縁直下に三角突帯を一条巡らす。

ＳＸ－55出土土器（Fig.59・60－49001～49021・49053　PL.41・44・45・49）

ＳＸ－55からは多量の土器が出土した。その内25点を図示した。甕形土器の口縁部は49017・49020・49021である。17は平坦口縁で、口縁は長く中央部がわずかに凹む。口縁直下に三角突帯を一条巡らす。口径24cmを測る。20・21は同形状を呈する。口縁は「く」字状口縁で、頸部と胴部の境に一条の三角突帯を巡らす。外面は刷毛目調整を施す。21の外面にヘラ描き文様があるが意味不明である。20の口径38.8cm、21が39.2cmである。

壺形土器　壺形土器の口辺部を３点図示した。49002は口縁が平坦で鋤形を呈する。口唇部は長く引き伸す。外面に刻目を施す。49004は２と同形状を呈するが、口唇部がわずかに下がりぎみである。口唇部に刻目を施し、内面はヘラケズリ、外面は暗文を配する。二点とも丹塗り土器である。49016は口唇部端部が丸みを持ち刻目は施さない。２の口径は34cm、４は22.2cm、16は27.5cmである。７は胴部で胴部上位と頸部の二ヶ所に「Ｍ」突帯を巡らす。最大径は胴部中位にあり31.5cmを測る。

袋状口縁壺　時期差のある二点が出土した。８は口縁端部に稜を有し、逆「く」字状を呈する。内外面とも刷毛目調整を施す。口径10.2cm。53は口縁部が丸みを持ち稜をなさず袋状を呈する。頸部はよく締まり長い。口径８cm、器高25cm、底径６cmを測る。

鉢形土器　49006が鉢形土器である。「く」字状口縁を呈し、内面はケズリと刷毛目を施し、外面は全面に刷毛目を施す。口径27.5cm、器高12.5cm、底径12cmを測る。

高坏　49019は高坏の坏部破片である。鋤形口縁を呈し、口唇部が下がりぎみである。内面は刷毛目、外面はナデ仕上げを施した後、丹を塗っている。49001は口縁部を欠損する高坏である。坏胴部に一条の三角突帯を巡らす。脚は低く短いが裾は広がる。裾径15.5cmである。49003は脚部のみで坏部が欠損している。脚部は長く裾径15cmを測る。この三点とも丹塗り土器である。

底部　甕・壺形土器の底部を図示した。49018の底面にはヘラによる刻みがある。

ＳＸ－56出土土器（Fig.60－49022～49025・49032・49034～49036・49052　PL.42・49）

ＳＸ－56からは10点を図示した。ＳＸ－56はＳＣ－54・57を切る形で検出されている。

甕形土器　52は平坦口縁で内側につまみ出しが大きく「Ｔ」字状口縁に近い。しかしまだ「Ｔ」字状口縁までには至っていない。頸部下位に一条の三角突帯を巡らす。口径28cmを測る。24は52と同じ

平坦口縁であるが、内側のつまみ出しがなく逆「L」字状口縁を呈する。口唇部が長く引き伸ばされやや下がりぎみとなる。口唇部には刻目を施している。頸部下には二条の三角突帯を巡らすが、突帯自体が近いため断面が「M」形に近い形となる。口径31cmを測る。二点とも丹塗り土器である。

壺形土器　22は口縁が平坦で鋤形口縁を呈する。頸部はしまらずほぼ垂直におりる。23も22と同様の口縁形態を持つが、頸部は絞まる。22の口径は30cm、23は31.5cmである。

鉢形土器　鉢形土器は1点出土した。32は底部から内湾しながら外に開いた胴部が、口縁近くで内に急激に入る。口径12cm。

高坏形土器　25は高坏の完形品である。口縁は鋤形口縁であり、口縁下に三角突帯を一条巡らす。三角突帯は上部が長く下に垂下がった状態である。脚部は裾が開かず、端部は丸く仕上げている。口径32cm、全長28.5cm、坏高11cm、脚径17.5cm、裾径18cmで、丹塗り土器である。36は脚部であるが、裾も欠損している。

底部　甕形土器の底部35と壺形土器の底部34がある。底径は35が7.4cm、34が8.6cmである。

ＳＸ－57～61（Fig.60－49026・49030・49031・49033・49039～49046　PL.49）

ＳＸ－57からは3点図示した。ＳＣ－52を切るが、ＳＫ－128によって切られる。26は口縁部を欠損する壺形土器である。現長16.6cm、底径7.2cm、最大径は胴部にあり21.5cmを測る。30は壺形土器の底部で、やや上底ぎみで胴部との境に稜を持ち、底径8.4cmである。31は甕形土器の底部である。底径7cmで上底を呈する。

ＳＸ－58からは壺形土器が出土した。如意形に開く口縁部を呈し、頸部の締りはない。口径30.4cmを測る。**ＳＸ－59**からは高坏脚部を一点図示した。裾径16.8cmである。ＳＸ－60からは高坏の坏部二点を図示した。両方とも鋤形口縁部を呈する。40が25.4cmの口径、41が29cmの口径を呈する。

ＳＸ－61からは5点図示した。46は如意形口縁の甕形土器口辺部で、口唇部に刻目を施す。45は壺形土器の口辺部で、鋤形を呈する。42～44は甕形土器の底部で上底を呈する。

ＳＸ－100・101・200　ＳＫ－01～03・07

（Fig.60・61－49037・49038・49047～49051・44001～44010・44012～44017　PL.41・43・44）

ＳＸ－100からは2点図示した。37は平坦口縁の甕形土器口辺部である。38は甕形土器の底部で、上底を呈する。**ＳＸ－101**からは4点を図示した。48は平坦口縁とも「く」字状口縁ともとれる甕形土器の口辺部である。50は如意形に開く甕形土器の口辺部である。49は口縁部を大きく湾曲させた口辺部の壺形土器である。**ＳＸ－200**からは完形品の袋状口縁壺を図示した。頸部の上下に各々二条の三角突帯を巡らせる。二条の突帯が近いためあたかも「M」字状を呈する突帯に見える。胴部最大径は中位下にあり15cmを測る。口縁部は一度外に外反するが、稜を持たず内湾しながら立上り、やや内に入った所でおさめている。口径8cm、器高22.4cm、底径6.8cmを測る。**ＳＫ－01**からは口径16cmの壺形土器が出土した。**ＳＫ－02**からは「く」字状口縁を呈し、口唇部に刻目を施す3～6、有蓋付小型壺（7）、壺形土器片（1）、器台（2）、甕形土器底部5点が出土した。**ＳＫ－07**からは壺形土器2点。**ＳＫ－03**からは鋤形口縁を呈する壺形土器口辺部が出土した。頸部下位に三角突帯を一条巡らす。口径30cmを測る。

溝（ＳＤ）出土の土器　ＳＤ－02出土土器（Fig.61－42005～42011　PL.44）

ＳＤ－02は調査区の西側に南から北に向って造られた溝で、途中で直角に方向をかえ西に向かう。ＳＣ－68・73を切るが、奈良時代の溝によって切られる。このＳＤ－02から出土した土器はあまり多くない。その内の7点を図示した。甕形土器の口辺部は4点を図示した。平坦口縁であるが、口唇部の形態が少しずつ異なる。5は高坏坏部、11は手捏土器、6が支脚である。

ＳＤ－03出土土器（Fig.61－42001～42004　PL.44）

ＳＤ－03は調査区南東部にＳＣ－58・65の間に位置し、両方の住居址を切る。出土遺物は少なく４点を図示した。１は平坦口縁の甕形土器で口径20.6cm、２・４は壺形土器底部で、２の底径は7.2cm、３は壷形土器の胴部破片である。

②　石器

Ⅳ区出土の石器は総数1,152点であるが、この内生活遺構から出土した24点と遺構精査時に出土し明らかに弥生時代の所産である２点を図示した。図示した石器の内、そのほとんどは礫器であり、黒耀石剥片等は図示していない。ただ剥片等は、使用した痕跡がないものがほとんどである。礫器の出土数63点、剥片（黒耀石剥片数1,052点、その他の剥片数236点）数1,089点である。

石鎌（Fig.63－47001　PL.50）

先端部と基部を欠損する安山岩製の石鎌である。部分的に剥離面を残すが、研磨は全体に施されている。背は平坦で、この部分にも研磨を施している。刃部断面は「Ｖ」字形を呈し、両面から斜方向に丁寧な研磨を行い、刃部を造り出している。現長12.7cm、身幅5.4cm、厚さ1.1cm、刃渡り1.1cmを測る。ＳＸ－58から出土した。福岡市において石鎌が出土した遺構は、比恵遺跡第30次調査那珂遺跡群第20次調査、雀居遺跡群第４・５次調査、四箇遺跡群第３・５次調査等がある。

石剣（Fig.63－47002　PL.50）

凝灰岩製の石剣未製品である。扁平な板状石材の表面部分に数多くの剥離を施しているため断面が蒲鉾状を呈する。裏面は先端部（刃先）と周辺部に加工を施している。刃先部分は尖がらず丸く加工している。茎は両側辺から加工を施し、関を形成するが、抉入部が不揃いのためやや斜めとなっている。裏面中央部は全く加工されていない。研磨も施されていない所から、製作段階（剥離工程）と考えられる。第97号甕棺墓周辺部から出土した。現長20.1cm、厚さ２cm、幅６cm、刃長17.6cmを測る。石剣の出土例は数多く、板付、比恵、有田、雀居遺跡等がその代表的なものである。

石核（Fig.63－47003）

黒耀石製の石核で、上からの剥離により剥片を剥取している。打面は自然面である。打面周辺部に細かな剥離痕が認められる。これは次の剥片剥取のために加えられた剥離と考えられる。裏面は自然面であることから一方向から剥取する技法である。剥離面から中央部剥離が終了と考えられる。左側辺部に横からの剥離面があるが、これは側面調整か、剥離面調整であろう。右側辺部は中央部より剥離順が古く、一番古い剥離は左側側辺部下端にみられる剥離と考えられる。この石核からは、３枚の剥片が剥取され、左→右→中央の順で剥取されたものと思われる。ＳＣ－65より出土した。

磨製石鏃（Fig.63－47004　PL.50）

全長5.7cmの完形品である。断面はレンズ状を呈し、両面中央に稜を有する。刃先は鋭利で研磨も丁寧に行われている。茎は短かく0.6cmしかないが、造りは丁寧である。石材は粘板岩を使用しており、ＳＣ－68床面から出土した。

柱状抉入片刃石斧（Fig.63－47005　PL.50）

ＳＫ－146から出土した玄武岩製柱状抉入片刃石斧で、上部にわずかではあるが、抉入部が幅3.2cmで認められる。側辺部は剥離痕が認められるが、刃部、背部は丁寧に研磨され、刃部先端が欠損している所から、かなり使用頻度が高く、側辺部の剥離自体もその段階で剥離されたと思われる。刃部角度55°を測り、幅３cmである。重量265ｇを測る。

柱状片刃石斧（Fig.63－47006、47011）

柱状石斧の中位部位であるため抉入となるものか、柱状だけのものかは不明である。刃部も欠損し

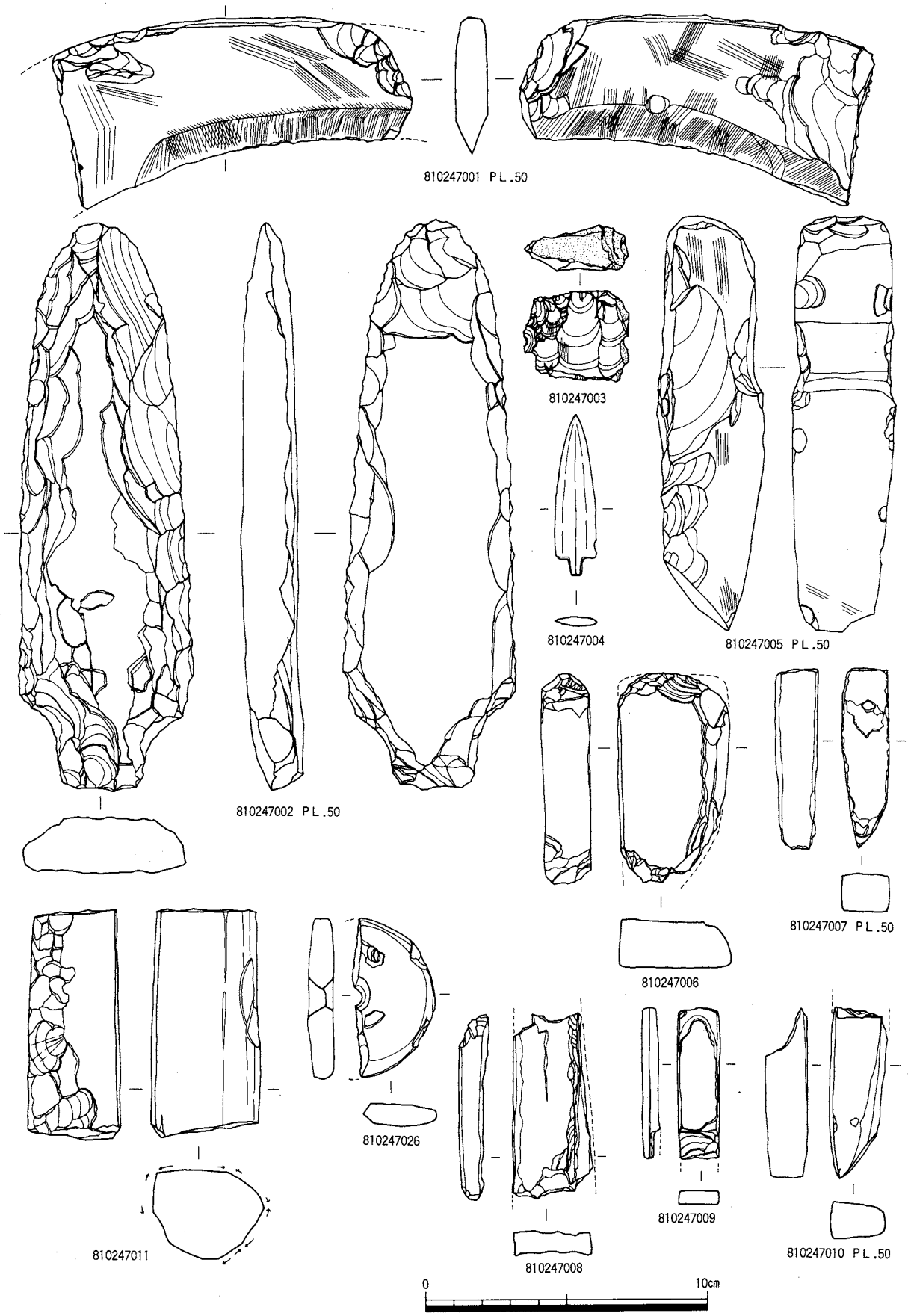


Fig. 63　Ⅳ区出土石器－1（縮尺1/2）

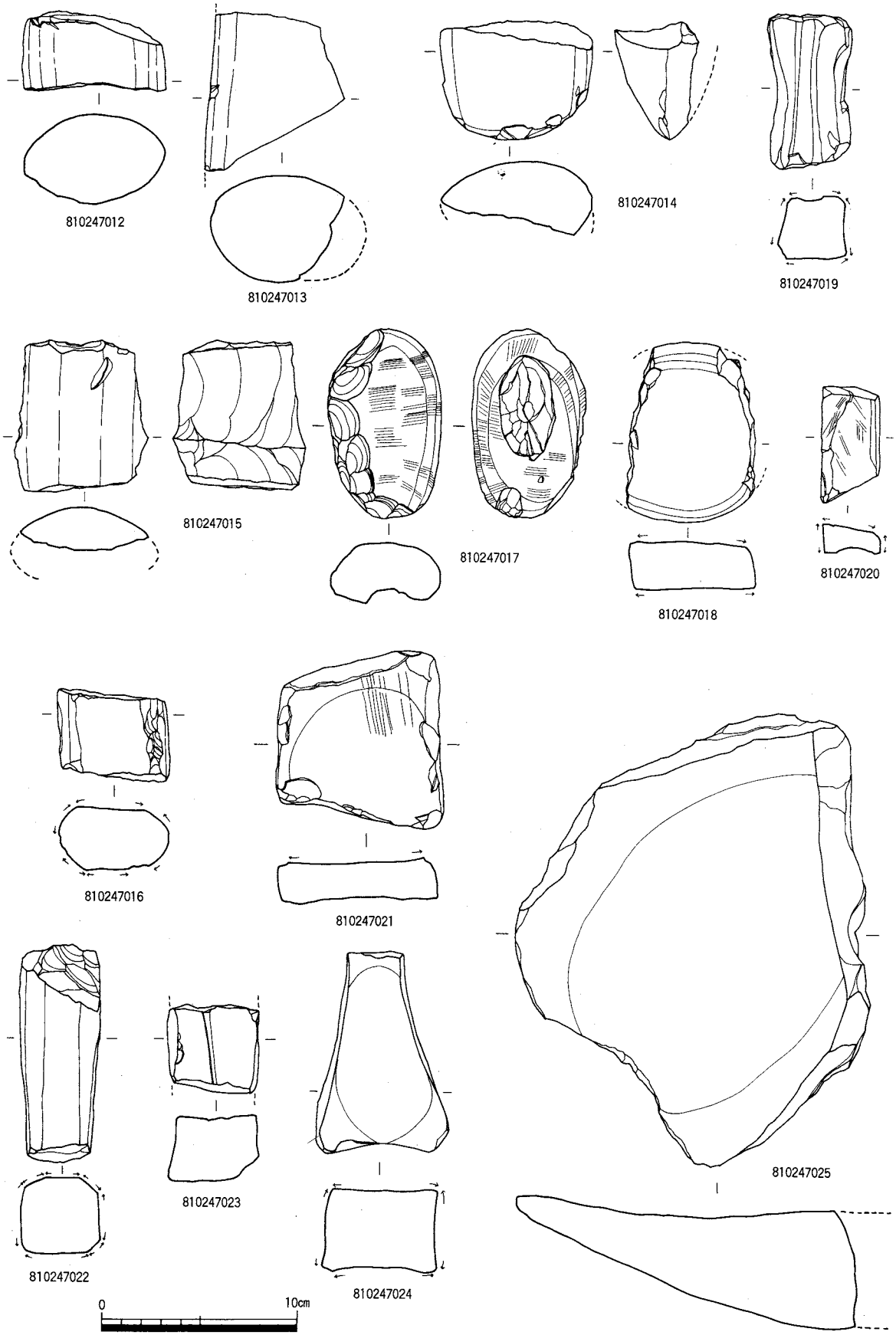


Fig. 64　Ⅳ区出土石器－2（縮尺1/3）

ているがおそらく片刃となる形状を呈するものと思われる。２点ともＳＣ－65出土で頁岩製である。

小型柱状片刃石斧（鑿形石斧）（Fig.63－47007～47010　PL.50）

４点出土した。**47007**　ＳＣ－50から出土した頁岩製である。上端部を欠損しているが、研磨が終了し、使用痕も認められる。刃部角度は48°を測り、厚みのある形状を呈する。刃部幅は1.3cmであるが現在長6.3cm、重量28ｇを測る。**47010**　ＳＣ－65から出土した頁岩製の柱状片刃石斧である。上端部は欠損するが、刃部には丁寧な研磨が施されている。刃部角度は40°で、今回出土したものの中では一番角度のない鋭利な刃部を持つ。現長６cm、刃部幅1.7cm、重量25ｇを測る。

47008　**47009**　柱状石斧の中位部と上端部と思われるが、47008は裏面が剝離されており、47009は刃部が欠損する。47008はＳＣ－65出土の頁岩製、47009はＳＣ－70出土の頁岩製である。

紡錘車（Fig.63－47026）

ＳＣ－65から出土した安山岩製の紡錘車がある。半割されているが、現存する形状から完成品であったことが窺える。中央部の穿孔はまず表面から行い次に裏面の順であるが、裏面からが主である。

磨製石斧（Fig.63－47012～47015　PL.51）

磨製石斧は40点出土した。すべて住居址からの出土で、47012はＳＣ－50から、47013はＳＣ－77から、47014はＳＣ－52から、47015はＳＣ－52からで、すべて玄武岩を石材としている。重量は、12が189ｇ、13が388ｇ、14が195ｇ、15が132ｇを測る。

磨製石器（Fig.64－47017、47018）

47017　磨石であるが、中央部に凹みを持ち、左側辺部に剝離痕が認められる。重量238ｇを測り、安山岩を使用している。ＳＤ－03の床面から出土した。**47018**　両側辺から剝離され、断面長方形を呈するが、本来は円形と考えられる。全面を使用している。ＳＣ－65から出土し、安山岩を石材とした磨石で、重量231ｇを測る。

砥石（Fig.64－47016・47019～47024）

７点を図示した。すべて住居址内からの出土である。47022を除いてすべてＳＣ－65の出土であり、47022はＳＣ－68から出土した。ＳＣ－65からは47025の石皿も出土している。**47019**　砂岩製で中央部に凹みを持つが、他は全面を砥石として使用している。中央部の凹みもそれ自体使用されている。**47020**　粘板岩製の砥石で、石自体が極目が細かい所から仕上げ用として使用されたものと思われる。裏面は欠損しているため定かでないが、恐らく全面を使用したと考えられる。

47016　砂岩製の砥石で、表面に火を受けた痕跡が認められ、黒く変色している。上下端を欠損し、表面右側の剝離を除いて全面を砥石として使用している。**47021**　中央部がわずかに凹むほど使用頻度の高い砂岩製の砥石である。使用面は表面だけで、他は使用していない。**47022**　八角形を呈する砂岩製の砥石である。上端部を欠損するが、それを除いて全面を使用している。**47023**　砂岩製の砥石で上下端を欠損する。表面中央に凹みが認められる。使用面は三面で、裏面は使用されていない。**47024**　撥形を呈する砂岩製の砥石で、上端部がわずかに欠損している。中央部が顕著に使用されわずかに凹む。47016と同様に火を受けた痕跡があり、使用部分は全面に及ぶ。

石皿（Fig.64－47025）

花崗岩製の石皿でＳＣ－65から出土した。半割のため全体像は定かではないが、かなり大きな石皿と考えられる。使用面は表面だけであるが、中央部分の使用頻度がたかく、中央部に行く程磨耗が著しい。

第三章　第二次調査－弥生時代生活遺構の調査－

第一節　調査概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地　　：福岡市西区飯盛字本名地区

圃場整備面積　　：61ha

発掘調査対象面積：7.8ha

発掘調査面積　　：2.1ha

発掘調査年月日　：昭和57年９月15日～58年２月15日

試掘調査の結果、約６haに遺構を確認し、その内の約４haについては埋土、2.1haが削平することとなり、発掘調査面積を2.1haとした。調査区は五ヶ所となり、第二次調査はⅤ区からⅩ区の地点を設定した。Ⅴ・Ⅵ区が3,400㎡、Ⅶ区が3,300㎡、Ⅷ区が2,800㎡、Ⅸ区が7,100㎡、Ⅹ区及び道路・水路部分の調査で4,168㎡、計20,768㎡を調査した。

Ⅴ・Ⅵ区の調査

検出された主な遺構は、縄文時代後期初頭の貯蔵穴、弥生時代中期の溝・掘立柱建物と奈良時代の溝である。

縄文時代後期の遺構

貯蔵穴を47基検出した。中央部に柱・柱痕を残すものが約半数である。最大のものはＳＴ－16で径3.9ｍ、深さ1.6ｍである。最小のものはＳＴ－38で、径1.9ｍ、深さ1.8ｍである。形状は摺鉢形やわずかに袋状を呈するもの、ほぼ垂直に落ちるものの三種類に大別できる。出土遺物は土器のほか種子（ドングリ等）が約半数の貯蔵穴から出土した。土器形式は後期初頭に比定される鐘崎式土器、北久根式土器を中心に出土している。早良平野で縄文後期初頭の遺構が発見されたのは有田遺跡につづいて２例目である。

弥生時代中期の遺構

五条の溝と堀立柱建物一棟を検出した。溝は台地を北西から南東に切断するＳＤ－10にＳＤ－11・12が流れ込む状態で検出された。ＳＤ－10の南東端は台地が段落ちする部分まで続く形状を呈するが、台地が削平されているため全体の形状は不明である。ＳＤ－11は環濠状を呈するものと考えられ再度ＳＤ－10に流れ込むものと思われる。現存する深さは50cm程度しかなく底面に近い部分であったが、土器は多量に出土した。特に祭祀用に使用された丹塗りの高坏形土器・甕形土器・壺形土器が多く出土した。

ＳＤ－10は幅３ｍ、深さ1.5ｍの大溝であり、溝内より多量の土器と共に三叉鍬・平鍬の柄・用途不明の木器が出土した。ＳＤ－11が幅1.9ｍ、深さ0.4ｍ、ＳＤ－12は幅2.5ｍ、深さ0.7ｍである。

堀立柱建物は２間×２間の建物でＳＤ－11に囲まれた中に検出した。

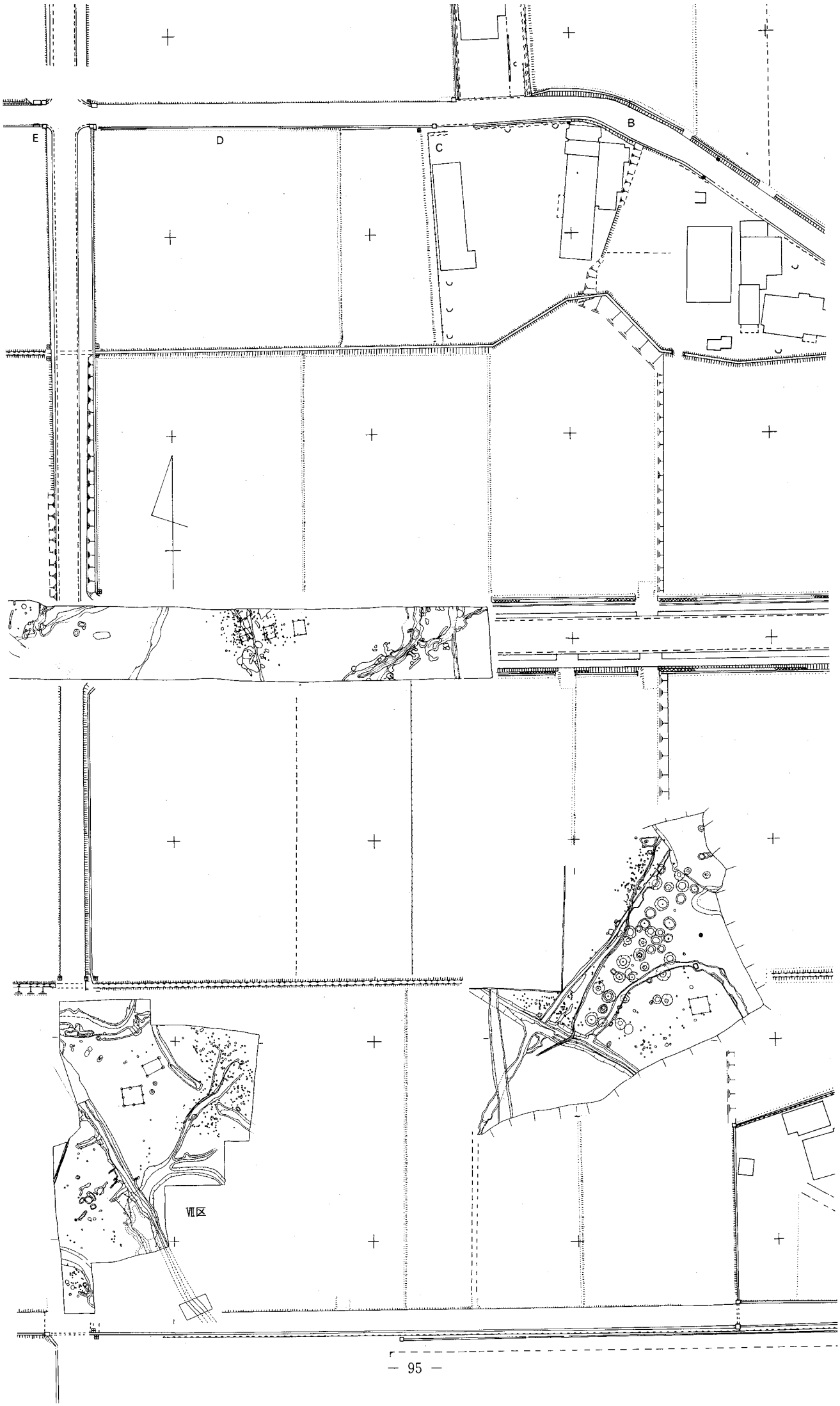
Ⅶ区の遺構

弥生時代中期の遺構と中世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構

溝七条・甕棺墓１基・堀立柱建物２棟・ピット多数を検出した。この中で弥生時代に属するものは、ＳＤ－14・15・16・17・18、甕棺墓１基、堀立柱建物２棟である。ＳＤ－14は中央部の約６ｍに出入口が設けられ両側に巡る環濠である。ＳＤ－16はＳＤ－13の下層から検出したもので、二又・三又鍬や浮子等が出土した。

Fig. 65　第二次調査遺構全体図


E
D
C
B
VII区

ＳＤ－15は台地の端部に作られたものであるが、両端に杭を打ち込み取水口状遺構としている。この中からスコップ状木器等が出土した。甕棺墓は１基だけ出土したが、殆ど削平され約1/4しか遺存していない。堀立柱建物はＳＤ－14内から２棟検出した。

Ⅷ区の調査

Ⅷ区の調査で検出した遺構は旧河川ＳＤ－02と堀立柱建物33棟、不整形土壙状遺構32基、井戸状遺構１基を検出した。北側に位置し、東西に流れるＳＤ－02は幅14～21ｍで台地を二分する。下層から出土する土器は城ノ越式土器が主である。ただこの旧河川の上面にあるＳＸ－21、27から出土する土器は須恵器出現の初期段階のものであることからこの以前に埋まったことが明らかである。この他には弥生時代に属する遺構は見られない。古墳時代の堀立柱建物が旧河川を境にして北側は、古式土師器を主体とするのに対して、南側は須恵器を主体とした堀立柱建物群である。

Ⅸ区の調査

Ⅸ区は7,100㎡を発掘調査した。Ⅸ区はＳＤ－01（旧河川：おそらく旧日向川及びその支流と思われる）ＳＤ－02（ＳＤ－01と同様に旧河川）に挟まれた台地に弥生時代前期から古墳時代初期にかけての遺構が重複している。特に古墳時代初期の遺構はⅨ区全域に広がっている。

この台地を三分する溝が四条（ＳＤ－05～08）がある。この二つの溝は合流してＳＤ－05となりＳＤ－01に流れ込む。これによって台地が三分される。時期は弥生時代中期に形成されており、合流点には堰状遺構が検出された。

ＳＤ－01は第一次調査のⅢ区から検出された旧河川の上流部分であり、時期はⅢ区の下層で出土した弥生時代前期から中期初頭と考えられる。

古墳時代の遺構は竪穴式住居址１軒、堀立柱建物18棟、溝状遺構20条を検出した。

弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としてＳＤ－01～08・24・30・31・34の十二条と円形住居址３軒、堀立柱建物40棟、甕棺墓１基を検出した。甕棺墓は北側隅に検出されているところから第一次調査のⅣ区からの続きで、時期も金海式甕棺墓であるところから弥生時代前期末に比定できる。

弥生時代中期に比定できる遺構は、ＳＤ－01～04・30・31・34の溝状遺構と円形住居址３軒、堀立柱建物19棟、甕棺墓１基であり、中央部には殆どなく、東西・北側に配置されている。

北側から検出された遺構の内、ＳＤ－03・04はＳＤ－01に流れ込むものである。第一次調査のⅣ区の検出遺構はその殆どが弥生時代の前期から中期に比定でき、第２次調査のⅣ区とは道路幅５ｍを挟む距離でしかなく遺構的には同一時期の遺構が近接するものである。ただＳＤ－01がその間にまたがる状態で検出されている。北側にある堀立柱建物12棟と第一次調査のⅣ区の方形住居址・円形住居址・甕棺墓との関連性で考えなければならず、ＳＤ－01を環濠として考え、住居址と堀立柱建物との区域の区別としてとらえることもできる。

南東の円形住居址と三棟の堀立柱建物はセットとして考えられる。ＳＢ－13はＳＣ－75とのセットであろう。

西側には円形住居址１軒と４棟の堀立柱建物で構成される。住居址と堀立柱建物との距離が多少気にかかるが、建替等を考えた時、ほぼ妥当な数であろう。

弥生時代後期に比定できる遺構は、ＳＤ－05～08・24の溝状遺構と堀立柱建物21棟である。全体的に中央部から西側に位置し、溝によって三つに分けられる。溝はＳＤ－05が中心で他はＳＤ－05に流れ込む形状を呈している。又このＳＤ－05はＳＤ－01・02とを結ぶ溝であり、ＳＤ－01からの水をＳＤ－02に引く水路である。堀立柱建物は北側に３棟、南側に６棟、西側に11棟、東側に１棟ある。

第二節　Ⅴ・Ⅵ区の弥生時代の生活遺構

Ⅴ・Ⅵ区の弥生時代の遺構は、ＳＤ－10・12の十字に交差する溝とＳＤ－10から枝分かれしたＳＤ－11が巡り環濠となる（東側台地が、削平され段落ちとなるため実態は不明）と思われる。このＳＤ－11の中よりＳＢ－41の堀立柱建物１棟が検出された。

ＳＤ－10（Fig.65～69　PL.26～29）

ＳＤ－10は南東から北西に一直線に延びた大溝である。主軸をＮ－65°－Ｗにとり幅３ｍ、深さ1.5ｍ、現長42ｍを測る。北西側・南東側にまだ延びるものと思われる。北西側（底面標高17.532ｍ）から南東側（底面標高17.250ｍ）の傾斜がみられ、これに沿って流れているものと思われる。溝内より多量の土器・石器と共に三又鍬・平鍬・用途不明の木器が出土した。ＳＤ－10の土層断面をFig.69－６に図示した。土層断面図は調査区の東部分で最も残りの良い部位であった。溝は幅2.9ｍ、深さ0.8ｍである。第Ⅰ層　黒斑まじりの暗茶褐色粘質土でレンズ状に堆積し、厚さ0.22ｍ、第Ⅱ層　暗褐色粘質土で厚さ0.14ｍ、第Ⅲ層　小石を含む茶褐色粘質土で、西側からの流込みによるもので中央部途中で終了している。第Ⅳ層　暗茶褐色粘質土。第Ⅴ層　暗茶褐色粘質土。第Ⅵ層　黒灰色シルト層で、この層と下層のⅦ層に弥生式土器が多量に含まれ、特に祭祀土器が主流である。第Ⅶ層　第Ⅵ層の下層部にある小石を多く含む砂礫層である。この砂礫層はＳＤ－11・12でも認められ、弥生式土器を多量に含む層である。砂礫層が全面に覆っていることから大きな氾濫があったことが窺わせる。しかしながら土器自体はローリングは受けておらず、流されてきたものではない。氾濫により破棄した可能性が高い。第Ⅷ層　黒色シルト層で、上層とこの層の境から木製品が出土（ＰＬ52）した。第Ⅸ層　青灰色粘土層で、湧水点である。第Ⅹ層　この地域の基盤層である砂礫層である。Fig.69－５もＳＤ－10の土層である。これはFig.68のイ～ロの断面で、幅2.7ｍ、深さ0.9ｍを測る。土層状態は、さほどかわらず、Ⅲ層とⅦ層の間に細かな砂と明褐色シルト層が入る程度である。

ＳＤ－11（Fig.66～69　PL25）

ＳＤ－11はＳＤ－10の両側から水を取入れ、東側でＳＤ－10に流れ込む形を取るものと考えられる。半月形の環濠の様相を示す。遺存状態は悪く、狭いところで幅1.8ｍ、深さ0.3ｍ、広い所で幅2.3ｍ、深さ0.414ｍを測る。出土遺物はＳＤ－10同様多い。ＳＤ－11の土層はFig.69－１～３に図示した。１の土層は、第Ⅰ層　茶灰褐色土。第Ⅱ層　暗茶褐色粘質土。第Ⅲ層　暗青灰色粘質土である。第Ⅰ・Ⅱ層中に弥生式土器が多量に出土している。２の土層は、第Ⅰ層　暗灰褐色土。第Ⅱ層　灰褐色粘質土。第Ⅲ層　青灰色粘質土である。３は縄文時代後期初頭の貯蔵穴を切る形で検出され、小石まじりの砂礫層であり他はない。

ＳＤ－12（Fig.66～68）

ＳＤ－12の南側はＳＤ－10に流れ込む形をとる。ほぼＳＤ－10と交差する形で、溝底面の標高を見るとＳＤ－10が17.501ｍ、ＳＤ－12南側標高18.225ｍ、北側標高17.495ｍである。南側で一部蛇行している部分が認められる。溝幅は南側で1.6ｍ、深さ0.16ｍ、北側で1.4ｍ、深さ0.27ｍである。北側はさらに北に延びる様相を呈している。ＳＤ－12の北側はＳＤ－10との比高差0.006ｍである。北に行くほど深くなりＳＤ－10近くのＳＤ－12地点と北側隅との比高差は0.3ｍである。ＳＤ－10からオーバーフローした水がＳＤ－12に流れ込む形となっている。ＳＤ－12から東に３ｍのＳＤ－10の部分に杭が２本、溝を横切る形で打ち込まれている。土層はFig.69－４に図示した。Ⅰ層　床土。Ⅱ層　褐色土層。Ⅲ層　黒褐色シルト層である。Ⅳ層　小石を含む砂層で、ＳＤ－10のⅦ層にあたる砂礫層であるが、この土層中には多くの弥生式土器を含んでいる。Ⅴ層　砂とシルトの互層。Ⅵ層　細かな砂。Ⅶ層　青白色粘質土と砂との互層である。

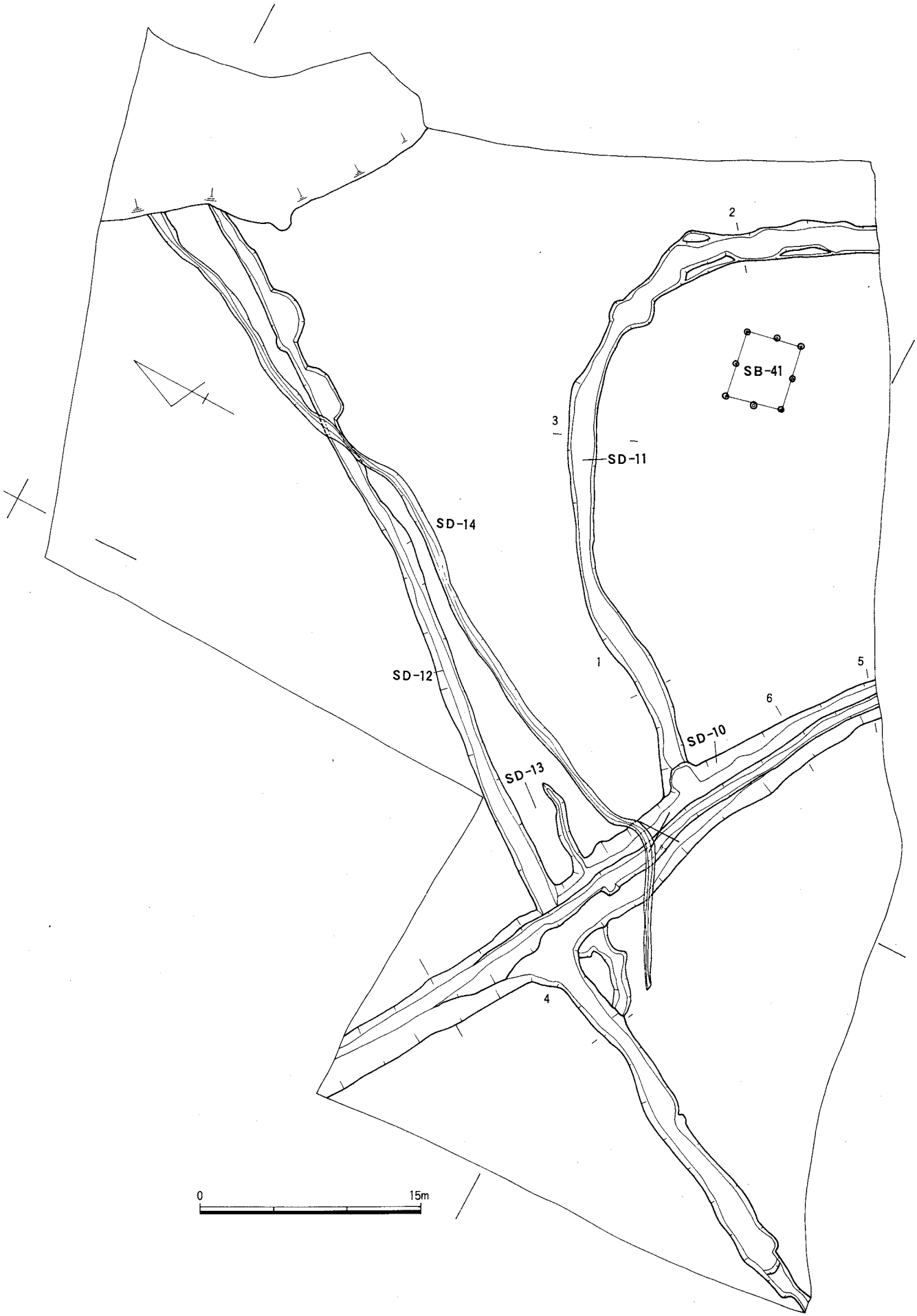


Fig. 66　第二次調査弥生時代遺構分布図(Ⅴ・Ⅵ区)

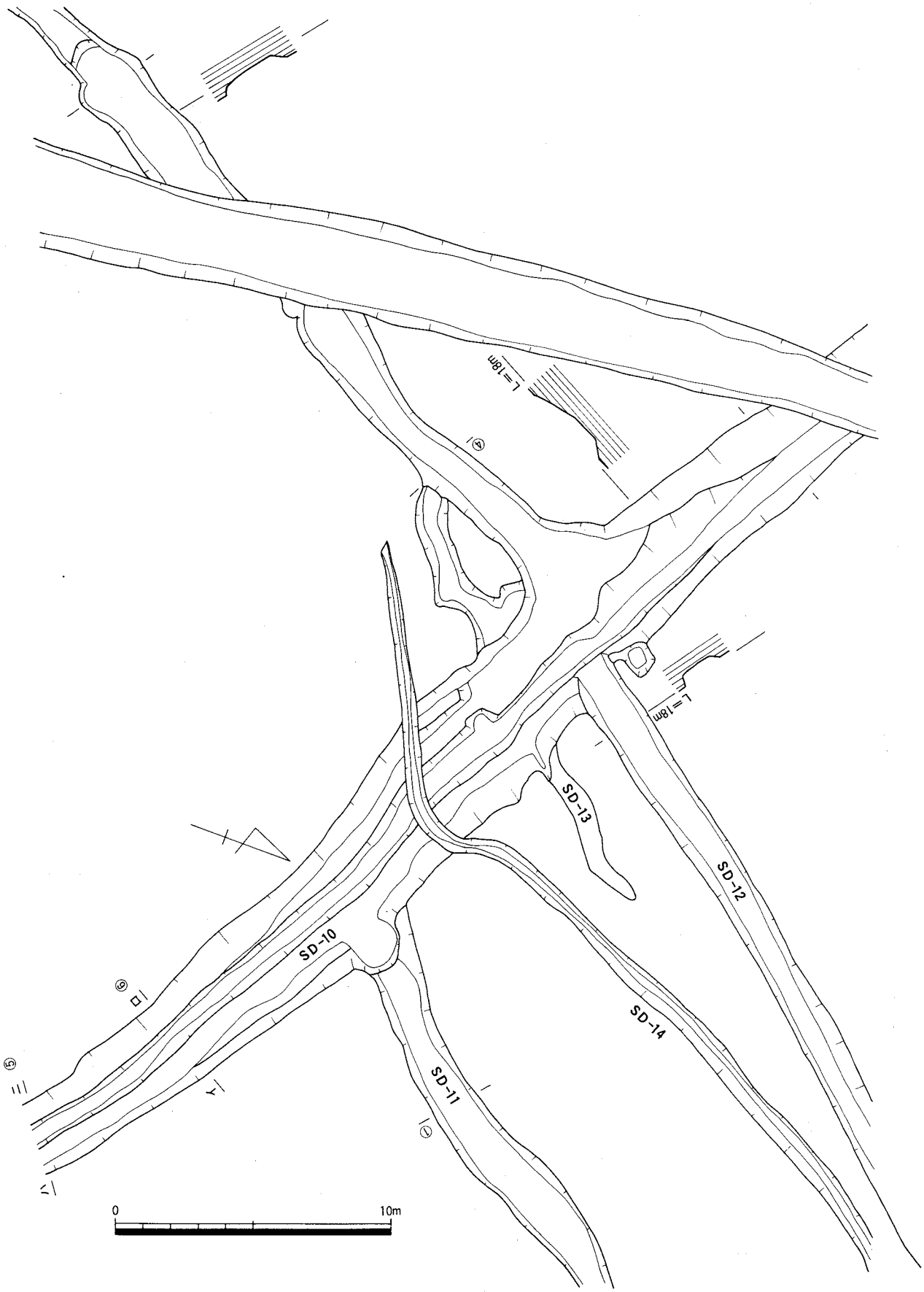


Fig. 67　Ⅴ区ＳＤ－10～14遺構配置図（縮尺1/200）

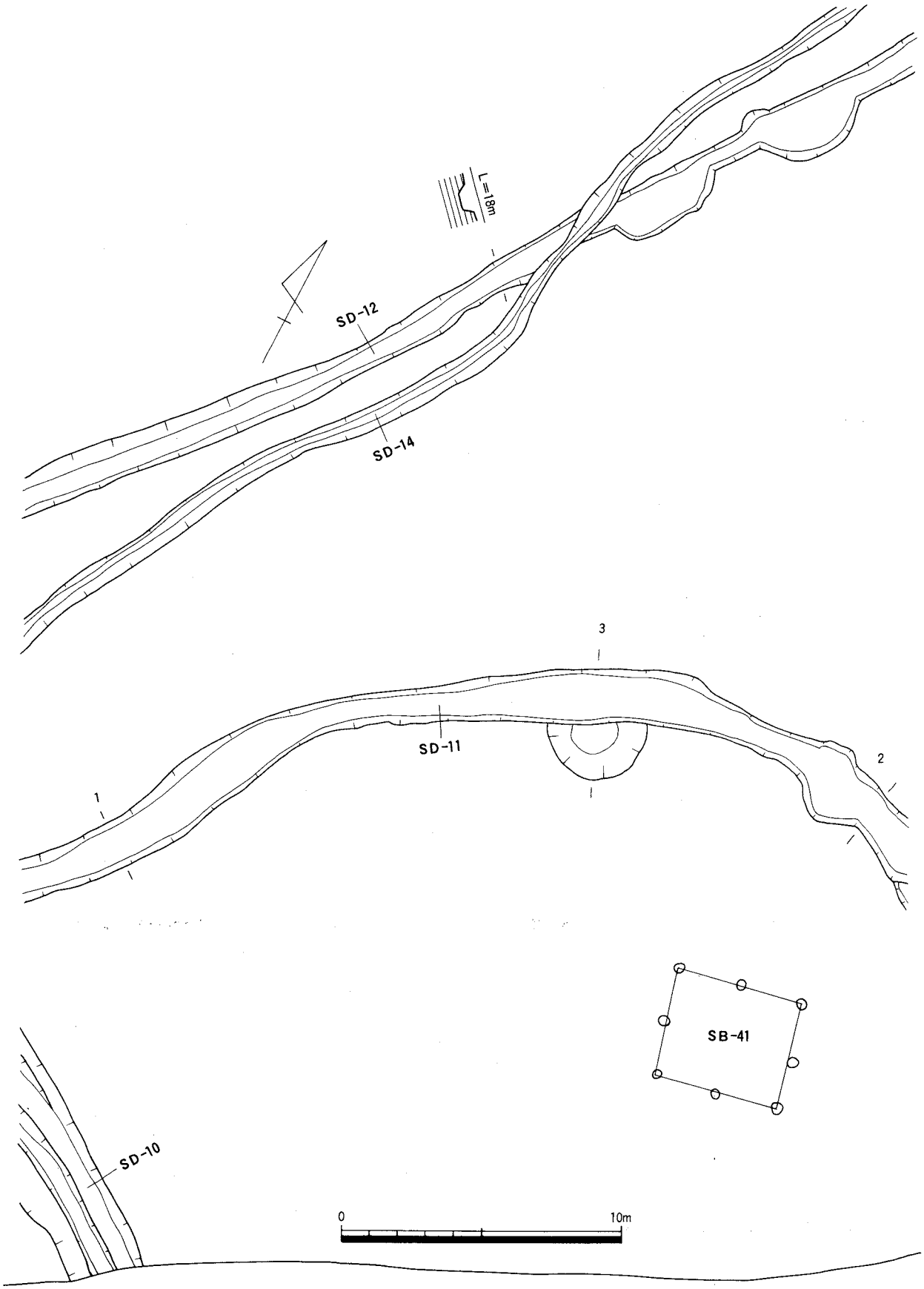


Fig. 68　Ⅴ区ＳＤ－10～14平面・断面図（縮尺1/200）

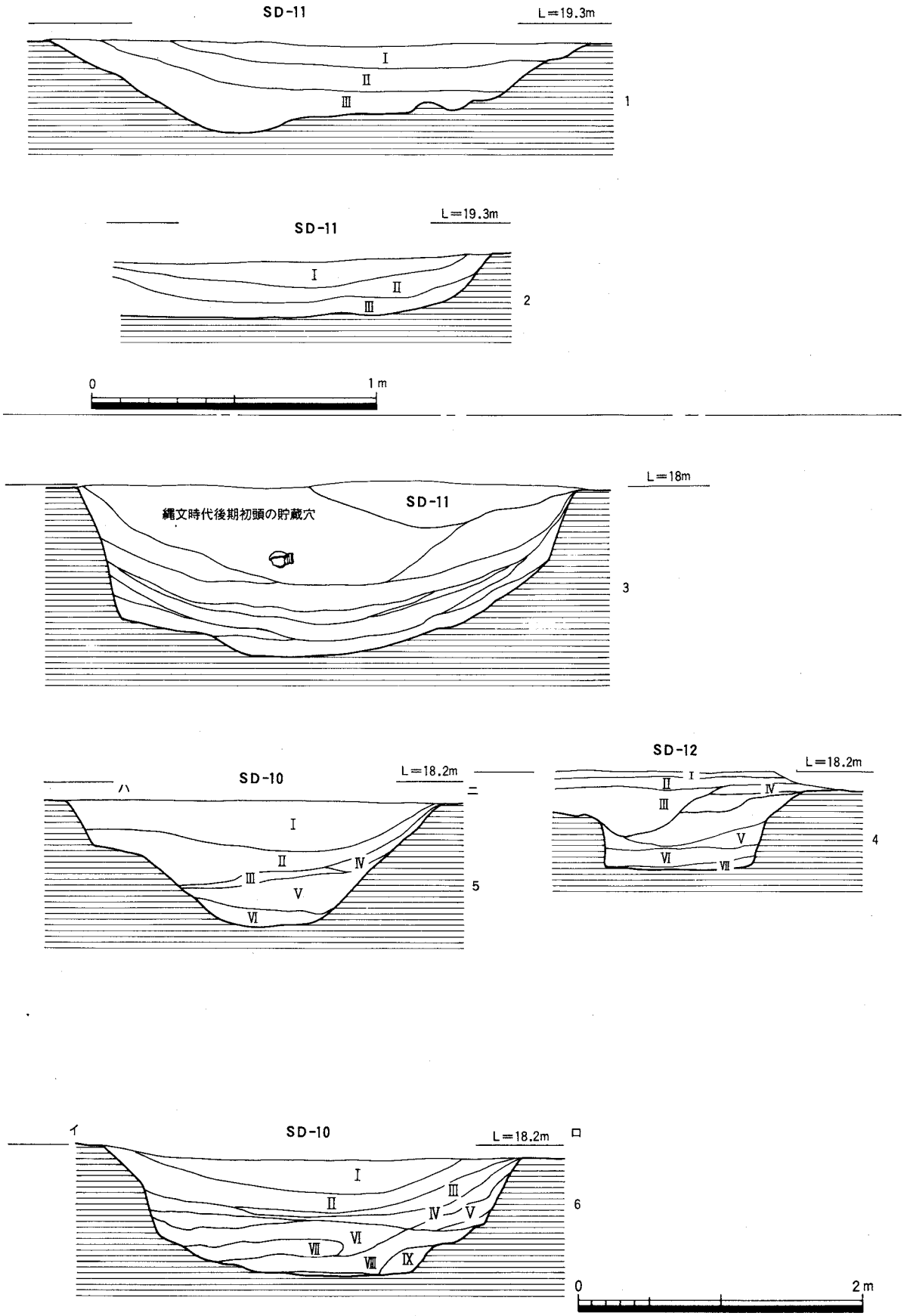


Fig. 69　Ⅴ区ＳＤ－10～13土層断面図（縮尺1/1/20・40）

Fig. 70　Ⅶ区検出遺構全体図

第三節　Ⅶ区の弥生時代の生活遺構

Ⅶ区は3,300㎡を調査し、検出された遺構は弥生時代・古代～中世にかけての生活遺構であった。弥生時代の生活遺構として溝三条・甕棺墓１基・堀立柱建物２棟、ピット多数を検出した。

１．溝状遺構（ＳＤ－14～16）（Fig.70～74　PL.30～33）

ＳＤ－14（Fig.70・72・74）

ＳＤ－14は調査区の北東側から検出した。中央部が約６ｍの間隔であき、この部分が陸橋となる。両サイドに開く形状を呈し、北側溝（ＳＤ－14ａ）が弧状を描くことから環濠の可能性が高い。その中心部は北東部の未調査部分に位置するものと思われるが、未発掘のため詳細は不明である。北側溝（ＳＤ－14ａ）の幅は2.6ｍ、深さ0.5ｍ、現長25ｍあり、先端部が二段となりやや張り出している。ＳＤ－14ｂの幅は3.0ｍ、深さ0.5ｍ、現長12.5ｍを測る。この環濠と堀立柱建物（ＳＢ－42・43、１×１間、２×２間）２棟・甕棺墓１基は同時期を示すが、環濠の外側に位置する建物・墓の意味がはっきりしない。本来ならば環濠内にあるべき建物が外に位置しているからである。建物・墓自体が他の溝（ＳＤ－15・16）の間に挟まれた（北はＳＤ－15、東はＳＤ－14に閉ざされた）位置にあり、この空間地が弥生時代中期の特別の場所として設定されたとも考えられる。

ＳＤ－15（Fig.70・73・75）

調査区の北側に位置し、東西にやや弧を描く。この溝の北側は次第に段落ちし大溝となることが、試堀によって確認されている。ＳＤ－15の溝幅は４～８ｍ、現長27ｍまで確認した。東側ではＳＤ－14と接する様相を示すが、調査区域外であったため確認できなかった。南側は、三ヶ所の澱み部分がある。一ヶ所はＳＤ－14から流れ込む水路と考えられる澱み部分で、幅３ｍ、深さ0.7ｍを測る。二ヶ所目は南台地上に張り出した土壙状の澱みで、この部分が溝より深く常に水が留まった状態であったことが土層（泥炭層）より確認できた。この部分からスコップ状木製品が出土したが、非常に脆くまた薄いため取上げることができなかった（PL.33-2）。この木製品は一本木造りの製品で、類似品として板付遺跡群第39次調査で出土したスコップ状木製品と非常によく似ている。弥生時代中期の製品であることが、出土土器からも窺える。このほか三又鍬等も出土した。

ＳＤ－15には杭列が６条検出された（Fig.73）。西側北（Ａ列）の段落部分に６本と中央部（Ｂ列）に４本打ち込まれている。これはＳＤ－15から北側段落部分（大溝）に水を導くために打ち込まれたもので、北側土手が切られ、水路として利用されている。その幅２ｍで、杭列間の幅は１ｍを測る。Ｃ列は南側立上り部分に11本打ち込まれている。Ｂ列との間に本流が流れていたと思われ、その幅2.5ｍを測る。護岸用の杭である。Ｄ列はＢ列から約5.5ｍ東から始まるが、Ｄ列は８本の杭によって構成され、水の流れを変えるために打込まれた杭であろう。Ｄ列とＢ列との間には杭はない。

Ｅ列は南側立上りに沿って水の流れを変えるために打ち込まれており、14の杭で構成され、その長さは12ｍを測る。Ｆ列は、大溝内に打ち込まれた杭で散発的にある。この周辺に三又鍬・磨製石斧（Fig.100－77002）・大型板材等が出土した。ＳＤ－15の杭列は、47本の杭を打ち込み水の流れを調整及び方向を変えるための施設である。

ＳＤ－16（Fig.70～73）

調査区の南側から中央部にかけて検出した溝である。南側でＳＤ－100（鎌倉時代から室町時代にかけての溝）によって切られる。ＳＤ－16の流れの方向は、北の細かい細分化した溝が一つになり南の方向に流れる流路である。北東側にある細分化された溝は、ＳＤ－14の中央部に源を発し、三つの溝として陸橋部分で二本となり、さらに南下して一本となるが、その他に二本の分流がある。これが

Fig. 71　第二次調査弥生時代遺構分布図（Ⅶ区）（縮尺1/300）

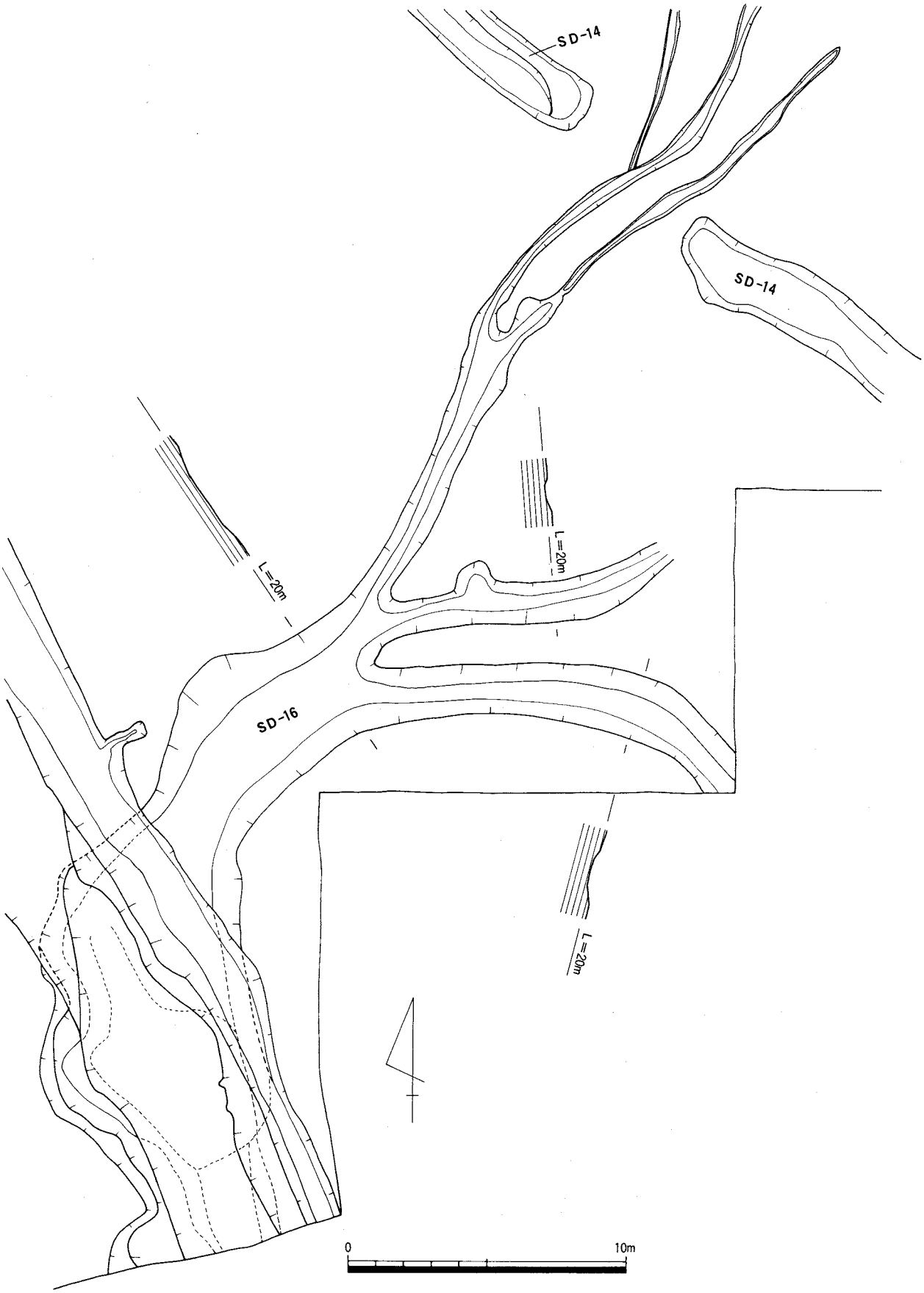


Fig. 72　Ⅶ区ＳＤ－14･16平面・断面図（縮尺1/200）

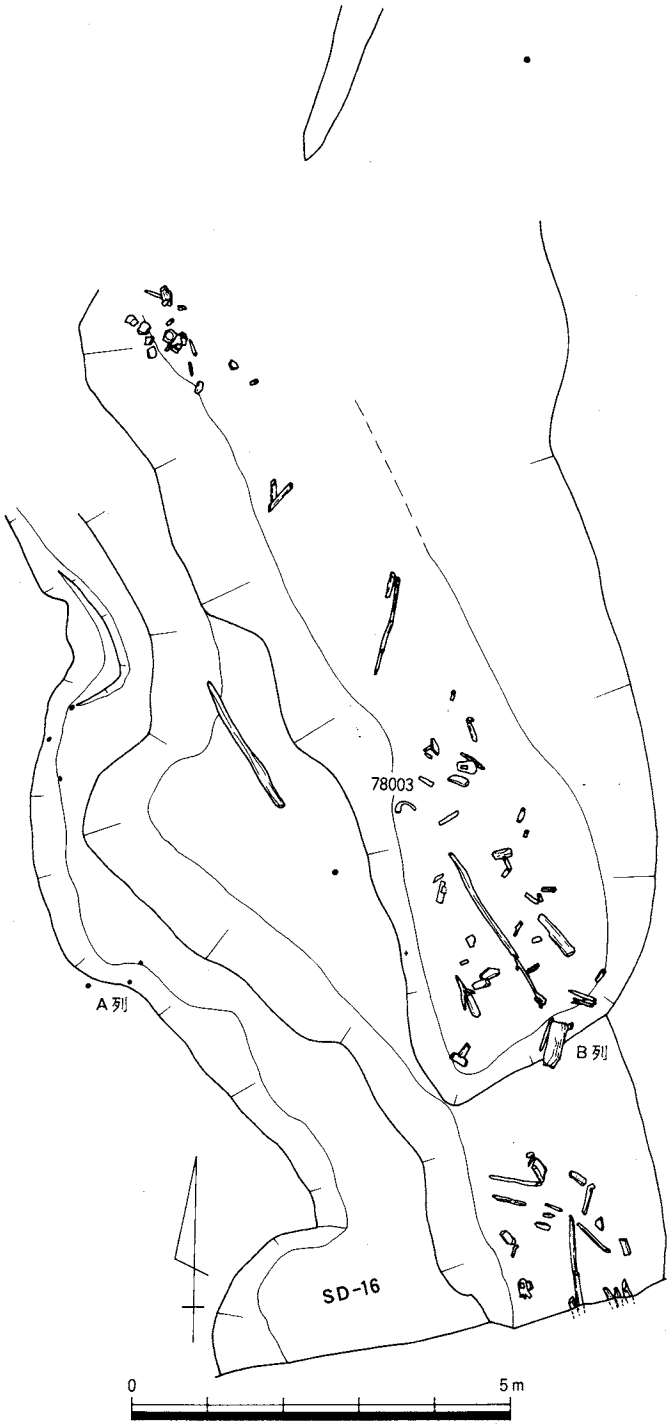


Fig. 73　Ⅶ区ＳＤ－16杭列・木器出土状態（縮尺1/100）

一本化して弧を描きながら一本となり、さらに南下している。ＳＤ－16の溝幅は南側で５～10ｍ、深さ0.6ｍを測る。この部分から土器とともに木製品が出土している。また杭列も検出された。三分される直前の溝幅は5.3ｍ、深さ0.3ｍで極端に浅くなる。三分された溝の内、ａ溝は幅が2.9ｍ、深さ0.3ｍ、現長18ｍで、大きく南側に弧を描き調査区外に延びる。ｂ溝はほぼ直進するが、途中で消滅する。溝幅は2.0ｍ、深さ0.1ｍ、現長12ｍである。ｃ溝は陸橋に向って直進する。溝幅1.5～2.0ｍ、深さ0.3ｍ、現長（分岐点まで）13ｍを測り、陸橋手前９ｍで二分する。南側をｂ溝、北側をｅ溝とする。ｅ溝は陸橋部分でさらに二分され、北側溝をｆ溝とする。ｄ溝は、幅0.9ｍ、深さ0.2ｍ、現長20ｍを測り、ｅ溝は幅0.8ｍ、深さ0.2ｍ、現長20ｍ、ｆ溝は幅0.4ｍ、深さ0.1ｍ、現長15ｍを測る。ＳＤ－16の現長はｅ溝から計測すると約60ｍである。ＳＤ－16の流れは、南側に流れるが、本来の台地の形とは逆（南側が高く北が低い。西が高く東が低い形状を呈する）の流れをしていることから他の大溝に流れ込むか、谷部となる部分が存在している可能性が高い。

杭列は調査区西側で二条検出した。一条は西側段落部の落ちぎわに６本打ち込まれている（Ａ列）。Ｂ列は東側台地段落ち部分から約0.5～１ｍ離れた部位にほぼ北西に向かって30本が打ち込まれていた。溝は三段で構成されているが、最下の段落ち部分に土器とともに木製品が出土した。Fig.103・104－78001～78008に図示した遺物はその一部である。土器も多量に出土した。Fig.95・96に図示した。この土器からＳＤ－16の時期は、弥生時代後期に位置付けられ、ＳＤ－14・15及び甕棺墓、二棟の堀立柱建物が弥生時代中期の時期であることからⅦ区の弥生期における生活遺構は二つの時期に生活が営まれたことになる。

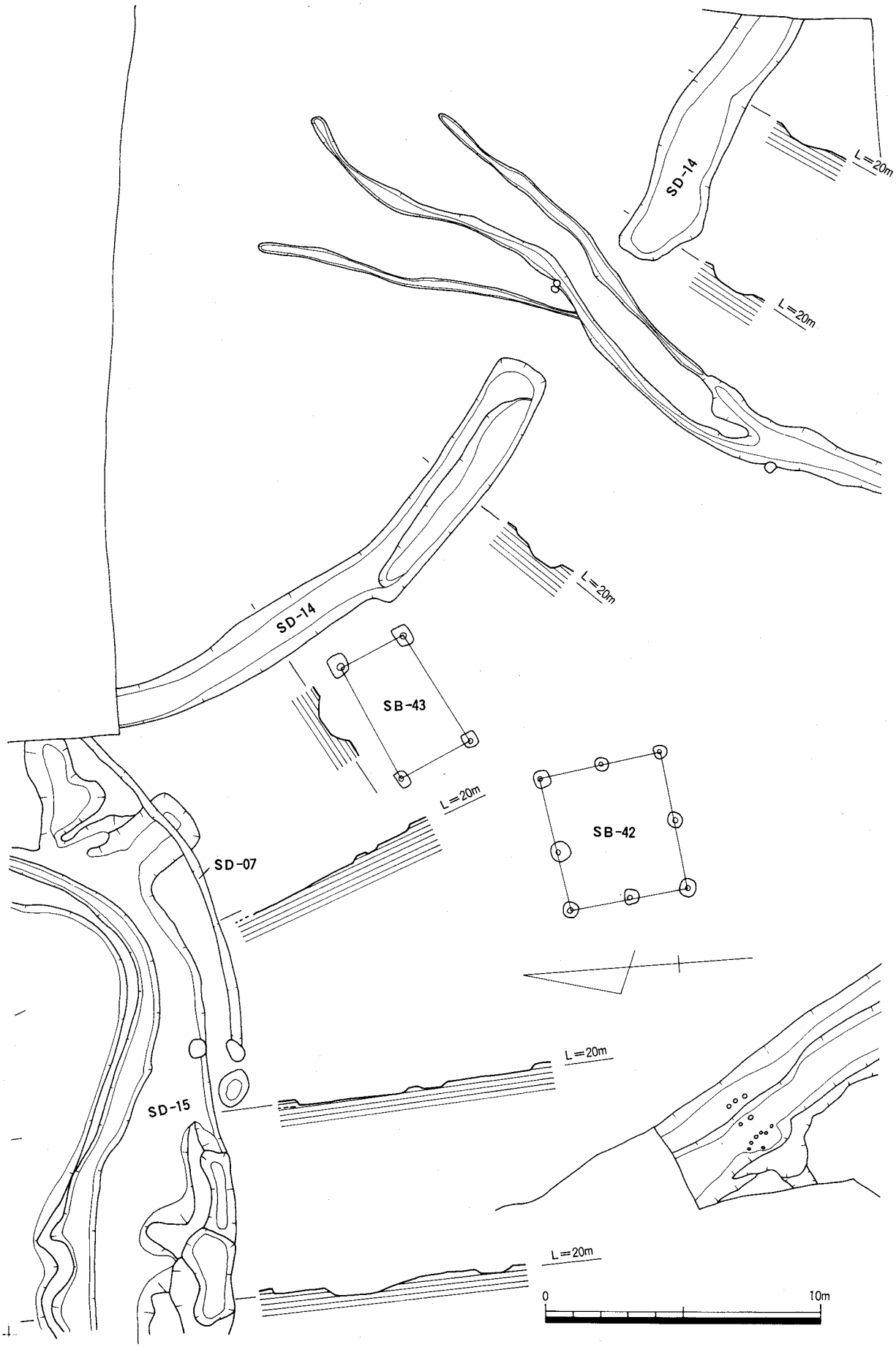


Fig. 74　Ⅶ区ＳＤ－14･15平面・断面図（縮尺1/200）

Fig. 75　Ⅶ区ＳＤ－15杭列・木器出土状態（縮尺1/100）

第四節　Ⅸ区の弥生時代の生活遺構

Ⅸ区は7,100㎡を発掘調査した。Ⅸ区はＳＤ－01(旧河川：おそらく旧日向川及びそ支流と思われる)ＳＤ－02（ＳＤ－01と同様に旧河川）に挟まれた台地に弥生時代前期から古墳時代初期にかけての遺構が重複してる。特に弥生時代の遺構はⅨ区全域に広がっている。この台地を三分する溝が四条（ＳＤ－05～08）がある。この四つの溝は合流してＳＤ－05となりＳＤ－01に流れ込む。これによって台地が三分される。時期は弥生時代後期に形成されており、合流点には堰条遺構が検出された。

ＳＤ－01は第一次調査のⅢ区から検出された旧河川の上流部分であり、時期はⅢ区の下層で出土した弥生時代前期から中期初頭と考えられる。

古墳時代の遺構は竪穴式住居址１軒、掘立柱建物18棟、溝状遺構20条等を検出した。

１．弥生時代の遺構（Fig.75～84）

弥生時代の遺構としてＳＤ－01～08・24・30・31・34の十二条の溝と円形住居址３軒、掘立柱建物40棟、甕棺墓１基を検出した。甕棺墓は北側隅に検出されているところから第一次調査のⅣ区からの続きで、時期も金海式甕棺墓であるところから弥生時代前期末に比定できる。

弥生時代中期に比定できる遺構は、ＳＤ－01～04・24・30・31・34の溝状遺構と円形住居址３軒、掘立柱建物19棟、甕棺墓１基であり、中央部には殆どなく、東西・北側に配置されている。

北側から検出された遺構の内、ＳＤ－03・04はＳＤ－01に流れ込むものである。

第一次調査のⅣ区の検出遺構はその殆どが弥生時代の前期から中期に比定でき、第二次調査のⅨ区とは道路幅15ｍを挟む距離しかなく遺構的には同一時期の遺構が近接するものである。ただＳＤ－01がその間にまたがる状態で検出されている。北側にある掘立柱建物12棟と第一次調査のⅣ区の方形住居址・円形住居址・甕棺墓との関連性で考えなければならず、ＳＤ－01を環濠として考え、住居址と掘立柱建物との区域を区別としてとらえることもできる。

南東の円形住居址と三棟の掘立柱建物はセットとして考えられるが、ＳＢ－13はあまりにも離れ過ぎている。むしろＳＣ－75とのセットとして考えられる。

西側には円形住居址１軒と４棟の掘立柱建物で構成される。住居址と掘立柱建物との距離が多少気にかかるが、建替等を考えた時、ほぼ妥当な数であろう。

弥生時代後期に比定できる遺構は、ＳＤ－05～08・24の溝状遺構と掘立柱建物19棟である。全体的に中央部から西側に位置し、溝によって三つに分けられる。溝はＳＤ－05が中心で、他はＳＤ－05に流れ込む形状を呈している。又このＳＤ－05はＳＤ－01・02とを結ぶ溝であり、堰状遺構からＳＤ－01からの水をＳＤ－02に引く水路である。掘立柱建物は北側に３棟、南側に６棟、西側に９棟あるが、このうちＳＢ－31の３間×２間の掘立柱建物は規模・広さとも他の掘立柱建物をしのぐものである。

２．住居址（Fig.76～80　PL.37･38）

弥生時代中期の住居址は３軒検出した。後期の住居址はⅨ区では検出できなかった。

ＳＣ－73（Fig.77・78　PL.37･38）

ＳＣ－73はⅨ区調査区の南東隅に検出した。東側が未調査である。この部分に検出される可能性もあるが、Ⅸ区の検出状態から考え、また市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査（吉武遺跡群Ⅰ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集　1986　福岡市教育委員会刊）によれば、この区域にも住居址は検出されていないことからⅨ区において弥生時代中期の住居址は３軒だけと考えられる。ＳＣ－73の南側にはＳＤ－05があり、その南にはⅧ区から延び吉武遺跡３次調査で調査したＳＤ－02がある。ＳＤ－02

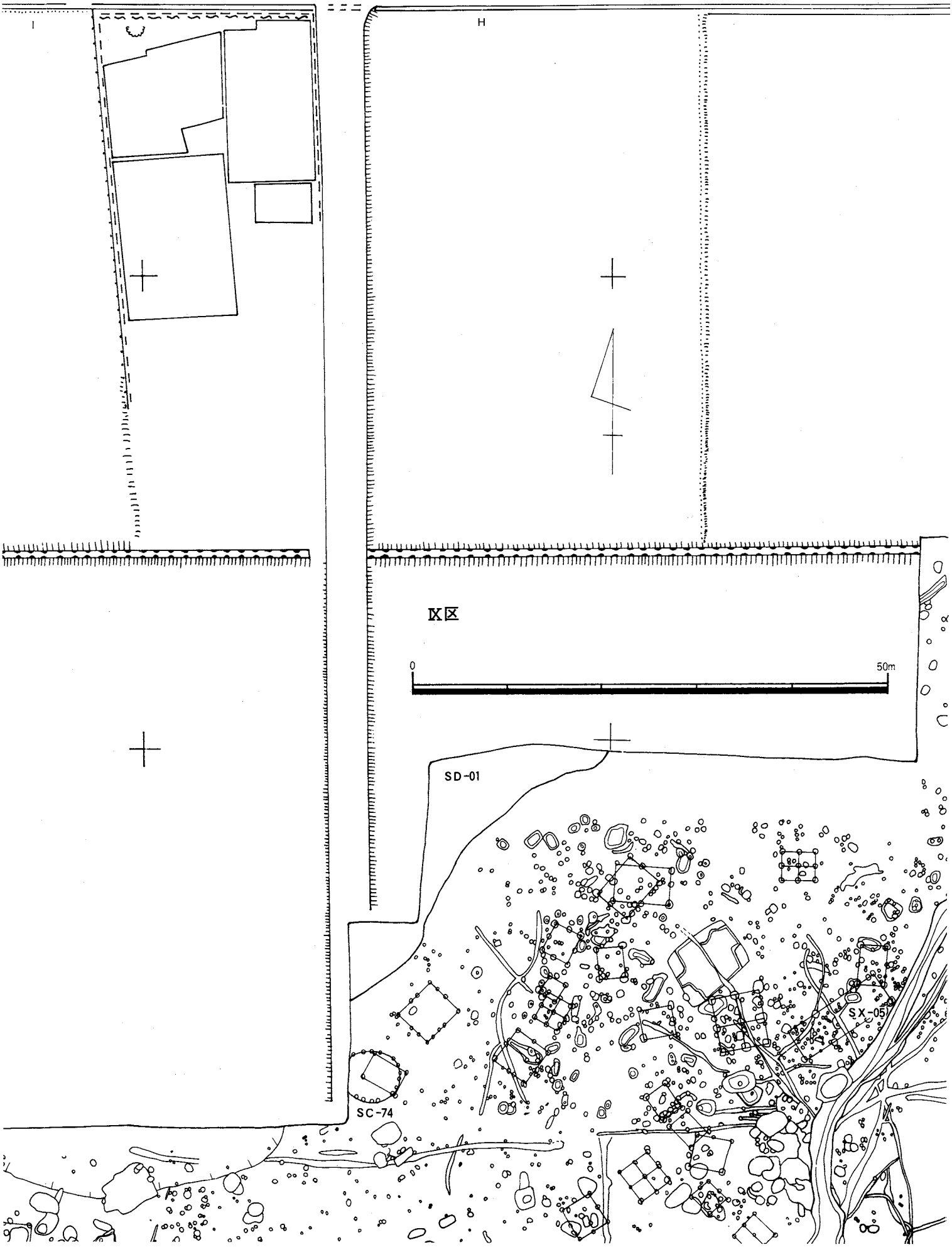
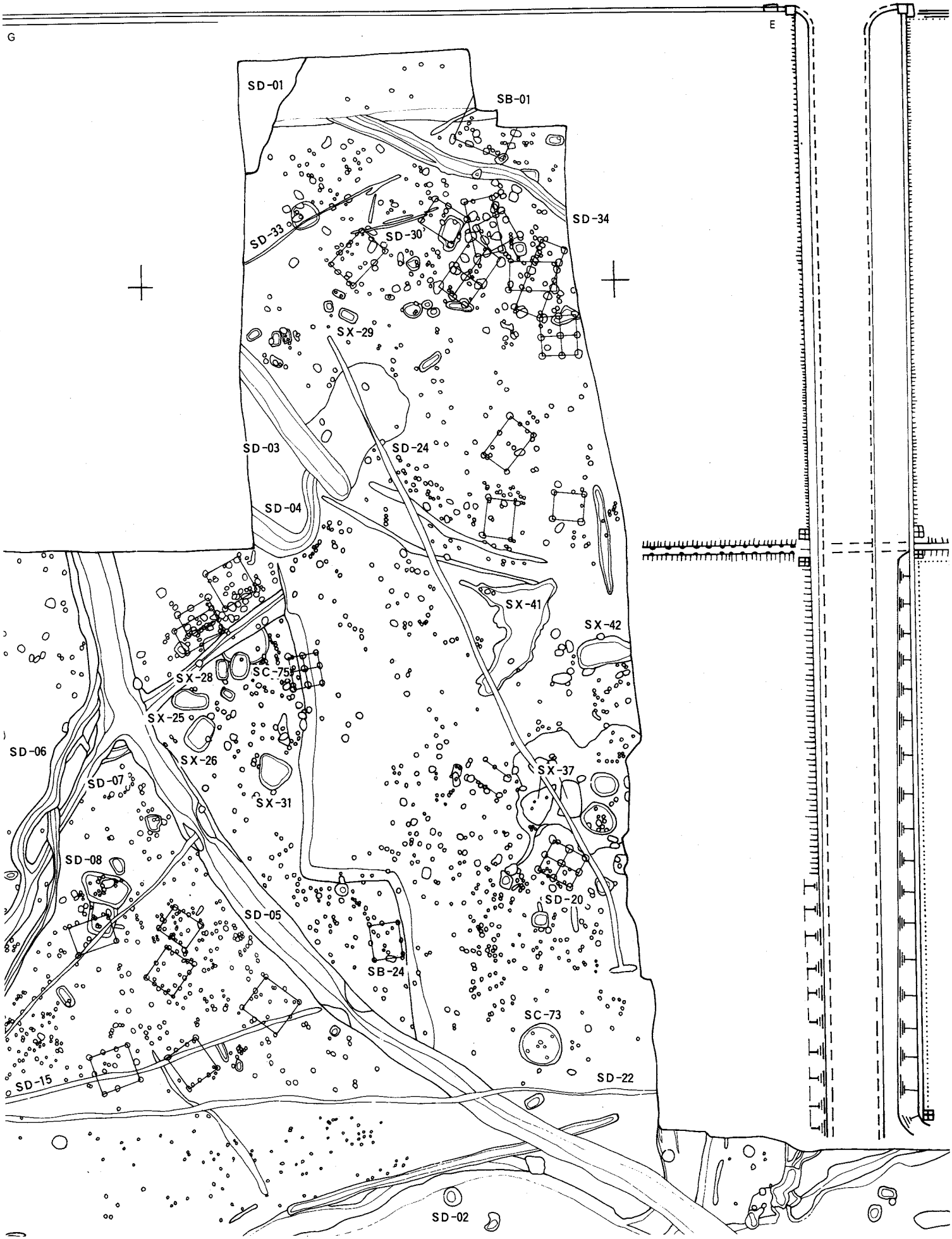


Fig. 76　Ⅸ区弥生時代遺構分布図（縮尺1/500）


G
E
SD-01
SB-01
SD-34
SD-33
SD-30
SX-29
SD-03
SD-24
SD-04
SX-41
SX-42
SX-28
SC-75
SX-25
SX-26
SD-06
SD-07
SX-31
SX-37
SD-08
SD-20
SD-05
SB-24
SC-73
SD-15
SD-22
SD-02

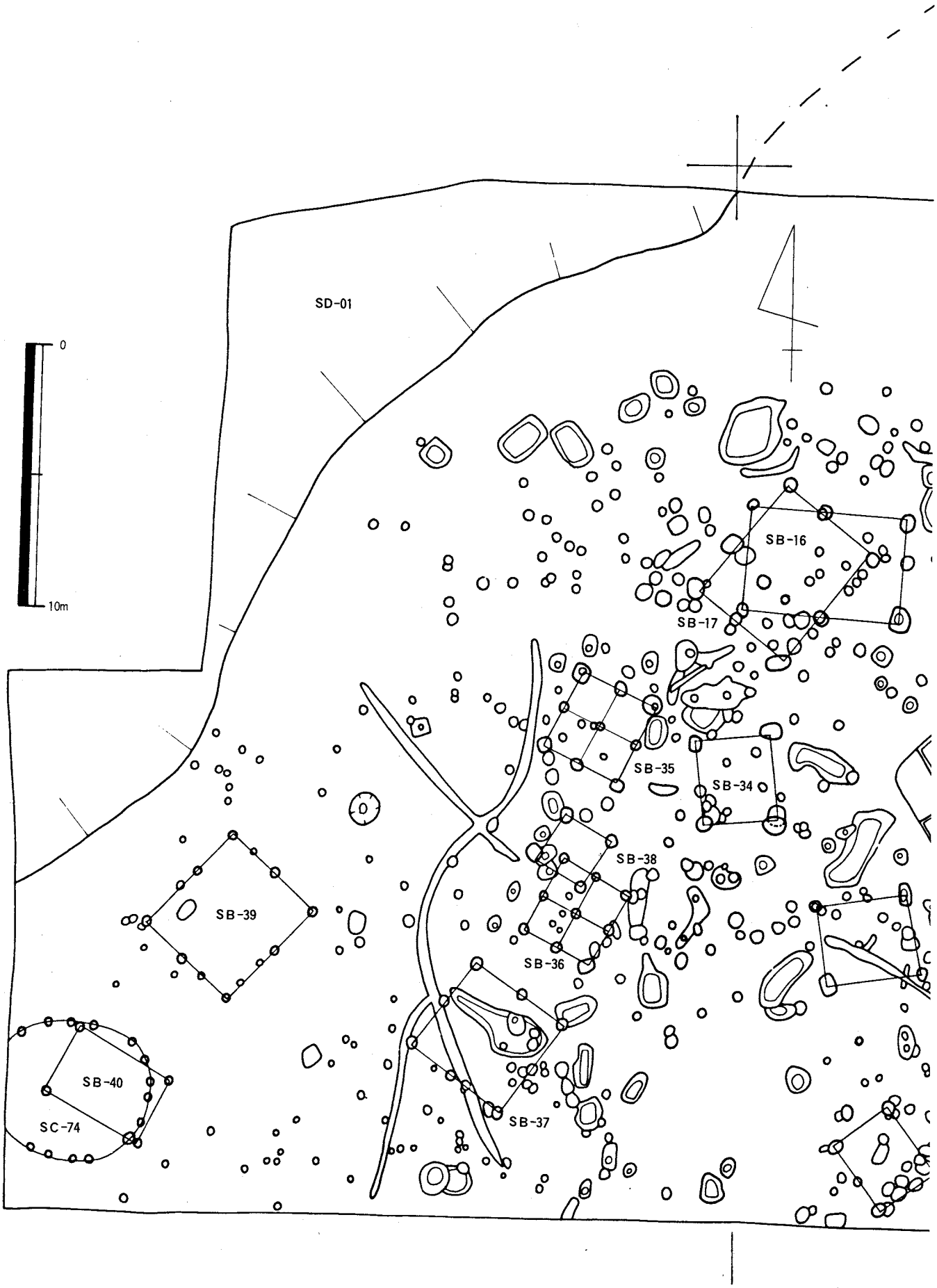


Fig. 77　Ⅸ区ＳＣ－74遺構配置図（縮尺1/200）

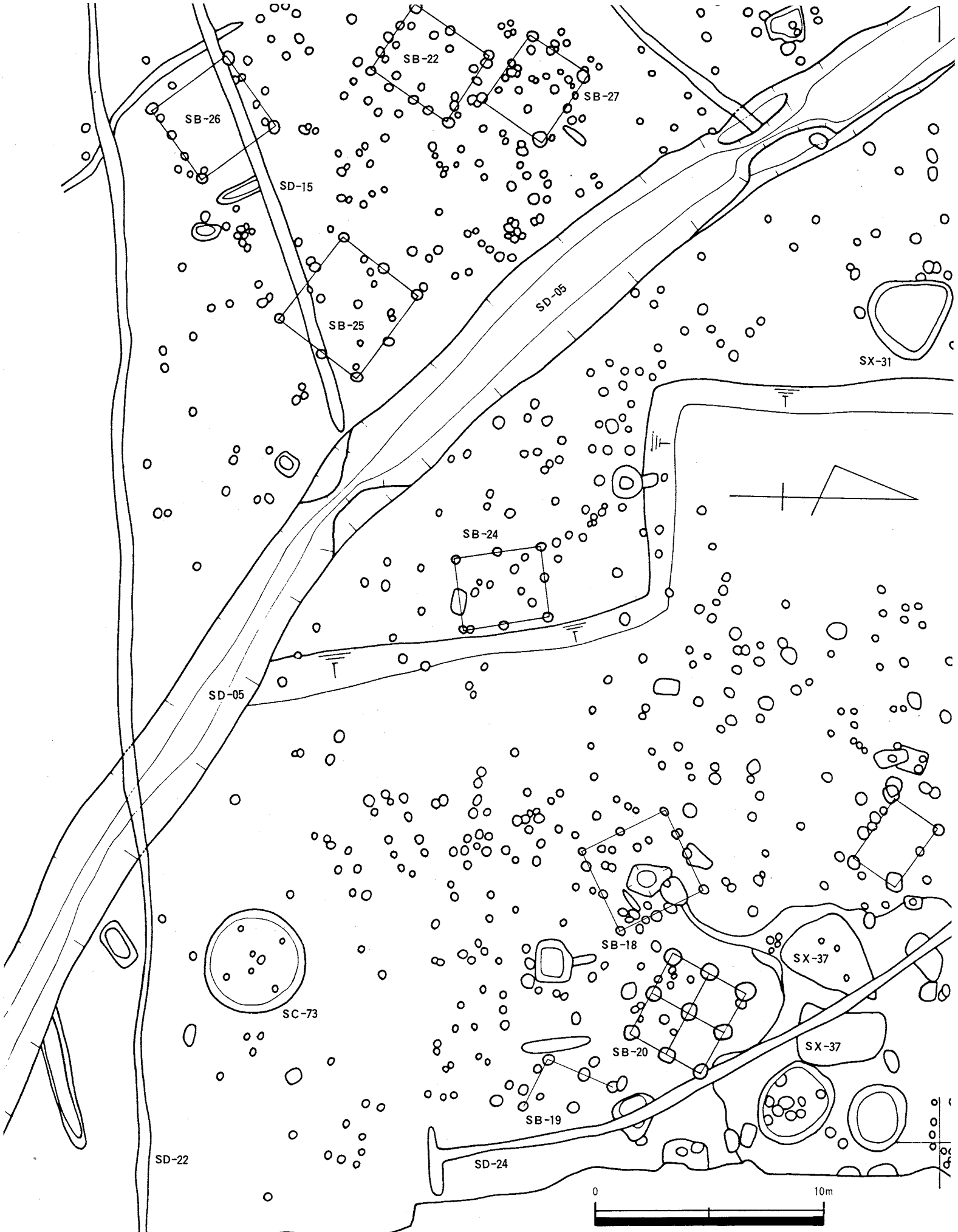


Fig. 78　Ⅸ区ＳＣ－73他遺構配置図（縮尺1/200）

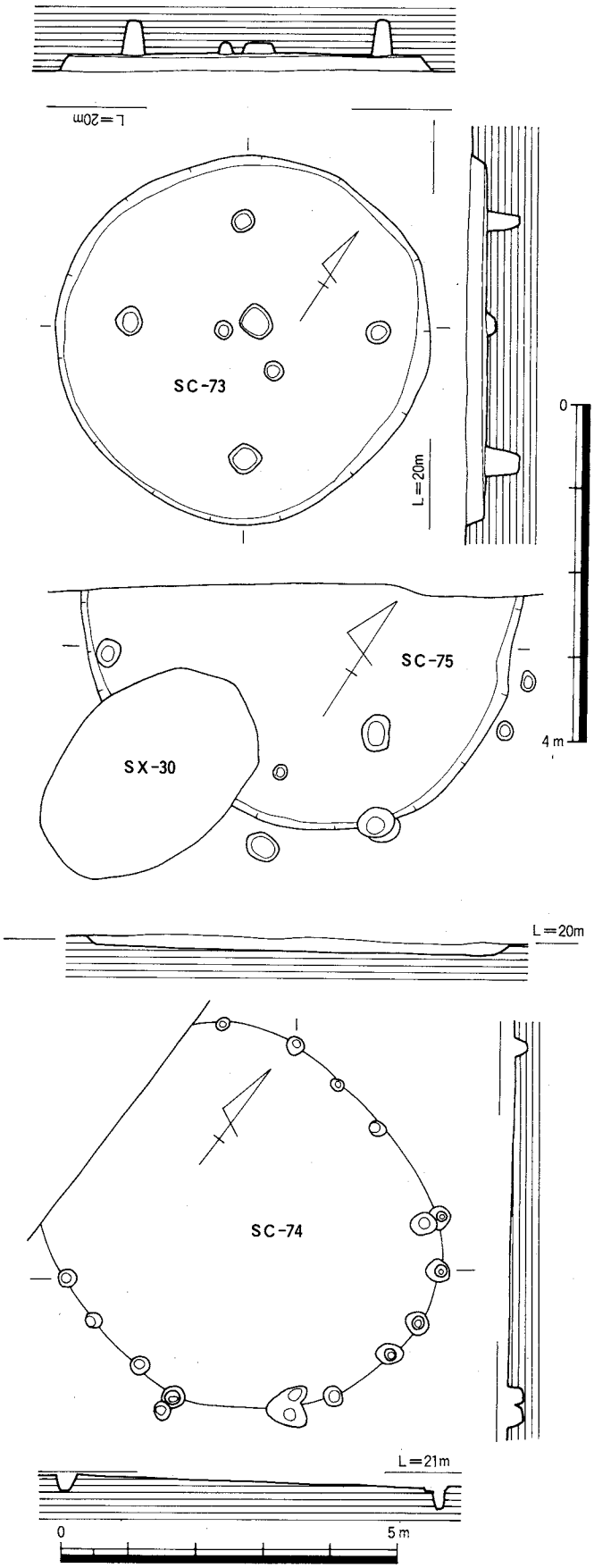


Fig. 79　Ⅸ区ＳＣ－73～75平面・断面図（縮尺1/80・1/100）

は南に弧を描きながらⅦ区の北側を西から東に向って進む。Ⅸ区のＳＤ－05の南側に達するが、そこでさらに南に弧を描き南東方向へ向きをかえる。ＳＤ－05はこのＳＤ－02から発したもので、Ⅸ区調査区北西側にあるＳＤ－01（第一次Ⅲ区から検出された大溝がⅨ区北西側まで達する）とを結ぶ水路である。このＳＤ－01・02は出土遺物から弥生時代前期～中期にかけて自然流路を人工的に造り上げた溝であることからＳＣ－73の時期には、大きな区割が生じていたと考えられる。ＳＣ－73の規模は、4.42×4.38ｍとほぼ円形で深さ0.22ｍを測る。柱は４本柱で、中央に浅い柱穴が一個ある。４本の柱穴の大きさは、0.3×0.3ｍ、深さも、0.40～0.45ｍと平均している。面積は、15.2㎡である。

ＳＣ－74（Fig.77・79　PL.37）

ＳＣ－74は調査区の南西隅から検出したもので、柱穴群が円形を呈する。住居址とは異なりを示すが、柱穴から出土する土器も弥生時代中期の時期を示すことから住居址の外側に柱穴を配するタイプの住居址？と考えた。復元すると住居址の面積は、12.56㎡程度と考えられる。

ＳＣ－75（Fig.77・79　PL.37）

調査区の中央部に位置し、古墳時代初期の溝であるＳＤ－06と弥生時代後期の土壙であるＳＸ－30に切られてる。

規模はⅨ区の内で最大で、5.25ｍ、深さ0.18ｍ、推定面積21.6㎡ある。中には柱穴は検出されていないが、周辺部に柱穴を配する住居址と考えられる。時期は出土土器から弥生時代中期後半に位置付けられる。

3．溝状遺構（Fig.80～84　PL.35～40）

Ⅸ区からは41条の溝が検出された。弥生時代に比定できる溝は十二条である。

ＳＤ－01（Fig.80）

調査区の北西側に一部検出されたが、削平を受けないところから調査は行わなかった。このＳＤ－01は、第一次調査第Ⅲ区で検出された大溝（ＳＤ－01）と同一のものである。第Ⅲ区での調査結果は、幅12～20ｍで両岸に杭列が検出され、人工的に工作し使用した旧河川であり、時期は底面出土の土器から弥生時代中期初頭と考えられる。Ⅲ区のＳＤ－01と方向的に同一であり、このＳＤ－01の南側の一部がⅨ区で検出されたものと考えられる。このＳＤ－01は南西側でも検出された。しかしながらⅨ区の西側延長上を調査した吉武遺跡群第五次調査（市道　田・飯盛線新設道路関係調査第二次調査　福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集　福岡市教育委員会刊）の北側から急激に方向（第五次調査の段階では一部検出されただけであった）を西にかえている。これは旧日向川の支流もしくは氾濫により生じた大溝と考えられ、西を流れる日向川が方向をかえ室見川氾濫源に流れていたものと考えられる。

ＳＤ－02（Fig.80）

調査区の南側第Ⅷ区に検出された。東西に流れるＳＤ－02は幅14～21ｍを有し台地を二分する。下層から出土する土器は、弥生時代中期の時期を示すものである。このＳＤ－02の上面にあるＳＸ－21・27は須恵器の初期段階の遺構が存在することから、この以前に埋まっていたことは明らかである。このＳＤ－02に流れ込む溝が二条ある。ＳＤ－05・06で両方ともＳＤ－01と02を連結するために造られた溝である。吉武遺跡群第三次調査（市道　田・飯盛線新設道路関係調査第一次調査　福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集　福岡市教育委員会刊）で吉武遺跡群第二次調査のⅧ区とⅨ区の間、幅20ｍを調査した。この調査でⅧ区から検出されたＳＤ－02のつづきが検出された。Ⅷ区で東西に流れるＳＤ－02はそのままⅨ区のＳＤ－05の南側まで急接近するが、ここで急に弧を描きながら南に方向をかえる。さらに方向をかえ北東へ向っている。第三次調査では、Ⅸ区から検出されたＳＤ－05が再び検出され、これがＳＤ－02に流れ込む状況であった。その部分に杭が打ち込まれ、二列の杭列を構成している。第１号杭列はＳＤ－05の西側、第２号杭列は東側に位置する。ＳＤ－02の調査結果は、Ⅷ区（第二次調査）の調査結果とは異なり弥生時代中期後半から後期初頭の土器が主体であった。これはＳＤ－05・06（第二次調査Ⅸ区検出遺構）から出土する土器群と同一であるが、ＳＤ－02本来の時期とは異なる。

ＳＤ－03（Fig.81・83）

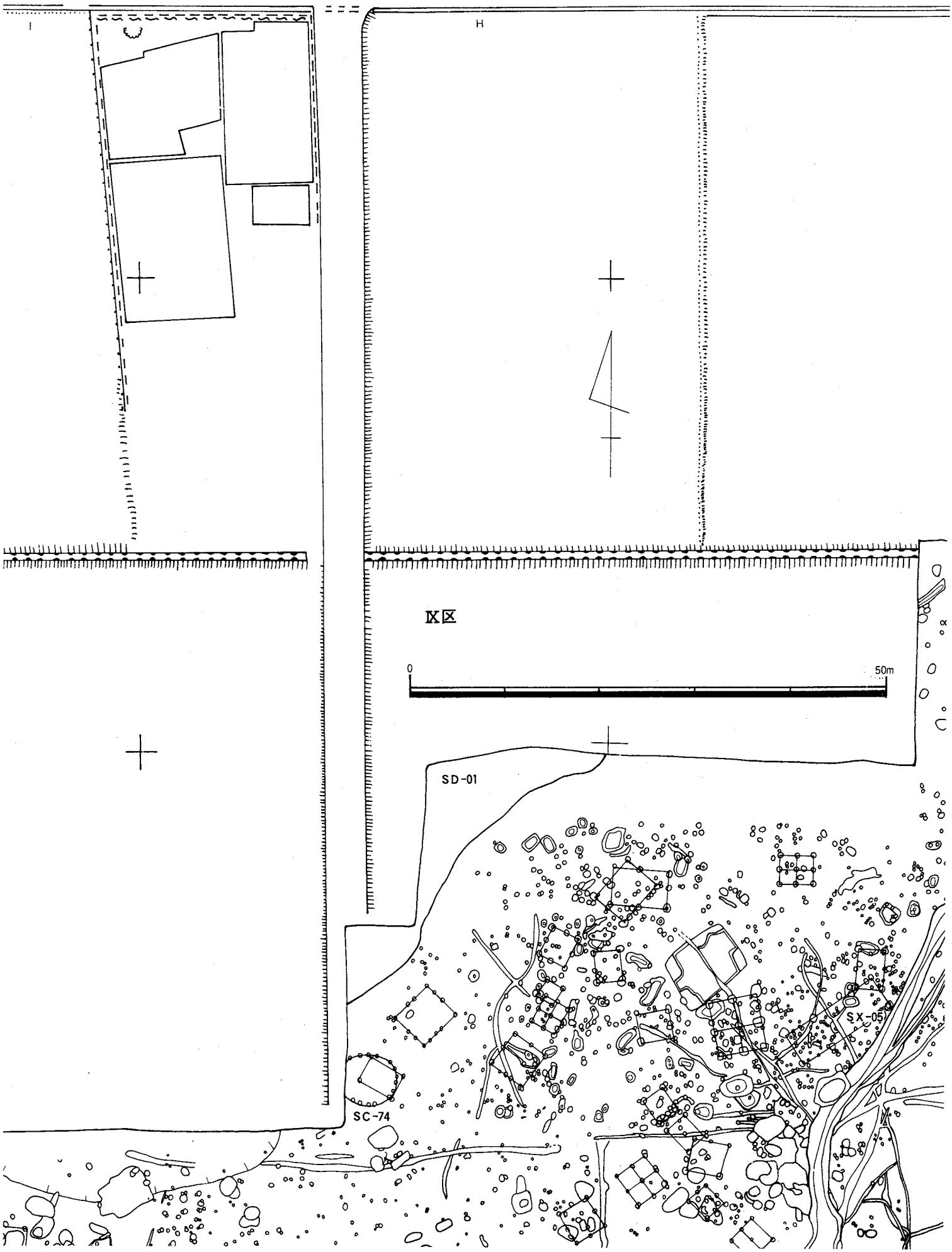
北側調査区の北西部に検出した。北西から南東に延びる溝であるが、途中で丸くおさまる。ＳＤ－01から延びた溝と考えられ、その全長は32ｍ（その内20ｍを調査）で幅2.4ｍ、深さ0.6ｍである。丸くおさめた先端部から弥生時代中期後半の壺形土器が出土した（Fig.98－823492001）。

ＳＤ－04（Fig.81）

ＳＤ－03の南側に位置し、ＳＤ－03に流れ込む。これもＳＤ－01から発した溝と考えられ、ＳＤ－03に流れ込むことから同時期と考えられる。溝幅3.5ｍ、深さ0.3ｍである。ＳＤ－03の方が約0.3ｍ程深いことから04から03に流れ込むものと考えられる。

ＳＤ－05（Fig.80・82・84）

調査区のほぼ中央を北西から南東に向って流れる溝でⅨ区を二分する。ＳＤ－02の大溝とＳＤ－01（調査区の北西側を流れる旧河川）とを結ぶ水路である。途中堰状遺構があるが、これは水の調整施設としての役割を持ち、この北側にはＳＤ－06がある。このＳＤ－06は第Ⅷ区で検出したＳＤ－02に流れ込む状態が第三次調査でも確認されている。ＳＤ－05の標高を見ると堰の北側で19.28ｍ堰の南


I
H
Ⅸ区
0
50m
SD-01
SC-74
SX-05

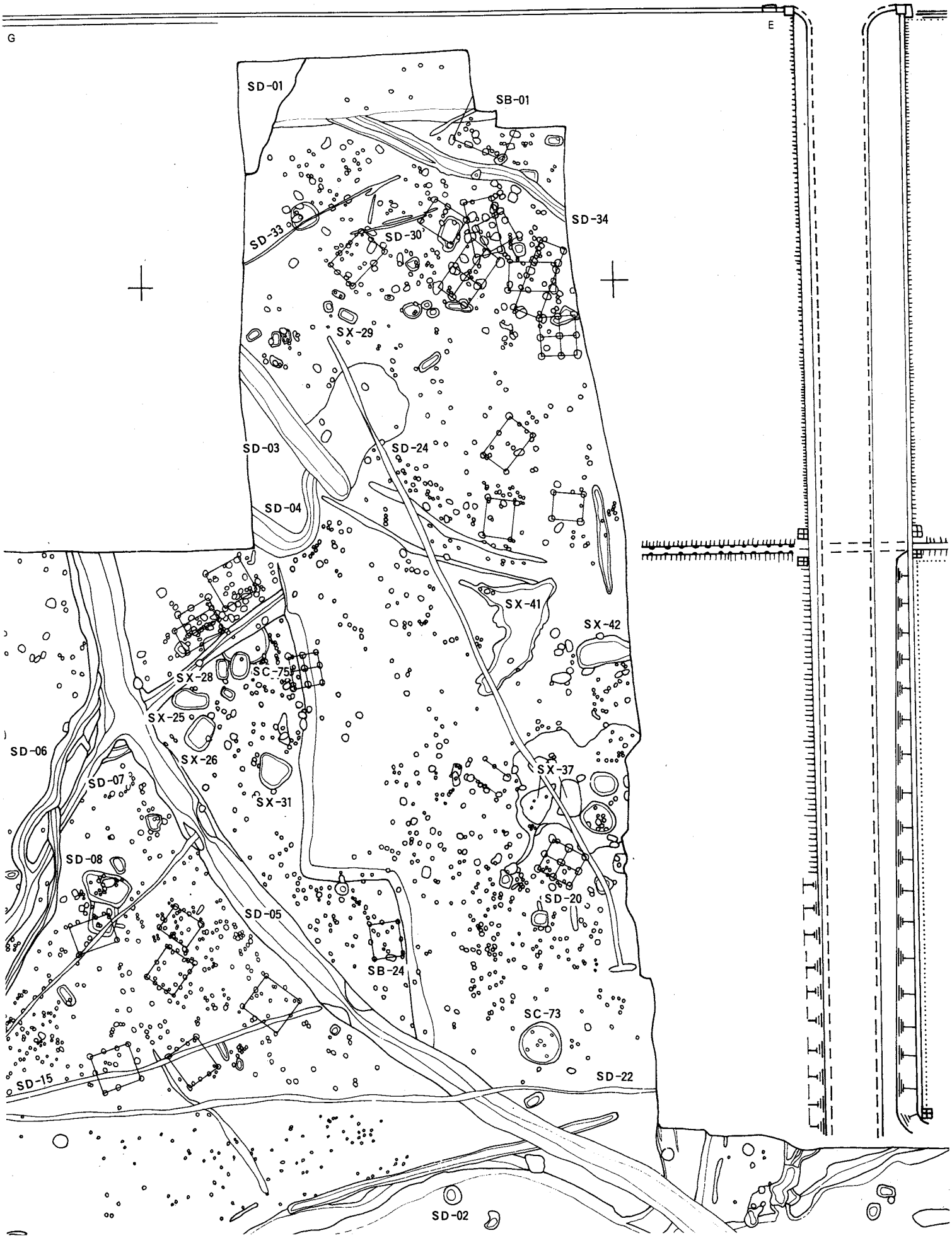


Fig. 80　Ⅸ区検出遺構分布図（縮尺1/500）

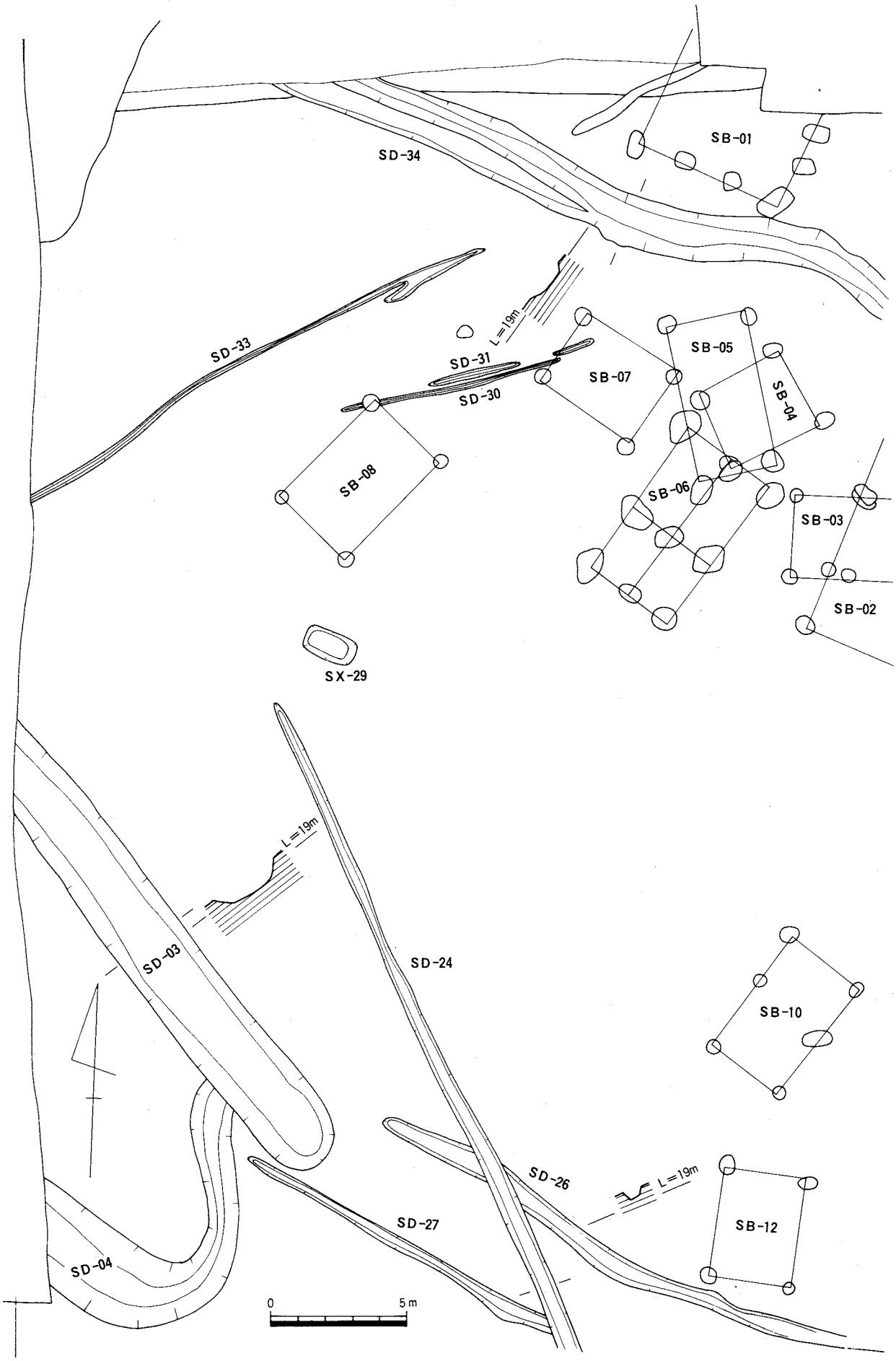


Fig. 81　Ⅸ区弥生時代検出遺構図－1（縮尺1/200）

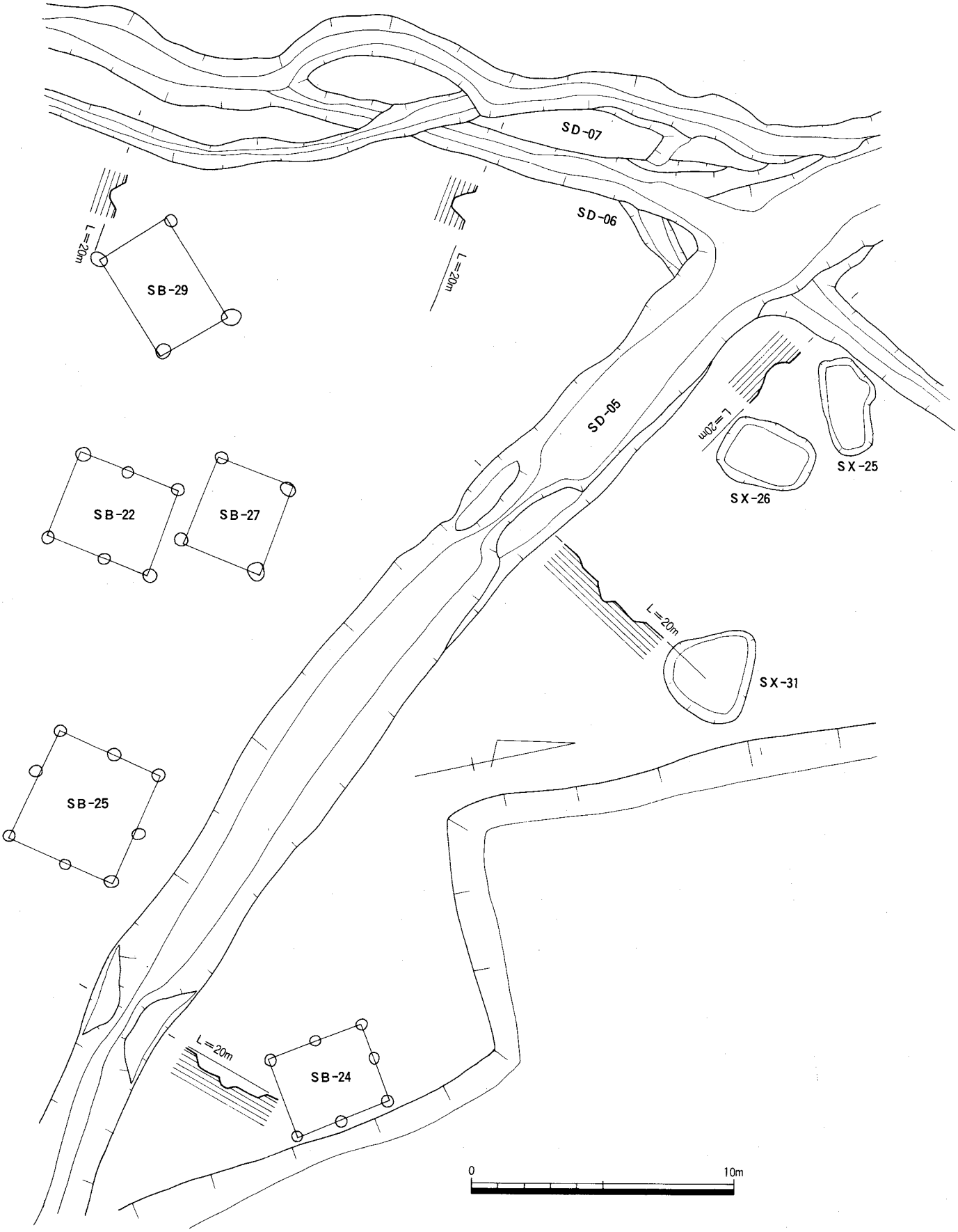


Fig. 82　Ⅸ区弥生時代検出遺構図－２（縮尺1/200）

側で18.706m、中央部で19.10m、南側で18.666mで水の流れが北から南に流れることが明らかである。これはＳＤ－06でも同様である。ＳＤ－05の中央部には二ケ所に幅の狭い部分がある。中央部の溝底面幅は1.8m程度であるが、0.3m、0.7mで二段掘りを行ない通路としての役割を持っている。おそらく橋のかかった状態であったと考えられるが、その痕跡は確認できなかった。第１の橋と第２の橋の距離は25mである。ＳＤ－05は調査した所で110m、推定で130mと考えられ、溝幅は北側で５m、深さ0.65m、中央部で４mの幅、深さ0.6m、南側で2.5mの幅、深さ0.86mである。

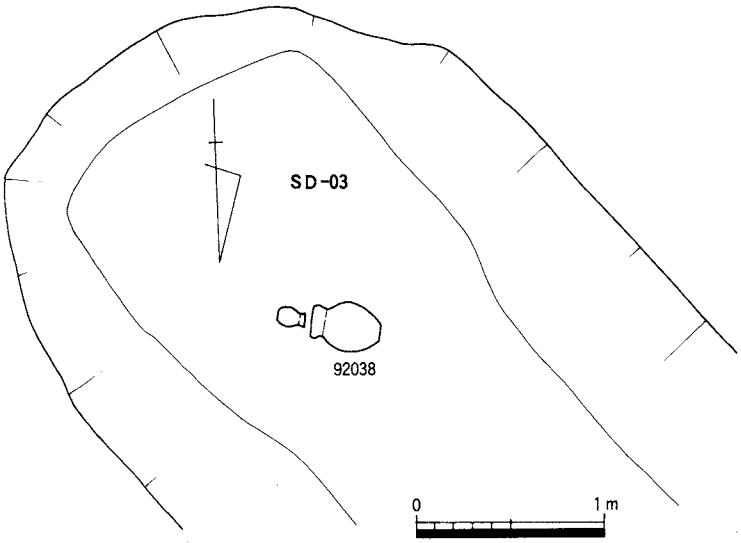


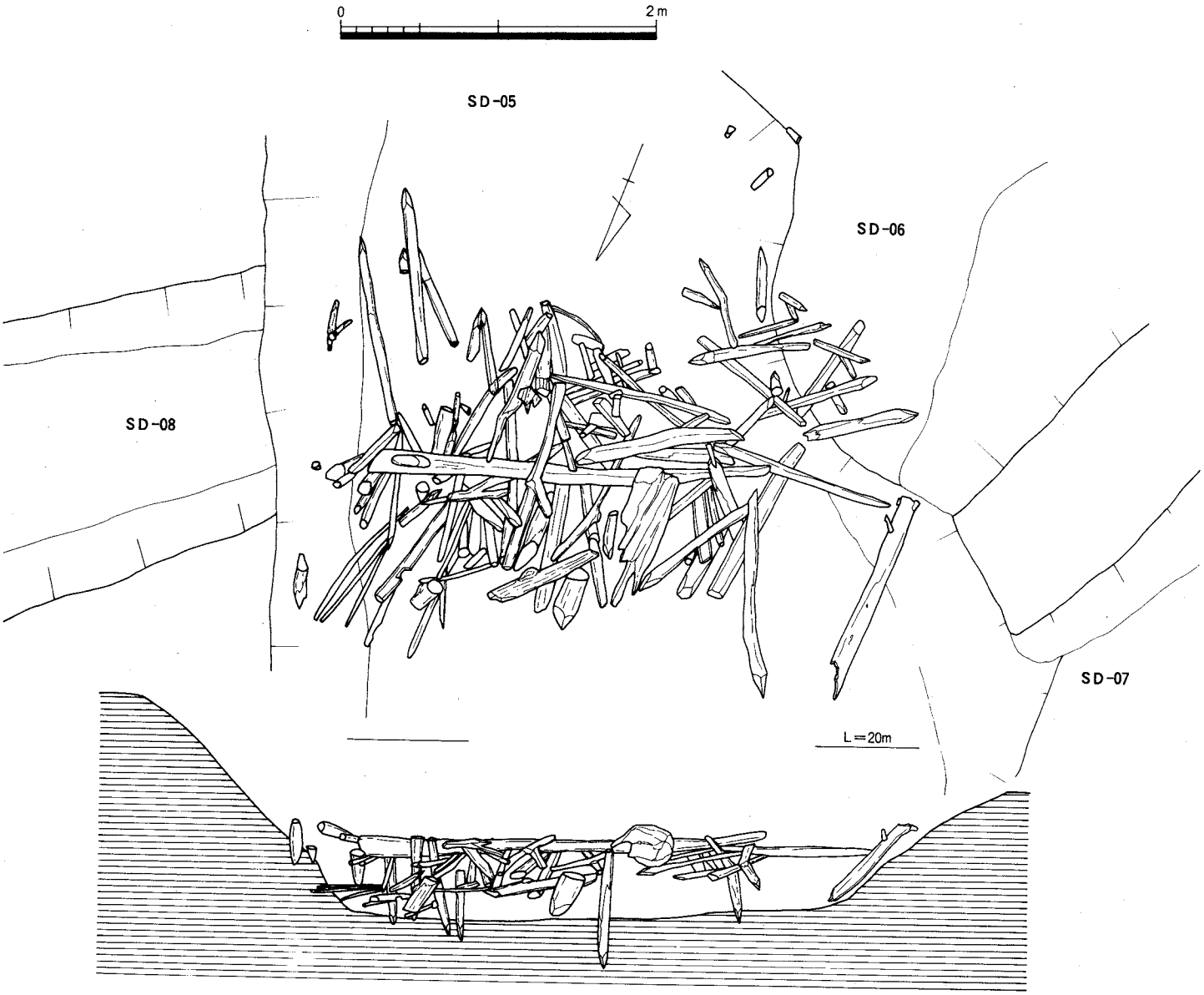
Fig. 83　Ⅸ区ＳＤ－03遺物出土状態（縮尺1/40）

４．堰状遺構（Fig.84　PL.39）

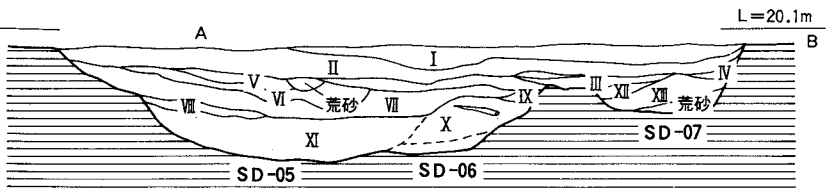
ＳＤ－05の北側、ＳＤ－06の合流地点の南側から検出した。北側（ＳＤ－01）からの水を塞止めＳＤ－06に流す役割を持つもので、杭と横木・草・藁で構成している。北側からの水流を塞止めるため北側部分に大きな丸太杭を打込み、中央部に横木の材を交互に交差させると同時に、草を束ね横組み材と一緒に編む。その後柱材を横木として利用し押えの役割を持たせた後、さらに杭によって横木を固定させている。使用された材を見ると建築材の再利用品が多く、杭とした材でも上部には枘穴のあるもの等がある。堰状遺構は幅４m、深さ1.32m、横木までの深さ0.5mである。この間の土層は、第Ⅰ層　暗黒褐色土。第Ⅱ層　褐色土。第Ⅲ層　暗褐色土。第Ⅳ層　灰褐色土。第Ⅴ層　細砂まじりの褐色土。第Ⅵ層　細砂まじりの青灰色土。第Ⅶ層　黒褐色土で一部に砂を含む。第Ⅷ層　青灰色粘質土。第Ⅸ層　炭化物を含む暗灰色砂質土。第Ⅹ層　黒灰色土でＳＤ－07部分に認められＳＤ－05を拡張している。第ⅩⅠ層　ＳＤ－05の最下層で砂まじりの暗黒灰色粘質土と荒砂の互層である。第ⅩⅡ層　砂まじりの暗褐色土。第ⅩⅢ層　荒砂と褐色土の互層である。またＳＤ－05単独の土層はFig.84－３に図示した。第Ⅰ層　黒褐色土。第Ⅱ層　明褐色シルト層。第Ⅲ層　砂を含む褐色シルト層。第Ⅳ層　細砂層。第Ⅴ層　青灰色粘質土。第Ⅵ層　小石混入の灰色粘質土。第Ⅶ層　黄褐色土。第Ⅷ層　暗黒灰色粘質土である。

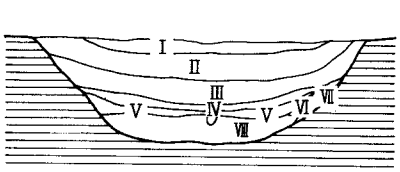
ＳＤ－06

ＳＤ－06はⅧ区検出のＳＤ－02に流れ込む形をとる。ＳＤ－02から北上し途中でＳＤ－08と枝別れし、二本平行に北流する。再度ＳＤ－05の手前で合流する。しかしながらこの二本の溝は時間差が認められる。ＳＤ－06が弥生時代中期末～後期に造られ、その後ＳＤ－07が弥生時代後期前半、ＳＤ－08が弥生時代後期中葉である。ＳＤ－06はＳＤ－05の堰状遺構北側で合流する。ＳＤ－01から流れる水流は、ＳＤ－05の堰状遺構で塞止められＳＤ－06に流れる。ＳＤ－06は全長78m、幅は北側で1.4m、深さ0.2m、中央部で2.2mの幅、深さ0.92m、南側で2.8mの幅、深さ0.62mを測る。ＳＤ－05・06でⅨ区の調査区が三分割された。



Ⅰ層 暗黒褐色土
Ⅱ層 褐色土
Ⅲ層 暗褐色土
Ⅳ層 灰褐色土
Ⅴ層 細砂混りの褐色土
Ⅵ層 細砂混りの青灰色土
Ⅶ層 黒褐色土一部砂を含む
Ⅷ層 青灰色粘土層
Ⅸ層 炭化物を含む暗灰色砂質土
Ⅹ層 砂混りの黒灰色土
Ⅺ層 暗黒灰色粘質土と荒砂の互層
Ⅻ層 砂混りの暗褐色土
XIII層 荒砂と褐色土の互層





SD-05 土層断面図

Ⅰ層 黒褐色土
Ⅱ層 明褐色シルト層
Ⅲ層 砂を含む褐色シルト層
Ⅳ層 細砂層
Ⅴ層 青灰色粘土層
Ⅵ層 小石混りの灰色粘質上層
Ⅶ層 黄褐色土
Ⅷ層 暗黒灰色粘質土層

Fig. 84　Ⅸ区ＳＤ－05堰状遺構、ＳＤ－05～07土層断面図（縮尺1/40・1/80）

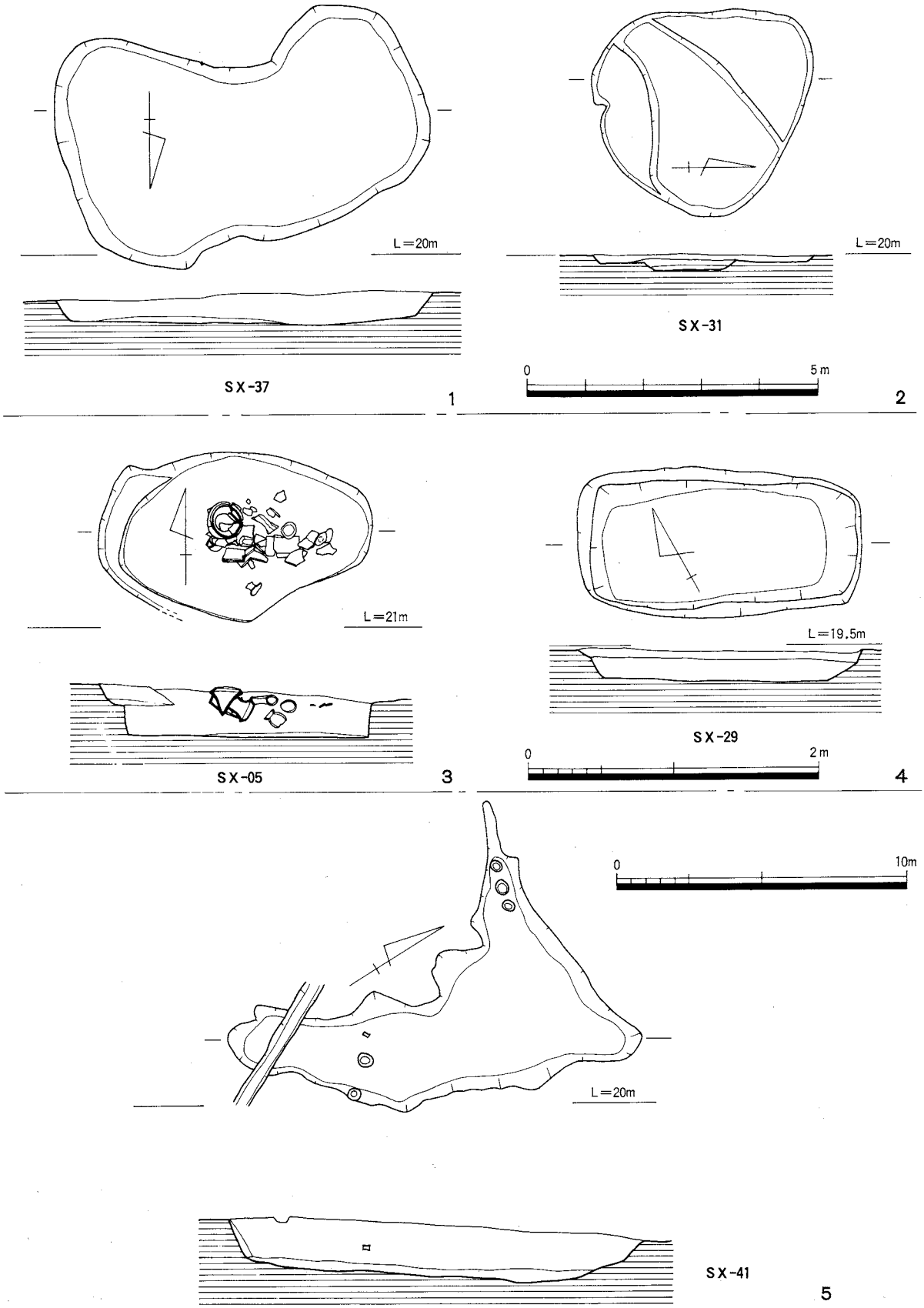


Fig. 85　Ⅸ区ＳＸ—05・29・31・37・41平面・断面図（縮尺1/40・1/100・1/200）

ＳＤ－30・34 (Fig.80)

ＳＤ－30・34は調査区の北側から検出した。ＳＤ－30は遺存状態が悪く底面しか残っていない。ＳＤ－34は幅２ｍ、長さ24ｍ、深さ0.2ｍでＳＤ－01から南東に向けて流れている。削平が著しいためＳＤ－01からの出発点は段落部にあたるため確認できなかった。

５．土壙 (Fig.85)

土壙は、弥生時代の遺物を出土する土壙を図示した。Fig.85－１は**ＳＸ－37**で調査区南東部、ＳＢ－15・18の附近で検出した。浅い皿状を呈した凹地がありその下から検出されたもので、長軸3.3ｍ短軸1.7ｍ、深さ0.25ｍを測る。Fig.99－99022の鉢形土器が出土した。**ＳＸ－31**　Fig.85－２に図示した楕円形の浅い皿状を呈する土壙で調査区中央部から検出した。長軸2.0ｍ、短軸1.9ｍ深さ0.13ｍである。**ＳＸ－05**　Fig.85－３に図示した。楕円形を呈する土壙で、ＳＤ－06より西側の中央部から検出した。出土遺物が多くFig.99に図示した。壁面はほぼ垂直に切られている。長軸1.98ｍ、短軸1.12ｍ、深さ0.3ｍを測る。**ＳＸ－29**　Fig.85－４に図示いた。調査区北側のＳＤ－03･30の中央部に位置し、長軸2.0ｍ、短幅１ｍ、深さ0.2ｍの長方形の土壙である。出土遺物はない。ＳＸ－41　調査区の東側中央部にある遺構で泥炭質の土層が堆積していた。長軸14ｍ、短軸9.5ｍ、深さ1.7ｍで意味不明の土壙である。出土遺物はFig.99に図示したが、このほかに高杯の脚部がある。弥生時代後期に属する遺構である。

６．Ⅴ区～Ⅶ区・Ⅸ区出土遺物

紙面の都合上Ⅴ区～Ⅶ区・Ⅸ区の出土遺物を一括で報告する。Ⅴ～Ⅶ区は溝状遺構、杭列と掘立柱建物しか検出されず、第一次調査Ⅱ区・Ⅳ区のような住居址の検出はみられない。Ⅸ区には３軒の住居址が検出されただけであった。

Ⅴ区出土遺物

Ⅴ区からは溝状遺構（ＳＤ－10～14）から多量の土器・石器・木器が出土している。石器・木器については後記するとして土器から記述している。

① **土器.** (Fig.86～94)

調査区の都合でⅤ区とⅥ区は同一であり、ＳＤ－10・12の遺物もⅤ区の遺物としてとらえておく。また紙面の都合上、甕形土器・壺形土器・鉢形土器に関しては、形により区分し、詳細の説明は割愛する。また底径、最大径に関しては説明を省く。

甕形土器　甕形土器は形態（特に口辺部）によって６つのタイプに分類できる。

Ａタイプ　平坦口縁で内側のつまみ出しがない逆「Ｌ」字状口縁を呈する。Ｂタイプ　如意形に開く口縁で口唇部に刻目を施すものと施さないものがある。Ｃタイプ　平坦口縁で内側にわずかなつまみ出しを持つ。Ｄタイプ　「く」字状口縁を呈する。Ｅタイプ　平坦面を持ち鋤形口縁を呈し、口唇部が下に下がるものと平坦なものがある。Ｆタイプ　口縁形状が「Ｔ」字状を呈する。

壺形土器　壺形土器も口辺部形態によって８つのタイプに分類できる。

ａタイプ　平坦口縁で内側につまみ出しがない逆「Ｌ」字状口縁を呈する。ｂタイプ　如意形に開く形状を呈し、頸部はしまる。ｃタイプ　平坦口縁で内側につまみ出しを施し、鋤形口縁とする。ｄタイプ　「く」字状口縁を呈する。ｅタイプ　袋状口縁を呈し、丸みがあり深いタイプ。ｆタイプ　袋状口縁を呈するが、袋状部分が浅いタイプ。ｇタイプ　逆「く」字状口縁を呈し、稜を持つ。ｈタイプ　胴部から内湾しながら立上り筒状を呈し、二条の三角突帯を巡らす。

ＳＤ－14出土土器（Fig.86～52001～52020　PL.47）

ＳＤ－14から出土した土器は多量であったが、紙面の都合上20点を図示した。

甕形土器　Ａタイプの甕形土器口縁が１・２・19の３点である。１の口径は13.5cm、２の口径が14cm、19の口径が15cmと小型である。Ｂタイプはなくｃタイプが３・５・18の３点で、それぞれ15.7cm、14cm、14.5cmの口径を測る。Ｄタイプは４・20の２点で、４は口唇部が短く、20は長い。両方とも口縁下に三角突帯を一条巡らす。４が14cmの口径を測る。

壺形土器　７はａタイプに属する有蓋小形壺である。口径９cm。８はｄタイプにに属する壺形土器で、口径8.5cmを測る。このほかに大型の分類に属する蓋（９）、高坏の坏部と脚部がある。高坏坏部は口縁が平坦で鋤形を呈し、口縁下に一条の三角突帯を配する。口径17cmを測る。12は高坏脚部で裾径が８cmである。10・11は器台である。裾径が両方とも５cmを測る。

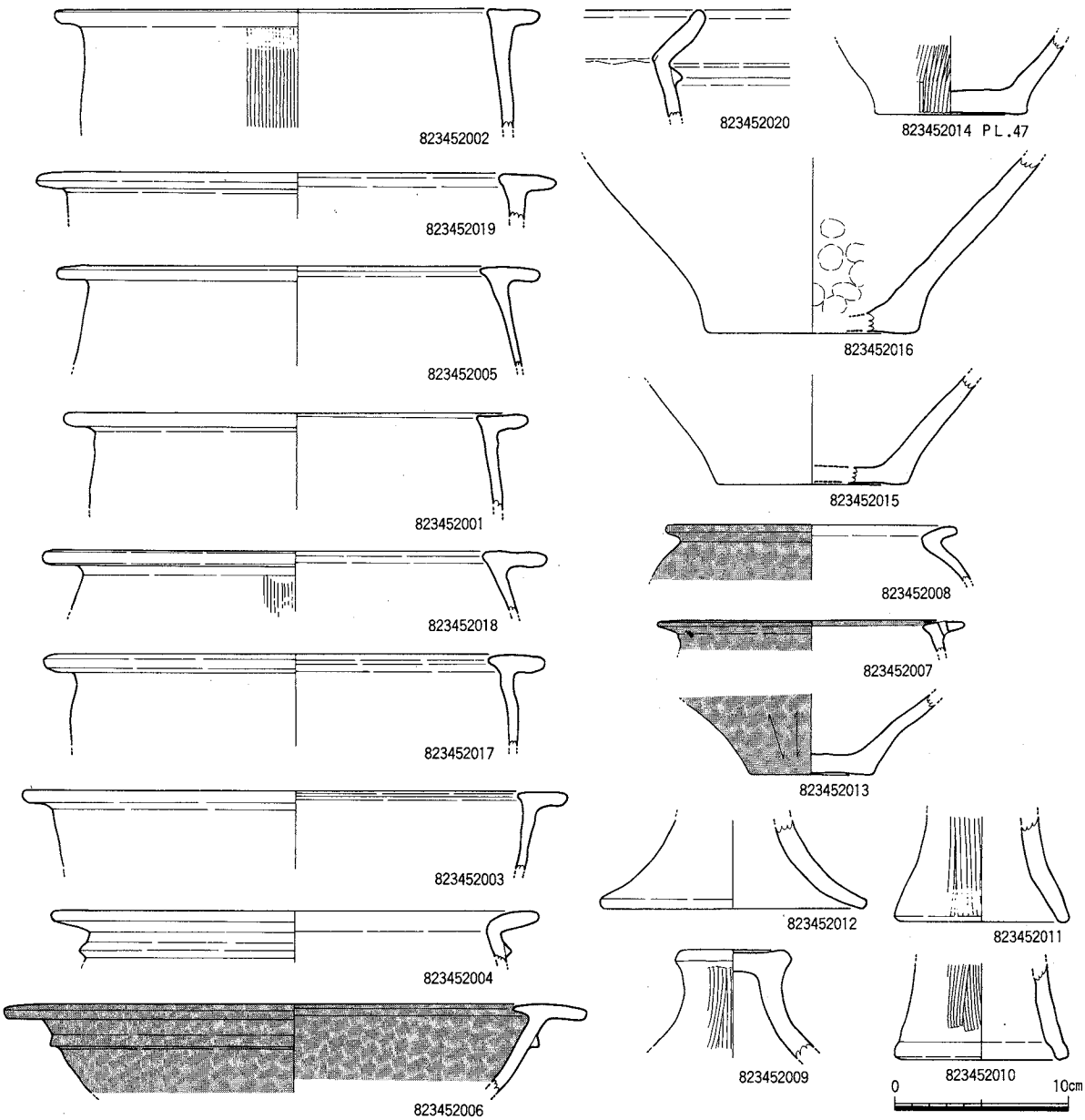


Fig. 86　Ⅴ区ＳＤ－14出土土器（縮尺1/4）

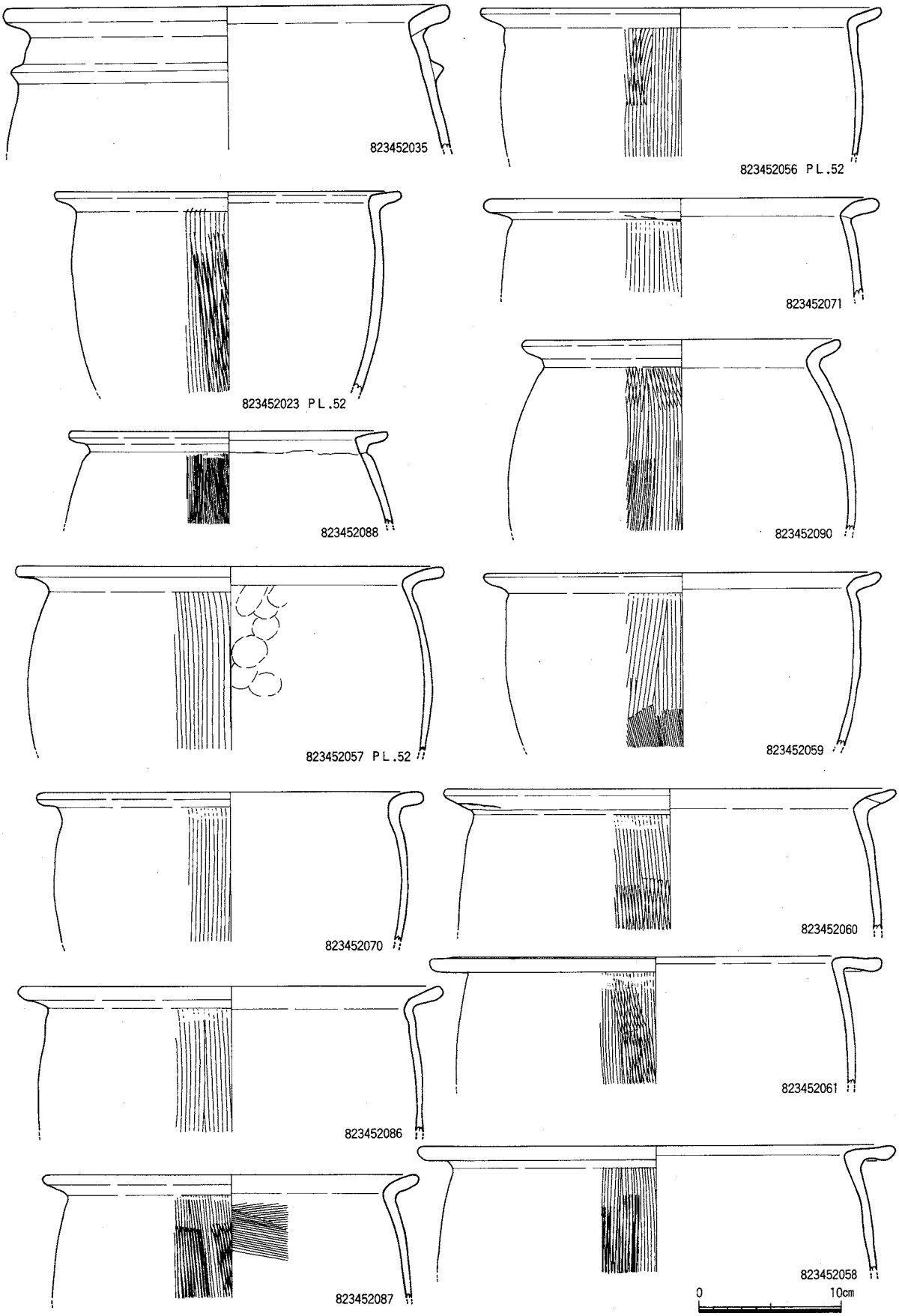


Fig. 87　V区ＳＤ－11出土土器－１（縮尺1/4）

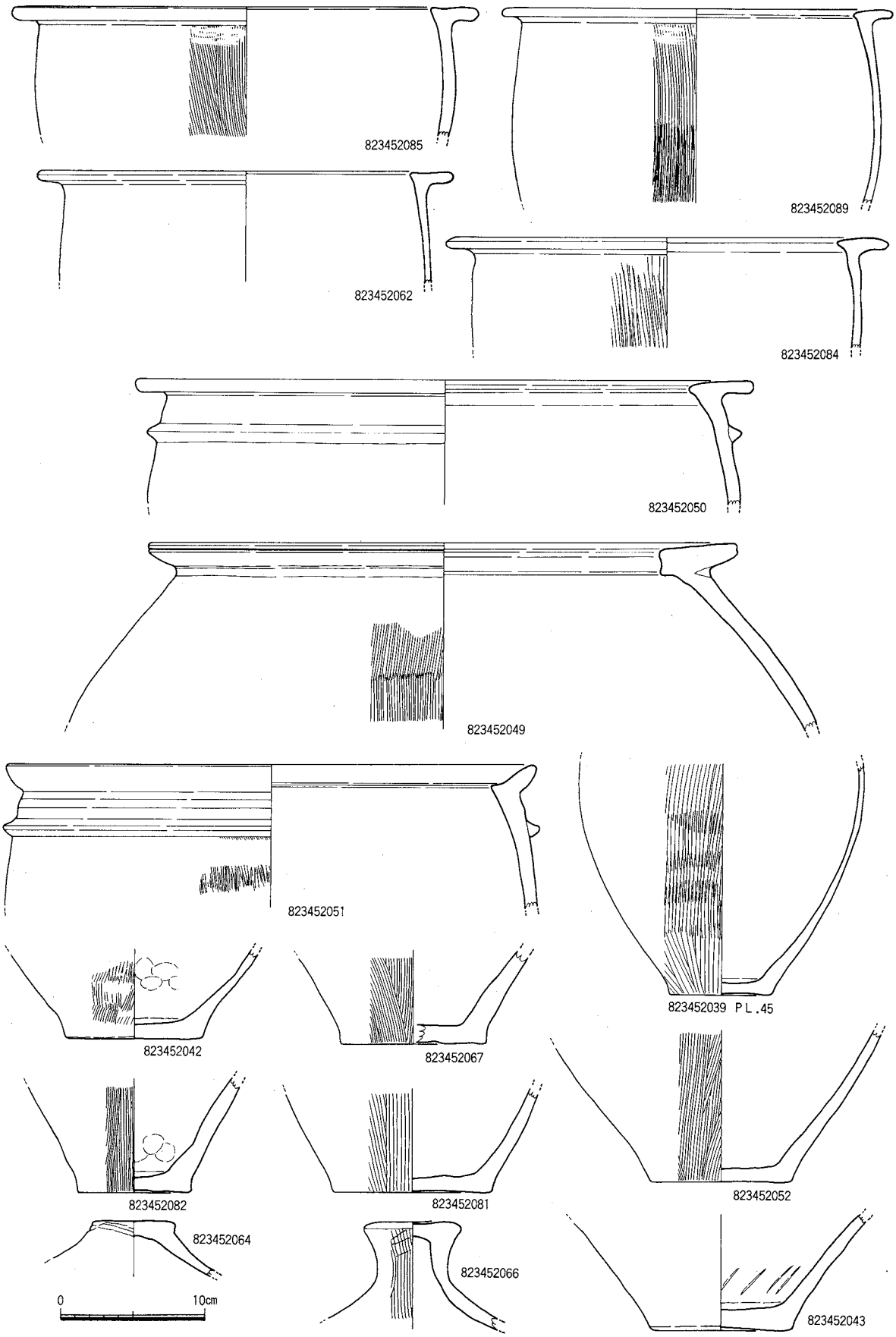


Fig. 88　V区ＳＤ－11出土土器－２（縮尺1/4）

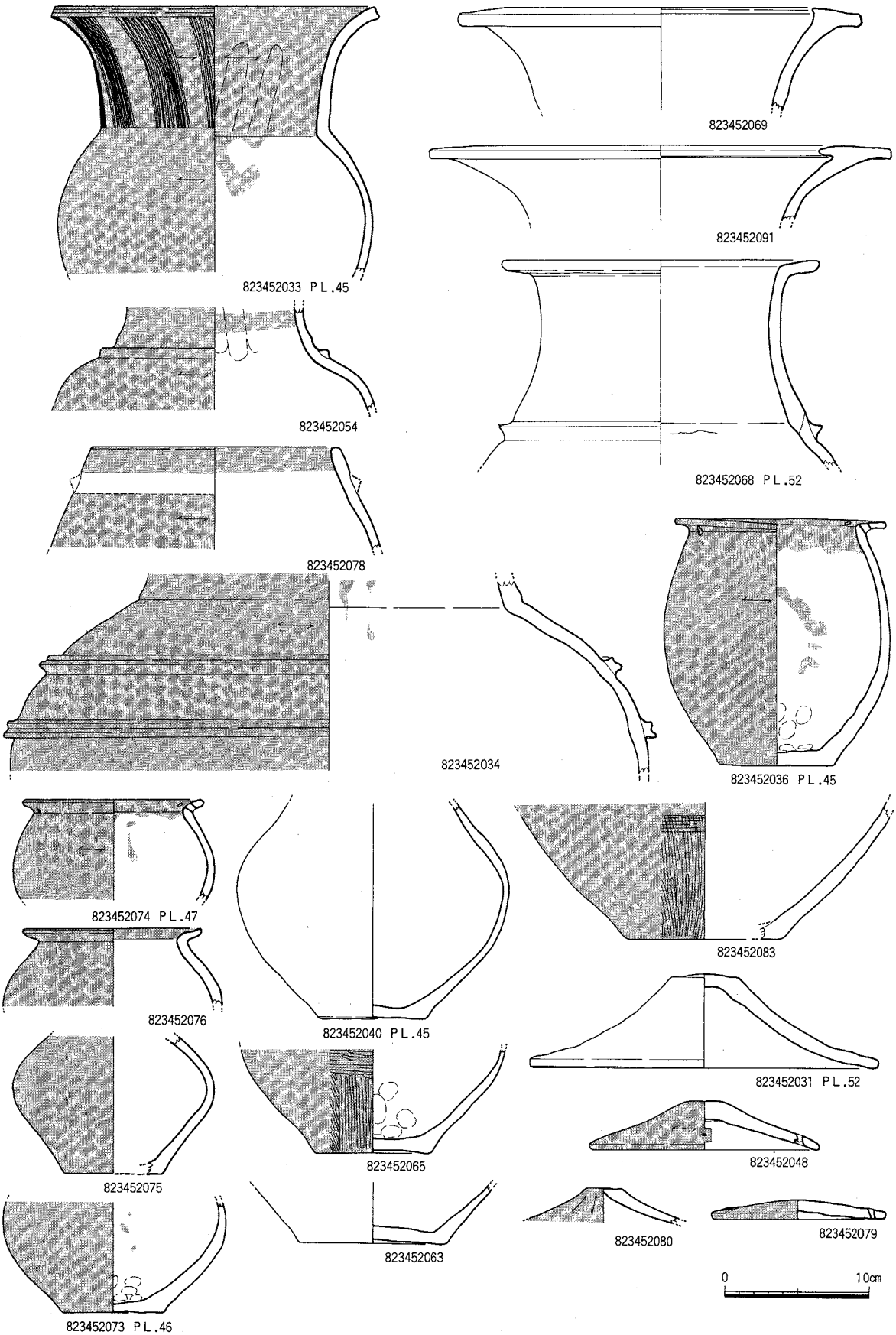


Fig. 89　V区ＳＤ－11出土土器－３（縮尺1/4）

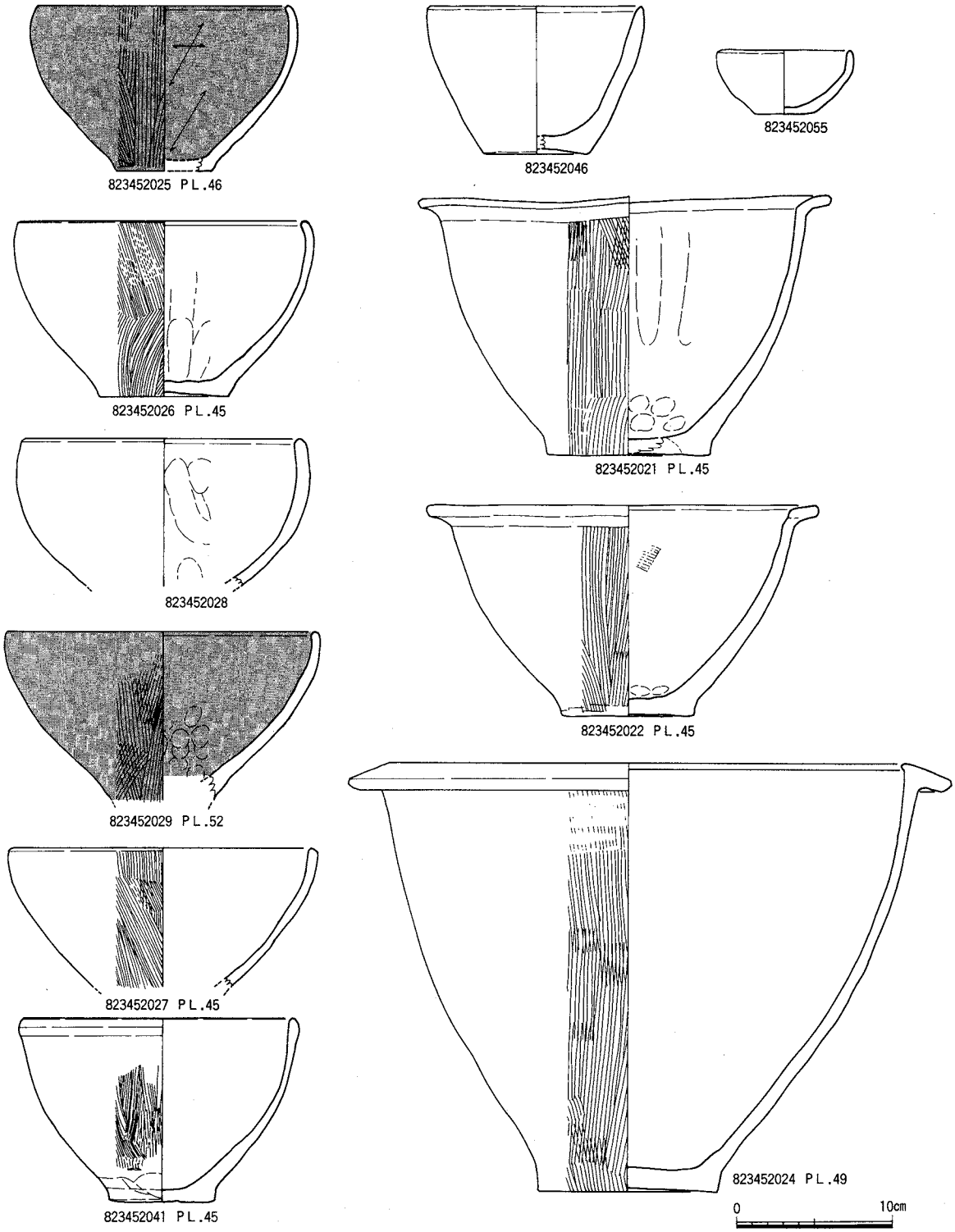


Fig. 90　V区ＳＤ－11出土土器－４（縮尺1/4）

ＳＤ－11出土土器(Fig.87～91　PL.45～47・49・52)（52021～52093）

甕形土器　口辺部、底部で28点図示した。Ａタイプに属する甕形土器は、23・58・61・70・88の５点である。88はＤタイプに近い形状を呈する。口径は23が24.5cm、58が34cm、61が32cm、70が27cm、88が22cmである。ＢタイプはなくＣタイプは35・39・50・62・84の５点である。ただ49も平坦に近いが内側が「Ｍ」字状を呈する。35は32.4cm、39が27.4cm、50が43.2cm、84が31.2cm、49が41.2cm。

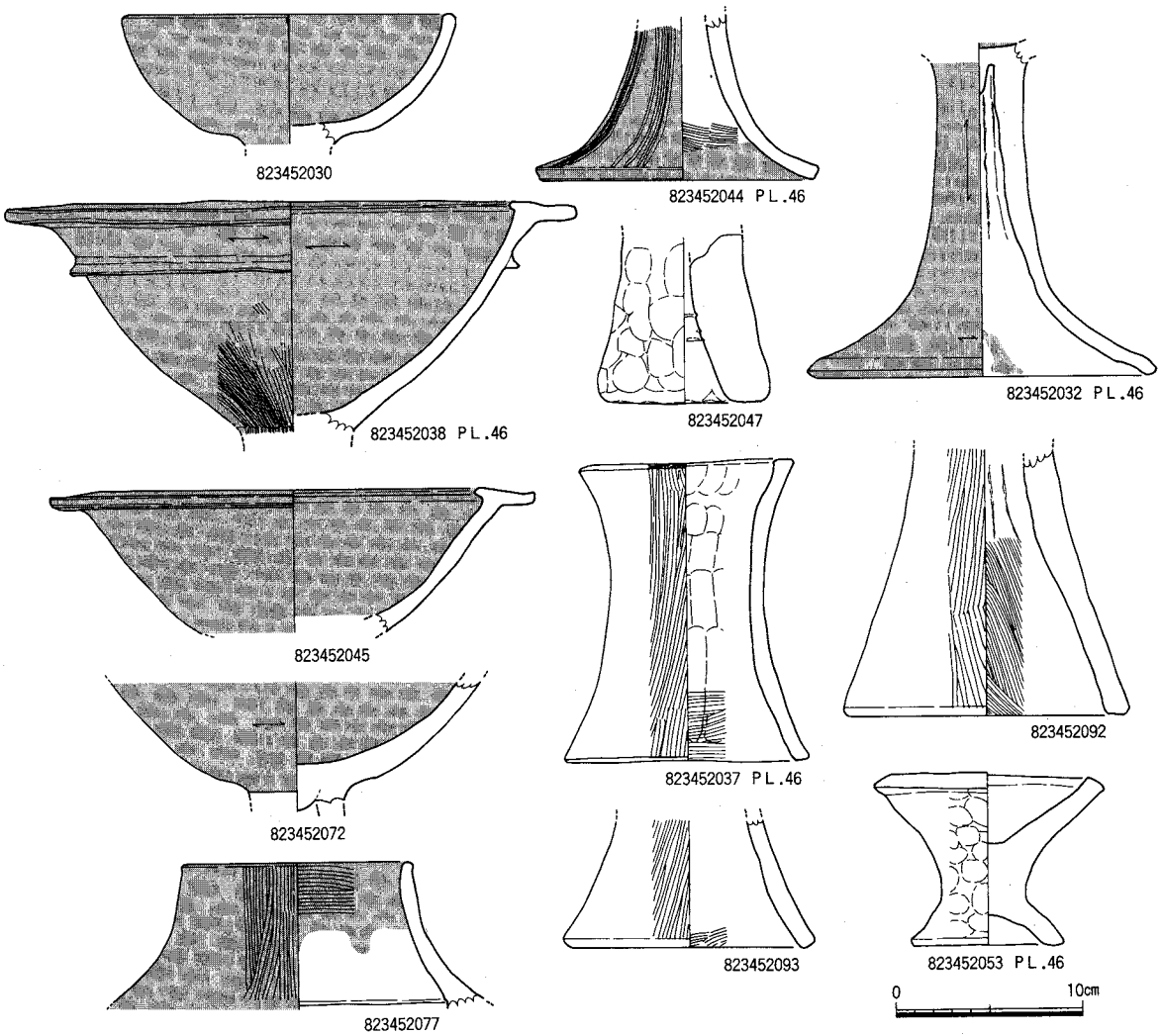


Fig. 91　V区ＳＤ－11出土土器－５（縮尺1/4）

Ｄタイプは35・56・57・59・60・71・86・87・90の９点である。口縁下に一条の三角突帯を巡らす35がある。口径は35が31.5cm、28.5cm、57が30cm、59が28cm、60が32cm、71が28cm、86が30cm、87が26cm、90が23cmである。外面には縦刷毛目を施す。底部はすべて平底で、端部はシャープに仕上げる。

壺形土器　壺形土器は底部も含めて16点図示した。aタイプは有蓋鉢形土器タイプである36と如意形に近い形状を呈するが、口縁部が大きく外反し平坦口縁に近い形を呈する68がある。68の頸部はしまらず胴部との境に一条の三角突帯を巡らす。ｂタイプは33・54の２点がある。33は外面に暗文は配し、丹塗り土器。54は口縁部が欠損するが丹塗り土器で、頸部と胴部の境に一条の「M」字状突帯を巡らす。34も同形態と思われる。ｃタイプは69と91の２点出土した。69は28cm、91が32cmの口径を呈する。ｂタイプの33の口径は22.2cm、ａタイプ36の口径は14.8cmである。ｄタイプは74、76で、74が有蓋付小壺、口径12.4cm、76も12.4cmである。ｈタイプは78で口径17.4cmである。底部は６点図示した。平底の40・73・75・83とやや上底の63・65がある。

蓋　蓋は５つのタイプに分けられる。１タイプ　甕形土器の蓋で器高が高く甕形土器の底部を彷彿させる。66がそれに当る。２タイプ　壺形土器の底部を彷彿させる64・31がある。３タイプ　天井部が平坦で小型である（80）。４タイプ　天井部が丸みを持ち、器高も低い48がある。５タイプ　天井部がほとんどなく三角形を呈する79がある。３～５タイプは小型壺形土器の蓋である。66の天井径が6.8cm、64の天井径が６cm、31が4.8cm、裾径24cm、48の裾径16cm、79が12cmを測る。

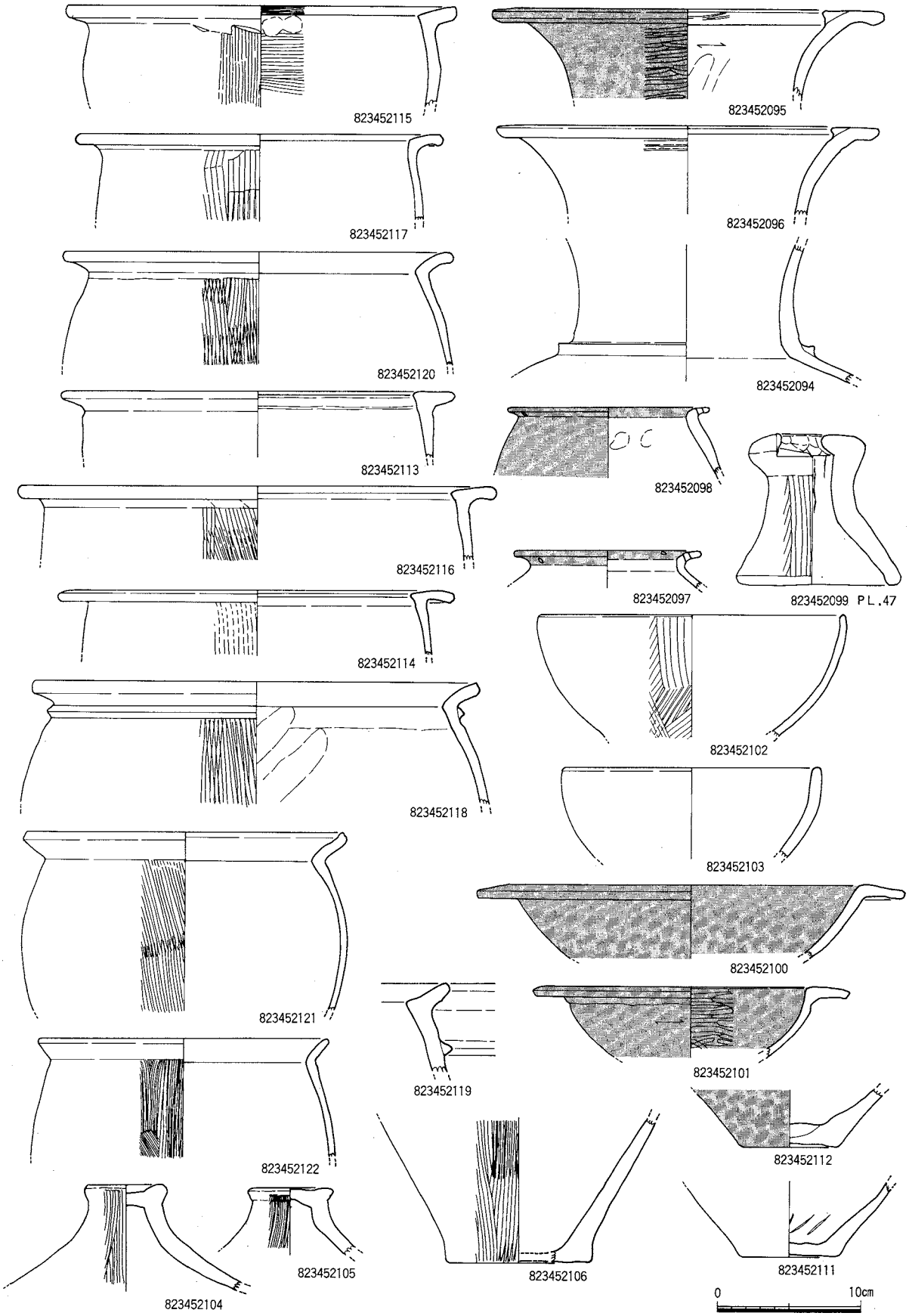


Fig. 92　V区ＳＤ－10出土土器－１（縮尺1/4）

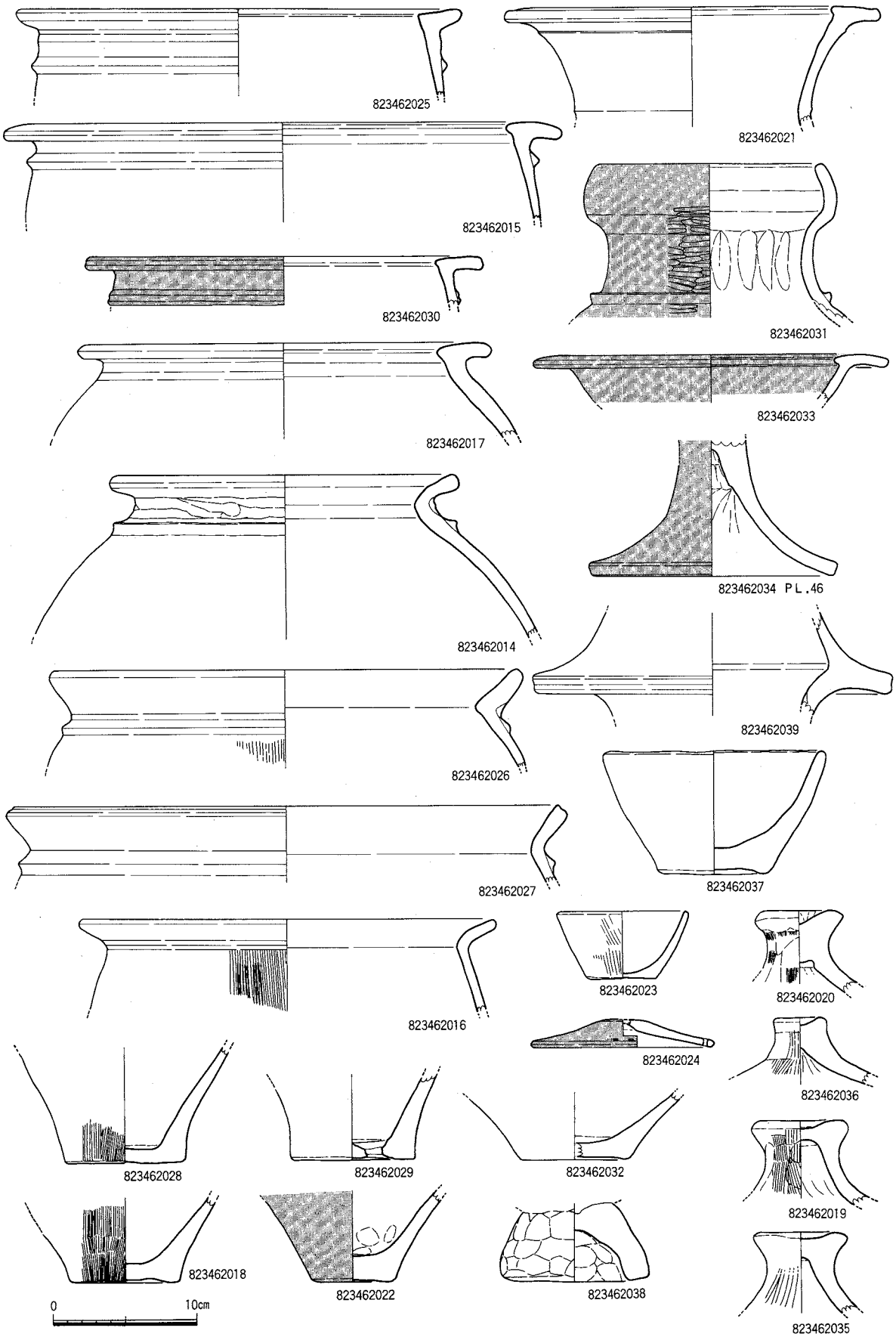


Fig. 93　Ⅴ区ＳＤ－10出土土器－２（縮尺1/4）

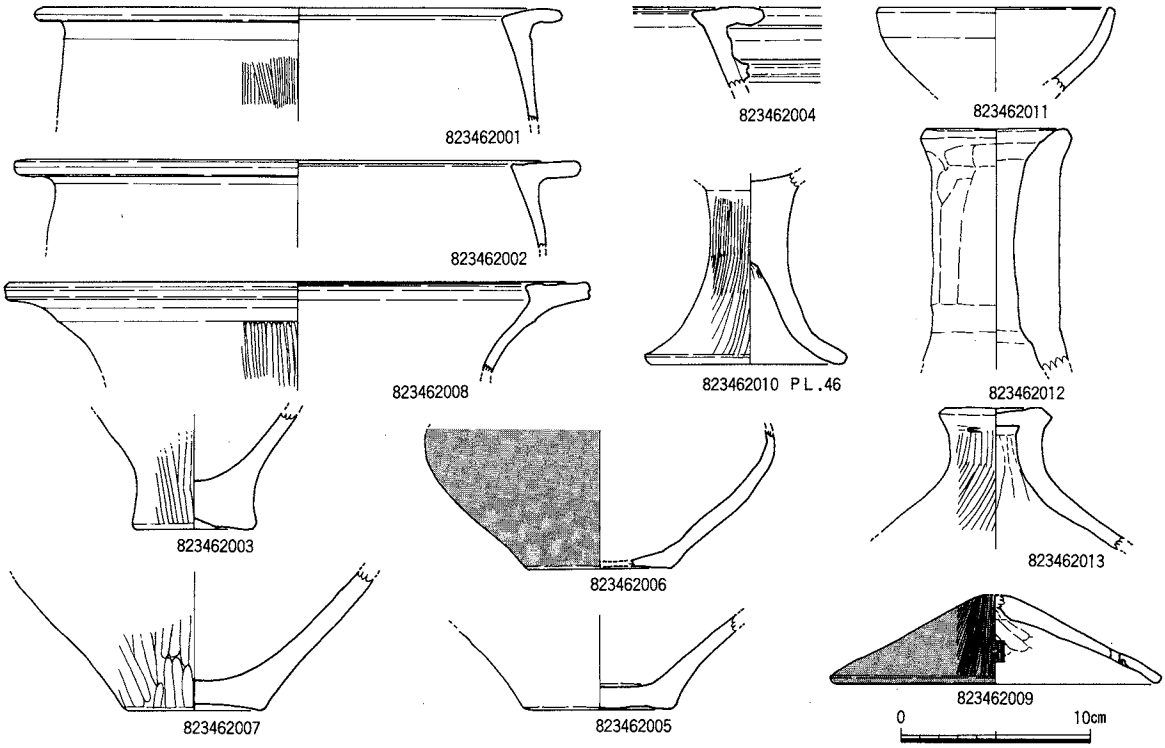


Fig. 94　V区ＳＤ－12出土土器（縮尺1/4）

鉢形土器　鉢形土器は11点図示した。口辺部形態によって６つに分けられる。㋑タイプ　底部は平底と上底がある。底部からやや外反しながら立上り、口縁部が内湾しながら丸くおさめる25～27・29がある。25の口径が17cm、26が19cm、27が20.2cm、29が20.4cmを測る。㋺タイプ　肉厚で口縁が㋑より立上る28がある。口径18.6cm。㋩タイプ　胴部が薄くなり、口縁部が立上りやや肉厚である41がある。口径17cm。㋥タイプ　底部が上底で、胴部が肉厚である。やや外反しながら立上り口縁部がそのまま立上る46がある。口径14cm。㋭タイプ　口縁部が大きく外反し、平坦口縁に近い形状を呈する21・22がある。21の口径が27cm、22が25.4cmである。㋬タイプ　口縁内側をつまみ出し、口唇部が下る24がある。口径39cm、器高28cm、底径11.6cm。このほかに55の手捏土器もある。

高坏　坏部・脚部を含めて６点図示した。30は口縁部が立上り丸くおさめるもので口径18cmを測る。38・45は口縁部が鋤形口縁を呈し、38には一条の三角突帯が巡る。38の口径32cm、45が24.8cm。

特殊器台・器台　６点図示した。77は特殊器台で、47・53は手捏である。

ＳＤ－10出土土器（Fig.92、93. PL.46･47）（52094～52122・62014～62039）

ＳＤ－10からも数多くの土器が出土した。特に丹塗り土器等が多い。Ⅴ・Ⅵ区に跨る溝である。

甕形土器　Ａタイプに62025・62030・52113・52115・52117の５点がある。25・30は一条の三角突帯を巡らせる。Ｃタイプは62017・52114・52116の３点である。17は最大径が胴部になる形状を呈する。Ｃタイプとは本来区別しなければならない形態と思われる。Ｄタイプは62014・62016・62026・62027・52118～52120・52122の８点がある。これも14・26・27・118・119と16・120・122とは区別できる。Ｇタイプ　52121がある。口唇部が内側につまみ出された状態で嘴状を呈する。

壺形土器　７点図示した。ａタイプは52098の１点である。Ｃタイプは３点図示した。62021・52095・52096でおそらく94も同形態と思われる。ｄタイプは52097の１点を図示した。ｅタイプは31がある。口唇部がやや立ぎみで本来のｅタイプとは異なる。

鉢形土器　鉢形土器は４点図示した。㋑タイプの52102・52103、㋥タイプの62023・62037である。

高坏　高坏は４点図示した。鋤形口縁を呈し、口径25.2cmの62033と平坦口縁の52100・52101がある。100の口径は30cm、101が22.4cm。62034は脚部で裾径が17cmである。すべて丹塗り土器である。

蓋　７点図示した。①タイプが62019・62020・62035・62036・52104・52105の６点である。④タイプの62024がある。

器台　器台は２点図示した。特殊器台の62039と沓形器台の52099である。

ＳＤ－12出土土器（Fig.94－62001～62013）

ＳＤ－12は南南西から北北東に流れる溝であるが削手が著しく浅い。しかしながら出土土器は多い。その内の13点を図示した。

甕形土器　３点図示した。Ａタイプの１・２とＣタイプの４がある。１の口辺部内側が下に下りぎみで、口唇部も下りぎみである。口径28cm。２は平坦口縁で、口径30cmを測る。４は口辺部内側がつまみ出された平坦口縁を呈する。

壺形土器　壺形土器のＣタイプに属するが、つまみ出し部分が小さく上に跳ね上げている。登録番号62008である。口径31cm。

鉢形土器　62011で、鉢形土器の㊁タイプである。口径13cmを測る。

高坏　高坏胸部は62010の一点のみの出土であった。裾形10cmを測る。

器台　器台は62012を図示したが、この一点しか出土していない。外面はヘラ削りとナデ仕上げ。

蓋　蓋タイプの①の62013と④タイプの62009がある。

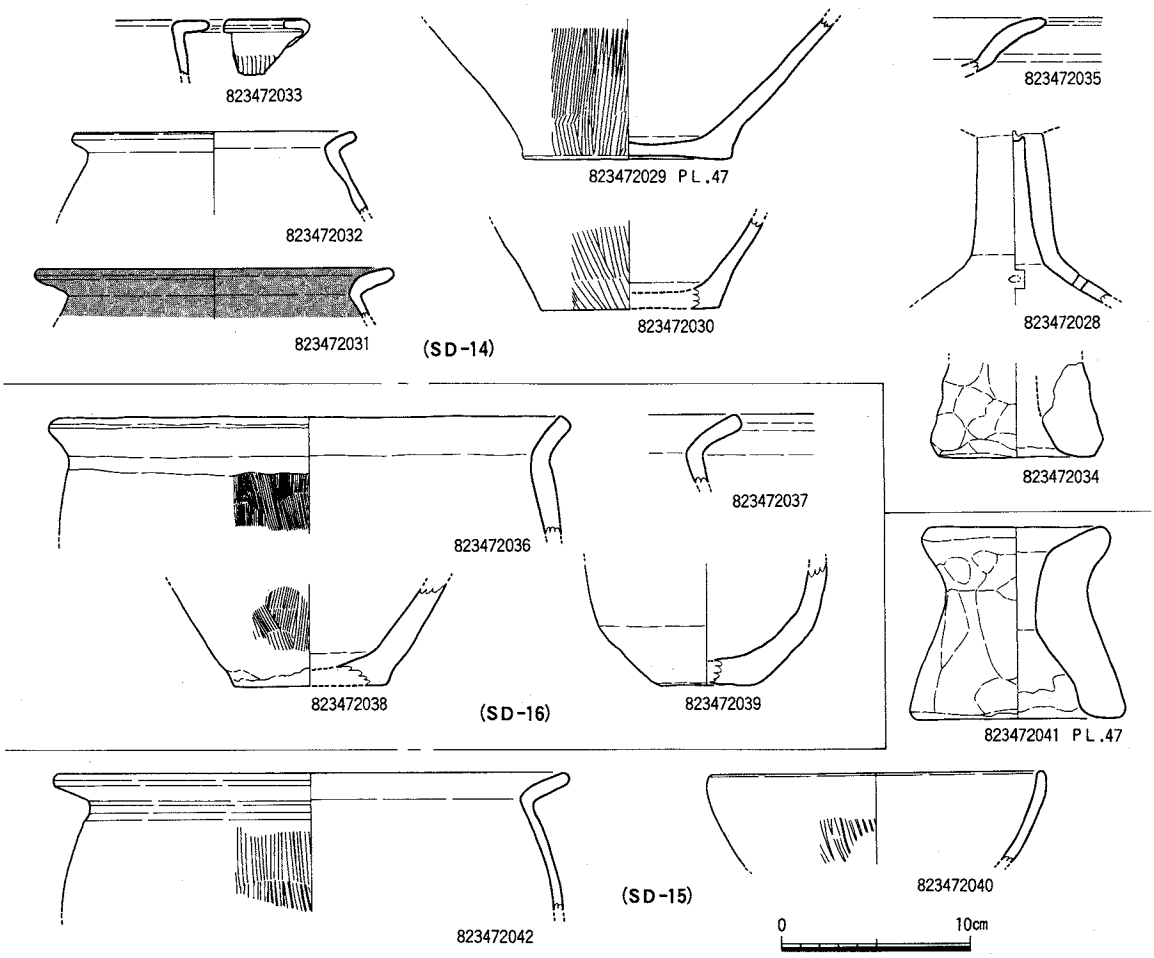


Fig. 95　Ⅶ区ＳＤ－14～16出土土器（縮尺1/4）

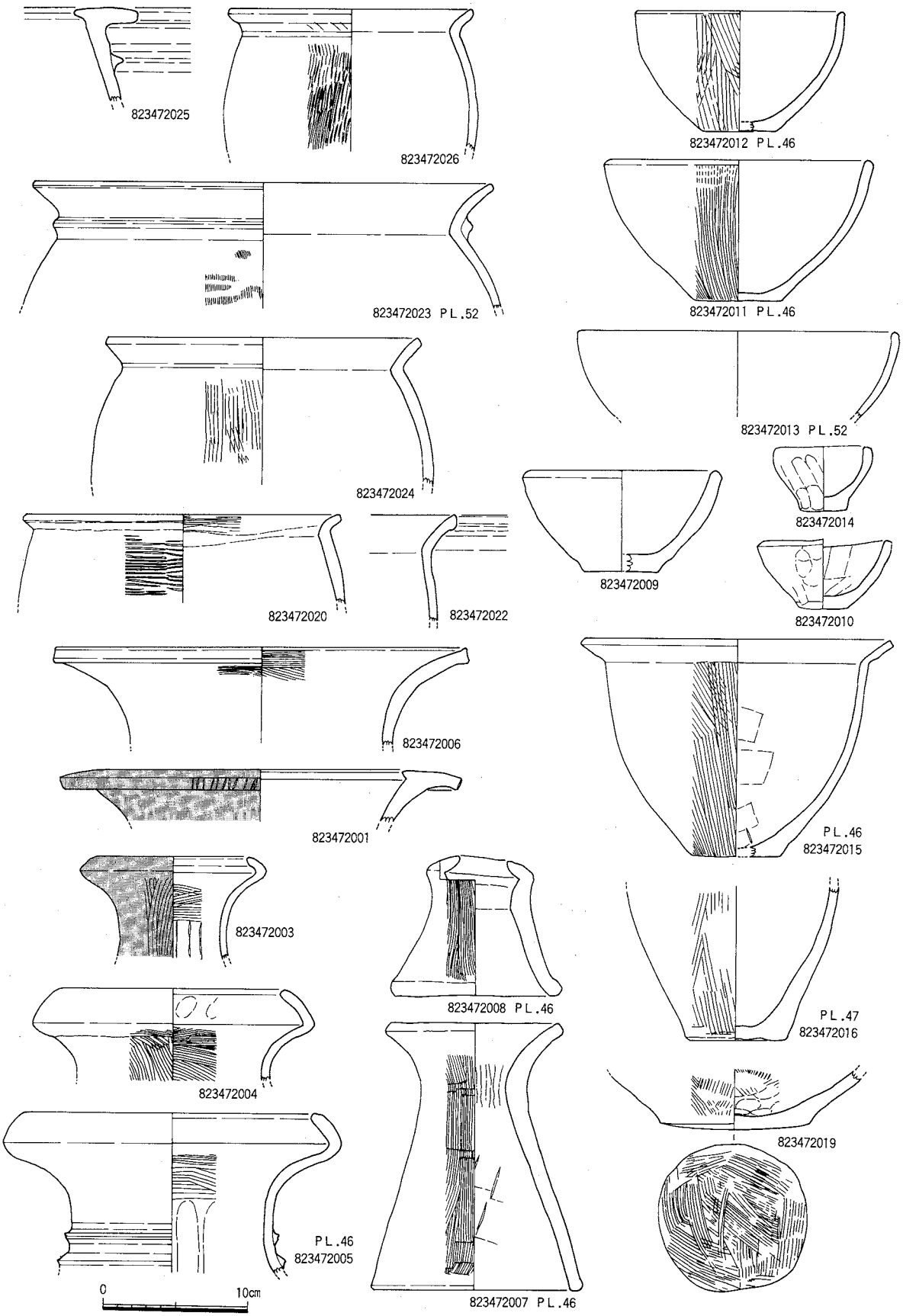


Fig. 96　Ⅶ区ＳＤ－15出土土器（縮尺1/4）

Ⅶ区出土遺物

Ⅶ区からはそれぞれの溝から土器・石器等が出土した。ＳＤ－15・16からは木製品、杭等が出土。

① **土器**（Fig.95・96　PL.46・47・52）

ＳＤ－14出土土器（Fig.95－72028～35）

甕形土器　甕形土器は３点図示した。平坦口縁で内側のつまみ出しがなく逆「Ｌ」字状を呈する33と口縁が「く」字状を呈するＤタイプ31・32がある。31の口径は19cm、32は15cmを呈する。

底部　29・30の２点を図示した。29はわずかに上底で、端部がシャープな仕上げを行なっている。底径11cmを測る。30は平底で端部がシャープである。底径9.6cm。

高坏　35は高坏の口縁である。28は脚部で、裾部に穿孔がある。

器台　34は手捏の器台である。

ＳＤ－15出土土器

（Fig.95・96－72001・72003～72016・72019・72020・72022～72026・72040～72042）

甕形土器　甕形土器の口辺部を７点図示した。Ａ・Ｂタイプはなく、口縁部が平坦で内側につまみ出しによる嘴状を呈するＣタイプ25がある。口縁下に三角突帯を一条巡らす。７点の内６点はＤタイプ20・22～24・26・42である。頸部に三角突帯を一条巡らす23や、頸部がしまらず如意形に近い22などがある。20の口径は22.5cm、23が32cm、24が22cm、26が17cm、42が27cmある。

壺形土器　壺形土器は如意形、鋤形、袋状口縁の三種類を図示した。６は如意形に開く口縁で、壺形土器口縁タイプｂに属する。口径29cmを測る。１は鋤形口縁を呈するｃタイプに属し、口唇部が下りぎみで端部に刻目を施す。３～５はｆタイプに属するもので、袋状部分が浅い。５には頸部に二条の三角突帯が巡る。３の口径は10cm、４が16cm、５が20cmである。

鉢形土器　鉢形土器は８点図示した。㋑タイプに属するものとして11～13・40がある。11は口縁部が内側に曲がる形ではなく、直線上に伸びる。11の口径19cm、器高10cm、底部6.8cm、12が口径10cm、器高8.6cm、底径５cm、13の口径22.8cm、40が18cmである。９は㋩タイプで口径９cm、器高７cm、底径5.2cmである。10・14は手捏土器である。14の口径が７cm、10が10cm。15は㋭タイプに属し、口径22cm、器高15cm、底径６cmである。

底部　甕の底部16と壺形土器底部19がある。19の底部は底面にヘラ描痕が残る。

器台　杏形器台８と完形の器台７がある。

ＳＤ－16出土土器（Fig.95－72036～39）

甕形土器　３点図示した。36・37はＤタイプの口縁部を有する甕形土器である。36は口径28cmを測る。38は底部である。端部がシャープで、底径８cm。39は手捏土器の底部である。底部６cm。

Ⅸ区出土遺物

Ⅸ区からはＳＣ－73、ＳＤ－03・05・06・24・30・34、ＳＸ－05から大量の遺物が出土した。

① **土器**（Fig.97～99　PL.47・48・52）

ＳＣ－73出土土器（Fig.97－91001～91004）

ＳＣ－73から出土した土器は４点を図示した。

甕形土器　１はＢタイプに属する如意形に開く口縁部を持つ。口唇部は凸状を呈する。口径46cm。２はＤタイプに属する甕形土器口縁部である。口径36cmを測る。

底部　３は甕形土器の底部で、底径８cm、４は壺形土器底部で９cmの底径を測る。

ＳＤ－05出土土器（Fig.97－92001～92015）

甕形土器　甕形土器分類でＤタイプの５・12・13を図示した。５は口縁下に三角突帯を一条巡らす。口径38cmを測る。12は口径31cm、13が27cmを測る。

壺形土器　袋状口縁土器２点を図示した。１は壺形土器分類のｆタイプに属する。袋状口縁を呈するが、袋状の部分が浅く頸部が締まらない。完形品で、堰状遺構附近で出土した。口径13cm、器高28cm、底径８cmを測る。２はｇタイプに属し、袋状部分が稜を持ち、逆「く」字状を呈する。頸部は締り、外面は刷毛目を施す。口径13cm、器高24.5cm、底径6.5cmの完形品である。

鉢形土器　鉢形土器の分類で㊀タイプに属する３が出土した。肉厚で、口縁部がやや外反しながら立上りおさめるもので、外面はヘラ削りを施す。口径19.2cm、器高12.5cm、底径７cmを測る。

底部　底部は４点図示した。すべて平底である。甕・壺・鉢形土器の底部である。

器台　５点図示した。このほかにも数多く出土している。９は上端部を欠損する。裾部から締りぎみに立上り、口縁部で大きく外反するタイプであろう。裾径14cm。14は、口縁部が内側に内傾するタイプである。口径5.5cm、器高11.8cm、裾径11cm。15も14と同形態であるが、裾が開かず、口縁の屈曲も柔らかい。口径7.3cm、器高12.2cm、裾径10.2cmを測る。

ＳＤ－06出土土器（Fig.98－92016～92022）

ＳＤ－06からは数多くの土器が出土したが、７点を図示した。

甕形土器　甕形土器は６点図示した。口辺部が５点、底部（21）１点である。甕形土器分類の中でＤタイプに属するものであるが、口辺部・突帯により細分化できる。本来のＤタイプは16・17で、他は別の分類に属するものと思われる。16は口径28.8cm、17は15cmである。19は頸部下に三角突帯を一条巡らす。口径30.6cm。20は逆「Ｌ」字状口縁部が下に下がり「く」字を呈する形に見える。「Ｍ」字状の突帯を巡らす。口径44.6cmと大型である。22は口径17.2cm。18は壺形土器の底部である。

ＳＤ－24出土土器（Fig.98－92023～92027）

ＳＤ－24からは、甕形土器の底部、壺形土器、器台が出土した。24は甕形土器底部で上底である。底径10cm。器台（26）は上半部が欠損する。裾径９.4cm。

壺形土器　ｃタイプの25が出土した。口縁内側にわずかなつまみ出しを行い平坦口縁に仕上げている。口径26.6cm。27は口縁部が欠損するが、ｄタイプと思われる。最大径は17.1cm、底径5.8cm。

ＳＤ－03・30・34出土土器（Fig.98－92028～92038）

ＳＤ－03　甕形土器（36）と壺形土器（37・38）を図示した。38は壺形土器分類のｅタイプに属する完形品である。口径16cm、器高37cm、底径７cmを測る。

ＳＤ－30　28～31の４点を図示した。28はＡタイプ、29はＤタイプ、30は壺のｃタイプである。それぞれ口径は15cm、16.8cm、24.7cmである。31は壺形土器の底部で底径6.8cmを測る。

ＳＤ－34　甕形土器32・33と底部34・35を図示した。32・33はＡタイプであるが、細分化すると33は別の形式かもしれない。32の口径25.6cm、33は19.8cmである。

ＳＸ－05・31・37・41出土土器（Fig.99－99001～99024・99035）

ＳＸ－05　甕形土器　甕形土器はＤタイプの２点を図示した。１は頸部下に一条の三角突帯を巡らす。口径31cmを測る。２は口径17.6cmである。

壺形土器　口縁部４点を図示した。４点とも壺形土器のｇタイプに属する。３の口径は21cm、４は19cm、５は25cm、６は19cmある。他に器台（13～15）がある。

ＳＸ－37　鉢形土器（22）、高坏（12・16～18）、**ＳＸ－31**　甕底部(19～21)、**ＳＸ－41**　23・24・35の甕面底部を図示した。

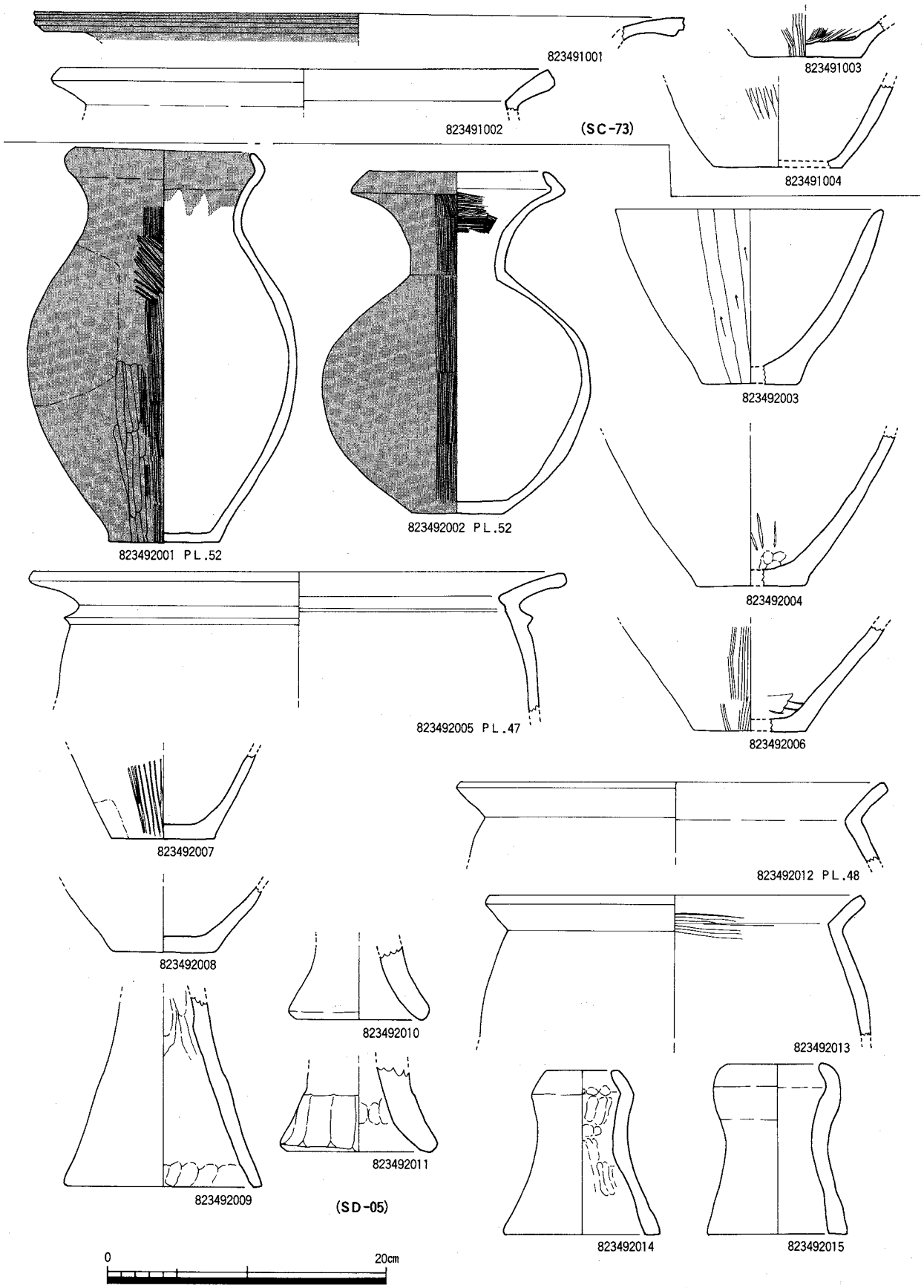


Fig. 97　Ⅸ区ＳＣ－73、ＳＤ－05出土土器（縮尺1/4）

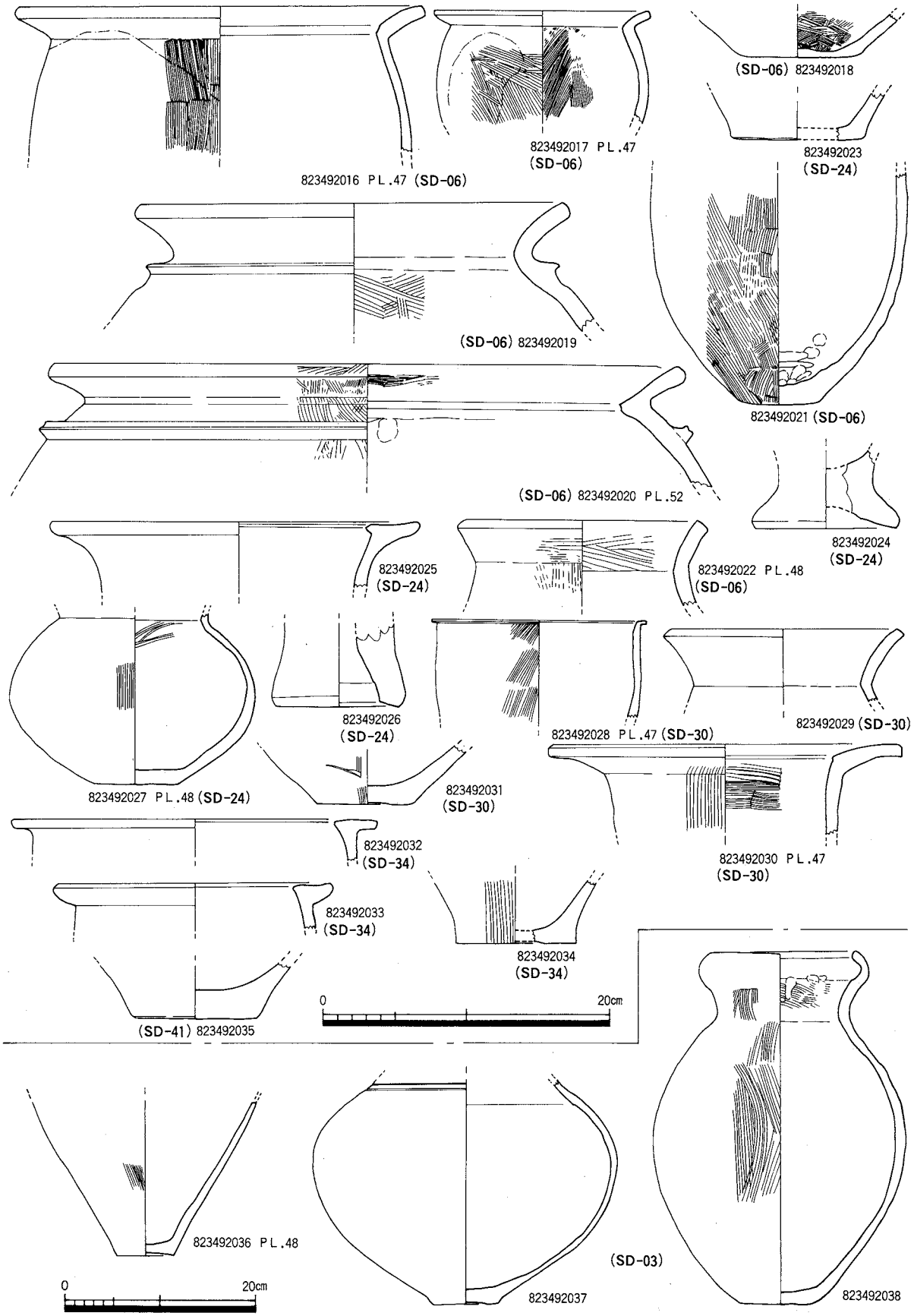


Fig. 98　Ⅸ区ＳＤ－03・06・24・30・34・41出土土器（縮尺1/4・1/6）

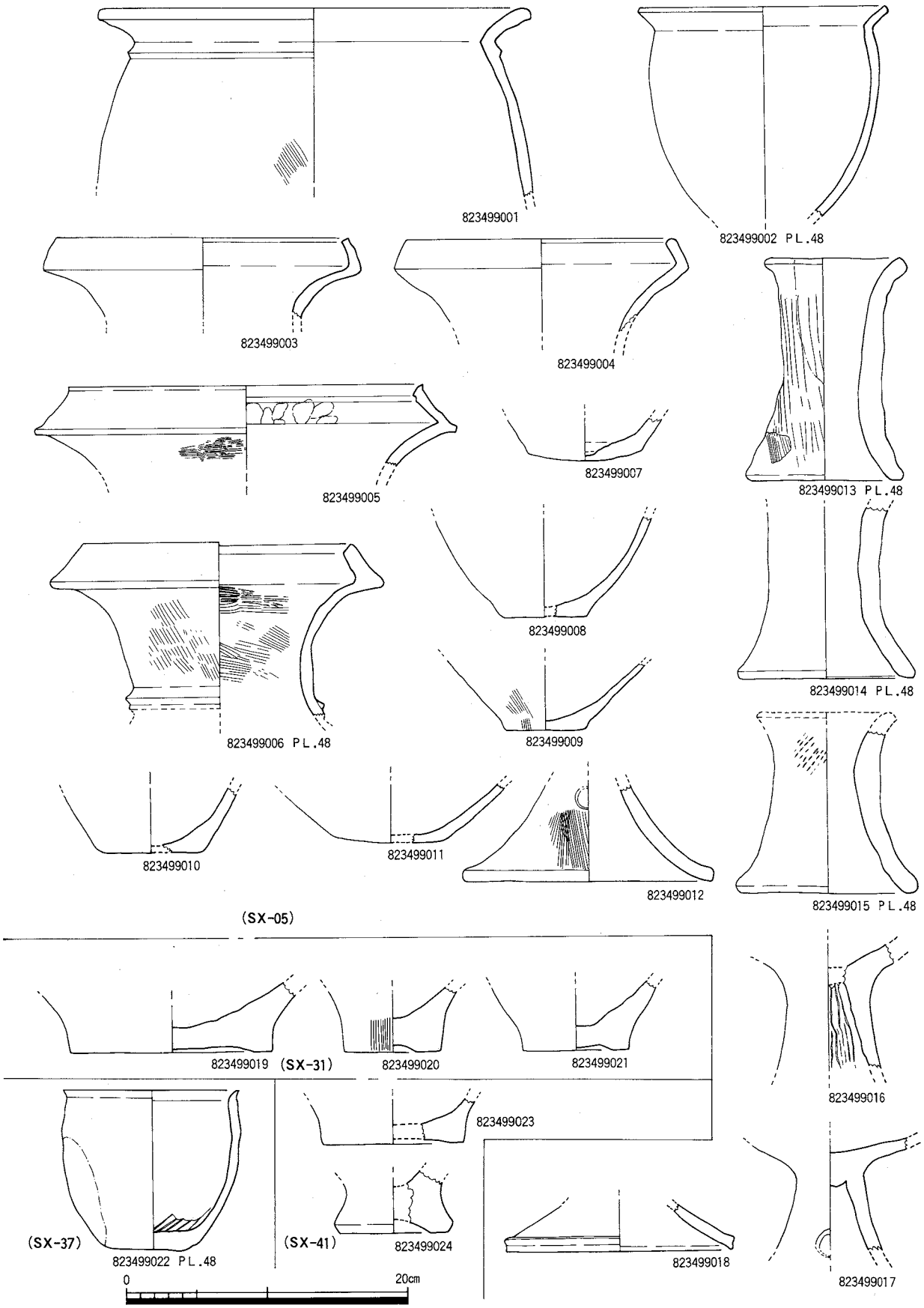


Fig. 99　Ⅸ区ＳＸ－05・31・37・41出土土器（縮尺1/4）

② 石器

二次調査から出土した石器（Ⅴ区～Ⅸ区）の内、礫器を主に図化した。このため黒耀石製の剥片等は省略した。Ⅴ区が８点、Ⅵ区（Ⅴ区と同一溝から出土）が１点、Ⅶ区が４点、Ⅸ区が28点、計41点を図示した。

Ⅴ区出土の石器（Fig.100－57001・Fig.102－57008　PL.51）

Ⅴ区出土の石器は、総数で250点出土したが、その内礫器を中心に８点図示した。

磨製石斧（Fig.100－57001・57002）

57001　頭部のみで刃部が欠損しているため一応磨製石斧としておく。ＳＤ－10から出土した玄武岩製で、新しい剥離面を除いてほぼ研磨されている所から使用時に破損したものと思われる。新しい剥離面は再加工の為のものであろう。**57002**　57001と同じく刃部を欠損する。ＳＤ－10から出土した玄武岩製で、研磨は全体に行なわれている。頭部がＶ字形を呈するため、刃部とも考えたが、先端部の幅が狭くなりすぎるため、頭部とした。ただ先端部に細かな剥離面が認められることから刃部の可能性もある。

石槌（Fig.100－57003・57004）

57003　ＳＤ－11から出土した硬質砂岩製で、重量380ｇと重い。頭部は剥離後敲打を施こし中位から下部にかけては研磨を施こしている。下部端部には使用頻度が高い状況を示す打烈痕が認められる。手になじむ様に下部を細く仕上げている。**57004**　57003と同様にＳＤ－11から出土した玄武岩製の打器である。上下端に剥離痕が認められ、使用頻度が高かったことを物語っている。中位部は二股の凹みを有し、手になじむ様に仕上げている。研磨は施されていない。重量557ｇと重い。雀居遺跡からも出土。

石皿（Fig.100－57005）

ＳＤ－11から出土した安山岩製の石皿である。周辺部が欠損しているため、その形状は定ではないが表面だけに使用時による研磨がみられ、裏面、側面は剥離された面が残っているだけである。

磨石（Fig.100－57006・57007）

57006　ＳＤ－11から出土した安山岩製の磨石である。全面に研磨痕が残るが、上下端は打烈痕が観察できる。480ｇの重量がある。**57007**　ＳＤ－12から出土した凝灰岩製の磨石である。下端を打欠き、平坦面を造り出した後、研磨している。他の部分は使用時による研磨痕が著しい。重量は、572ｇと重い。

石錘（Fig.102－57008）

ＳＤ－11から出土した滑石製の石錘である。表裏面には十文字状の凹みを入れ、全体を卵形に仕上げている。側面は横一文字に凹みを入れる。他は削りによる面取りを行なう。64ｇの重量がある。

Ⅵ区出土の石器（Fig.100－67001）

Ⅵ区は、Ⅴ区から延びたＳＤ－10がⅥ区まで達していることから遺構はＳＤ－10からの出土遺物である。石器は８点出土したが、その内１点を図示した。**67001**　玄武岩製の磨製石斧片である。

上下端と裏面を欠損する。研磨は行なわれているが、風化が進んでいるため不明。

Ⅶ区出土の石器（Fig.100－77001～77004　PL.51）

Ⅶ区から出土した石器はＳＤ－15・16が主である。総数153点出土した内、礫器の４点を図示した。

磨製石斧（Fig.100－77001、77002）

77001　ＳＤ－16より出土した玄武岩製で、刃部を欠損する磨製石斧である。研磨は刃部附近にしか認められない。他は剥離面が残る状態である。重量770ｇを測る。**77002**　大型蛤刃石斧であるが、

刃部を欠損する。ＳＤ－15より出土した玄武岩製で、重量は1,164ｇを測る。頭部の一部に剝離面がみられるが、全体に研磨を施している。ただ、風化が進んでいるため、研磨方向は定かでない。

打器（Fig.100－77003）

ＳＤ－15から出土した玄武岩製の打器である。両端に剝離痕及び打烈痕が認められる。

石庖丁（Fig.100－77004）

ＳＤ－15から出土した凝灰岩製の石庖丁剝片である。左肩部と中央部から右側辺部は欠損している。研磨は丁寧に行われており、刃部も丁寧に研磨されている。

Ⅸ区出土の石器（Fig.100～102－97001～97013・97015～97029・PL.50・51）

Ⅸ区からは数多くの石器が出土したが、弥生時代の生活遺構から出土したもの、及び弥生時代と思われる石器を28点図示した。また特異な石器も図示した。

磨製石斧（Fig.100－97001～97010）

磨製石斧は10点図示した。その内２点は柱状石斧・扶入柱状片刃石斧で他は太型蛤刃石斧片等である。97001～３・97007の４点は太型蛤刃石斧であるが、刃部を欠損する。97005・97008は刃部のみのものがある。他は太型蛤刃石斧ではなく小型の磨製石斧である。**97001**　ＳＸ－30から出土し上下端を欠損する。重量は284ｇ。**97002**　ＳＸ－41から出土し、重量693ｇ。**97003**　やや細身であるが、太型蛤刃石斧の範疇に入るもので、ＳＸ－37から出土し、重量684ｇ。**97004**　再利用された可能性が高く表・裏面に大きな剝離痕を残す。ＳＸ－41から出土し、重量348ｇと軽い。

97005　ＳＤ－18から出土した太型蛤刃石斧の刃部である。頭部と裏面を欠損する。敲打部分が残るが、丁寧に研磨を施こす。刃部に刃こぼれが認められる。重量506ｇ。**97006**　小型の磨製石斧である。刃部を再加工している。ＳＸ－41から出土した。重量294ｇ。**97007**　ＳＸ－37から出土し、重量1,076ｇ。**97008**　Pit－268から出土した太型蛤刃石斧の刃部で、側辺部と頭部を欠損する。重量474ｇ。上記の石材はすべて玄武岩である。

97009　凝灰岩製の扁平石斧で、表、裏面とも剝離されている。側面は研磨を施こしている。Pit－446から出土。**97010**　ＳＣ－73から出土した扶入柱状片刃石斧である。頭部と刃部に剝離面がみられる。重量248ｇ。

磨石（Fig.101－97011～97013）

97011　ＳＸ－37から出土した花崗岩製の磨石である。重量191ｇ。**97012**　玄武岩製でPit－214から出土した。表裏面中央部に凹みを持つ。重量819ｇ。**97013**　半割されているが全面を使用している。ＳＸ－29から出土し、安山岩を石材としている。

石皿（Fig.101－97016・97019・97021

97016　ＳＤ－07から出土した砂岩製の石皿で、約3/4を欠損する。使用頻度が高い。裏面も使用している。**97019**　ＳＤ－07から出土した花崗岩製の石皿である。周辺部が欠損しているため全体の大きさは把握できない。**97021**　ＳＣ－73から出土した硬質砂岩製の石皿である。半割されているが、裏面にも使用した痕跡が認められる。

砥石（Fig.101・102－97015・97017・97018・97020・27029）

97015　ＳＤ－06から出土した砂岩製の砥石で全面を使用している。**97017**　ＳＤ－07から出土した粘板岩製の仕上げ用砥石である。上下端を欠損するが、他は全面を使用している。**97018**　ＳＤ－07から出土した硬質砂岩製の砥石であるが、両面の中央部に凹み部分がある。これは97012の磨石にも見られたもので、細かく砕くためについた凹みであろう。**97020**　Pit－346から出土した硬質砂岩製の砥石である。側面を除いてほぼ全面を使用している。**97029**　砂岩製でＳＸ－37から出土した。欠

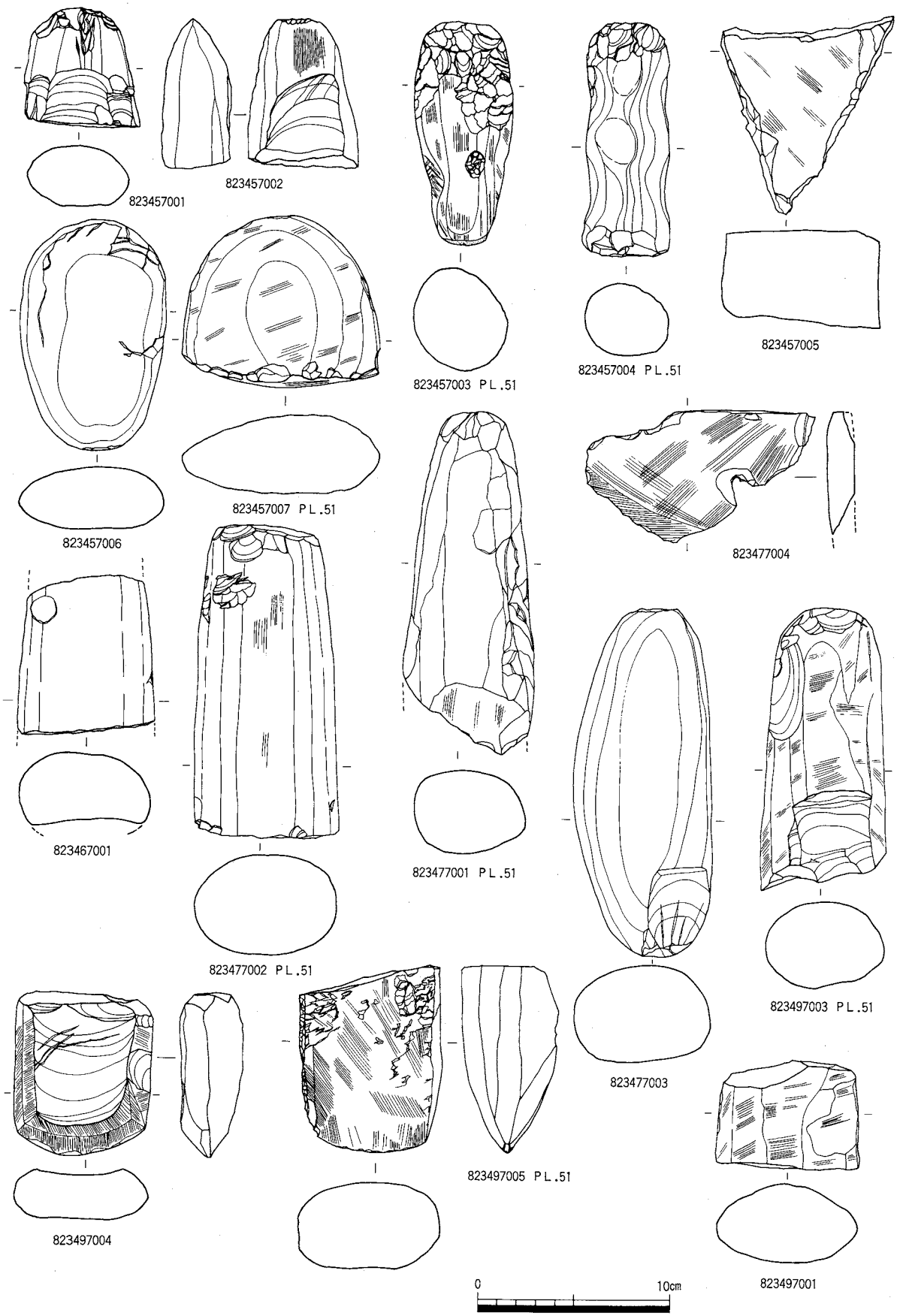


Fig. 100　Ⅴ～Ⅶ・Ⅸ区出土石器（縮尺1/3）

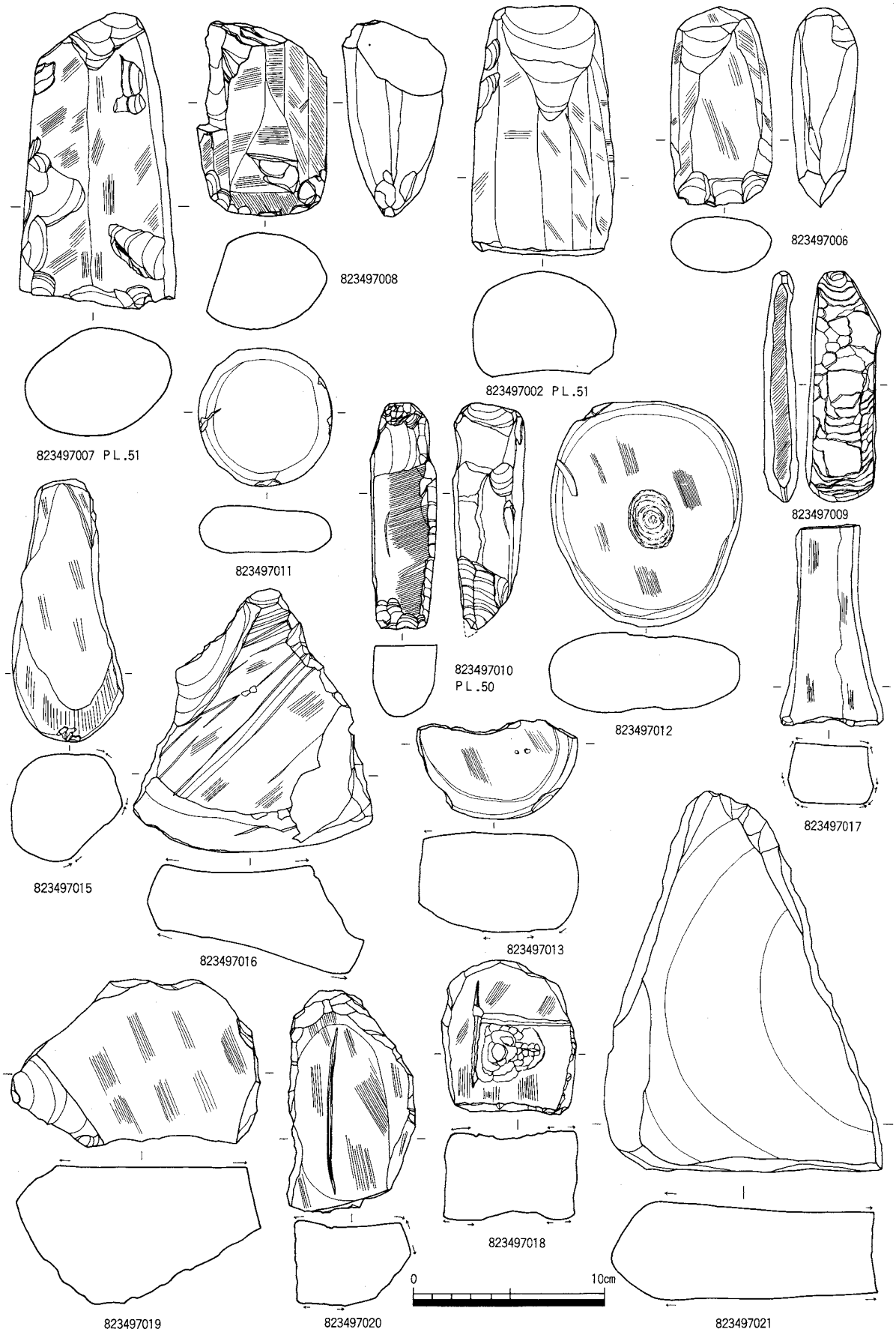


Fig. 101　Ⅸ区出土石器（縮尺1/3）

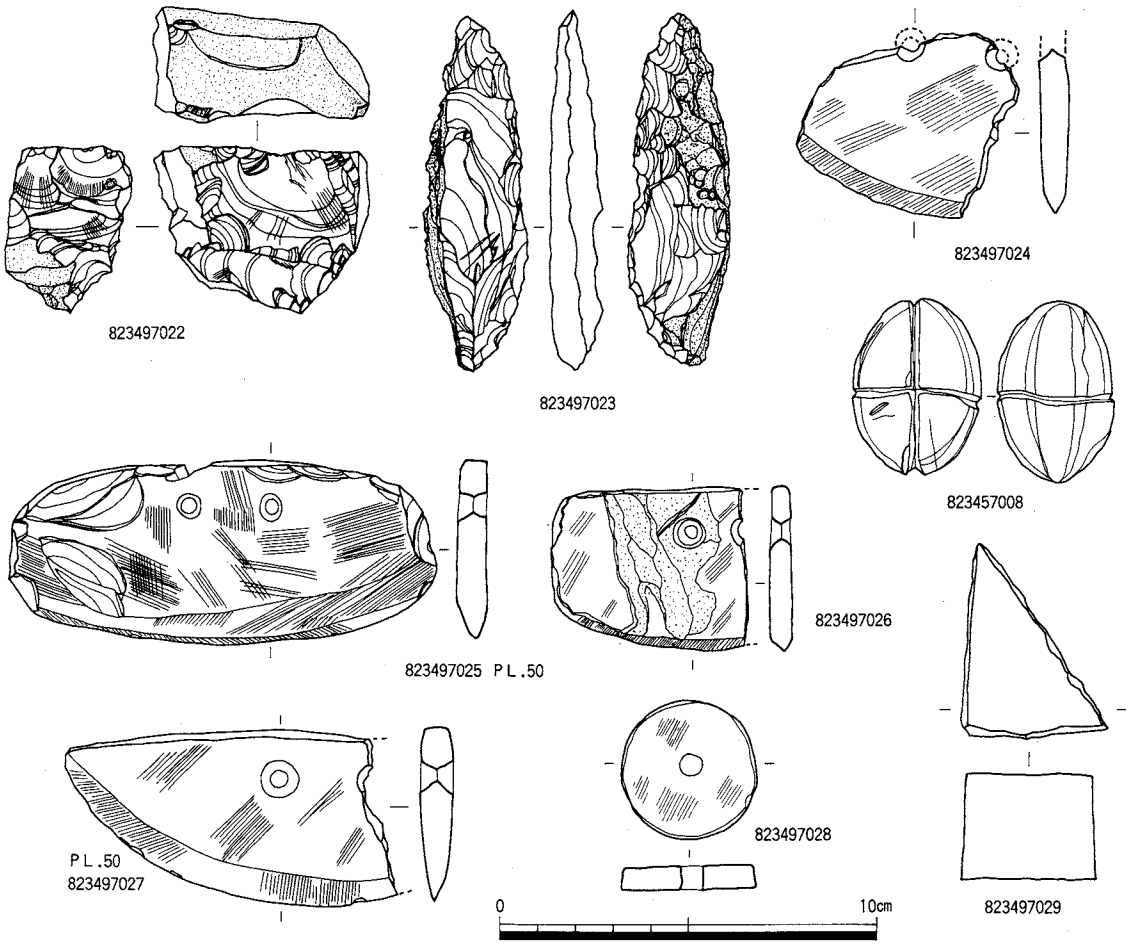


Fig. 102　V・Ⅸ区出土石器（縮尺1/2）

損部分を除いてほぼ全面を使用している。

石核（Fig.102－97022）

黒耀石剥片は多量に出土したが、図版の都合上、石核１点を図示した。打面は自然面である。剥離方向は上と右横位、側面では上と下の方向を持つ。連続的に剥離する方法で規則性はない。黒耀石製でＳＸ－29から出土した。

掻器（Fig.102－97023）

サヌカイトを石材とした掻器で、ＳＸ－41から出土した。風化は進んでおり、旧石器時代のナイフ形石器を彷彿させる。背は自然面で、刃部は左側面部は下からの大きな剥離と刃部形成のために細かな剥離を施こす。右側辺部は、刃部からの剥離を行ない鋭利に仕上げる。

石庖丁（Fig.102－97024～97027）

４点図示した。**97024**　ＳＸ－21から出土した安山岩製の石庖丁片である。その大半を失なっているが、２つの穿孔と刃部部分から石庖丁とした。**97025**　遺構面精査中（ＳＣ－73）に出土した輝緑凝灰岩製の石庖丁で、ほぼ完形である。刃部形成は二段に構成され、左側辺部が長い刃部を持つ。**97026**　97025と同様にＳＣ－75の遺構面精査中に出土したもので、小型の石庖丁である。石材は凝灰岩である。**97027**　ＳＤ－05から出土した半割した玄武岩製の石庖丁である。研磨は全面に施こし、刃部は鋭利である。

紡錘車（Fig.102－97028）滑石製でＳＸ－21より出土した。完形であるが中心部の孔がずれている。

③ 木製品

第一次、二次調査で出土した木器は、第二次調査のⅤ、Ⅶ、Ⅸ区からである。Ⅴ区、Ⅶ区は溝内出土で農工具が主であったが、Ⅸ区は堰伏遺構に使用された建築材がある。今回図示したのはⅤ、Ⅶ区の農工具のみで、Ⅶ区、Ⅸ区出土の杭・建築材については紙面の都合上割愛した。

Ⅴ区出土の木製品（Fig.103　PL.52）

58001　ＳＤ－10の底面から出土した木製品である。平鍬状を呈するが、中央部に横から枘穴を持ち両端は平垣面である。ただ下端部の断面を見るとやや反ぎみに裏面から削りを行なっている。厚さ７㎝以上の長方形の材を加工している。中央部は枘穴を通し、上面から上下端部を削り出すが、中央部上部は両側から削出し、幅５㎝に仕上げている。全長43㎝、幅13.4㎝、厚さ１㎝、中央部の厚さ２㎝枘穴部分の厚さ３㎝である。用途は組合せ式の平鍬と考えられるが前例がない。材料は、年輪が横に入っていることから板材を使用し、材は照葉樹と思われる。

58002　杵の先端部か木槌の先端部と考えられる。58001と同じくＳＤ－10の底面から出土した。木槌の可能性は先端部の側辺部に使用時による凹みが認められる点であるが、大きさ（厚さ９㎝）の点からすると杵の先端部と考えられる。現長22.8㎝、厚さ９㎝あるが、原材料は20㎝以上のものを半割か1/4半割して仕上げている。

58003　木槌で先端部が欠損する。ＳＤ－10の溝底面から出土した。現長21㎝、握部4.6㎝、径4.9の丸、握手径0.8㎝で一本の丸太材を握手部を削出して作り上げている。落葉樹の材である。

58004　これもＳＤ－10の底面から出土した三又鍬の頭部である。刃部部分は欠損しているため全長は不明である。現長24㎝、幅10㎝、厚さ0.6㎝、柄3.2×2.8㎝でカシを材料としている。

Ⅶ区出土の木製品（Fig.103・104　PL.52））

Ⅶ区からはＳＤ－15・16から木製品が出土した。ＳＤ－16から出土したスコップ状木器は遺存度が悪く取上げることができなかった。図示したものはＳＤ－15から出土した８点である。

78001　諸手鍬の半割したものである。全長28.4㎝、幅10.2㎝で推定幅18㎝、厚さ1.6㎝である。カシ材を使用し、上下端を鋭利に仕上げている。

78002　枘孔を持つ部材である。鍬類の可能性もあるが、建築部材としておく。全長38.6㎝、幅５㎝、推定８㎝、厚さ1.8㎝を測る。柄孔は3.2×4.2㎝である。

78003　異形木製品である。勾玉状を呈し、下部端部は欠損する。全面に面取されている。頭部は二股に造られ段をなす。手斧の柄とも考えたが、頭部下の造りが意味をなさない。カシ材で柾目部分を使用している。全長30.4㎝、幅2.8㎝、厚さ2.8㎝、突起部分の厚さ3.2、0.5㎝、長さ3.4㎝、幅９㎝。

78004　梯子の最上部一段目までで他は欠損している。長さ37.5㎝、幅6.2㎝、厚さ2.6、5.8㎝を測る。階段部裏面には幅３㎝の凹みがみられ、床の角に配置された部分であろう。

78005　木鏃か浮子かの判断がつきにくい資料である。全長18㎝、厚さ２㎝、１㎝を測る。雀居遺跡の木鏃との類似点もあるので木鏃としておく。

78006　棒状木製品で裏面が平垣面を有する。14㎝の等間隔で、幅0.6㎝の凹み部分を持つ材である。現長38㎝＋α、幅２㎝である。

78007　棒状木製品で端部に丁寧な面取りを行なう製品である。上端部は欠損している現長54㎝、幅と厚さは４×３㎝である。

78008　半月状の板材で周辺部は鋭利に面取りされている。火を受け炭化している。現長31.4㎝、幅15㎝、厚さ1.6㎝である。

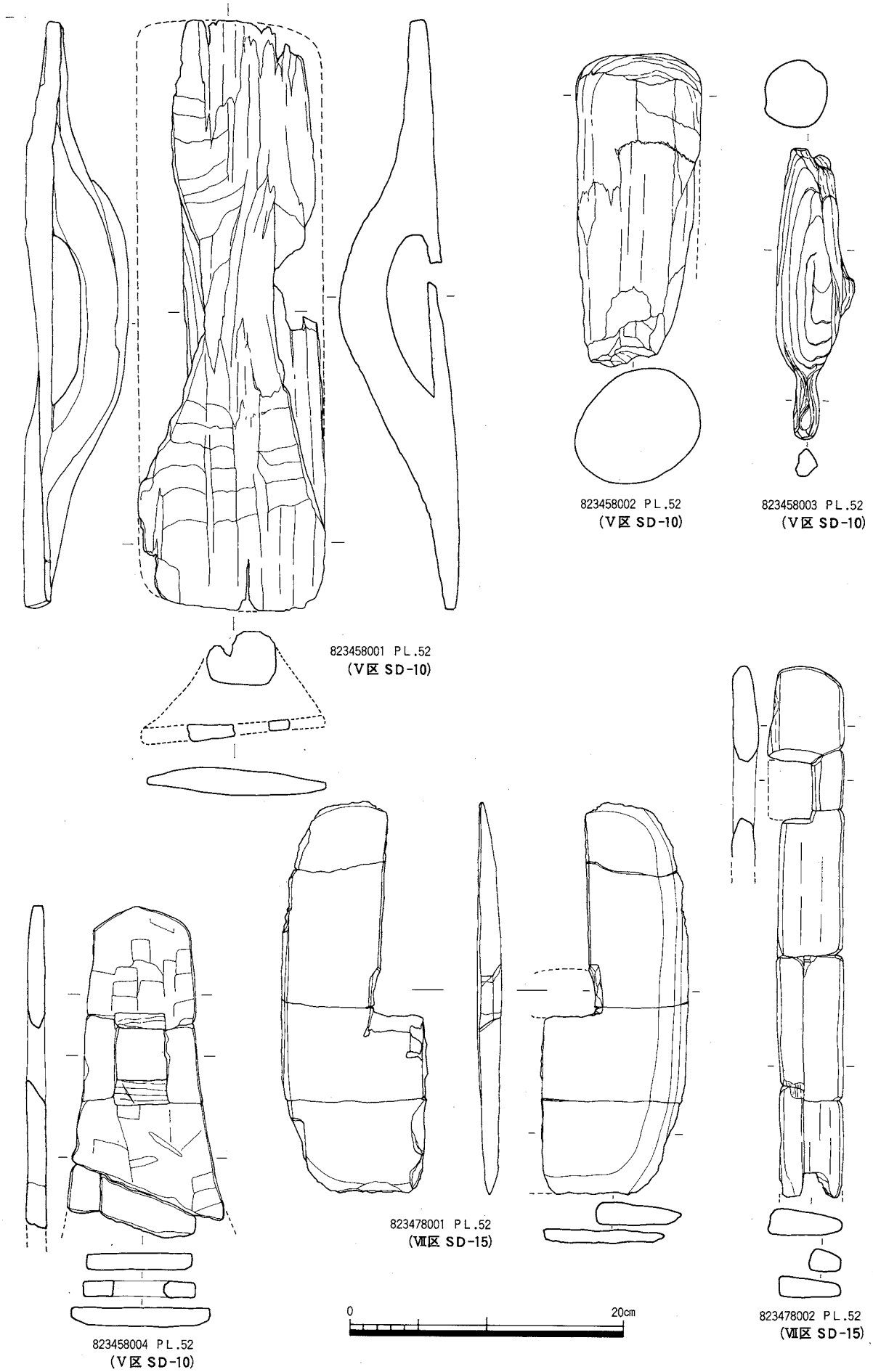


Fig. 103　V・Ⅶ区出土木器（縮尺1/4）

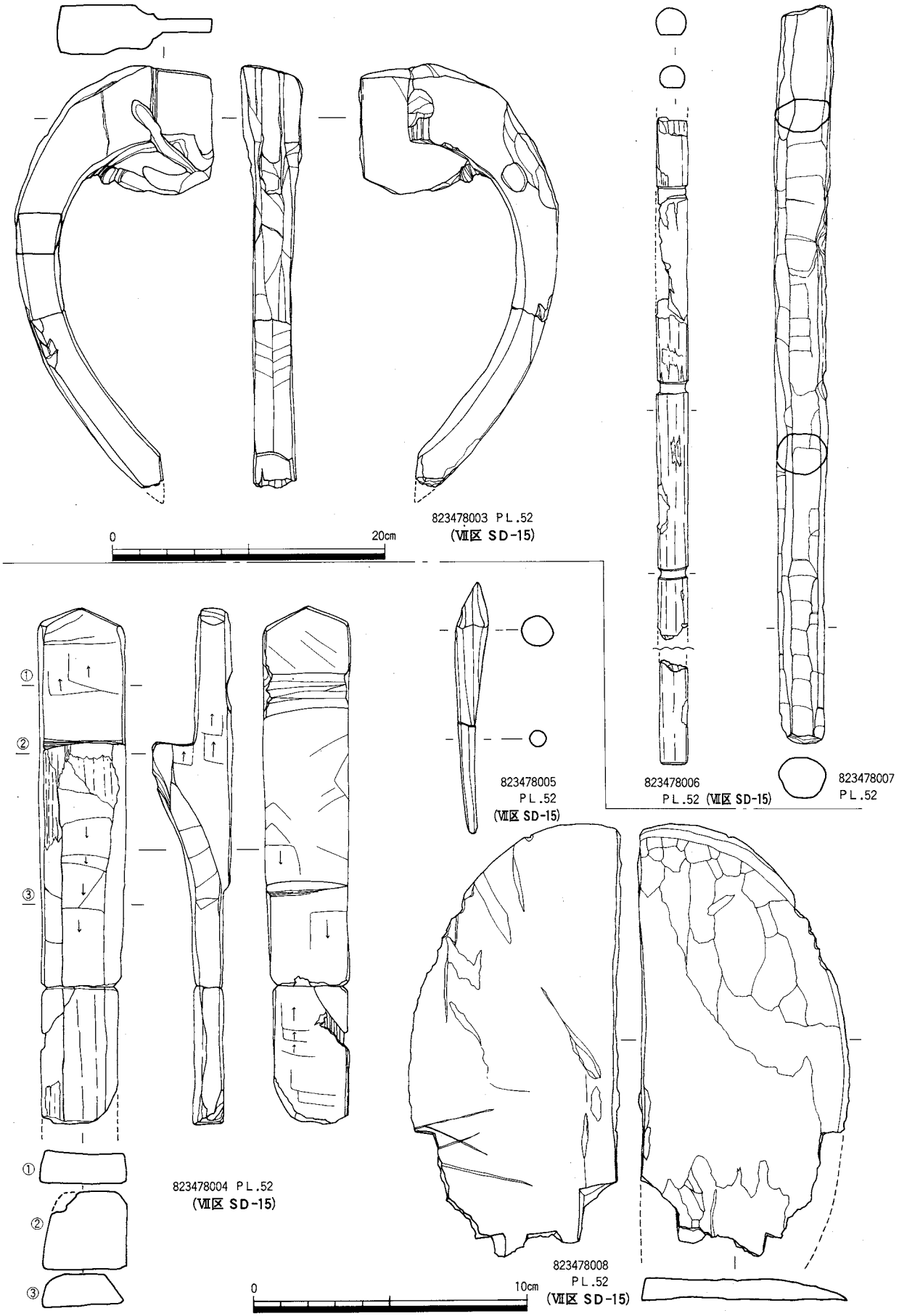


Fig. 104　Ⅶ区出土木器（縮尺1/2・1/4・1/6）

第五節　一・二次調査小結　－弥生時代生活遺構－

第一次調査Ⅱ・Ⅳ区の住居址群について

Ⅱ区　住居址は未調査部分を含めて49軒の住居址と検出した。この中で切合い関係・住居址形態から最も古い住居址はＳＣ－02～05・30・39・40・42・48の９軒である。切合い関係で規模は不明である。

円形住居址の最も古いものはＳＣ－16・22・26の３軒で、こに付随する掘立柱建物はＳＢ－04・07・14・19～21・24の７棟である。次にＳＣ－17・19・23・25・27の５軒の円形住居址である。これに付随する掘立柱建物はＳＢ－02・03・06・10・12・13・17・25・26の９棟である。最も新しい住居址はＳＣ－18・20・21・24の４軒で、掘立柱建物はＳＢ－05・08・09・11・15・18・22・23・27の９棟である。

弥生時代後期では、古い段階の住居址ＳＣ－33・37と掘立柱建物ＳＢ－16・29・31・34の４棟がセットになる。新しい段階の住居址としてＳＣ－34・36・38と掘立柱建物ＳＢ－30・32・33の３棟がセットとして考えられる。

Ⅳ区　住居址は22軒検出した。そのほとんどが、甕棺墓・溝・井戸・住居址同志の切合によって形状が定かでなくなるほど撹乱を受けている。方形(長方形)と円形住居址に分けられる。方形(長方形)住居址17軒、円形住居址５軒である。方形住居址のほとんどが切合い関係で撹乱を受けているが、ＳＣ－53だけはまったく撹乱を受けていない。炭化した材と土器群（Fig.41・42・54・55）が出土した。方形住居址は北側に９軒、西に６軒、南に１軒と分散され、掘立柱建物ＳＢ－36～39の４棟がセットになる。円形住居址は西側から中央部にかけて配置され、掘立柱建物はＳＢ－35・40・41の３棟がセットになる。Ⅱ区とⅣ区の間に幅12～20ｍ、深さ1.3ｍのＳＤ－01がある。これは旧日向川の支流と考えられ、南から北へ流れる大溝である。この大溝の時期は、出土遺物から弥生時代前期末から中期初頭に人工的な工作を施しているもので、Ⅱ区とⅣ区はこの溝によって区割されていたと考えられる。

Ⅴ・Ⅵ区　弥生時代の遺構は、ＳＤ－10・12の十字に交差する溝とＳＤ－10から枝分れしたＳＤ－11が巡り、おそらく環濠となる。その内側よりＳＢ－41だけが検出された。溝のレベルを測ると40～50cm程度の深さしかないため、かなりの削平を受けている。本来は環濠内に遺構があったと考察できる。

Ⅶ区弥生時代の遺構は中期に属するＳＤ－14・15、掘立柱建物２棟、2/3以上削平された甕棺墓１基が検出された。ＳＤ－14は中央部に陸橋をもち、両側に弧状に広がる。これもおそらく環濠になると思われ、出入口のための陸橋であったと思われる。この陸橋付近にＳＢ－43が検出された。１×１間であるが、すべての柱穴に柱が残っており、現存する柱の径は20～23cmであった。ＳＤ－15からは、杭列遺構と木製品が出土した。弥生時代後期にはＳＤ－16がある。この溝内に杭列遺構と多くの木製品が出土した。

Ⅸ区　弥生時代の遺構は、弥生時代中期の円形住居址３軒、溝状遺構８条、甕棺墓１基、掘立柱建物19棟を検出した。弥生時代後期は溝状遺構５条、掘立柱建物21棟を検出した。弥生時代中期の遺構の内、ＳＣ－73に付随する掘立柱建物ＳＢ－14、ＳＣ－74にはＳＢ－16～19（建替も含む)、ＳＣ－75にはＳＢ－13の掘立柱建物がある。弥生時代後期の遺構はＳＤ－05～08の溝によって区割りされている。ＳＤ－05はＳＤ－01と02とを結ぶ溝で（ＳＤ－01は前期末・中期初頭から古墳時代初頭まで使用されていたもの）ＳＤ－06・07もＳＤ－02に流れ込む。

住居址は一次調査Ⅱ・Ⅳ区に集中している。二～六次調査においては散発的にしか検出されていない。甕棺墓を見ると六次までで数千基に及ぶが、その生活の痕跡である住居址があまりにも少ない。今後、周辺部の調査で検出される可能性が高く、それは大集落であり、吉武遺跡の人々の生活空間がいかに広かったかを物語ることになる。

第四章　第三次調査－弥生時代生活遺構の調査－

第一節　調査概要

第三次調査は、昭和58年９月から59年３月にかけてＥ～Ｌ－７～12区を中心に25,000㎡の発掘を実施した。弥生時代の生活遺構は、Ｊ・Ｋ－７区、Ｌ－８・９区、Ｆ・Ｇ－10・11区などでまとまって検出されている。主な遺構は竪穴住居址、土壙、溝などである。遺構数そのものはあまり多くはないが、溝からの遺物量は非常に多く、本報告ではかなりの部分を割愛せざるを得なかった。以下、出土遺構・遺物について概述することとする。

第二節　Ｌ－８・９地区の調査

１．ＳＤ01（Fig.107・118、PL.53・55）

Ｌ－８・９地区は第三次調査区の北西部に位置する。溝二条、掘立柱建物などの遺構が検出されている。ＳＤ01は西側から東側に向って流れる自然流路で、幅４ｍ、深さ0.4～0.5ｍを測り、全長19ｍにわたって調査した。下層の黒色粘質土層で弥生後期後半から終末にかけての遺物群が出土している。遺物は主に北側及び西側から流れ込んでいた。北側及び西側に生活遺構が広がるものと考えられる。ＳＤ01の黒色粘質土は溝堆積のため古式土師器も包含しているが、多くは弥生後期に属する土器であり、溝そのものは弥生後期には存在していたものであろう。

Fig.107－１は大型の壺である。全体の３分の２程度残存しており、口径58.8㎝、器高70.5㎝を測る。口縁端部は上下に引き伸ばし、ヨコハケ目の後、ハケ目原体で斜めに刻み目を入れる。頸部及び胴部にはコの字状突帯を貼付し、同じハケ目原体で刻み目を入れる。調整は、外面が縦及び斜めの粗いハケ目、内面はヨコ方向のハケ目が施される。胴部突帯は二条巡らされた後ヘラ状工具で下の一条がケズリ取られている。底径は11.6㎝でやや丸味を持つが平底である。弥生終末期に近い時期のものであろう。２～４はくの字状口縁を有する長胴の甕である。５・６は外反する口縁を有し頸部の締った壺形の土器である。７は短かく外反する口縁に張りの強い胴部を持つ甕形土器である。これらの土器群はやや丸味を持った平底を有する。８は小型の甕形土器である。９は複合口縁を有する壺である。口径は20.1㎝を測る。10は鉢形土器で、口径17.0㎝、器高6.9㎝、やや丸味を持つ高台の底部を有する。11・12は高坏で、11は残高10㎝前後、脚部に三条一組の沈線４箇所とその沈線間に貝腹縁による連続押捺文を施す。坏部内外はハケ目調整が施される。胎土には３～４mm前後の石英粒子を含み、内外面とも淡灰褐色を呈する。12は３～４本一組の多重沈線を施す脚部片である。13～16は器台である。13は口縁部が外反し、14は複合口縁となる。ともに粗いハケ目が施される。15・16はいわゆる沓形器台である。17はジョッキ形土器か円筒形の器形を有する土器である。復元底径13.5㎝、茶褐色を呈し精良な胎土である。18はジョッキ形土器の底部片である。復元底径9.1㎝、茶褐色を呈し、胎土は精良である。19はタタキ調整を施した小型の器台である。20はミニチュアの鉢形土器。21は高坏の口縁部片で、口縁端部に一条と内側に三条の沈線を施したものである。多重沈線を持つ脚部と関連するものであろうか。22は壺の口縁部破片で、端部に円形浮文とハケ目原体による連続押捺を施す。Fig.118－138も壺口縁部で、細かな櫛描波状文を施した後、円形浮文を竹管状の工具で押し付けている。灰褐色を呈し、１mm前後の石英・長石粒を少量含む。焼成は良好である。146は青銅製の鋤先である。半分に折損しており、残存幅4.8㎝、残存高5.1㎝、最大厚1.4㎝を測る。密閉された黒色粘質土から出土したため赤銅色を呈している。弥生後期後半から終末期に属するものであろう。

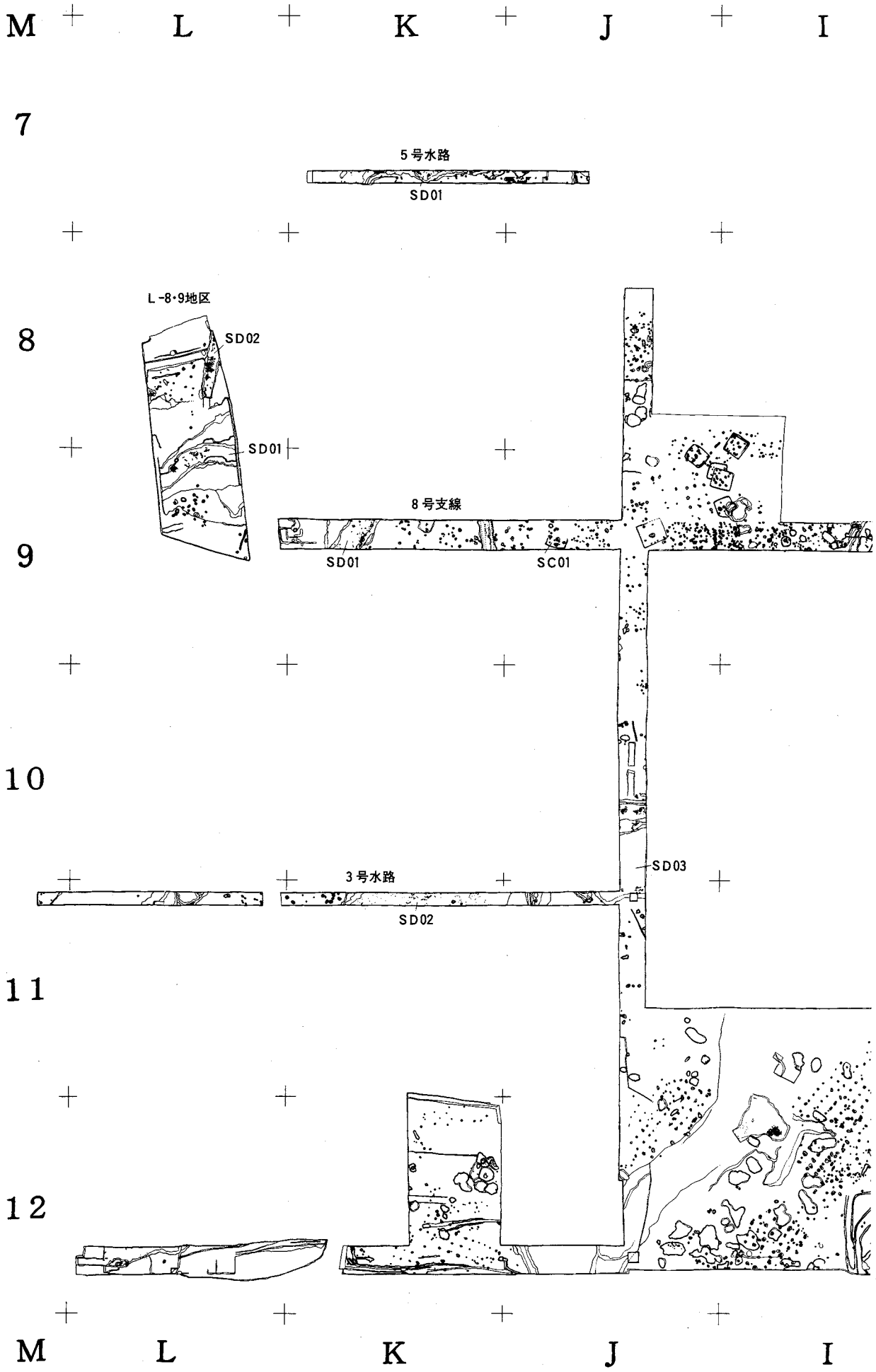
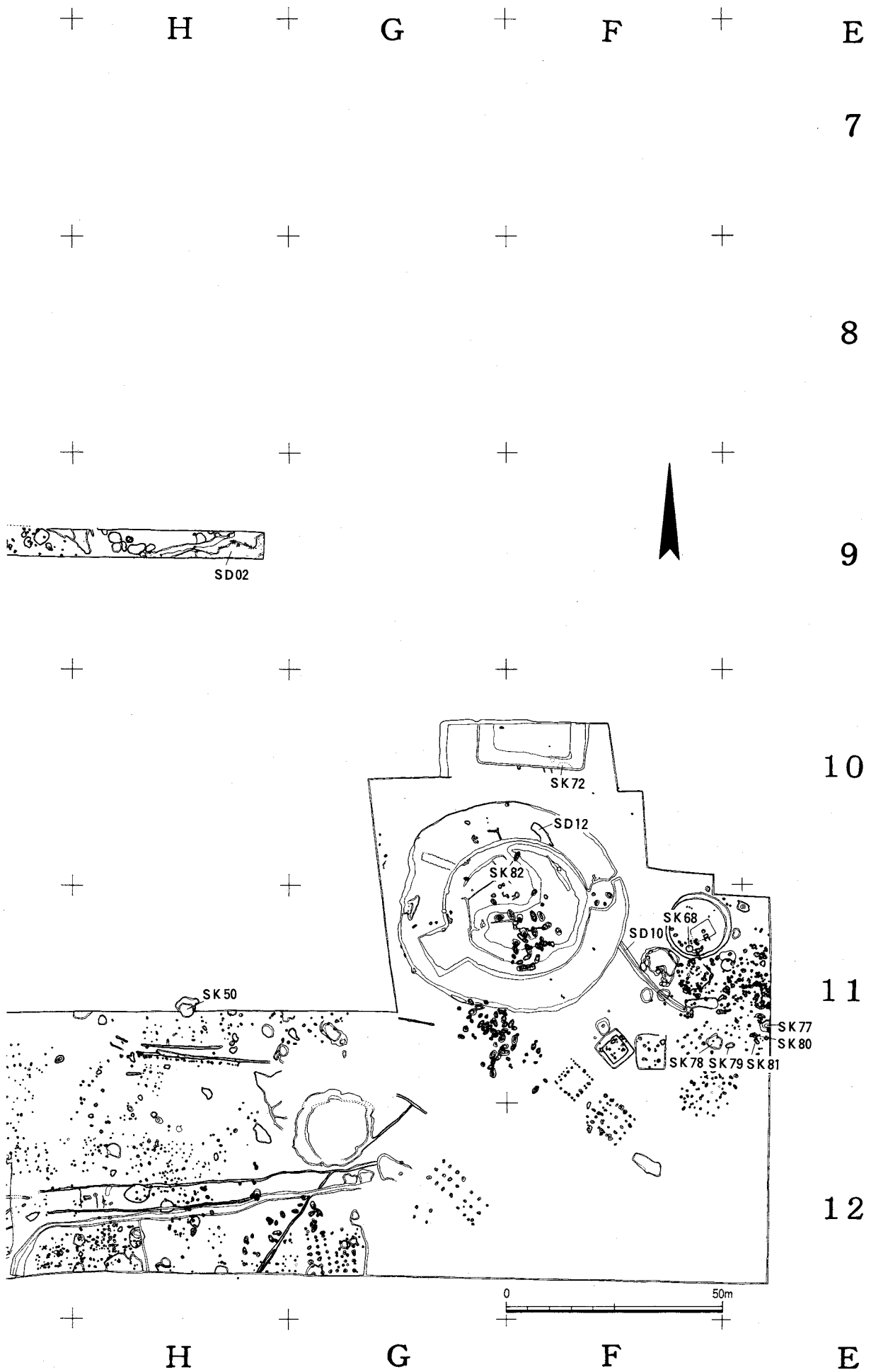


Fig. 105　第三次調査区遺構全体図


H
G
F
E
7
8
9
10
11
12
SD02
SK72
SD12
SK82
SK68
SD10
SK50
SK77
SK80
SK78
SK79
SK81
0
50m

2．ＳＤ02（Fig.106・108・109、PL.53・55）

ＳＤ01の北側に位置し、南北方向に主軸をとる大溝である。幅3.2ｍ、深さ0.85ｍを測り、断面は逆台形を呈する人為的な溝である。南端部はＳＤ01に接することなく途中で終焉し、反対に北側に向って直線的に伸びている。長さは調査区内で16ｍまで確認した。遺物は上層と下層に分かれるが、上層は流れ込みの破片が殆どであった。下層の遺物は完形に復元できるものが数多く出土し、西側から投げ込まれた様な状態でまとまって出土している。集落を区切る条溝の一部になるものであろうか。この溝からは東海系の受け口状の口縁を有する鉢形土器が出土している。ＳＤ01からも外来系の要素を持つ土器が出土しているが、ＳＤ02も同様であり注目される。

Fig.108－23～26はくの字状口縁を持つ長胴の甕である。底部はやや丸味を持つものもあるが、平底に近いものが多い。27～30は小型の甕形土器である。長胴気味の器形や胴が張るタイプがある。31・32は小型の短頸壺、33・34は鉢形土器である。35は受け口状の口縁を有する鉢形土器で、復元口径は15.2cmである。茶褐色を呈し、胎土には石英・長石粒を含む。口縁屈曲部にハケ目原体による連続押捺が施される。外面胴部はハケ目調整である。36～38は口縁部が内弯したり、単純に立ち上がったりするタイプの鉢形土器である。39は長頸壺で、口径16.2cm、胴径23.2cm、器高35.2cmを測る。灰褐色を呈し、胎土には２mm前後の石英・長石粒を僅かに含む。焼成は良好である。40は両端を尖がらせた平坦な口縁端部を有する壺である。口径は25.4cm、器高36.2cmを測る。頸部に三角突帯、胴部にコの字状突帯を貼付する。内外面とも粗いハケ目で調整されている。41は、口縁部が外反する広口の壺形土器である。頸部に三角突帯を巡らし、胴部は張りが強い。口径24.7cm、器高39.5cmを測る。Fig.109－42は口縁内面に三角突帯を施す壺である。口径23.3cm、胴径34.3cm、器高44.8cmを測る。淡褐色を呈し、胎土には１～４mm大の石英・長石粒を多く含む。胴部にコの字状突帯を施し刻み目を入れる。43は高坏である。口径28.2cm、残高18.8cm、茶褐色を呈し胎土には２～３mm大の石英・長石粒をやや多く含む。坏部の屈曲は短く立ち上がる。内外面ともヘラミガキ調整が施される。44～52は器台である。44は口径18.5cm、底径20.4mm、器高17.4cmで、上径、底径とも大きく広がる器台である。45もやや上径が広がったタイプである。あとは筒部上位でくびれ、口縁がく字状に外傾する。46にはタタキ痕が残る、52は口縁が強く外傾し、口縁部以下はタタキ調整が施される。53～56は小型の器台又は支脚である。57は沓形器台で、粗いタタキ調整痕を残す。58は手捏の鉢形土器である。ＳＤ02出土遺物は器台などに新しい様相もみられるが、弥生後期中葉から後半代に属するものであろう。

3．５号水路調査区ＳＤ01・02（Fig.110・111・118、PL.53・56）

５号水路調査区はＪ・Ｋ－７に位置し、三次調査区の北西側にあたる。幅３ｍ、長さ65ｍで東西方向に伸びるトレンチ状の調査区である。部分的な調査であるため全体的な様子は分らなかったが、自然流路の一部が確認され、黒色粘質土層から弥生後期土器がまとまって出土した。この自然流路の主体となる部分はＳＤ01とし、その延長をＳＤ02とした。これらは同一のものと考えられる。遺物は南側から投げ込まれた様な状態で出土している。中でも多重沈線を施す高坏、窓付土器、綾杉文を施した壺口縁、縄席文土器などが注目される。

Fig.110－59はＳＤ01黒色粘質土から出土した中型の甕である。口径33.7cm、底径10.6cm、器高48.5cmを測る。褐色～灰褐色を呈し、胎土には１～４mm大の石英・長石粒を多く含む。焼成は良好で、口縁下に三角突帯を一条巡らす。60は口径23.8cmを測り、頸がやや締った甕形土器である。頸部に三角突帯一条、胴部に二条巡らす。胴部の突帯は螺旋状に巻いていて始点と終点が観察できる。61は複合口縁の壺である。口径20.8cm（外口径24.2cm）、胴径30.5cm、底径10.5cm、器高39.9cmを測る。褐

色を呈し、胎土に1～3mm大の石英・長石砂を多く含む。焼成は良好である。62は広口の壺形土器である。頸部は長く、扁球形の胴部を持ち、高台状の厚い底部へ移行する。口径29.7cm、胴径32.0cm、底径10.5cm、器高36.1cmを測る。茶褐色を呈し、5mm以下の石英・長石を少量含む。内外面ともハケ目調整が施される。63は直口縁の壺形土器である。口径15.8cm、器高32.7cmを測る。淡灰褐色を呈し、2～3mm前後の石英、長石を含む。焼成は良好である。64・65は脚台付甕であろう。66～69は高坏である。66は坏部で、復元口径は35.6cmである。口縁端部は平坦に仕上げ、二重の圏沈線が巡る。内外面とも褐色を呈し、胎土には2～3mm前後の石英、長石を含む。また金雲母も多く含む。焼成は良好で、口縁部外面はヨコナデ、下半部はハケ目、内面はハケ目後ヨコナデが施されている。67は脚部で、復元底径18.8cmを測る。胎土には6mm以下の石英をやや多く含む。色調は淡灰褐色を呈し、筒部に4本単位の沈線を3箇所巡らす。脚部には円形透孔を持つ。68も同じ脚部の破片である。最小筒部径5.9cm、残高14.5cmを測る。胎土には2～3mm大の石英・長石粒をやや多く含む。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。全体にやや磨滅している。透孔は4個である。筒部には、上から3本、4本、4本の多重沈線が巡る。69も筒部の破片である。筒部径は4.8cm、淡灰褐色を呈し、2～3mm大の石英・長石粒を含む。焼成は良さそうだがローリングを受けている。筒部には上から3本、3本、4本の多重沈線が巡る。一部透孔の部分も残存していた。70・71は器台である。70は上径13.8cm、底径14.6cm、器高20.4cmを測る。茶褐色を呈し、胎土は精良であるが3mm以下の石英・長石粒を少量含む。焼成は良好である。外面には粗いハケ目調整が施されている。72は脚台付窓付甕である。これはSD02黒色粘質土から出土したものである。口径20.0cm、底径20.3cm、胴径25.5cm、器高42.5cmを測る。色調は灰褐色を呈し、5mm以下の石英・長石粒をやや多く含む。窓は胴部上位に開けられ幅14.0cm、高さ7.8cmである。

Fig. 106　L－8・9地区SD02遺構実測図（縮尺1/80）

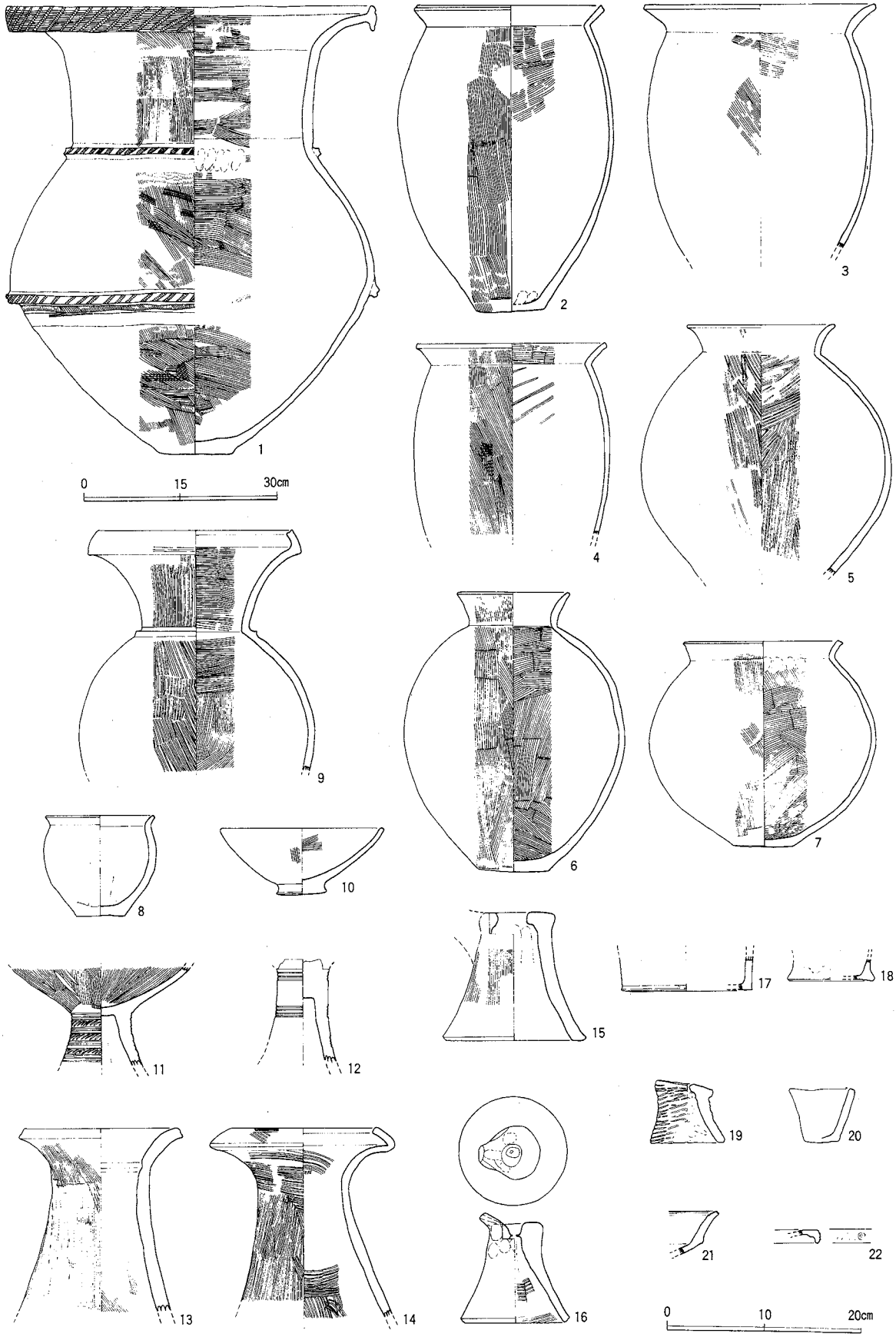


Fig. 107　L－8・9地区ＳＤ01出土遺物実測図－1（縮尺1/6・1/9）

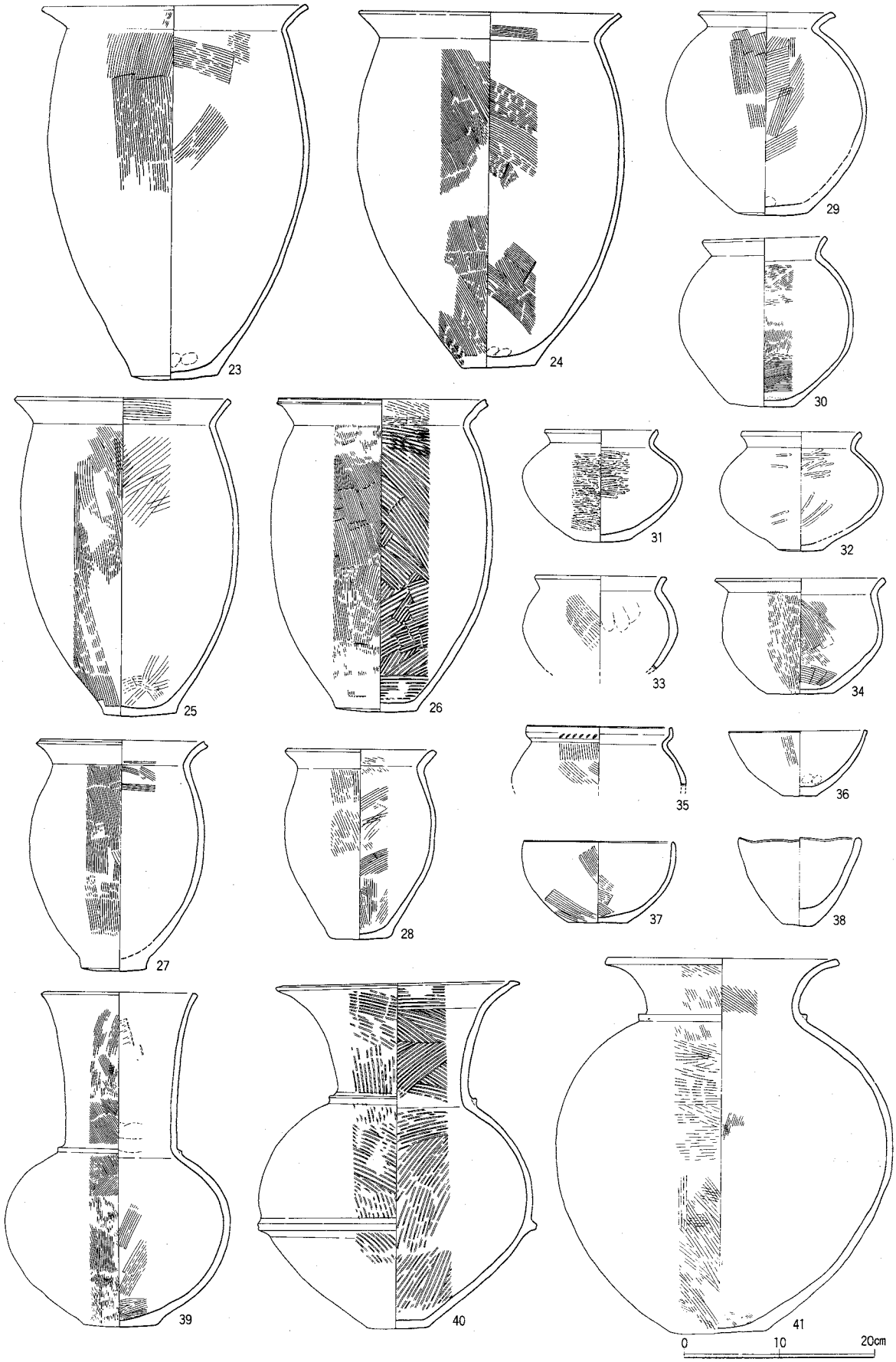


Fig. 108　L－8・9地区ＳＤ02出土遺物実測図－２（縮尺1/6）

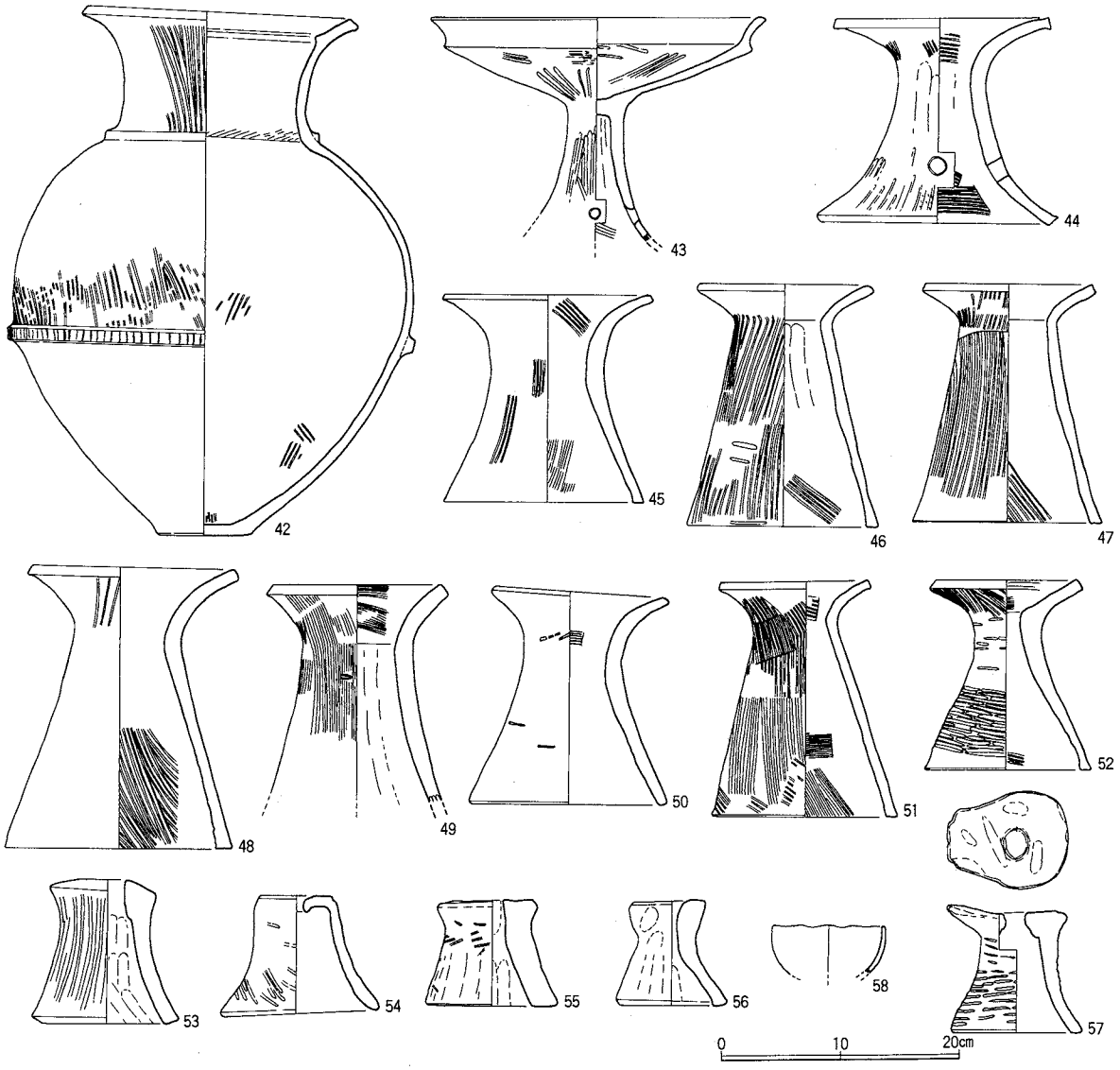


Fig. 109　L－8・9地区ＳＤ02出土遺物実測図－３（縮尺1/6）

内外面とも粗いハケ目調整が施されている。73も同じＳＤ02から出土した筒部に多重沈線を施した高坏の一部である。筒部径は5.1cmで、灰褐色を呈し、胎土には１～２mm大の石英・長石粒を少量含む。焼成は良好で、内外面ともハケ目調整、筒部には４本の多重沈線を巡らす。Fig.118－139はＳＤ01から出土した縄席文土器である。壺の胴部片と考えられる。外面は暗褐色、内面は灰色を呈する。140は壺口縁部の破片で、端部に三条の沈線、口縁内面に綾杉文を施す。色調は淡褐色を呈し、胎土には１mm前後の石英、長石、赤色粒子を含む。ローリングを受け内外面とも器表が荒れている。141はＳＤ02からの出土で、壺の口縁部である。口縁端部に粘土を貼り付け垂下させ、その部分に四条の沈線を施す。残高2.4cm、暗灰褐色を呈し、１～３mm大の石英、長石、閃緑岩を含む。焼成は良好である。比恵遺跡第50次調査で出土している畿内系の壺と同類であろう。５号水路調査区出土の在地の土器群は弥生後期中葉から後半代にかけてのもので、それにある程度の外来系の土器群が伴出していることは注目されよう。

第三節　F－10・11区ＳＤ－10·12

ＳＤ10（Fig.112・113, PL.54・56）

樋渡古墳の東側、Ｆ－11区で検出された断面Ｖ字状の溝である。溝幅1.5m、深さ0.5～0.7mを測り、東側で終焉している。18m分を調査した。西側は樋渡古墳の周溝で切られており、古墳墳丘下で検出したＳＤ12に接続するものと考えられる。集落を区画する条溝であろう。溝内から弥生後期中葉から後半代を中心とする遺物群が出土している。

Fig.113－74～81がＳＤ10出土の土器群である。74～78は甕形土器である。74は口径17.0cm、器高24.3cmを測る。内外面とも茶褐色を呈し、胎土は精良である。外面は縦方向のハケ目調整が施されている。75は胴の張りの少ない甕である。76は小型の甕で、77は短い口縁に胴が張った小型の甕である。口径13.9cm、胴径15.2cm、器高15.4cmを測る。78は口縁端部をやや肥厚させ、外端部に二条の沈線を巡らす。口径22.2cm、残高12.5cmで、器面は明褐色を呈する。胎土には３～４mm前後の長石を多く含む。79は鉢、80・81は器台である。

ＳＤ12（Fig.112・113・114、ＰＬ・54・56）

樋渡古墳の周溝下及び墳丘下から検出された溝である。ＳＤ10と連続する溝と考えられる。ＳＤ12は北西側に延びて樋渡古墳の周溝下で終息している。この部分には特に多くの遺物が集中して出土した。Fig.113－82～89は口縁がくの字状を呈する甕形土器である。82は口径30.8cm、器高39.5cmを測る。甕は殆ど縦方向のハケ目で調整されている。86～89はやや小型の甕である。88は胴が張り、口縁の屈曲が緩やかな甕である。89は平底の底面にハケ目調整を施す。甕の底部はやや丸味を持ったものもあるが大部分は平底である。90は小型の甕である。91～96は鉢形土器で、91・92は口縁部がくの字状を呈する。器高が深いものと浅いものがある。93～96は口縁部がやや内弯するもの、ストレートに立ち上がるもの、やや外反するものなどのタイプがある。97・98は手捏のミニチュアの鉢である。Fig.114－99・100 は複合口縁を有する壺であろう。99は頸部に二条の三角突帯を施す。胴部の突帯は99・100 とも三角突帯

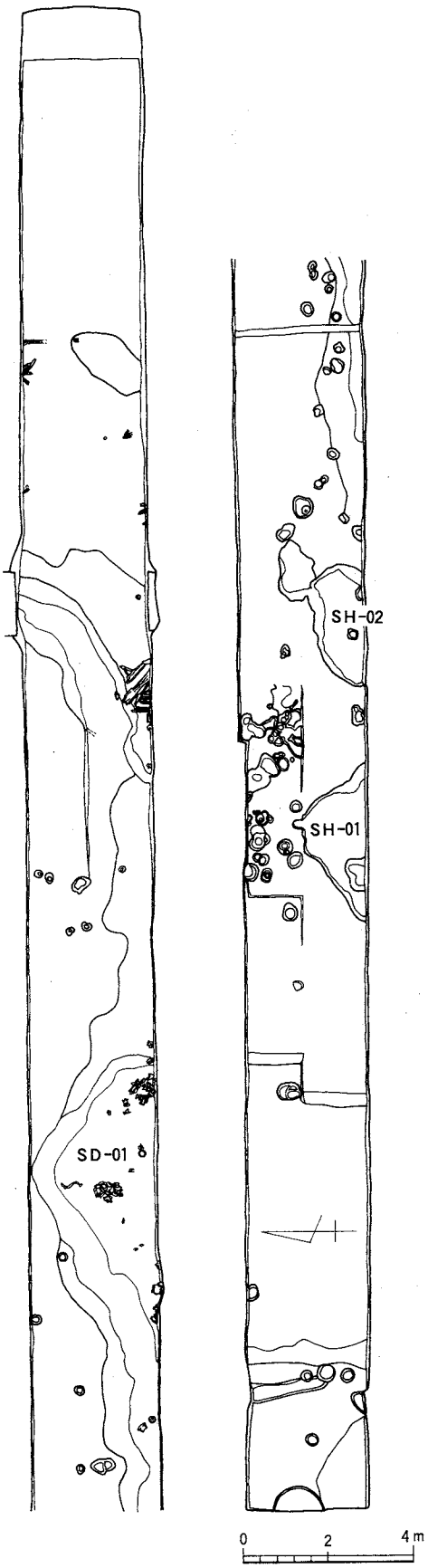


Fig.110　５号水路調査区遺構実測図（縮尺1/160）

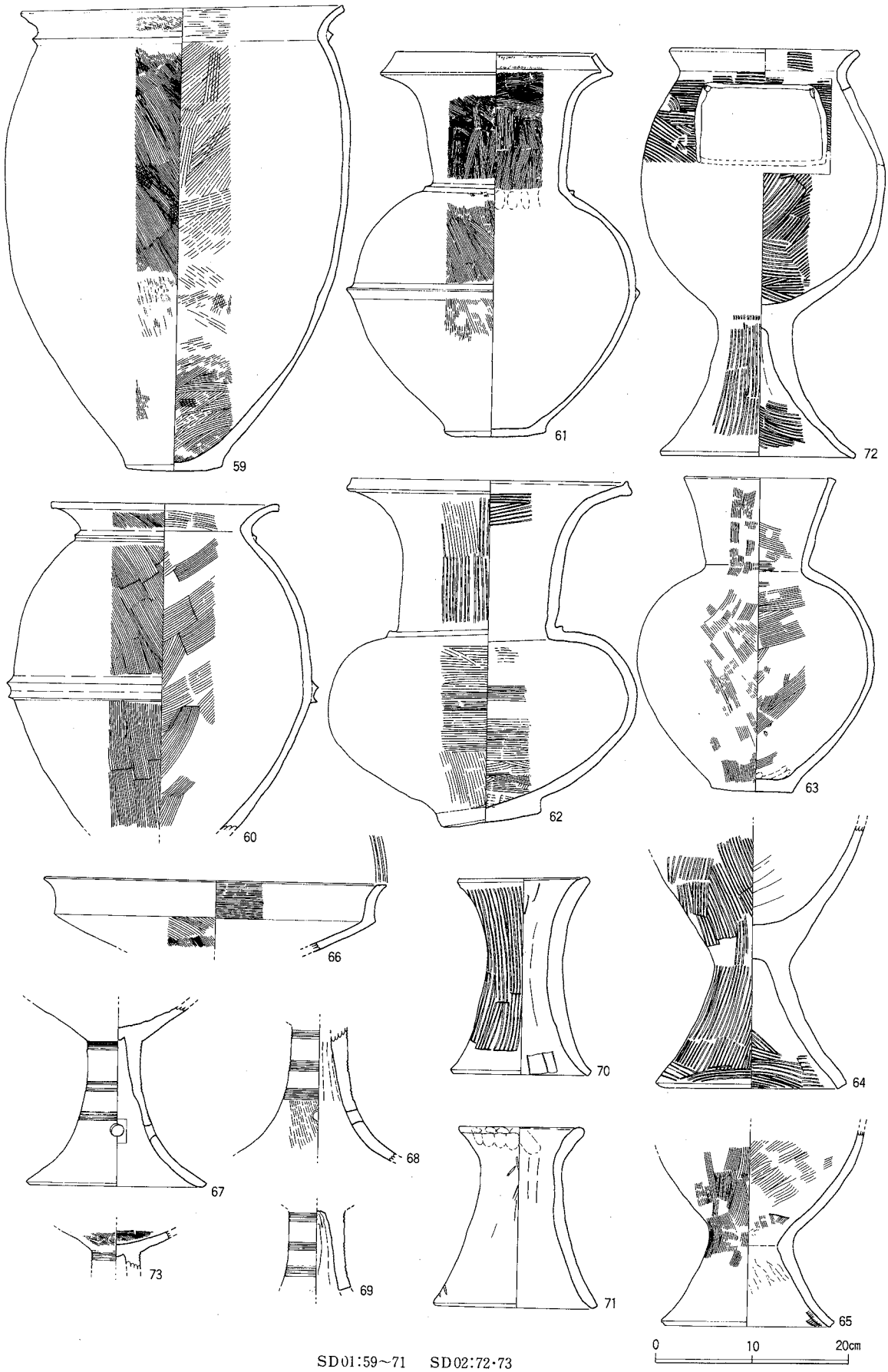


Fig. 111　5号水路調査区ＳＤ01・02出土遺物実測図（縮尺1/6）

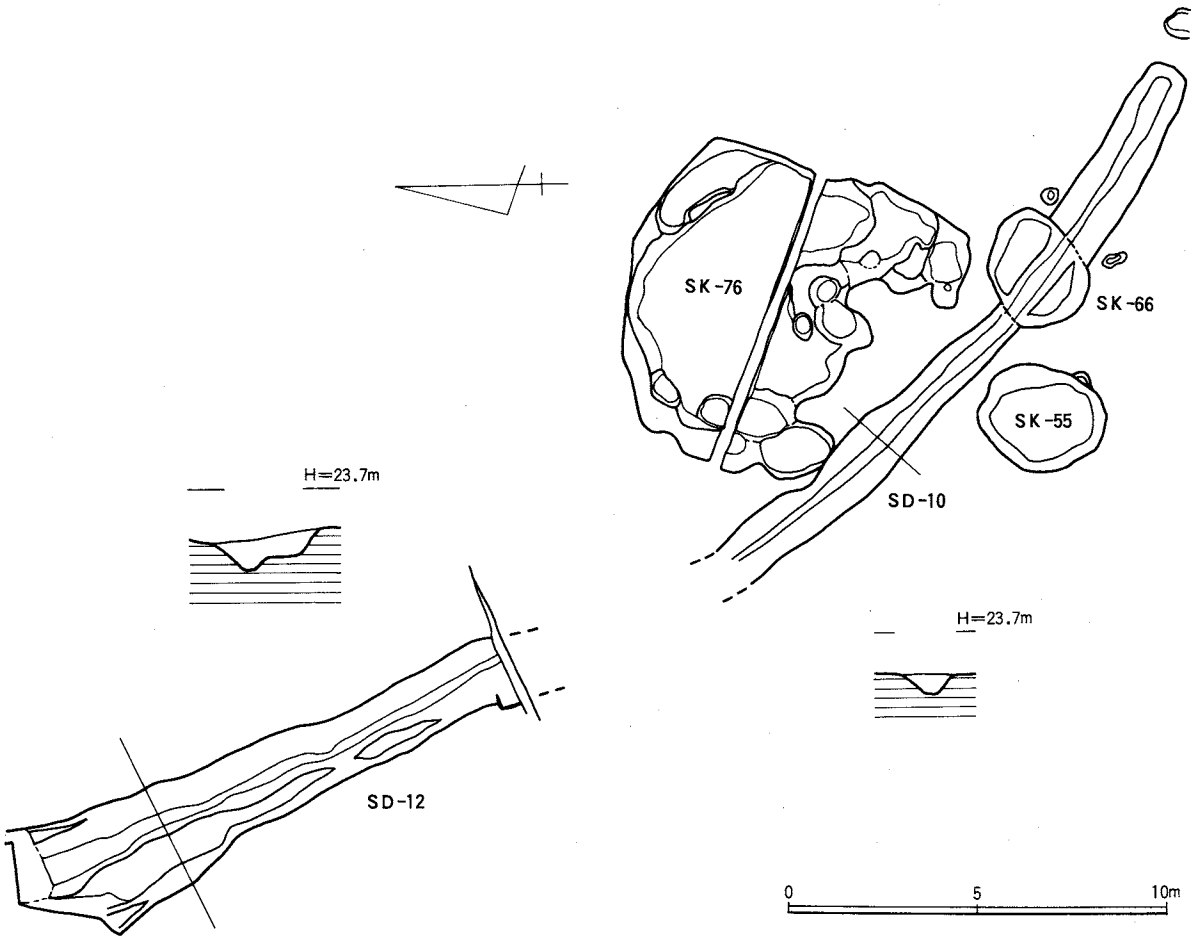


Fig.112　F－10･11区ＳＤ10・12遺構実測図（縮尺1/200）

である。101 は口径64.0cm、胴径62.6cm、底径10.5cm、器高85.7cmを測る大型の壺である。外面は淡い茶褐色を呈し、胎土には石英・長石粒をやや多く含む。口縁部は長く伸びて外反し、内面には三角状の粘土を貼り付け肥厚させている。頸部及び胴部には大きなコの字状突帯を二条ずつ貼り付ける。外面は縦方向の粗いハケ目、内面は横方向の粗いハケ目で調整されている。102 は口縁部が長く、弯曲して外反する甕である。胴部最大径はやや上位にくる。底部は丸平底に近い。口径23.5cm、胴径25.7cm、器高27.4cmを測る。内外面とも灰褐色を呈する。103 ～106 は器台である。106 は小型で上面に平坦面がある。ＳＤ12出土の土器は甕などにタタキがみられず、底部の丸味もあまり強くないことなどから弥生後期の中葉から後半代の古い時期に比定できるのではなかろうか。

土壙・住居址

住居址は８号支線道路調査区で検出している。部分的な調査で全体的な広がりはつかめなかった。土壙群はＦ－10・11区の樋渡古墳東側に集中して出土している。弥生中期初頭から後期まで存在する。

ＳＣ01（Fig.116・117、PL.54）

８号支線道路調査区で検出した方形の竪穴住居址である。半分は削られて不明である。東西4.3m南北は現存長2.5m、深さ0.2mを測る。南側に土壙があり遺物が出土している。Fig.117－137は小型の甕である。口径13.0cm、底部6.0cm、器高14.6cmを測る。短い口縁部はややくの字状に折れて立ち上がる。茶褐色を呈し、外面はハケ目で調整されている。弥生後期後半代のものであろう。

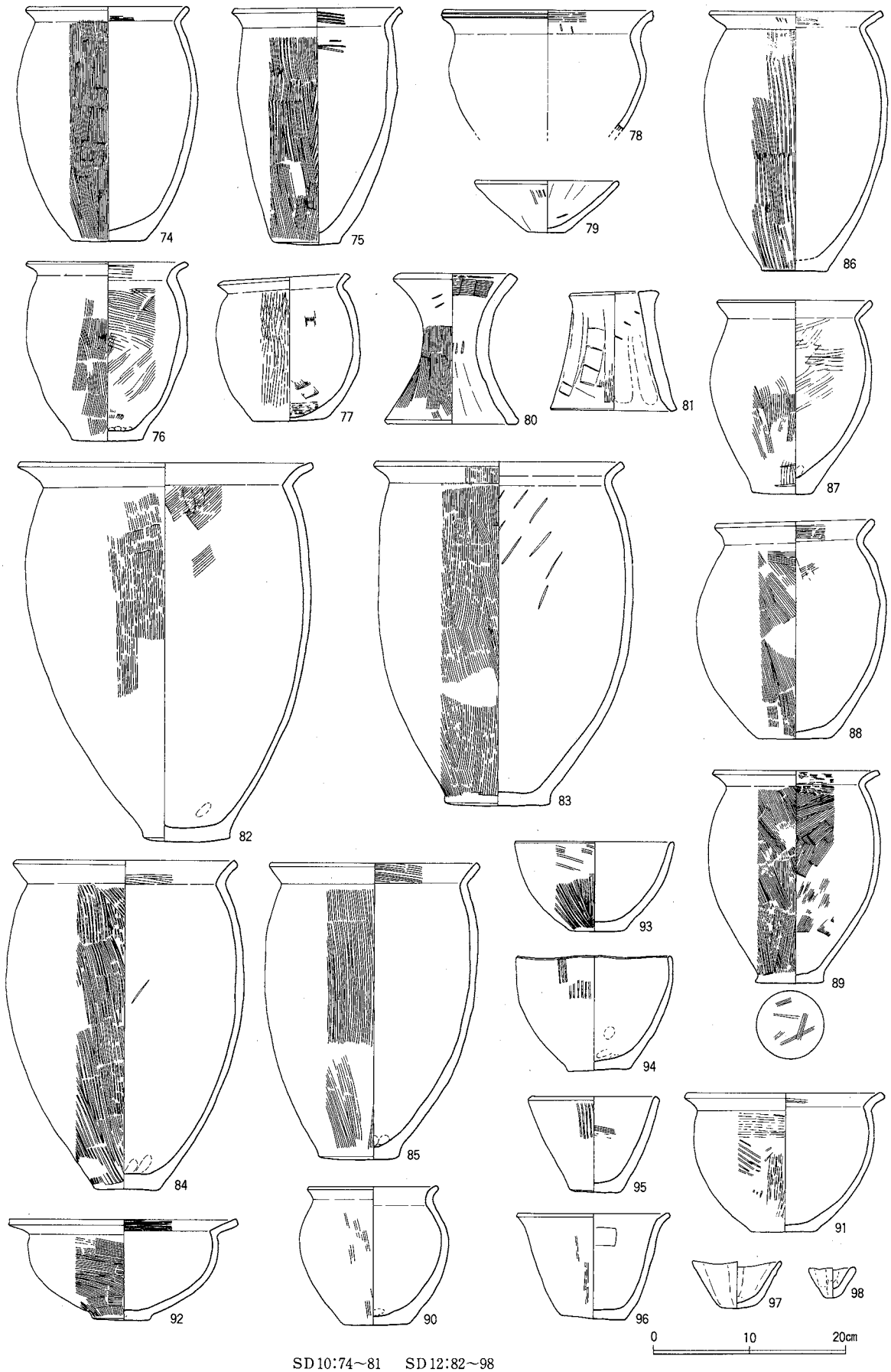


Fig. 113　F－10・11区ＳＤ10・12出土遺物実測図（縮尺1/6）

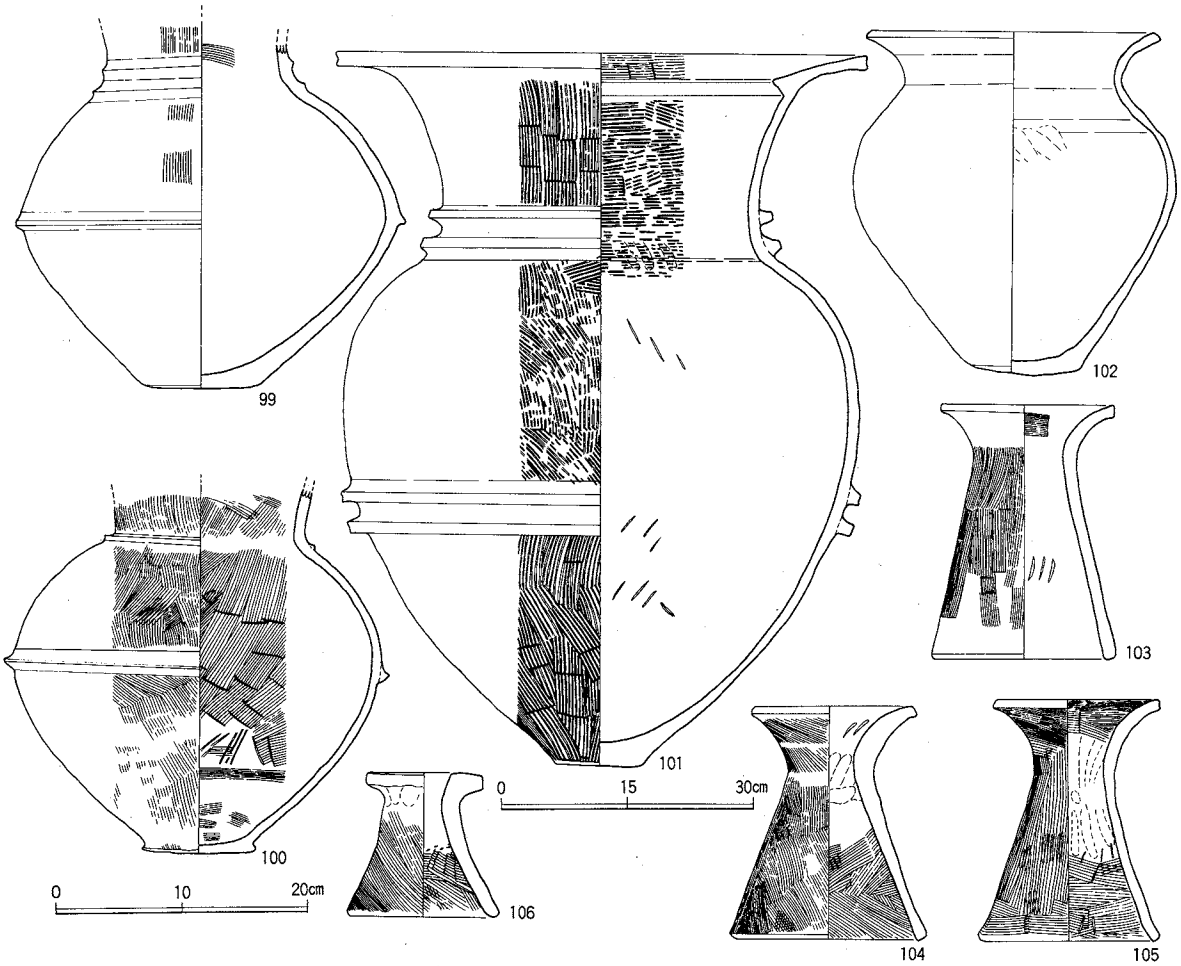


Fig. 114　F－10・11区ＳＤ12出土遺物実測図（縮尺1/6・1/9）

ＳＫ50（Fig.115・117）Ｈ－11区に位置し、近くに小児甕棺墓地があるところから祭祀土壙と考えられる。Fig.117－107は丹塗りの甕である。口径32.0cm、弥生中期中葉に属するものであろう。

ＳＫ68（Fig.115・117）Ｆ－11区に位置する略円形土壙である。1.25×1.20m、深さ0.26mである。壙内から中期中葉の甕が出土している。Fig.117－116は口径21.8cm、底径11.6cm、器高17.7cmを測る。褐色～淡灰褐色を呈し、胎土は精良で焼成も良好である。底径の大きな甕形土器である。

ＳＫ72（Fig.115・117・118、PL.54）　Ｆ－10区の方墳周溝下から検出された円形土壙である。上径は3.0×2.60m、深さ1.10mを測る。中期初頭の土器がまとまって出土している。Fig.117－108・109は壺である。108は口縁端部を肥厚させ平坦面を作っている。口径18.8cm。109は球形の胴部を有する壺で、口縁端部はやや外反する。復元口径15.0cm、胴径は29.0cmである。110は甕蓋、111～115は甕である。112は口縁端部に刻み目を入れ口縁下に突帯を施す。口径19.2cmである。甕の底部は肥厚したものが殆どで底面が窪む。Fig.118－145は玄武岩製の太形蛤刃石斧である。全長20.5cm、最大幅8.5cm、最大厚4.9cmを測る。ふたつに折損しており裏面は剝落している。

ＳＫ77（Fig.115・117・118）　Ｅ－11区で検出された土壙で、半分は未調査区に伸びている。確認幅2.7m、深さ1.0mである。長さは2.4mまで確認している。Fig.117－117～121は土壙から出土した土器群である。117・118は甕、119は壺、120は鉢、121は器台である。弥生後期後半代に属するものであろう。Fig.118－143・144は石包丁である。143は全長13.8cmで頁岩製、144は全長13.0cmで安山岩製である。他にも破片の石包丁が出土している。

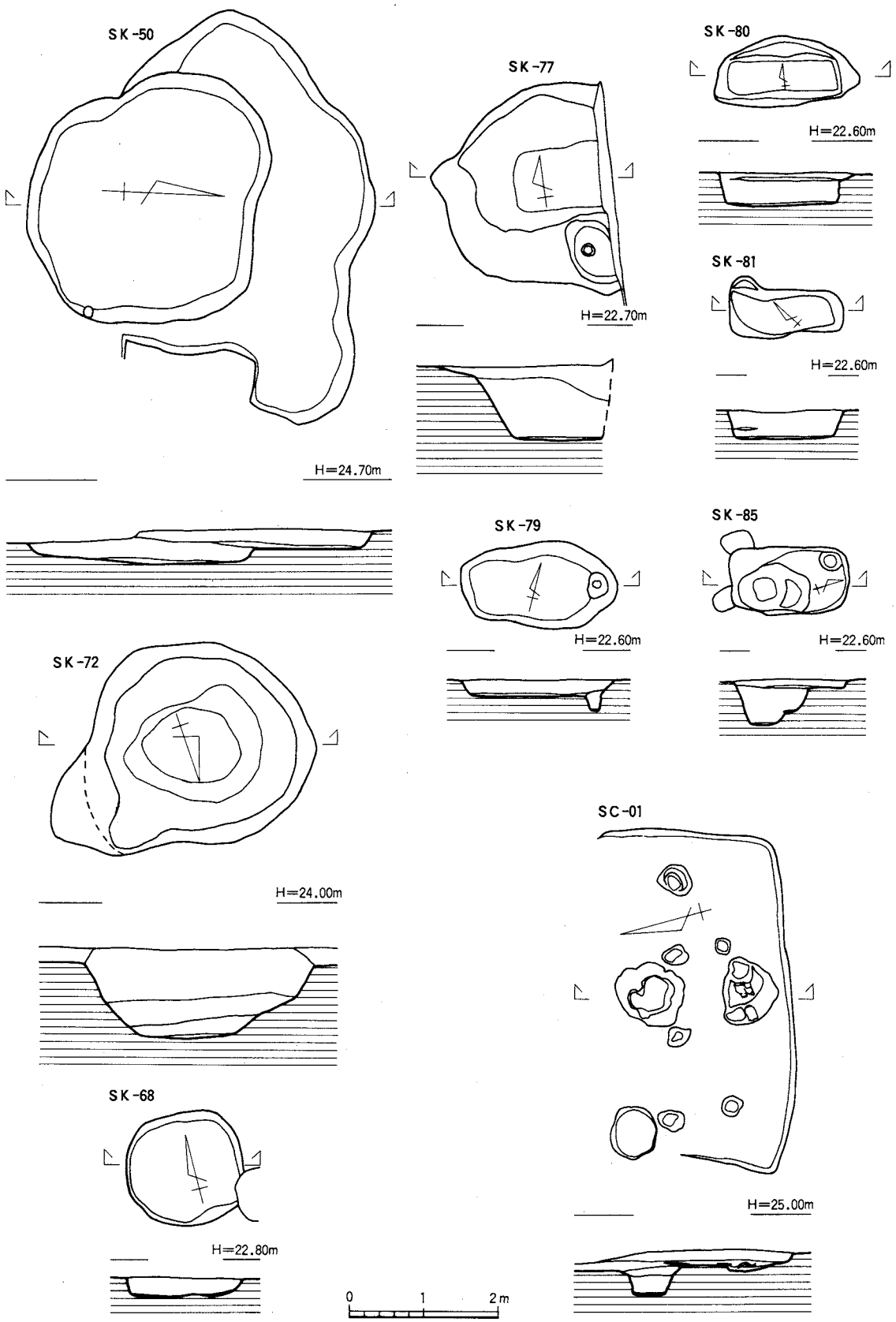
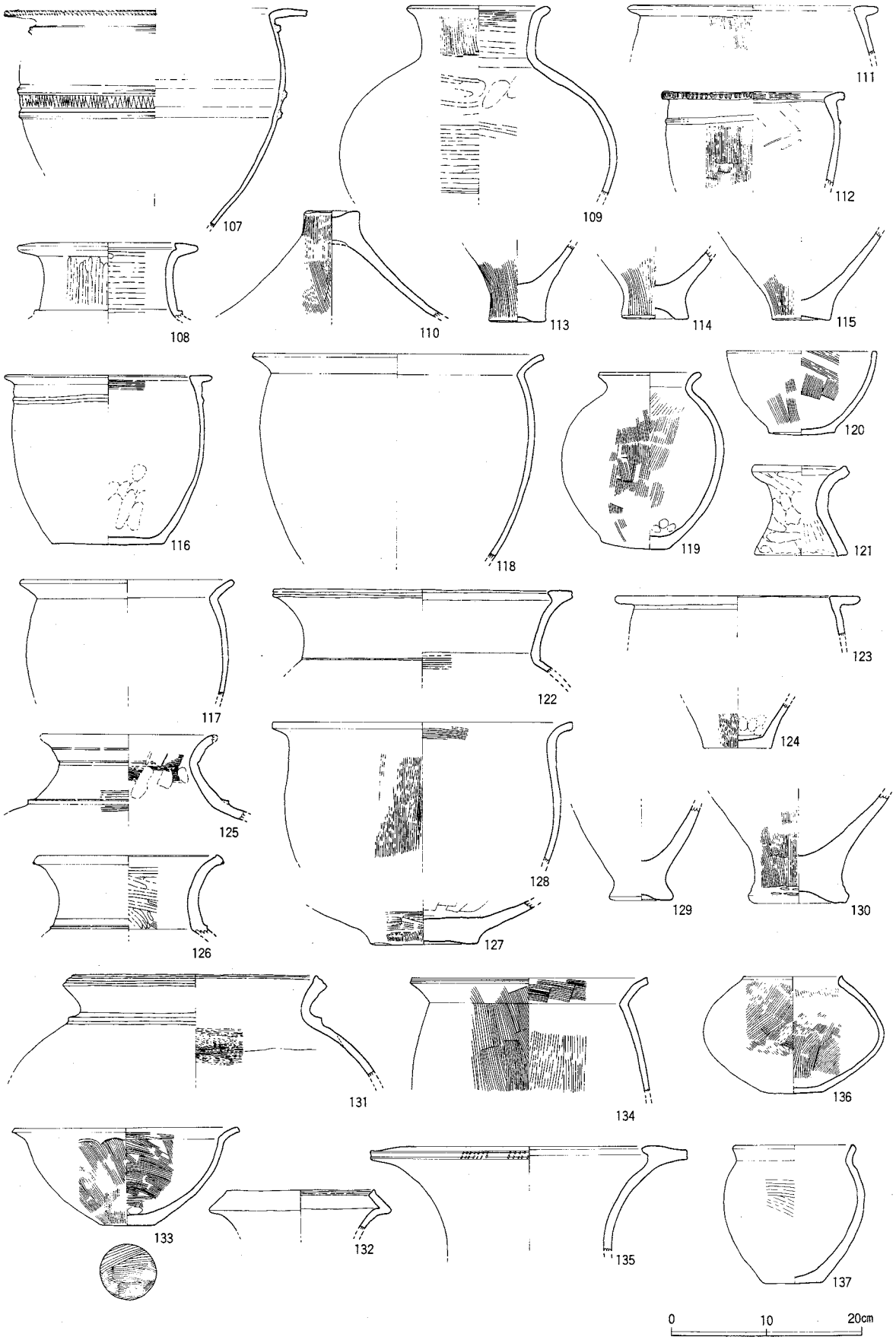


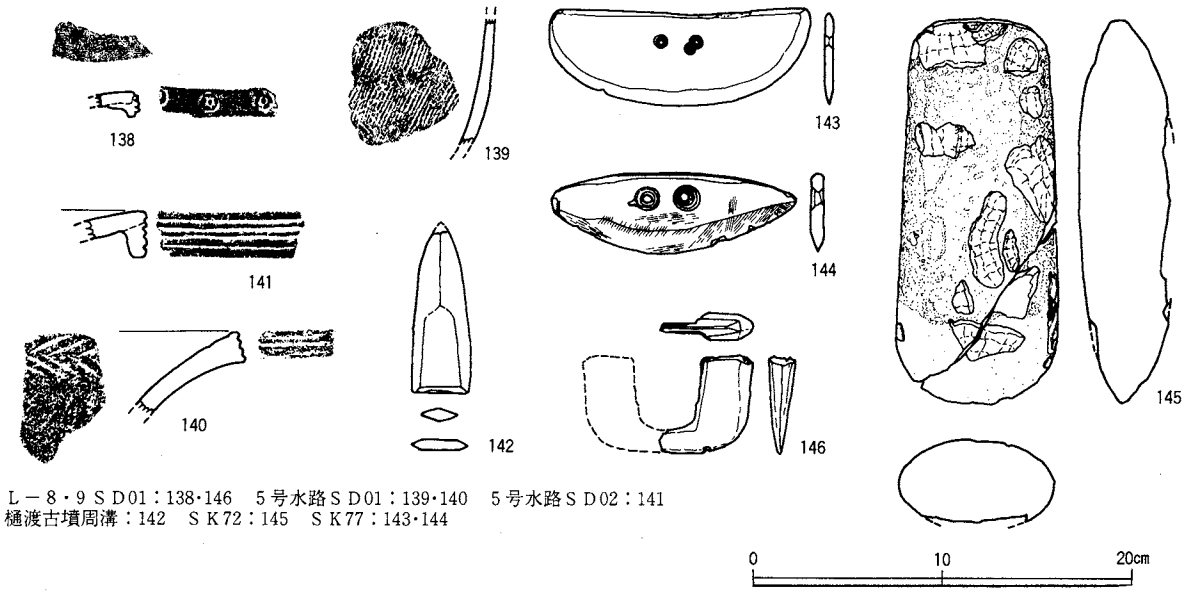
Fig. 115　ＳＫ-50・68・72・77・79・80・81・85
遺構実測図（縮尺1/80）

Fig. 116　ＳＣ-01遺構実測図（縮尺1/80）



ＳＫ50：107　ＳＫ72：108～115　ＳＫ68：116　ＳＫ77：117～121　ＳＫ78：122～124　ＳＫ82：125～130
３号水路ＳＤ03･02：131～133　８号支線ＳＤ01：134　８号支線ＳＤ02：135･136　ＳＣ01Ｐ-1：137

Fig. 117　土壙（ＳＫ）・溝（ＳＤ）出土遺物実測図（縮尺1/6）



L－8・9ＳＤ01：138・146　5号水路ＳＤ01：139・140　5号水路ＳＤ02：141
樋渡古墳周溝：142　ＳＫ72：145　ＳＫ77：143・144

Fig.118　土壙（ＳＫ）・溝（ＳＤ）出土遺物実測図（縮尺1/4）

ＳＫ78（Fig.117）　Ｆ－11区で検出された不定形土壙である。2.92×2.70m、深さ0.31mを測る。Fig.122～124は出土した壺及び甕である。弥生中期前半から中葉に属するものであろう。

ＳＫ82（Fig.117、ＰＬ．54）　樋渡古墳の墳丘下から出土した長楕円形の土壙である。長さ2.2m、幅0.58m、深さ0.3mを測る。弥生前期末～中期初頭の遺物がまとまって出土している。Fig.117－125・126は壺である。125は外反する口縁部を肥厚させ、肩部に三角突帯を一条施す。126は胴部が球形を呈する壺で肩部に細かい三角突帯を施す。127は壺の底部である。128～130は甕の口縁及び底部である。如意形口縁の甕には端部に刻み目を施さない。甕底部はぶ厚く肥厚させ、底面は窪む。

第四節　その他の遺構

（Fig.115）　上記以外の土壙で中期中葉に属する土壙として、ＳＫ67・69・79・80・81・83・84・85・86・87などがある。これらＥ・Ｆ－10・11区に集中して出土している。ＳＫ80と81は土壙墓の可能性がある。ＳＫ73も中期に属する土壙と考えられるが遺物が見当たらなかった。別な場所に収蔵されていると考えられるので確認次第報告したい。この土壙から朝鮮系無文土器が出土している。

古墳時代の溝から出土した弥生土器（Fig.117）　131・132は3号水路ＳＤ03から出土したもので、131は口縁端部を肥厚させ二条の沈線を施す壺、132は複合口縁の壺である。133はＳＤ02から出土した鉢である。134は8号支線道路ＳＤ01から出土した甕、135はＳＤ02から出土した鋤先状口縁の壺、136は無頸壺である。135は弥生中期中葉に属し、それ以外は後期の後半代に属するものであろう。

第五節　第三次調査小結

第Ⅲ次調査では、竪穴住居址群などの集落址は発見されなかったが、弥生前期末～中期初頭から後期に亘る生活関連遺構が検出され、遺物量も厖大であった。中期初頭から中葉に属する遺構群は樋渡古墳群の東側に広がっており、中心部はさらに東側の未調査区（台地の先端部）へ広がるものと考えられる。今回報告できなかったが朝鮮系の無文土器も出土しており、集落の成り立ちや特定集団墓地との関係など今後さらに検討を深めていかなければならない。

弥生後期の遺構は区画溝を中心とするが、近くに集落の存在を窺わせるものである。後期まで連綿と遺構群が継続しており、後半代には瀬戸内系、畿内系、東海系や中部九州の土器群が増加し、広い範囲での交流が活発に行なわれていたことを示している。来たるべき古墳時代への胎動が徐々にではあるが確実に動き出していることを看て取ることができよう。

第五章　第四次調査報告－弥生時代生活遺構調査の報告－

概要（Fig.119）　第四次調査は、吉武遺跡群の南端の区域にあたり、飯盛山山麓の東側に展開する扇状地の末端部付近が主要な調査部分である。

調査区は、北側に浅い谷が北東から侵入し、また南側には南東から比高差のある深い谷が侵入する地形となっており、あたかも舌状丘陵の態をなしている。

調査は、圃場整備にともなう切り土工事および道路・水路などの構造物建設の工事が行われる区域について行ったが、検出された遺構は全体的に密度は高いにもかかわらず保存状態は一部を除けば非常に悪いものであった。この原因は、主に過去の水田開発によるものである。

さて、調査は便宜上その区域を東側から第Ⅰ区、第Ⅱ区（東西二区域に分割）、第Ⅲ区と呼ぶこととした。今回報告する弥生時代の生活遺構はおもに第Ⅰ・Ⅱ区に多く検出され、前に報告を行った掘立柱建物群の分布区域とほぼ重なる分布となっている。また、第Ⅲ区では主に甕棺墓・木棺墓等の集中する墳墓が多く検出されている。

ところで、検出された生活遺構は、弥生時代中期初頭～後期にかけての不整形な土壙、竪穴住居址、溝遺構などである。ここで各地区の遺構数を挙げれば、第Ⅰ区で土壙（ＳＫ）34基、竪穴住居址（ＳＣ）４軒、溝遺構（ＳＤ）６条、第Ⅱ区で土壙（ＳＫ）96基、竪穴住居址（ＳＣ）７軒、溝遺構（ＳＤ）５条、第Ⅲ区で土壙（ＳＫ・ＳＸ）８基、溝遺構（ＳＤ）１条が検出された。

以下では各地区毎に、土壙、竪穴住居址、溝遺構の順で内容について略述することとしたい、なお、出土遺物については紙面の都合から実測図の掲載のみにとどめた。

第一節　第Ⅰ区調査報告（Fig.120～128）（PL.57～60）

1．土　壙（Fig.121、126～128）（PL.57～60）

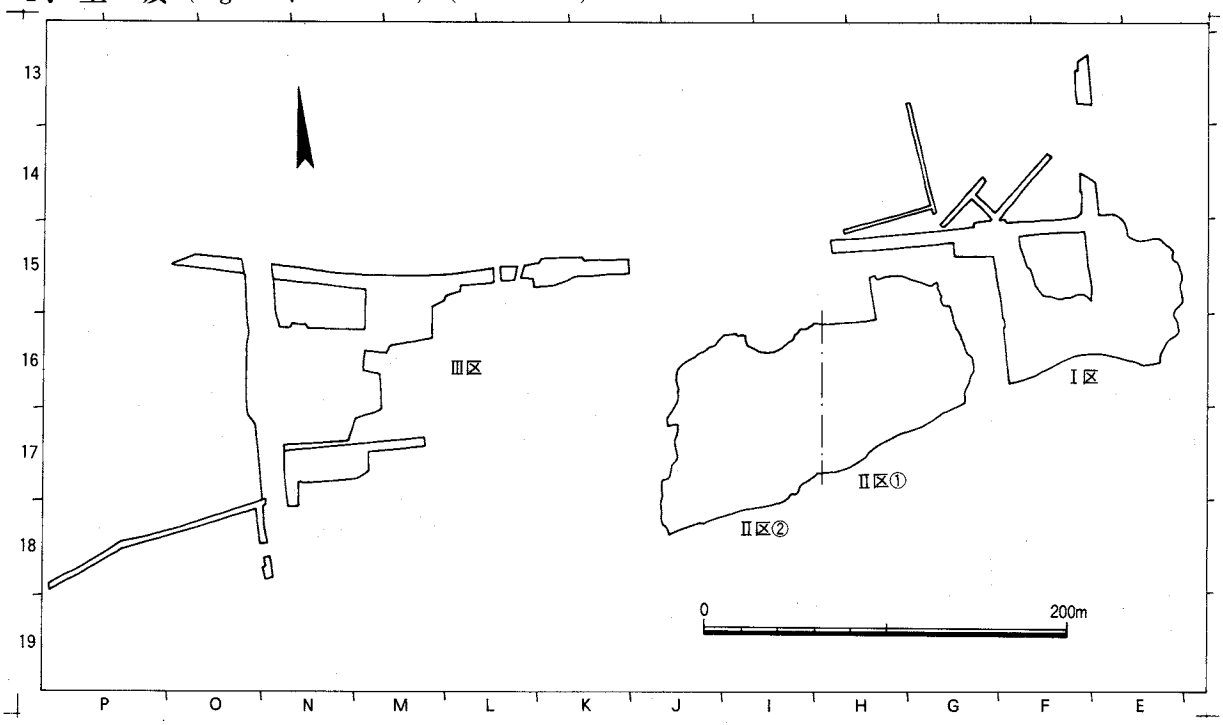
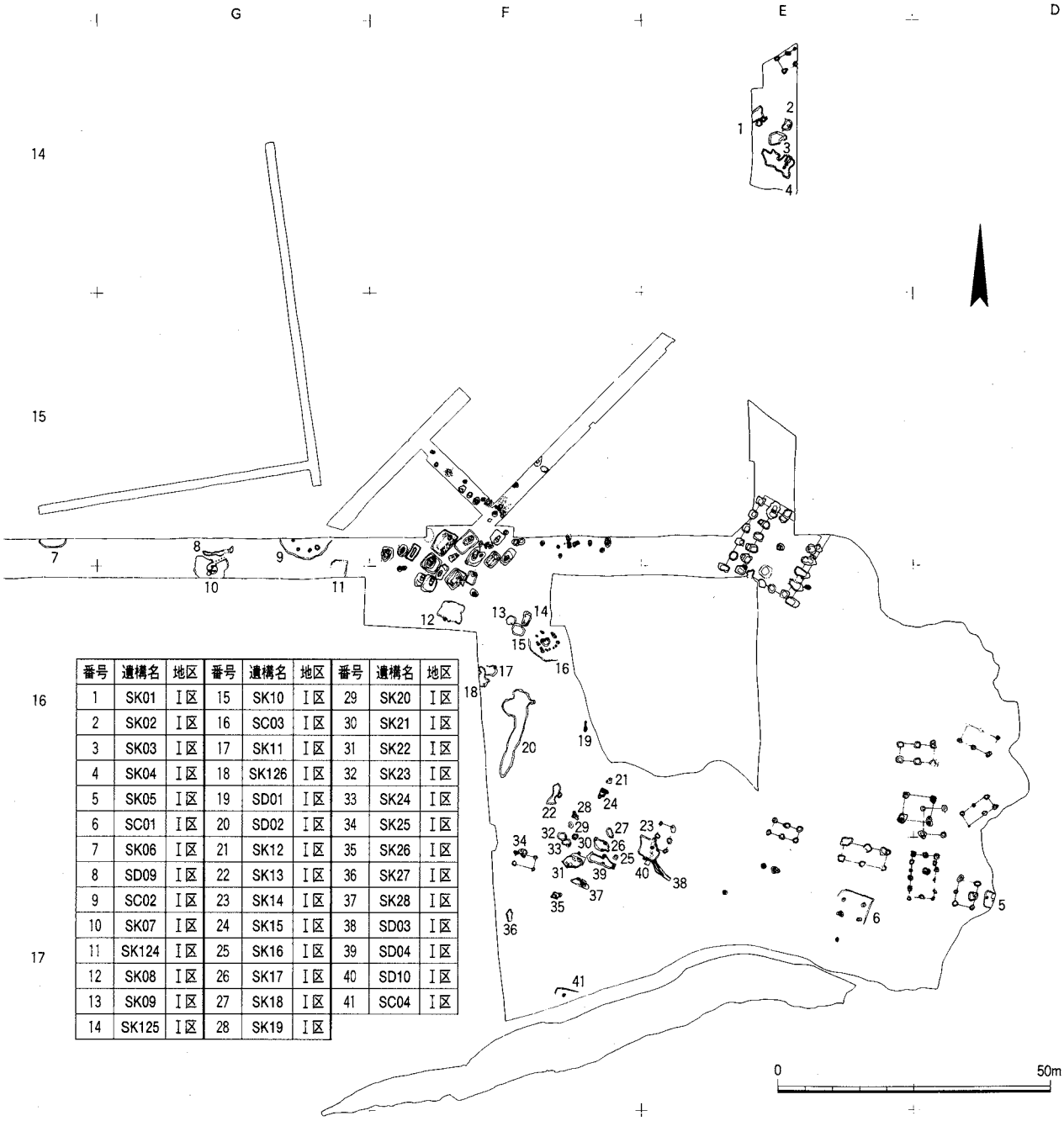


Fig. 119　第四次調査区概念図（縮尺1/4167）



番号	遺構名	地区	番号	遺構名	地区	番号	遺構名	地区
1	SK01	Ⅰ区	15	SK10	Ⅰ区	29	SK20	Ⅰ区
2	SK02	Ⅰ区	16	SC03	Ⅰ区	30	SK21	Ⅰ区
3	SK03	Ⅰ区	17	SK11	Ⅰ区	31	SK22	Ⅰ区
4	SK04	Ⅰ区	18	SK126	Ⅰ区	32	SK23	Ⅰ区
5	SK05	Ⅰ区	19	SD01	Ⅰ区	33	SK24	Ⅰ区
6	SC01	Ⅰ区	20	SD02	Ⅰ区	34	SK25	Ⅰ区
7	SK06	Ⅰ区	21	SK12	Ⅰ区	35	SK26	Ⅰ区
8	SD09	Ⅰ区	22	SK13	Ⅰ区	36	SK27	Ⅰ区
9	SC02	Ⅰ区	23	SK14	Ⅰ区	37	SK28	Ⅰ区
10	SK07	Ⅰ区	24	SK15	Ⅰ区	38	SD03	Ⅰ区
11	SK124	Ⅰ区	25	SK16	Ⅰ区	39	SD04	Ⅰ区
12	SK08	Ⅰ区	26	SK17	Ⅰ区	40	SD10	Ⅰ区
13	SK09	Ⅰ区	27	SK18	Ⅰ区	41	SC04	Ⅰ区
14	SK125	Ⅰ区	28	SK19	Ⅰ区			

Fig. 120　第Ⅰ区遺構全体図（縮尺1/1163）

ＳＫ01（Fig.121、126）　調査区北東部のＥ14地区で検出された浅い不定形の土壙である。規模は長辺が3.2m以上、短辺２m、深さ0.249mを測る。遺物は、甕底部（**01001**）、同口縁部（**01002**、**01004**）、投弾（01004）などが出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ02（Fig.121、126）　調査区北東部のＥ14地区で検出された不定形の土壙である。規模は長辺が1.9m、短辺1.74m、深さ0.438mを測る。遺物は、甕口縁部（**01005**、**01006**）と器台（**01007**）ばどが出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ03（Fig.121、126）　調査区北東部のＥ14地区で検出された浅い不定形の土壙である。規模は長辺が3.3m、短辺2.09m、深さ0.288mを測る。遺物は、甕口縁部（**01008**）等が少量出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ08（Fig.121、126、128）　調査区西端のＦ16地区で検出された不整な長方形をなす土壙である。規模は、長辺が4.16ｍ、短辺3.40ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01019**、**01020**）と石包丁（**11009**）等が出土しており、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＫ14（Fig.121、127）　調査区南西隅のＥ17地区で検出された不整な方形をなす浅い土壙である。規模は、長辺が3.9ｍ、短辺3.34ｍ、深さ0.169ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01037**）等少量が出土しており、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ09（Fig.122、126）　調査区西側のＦ16地区で検出された小型の円形土壙である。規模は、長辺が1.66ｍ、短辺1.32ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01021**）等少量が出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ10（Fig.122、126）　調査区西側のＦ16地区で検出された小型の楕円形土壙で、ＳＫ09に隣接する。規模は、長辺が2.54ｍ、短辺1.97ｍ、深さ0.504ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01022**、**01023**、**01024**）等が出土しており、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ11（Fig.122、126）　調査区西側のＦ16地区で検出された小型で浅い楕円形土壙である。規模は、長辺が2.24ｍ、短辺1.80ｍ、深さ0.196ｍを測る。遺物は、甕底部（**01025**）、小型鉢（**01026**）、器台（**01027**）等が出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ12（Fig.122、127）　調査区中央に近いＦ16地区で検出された不整な方形をなす小型土壙である。規模は、長辺が1.09ｍ、短辺1.10ｍ、深さ0.323ｍを測る。遺物は、壺口縁部（**01035**）、高杯脚部（**01036**）等が出土しており、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ13（Fig.122）　調査区中央に近いＦ16地区で検出された溝状の不整形土壙である。規模は、長辺が3.88ｍ、短辺1.10ｍ、深さ0.152ｍを測る。時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ15（Fig.122、127）　調査区中央に近いＦ16地区で検出された不整な長方形をなす土壙である。規模は、長辺が2.04ｍ、短辺1.14ｍ、深さ0.225ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01038**）、壺口縁部（**01039**）等が出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ18（Fig.122、127）　調査区中央に近いＦ16地区で検出された楕円形をなす小型土壙である。規模は、長辺が1.86ｍ、短辺0.95ｍ、深さ0.737ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01043**）等が出土しており、時期は中期末の所産と考えられる。

ＳＫ19（Fig.122、127）　調査区中央に近いＦ16地区で検出された小型の不整形の土壙である。規模は、長辺が1.13ｍ、短辺0.60ｍ、深さ0.40ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01044**）、器台（**01045**）等が出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ20（Fig.122、127）　調査区中央に近いＦ16地区で検出された小型の不整形土壙である。規模は、長辺が1.09ｍ、短辺0.81ｍ、深さ0.345ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01046**）等少量が出土しており、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ125（Fig.122、126）　調査区西側のＦ16地区で検出された長方形土壙である。規模は、長辺が2.78ｍ、短辺1.26ｍを測り、複数の段を有する。遺物は、甕蓋（**01017**）、無頸壺蓋（**01018**）等が出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ16（Fig.122、127）調査区南側のＦ17地区で検出された小型の方形土壙である。規模は、長辺が0.81ｍ、短辺0.79ｍ、深さ0.225ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01040**）等少量が出土している。時期は、中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ17（Fig.122、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整形の土壙である。規模は、長辺が3.84ｍ、短辺1.69ｍ、深さ0.58ｍを測る。遺物は、甕口縁部２点（**01041**、**01042**）や器台破片等が出

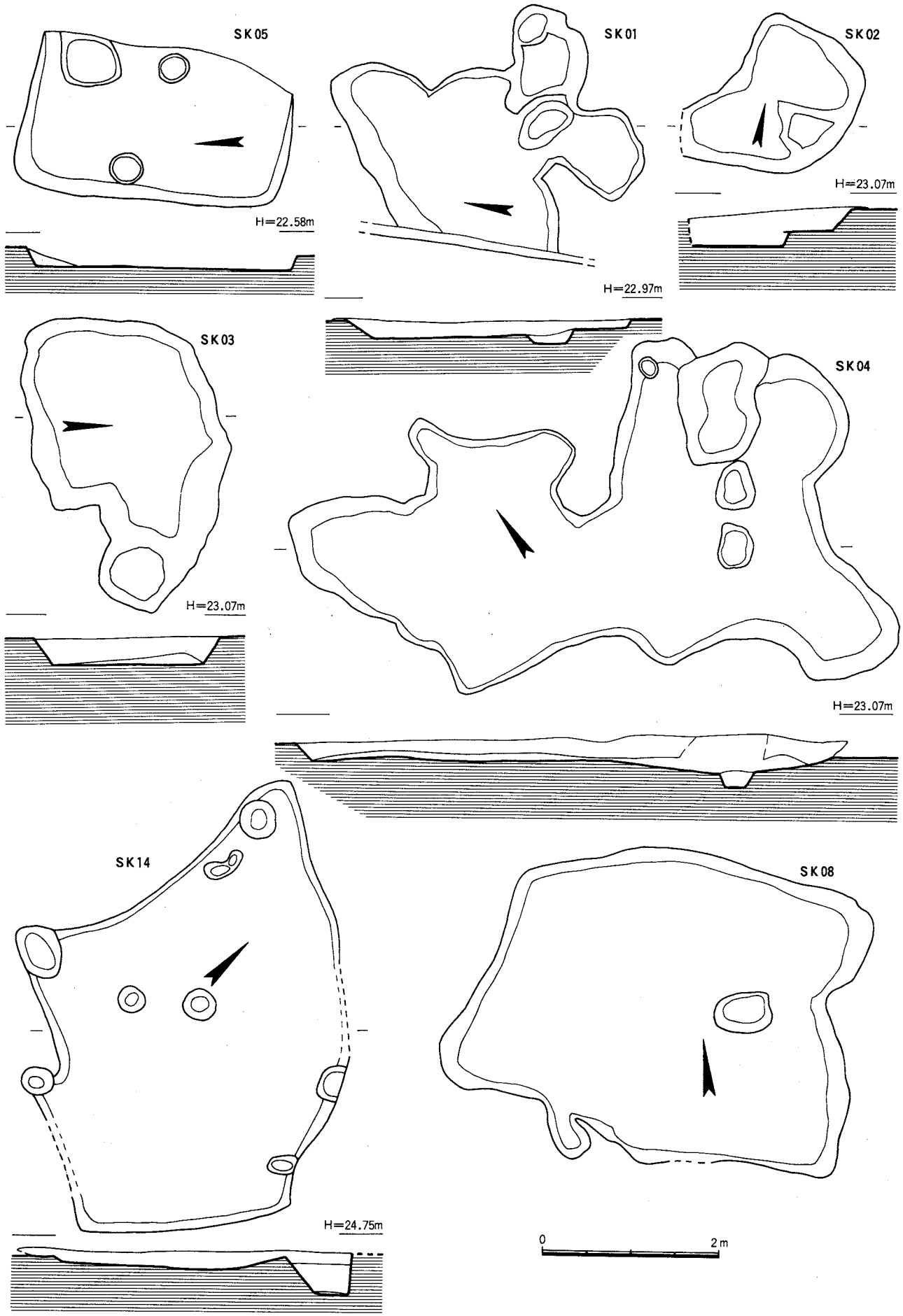


Fig. 121　第Ⅰ区土壙出土状況実測図 ①（縮尺1/60）

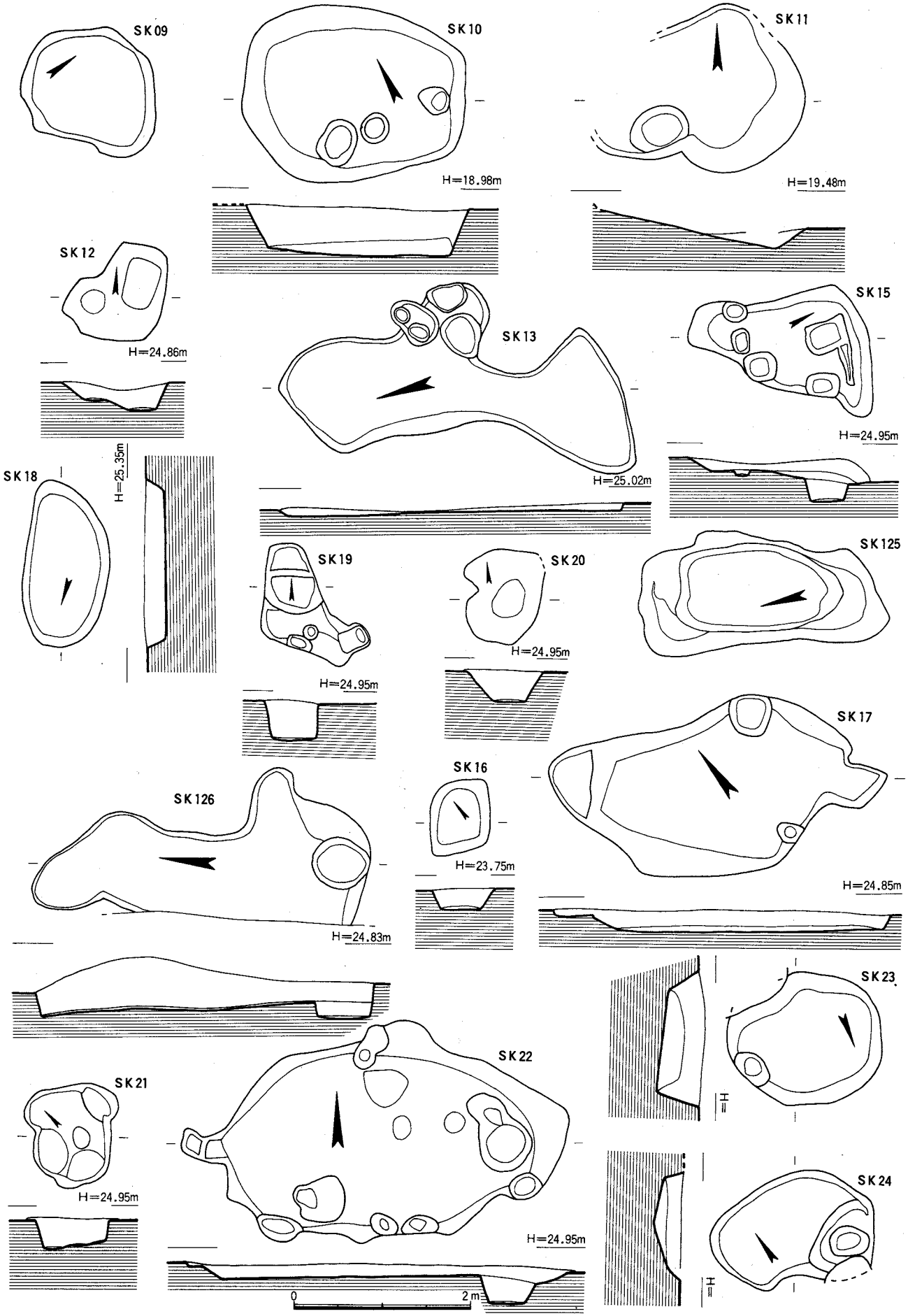


Fig. 122　第Ⅰ区土壙出土状況実測図 ②（縮尺1/60）

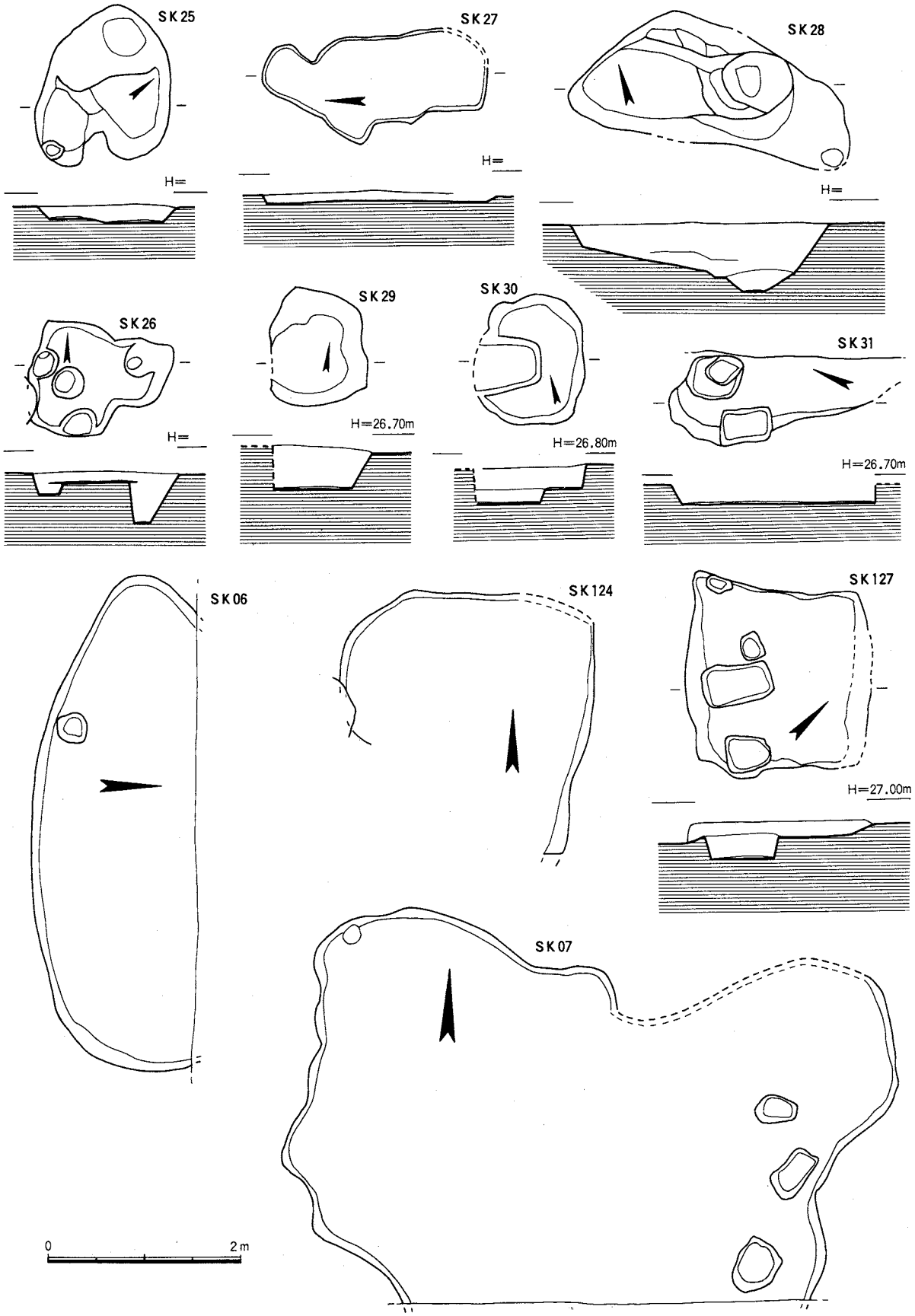


Fig. 123　第Ⅰ区土壙出土状況実測図 ③（縮尺1/60）

土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ126（Fig.122、127）調査区西側のＦ16地区で検出された不整形の土壙である。規模は、長辺が3.70ｍ、短辺0.95ｍ、深さ0.366ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01028**、**01029**、**01030**）、壺口縁部（**01031**）、壺頸部（**01032**）、甕蓋（**01033**）、器台（**01034**）が出土した。時期は、中期前半の所産である。

ＳＫ21（Fig.122、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整円形の土壙である。規模は、長辺が1.12ｍ、短辺0.86ｍ、深さ0.245ｍを測る。遺物は、壺口縁部（**01047**）等が出土した。時期は、中期後半の所産である。

ＳＫ22（Fig.122、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整円形の土壙である。規模は、長辺が3.90ｍ、短辺2.12ｍ、深さ0.136ｍを測る。遺物は、壺口縁部（**01048**、**01049**）等が出土した。時期は、中期末の所産と考えられる。

ＳＫ23（Fig.122、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整円形の土壙である。規模は、長辺が1.75ｍ、短辺1.50ｍ、深さ0.23ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01050**）、無頸壺（**01051**）、磨製石鏃（**11010**）等が出土した。時期は、中期前半の所産か。

ＳＫ24（Fig.122、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整円形の土壙である。規模は、長辺が1.86ｍ、短辺1.19ｍ、深さ0.335ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01052**）、器台（**01053**）等が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ25（Fig.123、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整円形の土壙である。規模は、長辺が1.40ｍ、短辺1.32ｍ、深さ0.18ｍを測る。遺物は、甕底部（**01054**）等少量が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ26（Fig.123）調査区南側のＦ17地区で検出された不整円形の土壙である。規模は、長辺が1.48ｍ、短辺1.20ｍ、深さ0.10ｍを測る。遺物は、破片が少量で、時期は中期の所産であろう。

ＳＫ27（Fig.123、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整形の土壙である。規模は、長辺が2.33ｍ、短辺0.90ｍ、深さ0.06ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01055**）等が少量出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ28（Fig.123、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整形の土壙である。規模は、長辺が2.64ｍ、短辺1.17ｍ、深さ0.47ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01056**）、甕底部（**01057**）、磨製石剣（**11011**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ29（Fig.123）調査区南側のＦ17地区で検出された不整方形の土壙である。規模は、長辺が1.20ｍ、短辺1.0ｍ、深さ0.43ｍを測る。遺物は、壺・鉢などの破片が少量出土し、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＫ30（Fig.123、127）調査区南側のＦ17地区で検出された不整円形の土壙である。規模は、長辺が1.29ｍ、短辺1.12ｍ、深さ0.21ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01058**）、甕底部（**01059**）等が出土した。時期は、中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ31（Fig.123、127、128）調査区南側のＦ17地区で検出された不整楕円形の土壙である。規模は、長辺が2.06ｍ、短辺0.19ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01062**）、磨製石斧（**11013**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ127（Fig.123、127、128）調査区南側のＦ17地区で検出された不整方形の土壙である。規模は、長辺が1.92ｍ、短辺1.83ｍ、深さ0.11ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01060**、**01061**）、砥石（**11012**）等が出土した。時期は、中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ07（Fig.123、126）調査区西端のＧ15・16地区で検出された不整形の土壙である。規模は、長

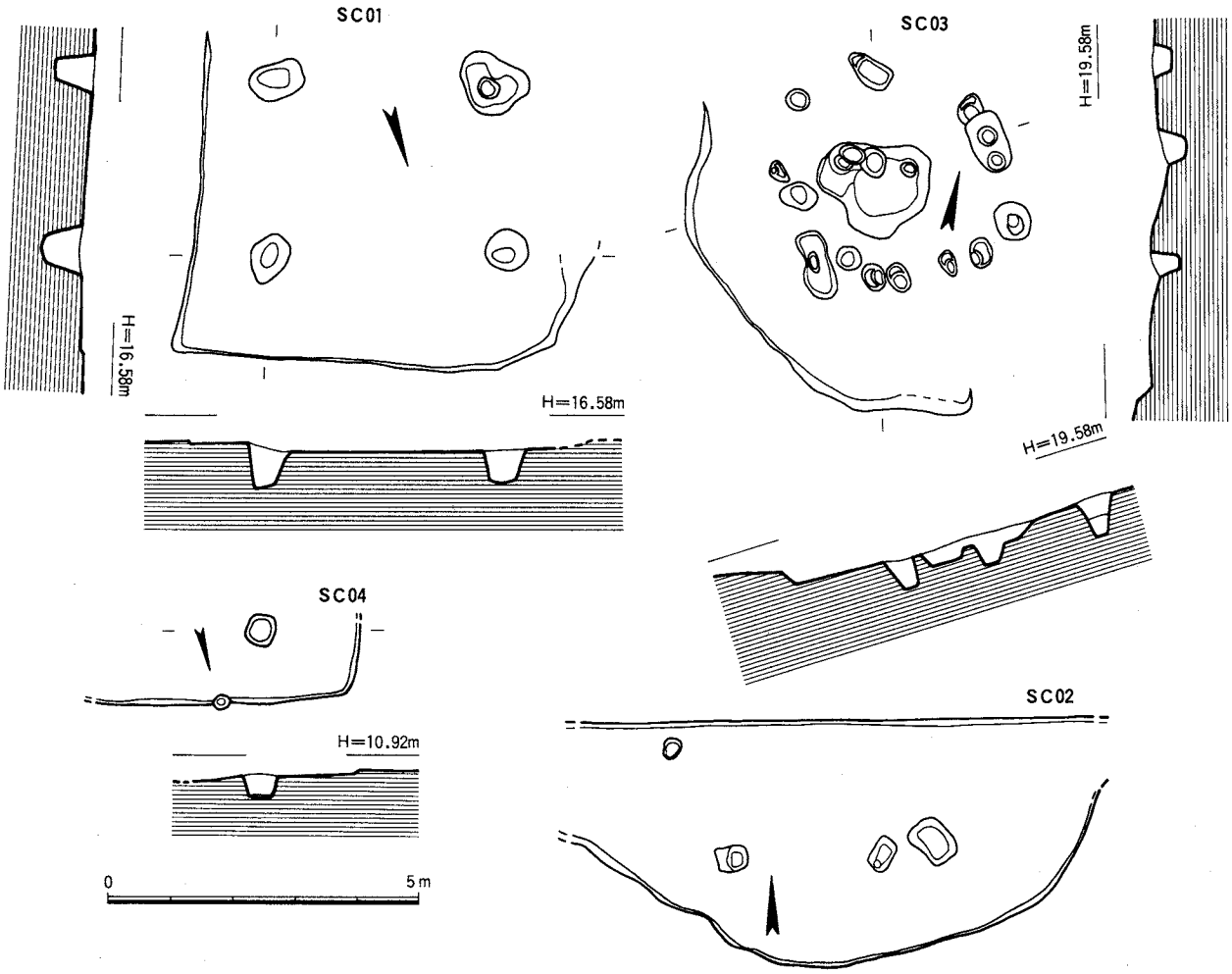


Fig. 124　第Ⅰ区竪穴住居址出土状況実測図（縮尺1/120）

辺が5.70m、短辺3.62mを測り、浅い。遺物は、甕口縁部（**01014**）、壺口縁部（**01015**）、甕蓋（**01016**）等が出土した。時期は、中期前葉の所産と考えられる。

ＳＫ124（Fig.123）調査区西端のＧ16地区で検出された方形の土壙である。規模は、長辺が2.86m、短辺2.66mを測る。遺物は、甕・壺の小破片が出土しており、時期は、中期中葉であろう。

ＳＫ06（Fig.123、126）調査区西端のＨ15地区で検出された長楕円形の土壙である。規模は、長辺が5.16m、短辺1.80mを測り、遺物は、甕口縁部（**01012**）無頸壺蓋（**01013**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

2．竪穴住居址（Fig.124）

ＳＣ01（Fig.124）調査区東南部のＦ17地区で検出された方形住居址で、南・東のコーナーを失う。北辺長は、6.4mを測る。柱穴は４本で、床面等から出土遺物は少量である。後期の所産か。

ＳＣ02（Fig.124、128）調査区西部のＦ17地区で検出された円形住居址で、北側半分が調査区外となっている。遺存は不良である。直径８ｍの規模か。主柱穴は、８本程度と考えられ、現況で４本が確認できる。遺物は、甕口縁部（**01261**、**01262**）、器台（**01263**）等が出土した。時期は、中期と考えられる。

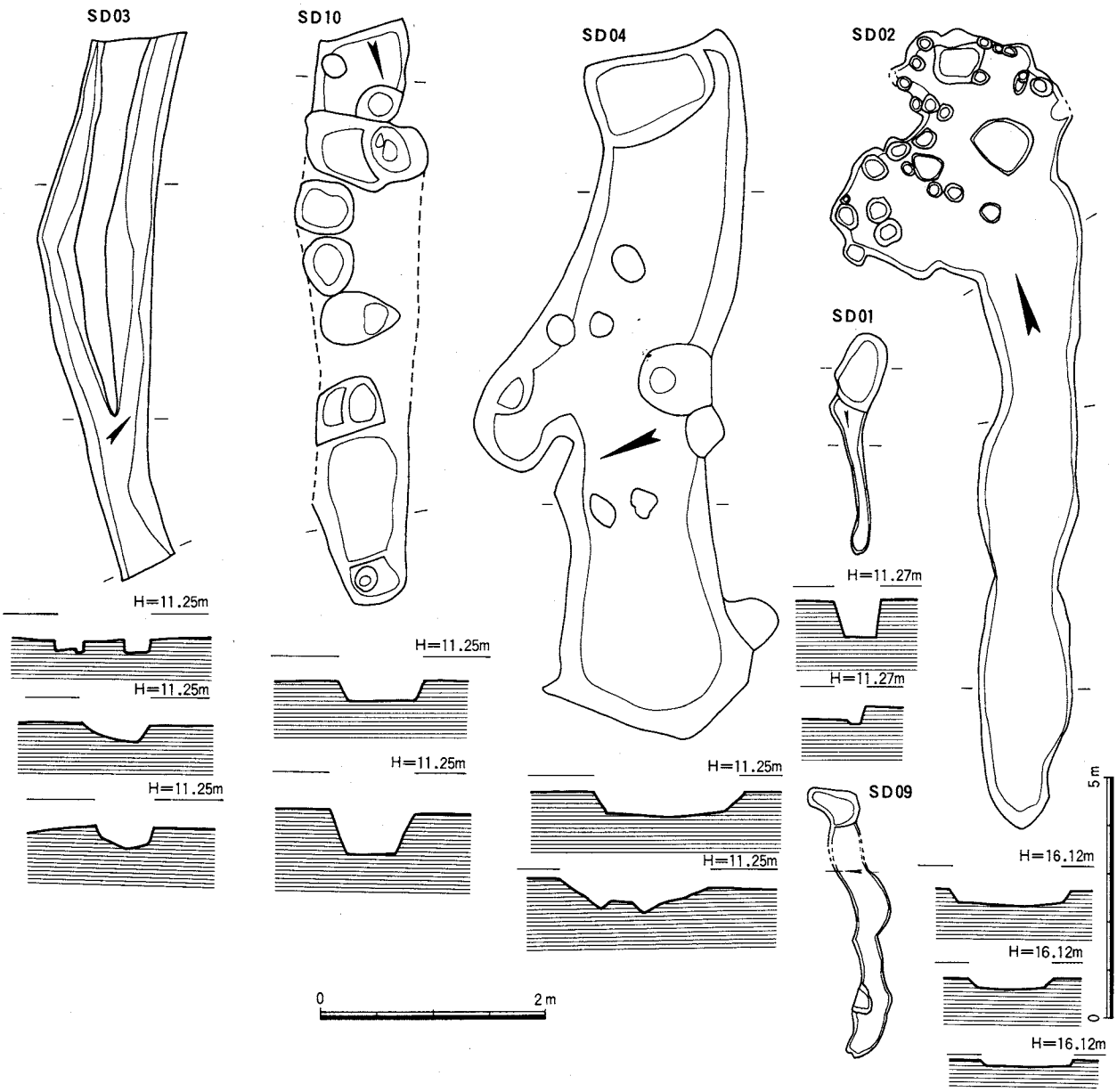


Fig. 125　第Ⅰ区溝遺構出土状況実測図（縮尺1/60・1/140）

ＳＣ03（Fig.124、128）調査区中央部のＦ16地区で検出された円形住居址で、北側半分は削平により壁立上りを失う。直径６ｍ以上の規模か。主柱穴は７～８本で、中央に不整形な土壙をもつ。遺物は、甕口縁部（**01264**）、壺頸部（**01265**、**01266**）、高杯（**01267**）等が出土した。時期は、後期の所産と考えられる。

ＳＣ04（Fig.124）調査区南端部のＦ17地区で検出された方形住居址で、西側のコーナーのみを残す。規模は不明である。遺物は、少量の土器が出土し、中期後半の時期と考えられる。

３．溝状遺構（Fig.125）

ＳＤ01（Fig.125、128）調査区中央部のＦ16地区で検出された溝で、長さ２ｍ、幅0.42ｍ、深さ10～30cmを測る。遺物は、甕口縁部（**01282**）、短頸壺口縁部（**01283**）が出土した。時期は、中期前半と考えられる。

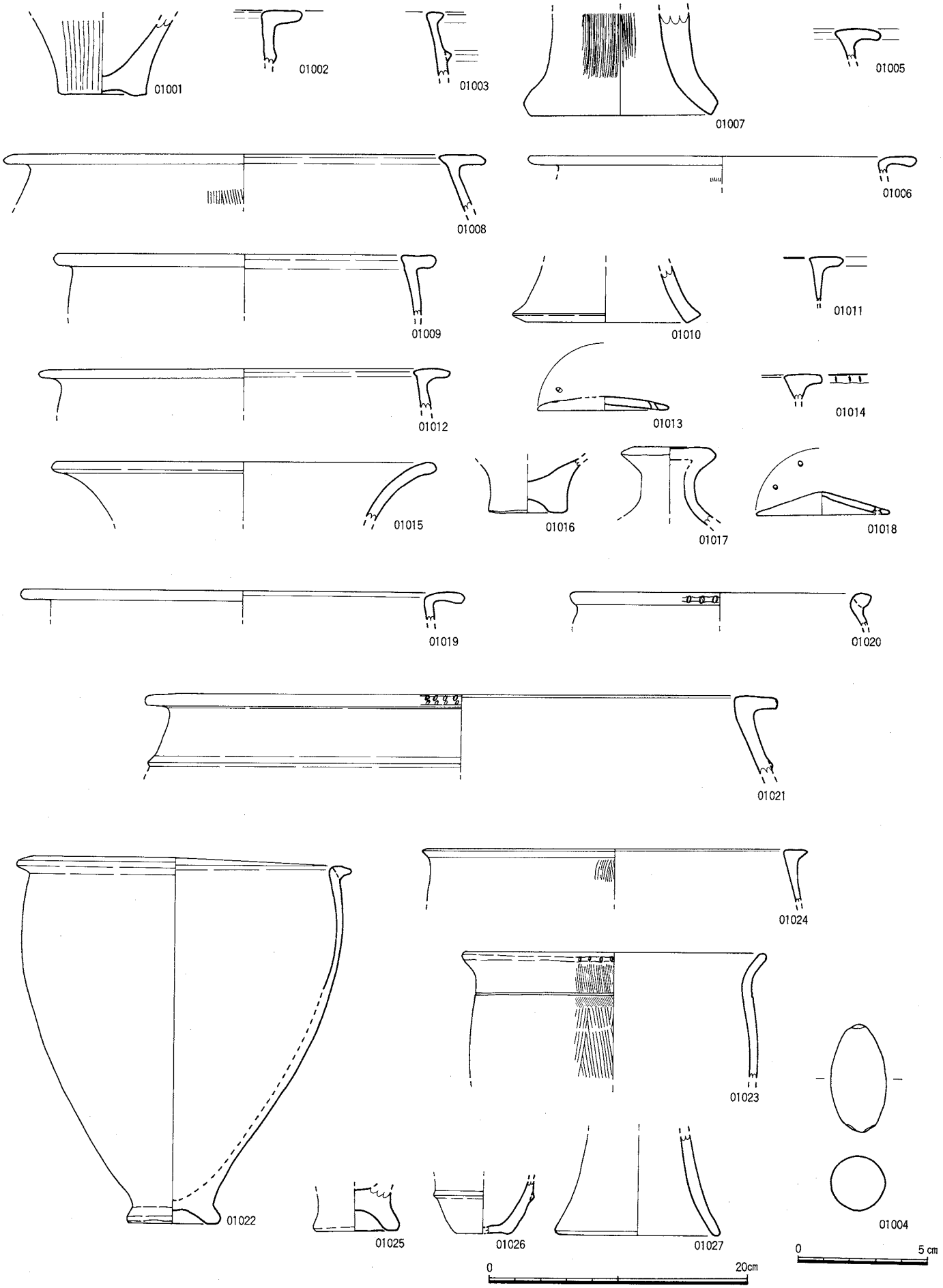


Fig. 126　第Ⅰ区遺構出土遺物実測図 ①（縮尺1/2・1/4）

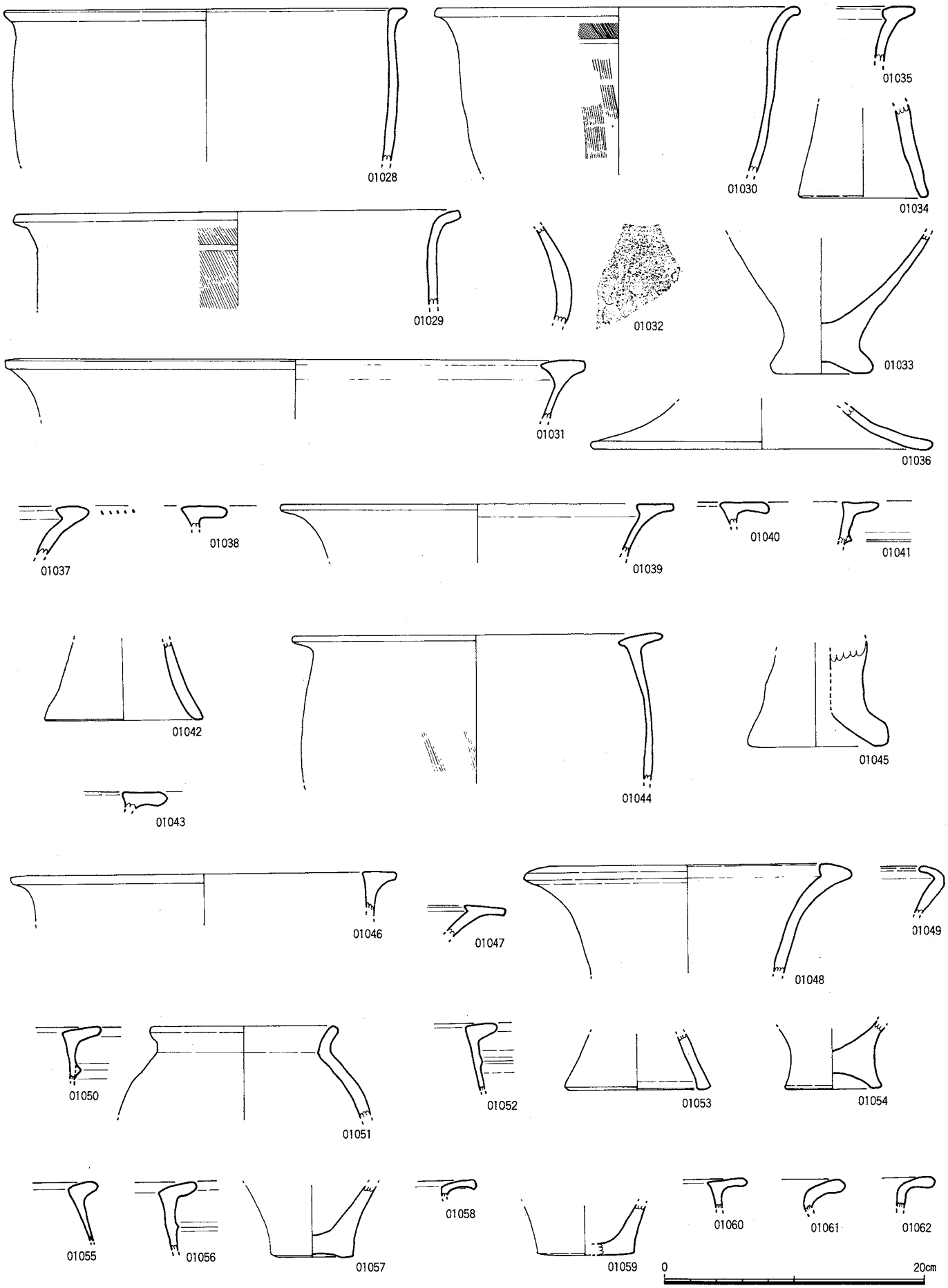


Fig. 127　第Ⅰ区遺構出土遺物実測図 ②（縮尺1/4）

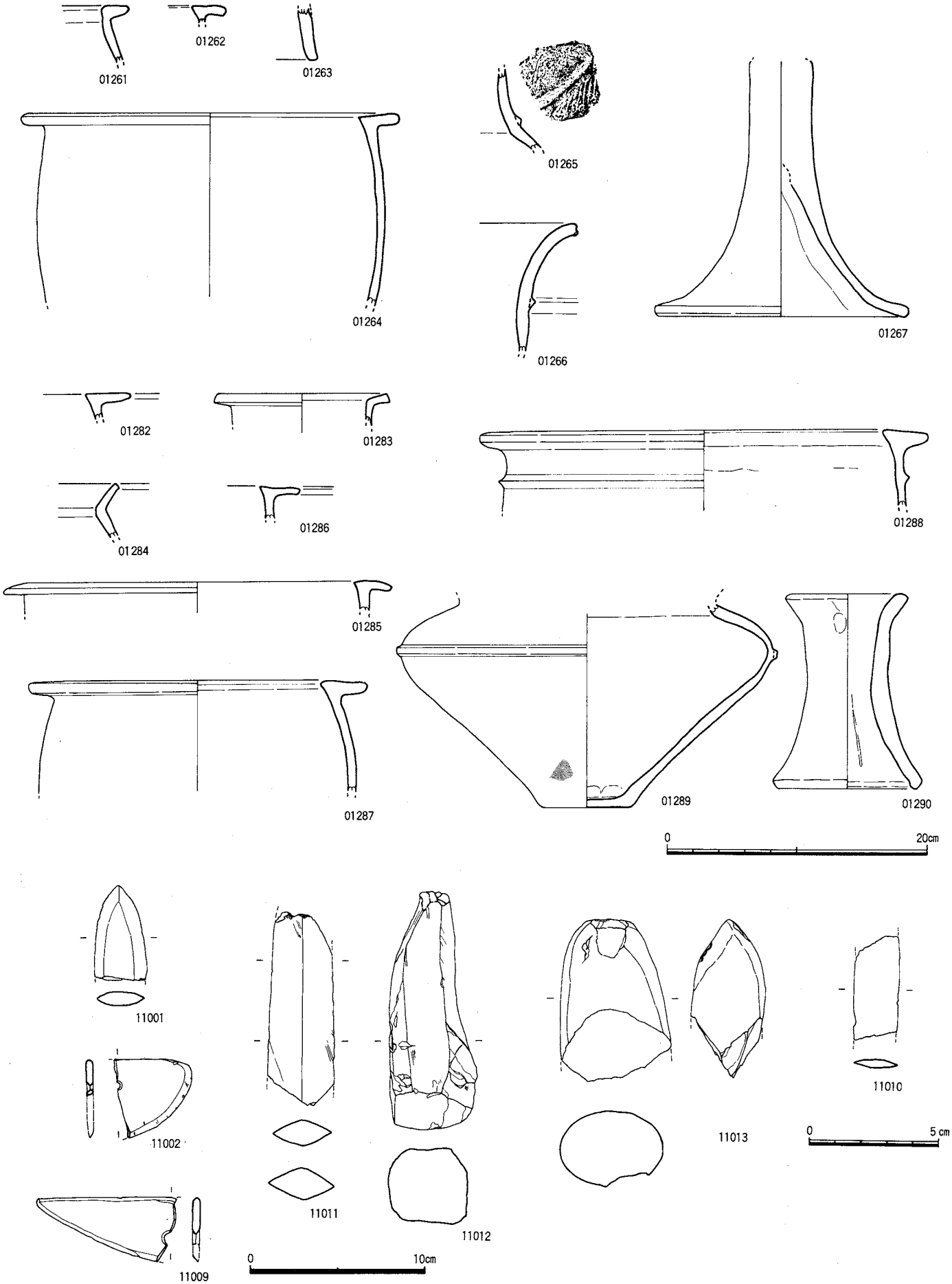


Fig. 128　第Ⅰ区遺構出土遺物実測図 ③（縮尺1/2・1/3・1/4）

ＳＤ02（Fig.125、128）調査区中央部西側のＦ16地区で検出された溝で、長さ16.25ｍ、幅2.02ｍ、深さ0.3ｍ程度の規模である。遺物は、甕口縁部（**01284、01285**）等が出土した。時期は、中期後半と考えられる。

ＳＤ03（Fig.125）調査区南側のＥ17地区で検出された溝で、長さ4.7ｍ、幅0.93ｍ、深さ0.14ｍを測る。遺物は、壺・器台等が出土しており、時期は、前期末と考えられる。

ＳＤ04（Fig.125、128）調査区南側のＦ17地区で検出された溝で、長さ6.1ｍ、幅1.34ｍ、深さ0.21ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01287, 01288**）壺胴部（**01289**）、器台（**01290**）等が出土した。時期は、中期後半と考えられる。

ＳＤ09（Fig.125、128）調査区西側のＧ15地区で検出された溝で、長さ5.5ｍ、幅0.74ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01286**）等が出土した。時期は、中期と考えられる。

ＳＤ10（Fig.125）調査区南側のＥ17地区で検出された溝で、中央に柱穴を複数もつ。長さ5.14ｍ，幅0.82ｍを測る。遺物は、壺形土器等が出土し、時期は、中期後半か。

第二節　第Ⅱ区調査報告（Fig,129～140）（PL.59 ）

１．土　壙（Fig.129）（PL.59 ）

ＳＫ32（Fig.130、137）調査区南側のＧ16地区で検出された小型の楕円形の土壙である。規模は、長辺が0.87ｍ、短辺0.61ｍ、深さ0.28ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01063**）、壺口縁部（**01064**）、器台等が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ37（Fig.130、137）調査区南側のＧ17地区で検出された不整な長方形の土壙である。規模は、長辺が1.04ｍ、短辺0.78ｍ、深さ0.22ｍを測る。遺物は、器台（**01070**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ38（Fig.130、137）調査区南側のＧ16地区で検出された小型の不整形の土壙である。規模は、長辺が1.24ｍ、短辺1.10ｍ、深さ0.56ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01071、01072**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

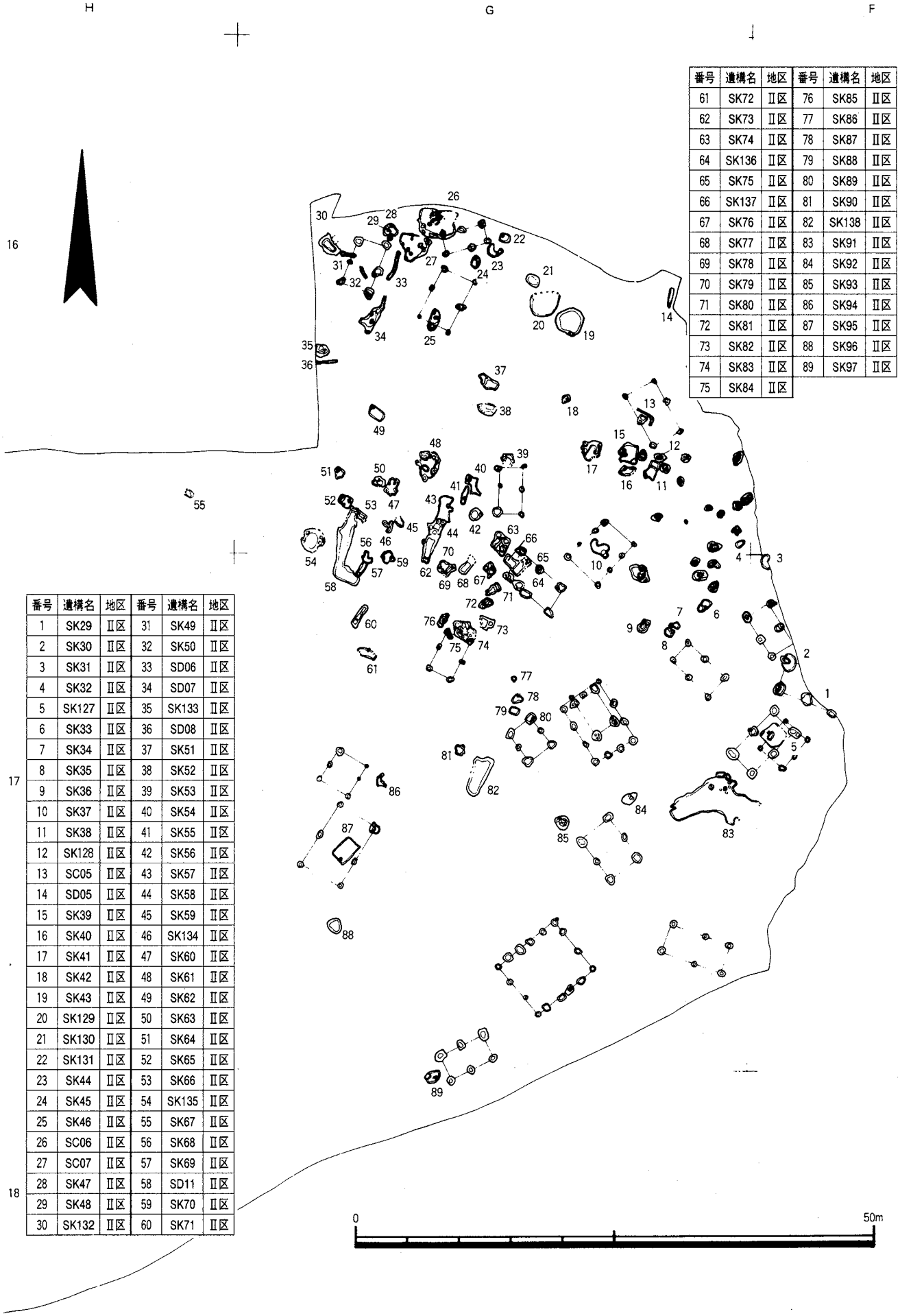
ＳＫ39（Fig.130、137、142）調査区南側のＧ16地区で検出された不整な方形の土壙である。規模は、長辺が1.90ｍ、短辺1.86ｍ、深さ0.35ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01075**）、柱状片刃石斧（**11014**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ41（Fig.130、137）調査区南側のＧ16地区で検出された不整な方形の土壙である。規模は、長辺が1.84ｍ、短辺0.78ｍ、深さ0.36ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01078、01079**）、壺口縁部（**01080**）等が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ42（Fig.130、137）調査区南側のＧ16地区で検出された小型で不整な方形の土壙である。規模は、長辺が0.86ｍ、短辺0.84ｍ、深さ0.52ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01081、01082**）等が出土した。時期は、中期初頭の所産と考えられる。

ＳＫ43（Fig.130）調査区南側のＧ16地区で検出された大型の円形の土壙である。規模は、長辺が2.66ｍ、短辺2.50ｍ、深さ0.56ｍを測る。遺物は、弥生式土器等少量が出土したにとどまった。時期は、弥生時代中期の所産と考えられる。

ＳＫ44（Fig.130、137）調査区南側のＧ16地区で検出された小型で不整な土壙である。規模は、長辺が1.29ｍ、短辺0.82ｍ、深さ0.23ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01088**）等が出土した。時期は、



番号	遺構名	地区	番号	遺構名	地区
1	SK29	Ⅱ区	31	SK49	Ⅱ区
2	SK30	Ⅱ区	32	SK50	Ⅱ区
3	SK31	Ⅱ区	33	SD06	Ⅱ区
4	SK32	Ⅱ区	34	SD07	Ⅱ区
5	SK127	Ⅱ区	35	SK133	Ⅱ区
6	SK33	Ⅱ区	36	SD08	Ⅱ区
7	SK34	Ⅱ区	37	SK51	Ⅱ区
8	SK35	Ⅱ区	38	SK52	Ⅱ区
9	SK36	Ⅱ区	39	SK53	Ⅱ区
10	SK37	Ⅱ区	40	SK54	Ⅱ区
11	SK38	Ⅱ区	41	SK55	Ⅱ区
12	SK128	Ⅱ区	42	SK56	Ⅱ区
13	SC05	Ⅱ区	43	SK57	Ⅱ区
14	SD05	Ⅱ区	44	SK58	Ⅱ区
15	SK39	Ⅱ区	45	SK59	Ⅱ区
16	SK40	Ⅱ区	46	SK134	Ⅱ区
17	SK41	Ⅱ区	47	SK60	Ⅱ区
18	SK42	Ⅱ区	48	SK61	Ⅱ区
19	SK43	Ⅱ区	49	SK62	Ⅱ区
20	SK129	Ⅱ区	50	SK63	Ⅱ区
21	SK130	Ⅱ区	51	SK64	Ⅱ区
22	SK131	Ⅱ区	52	SK65	Ⅱ区
23	SK44	Ⅱ区	53	SK66	Ⅱ区
24	SK45	Ⅱ区	54	SK135	Ⅱ区
25	SK46	Ⅱ区	55	SK67	Ⅱ区
26	SC06	Ⅱ区	56	SK68	Ⅱ区
27	SC07	Ⅱ区	57	SK69	Ⅱ区
28	SK47	Ⅱ区	58	SD11	Ⅱ区
29	SK48	Ⅱ区	59	SK70	Ⅱ区
30	SK132	Ⅱ区	60	SK71	Ⅱ区

番号	遺構名	地区	番号	遺構名	地区
61	SK72	Ⅱ区	76	SK85	Ⅱ区
62	SK73	Ⅱ区	77	SK86	Ⅱ区
63	SK74	Ⅱ区	78	SK87	Ⅱ区
64	SK136	Ⅱ区	79	SK88	Ⅱ区
65	SK75	Ⅱ区	80	SK89	Ⅱ区
66	SK137	Ⅱ区	81	SK90	Ⅱ区
67	SK76	Ⅱ区	82	SK138	Ⅱ区
68	SK77	Ⅱ区	83	SK91	Ⅱ区
69	SK78	Ⅱ区	84	SK92	Ⅱ区
70	SK79	Ⅱ区	85	SK93	Ⅱ区
71	SK80	Ⅱ区	86	SK94	Ⅱ区
72	SK81	Ⅱ区	87	SK95	Ⅱ区
73	SK82	Ⅱ区	88	SK96	Ⅱ区
74	SK83	Ⅱ区	89	SK97	Ⅱ区
75	SK84	Ⅱ区			

Fig. 129　第Ⅱ区遺構全体図 ①（縮尺1/500）

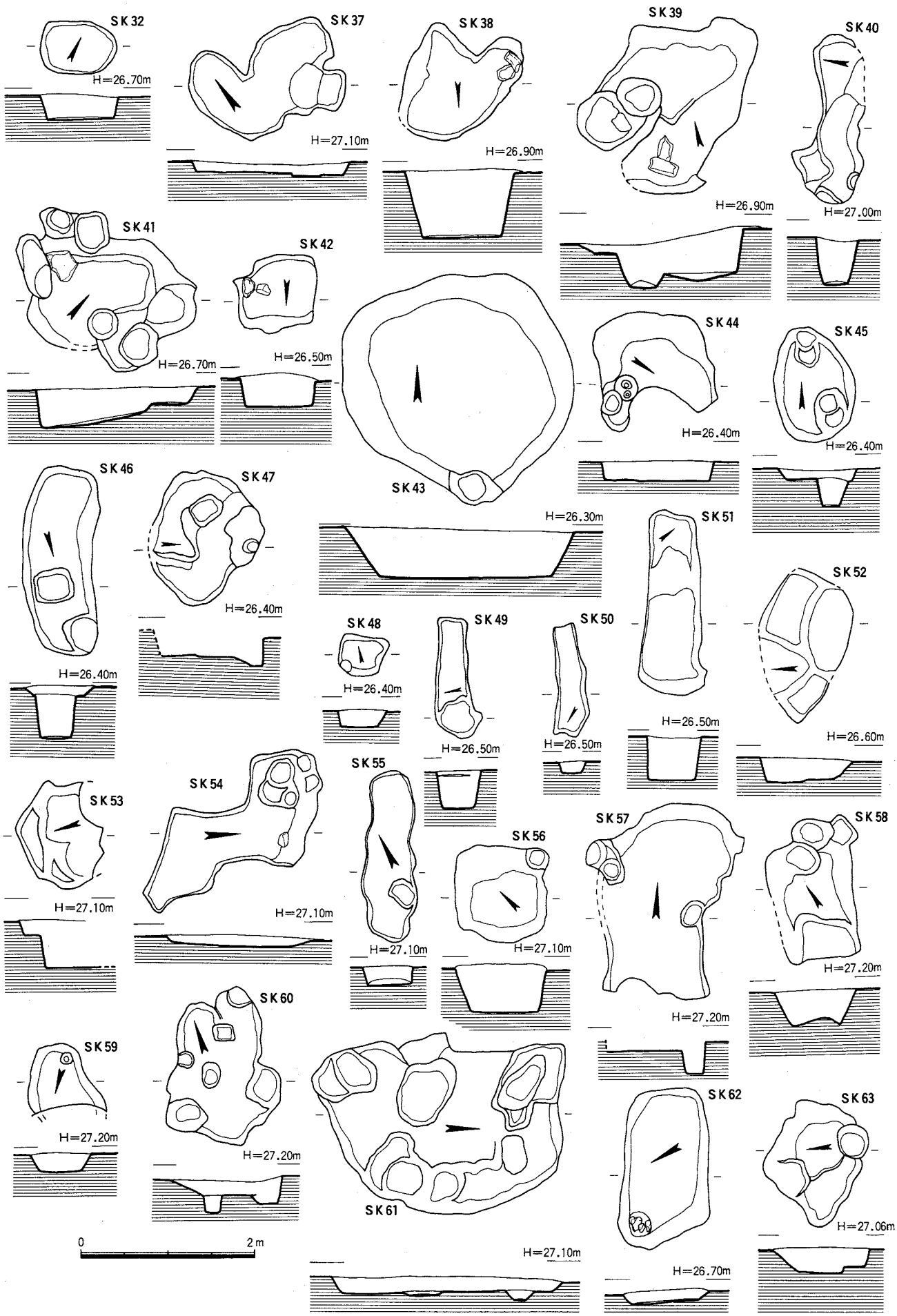


Fig. 130　第Ⅱ区土壙出土状況実測図 ①（縮尺1/60）

中期初頭の所産と考えられる。

ＳＫ45（Fig.130、137）調査区南側のＧ16地区で検出された小型の楕円形土壙である。規模は、長辺が1.30ｍ、短辺0.90ｍ、深さ0.11ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01089**）等が出土した。時期は、中期後頭の所産と考えられる。

ＳＫ46（Fig.130、137）調査区南側のＧ16地区で検出された不整な浅い長方形土壙である。規模は、長辺が2.16ｍ、短辺0.77ｍ、深さ0.11ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01090**、**01091**）、器台（**01092**）等が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ47（Fig.130、137）調査区北側のＧ16地区で検出された浅い隅丸方形土壙である。規模は、長辺が1.34ｍ、短辺1.08ｍ、深さ0.19ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01093**）、甕底部（**01094**）等が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ48（Fig.130、137）調査区北側のＧ16地区で検出された浅い方形の土壙である。規模は、長辺が0.53ｍ、短辺0.44ｍ、深さ0.19ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01095**）、壺底部（**01096**）等が出土した。時期は、中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ49（Fig.130、137）調査区北側のＧ16地区で検出された狭長な長方形の土壙である。規模は、長辺が1.38ｍ、短辺0.50ｍ、深さ0.07ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01100**）、甕蓋（**01101**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ50（Fig.130）調査区北側のＧ16地区で検出された狭長な長方形の土壙である。規模は、長辺が1.23ｍ、短辺0.32ｍ、深さ0.13ｍを測る。遺物は、弥生式土器の小破片が少量出土した。時期は、小破片の特徴から中期の所産と考えられる。

ＳＫ51（Fig.130、137）調査区北側のＧ16地区で検出された不整形な長方形の土壙である。規模は、長辺が2.07ｍ、短辺0.64ｍ、深さ0.49ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01103**）、無頸壺口縁（**01104**）、器台（**01105**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ52（Fig.130、137）調査区北側のＧ16地区で検出された非常に不整形な土壙である。規模は、長辺が1.62ｍ、短辺1.07ｍ、深さ0.21ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01106**）、ミニチュア壺底部（**01107**）、器台（**01105**）等が出土した。時期は、中期初頭の所産と考えられる。

ＳＫ53（Fig.130、137）調査区北側のＧ16地区で検出された不整な円形土壙である。規模は、長辺が1.20ｍ、短辺0.94ｍ、深さ0.63ｍを測る。遺物は、高杯口縁部（**01108**）、小型鉢（**01109**）、器台（**01105**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ54（Fig.130、138）調査区北側のＧ16地区で検出された非常に不整な円形土壙である。規模は、長辺が1.64ｍ、短辺0.60ｍ、深さ0.10ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01110**）等が出土した。時期は、中期初頭の所産と考えられる。

ＳＫ55（Fig.130）調査区北側のＧ16地区で検出された狭長な土壙で、墳墓の可能性もある。規模は、長辺が2.00ｍ、短辺0.56ｍ、深さ0.21ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01111**）、器台（**01112**）等が出土した。時期は、中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ56（Fig.130、138）調査区北側のＧ16地区で検出された不整な円形土壙である。規模は、長辺が1.12ｍ、短辺1.02ｍ、深さ0.46ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01113**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ57（Fig.130、138）調査区北側のＧ16地区で検出された不整形の土壙である。規模は、長辺が2.16ｍ、短辺1.12ｍ、深さ0.10ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01114**）、大型甕口縁部（**01115**）等が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

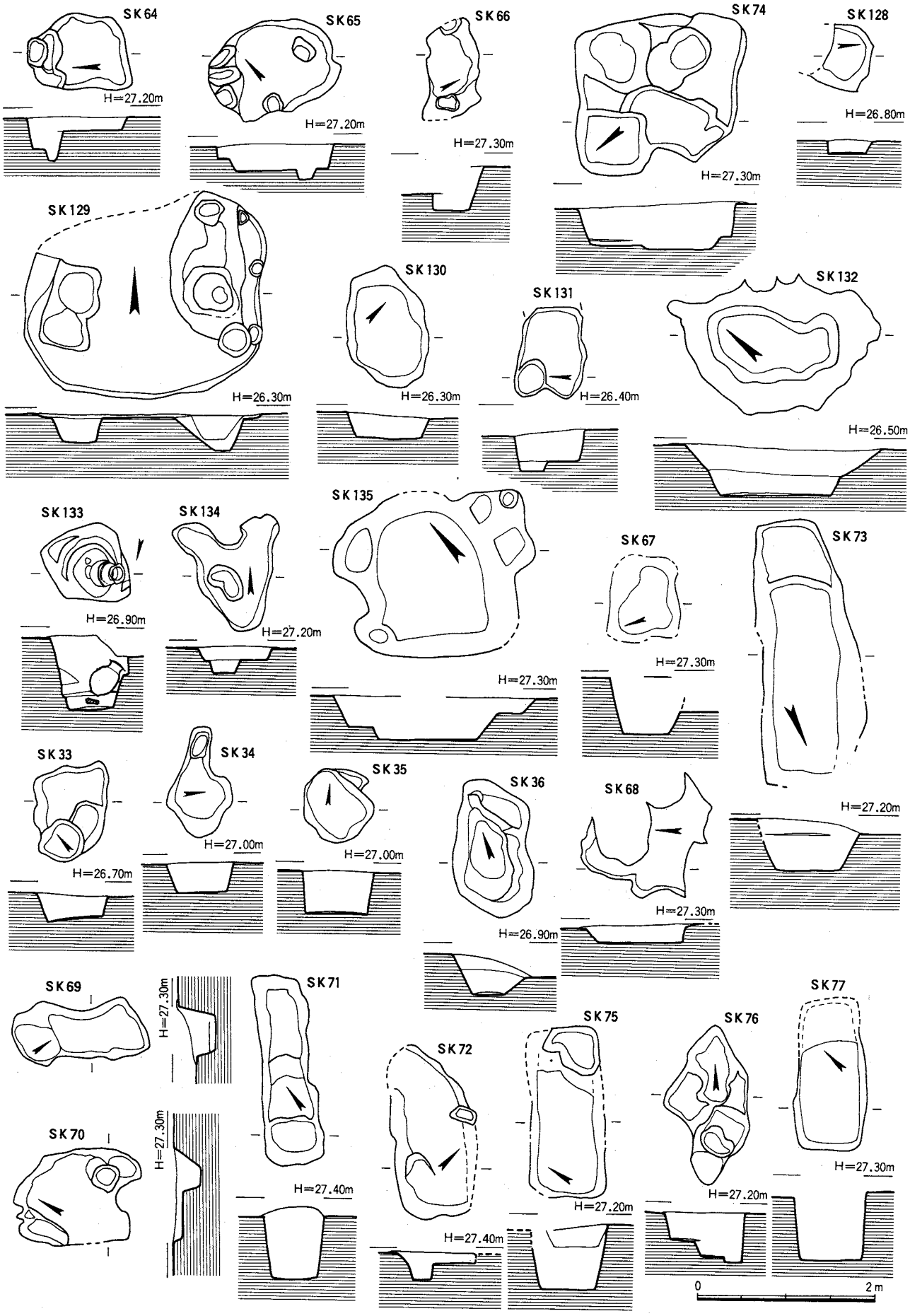


Fig. 131　第Ⅱ区土壙出土状況実測図 ②（縮尺1/60）

ＳＫ58（Fig.130、138）調査区北側のＧ16地区で検出された方形の土壙である。規模は、長辺が1.58m、短辺0.95m、深さ0.32mを測る。遺物は、甕口縁部（**01116、01117**）、高杯口縁部（**01118**）等が出土した。時期は、中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ59（Fig.130）調査区北側のＧ16地区で検出された小型の不整形土壙である。規模は、長辺が0.71m、短辺0.65m、深さ0.18mを測る。遺物は、弥生式土器の破片が少量出土した。時期は、弥生時代であるが時期を特定できない。

ＳＫ60（Fig.130、138）調査区の中央より北側のＧ16地区で検出された方形の土壙である。規模は、長辺が1.77m、短辺1.30m、深さ0.18mを測る。遺物は、甕口縁部（**01120、01121**）等が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ61（Fig.130、138）調査区の中央より北側のＧ16地区で検出された大型の不整楕円形土壙である。規模は、長辺が2.61m、短辺1.87m、深さ0.12mを測る。遺物は、甕口縁部（**01122、01123**）、椀（**01124**）等が出土した。時期は、中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ62（Fig.130）調査区中央より北側のＧ16地区で検出された不整な長方形土壙である。規模は、長辺が1.72m、短辺0.98m、深さ0.11mを測る。遺物は、弥生式土器甕破片が少量出土しており、破片の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ63（Fig.130、138、142）調査区中央より北側のＧ16地区で検出された小型の不整な方形土壙である。規模は、長辺が1.18m、短辺1.02m、深さ0.26mを測る。遺物は、支脚（**01125**）、扁平片刃石斧（**11015**）等が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ64（Fig.131、138）調査区中央よりやや西側のＧ16地区で検出された不整な長方形の土壙である。その規模は、長辺が1.10m、短辺0.80m、深さ0.15mを測る。遺物は、丹塗の朝顔形口縁を有する壺（**01126**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ65（Fig.131、138）調査区中央よりやや西側のＧ16地区で検出された不整な楕円形の土壙である。ＳＫ64の南側に隣接している。その規模は、長辺が1.43m、短辺0.98m、深さ0.27mを測る。遺物は、甕口縁部（**01127**）、器台（**01128**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ66（Fig.131、138）調査区中央よりやや西側のＧ16地区で検出された不整な長方形の土壙である。ＳＫ65の南側に隣接している。その規模は、長辺が0.99m、短辺0.60m、深さ0.49mを測る。遺物は、甕口縁部（**01129**）、高杯脚部（**01130、01131**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ74（Fig.131、139）調査区中央のＧ16地区で検出された不整な大型の長方形の土壙である。ＳＫ65の東側に位置している。その規模は、長辺が1.77m、短辺が1.74m、深さ0.52mを測る。

遺物は、甕口縁部（**01148**）、ミニチュア鉢（**01149**）、器台（**01150**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ128（Fig.131、139）調査区東端部のＧ16地区で検出された不整な小型の長方形土壙である。ＳＫ74の東側に位置している。その規模は、長辺が0.73m、短辺が0.48m、深さ0.13mを測る。

遺物は、甕口縁部（**01073、01074**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ129（Fig.131、139）調査区北端部の東側Ｇ16地区で検出された不整な大型の隅丸長方形土壙である。ＳＫ74の北西側に位置している。その規模は、長辺が2.62m、短辺が2.09m、深さ0.09mを測る。

遺物は、甕口縁部（**01083**）、器台（**01084**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ130（Fig.131、140）調査区北端部の東側Ｇ16地区で検出された小型の不整円形の土壙である。ＳＫ74の北側に隣接している。その規模は、長辺が1.36ｍ、短辺が0.90ｍ、深さ0.24ｍを測る。

遺物は、甕口縁部（**01085**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ131（Fig.131、140）調査区北端部の東側Ｇ16地区で検出された小型の不整円形の土壙である。ＳＫ130の北西側に隣接している。その規模は、長辺が1.03ｍ、短辺が0.78ｍ、深さ0.35ｍを測る。

遺物は、器台（**01086、01087**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ132（Fig.131、140）調査区北西端部の東側Ｇ16地区で検出された大型の不整形の土壙である。ＳＫ130の西側に接している。その規模は、長辺が2.18ｍ、短辺が1.36ｍ、深さ0.51ｍを測る。

遺物は、甕口縁部（**01197、01098、01099**）等の土器類が相当量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ133（Fig.131、137）調査区北西端部のＧ16地区で検出された大型の方形の土壙である。ＳＫ132の南側に位置している。井戸としての可能性もある。内部に壺（瓢形土器）１個が投入されている。その規模は、長辺が0.83ｍ、短辺が0.83ｍ、深さ0.82ｍを測る。

遺物は、瓢形の壺（**01102**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ134（Fig.131）調査区中央部のＧ16地区で検出された小型の不整形の土壙である。ＳＫ133の南東側に位置している。その規模は、長辺が0.98ｍ、短辺が0.82ｍ、深さ0.28ｍを測る。

遺物は、甕口縁部（**01119**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ135（Fig.131、138、142）調査区中央部西側のＧ16地区で検出された大型の不整な隅丸長方形の土壙である。ＳＫ134の西側に位置している。その規模は、長辺が1.74ｍ、短辺が1.73ｍ、深さ0.46ｍを測る。

遺物は、甕口縁部（**01132**）、壺口縁部（**01133**）、滑石製石錘（**11016**）等が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ67（Fig.131）調査区中央部西側のＨ16地区で検出された不整形の土壙である。ＳＫ135の西側に位置している。その規模は、長辺が0.88ｍ、短辺が0.78ｍ、深さ0.63ｍを測る。

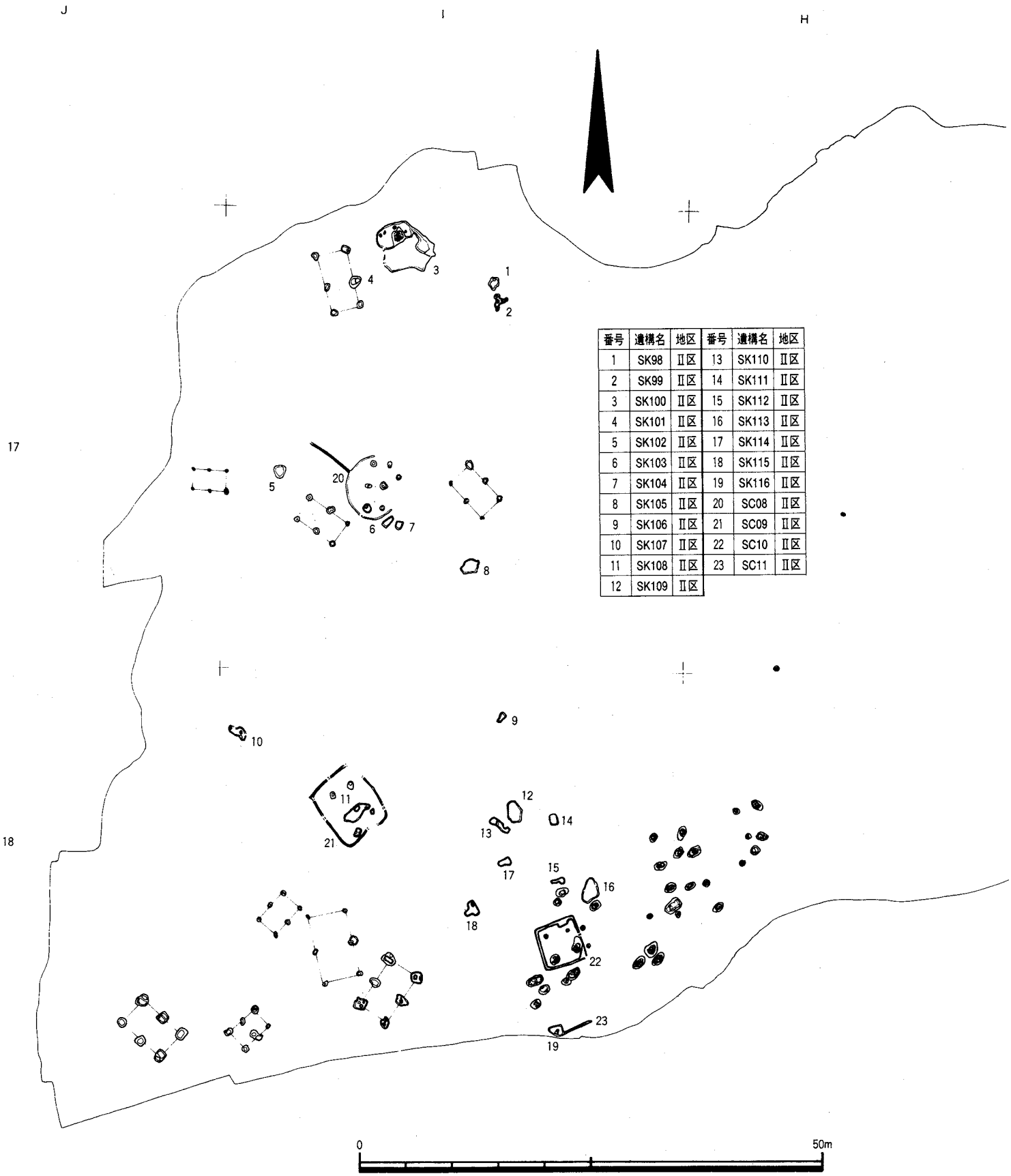
遺物は、手捏鉢（**01134**）、樽形土器（**01135**）等が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ73（Fig.131、138）調査区中央部のＧ16・17地区で検出された不整長方形の大型土壙である。その規模は、長辺が3.00ｍ、短辺が1.07ｍ、深さ0.55ｍを測る。

遺物は、甕口縁部（**01139、01140、01142、01143、01144、01145、01146**）、甕底部（**01147**）、壺口縁部（**01139**）、太型蛤刃石斧（**11017**）、扁平片刃石斧（**11018**）等が出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ33（Fig.131、137）調査区東端部のＧ17地区で検出された不整長方形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.04ｍ、短辺が0.78ｍ、深さ0.22ｍを測る。

遺物は、甕口縁部（**01065、01066**）等が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の



番号	遺構名	地区	番号	遺構名	地区
1	SK98	Ⅱ区	13	SK110	Ⅱ区
2	SK99	Ⅱ区	14	SK111	Ⅱ区
3	SK100	Ⅱ区	15	SK112	Ⅱ区
4	SK101	Ⅱ区	16	SK113	Ⅱ区
5	SK102	Ⅱ区	17	SK114	Ⅱ区
6	SK103	Ⅱ区	18	SK115	Ⅱ区
7	SK104	Ⅱ区	19	SK116	Ⅱ区
8	SK105	Ⅱ区	20	SC08	Ⅱ区
9	SK106	Ⅱ区	21	SC09	Ⅱ区
10	SK107	Ⅱ区	22	SC10	Ⅱ区
11	SK108	Ⅱ区	23	SC11	Ⅱ区
12	SK109	Ⅱ区			

Fig. 132　第Ⅱ区遺構全体図 ②（縮尺1/556）

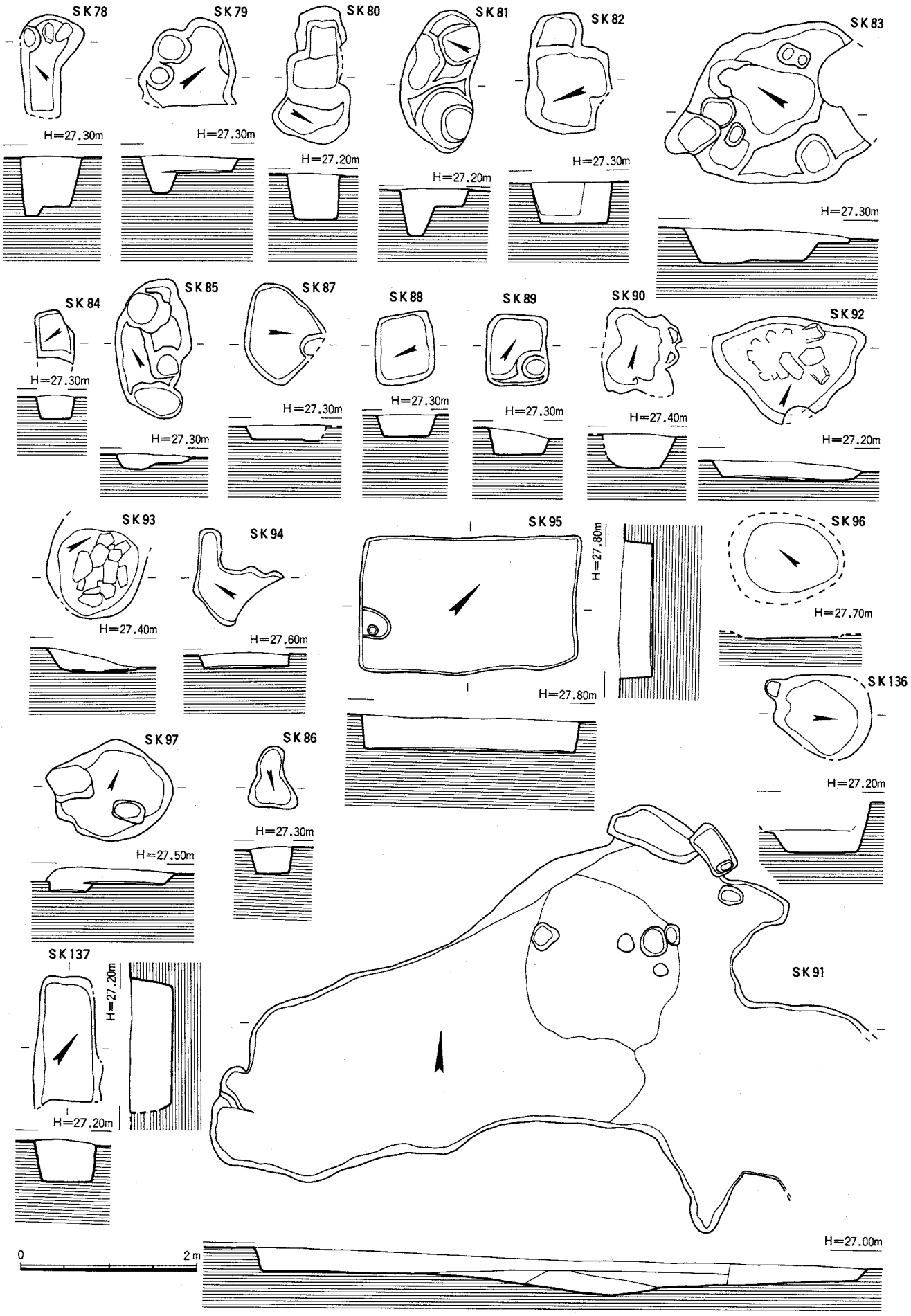


Fig. 133　第Ⅱ区土壙出土状況実測図 ③（縮尺1/60）

所産と考えられる。

ＳＫ34（Fig.131）調査区東端部のＧ17地区で検出された不整形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.24ｍ、短辺が0.73ｍ、深さ0.32ｍを測る。ＳＫ33の西側に隣接している。

遺物は、弥生式土器等が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ35（Fig.131、137）調査区東端部のＧ17地区で検出された不整円形の小型土壙である。その規模は、長辺が0.84ｍ、短辺が0.76ｍ、深さ0.46ｍを測る。ＳＫ34の西側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01067、01068**）等が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ36（Fig.131、137）調査区東端部のＧ17地区で検出された楕円形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.31ｍ、短辺が0.87ｍ、深さ0.45ｍを測る。ＳＫ35の西側に隣接している。

遺物は、小型鉢（**01069**）等が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ68（Fig.131、138）調査区西端部のＧ17地区で検出された不整形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.16ｍ、短辺が1.07ｍ、深さ0.20ｍを測る。ＳＫ73の西側に位置している。

遺物は、投弾（**01136**）等の土器類が少量出土しており、出土遺物の特徴から時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ69（Fig.131）調査区西端部のＧ17地区で検出された不整長方形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.40ｍ、短辺が0.53ｍ、深さ0.41ｍを測る。ＳＫ68の南側に隣接している。

遺物は、弥生式土器等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ70（Fig.131、138）調査区西端部のＧ17地区で検出された不整方形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.10ｍ、短辺が1.05ｍ、深さ0.19ｍを測る。ＳＫ69の東側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01137**）、甕底部（**01138**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ71（Fig.131）調査区西端部のＧ17地区で検出された不整長方形の土壙である。形状から墳墓の可能性もある。その規模は、長辺が2.10ｍ、短辺が0.68ｍ、深さ0.68ｍを測る。ＳＫ70の南側に隣接している。

遺物は、弥生式土器等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時代は弥生時代と考えられるが、時期を限定できない。

ＳＫ72（Fig.131）調査区西端部のＧ17地区で検出された不整方形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.95ｍ、短辺が0.89ｍ、深さ0.11ｍを測る。ＳＫ71の南側に隣接している。

遺物は、弥生式土器等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ75（Fig.131、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された不整長方形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.90ｍ、短辺が0.83ｍ、深さ0.72ｍを測る。ＳＫ73の東側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01151**）、支脚（**01152**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ76（Fig.131）調査区中央部のＧ17地区で検出された不整方形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.03ｍ、短辺が0.90ｍ、深さ0.50ｍを測る。ＳＫ75の西側に隣接している。

遺物は、弥生式土器の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ77（Fig.131、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された不整長方形の土壙である。その規模は、長辺が1.70ｍ、短辺が0.80ｍ、深さ0.76ｍを測る。ＳＫ73の東側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01159、01160**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ78（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された不整長方形の土壙である。その規模は、長辺が1.18ｍ、短辺が0.70ｍ、深さ0.56ｍを測る。ＳＫ77の西側に隣接している。

遺物は、甕底部（**01161**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ79（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された不整円形の土壙である。その規模は、長辺が1.10ｍ、短辺が1.00ｍ、深さ0.14ｍを測る。ＳＫ78の西側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01162、01163**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ80（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された不整長方形の土壙である。その規模は、長辺が1.55ｍ、短辺が0.61ｍ、深さ0.51ｍを測る。ＳＫ77の南東側に位置している。

遺物は、甕口縁部（**01164**）、壺口縁部（**01165**）、袋状口縁壺（**01166**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は後期初頭の所産と考えられる。

ＳＫ81（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された不整楕円形の土壙である。その規模は、長辺が1.54ｍ、短辺が0.79ｍ、深さ0.49ｍを測る。ＳＫ80の東側に位置している。

遺物は、甕口縁部（**01167**）、器台（**01168**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ82（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された隅丸長方形の土壙である。その規模は、長辺が1.40ｍ、短辺が0.94ｍ、深さ0.46ｍを測る。ＳＫ81の南側に位置している。

遺物は、壺底部（**01169**）、器台（**01170**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ83（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された不定形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.85ｍ、短辺が1.78ｍ、深さ0.35ｍを測る。ＳＫ82の南側に位置している。

遺物は、甕口縁部（**01171、01172**）、甕底部（**01173**）、土錘（**01174**）等の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ84（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された方形の小型土壙である。その規模は、長辺が0.45ｍ、短辺が0.43ｍ、深さ0.23ｍを測る。ＳＫ83の西側に位置している。

遺物は、弥生式土器高杯の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ85（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された楕円形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.61ｍ、短辺が0.87ｍ、深さ0.17ｍを測る。ＳＫ84の北側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01175**）、壺口縁部（**01176**）、器台（**01177**）等の破片が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ87（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された方形の小型土壙である。その規模は、長辺が0.92ｍ、短辺が0.90ｍ、深さ0.15ｍを測る。ＳＫ84の東側に隣接している。

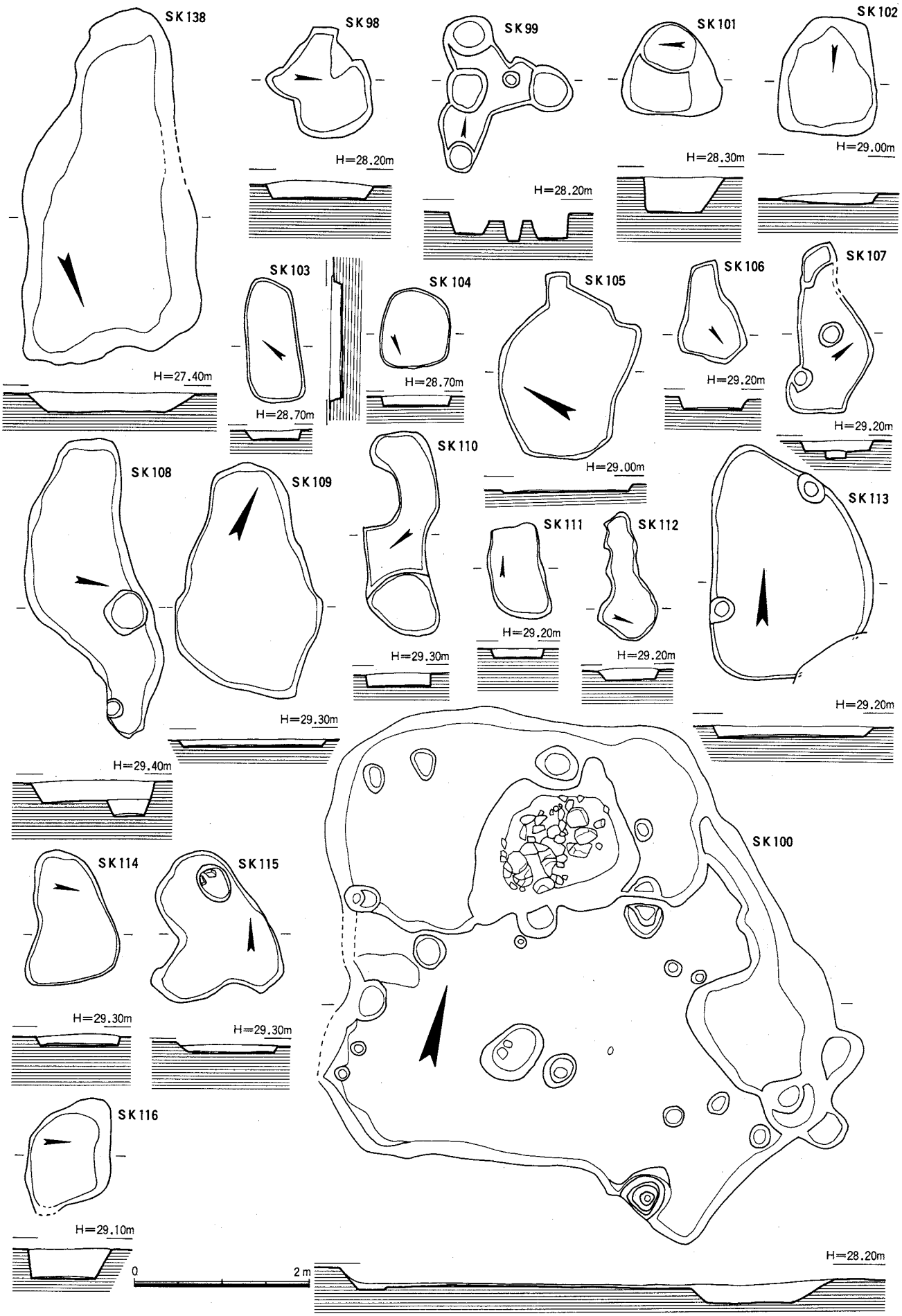


Fig. 134　第Ⅱ区土壙出土状況実測図 ④（縮尺1/60）

遺物は、甕口縁部（**01179**）等の破片が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ88（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された長方形の小型土壙である。その規模は、長辺が0.81ｍ、短辺が0.69ｍ、深さ0.24ｍを測る。ＳＫ87の南側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01180**）等の破片が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ89（Fig.133）調査区中央部のＧ17地区で検出された長方形の小型土壙である。その規模は、長辺が0.80ｍ、短辺が0.70ｍ、深さ0.30ｍを測る。ＳＫ88の東側に隣接している。

遺物は、壺、器台等の破片が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期初頭の所産と考えらよう。

ＳＫ90（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された方形の小型土壙である。その規模は、長辺が0.84ｍ、短辺が0.82ｍ、深さ0.34ｍを測る。ＳＫ88の南西側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01181**）、壺底部（**01182**）、使用痕のある剝片（**11019**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ92（Fig.133、140）調査区中央部のＧ17地区で検出された不定形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.72ｍ、短辺が1.21ｍ、深さ0.18ｍを測る。ＳＫ90の東側に位置している。

遺物は、甕口縁部（**01191、01192**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ93（Fig.133）調査区中央部のＧ17地区で検出された円形の小型土壙である。その規模は、長辺が0.90ｍ、短辺が0.87ｍ、深さ0.24ｍを測る。ＳＫ92の西側に位置している。

遺物は、弥生式土器が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期初頭の所産と考えられよう。

ＳＫ94（Fig.133、140）調査区中央部西側のＧ17地区で検出された不定形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.00ｍ、短辺が0.62ｍ、深さ0.15ｍを測る。ＳＫ90の西側に位置している。

遺物は、甕口縁部（**01191**），壺口縁部（**01194**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ95（Fig.133、140）調査区中央部西側のＧ17地区で検出された長方形の大型土壙である。その規模は、長辺が2.47ｍ、短辺が1.56ｍ、深さ0.37ｍを測る。ＳＫ94の南側に位置している。

遺物は、甕口縁部（**01195、01196**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前期の所産と考えられる。

ＳＫ96（Fig.133）調査区中央部西側のＧ17地区で検出された楕円形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.32ｍ、短辺が1.03ｍ、深さ0.08ｍを測る。ＳＫ95の南側に位置している。

遺物は、弥生式土器壺等の破片が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ97（Fig.133、140）調査区中央部西側のＧ17地区で検出された方形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.12ｍ、短辺が1.10ｍ、深さ0.12ｍを測る。ＳＫ96の南側に位置している。

遺物は、甕口縁部（**01197、01198**）、壺口縁部（**01199**）、蓋（**01200**）、扁平片刃石斧（**11021**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ86（Fig.133、139）調査区中央部西側のＧ17地区で検出された不定形の小型土壙である。その規模は、長辺が0.70ｍ、短辺が0.47ｍ、深さ0.26ｍを測る。ＳＫ87の北側に位置している。

遺物は、壺口縁部（**01178**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ136（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された円形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.12ｍ、短辺が1.00ｍ、深さ0.57ｍを測る。ＳＫ75の西側に隣接している。

遺物は、器台（**01153**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ137（Fig.133、139）調査区中央部のＧ17地区で検出された不定形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.43ｍ、短辺が0.69ｍ、深さ0.46ｍを測る。ＳＫ136の北側に隣接している。

遺物は、甕口縁部（**01154、01155**）、甕底部（**01156**）、壺口縁部（**01157**）、支脚（**01158**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ91（Fig.133）調査区中央部東側のＧ17地区で検出された不定形の大型土壙である。その規模は、長辺が7.00ｍ、短辺が3.14ｍ、深さ0.27ｍを測る。ＳＫ92の東側に隣接している。

遺物は、弥生式土器の破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時代は弥生時代の所産と考えられるが時期は特定できない。

ＳＫ138（Fig.134、139、140、142）調査区中央部のＧ17地区で検出された大型の長方形土壙である。その規模は、長辺が3.73ｍ、短辺が1.95ｍ、深さ0.02ｍを測る。ＳＫ90の東側に隣接する。

遺物は、甕口縁部（**01183,01184**）、丹塗壺口縁部（**01185**）、高杯（**01186**）、手捏鉢（**01187**）、小型鉢（**01188**）、器台（**01189**）、支脚（**01190**）、柱状片刃石斧（**11020**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ98（Fig.134、140）調査区西端部のＩ17地区で検出された小型の不定形土壙である。その規模は、長辺が1.17ｍ、短辺が0.92ｍ、深さ0.14ｍを測る。ＳＫ99の北側に隣接する。

遺物は、壺底部（**01201**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後葉の所産と考えられる。

ＳＫ99（Fig.134、140）調査区西端部のＩ17地区で検出された小型の不定形土壙である。その規模は、長辺が1.38ｍ、短辺が1.15ｍ、深さ0.30ｍを測る。ＳＫ98の南側に隣接する。

遺物は、甕口縁部（**01202、01203**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ101（Fig.134）調査区西端部のＩ17地区で検出された小型の円形土壙である。その規模は、長辺が1.06ｍ、短辺が1.04ｍ、深さ0.40ｍを測る。ＳＫ99の西側に隣接する。

遺物は、弥生式土器破片等が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ102（Fig.134）調査区西端部のＩ17地区で検出された小型の円形土壙である。その規模は、長辺が1.35ｍ、短辺が1.10ｍ、深さ0.10ｍを測る。ＳＫ101の南側に位置する。

遺物は、弥生式土器破片等が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＫ103（Fig.134、141）調査区西端部のＩ17地区で検出された小型の長方形土壙である。その規模は、長辺が1.36ｍ、短辺が0.60ｍ、深さ0.10ｍを測る。ＳＫ102の東側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01213**）、甕底部（**01214**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ104（Fig.134、141）調査区西端部のＩ17地区で検出された小型の円形土壙である。その規模

は、長辺が0.92m、短辺が0.80m、深さ0.10mを測る。ＳＫ103の西側に位置する。

遺物は、鉢底部（**01215**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ105（Fig.134、141）調査区西端部のＩ17地区で検出された楕円形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.90m、短辺が1.40m、深さ0.07mを測る。ＳＫ104の東側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01216**）、高杯坏部（**01217**）、器台（**01218**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ106（Fig.134）調査区西端部のＩ18地区で検出された不定形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.10m、短辺が0.76m、深さ0.15mを測る。ＳＫ105の南側に位置する。

遺物は、弥生式土器破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期中葉の所産と考えられる。

ＳＫ107（Fig.134）調査区西端部のＩ18地区で検出された不定形の土壙である。その規模は、長辺が1.96m、短辺が0.80m、深さ0.10mを測る。ＳＫ106の西側に位置する。

遺物は、弥生式土器破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＫ108（Fig.134、141）調査区西端部のＩ18地区で検出された長方形の大型土壙である。その規模は、長辺が3.40m、短辺が1.38m、深さ0.23mを測る。ＳＫ107の南東側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01219**）、高器台部（**01220**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ109（Fig.134）調査区西端部のＩ18地区で検出された楕円形の大型土壙である。その規模は、長辺が2.50m、短辺が1.68m、深さ0.08mを測る。ＳＫ108の東側に位置する。

遺物は、弥生式土器破片が少量出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ110（Fig.134、141）調査区西端部のＩ18地区で検出された不整形の小型土壙である。その規模は、長辺が2.34m、短辺が0.73m、深さ0.13mを測る。ＳＫ109の西側に位置する。

遺物は、器台（**01221、01222**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ111（Fig.134、141）調査区西端部のＩ18地区で検出された長方形土壙である。その規模は、長辺が1.06m、短辺が0.63m、深さ0.10mを測る。ＳＫ109の東側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01223**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期末の所産と考えられる。

ＳＫ112（Fig.134、141）調査区西端部のＩ18地区で検出された小型の不整形土壙である。その規模は、長辺が1.46m、短辺が0.65m、深さ0.10mを測る。ＳＫ111の南側に位置する。

遺物は、壺底部（**01224**）、器台（**01225**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ113（Fig.134、141）調査区西端部のＩ18地区で検出された大型の楕円形土壙である。その規模は、長辺が2.68m、短辺が1.81m、深さ0.13mを測る。ＳＫ111の南側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01226**）、甕底部（**01227**）、蓋（**01228**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期末の所産と考えられる。

ＳＫ100（Fig.134、140、141）調査区西端部の北端Ｉ17地区で検出された大型の不定形土壙である。

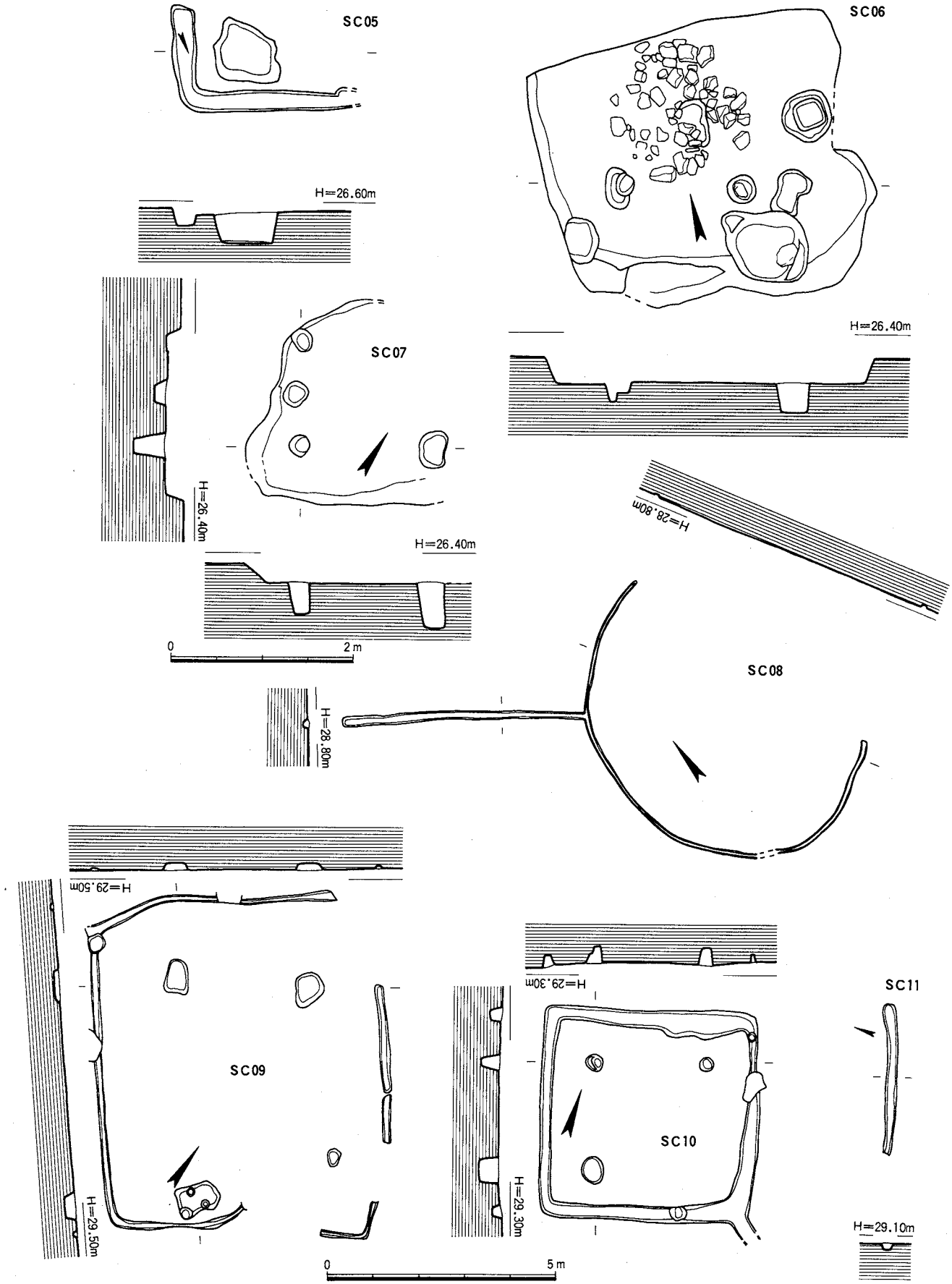


Fig. 135第Ⅱ区竪穴住居址出土状況実測図（縮尺1/60・1/120）

その規模は、長辺が5.61m、短辺が5.10m、深さ0.20mを測る。ＳＫ98の西側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01204、01205**）、甕胴部（**01206**）、樽形土器（**01207**）、朝鮮系（**01208**）等甕、壺胴部（**01209**）、高杯（**01210**）、器台（**01211、01212**）が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ114（Fig.134、141）調査区西端部のＩ18地区で検出された小型の楕円形土壙である。その規模は、長辺が1.51m、短辺が0.93m、深さ0.10mを測る。ＳＫ112の西側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01229**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ115（Fig.134、141）調査区西端部のＩ18地区で検出された不定形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.55m、短辺が1.14m、深さ0.07mを測る。ＳＫ114の南側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01230**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＫ116（Fig.134、141）調査区西端部の南端Ｉ18地区で検出された長方形の小型土壙である。その規模は、長辺が1.07m、短辺が0.97m、深さ0.32mを測る。ＳＫ13の南側に位置する。

遺物は、甕口縁部（**01231**）等が出土しており、出土遺物の特徴から、時期は中期後半の所産と考えられる。

2．竪穴住居址（Fig.135）

ＳＣ05（Fig.135、142）調査区東端部のＧ16地区で検出された方形住居址である。全体に削平が著しく、東側のコーナーの壁溝の一部を残すのみである。深さは、0.05mを測る。

遺物は、甕口縁部（**01268**）、甕胴部（**01269**）、壺胴部（**01270**）、無頸壺蓋（**01271**）等が出土し、時期は前期末の所産と考えられる。

ＳＣ06（Fig.135）調査区北端部のＧ16地区で検出された方形住居址である。全体に削平が著しい。規模は、長辺が3.36m、短辺が2.90m、深さ0.28mを測る。

遺物は、弥生式土器の破片が少量出土し、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＣ07（Fig.135、142）調査区北端部のＧ16地区で検出された方形をなすと考えられる住居址である。全体に削平が著しい。その規模は、長辺が2.30m、短辺が2.25m、深さ0.05mを測る。

遺物は、甕口縁部（**01272、01273、01274**）、器台（**01275**）等が出土し、時期は中期後半の所産と考えられる。

ＳＣ08（Fig.135、142）調査区西端部のＩ17地区で検出された不整な円形をなす竪穴住居址である。全体に削平が著しく、壁溝のみでプランを確認できる。西側の低地に向かって排水溝と考えられる小溝が付設されている。また、主柱穴は中央の小土壙を囲繞するように６本が確認できる。住居址の規模は、長辺が6.40m、短辺が5.00m以上を測る。

遺物は、甕口縁部（**01276**）等が出土し、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＣ09（Fig.135）調査区西端部のＩ18地区で検出された長方形をなす竪穴住居址である。全体に削平が著しく、壁溝のみでプランを確認できる。また、主柱穴は４本で西側コーナーから排水用と考えられる小溝が西側に延びる。その規模は、長辺が7.40m、短辺が6.40mを測る。

遺物は、弥生式土器の小破片が少量出土し、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＣ10（Fig.135、142）調査区西端部のＩ18地区で検出された方形をなす竪穴住居址である。全体

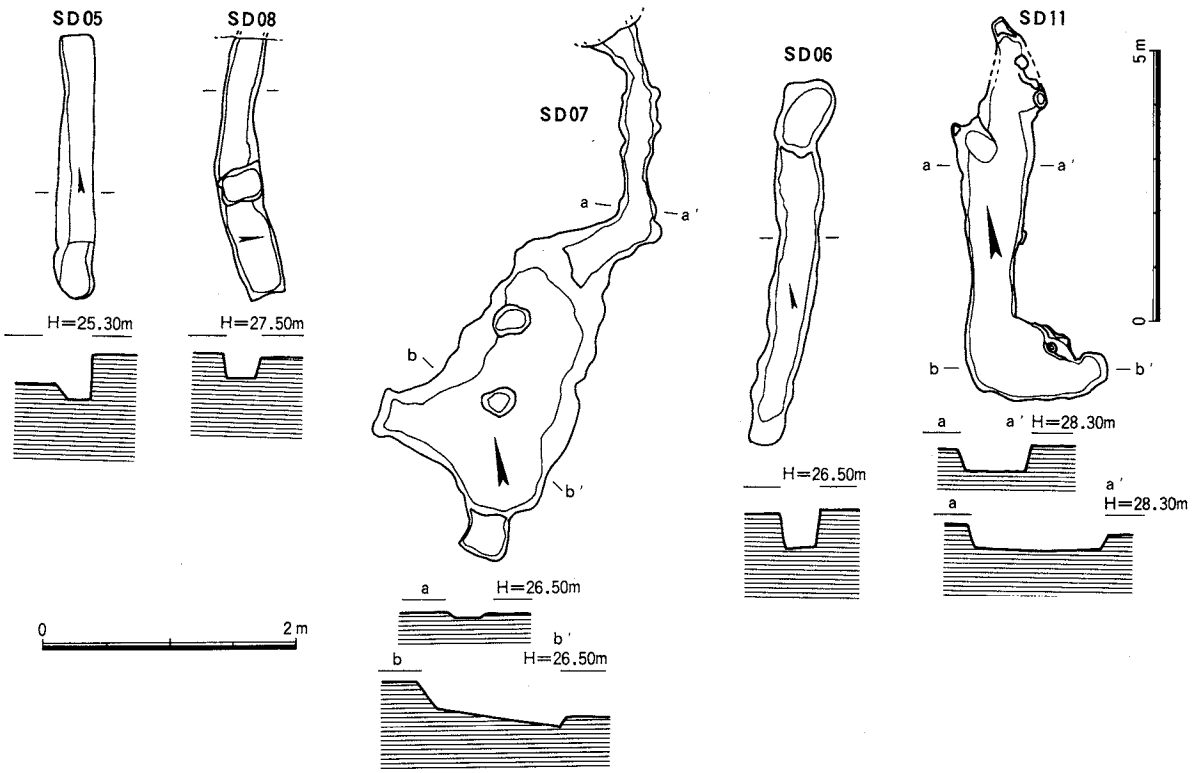


Fig. 136第Ⅱ区溝遺構出土状況実測図（縮尺1/60・1/140）

に削平が著しく、壁溝のみでプランを確認できる。東側の低地に向かって排水溝と考えられる小溝が付設されている。また、主柱穴は四隅のコーナーに片寄って４本が確認できる。住居跡の規模は、長辺が4.70ｍ、短辺が4.55ｍを測る。

遺物は、甕口縁部（**01277**）、甕底部（**01278**）、壺口縁部（**01279**）、高杯（**01280**）、椀（**01281**）等が出土し、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＣ11（Fig.135）調査区西端部の南端Ｉ18地区で検出されたなす竪穴住居址である。全体に削平が著しく、壁溝の一部を確認できる。

遺物は、弥生式土器破片が少量出土しており、その特徴から時期は後期の所産と考えられる。

３．溝状遺構（Fig.136）

ＳＤ05（Fig.136、142）調査区北東部の隅のＧ16地区で検出された小溝である。その規模は、長さ2.08ｍ、幅0.28ｍ、深さ0.36ｍを測る。

遺物は、溝内から甕口縁部（**01291**、**01292**）、甕底部（**01293**）、土製メンコ（**01294**）等が出土しており、時期は中期の所産と考えられる。

ＳＤ06（Fig.136、142）調査区北端部Ｇ16地区で検出された小溝である。その規模は、長さ2.92ｍ、幅0.30ｍ、深さ0.28ｍを測る。

遺物は、溝内から甕口縁部（**01295**、**01296**）、器台（**01297**）等が出土しており、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＤ07（Fig.136、142）調査区北端部Ｇ16地区で検出された不定形の溝である。一部土壙状を呈する。ＳＤ06の南側に隣接する。その規模は、長さ4.04ｍ、幅0.80ｍ、深さ0.35ｍを測る。

遺物は、溝内から甕口縁部（**01298**）、壺口縁部（**01299**）、壺底部（**01300**）等が出土しており、時期は中期前半の所産と考えられる。

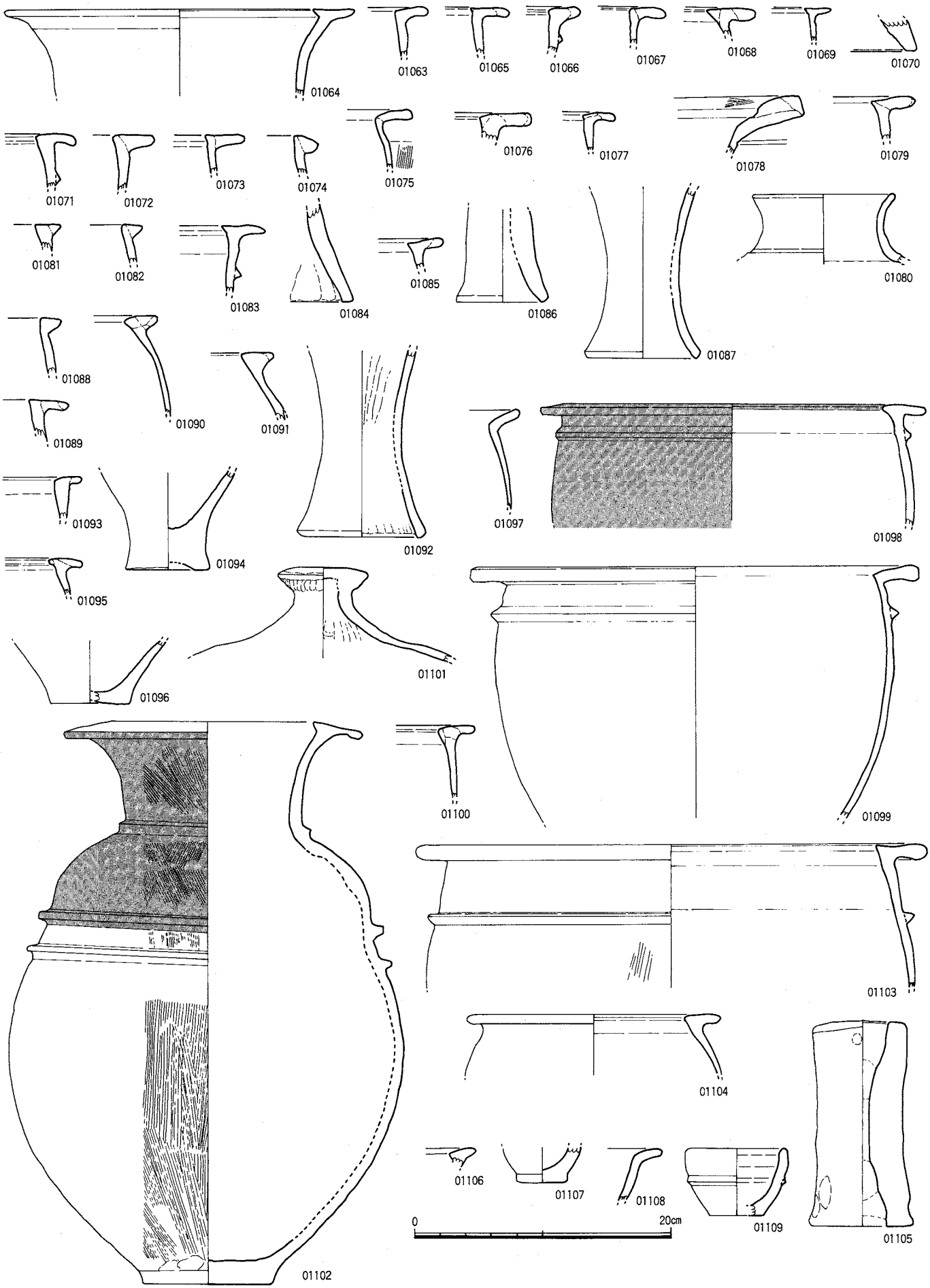


Fig. 137　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図 ①（縮尺1/4）

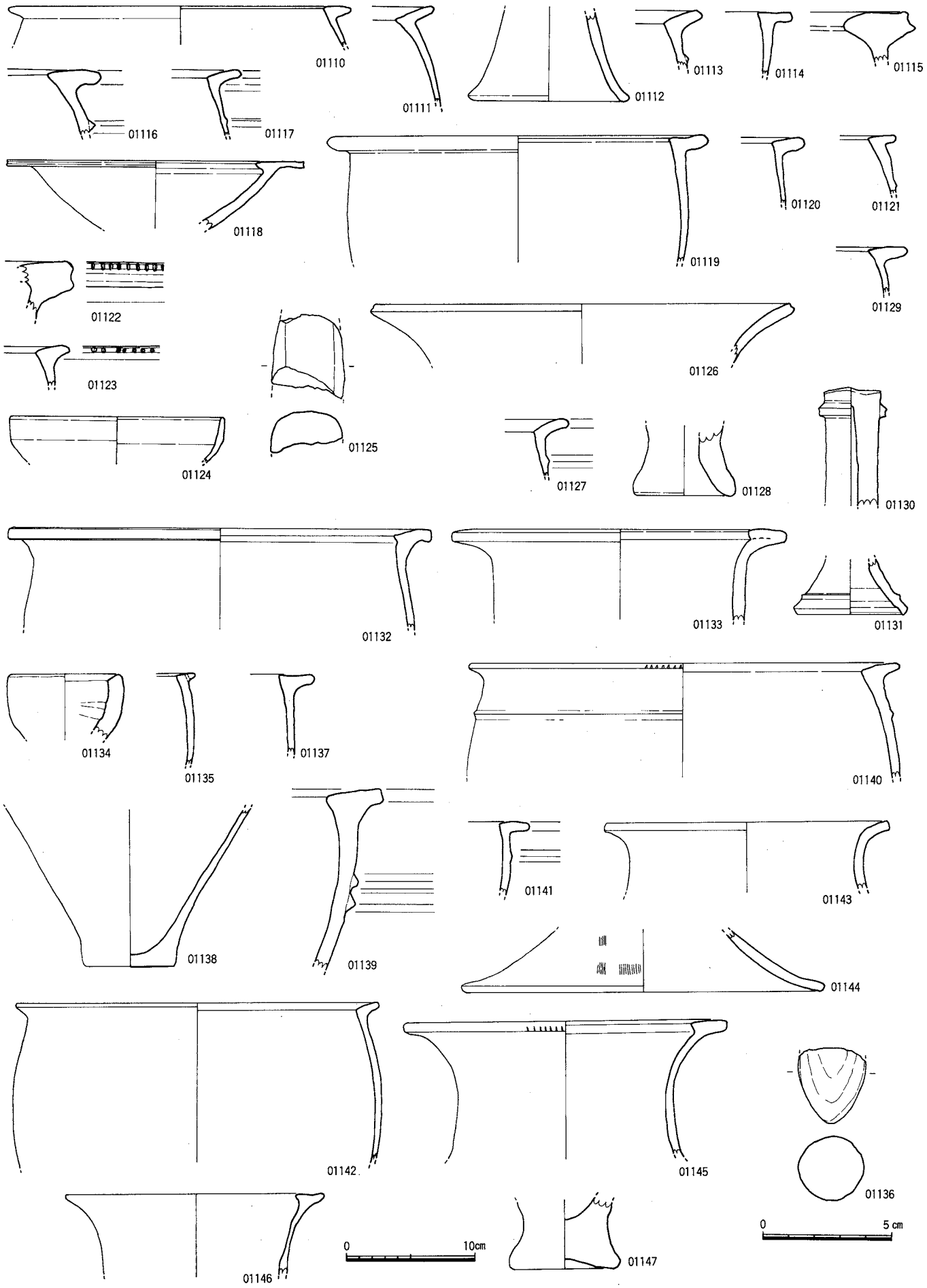


Fig. 138　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図 ②（縮尺1/2・1/4）

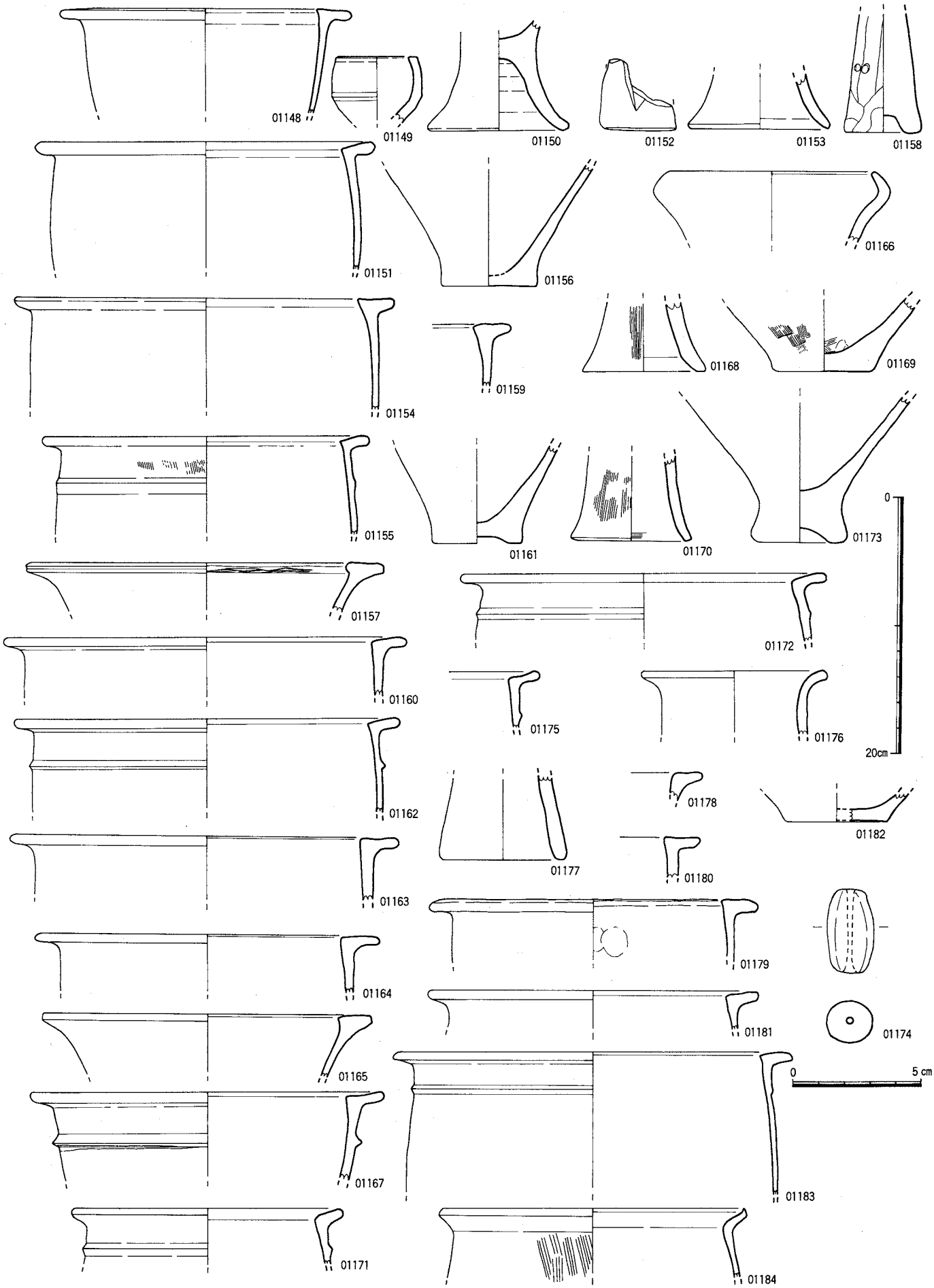


Fig. 139　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図 ③（縮尺1/2・1/4）

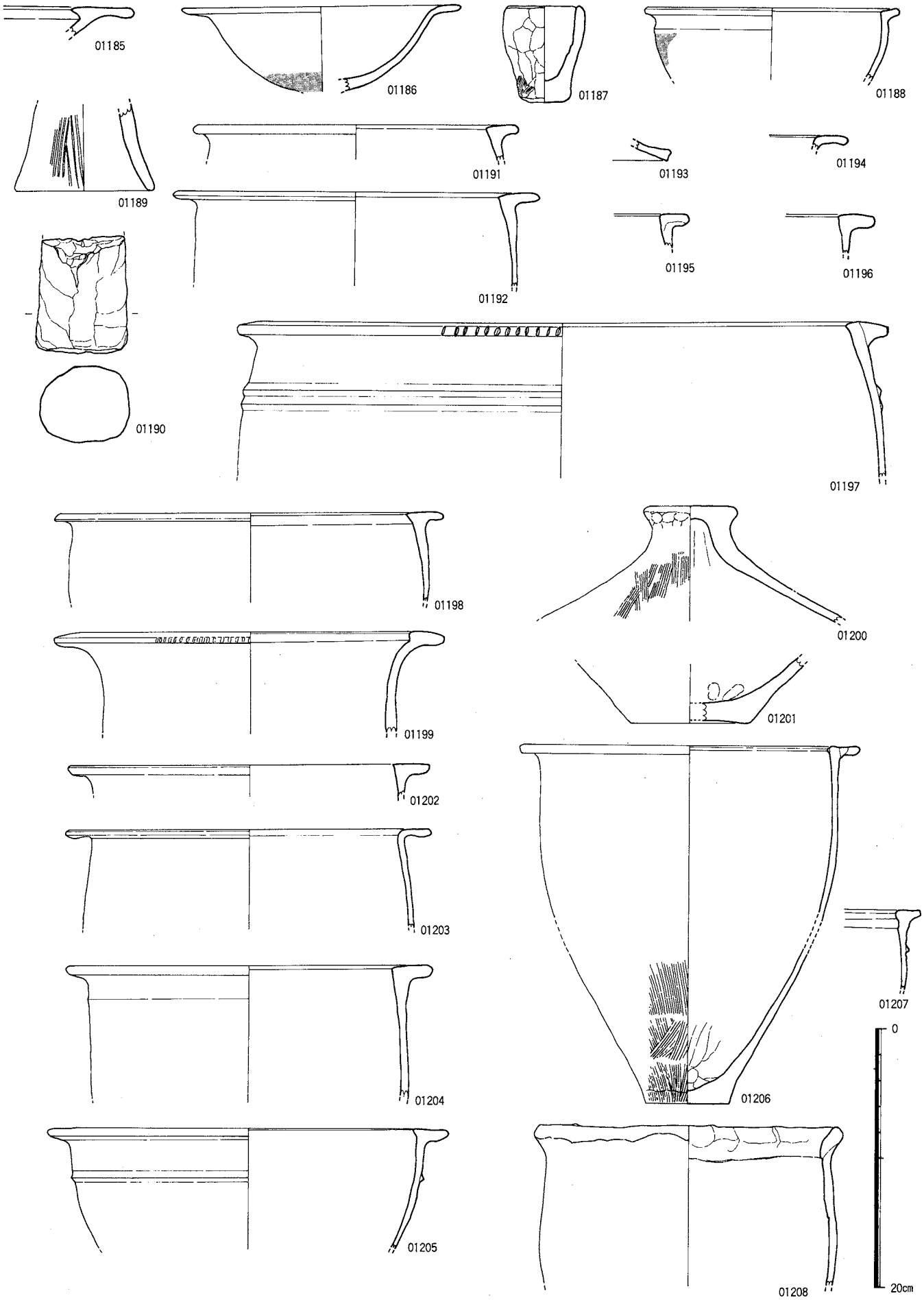


Fig. 140　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図 ④（縮尺1/4）

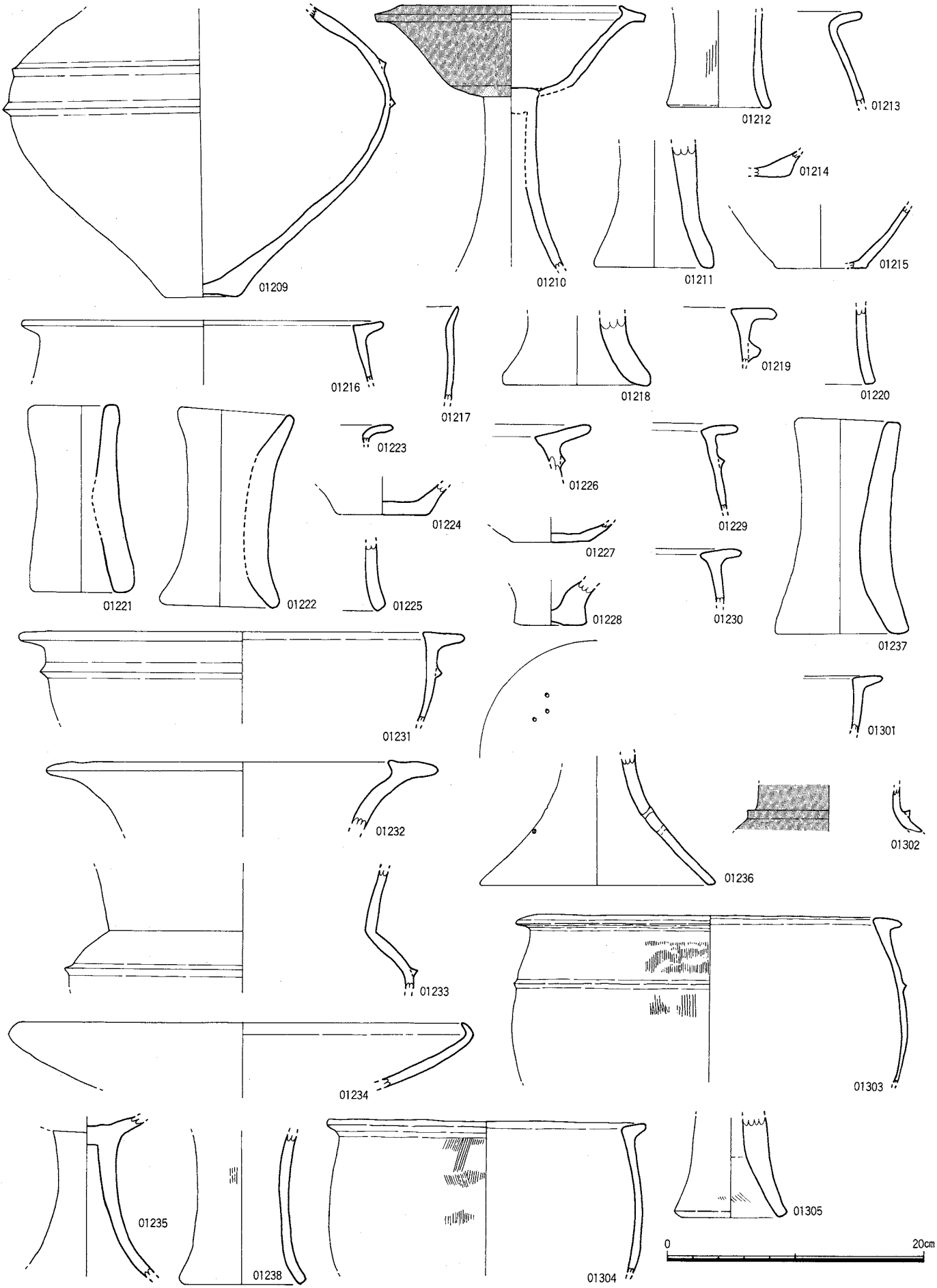


Fig. 141　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図 ⑤（縮尺1/4）

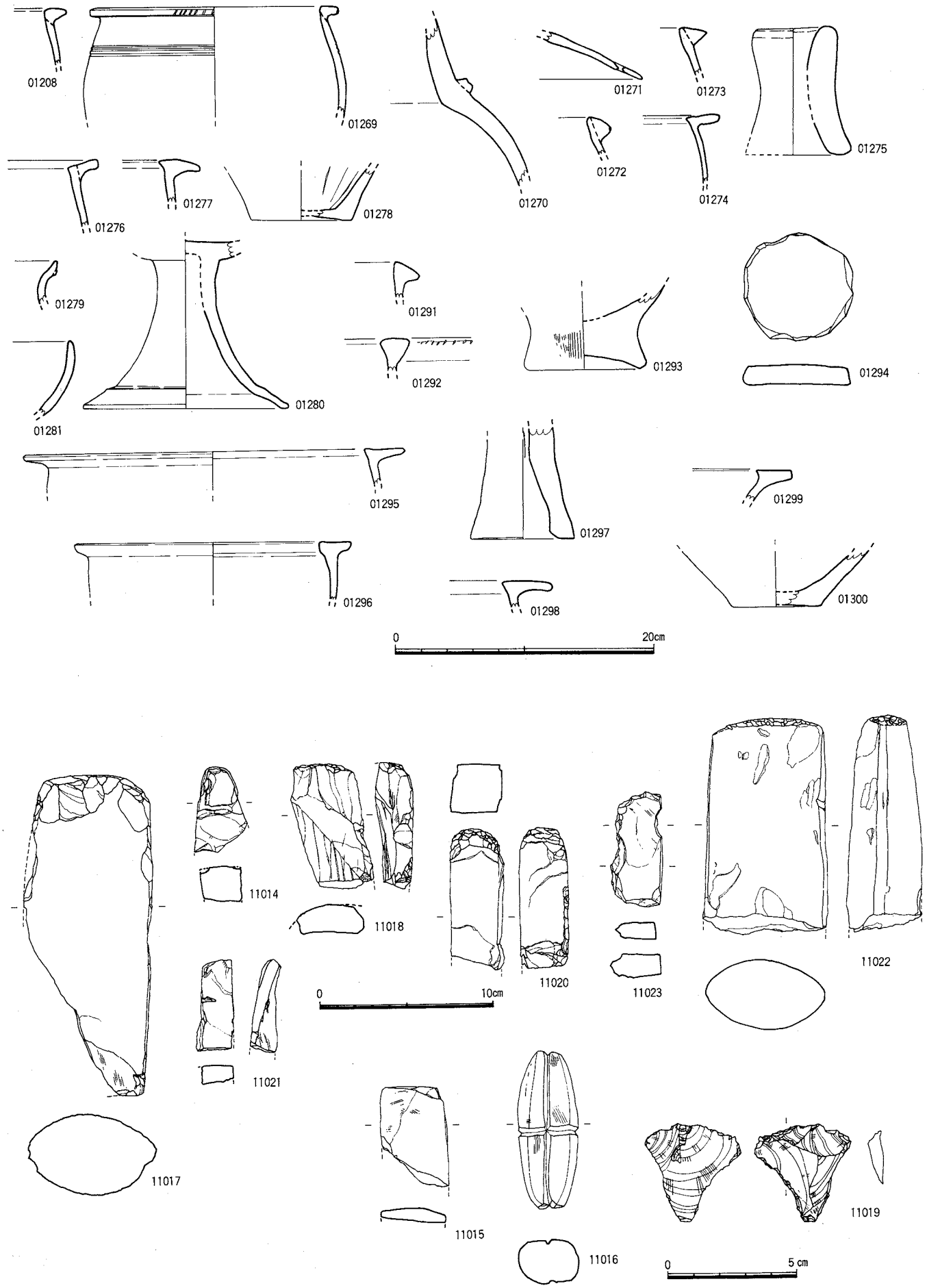


Fig. 142　第Ⅱ区遺構出土遺物実測図 ⑥（縮尺1/2・1/3・1/4）

ＳＤ08（Fig.136）調査区北端部Ｇ16地区の西側で検出された直線的な小溝である。ＳＤ06の南側に隣接する。その規模は、長さ2.04ｍ以上、幅0.36ｍ、深さ0.19ｍを測る。

遺物は、溝内から甕口縁部（**01301**）、丹塗壺頸部（**01302**）等が出土しており、時期は中期初頭の所産と考えられる。

ＳＤ11（Fig.136、141、142）調査区東側Ｇ16地区の中央部で検出された不整形な大溝で、立上りは非常に緩い。ＳＤ08の南側に隣接する。その規模は、長さ7.08ｍ、幅1.35ｍ、深さ0.19ｍを測る。

遺物は、溝内から甕口縁部（**01303**、**01304**）、器台（**01305**）、太型蛤刃石斧（**11022**）、抉入石斧（**11023**）等が出土しており、時期は中期の所産と考えられる。

第三節　第Ⅲ区調査報告（Fig.143～146）

第Ⅲ区は、遺構全体図（Fig.143）に見られるように、弥生時代の生活遺構では殆ど見るべきものが少なく、甕棺墓を主体とする墓地として土地利用がなされている。また、第Ⅲ区の弥生時代墓地の南側は北東方向から侵入してくる浅い谷地形で占められている。

１．土　壙（Fig.143、144、146）

ＳＫ117（Fig.144、146）調査区北端部のＭ15地区で検出された小型の円形土壙である。その規模は、長辺が1.30ｍ、短辺が1.22ｍ、深さ0.18ｍを測る。遺物は、壺口縁部（**01239**）、壺底部（**01240**）等が出土し、出土遺物の特徴から、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＫ118（Fig.144、146）調査区北端部のＭ15地区で検出された小型の楕円形土壙である。その規模は、長辺が2.35ｍ、短辺が1.82ｍ、深さ0.35ｍを測る。遺物は、弥生式土器の小破片が出土し、遺物の特徴から、時期は中期の所産と考えられる。

ＳＫ119（Fig.144、146）調査区中央部のＭ16地区で検出された小型の長方形土壙である。その規模は、長辺が1.43ｍ、短辺が0.86ｍ、深さ0.25ｍを測る。遺物は、弥生式土器の小破片が出土し、遺物の特徴から、時代は弥生時代の所産と考えられるが時期を特定できない。

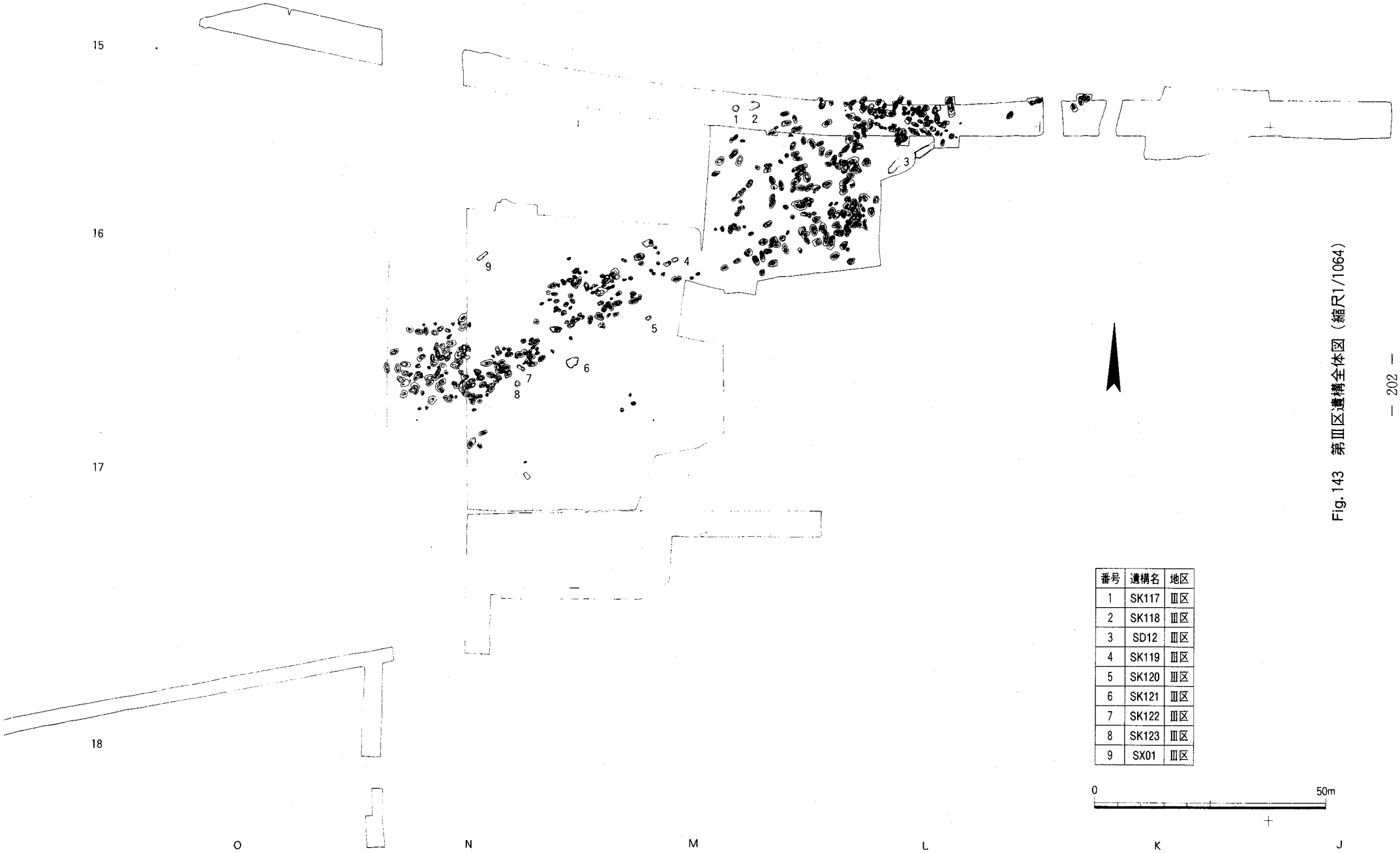
ＳＫ120（Fig.144、146）調査区中央部のＭ16地区で検出された小型の楕円形土壙である。その規模は、長辺が1.20ｍ、短辺が0.84ｍ、深さ0.17ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01241**、**01242**）、鉢口縁部（**01243**）が出土し、遺物の特徴から、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＫ121（Fig.144、146）調査区中央部のＮ17地区で検出された小型の楕円形土壙である。その規模は、長辺が2.41ｍ、短辺が1.54ｍ、深さ0.33ｍを測る。遺物は、甕口縁部（**01244**、**01245**）、壺口縁部（**01246**、**01247**）、壺底部（**01248**）、高杯（**01249**、**01250**）、器台（**01251**、**01252**）等が出土し、遺物の特徴から、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＫ122（Fig.144、146）調査区中央部のＮ17地区で検出された小型の楕円形土壙である。その規模は、長辺が1.66ｍ、短辺が0.76ｍ、深さ0.12ｍを測る。遺物は、甕胴部（**01253**）、丹塗壺胴部（**01254**）、同壺口縁部（**01255**）、小型鉢（**01256**）等が出土し、遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＫ123（Fig.144、146）調査区中央部のＮ17地区で検出された小型の円形土壙である。その規模は、長辺が1.15ｍ、短辺が1.09ｍ、深さ0.28ｍを測る。遺物は、壺口縁部（**01257**、**01258**）、壺胴部（**01259**）、壺底部（**01260**）等が出土し、遺物の特徴から、時期は中期前半の所産と考えられる。

ＳＸ01（Fig.144、146）調査区西隅のＮ16地区で検出された長方形土壙である。その規模は、長辺



番号	遺構名	地区
1	SK117	Ⅲ区
2	SK118	Ⅲ区
3	SD12	Ⅲ区
4	SK119	Ⅲ区
5	SK120	Ⅲ区
6	SK121	Ⅲ区
7	SK122	Ⅲ区
8	SK123	Ⅲ区
9	SX01	Ⅲ区

Fig. 143　第Ⅲ区遺構全体図（縮尺1/1064）

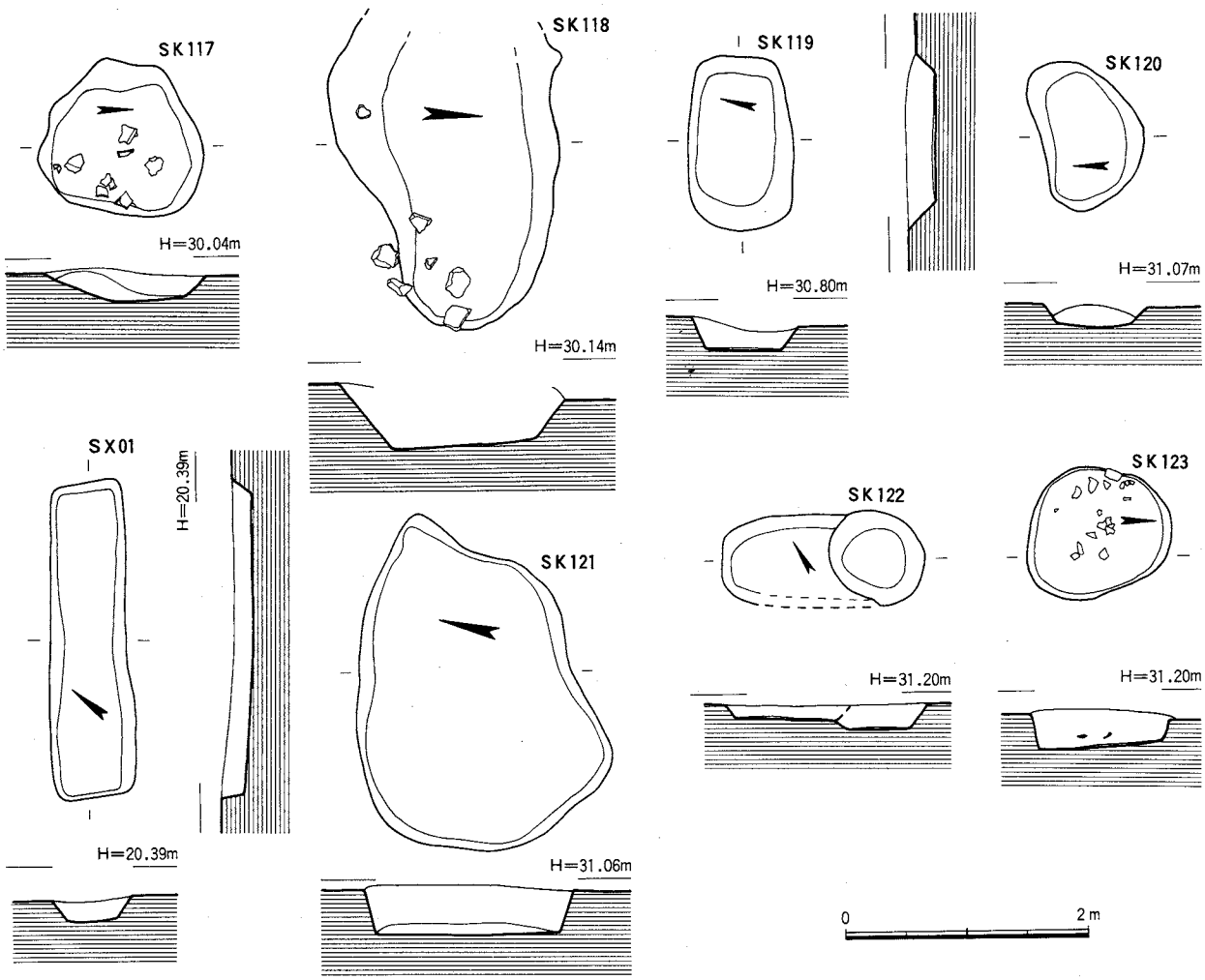


Fig. 144　第Ⅲ区土壙出土状況実測図（縮尺1/60）

が2.60m、短辺が0.61m、深さ0.16mを測る。遺物は、細片が出土したにとどまった。遺物の特徴から、時期は後期の所産と考えられる。

ＳＸ02（Fig.146）調査区西隅のＮ17地区で検出された小型の円形土壙である。遺物は、甕口縁部（**01311**）、壺口縁部（**01312**）が出土した。時期は、その特徴から中期であろう。

2．溝状遺構（Fig.145、146）

ＳＤ12（Fig.145、146）調査区北端部の東側Ｌ16地区で検出された溝である。その規模は、長さ10.50 m以上、幅1.54m、深さ0.23mを測る。遺物は、溝内から大型甕口縁部（**01306**、**01307**、**01308**）、丹塗壺胴部（**01309**）、高杯（**01310**）等が出土しており、時期は中期後半の所産と考えられる。

なお、第４次調査出土した遺物のうちで弥生時代の遺構に属しない遺物や遺構検出面で採集された遺物のうち石器について一部を図示した。(Fig.146)

これらは、今山産磨製石斧（**11024**、ＤＥ17地区第２号古墳周溝内）、石製紡錘車（**11025**、Ｅ15地区表面採集）、石包丁（**11026**、ＥＦ16・17地区遺構確認面）、石包丁（**11027**、Ｇ16・17地区表面採集）、石製ハン

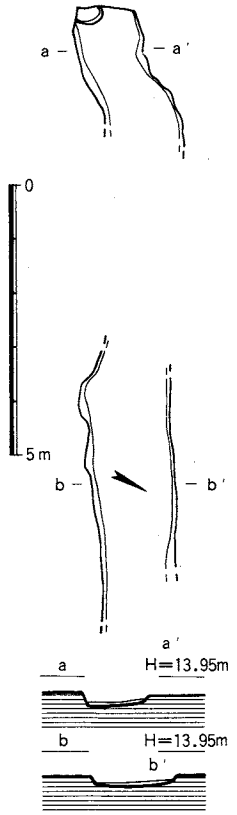


Fig. 145　第Ⅲ区溝遺構出土状況実測図(縮尺1/140)

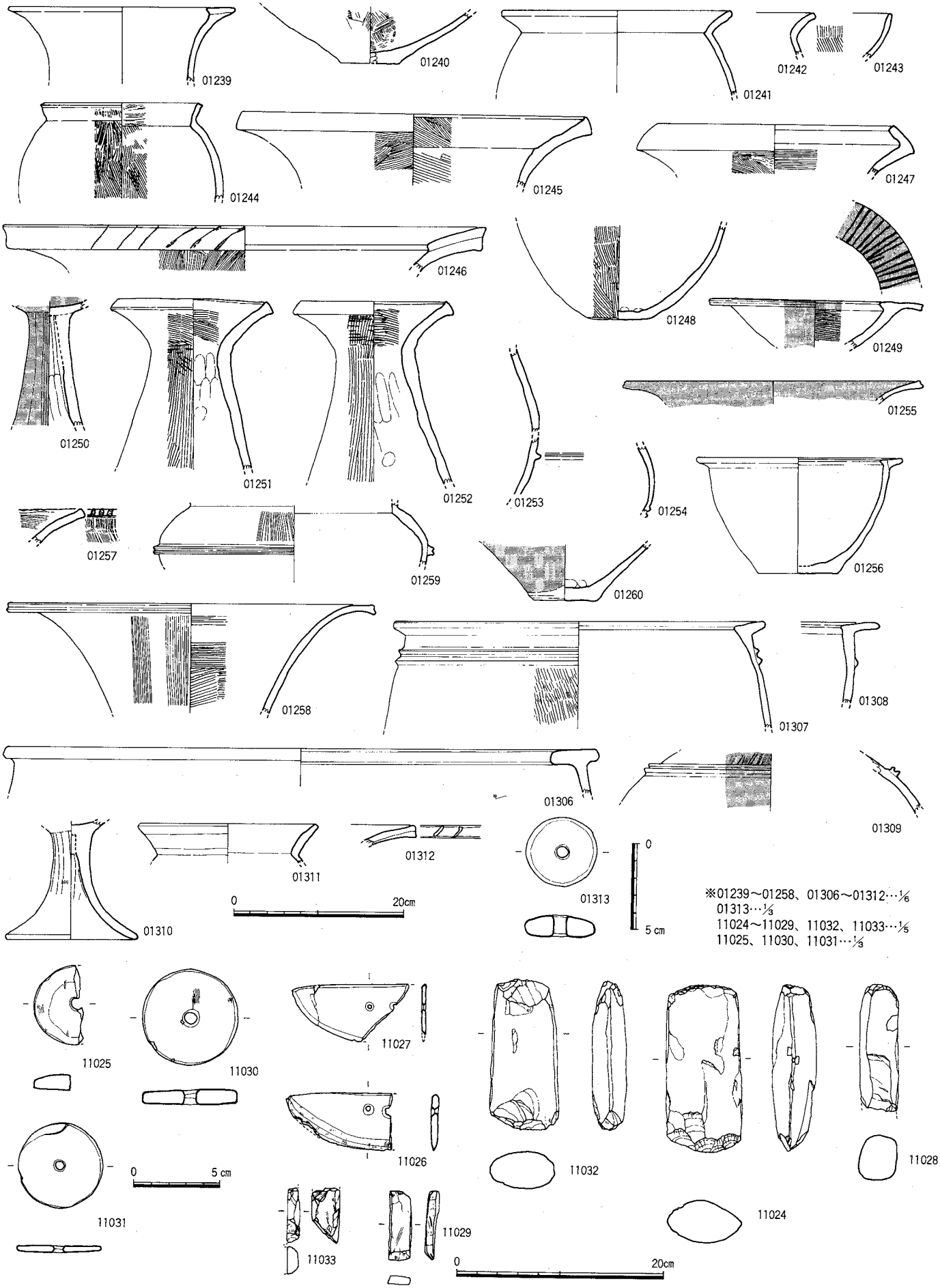


Fig. 146　第Ⅲ区遺構出土遺物実測図（縮尺1/3・1/5・1/6）

Tab. 2　第４次調査遺構一覧表

番号	遺構名	地区	形状	規模（cm）			旧遺構番号	主要な出土遺物	時期	挿図番号	図版番号
				長径	短径	深さ					
1	Ⅰ区ＳＫ01	E-14	不定形	320.0	200.0	24.9	2-SK03	弥生式土器 甕、投弾	中期 後半	Fig.121	
2	Ⅰ区ＳＫ02	E-14	不定形	190.0	174.0	43.8	2-SK04	弥生式土器 甕、器台	中期 後半	Fig.121	
3	Ⅰ区ＳＫ03	E-14	不定形	330.0	209.0	28.8	2-SK05	弥生式土器 甕	中期 後半	Fig.121	
4	Ⅰ区ＳＫ04	E-14	不定形	608.0	260.0	18.1	2-SK06	弥生式土器 甕、器台	中期 後半	Fig.121	
5	Ⅰ区ＳＫ05	D-17	長方形	306.0	172.0	20.3	DE-4-SC02	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.121	
6	Ⅰ区ＳＫ06	H-15	楕円形	516.0	180.0	－	4区- 3-SK04	弥生式土器 甕、無頸壺蓋	中期 後半	Fig.123	
7	Ⅰ区ＳＫ07	G-15、16	不定形	570.0	362.0	－	4区- 6-SK06	弥生式土器 甕、壺、甕蓋	中期 前葉	Fig.123	
8	Ⅰ区ＳＫ08	F-16	長方形	416.0	340.0	－	4区- 12-SK11	無文土器？ 甕、石包丁	後期	Fig.121	
9	Ⅰ区ＳＫ09	F-16	円形	166.0	132.0	－	4区- 14-SK12	弥生式土器 甕	中期 後半	Fig.122	
10	Ⅰ区ＳＫ10	F-16	楕円形	254.0	197.0	50.4	EF-1-SK01	弥生式土器 甕	中期 中葉	Fig.122	
11	Ⅰ区ＳＫ11	F-16	楕円形	224.0	180.0	19.6	EF-3-SK01	弥生式土器 甕、器台、小型鉢	中期 後半	Fig.122	
12	Ⅰ区ＳＫ12	F-16	方形	109.0	110.0	32.3	EF-4-SK01	弥生式土器 壺	中期 前半	Fig.122	
13	Ⅰ区ＳＫ13	F-16	不定形	388.0	110.0	15.2	EF-5-SD01	弥生式土器	中期 前半	Fig.122	
14	Ⅰ区ＳＫ14	E-17	方形	390.0	334.0	16.9	EF-8-SC02	弥生式土器 壺	中期 前半	Fig.121	
15	Ⅰ区ＳＫ15	F-16	不定 長方形	204.0	114.0	22.5	EF-8-SD01	弥生式土器 甕、壺	中期 後半	Fig.122	
16	Ⅰ区ＳＫ16	F-17	方形	81.0	79.0	22.5	EF-8-SK05	弥生式土器 甕	中期 中葉	Fig.122	
17	Ⅰ区ＳＫ17	F-17	不定形	384.0	169.0	58.0	EF-8-SK07	弥生式土器 甕、器台	中期 後半	Fig.122	
18	Ⅰ区ＳＫ18	F-16	楕円形	186.0	95.0	73.7	EF-8-SK15	弥生式土器 甕	中期 末	Fig.122	
19	Ⅰ区ＳＫ19	F-16	不定形	113.0	60.0	40.0	EF-8-SK10	弥生式土器 甕、器台	中期 後半	Fig.122	
20	Ⅰ区ＳＫ20	F-16	不整	109.0	81.0	34.5	EF-8-SK11	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.122	
21	Ⅰ区ＳＫ21	F-17	円形	112.0	86.0	24.5	EF-8-SK12	弥生式土器 壺	中期 後半	Fig.122	
22	Ⅰ区ＳＫ22	F-17	円形	390.0	212.0	13.6	EF-8-SK13	弥生式土器 壺	中期 末	Fig.122	
23	Ⅰ区ＳＫ23	F-17	円形	175.0	150.0	23.0	EF-9-SK02	弥生式土器 甕、無頸壺？、磨製石鏃	中期 前半	Fig.122	
24	Ⅰ区ＳＫ24	F-17	円形	186.0	119.0	33.5	EF-9-SK04	弥生式土器 甕、器台	中期 前半	Fig.122	
25	Ⅰ区ＳＫ25	F-17	円形	140.0	132.0	18.0	EF-9-SK06	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.123	
26	Ⅰ区ＳＫ26	F-17	不整 円形	148.0	120.0	10.0	EF-9-SK07	弥生式土器	中期	Fig.123	
27	Ⅰ区ＳＫ27	F-17	楕円形	233.0	90.0	6.0	EF-9-SK08	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.123	
28	Ⅰ区ＳＫ28	F-17	不整形	264.0	117.0	47.0	EF-9-SK10	弥生式土器 甕、石剣	中期 後半	Fig.123	
29	Ⅰ区ＳＫ29	F-17	方形	120.0	100.0	43.0	FG-53 -SK02	弥生式土器 甕、壺、鉢	後期 ？	Fig.123	
30	Ⅰ区ＳＫ30	F-17	円形	129.0	112.0	21.0	FG-53 -SK03	弥生式土器 甕	中期 中葉	Fig.123	
31	Ⅰ区ＳＫ31	F-17	楕円形	206.0	90.0	19.0	FG-53 -SK04	弥生式土器 甕、石斧	中期 後半	Fig.123	
32	Ⅰ区ＳＫ124	G-16	方形	286.0	266.0	－	4区- 8-SK10	弥生式土器	中期 中葉	Fig.123	
33	Ⅰ区ＳＫ125	F-16	長方形	278.0	126.0	－	4区- 14-SK14	弥生式土器 甕蓋、無頸壺蓋	中期 後半	Fig.122	

Tab. 3　第4次調査遺構一覧表

番号	遺構名	地区	形状	規模(cm) 長径	短径	深さ	旧遺構番号	主要な出土遺物	時期	挿図番号	図版番号
34	Ⅰ区SK126	F-16	不定形	370.0	95.0	36.6	EF-3-SK02	弥生式土器 甕、壺、甕蓋、器台	中期前半	Fig.122	
35	Ⅰ区SK127	F-17	方形	192.0	183.0	11.0	FG-53-SK01	弥生式土器 甕、砥石	中期中葉	Fig.123	
36	Ⅰ区SC01	E-17	方形	640.0	520.0以上	20.4	DE-3-SC01	弥生式土器	後期？	Fig.124	
37	Ⅰ区SC02	G-15	円形	810.0	400.0以上	—	4区-8-SC01	弥生式土器 甕、器台	中期	Fig.124	
38	Ⅰ区SC03	F-16	円形	600.0以上	550.0以上	22.0	EF-1-SC01	弥生式土器 甕、壺、高坏	後半	Fig.124	
39	Ⅰ区SC04	F-17	方形	440.0以上	—	6.5	EF-12-SC03	弥生式土器	中期後半	Fig.124	
40	Ⅰ区SD01	F-16		200.0	42.0	32.1 11.4	EF-2-SD01	弥生式土器 甕、壺	中期前半	Fig.125	
41	Ⅰ区SD02	F-16		1625.0	202.0	31.0	EF-5-SK01	弥生式土器 甕	中期後半	Fig.125	
42	Ⅰ区SD03	E-17		470.0	93.0	14.5	EF-8-SD02	弥生式土器 甕、壺、器台	前期末	Fig.125	
43	Ⅰ区SD04	F-17		610.0	134.0	21.5	EF-8-SK06	弥生式土器 甕、壺、器台	中期後半	Fig.125	
44	Ⅰ区SD09	G-15		548.0	74.0	—	4区-6-SD07	弥生式土器 甕	中期	Fig.125	
45	Ⅰ区SD10	E-17		514.0	82.0	?	EF-8-SD04	弥生式土器 甕、壺	中期後半	Fig.125	
46	Ⅱ区SK32	G-16	楕円形	87.0	61.0	28.0	FG-48-SK06	弥生式土器 甕、壺、器	中期前半	Fig.130	
47	Ⅱ区SK33	G-17	長方形	104.0	78.0	22.0	FG-48-SK05	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.131	
48	Ⅱ区SK34	G-17	不定形	124.0	73.0	32.0	FG-48-SK08	弥生式土器 甕	中期後半	Fig.131	
49	Ⅱ区SK35	G-17	円形	84.0	76.0	46.0	FG-48-SK09	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.131	
50	Ⅱ区SK36	G-17	楕円形	131.0	87.0	45.0	FG-48-SK11	弥生式土器 小型鉢	中期前半	Fig.131	
51	Ⅱ区SK37	G-16	不整長方形	180.0	104.0	12.0	FG-43-SK04	弥生式土器 器台	中期後半	Fig.130	
52	Ⅱ区SK38	G-16	不定形	124.0	110.0	56.0	FG-47-SK01	弥生式土器 甕	中期後半	Fig.130	
53	Ⅱ区SK39	G-16	不定形	190.0	186.0	35.0	FG-44-SK09	弥生式土器 甕、柱状片刃石斧	中期後半	Fig.130	
54	Ⅱ区SK40	G-16	楕円形	194.0	46.0	55.0	FG-44-SK11	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.130	
55	Ⅱ区SK41	G-16	不定形	184.0	78.0	36.0	FG-44-SK10	弥生式土器 甕、壺	中期前半	Fig.130	
56	Ⅱ区SK42	G-16	方形	86.0	84.0	52.0	FG-44-SK07	弥生式土器 甕	中期初頭	Fig.130	
57	Ⅱ区SK43	G-16	円形	266.0	250.0	56.0	FG-44-SK03	弥生式土器	中期	Fig.130	
58	Ⅱ区SK44	G-16	不定形	129.0	82.0	23.0	FG-36-SK03	弥生式土器 甕	中期初頭	Fig.130	
59	Ⅱ区SK45	G-16	楕円形	130.0	90.0	11.0	FG-36-SK01	弥生式土器 甕	中期後半	Fig.130	
60	Ⅱ区SK46	G-16	長方形	216.0	77.0	11.0	FG-36-SK06	弥生式土器 甕、器台	中期前半	Fig.130	
61	Ⅱ区SK47	G-16	隅丸方形	134.0	108.0	19.0	FG-35-SK06	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.130	
62	Ⅱ区SK48	G-16	方形	53.0	44.0	19.0	FG-35-SK07	弥生式土器 甕、壺	中期中葉	Fig.130	
63	Ⅱ区SK49	G-16	長方形	138.0	50.0	7.0	FG-35-SK03	弥生式土器 甕、甕蓋	中期後半	Fig.130	
64	Ⅱ区SK50	G-16	長方形	123.0	32.0	13.0	FG-35-SK04	弥生式土器 甕	中期	Fig.130	
65	Ⅱ区SK51	G-16	長方形	207.0	64.0	49.0	FG-37-SK06	弥生式土器 甕、無頸壺、器台	中期後半	Fig.130	
66	Ⅱ区SK52	G-16	不定形	162.0	107.0	21.0	FG-37-SK05	弥生式土器 甕、ミニチュア壺	中期初頭	Fig.130	

Tab. 4　第４次調査遺構一覧表

番号	遺構名	地区	形状	規模（cm）			旧遺構番号	主要な出土遺物	時期	挿図番号	図版番号
				長径	短径	深さ					
67	Ⅱ区ＳＫ53	G-16	不定形	120.0	94.0	63.0	FG-37 -SK07	弥生式土器 高坏、小型鉢	中期	Fig.130	
68	Ⅱ区ＳＫ54	G-16	不定形	164.0	60.0	10.0	FG-37 -SK14	弥生式土器 甕	中期 初	Fig.130	
69	Ⅱ区ＳＫ55	G-16	長方形	200.0	56.0	21.0	FG-37 -SK13	弥生式土器 甕、器台	中期 中葉	Fig.130	
70	Ⅱ区ＳＫ56	G-16	円形	112.0	102.0	46.0	FG-37 -SK10	弥生式土器 甕	中期 後半	Fig.130	
71	Ⅱ区ＳＫ57	G-16	不定形	216.0	112.0	10.0	FG-37 -SK09	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.130	
72	Ⅱ区ＳＫ58	G-16	長方形	158.0	95.0	32.0	FG-37 -SK08	弥生式土器 甕、高坏	中期 後半	Fig.130	
73	Ⅱ区ＳＫ59	G-16	不定形	71.0	65.0	18.0	FG-34 -SK03	弥生式土器	弥生	Fig.130	
74	Ⅱ区ＳＫ60	G-16	不定形	177.0	130.0	18.0	FG-34 -SK06	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.130	
75	Ⅱ区ＳＫ61	G-16	楕円形	261.0	187.0	12.0	FG-34 -SK13	弥生式土器 甕、埦	中期 前半	Fig.130	
76	Ⅱ区ＳＫ62	G-16	長方形	172.0	98.0	11.0	FG-34 -SK15	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.130	
77	Ⅱ区ＳＫ63	G-16	方形	118.0	102.0	26.0	FG-34 -SK07	弥生式土器 支脚、扁平片刃石斧	中期	Fig.130	
78	Ⅱ区ＳＫ64	G-16	長方形	110.0	80.0	15.0	FG-34 -SK11	弥生式土器 壺	中期 中葉	Fig.131	
79	Ⅱ区ＳＫ65	G-16	楕円形	143.0	98.0	27.0	FG-34 -SK10	弥生式土器 甕、器台	中期 中葉	Fig.131	
80	Ⅱ区ＳＫ66	G-16	長方形	99.0	60.0	49.0	FG-34 -SK09	弥生式土器 甕、高坏	中期 前半	Fig.131	
81	Ⅱ区ＳＫ67	H-16	長方形	88.0	78.0	63.0	FG-25 -SK05	弥生式土器 手捏鉢、樽型土器	中期 前半	Fig.131	
82	Ⅱ区ＳＫ68	G-17	不定形	116.0	107.0	20.0	FG-33 -SK14	弥生式土器 投弾	中期	Fig.131	
83	Ⅱ区ＳＫ69	G-17	長方形	140.0	53.0	41.0	FG-33 -SK13	弥生式土器 甕	中期	Fig.131	
84	Ⅱ区ＳＫ70	G-17	方形	110.0	105.0	19.0	FG-33 -SK12	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.131	
85	Ⅱ区ＳＫ71	G-17	長方形	210.0	68.0	68.0	FG-33 -SK08	弥生式土器	弥生	Fig.131	
86	Ⅱ区ＳＫ72	G-17	楕円形	195.0	89.0	11.0	FG-33 -SK06	弥生式土器	中期	Fig.131	
87	Ⅱ区ＳＫ73	G-16、17	長方形	300.0	107.0	55.0	FG-33 -SD02	弥生式土器 甕、甕or壺、太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧	中期 前半	Fig.131	
88	Ⅱ区ＳＫ74	G-16	方形	177.0	174.0	52.0	FG-38 -SK20	弥生式土器 甕、ミニチュア鉢、器台	中期 前半	Fig.131	
89	Ⅱ区ＳＫ75	G-17	長方形	190.0	83.0	72.0	FG-38 -SK18	弥生式土器 甕、支脚	中期 前半	Fig.131	
90	Ⅱ区ＳＫ76	G-17	不定 方形	103.0	90.0	50.0	FG-38 -SK15	弥生式土器 甕	中期 中葉	Fig.131	
91	Ⅱ区ＳＫ77	G-17	長方形	170.0	80.0	76.0	FG-38 -SK04	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.131	
92	Ⅱ区ＳＫ78	G-17	不定 長方形	118.0	70.0	56.0	FG-38 -SK03	弥生式土器 甕	中期	Fig.133	
93	Ⅱ区ＳＫ79	G-17	円形	110.0	100.0	14.0	FG-38 -SK02	弥生式土器 甕	中期 前半	Fig.133	
94	Ⅱ区ＳＫ80	G-17	不定 長方形	155.0	61.0	51.0	FG-38 -SK13	弥生式土器 甕、壺	後半 初頭	Fig.133	
95	Ⅱ区ＳＫ81	G-17	楕円形	154.0	79.0	49.0	FG-38 -SK12	弥生式土器 甕、器台	中期 後半	Fig.133	
96	Ⅱ区ＳＫ82	G-17	隈丸 長方形	140.0	94.0	46.0	FG-38 -SK11	弥生式土器 壺、器台	中期 前半	Fig.133	
97	Ⅱ区ＳＫ83	G-17	不定形	185.0	178.0	35.0	FG-38 -SK06	弥生式土器 甕、土錘	中期 中葉	Fig.133	
98	Ⅱ区ＳＫ84	G-17	方形	45.0	43.0	23.0	FG-38 -SK05	弥生式土器 高坏	中期	Fig.133	
99	Ⅱ区ＳＫ85	G-17	楕円形	161.0	87.0	17.0	FG-38 -SK01	弥生式土器 甕、壺、器台	中期 後半	Fig.133	

Tab. 5　第４次調査遺構一覧表

番号	遺構名	地区	形状	規模(cm) 長径	短径	深さ	旧遺構番号	主要な出土遺物	時期	挿図番号	図版番号
100	Ⅱ区ＳＫ86	G-17	不定形	70.0	47.0	26.0	FG-38 -SK09	弥生式土器 壺	中期前半	Fig.133	
101	Ⅱ区ＳＫ87	G-17	方形	92.0	90.0	15.0	FG-38 -SK23	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.133	
102	Ⅱ区ＳＫ88	G-17	長方形	81.0	69.0	24.0	FG-38 -SK22	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.133	
103	Ⅱ区ＳＫ89	G-17	長方形	80.0	70.0	30.0	FG-38 -SK24	弥生式土器 壺、器台	中期初頭	Fig.133	
104	Ⅱ区ＳＫ90	G-17	方形	84.0	82.0	34.0	FG-39 -SK03	弥生式土器 甕、壺、スクレイパー	中期前半	Fig.133	
105	Ⅱ区ＳＫ91	G-17	不定形	700.0	314.0	27.0	FG-49 -SK01	弥生式土器	弥生	Fig.133	
106	Ⅱ区ＳＫ92	G-17	不定形	172.0	121.0	18.0	FG-42 -SK02	弥生式土器 甕	中期中葉	Fig.133	
107	Ⅱ区ＳＫ93	G-17	円形	90.0	87.0	24.0	FG-42 -SK04	弥生式土器	中期初頭	Fig.133	
108	Ⅱ区ＳＫ94	G-17	不定形	100.0	62.0	15.0	FG-32 -SK05	弥生式土器 甕、壺	中期中葉	Fig.133	
109	Ⅱ区ＳＫ95	G-17	長方形	247.0	156.0	37.0	FG-32 -SK01	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.133	
110	Ⅱ区ＳＫ96	G-17	楕円形	132.0	103.0	8.0	FG-32 -SK02	弥生式土器 壺	中期	Fig.133	
111	Ⅱ区ＳＫ97	G-18	方形	112.0	110.0	12.0	FG-31 -SK03	弥生式土器 甕、壺、蓋、扁平片刃石斧	中期後半	Fig.133	
112	Ⅱ区ＳＫ98	I-17	不定形	117.0	92.0	14.0	IJ-71-SK01	弥生式土器 壺	中期後半	Fig.134	
113	Ⅱ区ＳＫ99	I-17	不定形	138.0	115.0	30.0	IJ-71-SK02	弥生式土器 甕	中期中葉	Fig.134	
114	Ⅱ区ＳＫ100	I-17	不定形	561.0	510.0	20.0	IJ-70-SK01	弥生式土器 甕、壺、高坏、器台	中期後半	Fig.134	
115	Ⅱ区ＳＫ101	I-17	円形	106.0	104.0	40.0	IJ-70-SK03	弥生式土器 甕	中期	Fig.134	
116	Ⅱ区ＳＫ102	I-17	円形	135.0	110.0	10.0	IJ-62-SK02	弥生式土器 甕	後期	Fig.134	
117	Ⅱ区ＳＫ103	I-17	長方形	136.0	60.0	10.0	IJ-69-SK01	弥生式土器 甕	中期後半	Fig.134	
118	Ⅱ区ＳＫ104	I-17	円形	92.0	80.0	10.0	IJ-69-SK02	弥生式土器 鉢	中期後半	Fig.134	
119	Ⅱ区ＳＫ105	I-17	楕円形	190.0	140.0	7.0	IJ-72-SK02	弥生式土器 甕、高坏or鉢、器台	中期後半	Fig.134	
120	Ⅱ区ＳＫ106	I-18	不定形	110.0	76.0	15.0	IJ-73-SK02	弥生式土器 甕、壺	中期中葉	Fig.134	
121	Ⅱ区ＳＫ107	I-18	不定形	196.0	80.0	10.0	IJ-63-SK01	弥生式土器	後期	Fig.134	
122	Ⅱ区ＳＫ108	I-18	長方形	340.0	138.0	23.0	IJ-67-SK01	弥生式土器 甕、器台	中期後半	Fig.134	
123	Ⅱ区ＳＫ109	I-18	楕円形	250.0	168.0	8.0	IJ-77-SK07	弥生式土器 器台	中期前半	Fig.134	
124	Ⅱ区ＳＫ110	I-18	不定形	234.0	73.0	13.0	IJ-77-SK06	弥生式土器 器台	中期前半	Fig.134	
125	Ⅱ区ＳＫ111	I-18	長方形	106.0	63.0	10.0	IJ-77-SK04	弥生式土器 甕	中期末	Fig.134	
126	Ⅱ区ＳＫ112	I-18	不定形	146.0	65.0	10.0	IJ-77-SK02	弥生式土器 壺、器台	中期後半	Fig.134	
127	Ⅱ区ＳＫ113	I-18	楕円形	268.0	181.0	13.0	IJ-77-SK01	弥生式土器 甕、蓋	中期末	Fig.134	
128	Ⅱ区ＳＫ114	I-18	楕円形	151.0	93.0	10.0	IJ-74-SK02	弥生式土器 甕	中期後半	Fig.134	
129	Ⅱ区ＳＫ115	I-18	不定形	155.0	114.0	7.0	IJ-74-SK01	弥生式土器 甕	中期後半	Fig.134	
130	Ⅱ区ＳＫ116	I-18	長方形	107.0	97.0	32.0	IJ-76-SK02	弥生式土器 甕、壺、高坏、器台	中期後半	Fig.134	
131	Ⅱ区ＳＫ128	G-16	長方形	73.0	48.0	13.0	FG-47 -SK02	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.131	
132	Ⅱ区ＳＫ129	G-16	隅丸方形	262.0	209.0	9.0	FG-45 -SK02	弥生式土器 甕、器台	中期中葉	Fig.131	

Tab. 6　第４次調査遺構一覧表

番号	遺構名	地区	形状	規模（cm）			旧遺構番号	主要な出土遺物	時期	挿図番号	図版番号
				長径	短径	深さ					
133	Ⅱ区ＳＫ130	Ｇ-16	楕円形	136.0	90.0	24.0	FG-45 -SK04	弥生式土器 甕	中期後半	Fig..131	
134	Ⅱ区ＳＫ131	Ｇ-16	長方形	103.0	78.0	35.0	FG-36 -SK02	弥生式土器 器台	中期中葉	Fig.131	
135	Ⅱ区ＳＫ132	Ｇ-16	不定形	218.0	136.0	51.0	FG-35 -SK02	弥生式土器 甕	中期後半	Fig.131	
136	Ⅱ区ＳＫ133	Ｇ-16	方形	83.0	83.0	82.0	FG-34 -SK14	弥生式土器 甑	中期後半	Fig.131	
137	Ⅱ区ＳＫ134	Ｇ-16	不定形	98.0	82.0	28.0	FG-34 -SK02	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.131	
138	Ⅱ区ＳＫ135	Ｇ-16	隅丸方形	174.0	173.0	46.0	FG-27 -SK03	弥生式土器 甕、壺、石錘	中期前半	Fig.131	
139	Ⅱ区ＳＫ136	Ｇ-17	円形	112.0	100.0	57.0	FG-38 -SK17	弥生式土器 器台	中期中葉	Fig.133	
140	Ⅱ区ＳＫ137	Ｇ-17	長方形	143.0	69.0	46.0	FG-38 -SK19	弥生式土器 甕、壺、支脚	中期中葉	Fig.133	
141	Ⅱ区ＳＫ138	Ｇ-17	長方形	373.0	195.0	20.0	FG-39 -SK01	弥生式土器 甕、壺、高坏、鉢、器台、支脚、柱状片刃石斧	中期中葉	Fig.134	
142	Ⅱ区ＳＣ05	Ｇ-16	方形	－	－	5.0	FG-47 -SC01	弥生式土器 甕、壺、無頸壺、蓋	中期末	Fig.135	
143	Ⅱ区ＳＣ06	Ｇ-16	方形	336.0	290.0	28.0	FG-36 -SC01	弥生式土器 甕、壺、無頸壺、蓋、器台	中期後半	Fig.135	
144	Ⅱ区ＳＣ07	Ｇ-16	方形？	230.0	225.0	23.0	FG-35 -SC01	弥生式土器 甕、器台	中期後半	Fig.135	
145	Ⅱ区ＳＣ08	Ｉ-17	不整円形	640.0	500.0以上	－	IJ-69-SD01	弥生式土器 甕	中期前半	Fig.135	
146	Ⅱ区ＳＣ09	Ｉ-18	方形	740.0	640.0	－	IJ-67-SD01	弥生式土器	後期	Fig.135	
147	Ⅱ区ＳＣ10	Ｉ-18	方形	470.0	455.0	－	IJ-77-SD01	弥生式土器 甕、壺、高坏、マリ	後期	Fig.135	
148	Ⅱ区ＳＣ11	Ｉ-18	方形	－	－	－	IJ-76-SD02	弥生式土器 甕	後期	Fig.135	
149	Ⅱ区ＳＤ05	Ｇ-16		208.0	28.0	36.0	FG-46 -SD01	弥生式土器 甕、土製面子	中期初頭	Fig.136	
150	Ⅱ区ＳＤ06	Ｇ-16		292.0	30.0	28.0	FG-35 -SD01	弥生式土器 甕、器台	中期前半	Fig.136	
151	Ⅱ区ＳＤ07	Ｇ-16		404.0	80.0	35.0	FG-35 -SK05	弥生式土器 甕、壺	中期前半	Fig.136	
152	Ⅱ区ＳＤ08	Ｇ-16		204.0	36.0	19.0	FG-34 -SD01	弥生式土器 甕、壺	中期初頭	Fig.136	
153	Ⅱ区ＳＤ11	Ｇ-16		708.0	135.0	46.0	FG-33 -SD01	弥生式土器 甕、器台、太型蛤刃石斧、扶入石斧	中期	Fig.136	
154	Ⅲ区ＳＫ117	Ｍ-15	円形	130.0	122.0	18.3	２区-17 -SK01	弥生式土器 壺	後期	Fig.144	
155	Ⅲ区ＳＫ118	Ｍ-15	楕円形	235.0	182.0	35.0	２区-17 -SK03	弥生式土器	中期	Fig.144	
156	Ⅲ区ＳＫ119	Ｍ-16	長方形	143.0	86.0	25.0	MN-47 -SK20	弥生式土器	弥生	Fig.144	
157	Ⅲ区ＳＫ120	Ｍ-16	楕円形	120.0	84.0	17.3	MN-16 -SK16	弥生式土器 甕、鉢	後期	Fig.144	
158	Ⅲ区ＳＫ121	Ｎ-17	楕円形	241.0	154.0	33.5	MN-16 -SK01	弥生式土器 甕、壺、高坏、器台	後期	Fig.144	
159	Ⅲ区ＳＫ122	Ｎ-17	楕円形	166.0	76.0	12.0	MN-16 -SK12	弥生式土器 甕、壺、小型鉢	中期前半	Fig.144	
160	Ⅲ区ＳＫ123	Ｎ-17	円形	115.0	109.0	28.0	MN-16 -SK11	弥生式土器 壺	中期前半	Fig.144	
161	Ⅲ区ＳＸ01	Ｎ-16	長方形	260.0	61.0	15.6	MN-2-SX03	弥生式土器	後期	Fig.144	
162	Ⅲ区ＳＤ12	Ｌ-16		1050.0以上	154.0	23.1	LM-SD01	弥生式土器 甕、壺、高坏	中期後半	Fig.145	

マー（**11028**、G16・17地区表面採集）、扁平片刃石斧（**11029**、G17地区第3号古墳墳丘部）、石製紡錘車（**11030・11031**、G17地区第3号古墳墳丘部）、太型蛤刃石斧（**11032**、LM16地区表土層）、柱状片刃石斧（**11033**、N17地区10号古墳石室）である。図面のみにとどめる。

第四節　小　　結

今回報告した生活遺構の報告をもって一応弥生時代に関しては墓地（甕棺ロード）以外の調査報告は終わったことになるが、以下では平成6年度に報告した掘立柱建物の調査成果と合わせて四次調査の成果について若干触れることとしたい。

第四次調査の行われた地区は、前述の通り過去の水田化事業のために相当の地形改変を受けており、竪穴住居址などの遺存状況は壁溝のみを残す程度であって、0.5～0.7m以上の削平が考えられよう。従って、調査区で確認された遺構が当該各時期に存在したものの全てでないことは明らかであるが、検出できた生活遺構の分布状況について時期別の変遷を見てみたい。

まず前期末では、Ⅰ区の一部及びⅡ区東端に僅かに住居址址、溝などが狭い範囲に見られ、小規模の墓地形成もあって以後の集落形成のさきがけとなっている。続く中期初頭では、Ⅰ区大型建物（SB02）とⅡ区東端部に不整形な土壙群が散在する。また、Ⅰ区北側には、多くの青銅器や玉類などの装身具を出土した当該期の特定集団墓地が隣接する。続く、中期前半では遺構分布はⅠ・Ⅱ区全域に拡がり、特にⅠ区特定集団墓の南側及びⅡ区東半部には梁・桁間の規模が1×2間をもつ掘立柱建物群と不整形の土壙群が群を構成している。また、中期中葉になると遺構群の分布範囲は前代と同様に調査区全域に見られるが、前代と比較すると梁・桁間規模は同様に1×2間ながら、柱間寸法や掘方規模の大きい掘立柱建物（SB10、16、20、37）などが新たな変化としてあり、これに不整形の土壙群が伴う。続く、中期後半の時期がもっとも遺構の分布範囲が拡大し、掘立柱建物の内容も多様となる。それは、Ⅰ・Ⅱ区全域、Ⅲ区の一部に及び、それぞれ掘立柱建物と不整形な土壙とが群を形成しているものである。掘立柱建物では、Ⅰ区東端部で梁・桁間規模が1×2間、1×1間の倉庫と考えられる建物群の南側に2×6間（SB06）の建物がある。この建物は、側柱内の中央部よりやや北寄りに棟持柱かと思われる柱穴を有するもので、床面積などの比較ではそれほど大規模とは言えないが倉庫以外の用途をもつものであろう。同区の西側には該期の不整形の土壙群が隣接して分布する。また、Ⅰ区の西側に拡がり、Ⅰ区に比較して地形的に高いⅡ区でも基本的には掘立柱建物と不整形土壙の組み合わせであるが、ここでも梁・桁間規模が1×2間の建物の他に3×5間（SB21）や3×4間（SB23）等の側柱のみの大型建物が知られる。続く、後期ではⅡ区西半以西を中心とする地区に竪穴住居址、1×2間規模の掘立柱建物などの分布が散発的に見られた。

第六章　第六次調査

(1)　調査概要

昭和56年度から開始した『飯盛・吉武団体営圃場整備事業』に伴う発掘調査は、昭和60年度に最終年の第六次を迎えることになった。これまでの報告書でも記したが、整備工事で影響のない部分については出来るかぎり保存するという基本方針から、発掘対象地は道路や灌漑用水・排水路、切土部分などに限っている。

第六次調査で発掘対象としたのは、Ⅱ、Ⅲ区と太田地区など計7か所である。Ⅱ、Ⅲ区は、西の飯盛山から東の室見川に緩やかに形成された扇状地のほぼ中央に位置し、南北幅80m×東西長300mで約24,000㎡の面積となる。中央に支線道路が南北に横切るために、東をⅡ区、西をⅢ区と便宜的に呼び分けた。またⅡ区東端部では、甕棺墓を主とする弥生時代の共同墓地があり、特に弥生時代の墓地を述べる時に限って「大石地区」と呼んでいる。大石地区の南側には『最古の王墓』としてマスコミ各社が過剰なほどの報道合戦を繰り返した第四次調査の吉武高木遺跡があり、北側には弥生墳丘墓として最初の発見となった第三次調査区の吉武樋渡遺跡が面している。この南北2か所の弥生墓地からは、豊富な副葬品が発見されていたことから、第六次調査でも同じような副葬品が出土し、権力層の成長や社会構造の解明に近づけるのではないかと期待された。

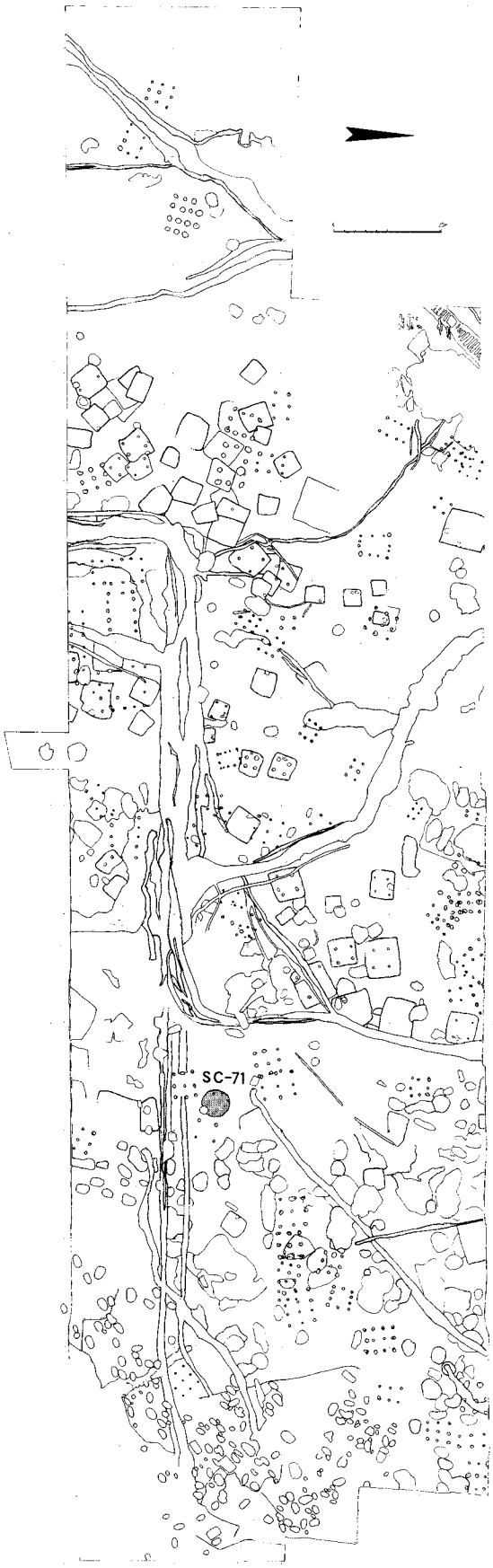


Fig. 147　Ⅱ、Ⅲ区遺構配置図

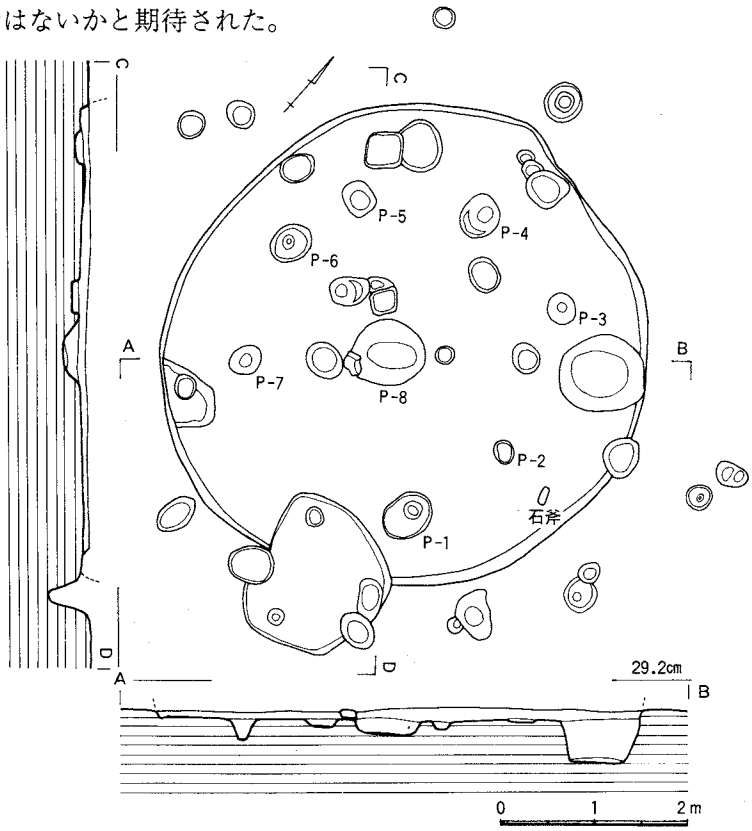


Fig. 148　竪穴住居址実測図（SC−71）（縮尺1/80）

大石地区の調査結果については、すでに報告書で述べているので繰り返さないが、その副葬品の種類や組み合わせ、土壙の規模などは、特定集団墓の高木遺跡とは明らかに格差があり、戦闘集団が存在する階層社会や集団戦を実際に経験した社会状況をも想像できるようになった。このように吉武遺跡群は、弥生時代の青銅器類や大型建物のみがあまりにも有名になっているが、発掘の成果はこれだけではない。Ⅱ、Ⅲ区の全面にわたって旧石器時代から古代、中世に至る遺構が密集して検出されている。今回は弥生時代の生活遺構の報告なので、取り上げることは出来ないが、溝で方形に区画された寺院跡は、瓦、中国産陶磁器、円面硯、青銅鏡、墨書土器など多種多様な遺物が出土しており、早良平野の地域史研究ばかりでなく、古代仏教史にとってきわめて貴重な遺跡である。

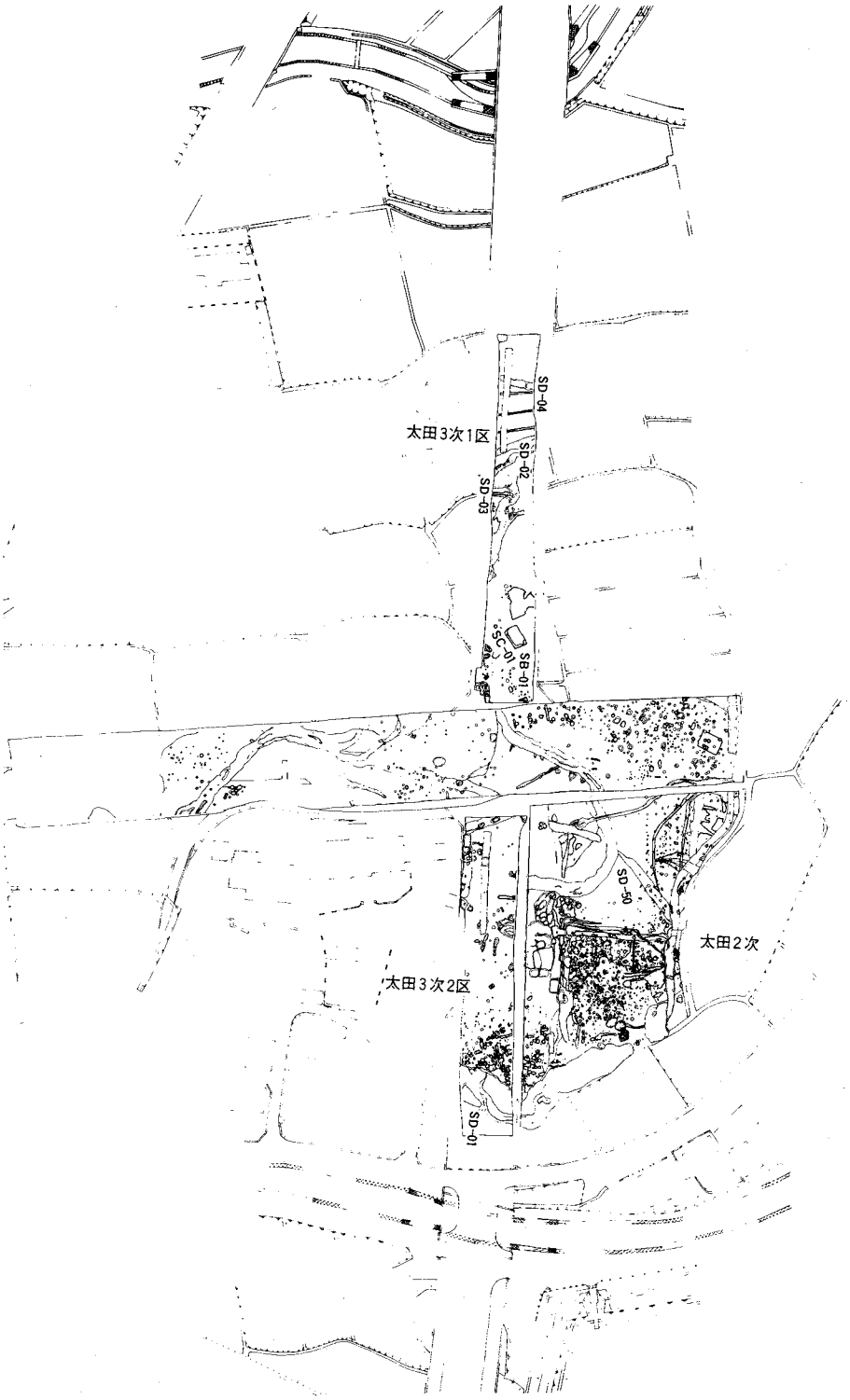


Fig. 149　太田地区全体図

(2)　Ⅱ・Ⅲ区

弥生時代の遺構として、甕棺墓地の他に竪穴住居、溝、土壙などを検出した。溝、土壙からは、弥生時代中期から後期にかけての土器や石器類が出土するものの、これらの多くは後世の攪乱や削平のために土師器や須恵器が混入しているので、弥生時代の遺構と特定できるものはない。竪穴住居は、西区今山産の玄武岩製太型磨製石斧が床面から発見された円形竪穴住居址を除くすべてが古墳時代に営まれた住居址である。

円形竪穴住居址は、今、南壁の一部を土壙で切られているが、正円に近い平面プランで、南北径5.1m、東西径5.18mを測る。壁の高さはわずかに9㎝しかなく、壁溝は掘られていない。水平な床面には25個のピットがあり、主柱は、その深さや位置からP-1～7が考えられる。P-8は中央土壙で西端に角礫があり、また両側に浅い小ピットもあることから、いわゆる「松菊里タイプ」の住居と言えなくもない。削平が激しいことから出土遺物は少なく、土器は12点を数えるにすぎない。いずれ

も小破片のために図化できないが、L字形断面の口縁部を作る甕や先の石斧などから、この竪穴住居址の時期を弥生時代中期と判断した。2万㎡を超す発掘区からすると、集落ではなく単独の住居は、きわめて異様な感じを受けるが、甕棺墓壙が少なくとも50㎝以上に削平されていることからして、弥生時代の竪穴住居址は残らなかった可能性が強い。

(3) 太田地区

『飯盛・吉武団体営圃場整備事業』の範囲は、大部分が飯盛山から東の室見川に延びる扇状地を占めている。この扇状地の南北には、南西から北東方向に流れる2本の川がある。北が日向川であり、南の扇端にそって流れるのが竜谷川である。

太田地区は、Ⅲ区より北側に約400m離れ、日向川を北に越えた位置に当たる。さらに北側には、西部運動公園近くで日向川に合流する小さな川があり、この二つの川に挟まれた範囲を太田遺跡群としている。第一次～第六次の調査区の「吉武遺跡群」と区別したのは、土地利用など歴史的変遷が異なることが予想されたからである。

太田遺跡群の中央には、東西方向の市道田・飯盛線と南北方向の市道野方・金武線の二つの市道が交差しており、今回報告する圃場整備に伴う発掘区は、この交差点の東南部に接しており、その面積は2,800㎡である。道路建設工事に先立って発掘調査が行われているので、太田遺跡群ではこれまで3次にわたって発掘調査が実施されたことになる。

第Ⅰ次は、昭和60年(1985)に東西方向の市道田・飯盛線（同事業としては第3次調査となる）建設に伴うもので、図149のように日向川の西側で幅20m、長さ200mにわたって調査が行われ、発掘区の中央付近で掘立柱建物13棟、竪穴住居跡1軒、土壙13基、溝3条などの遺構が検出されている。

第Ⅱ次は、今回報告する圃場整備の調査に当たる。

第Ⅲ次は、昭和62年(1987)に南北方向の市道野方・金武線（同事業としては第3次調査となる）建設に伴うもので、調査区は幅16m、長さ200mの3,200㎡である。調査の結果、田・飯盛線の北側のⅠ

Fig. 150　遺構配置図（縮尺1/500）

区では甕棺墓１基、掘立柱建物３棟、溝２条、水田跡１面、竪穴住居址（？）１軒、南側のⅡ区では、土壙18基の他に溝や杭列などが確認されている。Ⅰ、Ⅲ次とも弥生時代後期～古墳時代の土器が出土しているが、Ⅲ次では特に近世の陶磁器や瓦類が多量に発見されている。

第Ⅰ、Ⅲ次調査ともすでに報告書が発行され、今回の報告は「太田遺跡Ⅱ」という書名で単独に発行すべきであるが、弥生時代の生活遺構に限定しているので、本報告は後日に譲ることにする。

第Ⅱ次発掘区の東南側は、蛇行して北東方向に流れる日向川の浸食によって一段低くなっており、遺構も希薄と思われた。しかし全面にわたって遺構が認められ、結果的には、ピット(SP)は217個、土壙(SK)は17基、溝(SD)は24条、掘立柱建物(SB)は９軒、井戸(SX)は１基の遺構を検出した。これら番号を付した遺構は、何らかの遺物を出土したものである。ピットは遺物がないものが圧倒的に多い。これらのうち弥生時代と特定できるのは溝(**SD-50**)である。この溝は、北西から深さを増して南東方向に20ｍのびている。断面は中央部で逆台形で幅2.4ｍ，深さ50cmを測り、南東端は溝(SD-53)で切られている。溝底には３か所で不整円形の窪みがあり、それぞれに弥生時代後期の土器が入り込んでいた。図化した２点の二重口縁壺は、同じ窪みから発見されたもので、ほぼ完形な姿を留めていた。他の２か所の窪みからは、甕や器台などの大きな破片が出土していることから、意図的に埋置した可能性がある。

遺　物　２点ともほぼ大きさで、胎土、器面の調整、焼成などきわめてよく似た特徴を持っている。１は、口径19.7cm、器高35cm、胴部最大径26.3cm。円形に近い胴部の中位と頸部に三角突帯を巡らせているが、胴部の突帯は断面台形に近い。外面は細かなハケ目を施しているが、内面は粗いハケ目を併用している。２は口径19.4cm、器高36.8cm、胴部最大径27.2cmで、わずかに大きい。ハケ目調整の方法は類似しているが、胴部の突帯と口縁の反転部に刻み目を付け、口縁端部が上方に小さく立ち上がりるなどの違いもある。２点とも胴部突帯付近に無数の小さな刺突文が認められる。

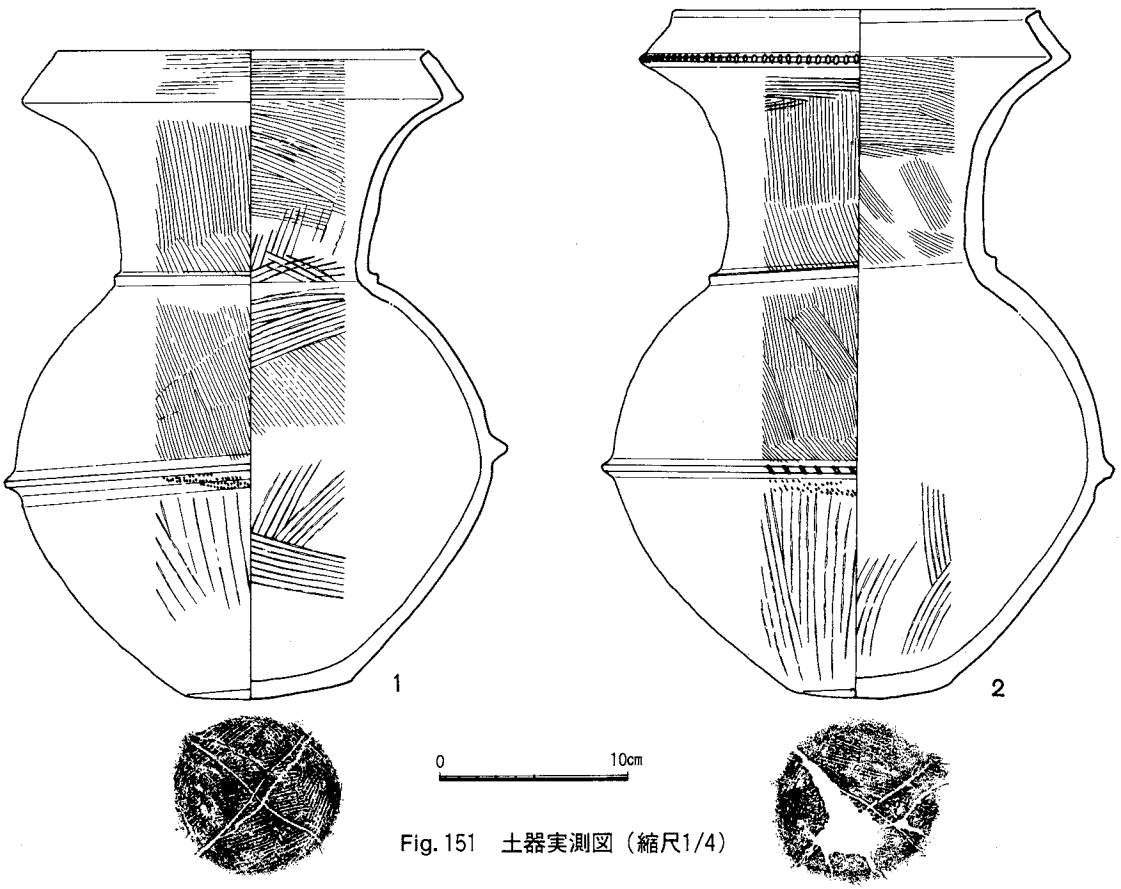
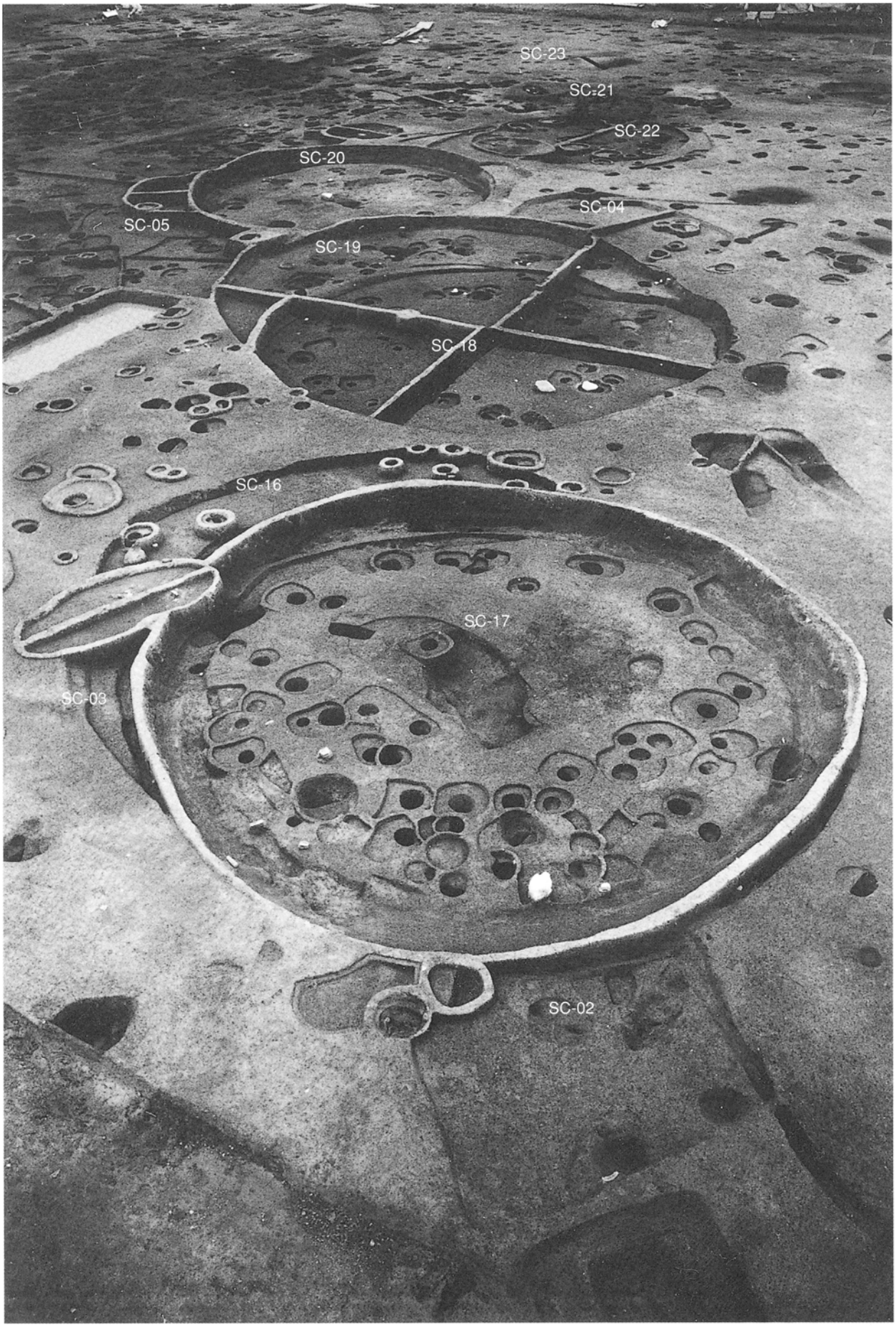


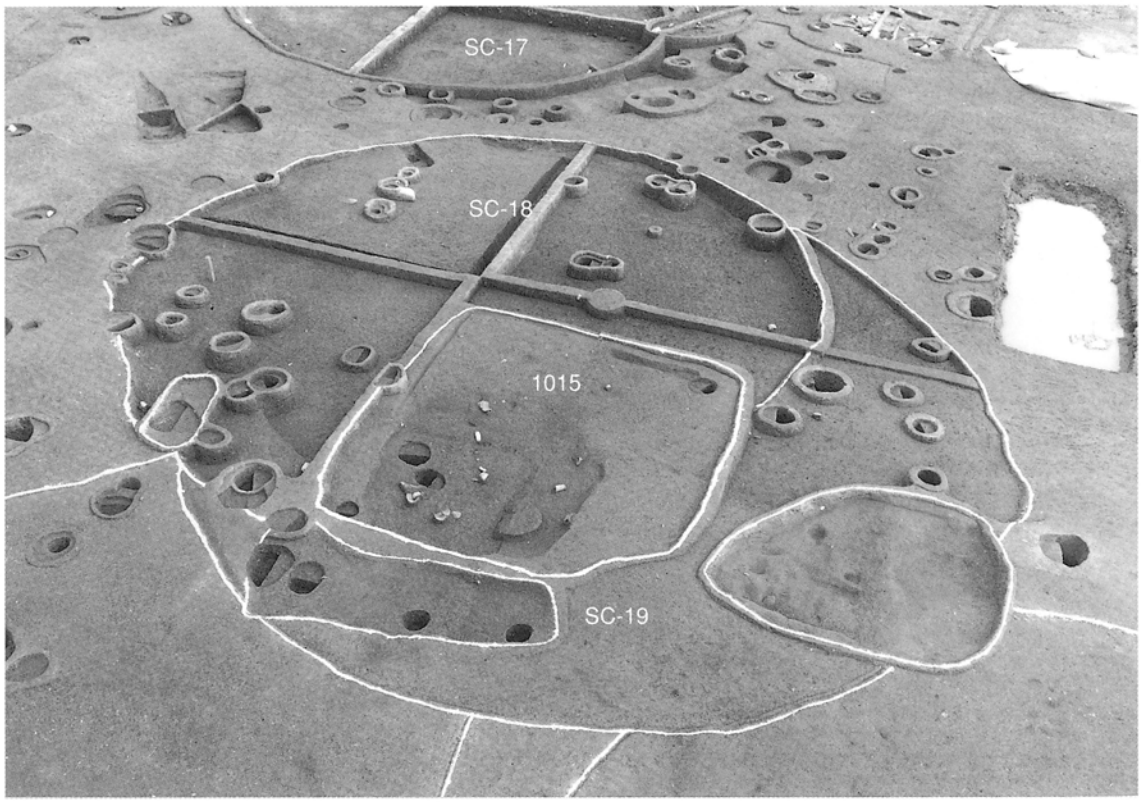
Fig. 151　土器実測図（縮尺1/4）

図　版

P L A T E S



第一次調査Ⅱ区SC-02・16～18全景（北東から）



1　第一次調査Ⅱ区SC-18・19・1015、SX-05切合関係（西から）

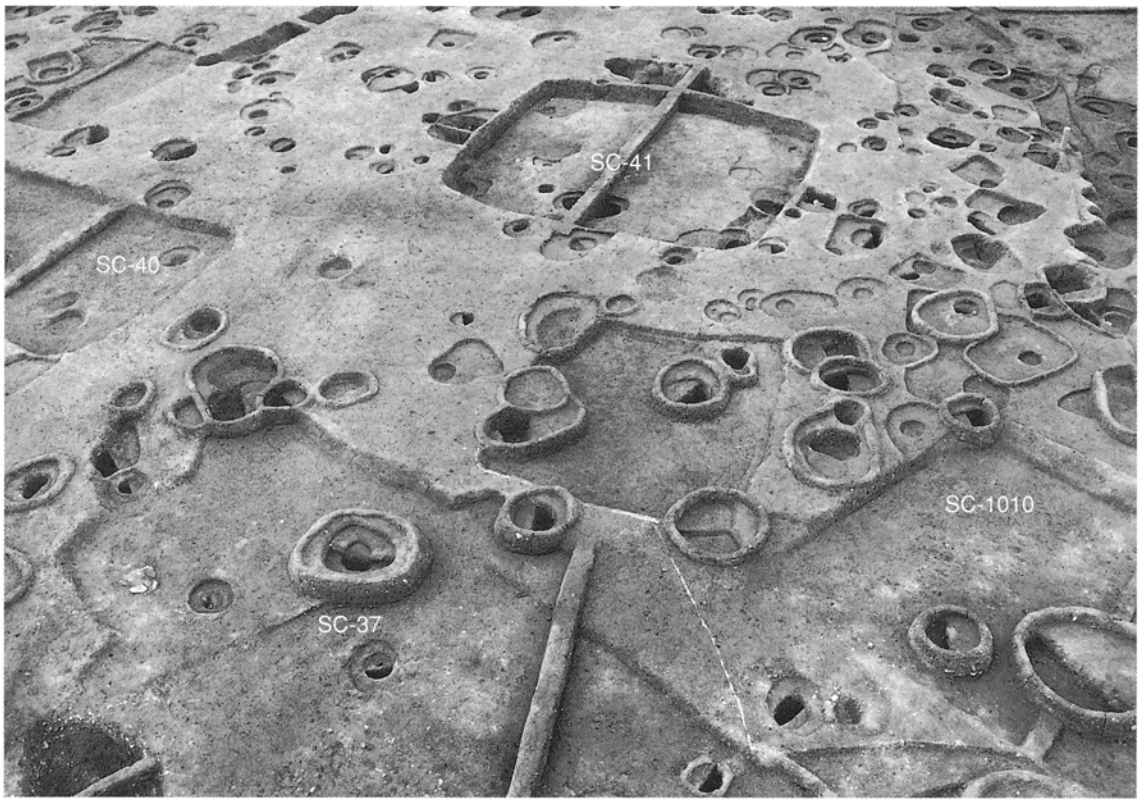
2　第一次調査Ⅱ区甕棺、住居址等切合関係（南東から）

1　第一次調査Ⅱ区甕棺と遺構検出状況（南東から）

2　第一次調査Ⅱ区SC-18～20の切合関係（　東から）

1　第一次調査Ⅱ区SC-16・19～23（北西から）

2　第一次調査Ⅱ区調査区近景（南北隅から）

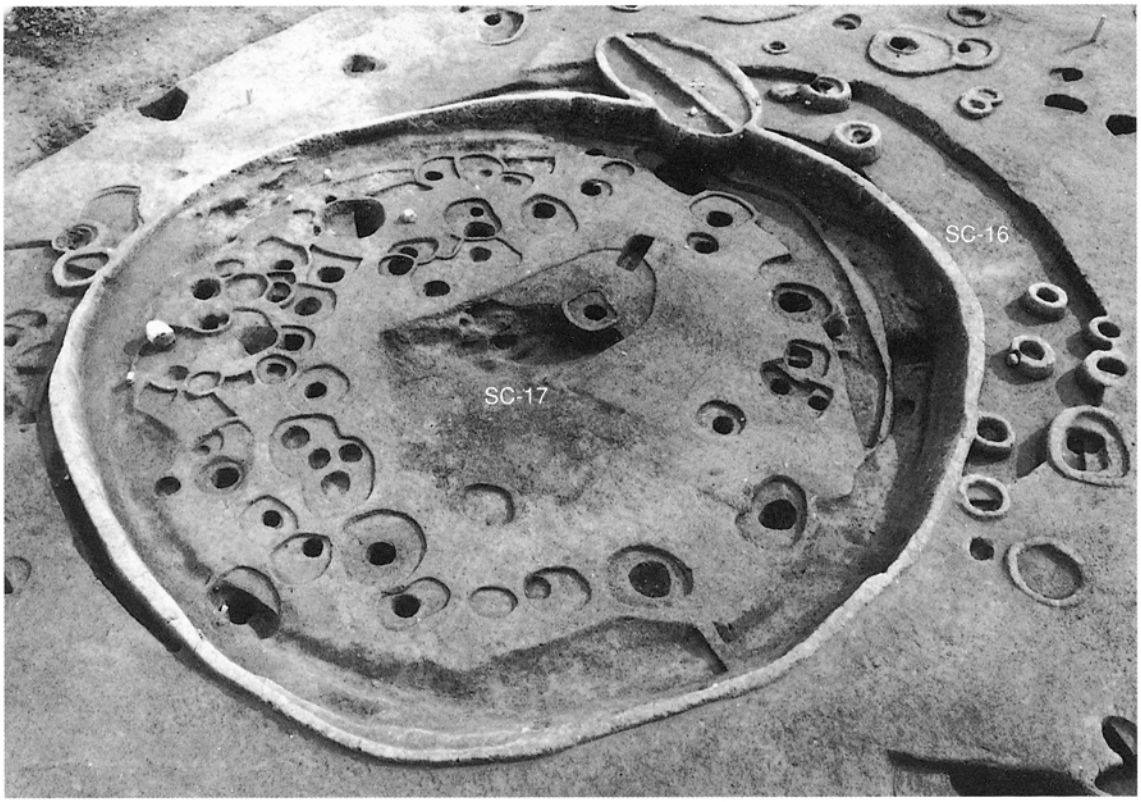


1　第一次調査Ⅱ区SC-37・40・41・1010（南東から）

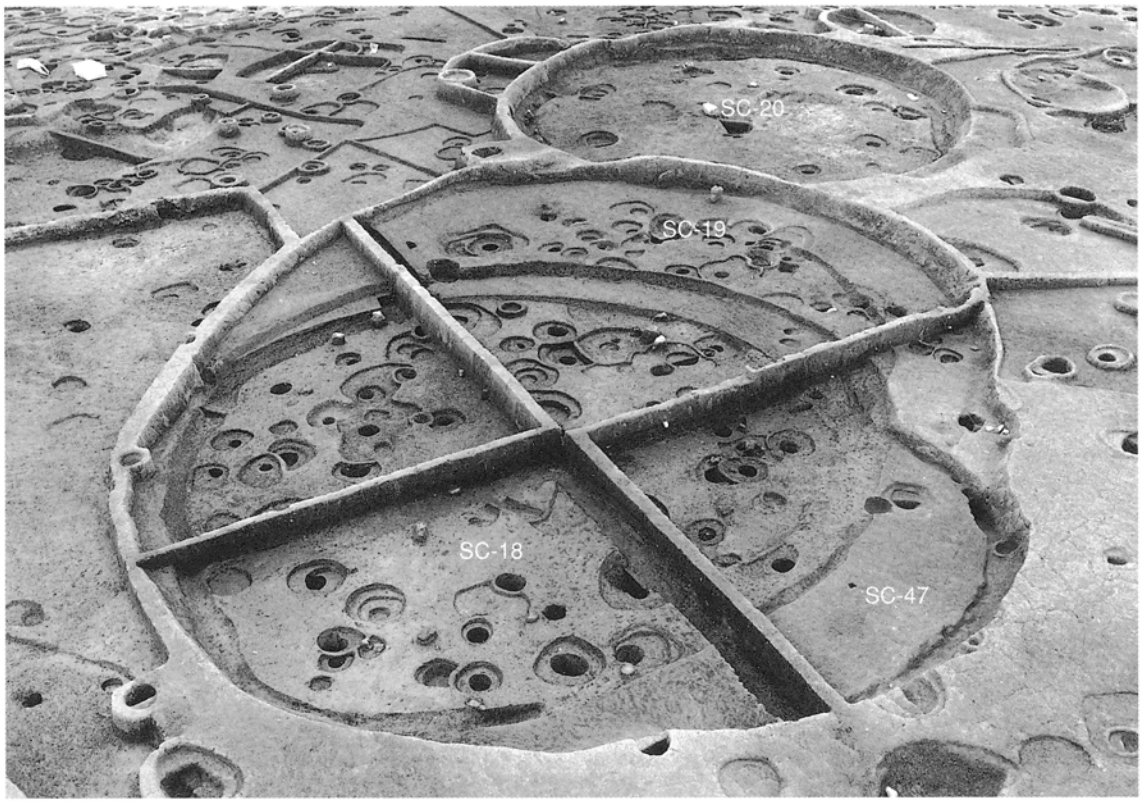
2　第一次調査Ⅱ区SC-26・27全景（南西から）

1　第一次調査Ⅱ区SC-37・40・42・1010全景（北東から）

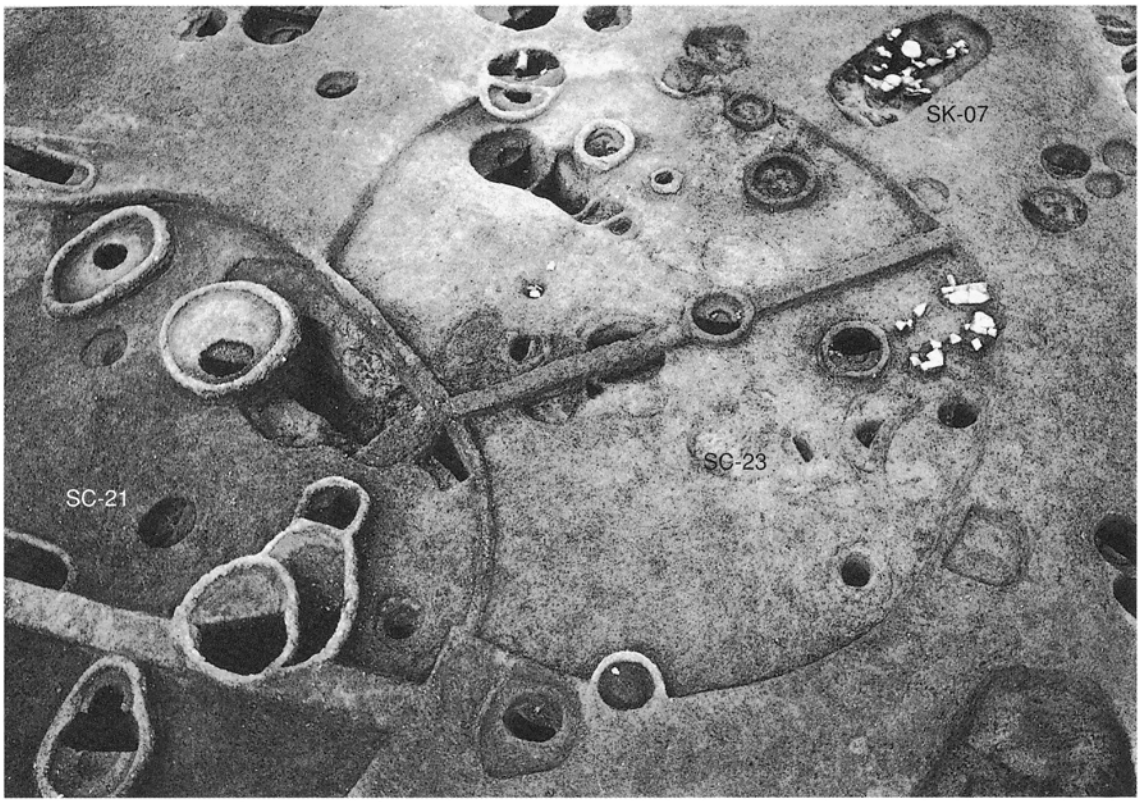
2　第一次調査Ⅱ区SC-25・34・35・41・46・SC-01全景（西から）



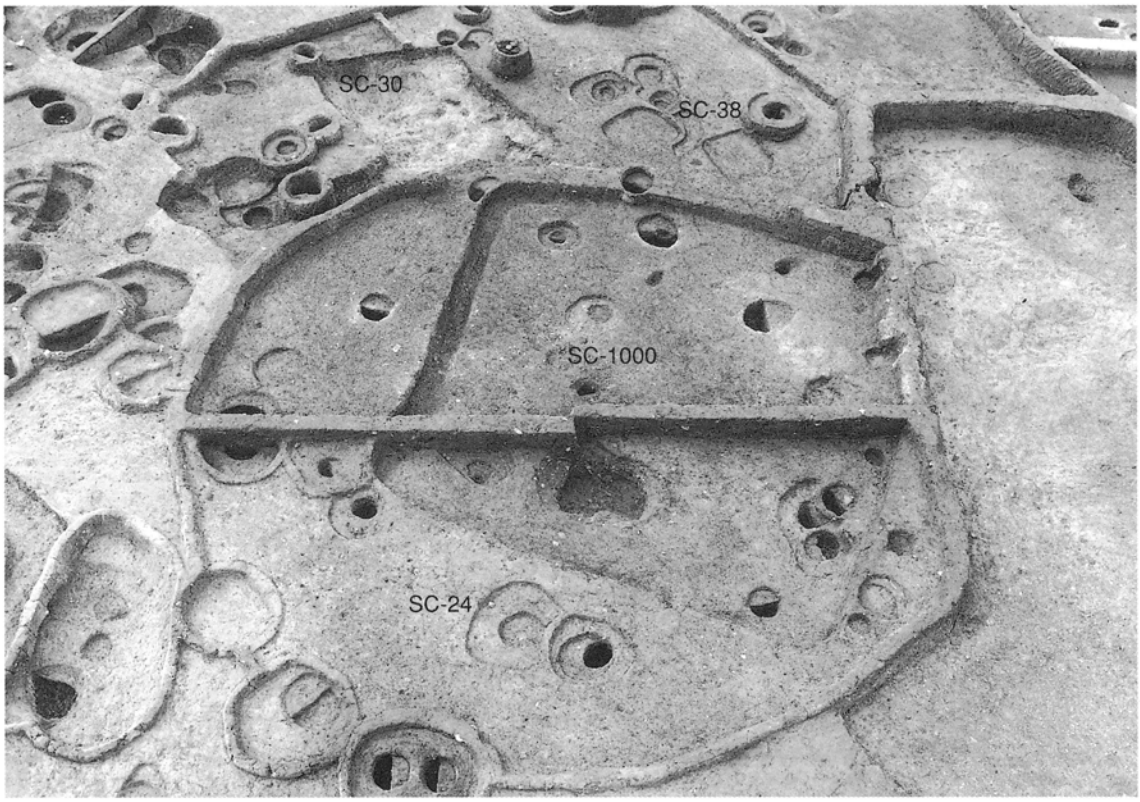
1　第一次調査Ⅱ区SC-16・17全景（北から）



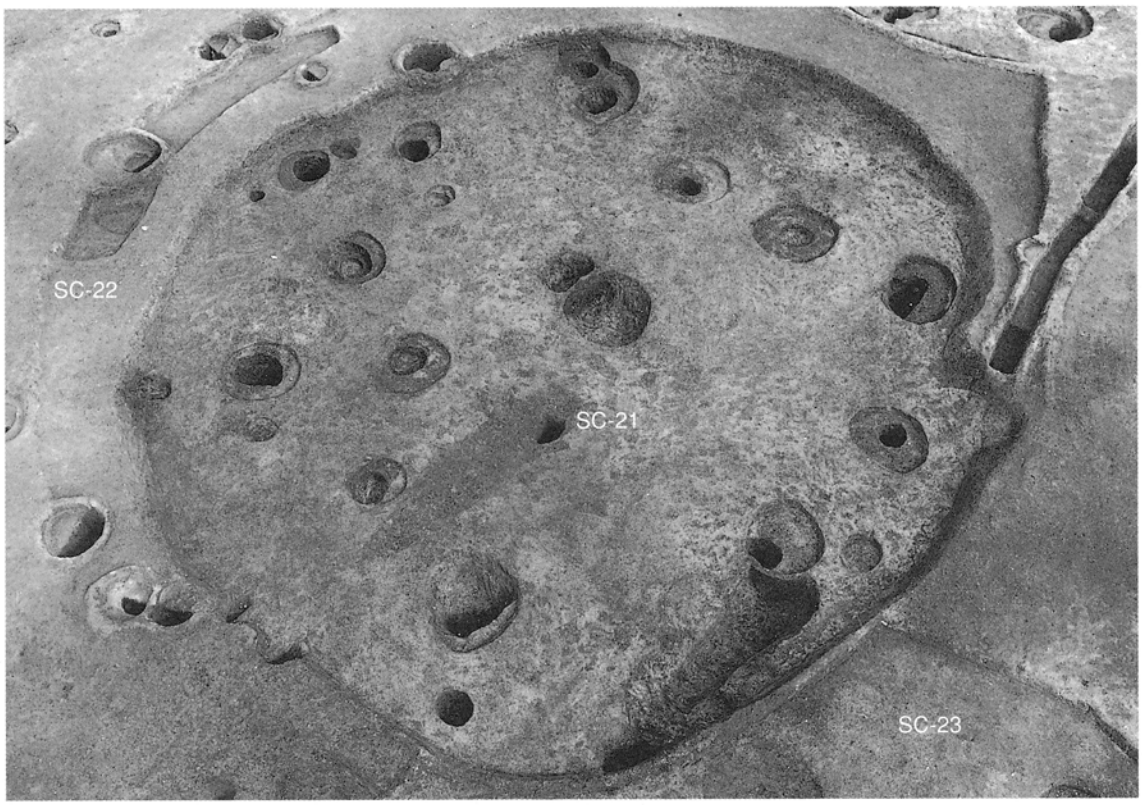
2　第一次調査Ⅱ区SC-18～20全景（北東から）



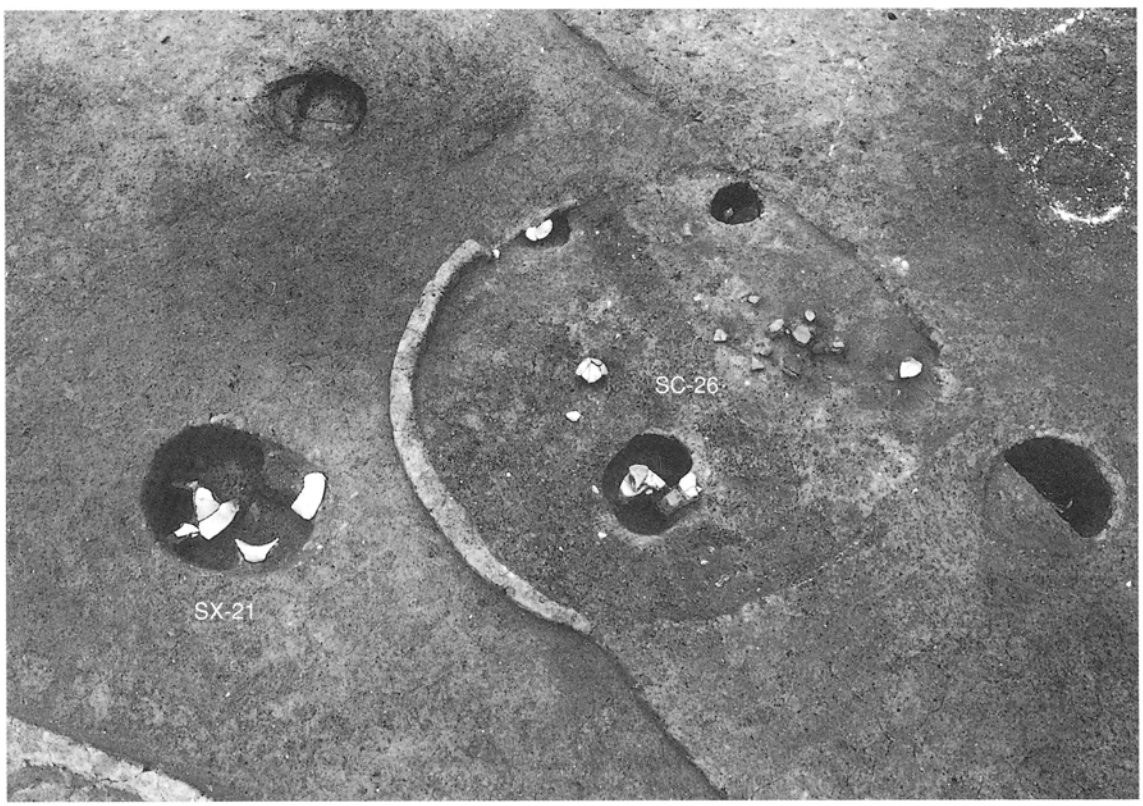
1　第一次調査Ⅱ区SC-23全景（西から）



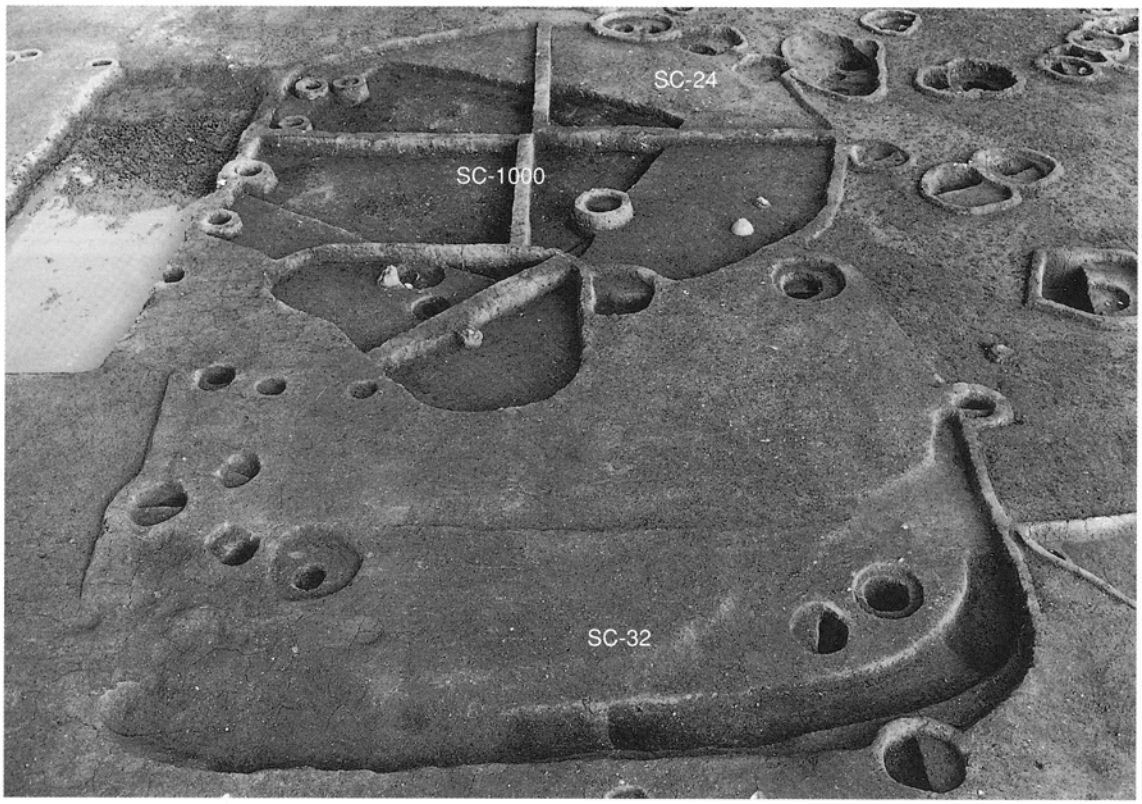
2　第一次調査Ⅱ区SC-24・1000全景（東から）



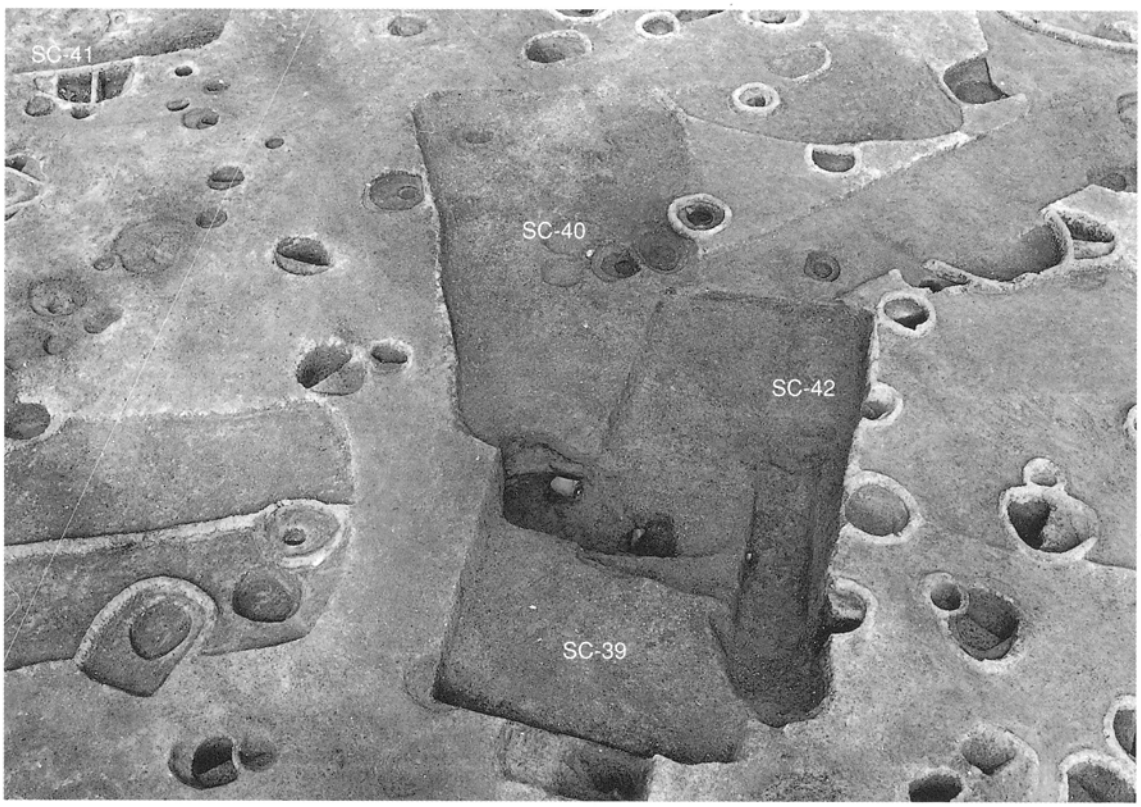
1　第一次調査Ⅱ区SC-21～23全景（南から）



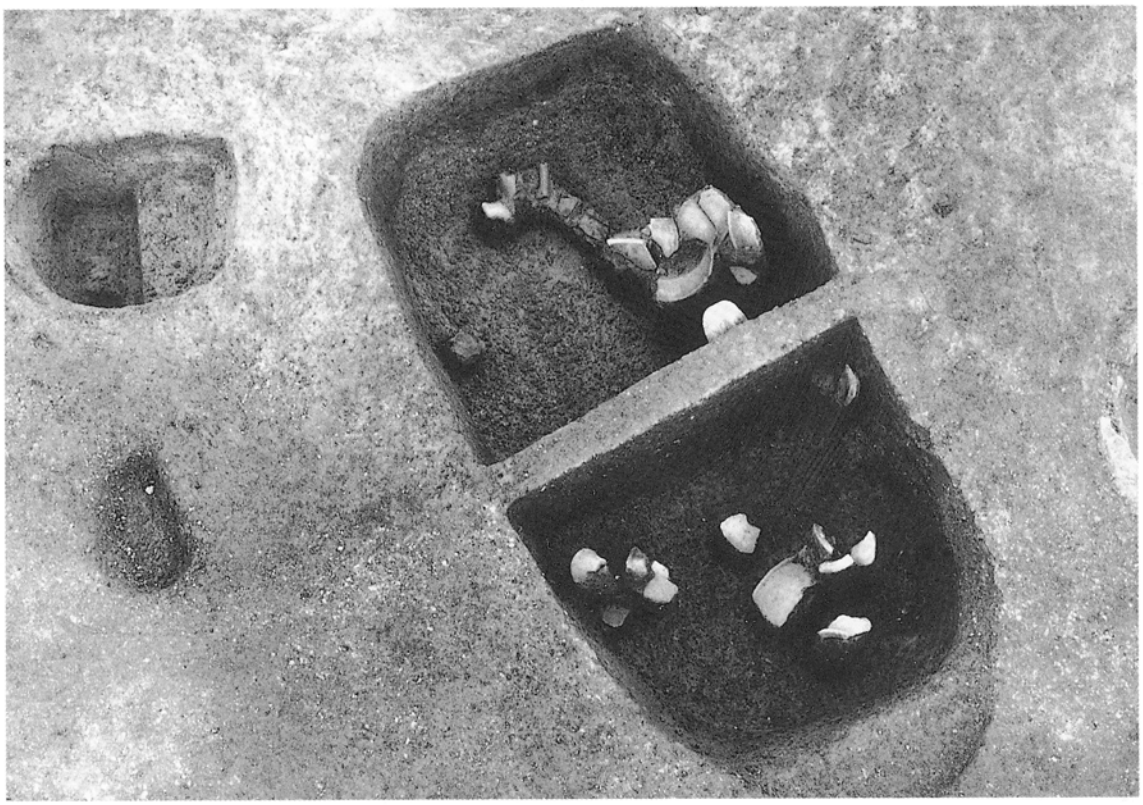
2　第一次調査Ⅱ区SC-26、SX-21全景（南から）



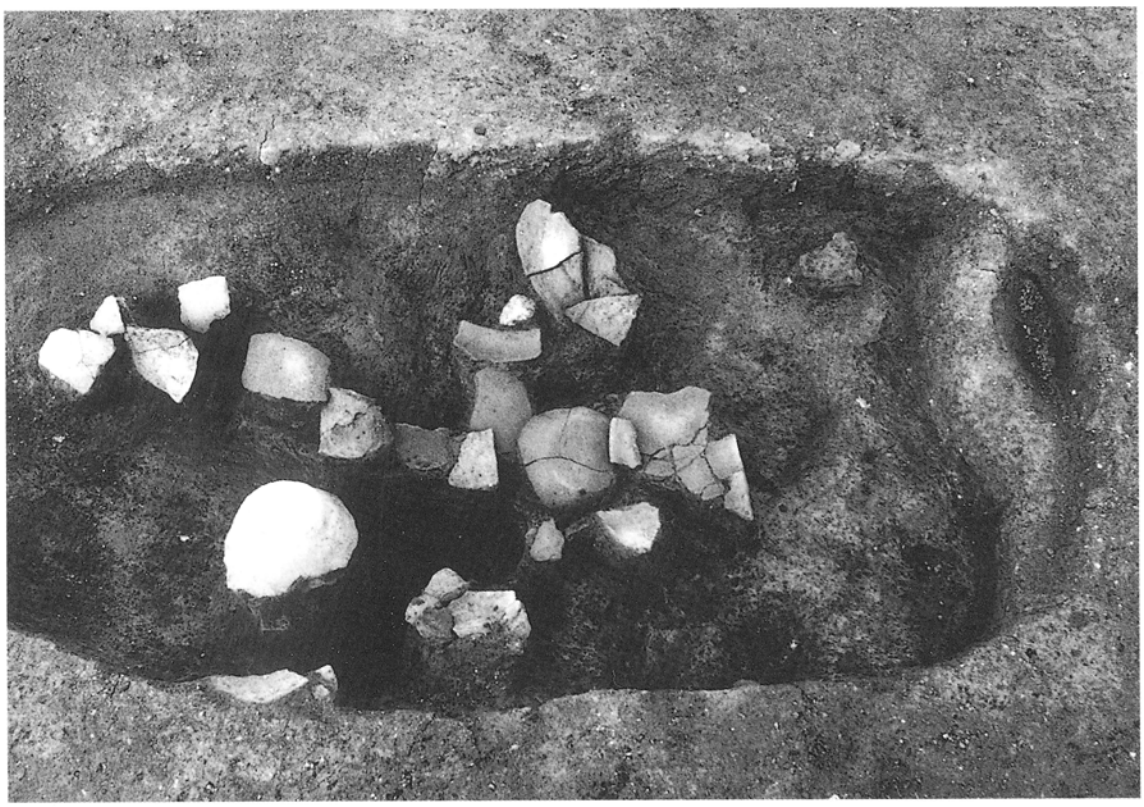
1　第一次調査Ⅱ区SC-24・32・1000全景（西から）



2　第一次調査Ⅱ区SC-39～42全景（南西から）



1　第一次調査Ⅱ区SK-02検出状況（南西から）

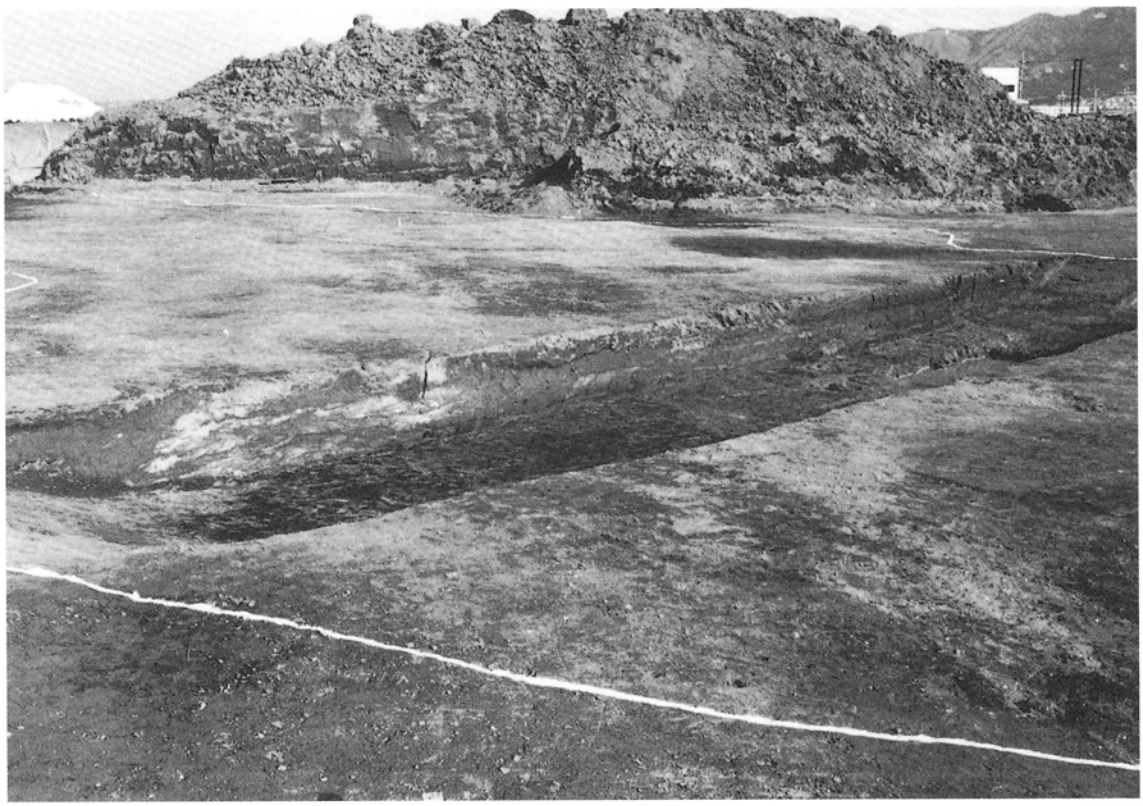


2　第一次調査Ⅱ区SK-07遺物出土状況（南西から）

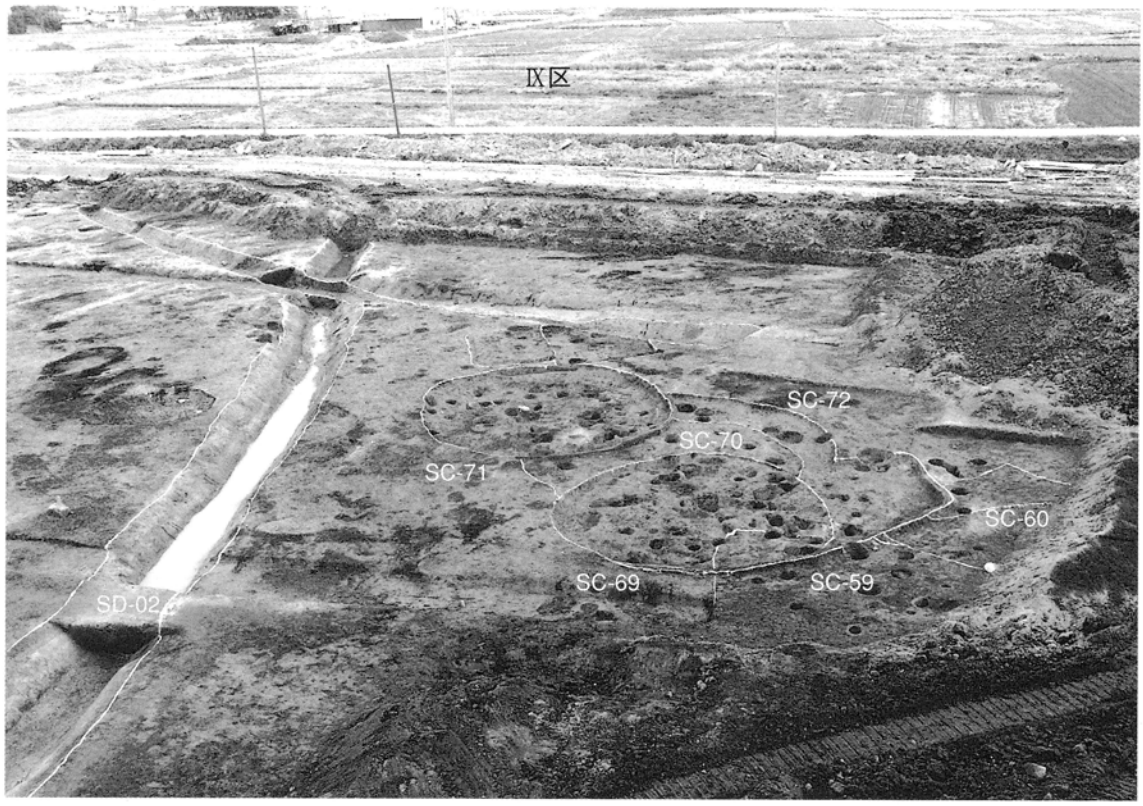
1　第一次調査Ⅱ区SD-01全景（西から）

2　第一次調査Ⅱ区SD-01遺物出土状況（西から）

1　第一次調査Ⅲ区SD-01北側全景（南から）



2　第一次調査Ⅲ区SD-01土層断面（南西から）



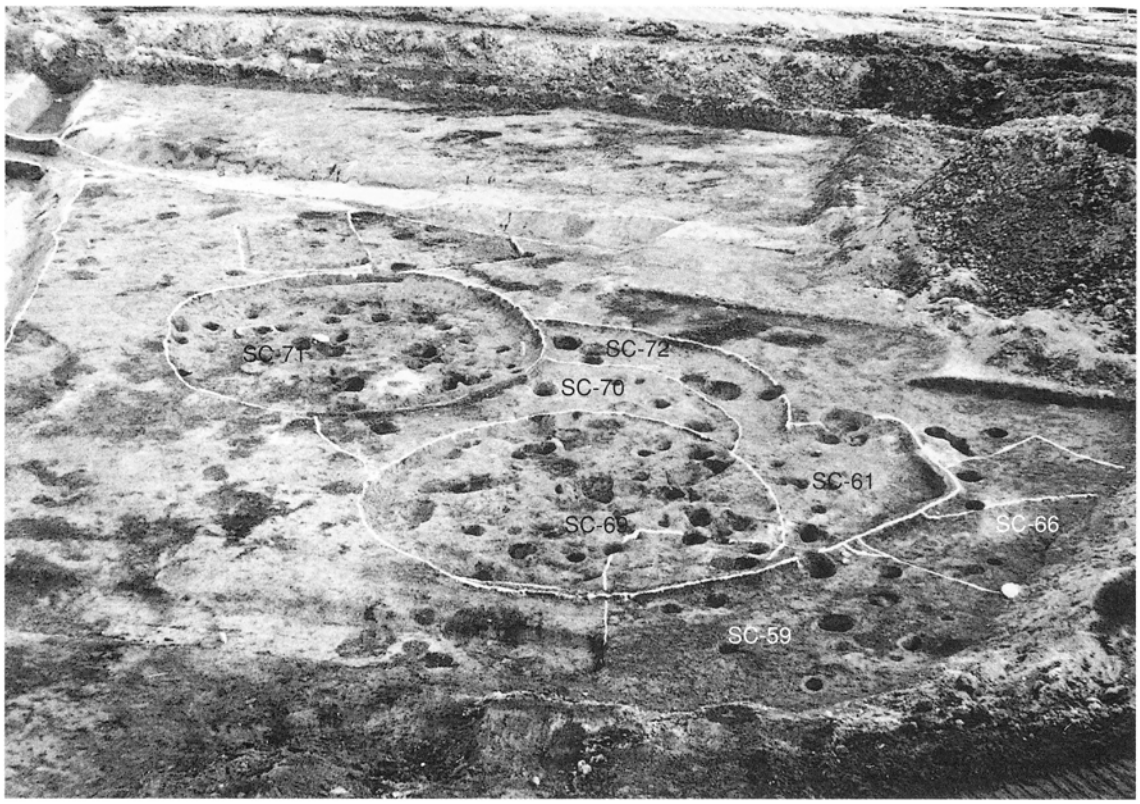
1　第一次調査Ⅳ区南西部全景（北から）

2　第一次調査Ⅳ区中央部全景（東から）

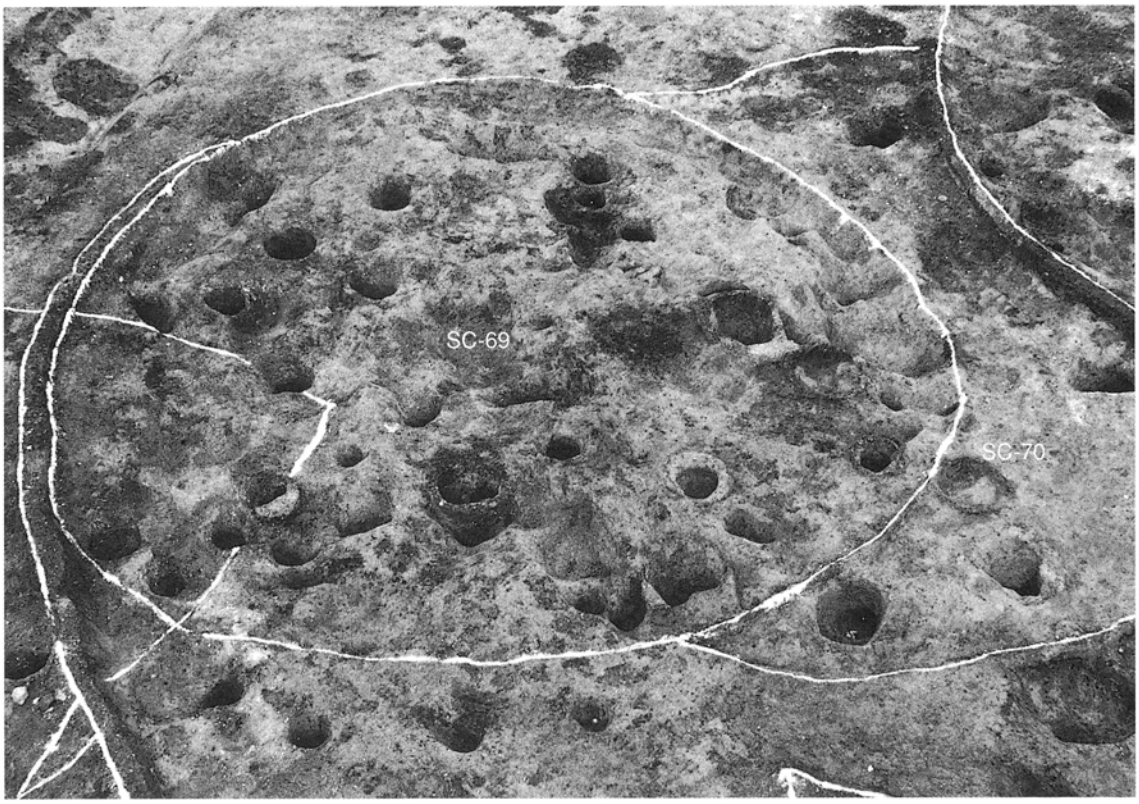
1　第一次調査Ⅳ区中央部全景（北西から）

2　第一次調査Ⅳ区南側全景（北西から）

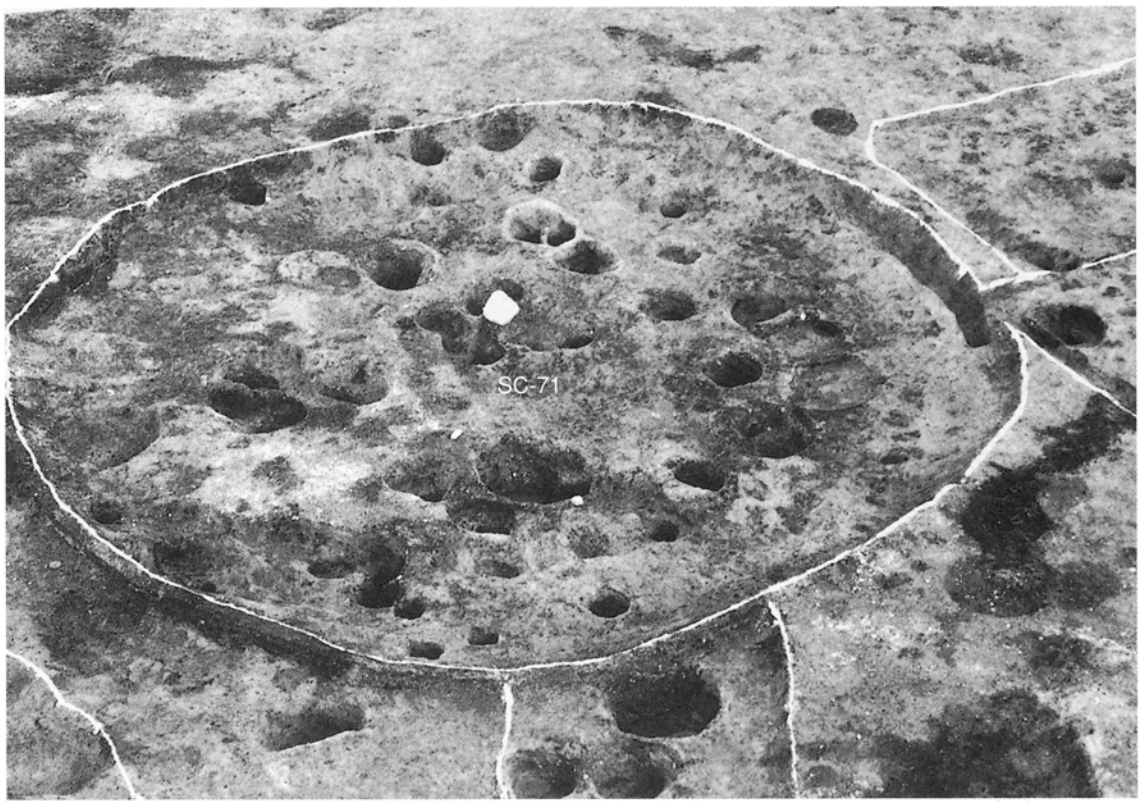
1　第一次調査Ⅳ区中央部近景（東から）



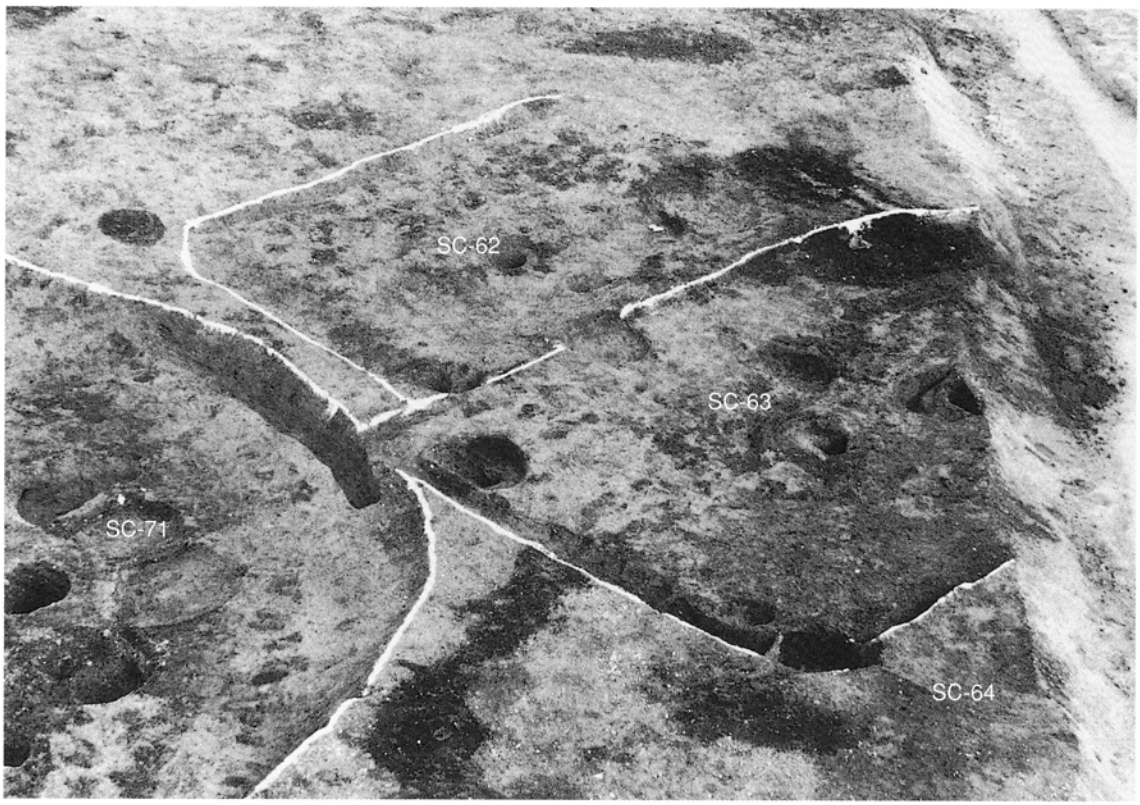
2　第一次調査Ⅳ区南西部近景（北から）



1　第一次調査Ⅳ区SC-69（北から）

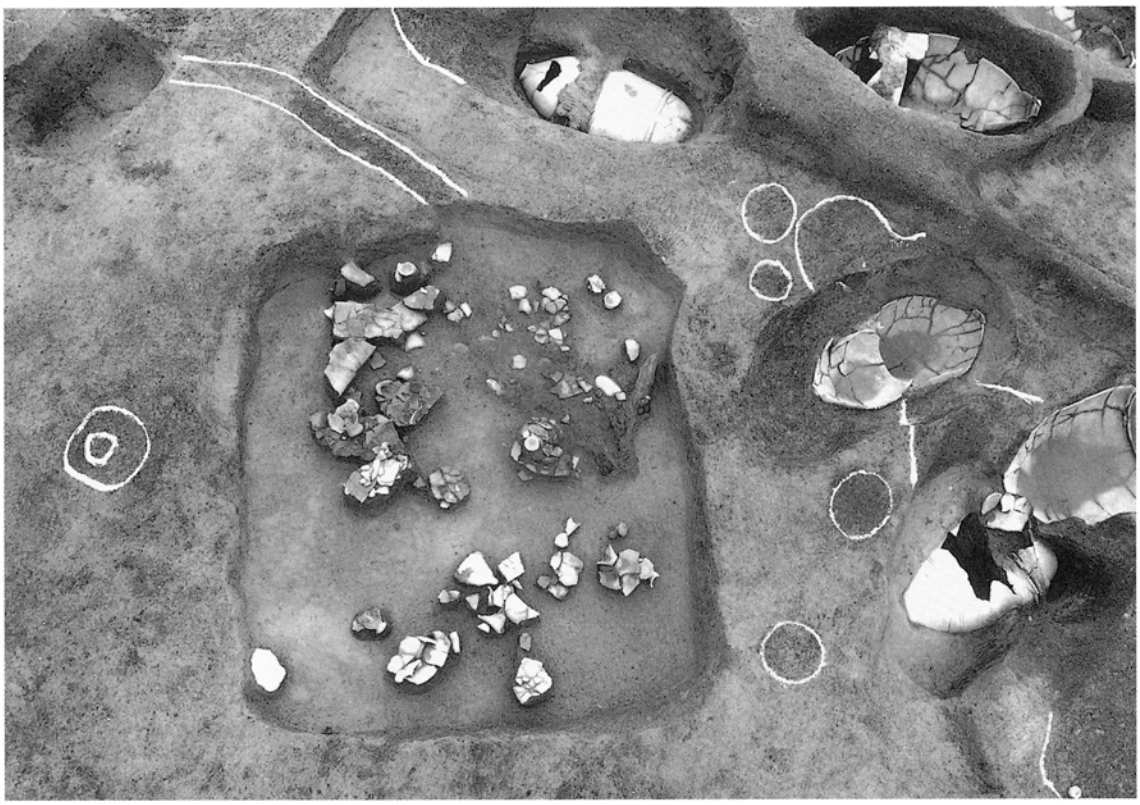


2　第一次調査Ⅳ区SC-71（北南から）



1　第一次調査Ⅳ区SC-62・63（北から）

2　第一次調査Ⅳ区中央部近景（北東から）

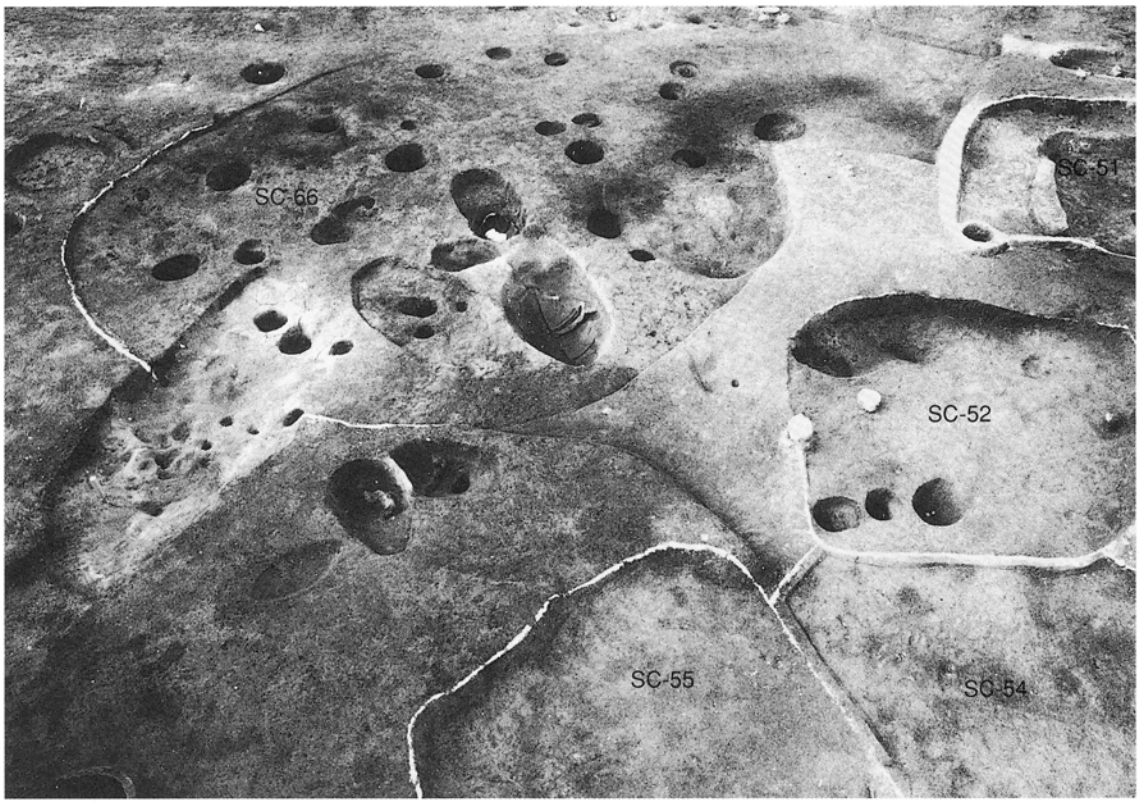


1　第一次調査Ⅳ区SC-53全景（北西から）

2　第一次調査Ⅳ区中央部SC-67近景（北東から）

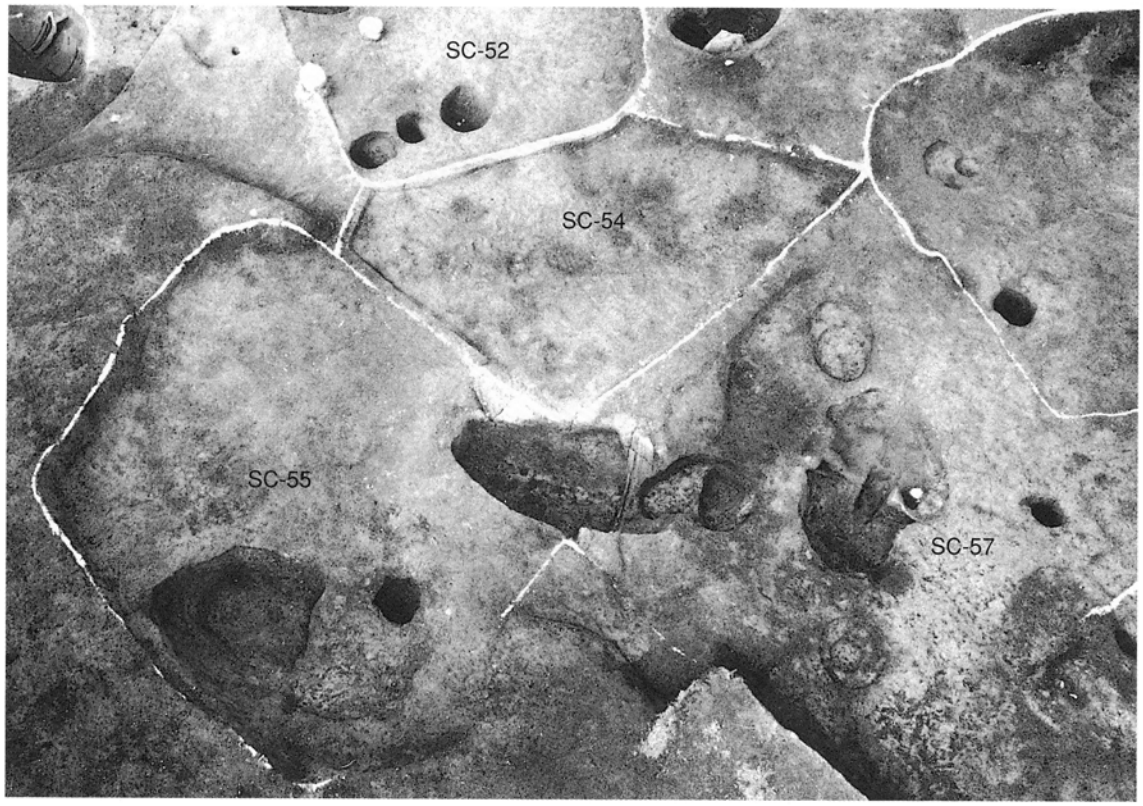
1　第一次調査Ⅳ区SC-67・SX-55全景（南から）

2　第一次調査Ⅳ区SC-67完堀状態（西から）

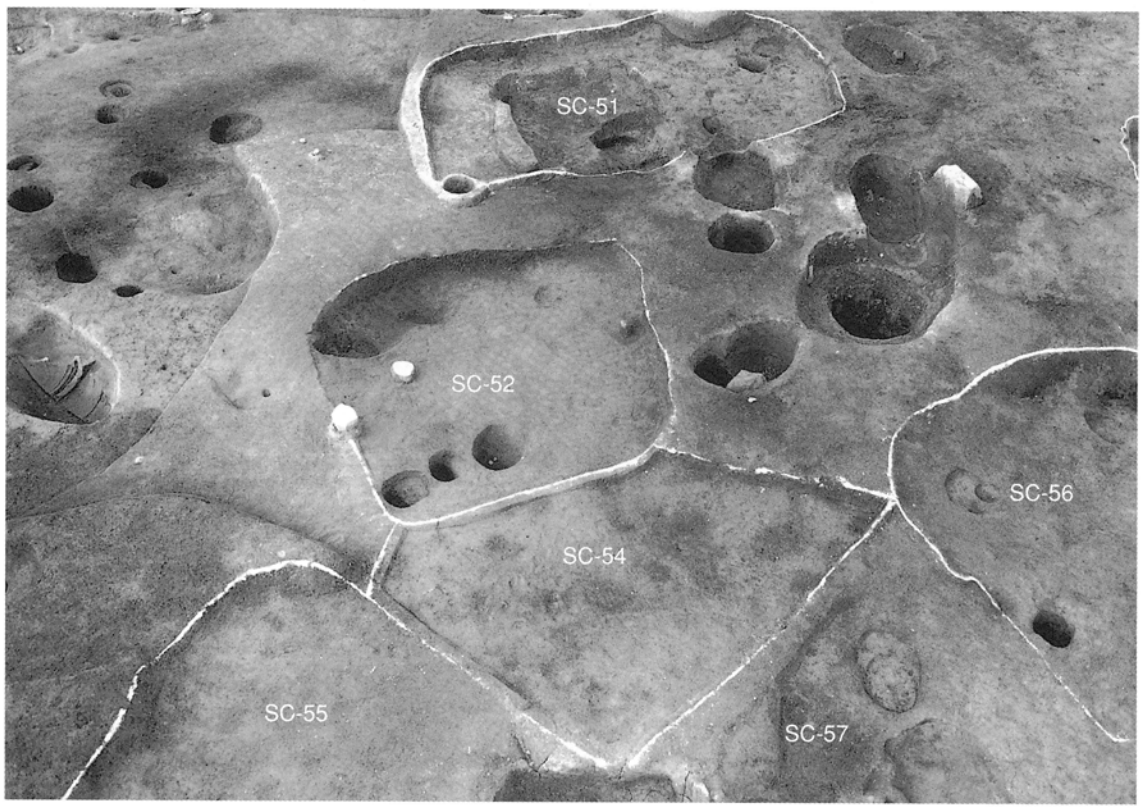


1　第一次調査Ⅳ区SC-51・52・55・66（南から）

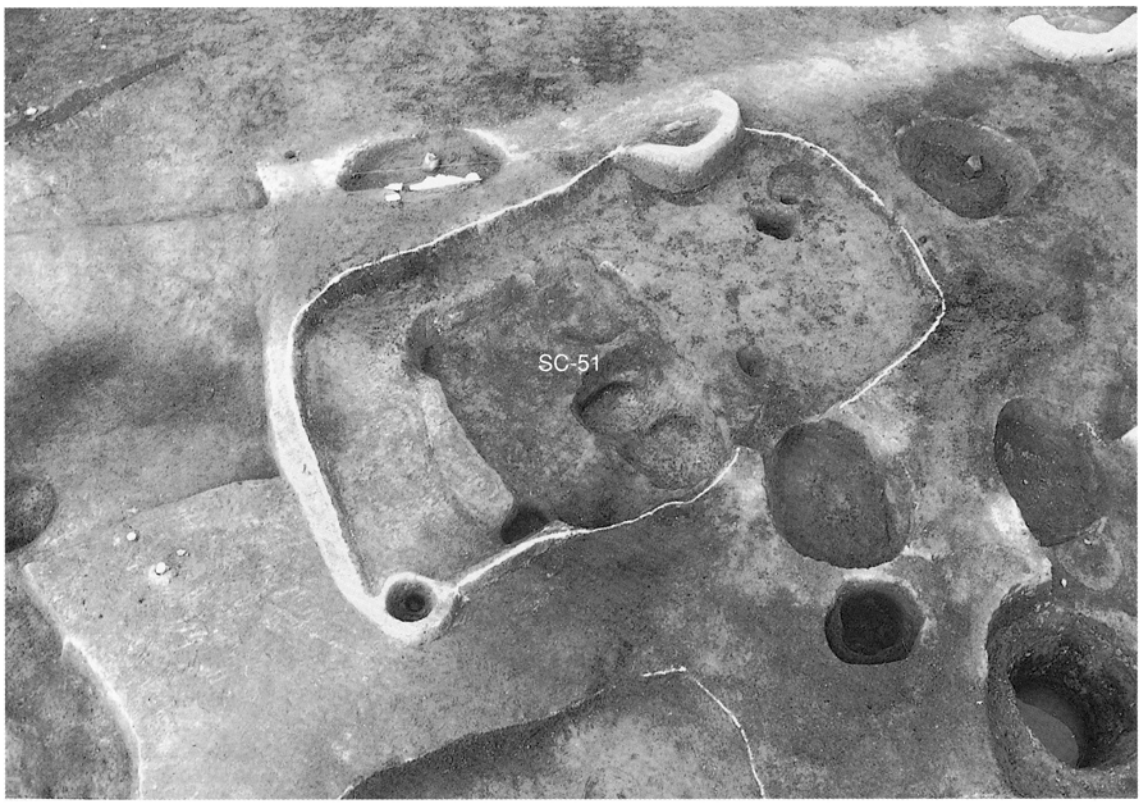
2　第一次調査Ⅳ区SC-50・66全景（南から）



1　第一次調査Ⅳ区SC-52・54～56近景（南西から）



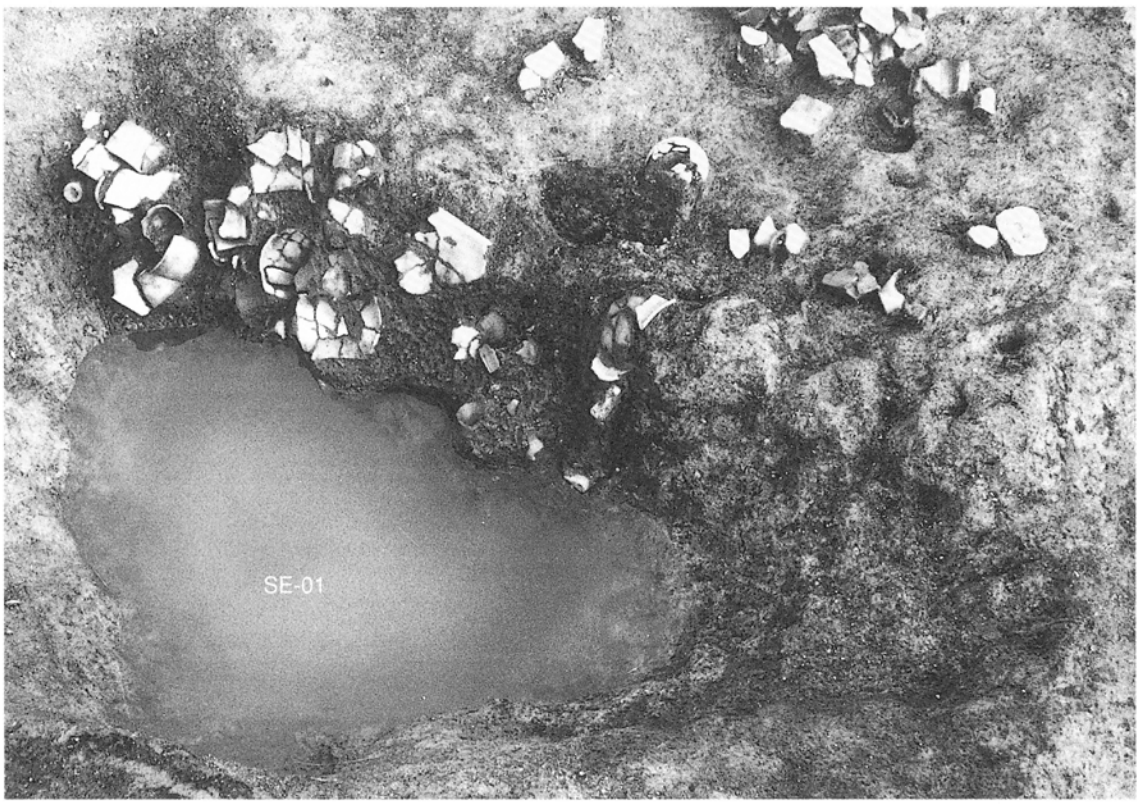
2　第一次調査Ⅳ区SC-51・52・54～56・66切合関係（南西から）



2　第一次調査Ⅳ区SC-51近景（南西から）

2　第一次調査Ⅳ区SX-55近景（北から）

1　第一次調査Ⅳ区SC-65、SE-01、SD-03（北から）



2　第一次調査Ⅳ区SE-01近景（北から）

1　第二次調査Ⅴ区SD-11全景（北から）

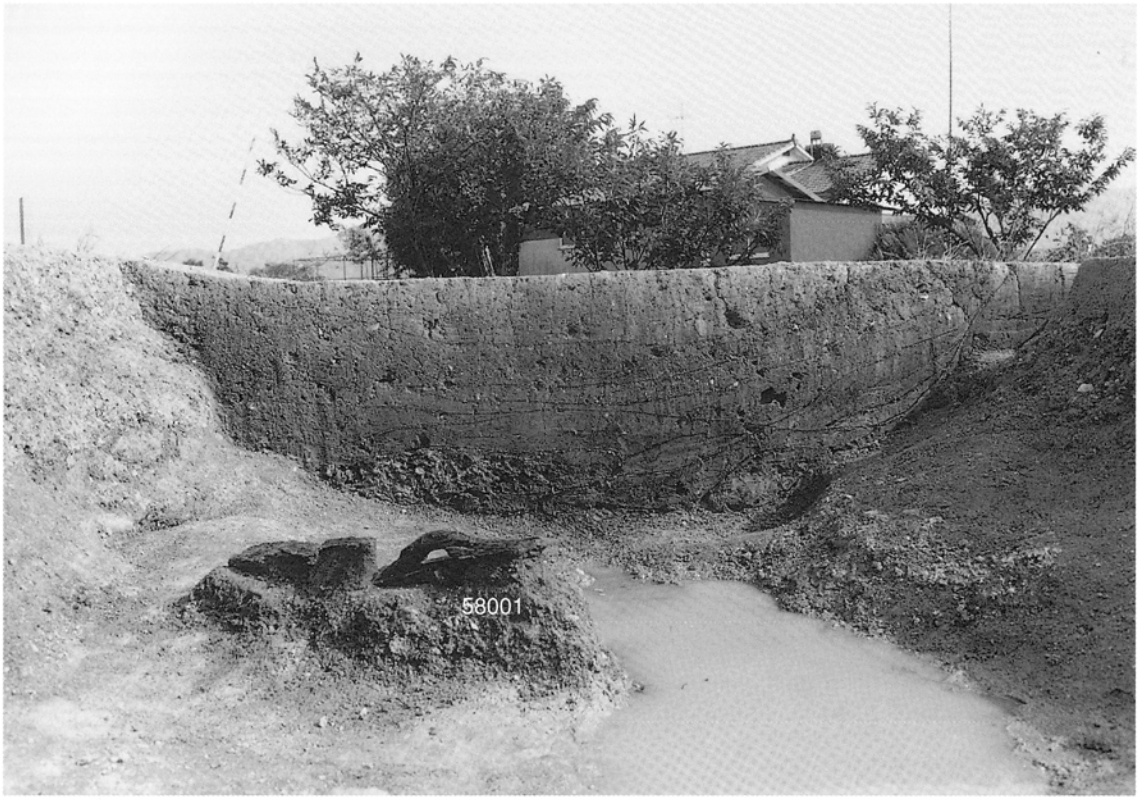
2　第二次調査Ⅴ区SD-11全景（北西から）

1　第二次調査Ⅴ区SD-10と古代溝の切合関係（北東から）

2　第二次調査Ⅴ区SD-10・11の合流地点（南西から）

1　第二次調査Ⅴ区SD-11近景（北東から）

2　第二次調査Ⅴ区SD-11近景（北から）



1　第二次調査Ⅴ区SD-10土層断面（北西から）

2　第二次調査Ⅴ区SD-11土器出土状態

1　第二次調査Ⅴ区SD-10土器出土状態

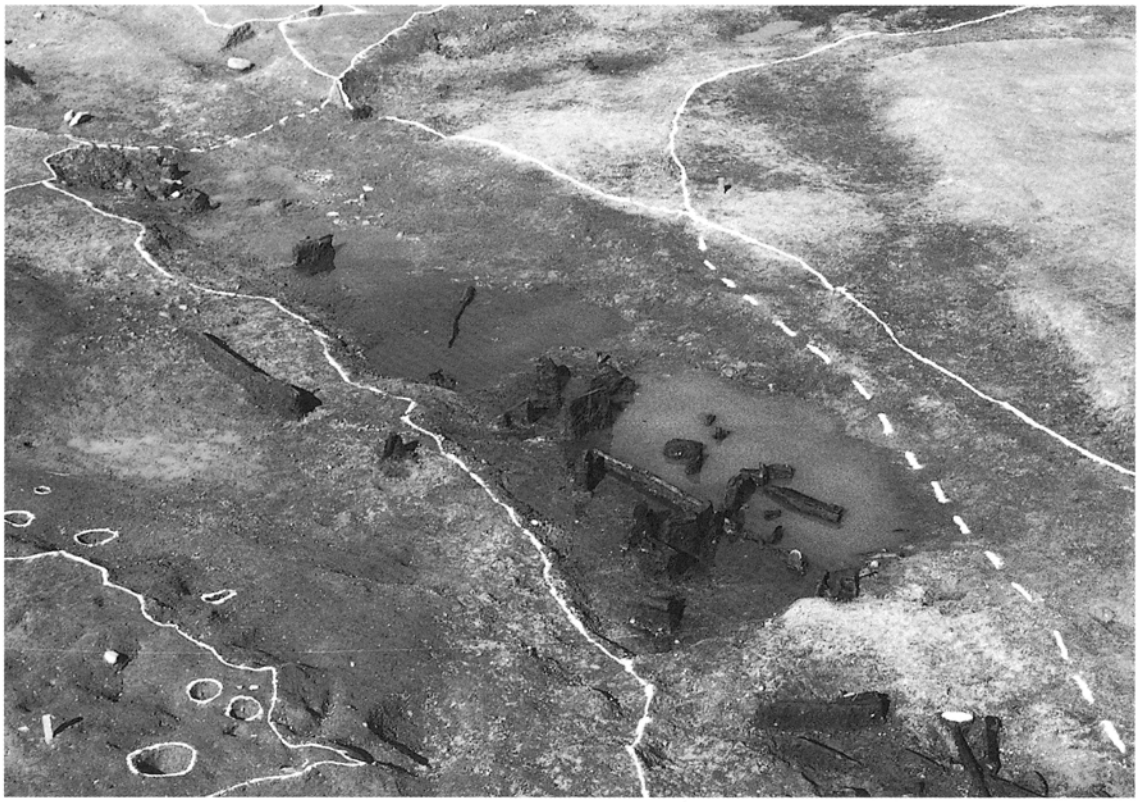
2　第二次調査Ⅴ区SD-10木器出土状態

1　第二次調査Ⅶ区東側地区全景（東から）

2　第二次調査Ⅶ区東側地区全景（南東から）

1　第二次調査Ⅶ区北側地区全景（北から）

2　第二次調査Ⅶ区北側地区全景



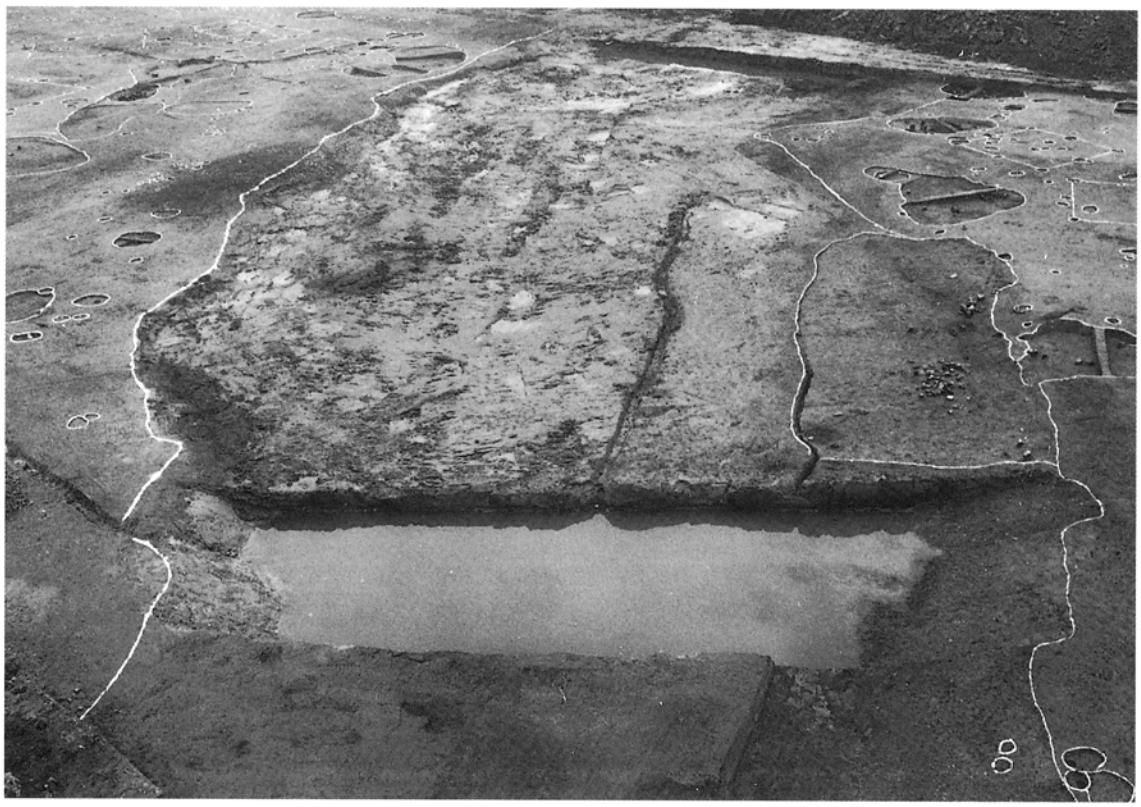
1　第二次調査Ⅶ区SD-16（南から）

2　第二次調査Ⅶ区SD-16遺物出土状態（南から）

1　第二次調査Ⅶ区SD-16木器出土状態

2　第二次調査Ⅶ区SD-15木器出土状態

1　第二次調査Ⅷ区SD-02検出状況（西から）



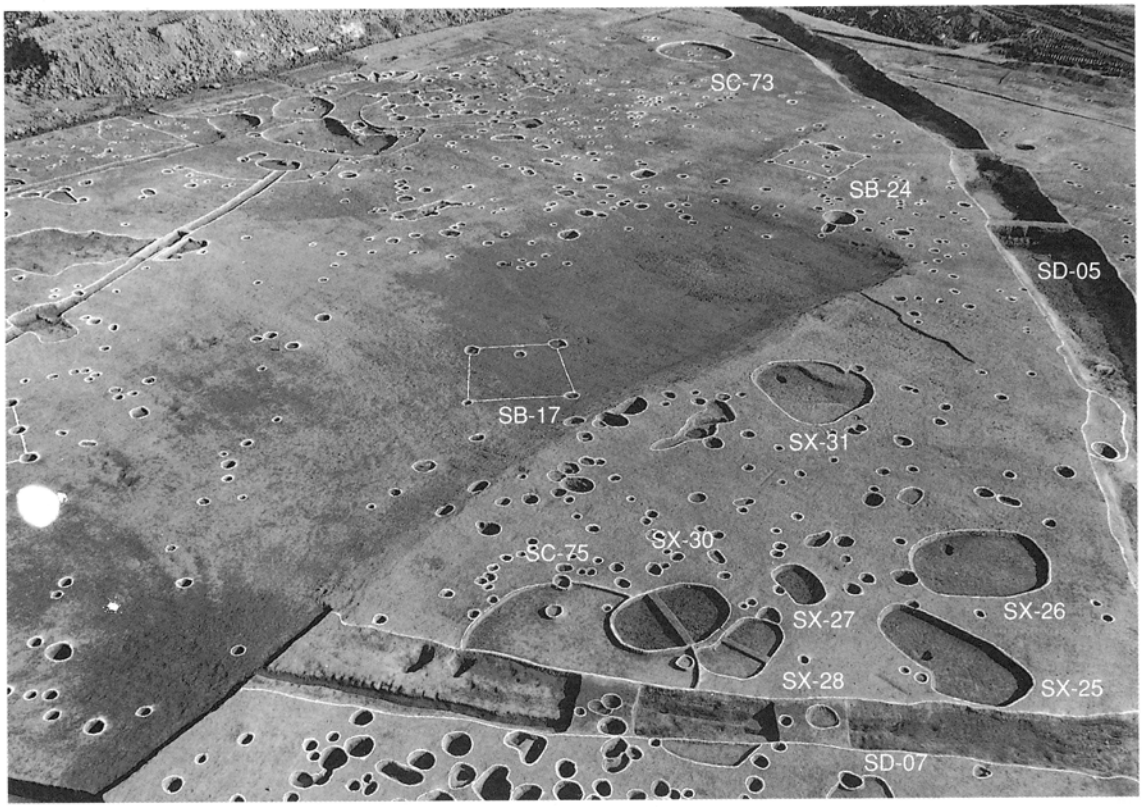
2　第二次調査Ⅷ区SD-02検出状況（西から）

1　第二次調査Ⅸ区東側地区全景（南から）

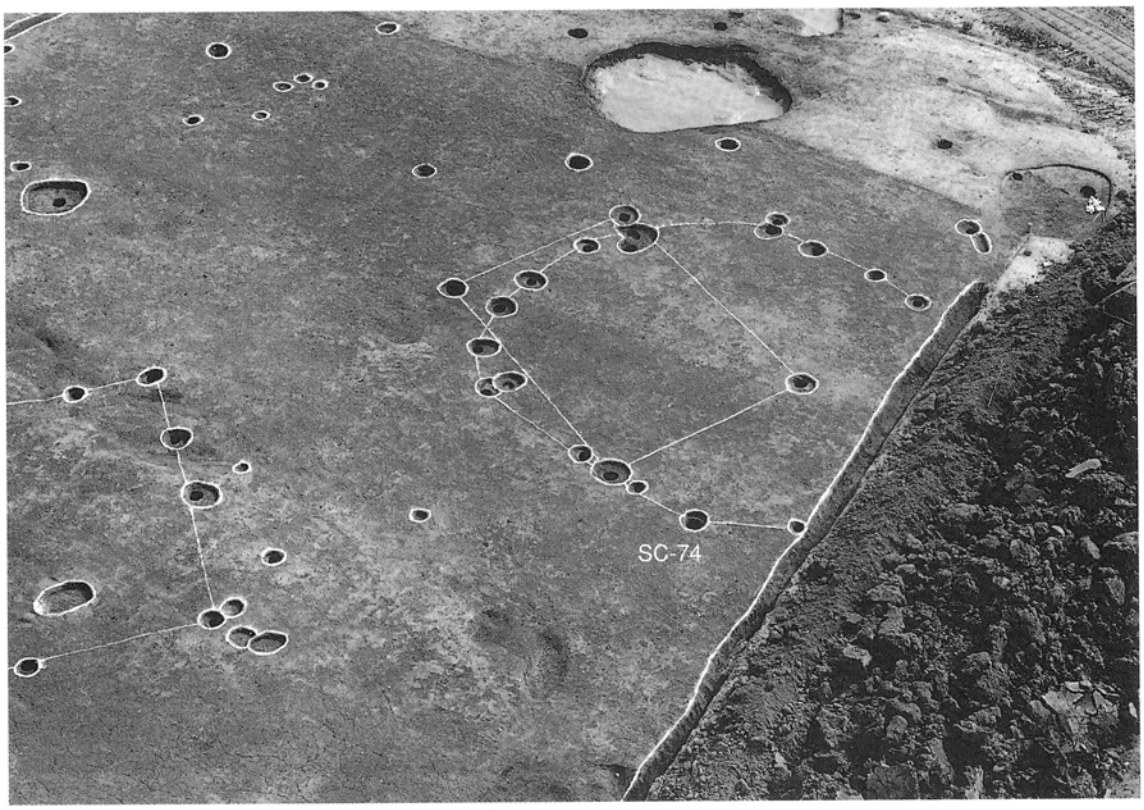
2　第二次調査Ⅸ区北側地区全景（南東から）

1　第二次調査Ⅸ区北側地区近景（南から）

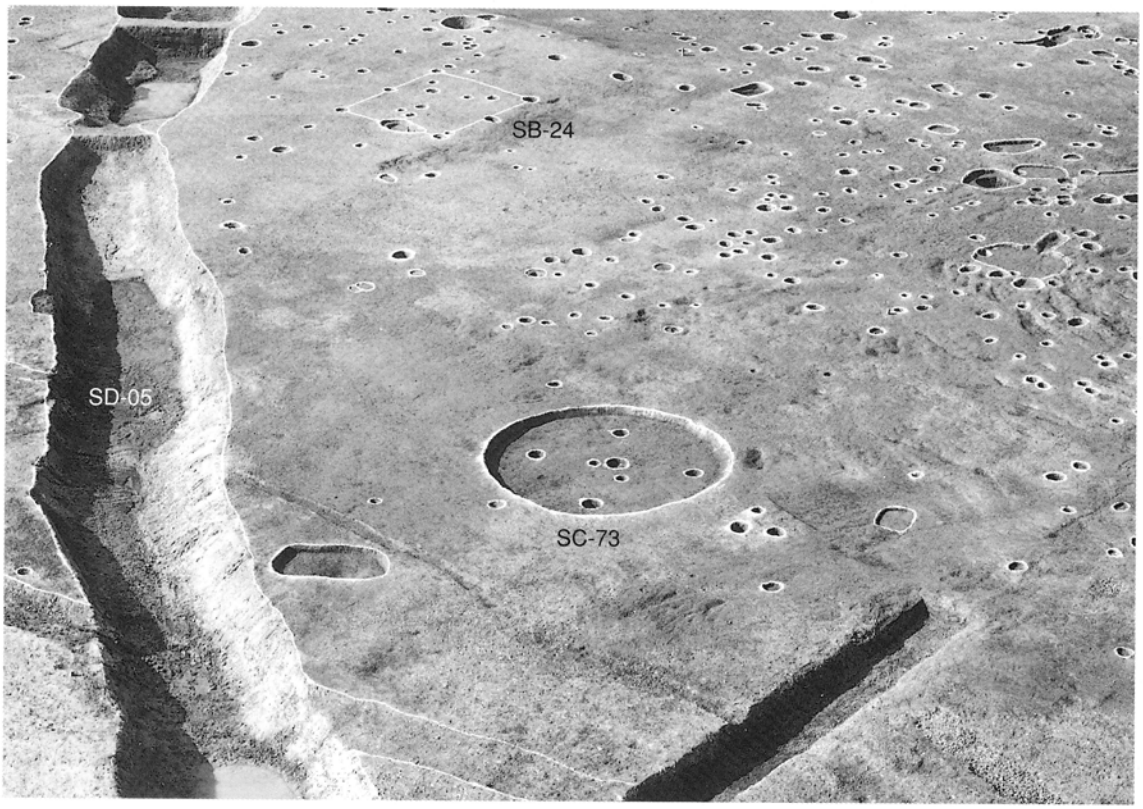
2　第二次調査Ⅸ区北側地区近景（南西から）



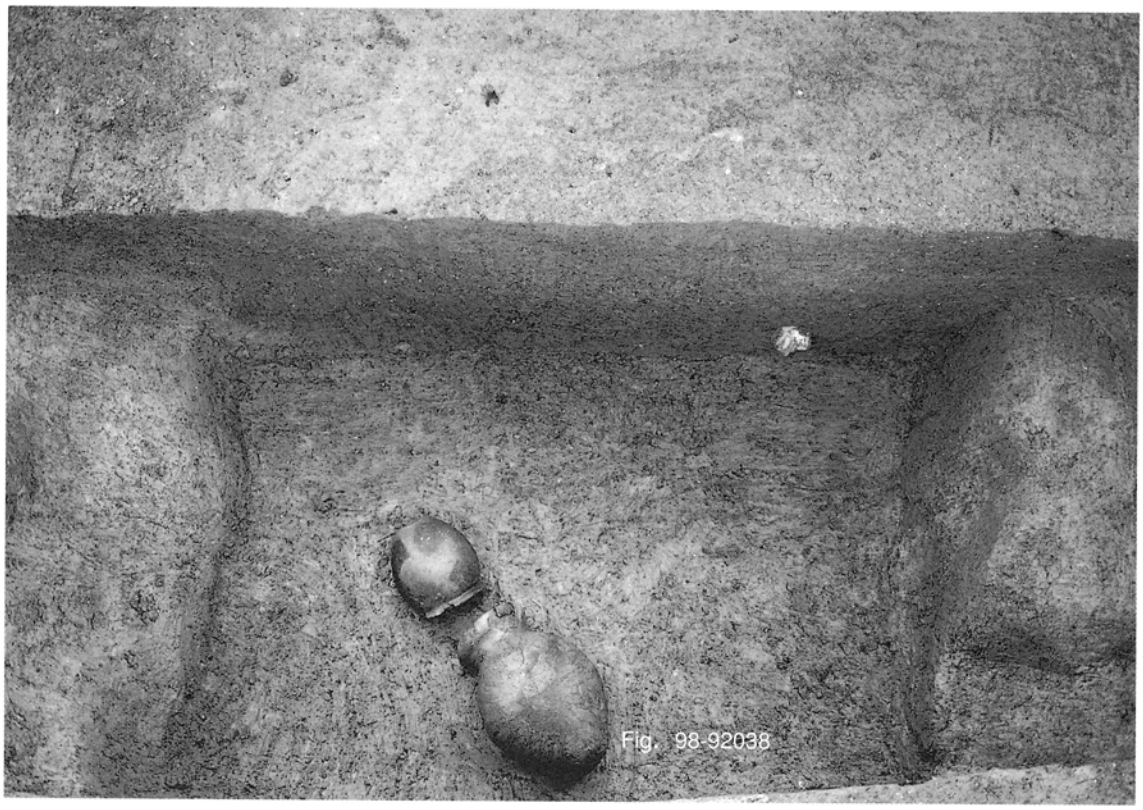
1　第二次調査Ⅸ区東側地区全景（北から）



2　第二次調査Ⅸ区西側地区近景（北西から）



1　第二次調査Ⅸ区南側地区近景（南から）



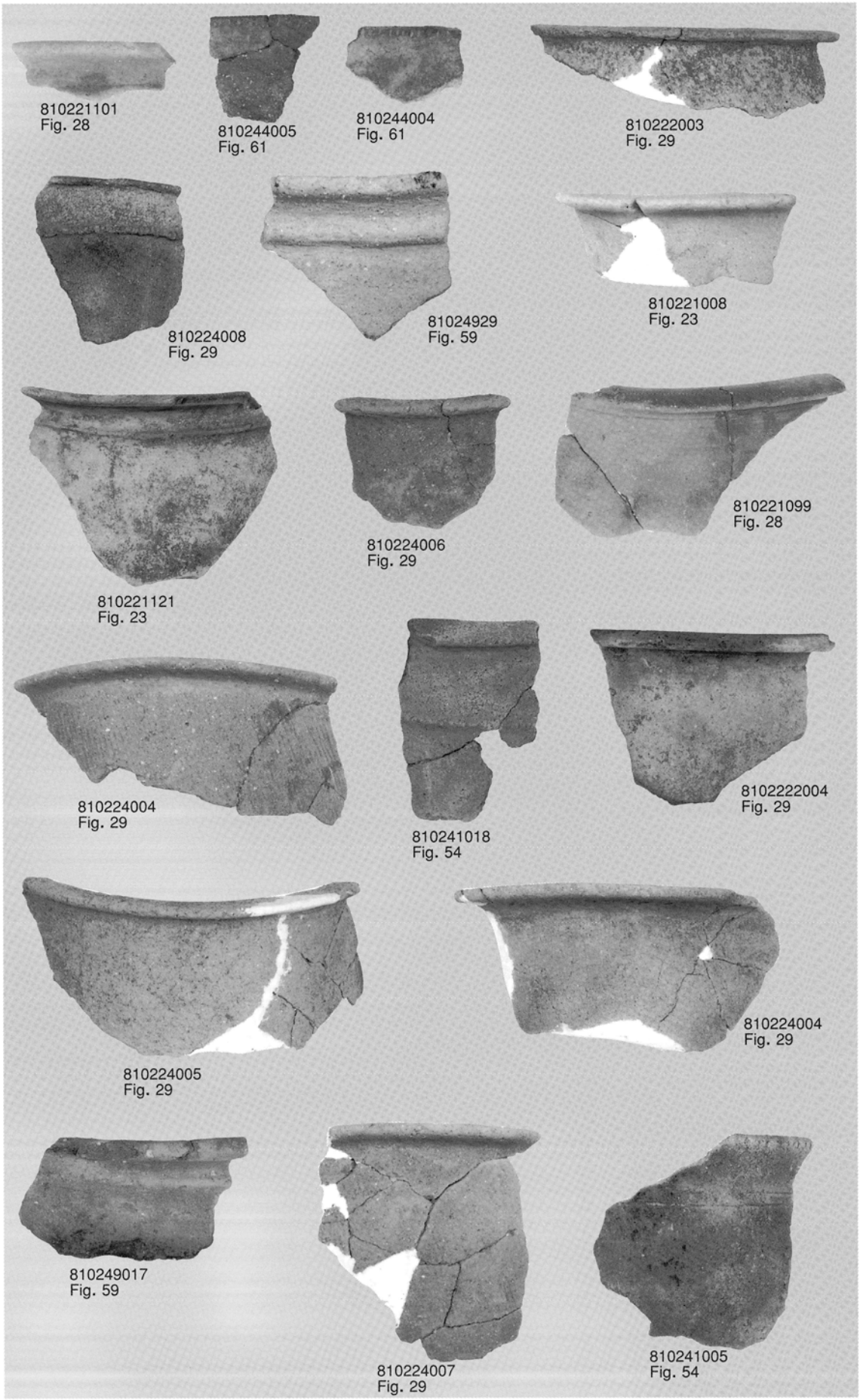
2　第二次調査Ⅸ区SD-03遺物出土状態（北から）

1　第二次調査Ⅸ区SD-05堰状遺構全景（南から）

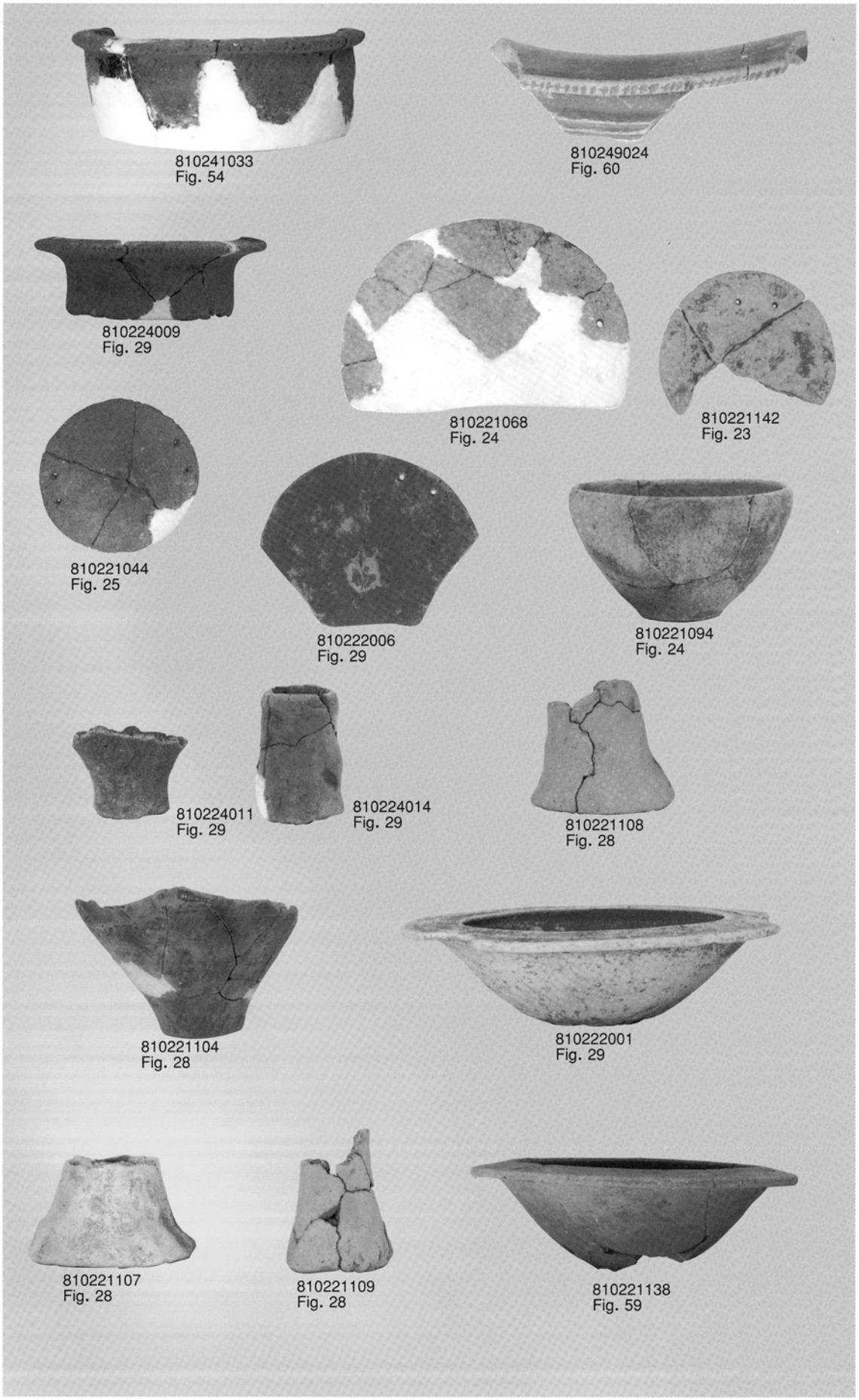
2　第二次調査Ⅸ区SD-05堰状遺構近景（南から）

1　第二次Ⅸ区SD-05 土層断面（北から）

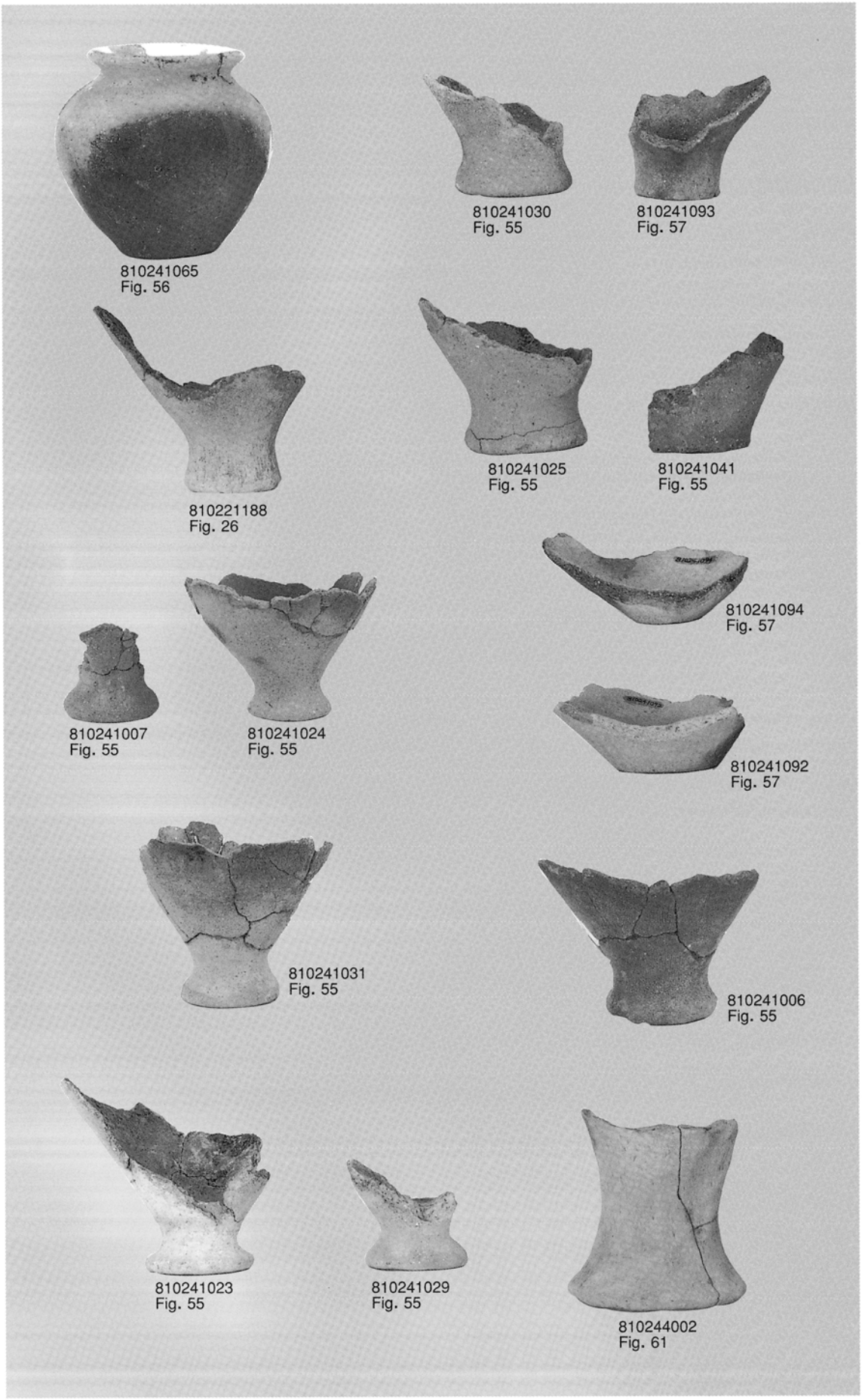
2　第二次Ⅸ区SK-05



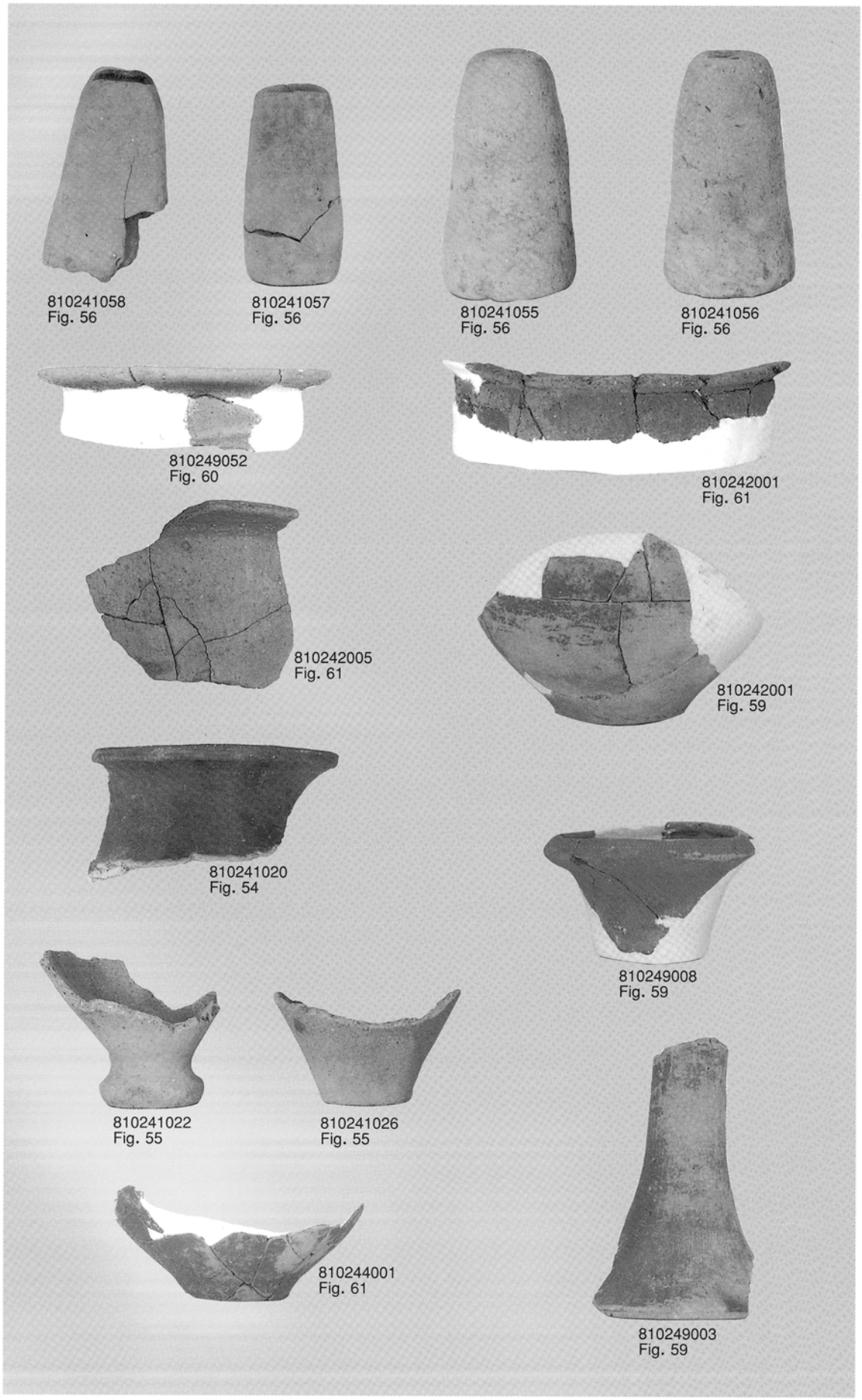
出土遺物-1（縮尺不統一）一次調査遺物



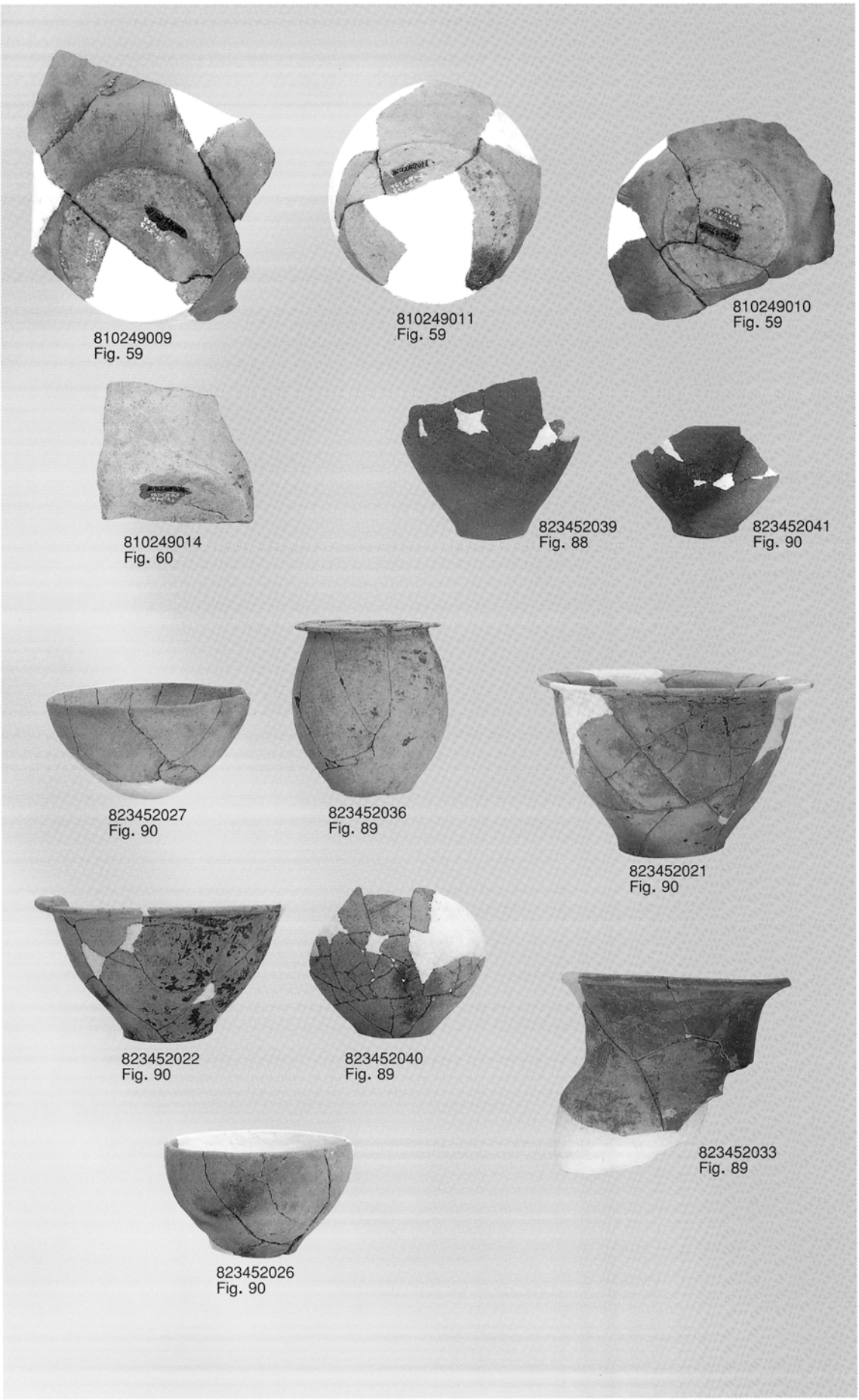
出土遺物-2（縮尺不統一）一次調査遺物



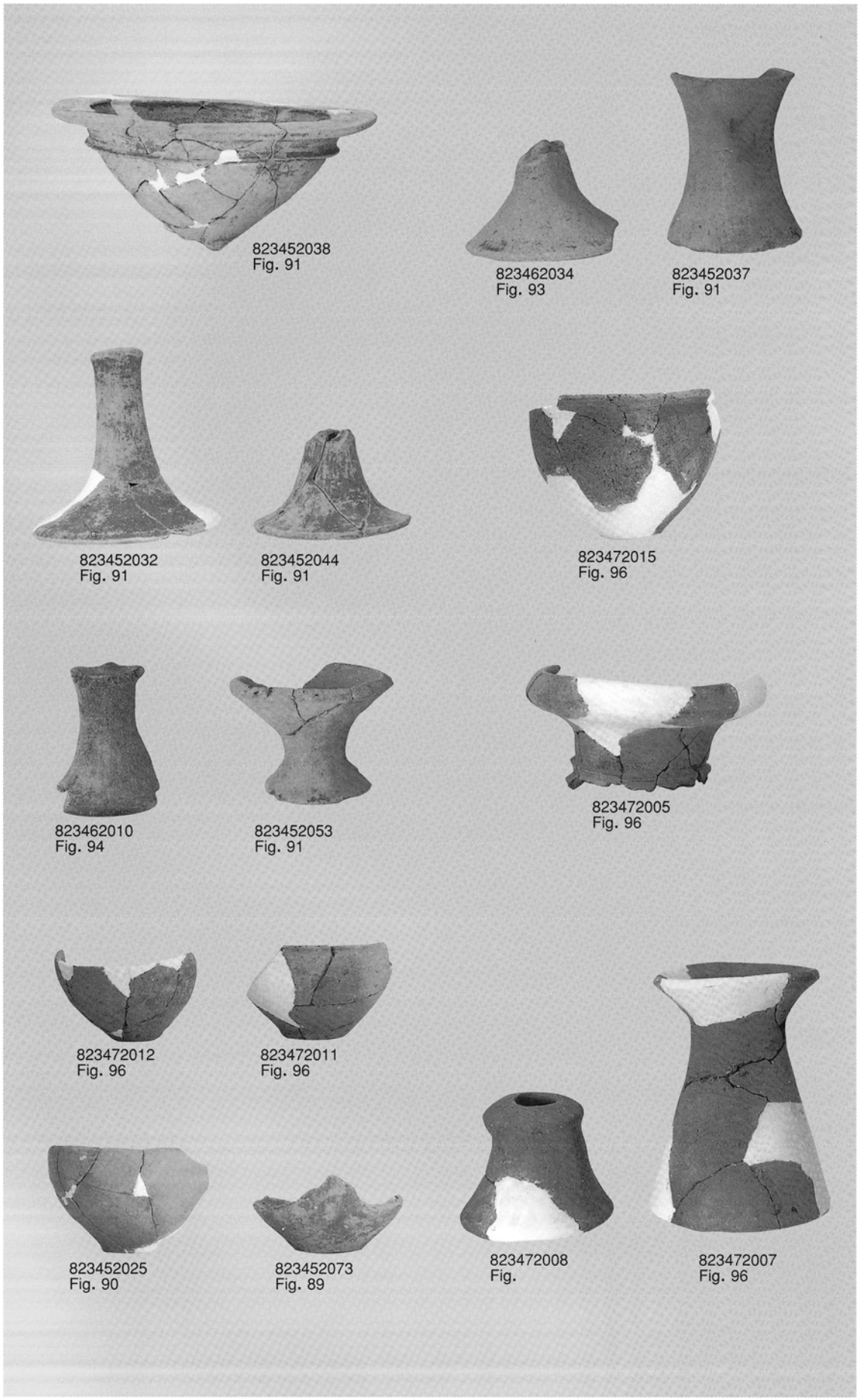
出土遺物-3（縮尺不統一）一次調査遺物



出土遺物-4（縮尺不統一）一次調査遺物



出土遺物-5（縮尺不統一）一・二次調査遺物



出土遺物-6（縮尺不統一）二次調査遺物

823472041
Fig. 95

810249016
Fig. 59

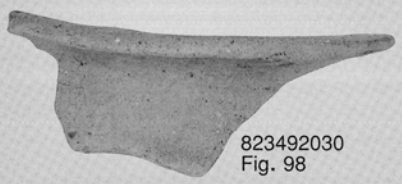
810221127
Fig. 23

823452099
Fig. 92

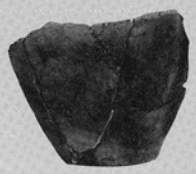
823452074
Fig. 89

823492016
Fig. 98

823452014
Fig. 86



823492030
Fig. 98



823472016
Fig. 96

823472029
Fig. 95

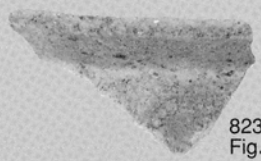
823492028
Fig. 98

823492005
Fig. 97

823492017
Fig. 98

出土遺物-7（縮尺不統一）一・二次調査遺物

823492036
Fig. 98

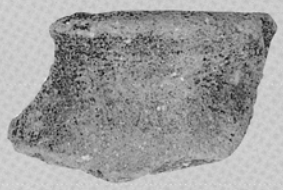


823492012
Fig. 97

823492027
Fig. 98

823499002
Fig. 99

823499006
Fig. 99



823492022
Fig. 98

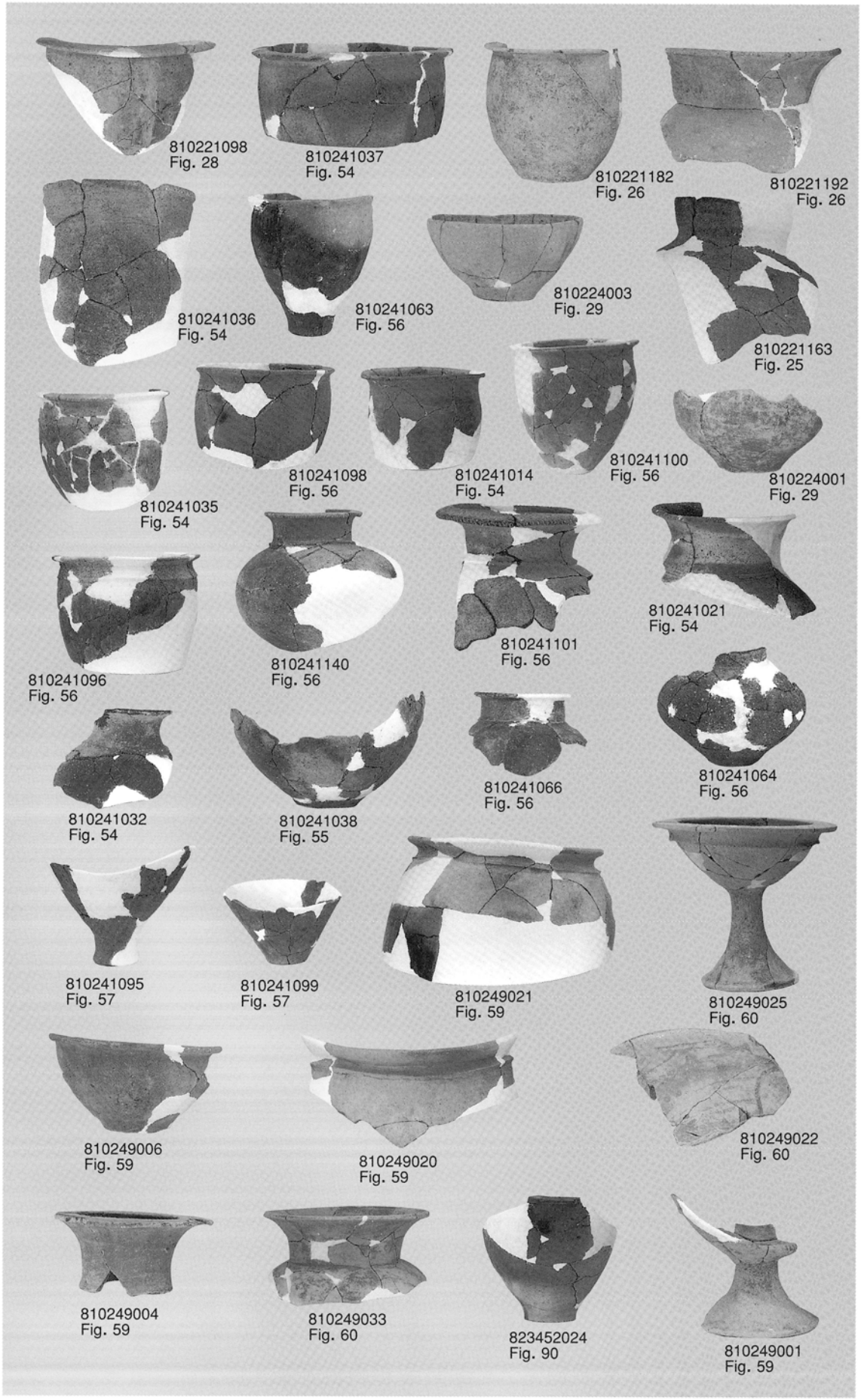
823499022
Fig. 99

823499015
Fig. 99

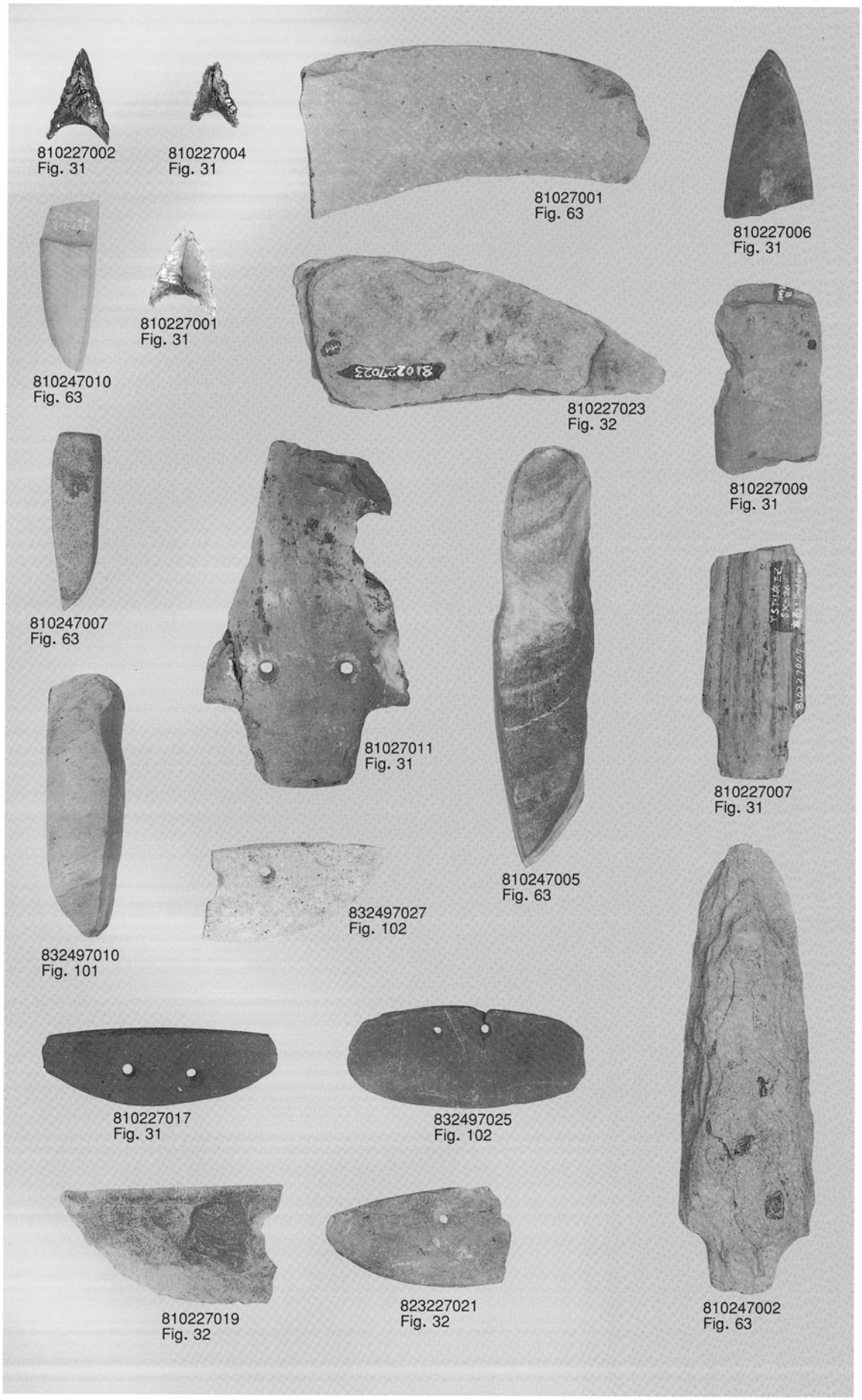
823499014
Fig. 99

823499013
Fig. 99

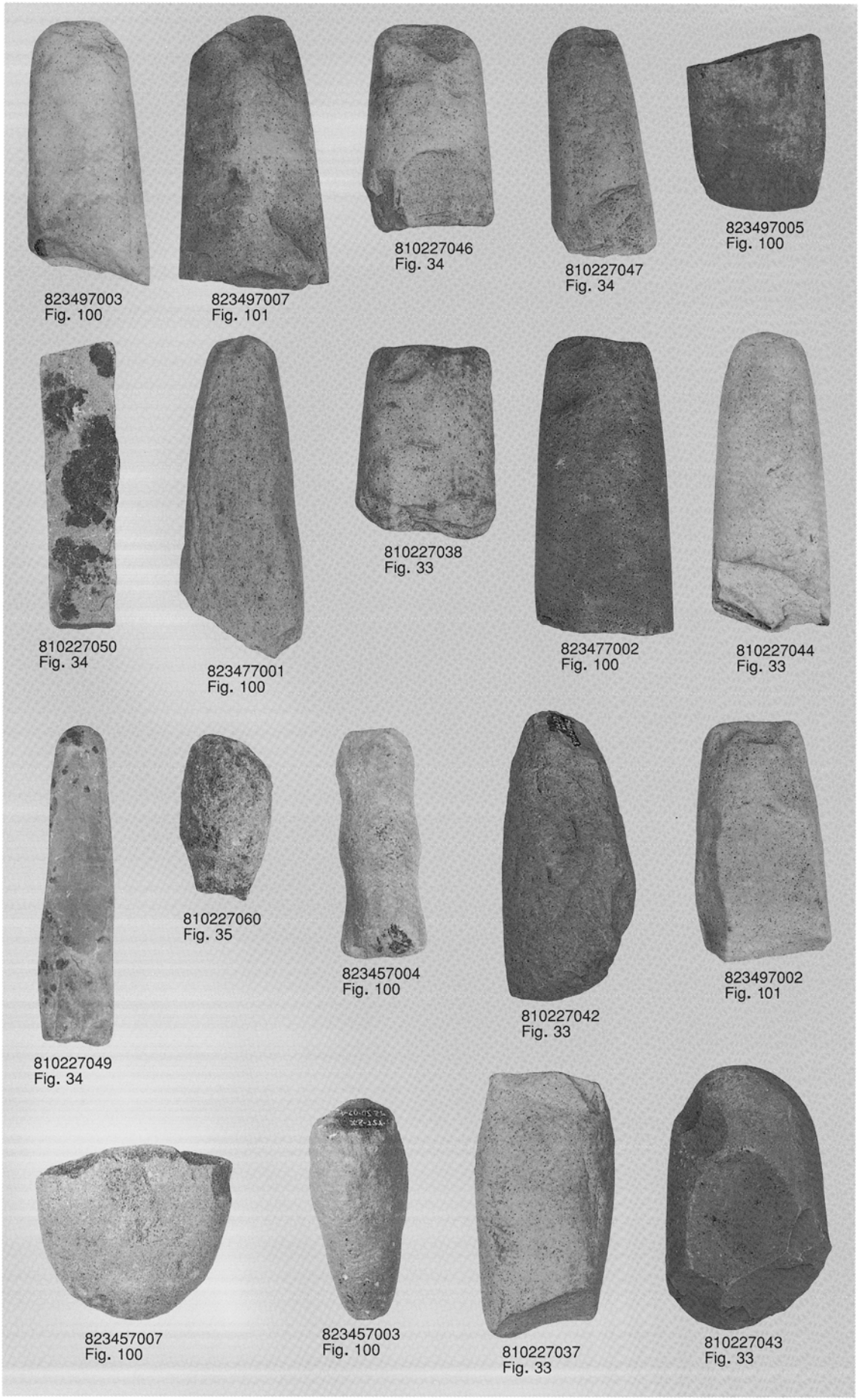
出土遺物-8（縮尺不統一）二次調査遺物



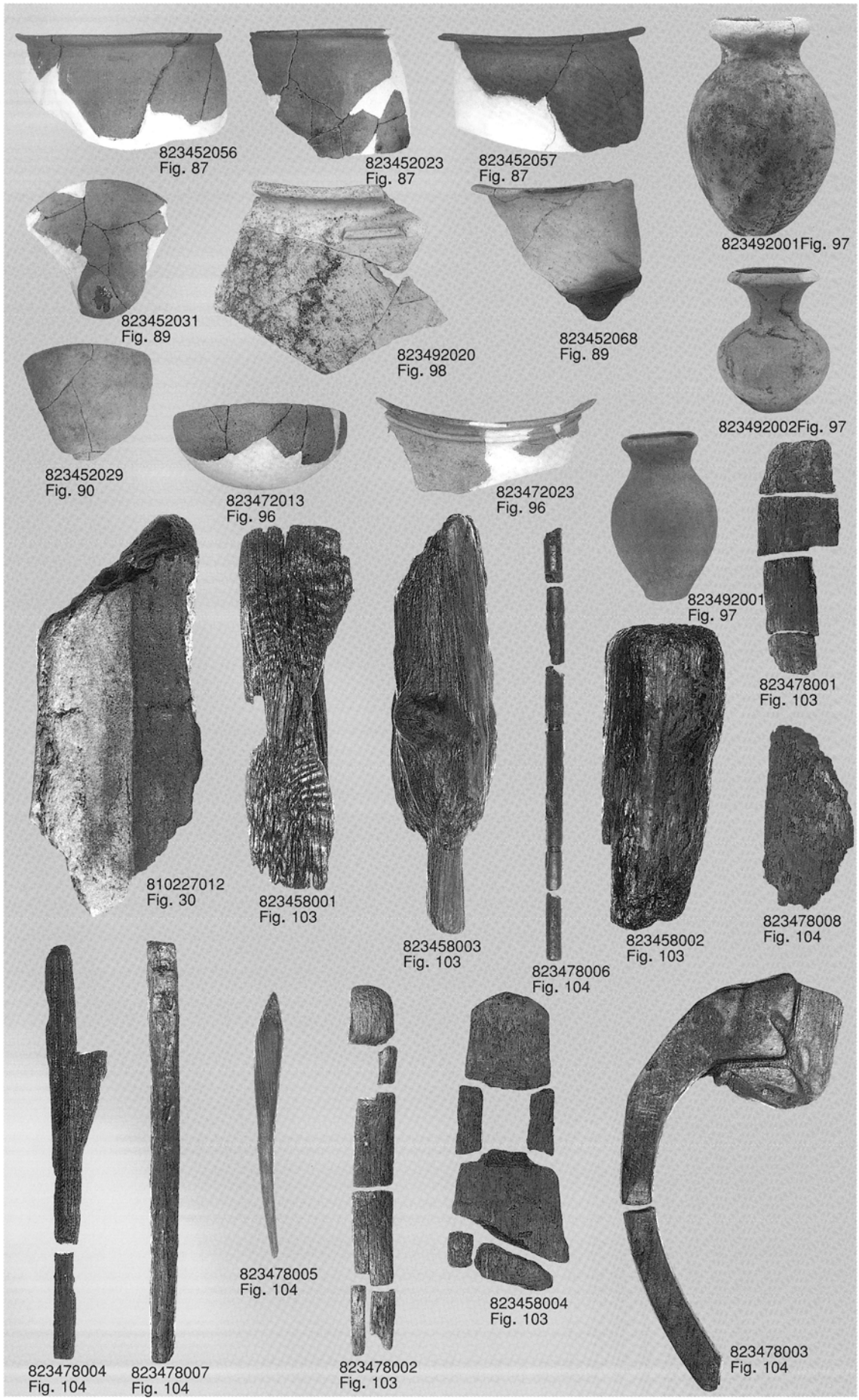
出土遺物-9（縮尺不統一）一・二次調査遺物



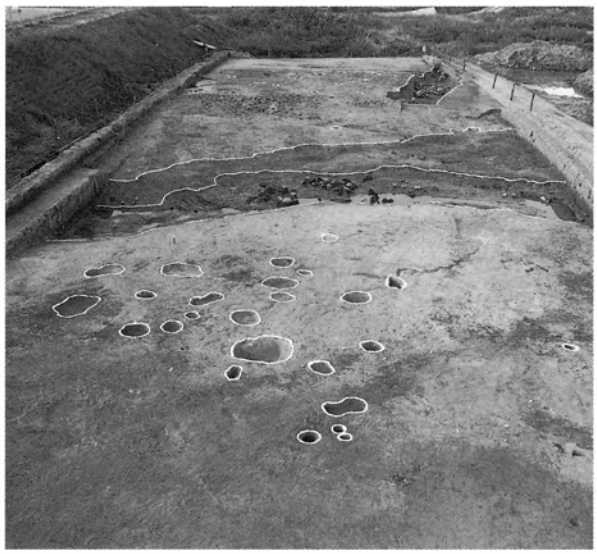
出土遺物-10（縮尺不統一）一・二次調査遺物



出土遺物-11(縮尺不統一) 一・二次調査遺物



出土遺物-12（縮尺不統一）一・二次調査遺物

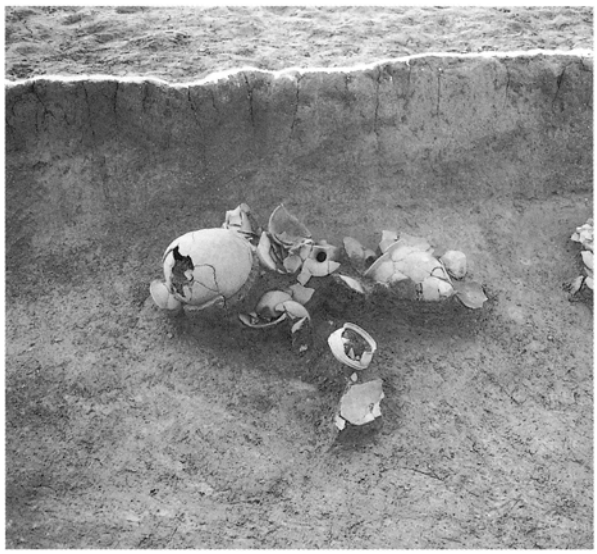


1　L-8・9地区SD01出土状況（南から）

4　5号水路調査区全景（東から）

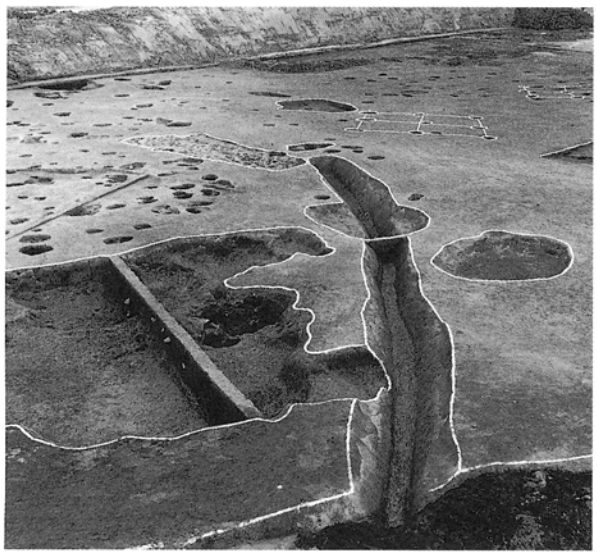
2　L-8・9地区SD02出土状況（北から）

5　5号水路調査区SD01出土状況（西から）



3　L-8・9地区SD02遺物出土状況（東から）

6　5号水路調査区SD01遺物出土状況（南から）



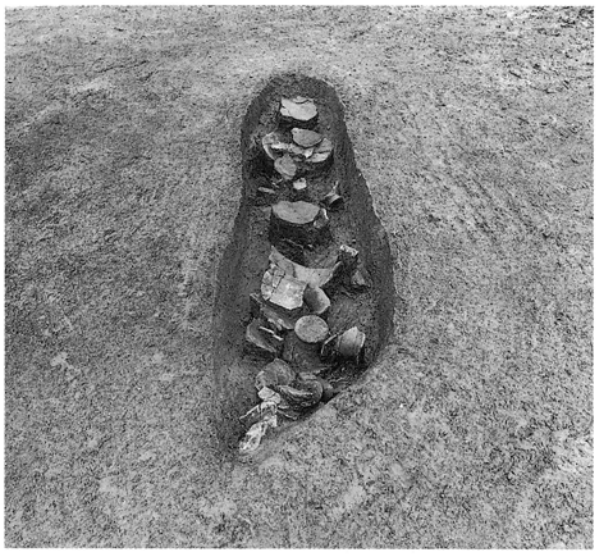
1　F-11区SD10出土状況（西から）

4　8号支線道路調査区SC01出土状況（東から）

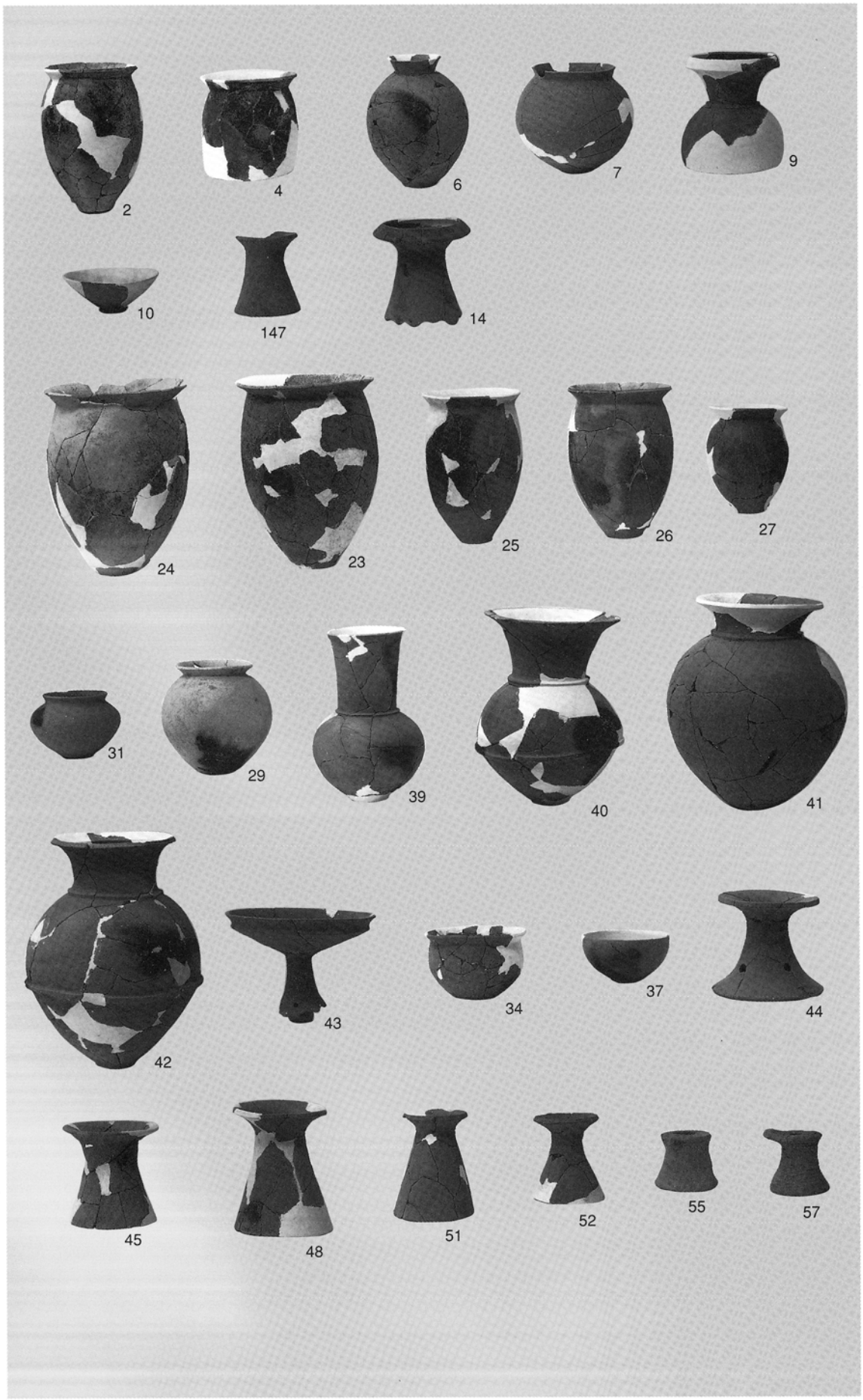
2　F-10・11区SD12出土状況（北から）

5　F-10区SK72出土状況（北から）

3　F-10・11区SD12遺物出土状況（東から）



6　F-10区SK82出土状況（北から）

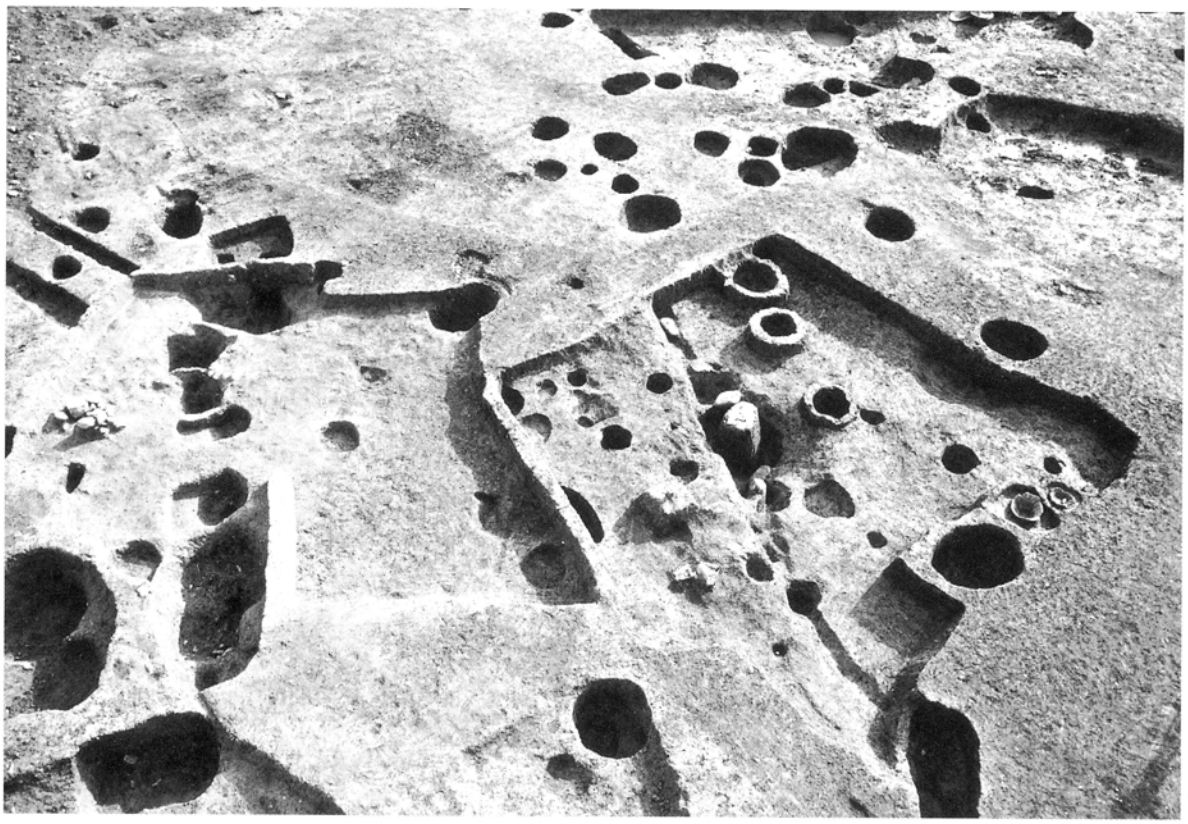


出土遺物-13（縮尺不統一）三次調査遺物

出土遺物-14（縮尺不統一）三次調査遺物

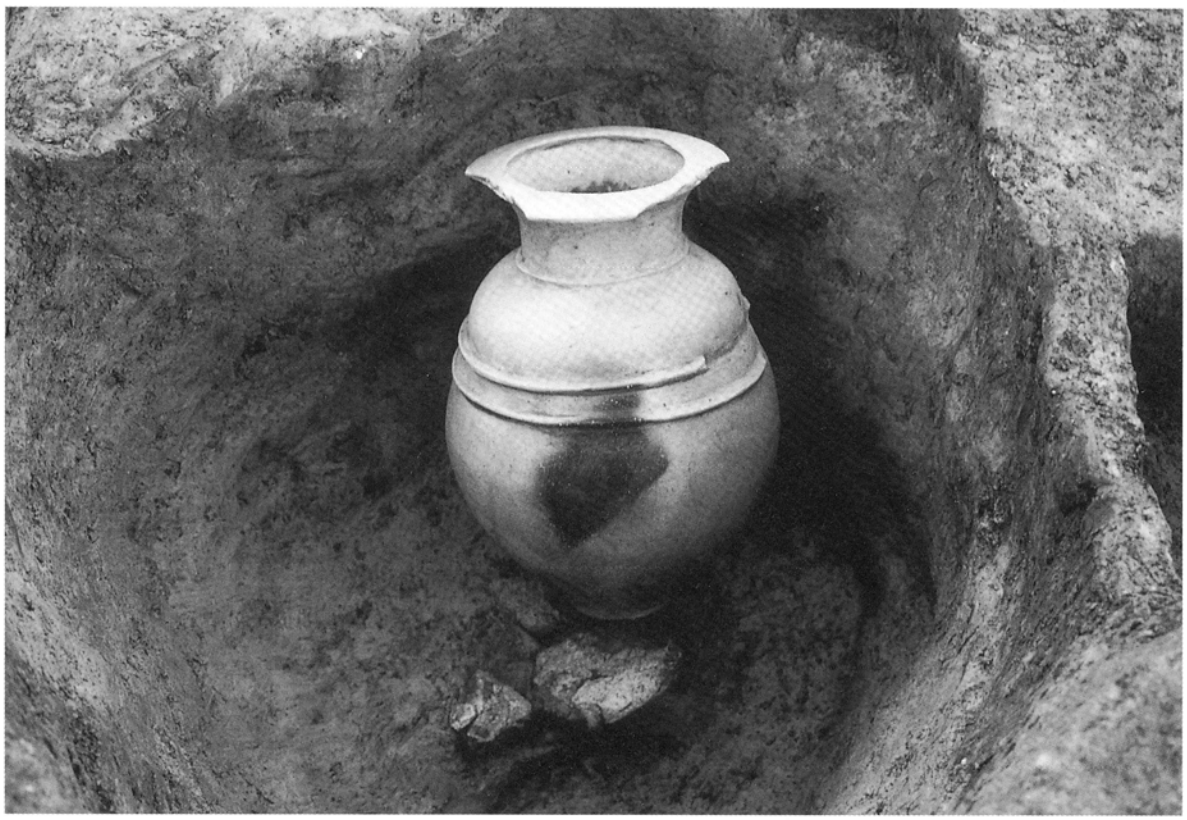
第四次調査遺構検出状況（東から）

第四次調査第Ⅰ区遺構検出状況　1 第Ⅰ区南半部検出状況(北から)

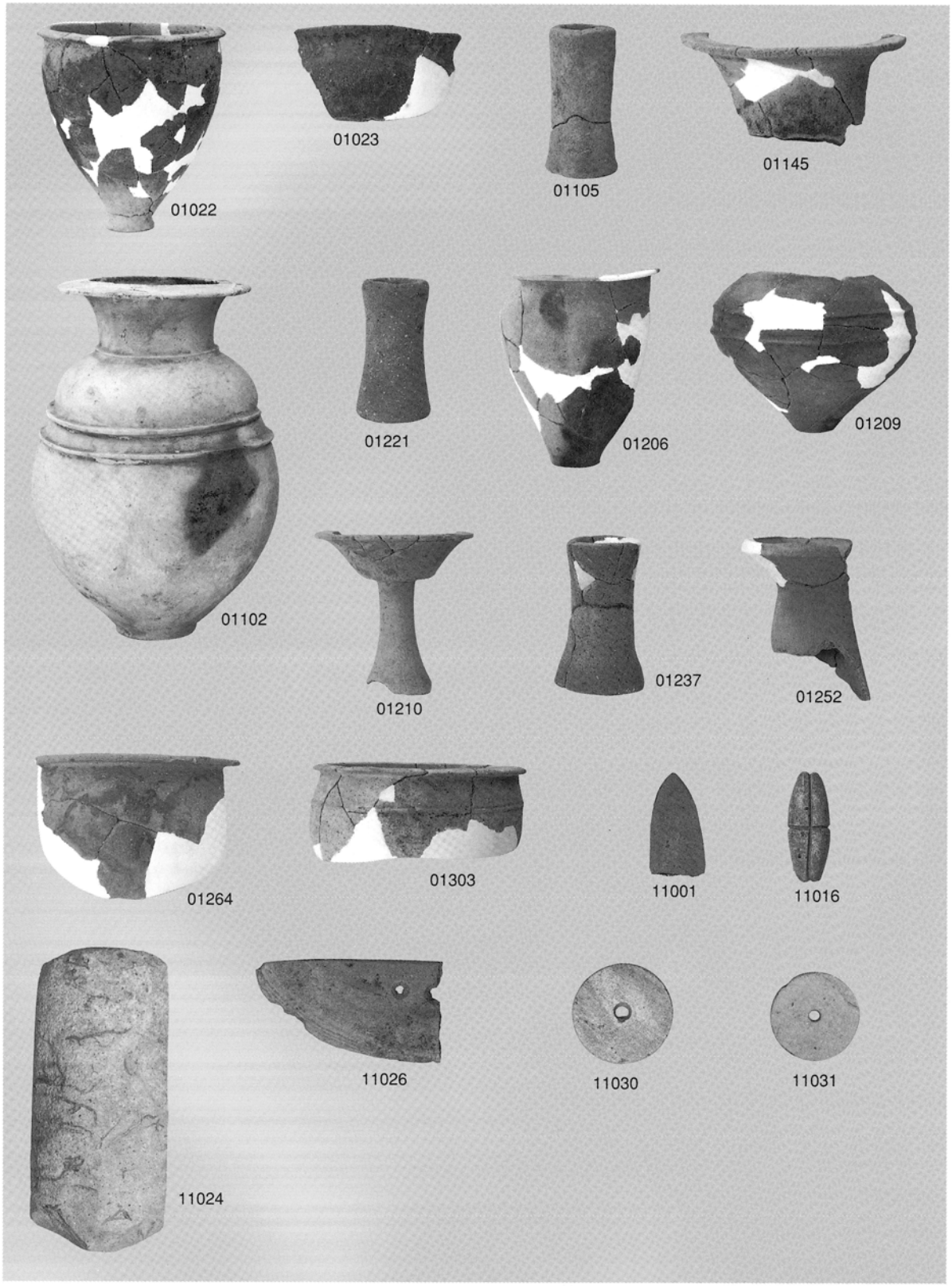


第四次調査第Ⅰ区遺構検出状況　2 第Ⅰ区西側遺構検出状況(東から)

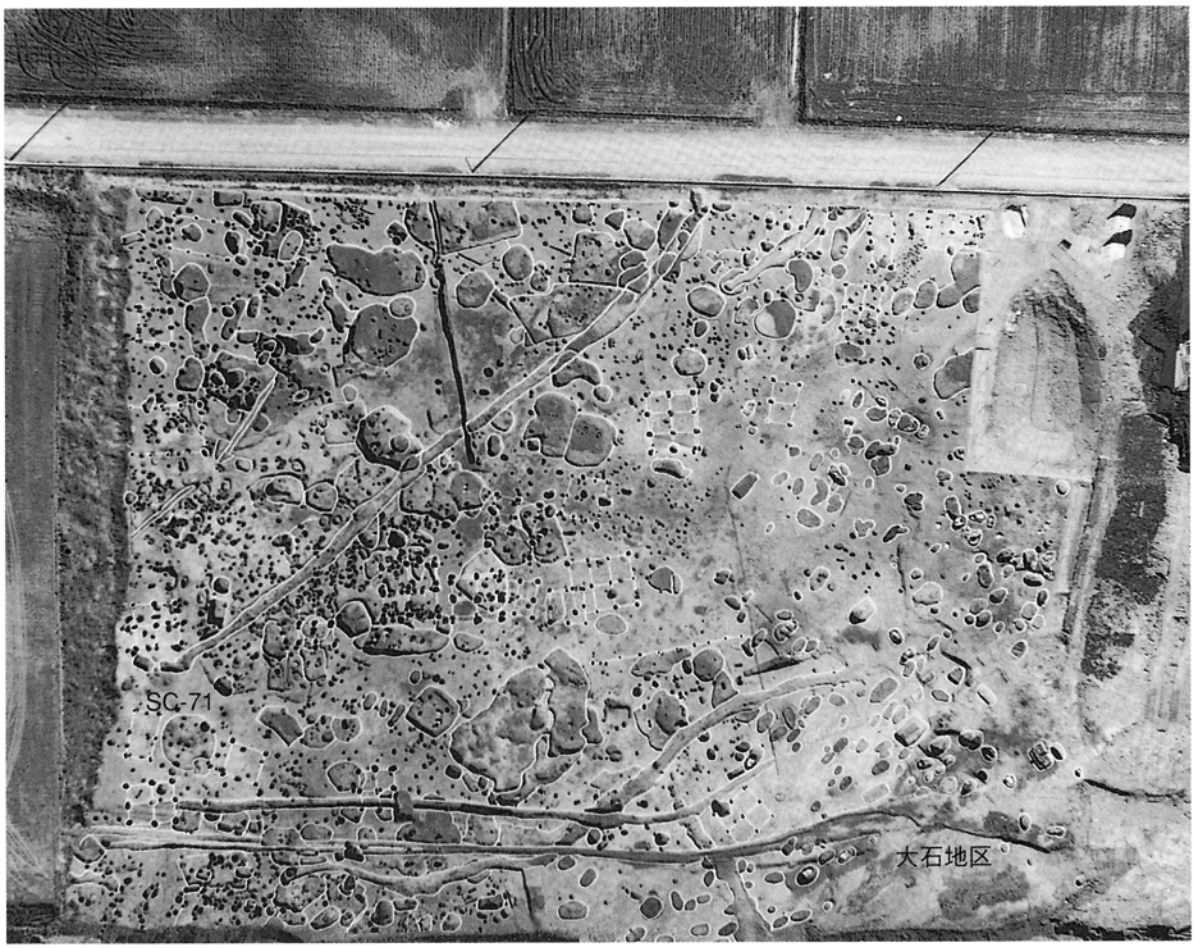
第四次調査第Ⅱ区遺構検出状況　1 第Ⅱ区遺構全景(西から)



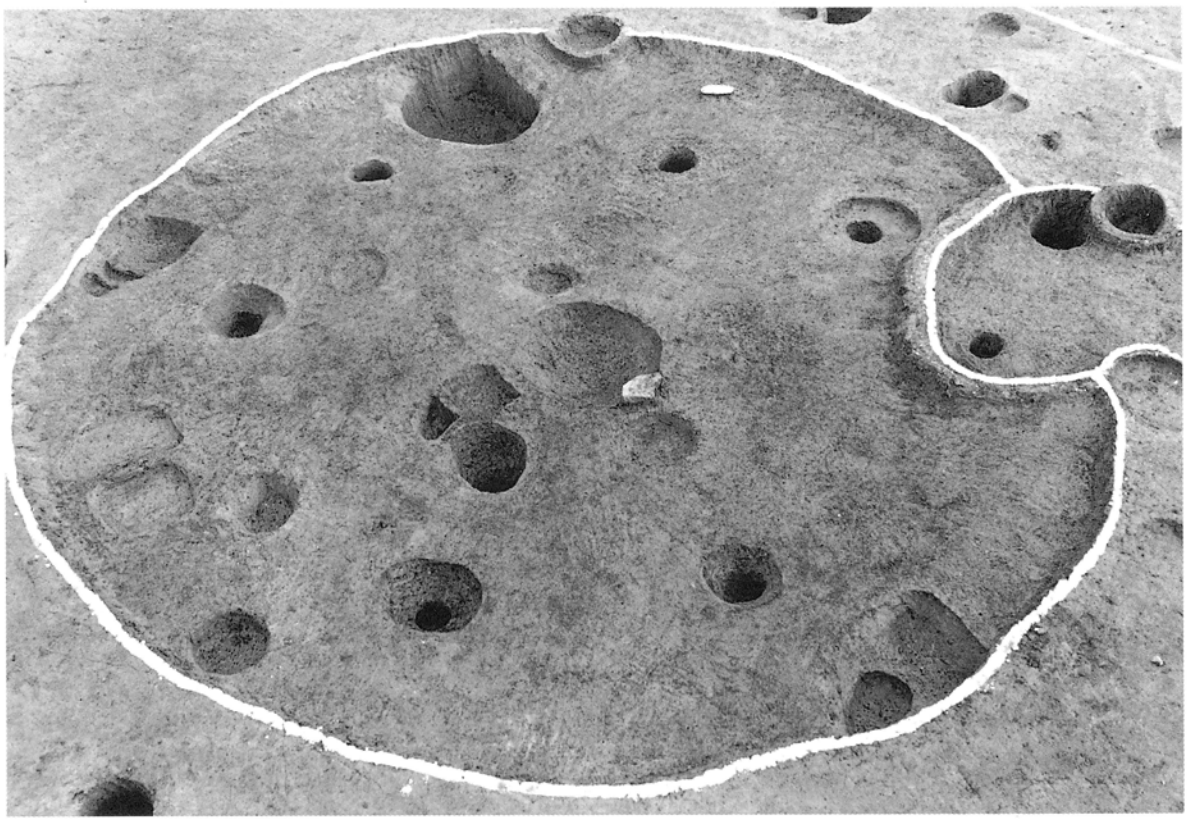
第四次調査第Ⅱ区遺構検出状況　2 第Ⅱ区SK133土壙内土器出土状況



出土遺物-15（縮尺不統一）第四次調査遺物

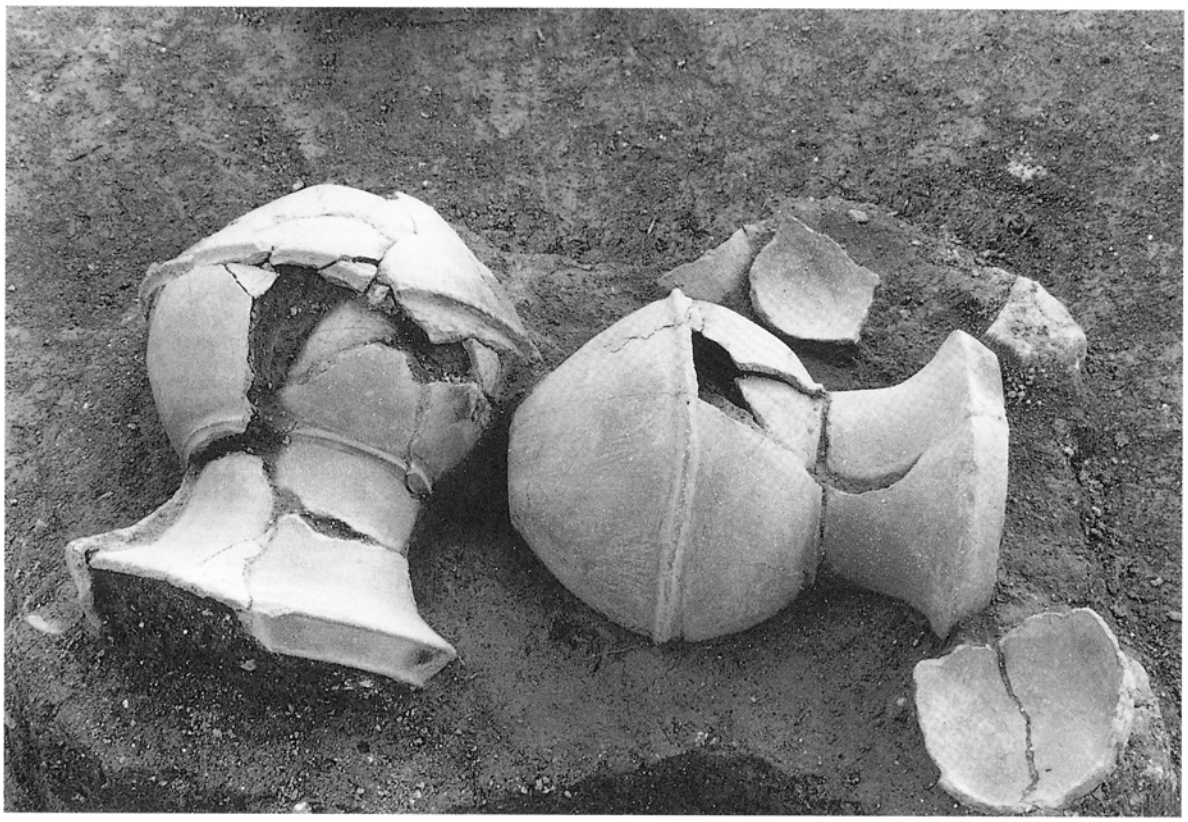


1　大石地区と住居址



2　円形竪穴住居址（SC-71）

1　太田地区



2　弥生土器出土状況

吉 武 遺 跡 群 Ⅸ

－弥生時代生活遺構の調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集

1997年３月31日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　久野印刷株式会社

福岡市中央区天神5-5-8
TEL 092-741-0637